

越後国奥山荘からみた中世考古学の研究

―日本海流通と仏教の考古学―

水澤 幸一

目次

序章	中世考古学における本論の視点	
第一節	文献併存期の考古学研究法・中世考古学の位置付け	1
第二節	中世荘園考古学の可能性	9
小結		8
付論	越後における中世考古学の範囲	6
序章	引用・参考文献	14
第一編	日本海流通の考古学	17
第一章	貿易陶磁器の流通	
第一節	貿易陶磁器序説	
1	貿易陶磁の国際情勢と青磁を中心にして	19
2	中世貿易陶磁の物量比較にみる地域性	27
第二節	中世前期の貿易陶磁器	
1	一二世紀代の陶磁器流通	33
2	伝至徳寺跡の遺物様相	37
3	出土層位からみた鎌倉遺跡群の遺物様相	39
第三節	中世後期の貿易陶磁器	
1	一五世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相	43
2	中世北陸の茶道具―越後出土の天目茶碗を中心にして―	52
3	越後戦国期の遺物問題	57
第二章	中世後期における瓦器の位相	
1	瓦器の基本的性格	63
2	至徳寺遺跡の瓦器	77

第三章 中世土器

1	越後の中世土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・	81
2	一五世紀中葉～後半における北東日本海沿岸地域へのやきものの搬入時期―越後江上館を中心として―	92
3	至徳寺遺跡の中世後期土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・	99
付論	京都系土器の流入に伴う居館構造の変化	
1	中世越後の城館・・・・・・・・・・・・・・・・・・	102
2	北陸中世後半期における井戸構築技術の流入―水溜・石組側・桶―	107

第四章 中世漆器

1	越後の中世漆器・・・・・・・・・・・・・・・・・・	113
2	至徳寺遺跡の漆器・・・・・・・・・・・・・・・・・・	122

第一編	引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・	124
-----	---------------------------	-----

第二編	仏教考古学・・・・・・・・・・・・・・・・・・	143
-----	-------------------------	-----

第一章 墓地・霊場と葬送儀礼

1	越後国阿賀北の霊場・・・・・・・・・・・・・・・・・・	145
2	越後の仏堂及び周溝建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・	147
3	韋駄天山遺跡・奥山荘北条の中世墓地・・・・・・・・	148
4	浦廻遺跡にみる地表葬・・・・・・・・・・・・・・・・・・	153

第二章 仏具

1	密教法具考―出土仏具―・・・・・・・・・・・・・・・・	156
2	鉦鼓小考・・・・・・・・・・・・・・・・・・	162
3	古式錫杖考―日光男体山山頂遺跡出土錫杖の位置付けをめぐって―	171

第三章 中世石造物

第一節 板碑

1	北東日本海型板碑・	179
2	越佐の板碑・	180
3	阿賀北の紀年銘板碑・	198
4	越後国小泉莊加納の板碑群・栗島・	214
5	越後国小泉莊加納の板碑群からみた地域信仰圏・	219
6	越後国奥山莊の板碑・	225
付	頸城の板碑・	230

第二節 石仏

1	阿賀北の中世石仏・	232
2	頸城の中世石仏・	243

第三節 五輪塔・宝篋印塔等

1	頸城の五輪塔分布と年代的位置付け・	246
2	頸城の五輪塔・	251
3	頸城の一石五輪塔・	255
4	頸城の宝篋印塔・	255
5	頸城の多層塔・	256
6	新発田市岡田法音寺の五輪塔・	257
7	高田における一七世紀代の石塔・	258

第二編	引用・参考文献・	259
-----	----------	-----

終章 越後国奥山莊

1	奥山莊の景観・	269
2	奥山莊政所条遺跡群の展開―坊城館から江上館へ・	278
終章	引用・参考文献・	285

おわりに	・	288
------	---	-----

序章 中世考古学における本論の視点

第一節 文献併存期の考古学研究法―中世考古学の位置付け

本節では、文献が存在する時期の考古学の在り方を考えていく。

文字の使用開始によって、それ以前にはまったく考えられなかった未曾有の事態が現出した。すなわち情報が間接的になり得たのである。情報は保存・蓄積され得るようになり、意志が時空を越えて伝わる可能性が生じた。それは何よりも、可視的な文字記号というかたちで記憶を保存したのである。我々は、記録された媒体をみることによって、忘れていた事柄を思い出すことができる。もしも記録という手段がなかったならば、その結果どれほど原型が変容していくであろうか。まして人から人へ伝わって行く間にどれほど内容が変わっていくかは、推して知るべしであろう(一)。可視的なメモリーが時空を超えたことによって、我々は膨大な暗記作業から解放され、学問の基礎が形造られたのである。よって、その性質から文献考証の学問である文献学が生じたのは当然の成り行きであった。

それに対して、文献学に對置される、直接物語らぬ「モノ」を扱う学問である考古学が一八世紀後半に至ってようやく誕生したという事実(二)は、その対象がいかにとらえにくいものであったかを示している。しかし、いまや考古学は歴史研究において不可欠の位置を占めるようになったのである。それは遺物学であり、より厳密にいうと、空間的位置が明瞭な遺物・遺構の総体である遺跡を歴史の中に位置づける学問である。遺物は、その存在した状態によって、地上(伝世)と地下(埋蔵)の二態に分類できることは、つとに指摘されているところである(坂詰一九八〇)が、考古学が最もその力を発揮するのは、発掘調査という学術的認識を経た上での後者である。過去はすべてが歴史的であり、時間というたゆまぬ縦の流れの中に位置づけられる歴史の対象である。すなわち過去の人々の事跡すべてが歴史の対象である。我々は、まず彼らが遺した痕跡を発掘し、記録することから第一歩を踏み出す。しかし、人間行動の結果のすべてが遺物として残るわけではなく、思考様式等の抽象的概念については、ことさらに解釈が必要となる。そのなかで運よく残ったものでも、当時のままであるという保証はなく、またそれを我々が正しく認識できるかどうかという点、はなはだ心もとないのである。我々は、日々「モノ」の在り方を考究しているが、そののみから導き出される結果には限界がある。

そこで我々は、過去にせまるために、考古学自体の成果とそれ以外の分野の研究成果を突き合わせる。文献学・社会学・人類学・地理学・民族学・民俗学・生物学・各種自然科学等々、ときには心理学・言語学といった形而上学さえも駆使して、事実にせまろうとするのである。このように、考古学研究者は百科事典的知識を要求されるのであるが、ことに諸学問の中で文献学については、考古学とともに歴史の分科という考え方(角田一九五四・一九八六)をとるため、他の学問分野と同列に扱うわけにはいかない。

では歴史に資するものとして、特に考古学の立場から文献をどのようにとらえるか、それが本論文に底流するテーマでもある。

両者にまたがる出土文字を取り上げると、考古学がその空間的位置を対象とするのに対し、文献学は第一にその書かれた文字の内容を対象とするのとらえた場合、考古学はその銘辞性を問題とせねばならない。銘辞とは、「自己を記念的に表現しようとする当事者が、その目的を意識した物に、それと不可分の内面的関係を前提として誌した文詞であり」、「物または所の制約を蒙り、靜的に存在するもの」である。対して一般文献は、「重点を文詞にのみ置いているから、どんなものの上に書かれ、何処に置かれようと、誤写さえなければ、その価値も、筆者の意図も損傷されないものであり」「特定な物や場所に結びつけられてはいない」「故に、物や所の制約から自由で、動的に存在するもの」である(角田一九五一)。「一般文献」と、特殊文献としての「銘辞」を、それぞれそのまま文献学と考古学の対象として当てはめようとする点と齟齬が生じる(三)が、ここでは考古学の対象となる出

土文字資料が、おしなべて「銘辞」であるということを確認しておく。すなわち「文言」自体、その書かれた「対象物」、その存在する「空間的位置」の三者が密接不離の関係を有するということが、それが考古学資料としての出土文字が占める位置である。また、「銘辞性」は、当事者によって賦与され、銘辞は、ある文詞に我々が銘辞性を見出すときに成立する」（角田一九五二）のであるから、ひとえに我々考古学に携わるものは、その重責を担っているといえるのである。

このように考えてきた場合、出土文字という掘り出された資料は、まさに考古学と文献学の中間に位置する。それは、発掘資料という点では、考古学の対象であり、文字が書いてあるという点では、文献学の対象でもある。このように出土文字は、文字と遺物が結合したものである、ということ念頭におかねばならない。この出土文字は、実用に際して使用されたものが多いため、その共伴関係によって実年代を遺物に与えるという重要な役目を果たしてきたが、その文字内容自体に關しての研究は、文献学に偏っているかの觀を呈している。そのことは、端的に考古学と文献学の相違を象徴しており、興味深い。つまり文献学は、すでに社会的・概念的な存在である文字を対象とするがゆえに、たとえ一片の遺物に書かれた文字であっても意味をなすということであり、考古学ではその遺物から引き出せる情報が非常に限られてしまうことと好対象である。一片の出土文字は、両者にとって歴史事実への物証となるが、その度合はすこぶる趣を異にするのである（四）。それは、考古学者が遺物の共伴関係を積み重ねた後、ようやく型式的關係に着手できるようになることも關係しているのである（濱田訳一九三二、一六〇―一九頁）。

ここで、坂詰秀一によってまとめられた出土文字資料の分類をあげておく（坂詰一九八八）。

- ① 金屬製品に書かれたもの―鏡鑑銘、刀劍銘、墓誌、骨臓器銘、経筒銘、仏像銘、仏具銘、錢貨銘、印章など
- ② 石製品に書かれたもの―墓誌、石櫃銘、石造塔婆銘、石碑銘、石経銘など
- ③ 土製品に書かれたもの―瓦磚銘、瓦経銘、土器銘など
- ④ 木製品に書かれたもの―木簡、柿経、木造塔婆銘など
- ⑤ 紙に書かれたもの―漆紙文書、紙本経など

この中で、特に文献学に注目されているのは、木簡と漆紙文書である。それは、その多くが文献の少ない律令期に集中しており、比較的情報量が大きいものが含まれているためである。

考古学の方法は、過去のいかなる時代においても等しかるべきであり、事実そうであるが、文献が存在する時代の考古学については、常に両者が牽制し合うという特質をもつ。文字の使用に伴い考古学資料に現れてきた出土文字は、その特殊な性格ゆえに注目されるところとなつたのであるが、この文字のある時代の考古学研究の在り方を検討することが、学問的にどれほど重要であるかはいうまでもない。

為政者らは自己の正当化や権威付けのために神話や歴史を利用してきた。またそのための手段である文字は、多くが特定の社会階層によって独占的に使用されて残されてきたものであった。よって政治史が文献学にとって最も史料の残っている分野となるのは必然である。

考古学は、当時の記録者にとつて、あまりにも当然であつたため記されることなく没していった名もなき人々の生活の実態を明らかにする可能性をもつ。しかし遺跡という対象は、自然条件や後世の土地利用状況という偶然性の下に存在し、すべてを発掘調査するのは物理的に不可能である。さらにその発掘調査のほとんどが「開発」関連で行われていることは、調査地点の性格付けにあたって、偶然に多くを委ねていることになる。

そこから我々が知ることができるのは、歴史のわずかな断片であり、せいぜいおぼろげな輪郭でしかありえないのである。この不完全さを、より真実の歴史へ近付けるのが歴史研究者としての我々の責務である。その点、文献の内容を参照できる時代の考古学は、全体像に近づくのにそれのない時代の考古学と比べて著しく社会構造の解明に際して有利であるといふことができる（五）。

しかし、重ねていうが、遺物が地中より掘り出されるときに、考古学的調査を経なければ、そのもつ学術的価値は著しく損なわれる。発掘資料としての扱いを受けない、つまり記録を伴わない遺物の語るところは、そのもの自体の情報に限られてしまう。発掘調査の特質は、遺物を時空の中に正確に位置付けるという作業にある。この特質こそが、他の総ての学問から考古学を区別する恐らく唯一のものである。この点、地理学に起源する層位学の理論は考古学と不離の關係にあり、型式学とは一線を画する。なぜなら型式学は、考古学の一つの方法ではあっても、分類学に基礎をおき、一般的に建築学などの「モノ」を対象とする学問に共通のものであるからである。すなわち型式学は、「モノ」に対して成されるものであるから、その「モノ」が特定の空間に場所を占めるという前提があつて、初めて有効に働くのである。

これに対して文献学は、すでに述べたようにその対象が一義的に文献の内容であるということである。書かれている内容が問題となるということは、その空間的位置や、その書かれたものは二義的、三義的なものになるということである。特に文書などは、その性質からして人の手を伝わり、時間とともに特定の銘辞性が薄れていく傾向が強い。しかし近年の資料論では、文書の料紙や来歴などにも関心が深まり、モノ資料を文献から見直すという作業も始まっている(矢田ほか編二〇〇五、特に第2部「文献資料と中世考古学」)。

ここで我々は、これまで否定されてきた時代区分の在り方、すなわち文字の有無によつて考古学の時代区分を設定するという考え方を再考せねばならないであろう。その概要は、モノを扱う考古学が文字の有無という基準を採用することは学としての本質にかかわるというものである。確かにこの考え方は、考古学にとつてふさわしいと思われるにもかかわらず、私は躊躇せざるを得ない。確かに両者は個々の学問体系をもっている。しかし、その關係は歴史という一つの翼の下に納まるものであり不可分に結び付いているものである。そして文字の発明が、考古学の立脚点であるところの「モノ」に対して不可分に影響を与え続けてきたと考えるならば、文字の有無という時代区分の基準は有効であるといえよう。文字の社会経済にあたえた影響は甚大なものがあり、それは直接にもいわぬ考古学の対象である遺物にさえも及んでいる。そこで、先史と歴史(有史)という時代区分について考えてみると、それらは文献の意味で「史」という文字を使用する場合には問題が生じないのであるが、ひとたび歴史を人類の歴史という本来の意味での歴史学と呼ぶ場合の歴史は、二重の意味をもつようになる。私は、歴史学を過去のすべての人類に対する学問であると考え、後者を選ぶ。ここにおいて、考古学は人間の過去すべてを対象とすることができる。

したがつて、文字があつてはじめてある程度の社会構造が復元でき、考古学の調査成果を文獻的に検証できるといふ立場からすれば、文献の存在する時代の考古学を特に「歴史考古学」とよぶことは、理あることであろう。よつて今後その用語を用いる(八)。それは、矛盾でも方便でも慣用でもない文献が存在する時期の考古学の在るべき姿であり、その時代こそ歴史を明らかにする上で最も考古学が威力を発揮する時代である。

例えば先史時代の研究に絶対年代は必要であろうか。あるいはこういいかえてもいい、先史時代における絶対年代に、どのような意味があるのであろうか。歴史叙述上において、「数千年前」という理科学的年代が必要になる場合もあるであろうが、基本的に相対編年でこと足りるのではなからうか。各型式が、必ずしも一定の期間で変化するとは思えないし、先史時代の遺物に現れた事象をもつて、それを現代的感覚で解釈することは危険ではあると思う(福田二〇〇五)。先史人の心性については、認知考古学が前提とする人類にある程度共通する認知構造を除けば、ほとんどわからないのであつて、時間概念が同一であつた保障もないのである。そのような時代の絶対年代が、どれくらい古いかという現代人の興味を満足させること以外に必要とされるのであろうか。

また、先史考古学からみて歴史考古学の現状について問題視されているのは、型式の不在問題である。大屋道則はいう、「現在進行しているところの型式無き編年は、過去に尺度をもたない操作であり、編年として成り立たないことはいふまでもない。(中略)この風潮は、型式論的な範疇を不在としましたまで特定の資料を一括してこれに一定の時間的位置を与え、その繰り返しから編年を行うと言う方法論的誤謬から必然的に生まれたものである。

（中略）そろそろこのような方向性を是正して適切な編年研究を進めていく必要がある」（大屋一九九一、三九頁）。

編年は、考古資料全般について行われてきており、それが歴史を考える上での基本となることに誰もが異論を挟まないところである。型式とは、すでにみてきたように「ある形態を造りだした集団の集団構造の表象」でもあった。型式の前後関係は、その表象の変化をとらえたものであるから、編年のための基礎的作業にあたるものである。

さて、ここにある一個の土器が出土したとして、そこに焼成前に年号が刻まれていたとする。あるいは年号の書かれた木簡と土器が一緒に出土したとする。これらの場合、モノと出土状況が信用できるなら、その土器は絶対年代の基準資料となる。そして同じ型式に属する土器は、同時性が保障される。すなわち文献が存在する時期の考古学の場合、このようにして絶対年代が決まる可能性がある。また、そこまで正確でなくても、文献との対比でおおよその年代がわかる場合もある。さらに最近では、年輪年代のパターンが整備されてきており、炭素年代測定の精度も向上してきたことから、それらの成果を用いての時期比定も有効になりつつある。それで年代が押さえられるのなら、型式論的操作をその後に行うという方法は採用してなんら差し支えないであろう。「一括遺物と層位関係を重視した」編年の枠組みは、有効に機能するのである（北條二〇〇二）。もちろん層位論・型式論的方法で組み立てられてきた従来の編年があるからこそ、それらが有効に作用することはいうまでもない。ただ、文献の存在する時期の考古学では、その資料ができるだけ細かい尺度で位置付けられる必要があり、まだ編年は完成しているとはいえないがたい。

このような状況を鑑みれば、山内清男や小林行雄以来の実績をもつこれまでの型式学的研究法から逸脱する方法であっても、それに拘泥する必要があるであろう。文献の存在する時期の考古学では、最初に年代ありきの研究もあり得るのである。その上で、遺物を歴史へと位置付けていくことは可能であると考ええる。そもそも型式とは、研究者の見方によって、研究者の数だけ存在するものではなかっただろうか（林一九九七）。その最大公約数的特徴が研究者に共有されることによって認知されるのであるが、その内容も研究が進むにつれて変化していくものである。さらに遺物の編年的位置を決めることで研究が終わるわけではなく、それは歴史資料として活用する際の第一歩にすぎないのである。

さて、歴史学の対象は、人間たちであった（讀井訳一九五六）。最初に述べたように、考古学は歴史学の方法学であると考えから、その対象も同一である。具体的にいうならば、その人間たちの実像にせまるために、文献と手を携えて、物質的資料の集合体すなわち遺跡・遺物から考える学問である。

ここで中世遺物の特徴についてまとめておこう。まず、生産年代に近い遺物としては、耐用年数がごく限られている土器や消耗の激しい播鉢が出土時の年代と近い年代を付与することができる。しかしながら貿易陶磁器や瀬戸・美濃、普及型漆器などの食膳具については、流入量が豊富な場合、それらは消耗品として扱われており、それほど年代幅をもたせる必要がない。しかし同じ食器でも、晴れの場のみに使われる高級漆器などは、伝世が前提であり、各種威信財（小野二〇〇三）とともに注意が必要である。したがって、一括遺物については、碗皿類を基準に年代を考えると、歴史考古学の特徴があげられる。この伝統は、銘々器の出現する弥生後期三世紀以来のものである（都出一九八九）が、越後においては古墳前期（四世紀）以降ごく一部の遺跡に普及し始める。しかし、それが消耗品といえる程度に越後の集落全体に普及するのは、八世紀後半の須恵器生産を待たねばならなかったのであり、これを契機として九世紀中葉に中世的食器組成が成立する（本章付論参照）。本稿では、土器を大量廃棄する価値観を共有していた時代を中世と考えており、その流れは、食膳具が商品化することによって、消費者が各人の経済状態によって碗の種類を選べるようになっていく過程であるといえる。

最後に、近・現代考古学の位置付けについて論及した福田敏一『方法としての考古学』（二〇〇五）を検討する。

福田は、「近代においてのみ、研究者の「触感」や「記憶」が利用可能」（六四頁）であるという。ここでいわれる「触感」や「記憶」については、「直

接的な経験にたいして生じた「触感」やこれが概念化した「記憶」のこと」(六七頁)とされる。すなわち民俗学が直接対象とする時代が、それに相当する。

さらに福田は、歴史時代の考古学について、重要な指摘を行っている。

「先史時代においては、基本的に考古資料が当該社会復元のほぼ唯一の直接な材料(中略)であり、この場合考古学は資料提供の方法的手段であるとともに、必然的に歴史叙述を扱う総合的な科学の役割も果たすことになる。(中略)資料が考古資料に限定されるこの時代の歴史叙述は(中略)科学としての考古学が受け持つのが理に叶っている。(中略)このようにみていると、時代が下るに従い考古資料のもつ歴史叙述への参加の度合いは相対的に減少するといえ、実質的にみて弥生時代まで、多く見積って古墳時代までは考古資料を主体とした歴史叙述が可能である(中略)そして古代以降の歴史叙述の資料としては、考古資料に加えて文献や歴史的記念物が登場し、さらに近世以降にはこれに民俗資料が加わり、しだいにその資料全体に占める比率を増していくという経過をたどることになる。つまり古代以降、考古学は歴史叙述に関するひとつの手段(方法)としての性格をおびる(中略)近・現代以降を対象とした考古学的研究は考古資料のみによる歴史叙述が不可能という意味で、科学としては成り立たず、考古資料の検出やその操作・研究にもとづく近現代史への参加という性格の「方法としての考古学」にとどまることになる。なお、上記二つの間には含まれた古代以降近世までに關しては、考古資料以外の様々な資料(文献・石造物・建築物・伝承など)が存在し、歴史叙述に使われる点を基準に考えれば、やはり「方法としての考古学」的側面が強いといわざるを得ないが、古代についてはかなりの部分で考古資料のみによる歴史叙述が可能であろう。」(一〇九―一一二頁)

しかし中世文書は、古代に比して多くなってくるとはいえ、近世文書に比して非常に少ない。ことに戦国期の文書群を除いた場合、その数は充分ではなく、偏在している。ここに中世の考古資料の重要性は、明らかであろう。方法としての考古学が中世においても有効なる所以である。なお、考古学のみで明らかにできることに加え、文献が存在することにより、豊かな歴史叙述が可能であるという意味で、中世は最も両者が協業すべき時代でもある。過去の人々の實際を考古資料から明らかにすること、そのために古代以前は、現代の我々からあまりにも遠い時代であり、その歴史叙述はすこぶる不完全なものとならざるを得ない。

第二節 中世荘園考古学の可能性

歴史考古学の位置付けについて述べた前節に続き、本節では中世荘園の考古学的研究の可能性を追究していきたい(七)。「荘園遺跡」(八)は、多種類の遺跡を包括する概念であり、限定された空間をもつことにより、それまでの遺跡概念とは性格を異にする。したがって、個々の研究成果をそこに注ぎ込むことによって、豊かな歴史像が描き出される可能性をもっている。本編の個別研究も、その目的のために執筆してきたものであり、先般の『奥山荘城館遺跡』(水澤二〇〇六)は、一荘園遺跡の一部についての紹介を試みたものであるが、終わることのない「奥山荘」論を提示し続けていきたいと考えている。これは、ブローデルが『地中海』で示した歴史研究の方向性(浜名訳二〇〇四)や、考古資料と民俗資料の共通性を説く福田アジオが強調する「長期波動としての歴史を明らかにする研究」(福田一九九二)に最もふさわしい研究分野である。

まず、吉岡康暢の考察(一九九六)に基づいて整理した宇野隆夫「荘園遺跡の調査・研究史」(宇野二〇〇一、二四―三六頁)から荘園の考古学研究の流れをみていく。

第一期(一九五〇―六〇年代)「意識するしないにかかわらず荘園遺跡が発掘調査の対象となりつつあった」時代で、一九六一年には草戸千軒町遺跡の調査が始まった。なお、新潟大学の井上鋭夫が首班となつて一九六二・六三年に実施された「旧奥山荘地域総合調査」で旧中条町の江上館跡の発掘調査(担当、奥田直栄、中条町教委一九七七)が行われたことは、中世荘園遺跡の考古学的調査の端緒と位置付けられる。

第二期(一九七〇―八〇年代前半)「各種遺物の編年研究や集落研究が本格化した荘園研究の基礎がつくられた段階」。加賀の横江庄遺跡の調査(松任市教委ほか一九八三)が行われ、荘園の考古学的研究の基礎が確立したと評価されている。また、中世荘園の調査例も増えてきたとされる。

第三期(一九八〇年代後半―九〇年代)「個別の研究が大いに進み、考古資料から歴史・社会を描く基礎が得られた段階」。草戸千軒町遺跡(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所一九九三―一九九六)、西川島遺跡群(穴水町教委一九八七)、中堀遺跡(埼玉県埋文一九九七)の本報告が出され、荘園の多様な世界が示された。さらに、八〇年代から丹波国大山荘(西紀・丹南町教委一九八五―一九八九・一九九二)、大山編一九九六、備後国太田荘(田中稔編一九八六・一九九〇)、豊後国田染荘(甲斐ほか編一九八六・一九八七)等の荘園の総合調査が行われてきており、文書・絵図に加え、石造物を主体とした宗教的景観、水利環境、土地利用、城館等について現地調査を踏まえた成果が公にされてきている。

そして宇野は、その動向をモデル化することを試みて、古代・中世荘園についての情報を総合的に分析し、荘園の特徴として「宗教を支えとしながら多彩な営みを行ったことにある」とした(宇野二〇〇一、一八九頁)。また、草戸千軒町遺跡の遺物に対し、「一港町の出土品によって中世の流通の基本的な事柄の多くを論じうる」として(宇野二〇〇一、一八九頁)。また、草戸千軒町遺跡の遺物に対し、「一港町の出土品によって中世の流通の基本的な事柄の多くを論じうる」として(宇野二〇〇一、一八九頁)。

このように多くの研究が重ねられてきているのであるが、私見における荘園研究の意義は、個々の遺跡を包含した絵図を含む文献に記された一定の完結した領域を考古学の対象として特定できる点にある。そこには現地比定という問題があり、その多くに一一世紀後半以降の領域型荘園の成立後の時代という限定が付されるが、ここに至って、ある一定の領域が特定できる可能性がでてきたのである。もちろん、領域がまったくあやふやな状態の荘園・名前だけしか知られない荘園や文献が断片的でほとんど範囲が特定できない荘園は、その対象とするのが難しい。また、領域荘園といえども多様な要素が入り混じっている(川端二〇〇〇、高橋二〇〇四)のではあるが、勝手が設定されて荘園の範囲が文書に記された意義は、非常に大きい。例えば、中世の村が発掘されたとして、それで村の範囲がわかるわけではない。運よく全面発掘で居住域が判明したとしても、その周辺の田畑の範囲はわからないし、まして村と村の境が考古学的に明らかにできるとは思えない。遺跡として把握されている範囲は、人々の生活域のごく一部を示すにすぎないのである。しかし、絵図や所領の相伝史料が残されているいくつかの荘園遺跡は、地域の特定領域を研究する上で、その範囲を限定できると

いう得がたい種類の遺跡であり、その中で「景観全体を遺跡として把握」（櫻井二〇〇五）できるのである。鑑みれば、個々の遺跡範囲が限られている古墳などは、それだけで成り立っているわけではない。周囲に関係者の屋敷があり、集落があり、されどさらに隣の集落は、古墳と関係しているのかどうかわからないのである。といって国郡単位の特徴では、具体相に欠け、そこに詳細な人間の動きを見出すことは難しい。したがって郡以下の範囲で、領域が特定でき、それらが有機的につながっているとわかる遺跡群、それが荘園遺跡なのである。もちろんその範囲は、立荘時に人為的に決められたものであるが、荘園という一つの性格でくられる限定空間であり、かつそれが現地比定できるといふ性格の領域は、古代においては宮城域くらいしかなく、中世以降にのみ認められる歴史考古学ならではの遺跡である（九）。

なおここで、中世城館・寺院以外の新しい流れとしての「荘園遺跡」の史跡指定についてもふれておこう。これは、点には違いないが、荘園内の複数の地点を群として指定したもので、これにより個別では史跡指定が難しい遺跡をも保存できる道が開かれた点で、画期的な指定方法であった。この方法は、荘域内に点在する候補地を追加指定していく上でも、非常に優れており、領域を保存していく長期的な方法として注目される。このような荘園遺跡としては、一九八四年指定の奥山荘城館遺跡（胎内市、水澤二〇〇六）、一九九八年指定の日根荘遺跡（泉佐野市、市教委二〇〇五、鈴木二〇〇七）、二〇〇〇年指定の新田荘遺跡（太田市、市教委二〇〇二）、群馬県教委二〇〇二）、二〇〇五年指定の骨寺村荘園遺跡（関市、市教委二〇〇四・二〇〇五）がある。

それらをいかに有機的に関連付けて整備活用し、町おこしにつなげていくかが現代的課題となっている点で、史跡指定地の果たす役割は大きい。これらの根拠となった荘園という一定の領域は、文献に残されたからこそわかるのであり、それが現在まで直接つながっている中世考古学の強みである。ここで、現時点での指定地の性格をみてみよう。

- ・奥山荘城館遺跡（二地点） 城館七、寺社二、墓地二、原油湧出地一
- ・日根荘遺跡（二五地点） 寺社一一、池三、水路一
- ・新田荘遺跡（一一地点） 館二、寺社七、水源二
- ・骨寺村荘園遺跡（九地点） 館一、寺社三、岩屋二、積石塚一、集落遺跡二

やはり、城館・寺社が多く、これは地域を象徴するものであるため、その核となる遺跡である。そしてそれぞれに、水源や岩屋、墓地といった特色あるものが含まれているが、最も近年の指定にかかる骨寺村荘園遺跡では、集落遺跡が指定地に含まれており、新しい傾向といえよう。ただ、寺社の中には、現在も続いているものも多く、指定地が多数あるということとは、それだけ関係者が多数に上ることである。それは、調整や事務量の増加に伴うものの、多くの人々とかかわりができるということでもある。それと史跡整備・活用との兼ね合いが課題でもあるが、それらを克服して、地域の心の拠り所としていくことは、史跡整備担当者（多くは考古学研究者）が現代に果たすべき責務である。

そして、そこにある寺社や墓地、各種石造物といった人々の生活に密着した存在は、もちろん仏教考古学の対象である。中世とは、神仏の力が大きな割合を占めていた時代である。聖俗両面から当時の人々の生活へとせまっていくために仏教考古学の占める位置は、巨大である。先の宇野の指摘にもあったように宗教的環境は、中世の人々の行動原理と密接に連動しており、それは流通にかかわる商人をも掣肘していたという意味で、商品だけを扱ってよしとするわけにはいかないのである。したがって、限りなく曖昧な中世の聖と俗の在り方を追究するための絶好の舞台として領域が画された荘園遺跡が挙げられることは疑いなく、現在の我々が有している知識を総動員して歴史の舞台を紡ぎださねばならないのである。

小結

本論では、序章での視点に基づき、第一編「日本海流通の考古学」において世界的規模での中国陶磁器流通の一部をなす日本への貿易陶磁器の流れを消費地でのモノの出方からとらえなおし、文献と対比できる細かい編年的位置付けを与えることを目的とした。瓦器、土器、漆器といった国内産の器についても同様の視点に立っている。日本海沿岸地域は、一一世紀から一六世紀初頭において最も貿易陶磁器が流通していた地域である。もちろん、中世前期における博多や大宰府、鎌倉、一五世紀前後の琉球、一六世紀代の堺、そして京と、集散的に貿易陶磁器が出土する場所は各地にあるにしても、中世を通じて豊富に貿易陶磁器が流通していた地域は、日本海沿岸地域において他にない。したがって、越後国奥山荘を中心とした日本海沿岸地域の出土遺物を論じることが、そのまま中世の広域流通を論じるに等しい。

次いで第二編「仏教考古学」で論じた事柄は、地域社会における宗教的遺跡・遺物・石造物を通して当時の人々の心性に迫る試みである。現状では、その事実関係及び編年的位置付けにおいて、わずかに踏み出したにすぎないが、文献に残されることのない大多数の人々の思考への手がかりになり得るものと考えている。第一編の広域流通品と異なり、地域性が顕現しているのが特徴であり、越後でも板碑・畿内系石仏を受容した阿賀北と、五輪塔卓越地域の頸城、そしてほとんど石造物を残していない魚沼を除く中越地域といった様相の違いが認められる。これらの違いは、地域ごとの死者に対する考え方の違いを表している。すなわちこの地域性を検討することによって、中世越後国という地域社会へと踏み入っていく道が開けるのである。そして積み重ねてきた諸成果から、多角的な奥山荘の姿を一つずつ提示していくこと、その作業の積み重ねによってのみ遺跡群を包括した中世荘園の姿にせまっていくことが可能であろう。

それがいずれ奥山荘からみた日本歴史へとつながり、ひいては中世史研究が現代の地域社会に果たす役割の一助とならんことを欲するものである。

本編では、本章の視点に基づいて具体相を提示していくのであるが、ここで言及しておかねばならない問題は、本論における中世とは、いつの年代を指すのかということである。

例えば、鎌倉幕府の始まりがいつかという議論は、文献的には、いついつの時点といえるかもしれないが、考古学的には、少なくとも使用期間の長さ分の幅がある。政治的な変更が、遺物に劇的な変化を与えることは、少ない。古いものがだんだんなくなって、新しい様相がみえてきて、いつしか新しいものも古くなっていくという流れの中で、いつからという区切りは、難しいのである。

日本における中世論については、中世ヨーロッパに範をとって構想されたもので、中世不在論等をあげつつ、代表的な文献学の見解として、黒田俊雄と石井進の論を紹介した新田一郎の仕事がわかりやすい(新田二〇〇四)。氏の結論としては、黒田の権門体制論に賛意を示しつつ、明確な結論を留保しているが、脚注で応仁の乱から職豊政権までの一世紀間を短い「中世」とする見解を披瀝している(新田二〇〇四、九二頁)。

ここで少々長くなるが、私の中世に対するイメージに大きく影響している高柳光寿の論を引いた石井進の文章を引用してみたい。

「高柳氏の所論のもつ問題性の一つは、中世国家の前提としての、古代律令国家の評価にある。(中略)氏の論旨からすれば、「古代国家日本は決して単一国家ではな」く、中央政権以外にも、氏族制社会以来の地方政権とも呼べるべき多くの独立政権が存在していたと考えられており、田地の種類という特殊な問題に触れてではあるが、「大宝令制定の当時に一定の規格を与えたとしても、それは恐らくは一部に過ぎず、且つ机上の規格に過ぎなかったことと思われる。されば(中略)今日田令に定むるところをそのまま信用してかれこれ論ずるなどは無益というべきである」と、律令の実効性を否定する見解がとられている。

教科書的な律令の規定の制度史的叙述と、古代専制主義国家という戦後の学会における通説的規定とが丸のみこみされ、混合・合体したときに生じてくる古代律令国家のイメージ・班田収授法、条里制、戸籍・計帳、家族成員の一人一人までも追及してあますところのない個別人心的支配、苛酷な徭役労働の収奪など、一連の事実の組み合わせの上にえがき出される一種の常識的理解と比較するとき、ここにまた理解のはなはだしい差がみられる。しかし、すでにみてきたような中世社会の実態からさかのぼって考えるとき、高柳氏の所説は、かなりに説得的である。たとえば、荀・蒔というような原始的な田積の単位をひろく残している状態の前提として、班田制・条里制の全国的・一般的な実施を想定しうるであろうか。

はなはだしいまでに多種多様な桝の混用が、近世社会への推転にともなって漸次統一に向かって行く、という中世の量制の展開方向をみとめた上で、それ以前には劃一的な律令の国家公定桝制度が、ひろく、深く日本社会の底辺までをとらえ、全民衆的な規模で有効であったと考えることができるであろうか。

とくに桝の歴史については、かつて古代律令制下では国家の公定桝であったが、中世への転換につれて制度がみだれ、信じられぬほどの多様な桝を生み出し、やがて近世の成立とともに、ふたたび公定桝の制度が確立した、それはまったく中央統一権力の強さの反映である、とする理解が一般的常識であるかと思う。

しかし、高柳氏がすでに批判されているように、はじめに一定の規格があり、後になってこれがみだれた、とする思考法を前提とすることは大いに問題である。いや、誤りであるといった方がよいだろう。古代における桝の史料が、律令国家による公定桝のみに限られているが故に、古代の桝は公定桝一種だったのだと結論するのだとしたら、それは歴史家のつねに心しなければならぬ史料の限界性に対する反省を忘れた飛躍である。わが国に文字がはじめて導入されたときの事情からも明らかのように、この時代の書きのこされた史料はほとんどすべてが中央支配層の手になる、これらの側

からのそれであったという事情は、つねに忘れられてはならないものである。中世におよんで多種多様な柁の存在が史料上に明らかとなるのは、けっしてそうした現実の新たな発生を反映したものではなく、書きのこされた史料が、古代に比してはるかに社会の全体におよぶようになったからにすぎないと考えの方が、より合理的ではあるまいか。この問題については、柁がものの量をはかる場合の一方法であるという事実に立ちもどって、量のはかり方一般の歴史という角度からみるならば、古代における一定の方法の全民衆の利用、やがてその崩壊と多様化というような図式のとうてい支持しがたいことは容易にわかるはずである。

以上、古代律令国家権力が、統一国家権力として、社会の底辺にいたるまで浸透していったとはとても考えられないことについて述べてきた」（石井一九七〇、一八〇二〇頁）。

私の中世に対するイメージは、混沌としたものであった。それは、古代律令国家というものに対したときのイメージであった。学に志した頃、古代に対し、なぜに中世はこれほどに多様であるのか、どこから手を付けてよいのか皆目わからない状態であった。しかしその多様さは、中世に始まるものではなく、古代以前から続いていたものであった。いい方を変えれば、その多様性がわかるだけ中世の方が人々の生活に迫れる可能性が高いということになる。考えてみれば、極めて不完全な暴力装置しか持たない中央の律令国家が、どれほど地方に浸透したかという点、誠に心もとないものであろう。すなわち強制力が根本的に欠如していたのである。確かにその影響は、大きなものであったであろう。そしてその支配体制は、組織をまとめあげるにあたって利をもたらしただけかもしれない。しかし律令は、それを知るものにとつては巨大であったろうが、一般の大多数の人々にとつては所在すら知られていないというのが実情ではなかったか。これは現在の我々においても、程度の差こそあれ、いえることであろう。地方官衙は地方の有力者によって運営され、中央の支配方針が彼らに利益をもたらしと彼らが考えた場合にのみ、それに力を貸した、いいかえれば彼ら自身の富と権威のためにそれに同調したに過ぎないというのがその現実であろう。そのようなものが律令的支配の実情であるから、彼らはいつまでも律令国家の要求に甘んじているはずもなく、自らの力で現地を強力に支配しようとしていく。これが武士団形成への要因であり、暴力装置の発動契機であったと考えられよう。

このことを、考古学の得意な食器からみてみよう。食事は、いうまでもなく人間が命を維持するために必須であり、それに伴う器は、各生活様式と密接にかかわっている。したがって、その形態は、社会の状況に対応して変化する。食物の調理方法（内容物）や、その場の性格などによって使われる器も異なる。腐敗することのない焼物の器が考古学の基本であることも、食事ごとに消費されたことを考えれば、当然のことである。

まず、王朝国家的食器様式から話を始める。この概念は、宇野隆夫が提唱した九世紀第二四半期にはじまる食器の中国陶磁器指向であり、宮廷儀礼の唐風化に伴うものであった（宇野一九八九）。これに伴い食器は、坏形の須恵器から碗形製品（多くはロクロ成形土器）に転換していく。この現象は、北陸を例にとれば、須恵器生産が遅くまで残る畿内よりの地域よりも早くに転換する越中・越後でまず達成される（出越一九九四）。須恵器生産、鉄生産といった地域性を度外視した一律の政策が破綻し、そこに残ったものは土器碗と内面を黒色処理した土器碗の二種で、後者は黒色漆器もしくは越州窯青磁の暗い色調に連なるものであろうか。いずれにせよ畿内よりも数百年も早くから内面黒色処理を行った東国は、この段階より中世的単純器種組成へと移行するのである。入された恰好となる。そしてある意味、東海・信州といった灰釉陶器流通圏を除いた東国は、この段階より中世的単純器種組成へと移行するのである。もちろん、須恵器生産の度合が碗形を焼くことによってより遅くまで残る地域はあるにせよ、土器食膳具が皿形態に特化した（すなわち碗に土器を用いなかった）畿内をのぞき、土器で磁器碗を模するという在り方は九世紀第二四半期以降、律令制的土器様式の縁辺から畿内周辺へと及んでいくのである。このような地域の実情に合った生産体制への転換は、王朝国家的政策とあいまって、中世的な在り方と規定することができる（一〇）。この大きな画期は、通常古代の枠内でとらえられるが、王朝国家という概念自体が中世史側から提出されたものであり（坂本一九七二、下向井二〇〇一）、土器

相からみても、ここから中世ととらえることは可能であると考ええる。

そしてそれに変化が現れるのは、実際に大量の磁器碗（青磁碗）の流通あるいは漆器碗の生産が軌道にのることにより、そのニーズを奪われる一二世紀後半（おそらく第4四半期）（一一）以降のことで、そこにてづくね成形土器が登場してくる余地が生じたのである。それはおそらく畿内のでづくね成形でなくともよかつたはずで、偶々皿形であったために、それに土器工人が生き残りをかけて取り組んだ結果といえよう。この時も逸速くてづくね皿を取り入れたのは、一二世紀中葉の平泉を中心とした陸奥出羽地域であり（羽柴二〇〇一）、北陸ではやや遅れるようである。ここでも縁辺部からそれが進みつつあったことがうかがえる。元々律令の制度的影響をほとんど受けなかった北の世界は、必要なもののみを受容し、生産を強要されることもないという意識の上に立っており、それは中世後期まで一貫したものであったと思われる。平泉滅亡以降の北方世界については、土器儀礼は必要のないものであったが故に存在しないのである。それは、平泉の轍を踏まない意識の現れであったのかもしれない。

そしてさらにもう一度の京都インパクトである一五世紀後半代のでづくね皿の出現は、方形館と土器儀礼の結合を指標とした場合、一定量が出土する地域は越後を北限とし、それにやや遅れるかたちで以西の北陸諸国がその波に飲まれるのであり（水澤二〇〇一b）、ここでも縁辺部からの流れが認められる。ここで注意すべきは、九世紀後半からの土器様式の変化が北の世界と南の世界を除く汎日本列島のものではあったのに対し、一五世紀後半代の京都系でづくね土器の流入は北陸地域という局地的現象にすぎず、それに続く一六世紀代の大内・大友・細川・後北条といった地域権力のでづくね土器の使用はさらに点的なものであることである。

このように、その境界は時期ごとに変動するのであるが、京畿を発信源とする変化は、常に縁辺部たる北東方面から（おそらく南西方面からも）生じている。畿内周辺部は、その影響が強い故に変化が緩慢であるのに対し、縁辺部は速やかに移行するのである。したがって、中世の始まりと終わりは、対象とする地域によって異なるといえる。

以上みてきたように私見では、中世の始まりを九世紀第2四半期におく。これはいままでの考古学的議論より二〇三〇〇年も古い時期を含むことになる。しかし文献学的には、以前より王朝国家Ⅱ中世とする説は有力である。ここでは、元慶八年（八八四）の光孝天皇即位が王朝の交替にあたり、中世王統の始まりととらえる伊藤喜良の見解（伊藤一九九五）及び「平安国家は、九世紀半ばにおける民族複合国家の解消を起点とし、一〇世紀半ばでかけて、以降の国政史と対外関係の制度的枠組みを整えた」という保立道久の所論（保立二〇〇四）をあげるにとどめるが、それに並行して食膳具の上にも変化が認められるのである。考古学的に九世紀中葉〜一〇世紀初頭の画期は、中世の起点として示されていたにもかかわらず（宇野一九八六・吉岡一九九一）、古代と位置付けられてきたのである。したがって本稿では、文献学的に「王朝国家体制」といわれる特色ある時代（坂本一九七二、佐々木一九九四）を、中世初期と位置付ける。

もちろん全域が変化するまでには、地域ごとの個性があるために列島全域を一律に扱うことはできない。それが同質化するためには、情報が共有され、物が動かねばならない。すなわち、流通網の整備が大前提となる。律令国家の軀は、一定の成果をあげて王朝国家体制へと移行したが、平安京を中心とした流通網が大きく変化するには、白磁の大量流通期である一一世紀後半をまたねばならなかった。したがって、本格的な中世の開幕はその時期にしても、九世紀後半代の揺籃期には、律令の権化たる須恵器を捨て、磁器写しの土師器及び黒色土器からなる中世的な単純組成を指向し始めていたと考えられよう。それは通常、律令制度の弛緩と表現されるが、それこそは偽籍を隠れ蓑に成長を遂げつつあった地域富豪層の台頭を意味するものであった。しかし一〇世紀初頭に地域支配の課税基礎が人から土地へという国家的大転換（平田二〇〇〇）が行われたことにより、受領を通した中央の収奪が徹底化され、一時的に地域の様相は不透明になる。地域が豊かで活動が活発であるとき、物資が多量に消費され、結果として遺跡は多くみつかる。対して、地域の余剰が中央へ集まったとき、中央では文化が栄え、地域では物資の消費も低調になる。富が一部に集中しているときに、民衆の

姿はみえにくくなるのである。これが、一〇世紀中葉から一一世紀代における遺跡の減少化に対する私見である。

そして、九世紀末から一〇世紀初頭にかけての国司への権限委譲と一五世紀半ばの守護への権限委譲は、共に中央政府による納税義務を留保した地方の切り離しであり、地域民衆の受難の秋であった。それによって、各地の地域権力が恣意的な権力体を志向していくことになるのであるが、それは民衆にとって貪欲な収奪機構がより身近に存在することになることを意味しよう。ともにその体制が機能し始めて以降、東国では集落遺跡が不明瞭となり、地域の様子がにわかには見えなくなる。ただ前者の場合、受領層が頻繁に交替するため、地域権力の形成が遅れ、鎌倉の相対的自立までに三〇〇年もの歳月が必要であったのに対し、後者では守護が地域に帰着したため、次の統一まで半分ほどの歳月で事足りたことになる。しかし支配者層は変革を望まなかったかもしれない、地下に近い人々の力が結集されたとき、それが達成されたということなのであるか。

したがって長期的にみれば、九世紀中葉から一六世紀初頭までは一三世紀後半を頂点とする一つの時代Ⅱ中世としてとらえることができる。もちろん鎌倉期以降の東北地域が、土器を多量に用いることはなかったのであり、独特の地域性を有していたことは否めないが、日本海海運からみた場合、貿易陶磁器・瀬戸美濃大窯という広域流通品の出土状況は、その画期が一六世紀第1四半期にくることを示している(水澤二〇〇一a)。そして、その後、西日本が日本海的生活様式を採用していくことによって、一つの時代が終焉を迎えるというおおまかな見通しを述べて本論を終えることとする(一二)。

註

(一)当然のことながら文字で書写される場合でも、単純な誤写の外、その時代の一般常識によって改変を受ける。例えば「写字生は往々彼らの手本を訂正した。彼らがおたがいに独立に働いている場合でも、共通の精神が習慣がしばしば彼らに結論を示唆せざるをえなかった。・・・二人の写字生は・・・意味をなさぬ(と思われた)・・・語を(自分たちが正しいと考えた語に)置き代えた。そうするために彼らは協議したり、模倣し合う必要があったろうか」○内筆者。(讀井訳一九五六、一〇四～一〇五頁)

(二)考古学が文献学とともに歩んできたのは、『美術考古学発見史』(濱田訳一九二七)及び『石と森の文化』(角田一九七一)をみれば明らかである。

(三)文献学が歴史事実へとせまろうとするならば、その書かれている内容をこえない限り不可能であるから、結局それは銘辞性を問題にすることになるのである。例えば、文書の伝来過程や紙背文書などを文書の内容とともに検討することがそれにあたる。

(四)ここで我々は、『美術考古学発見史』に引用されたゲルハルトの以下の言葉をあらためて想起するであろう。「遺物を唯だ一つ見たるものは何者をも見ず、千を見たるものにして始めて一つを見る」(濱田訳一九二七、九九頁)。

(五)レヴィ・ストロースがいうように、千年紀単位のコード(尺度)と一時間単位のコードはそれぞれの意味体系に属し、独立したクラスを形成している。「一つのコードにとって意味のあることは他のコードにとつても意味があるということにはならない」のである(大橋訳三一～三二五頁)。現在我々の知っている総ての情報が、たとえ一〇〇年後にさへそのままの形で伝わることは不可能であろう。昭和の年表に載っているいくつかの項目が現在に残っているであろうか。総ての時代に、各クラスの意味体系が存在した。たとえそれが旧人の時代においてでさえ、一時間単位のコードは存在する。ただそれらは、我々の知覚の外にあるため、認識するに至らないのである。この点で、歴史考古学と先史考古学は、異なった尺度を対象としているということとなる。

(六)なお、根源的な問題は、先史学(Prehistory)と古典考古学(Classical Archaeology)という二つの学問体系を一つの「考古学」という名でよんでい

ることにある。なお、これだけ歴史考古学の存在が日本社会に認知されているにもかかわらず、最近出版された『考古学ハンドブック』（小林編二〇〇七）では、ほとんどが古墳時代以前の内容で埋め尽くされている。さらに巻末の「考古学年表」は平安時代までしか記されていない。これでは凡例に記されたような「考古学」という学問のすべてがわかるとは思えないが、ここから少なくとも編者の小林達雄及び出版社にとつての考古学は、先史学を意味するものであるということがわかる。

（七）もちろん、荘園に関する文献学の蓄積は厚い（例えば網野善彦ほか一九八九を参照）。しかし、文書の分析だけではなく、水利調査・地名調査といった荘園の現地調査（歩く中世史研究）が行われるようになったことにより、寺社や石造物、田畑等を含めた豊かな景観が残っていることに研究者が気付いたこと、それが荘園遺跡という概念を生み出したと考えられよう。なお、坂詰秀一は、一九八五年の段階で、古代荘園が中心に調査されてきたこと、文献学者の現地調査の進展に伴って、中世荘園に関しても考古学視点の萌芽がみられることを指摘している（坂詰一九八五）。

（八）「荘園」遺跡のほか「保」遺跡、「郷」遺跡、「院」遺跡等も当然提唱されてもいいのであるが、在地構造自体に相違点はないと考えられるため、「荘園遺跡」という名称に代表させておく。したがって荘園遺跡研究とは、中世遺跡群研究というに等しいが、「荘園」に特徴付けられる意義については後述する。なお、荘園遺跡と景観に関しては、日根荘を中心とした廣田浩治の整理（廣田二〇〇六）を参照のこと。

（九）現在の一般的な特定範囲は、市町村域である。それぞれの行政区に合わせて、史誌類が編纂され、地域史がまとめられている。しかし、中世を対象とする場合、異なった性格の土地が自治体域に複数含まれている場合も多々あり、不統一となる可能性も高い。こういった点からも、荘園を研究範囲とすることは、有益であろう。

（一〇）宇野隆夫は、加賀小松窯産須恵器の一〇世紀代の流通の復活を「商品流通的な性格が強まったと理解」（宇野二〇〇一、八五頁）しており、越後においては、佐渡小泊窯産須恵器の九世紀中葉からの越後国内への流通にそれを見ることができ（坂井一九八九）。筆者としては、この「商品的流通」段階が中世の始まりと考えている。なお、一〇世紀以降に出土文字資料が激減することについて森郁夫は、役人の末端までが文字を理解するシステム（＝律令体制）が変化したためと説く（森一九九六、一八四～一八五頁）。私見では、紙が貴重品とはいえ普及したため、すなわち商品化したためと考えたい。

なお、その後のロクロ成形土器造りの基調は、少なくとも一二世紀代まで一貫しているが、一一世紀代に出現する柱状高台皿という特徴的な器種（あるいは一〇世紀後半の有台皿も含めて）は、施釉陶磁器というよりは京の白色土器の器形（平尾一九九四）に近く、その用途を考えるうえで重要である。

（一一）森隆は、一四世紀代に西日本で土器碗生産が消滅した原因として、商業的な生産流通機構が地方農村地域にまで浸透した結果、自給する必要がなくなったためであるとした（森一九九三）が、東国ではこの段階でそれが達成されたのではないかと考えている。

（一二）宇野隆夫は、中世後期の土器儀礼からの脱却を安土城下町における土器比率の顕著な低下に求めている（宇野二〇〇一、一八四頁）が、旧守性の強い畿内を除く地域では、その動きが一六世紀初頭にみられると考えている。

序章 引用・参考文献

- 穴水町教委 一九八七 『西川島遺跡群』
- 網野善彦・石井進・稲垣泰彦・永原慶二編 一九八九 『講座日本荘園史1 荘園入門』 吉川弘文館
- 網野善彦・石井進・谷口一夫編 一九九五 『中世資料論の現在と課題』 名著出版
- 石井 進 一九七〇 『日本中世国家史の研究』 岩波書店
- 石井 進編 一九九一 『考古学と中世史研究』 名著出版
- 泉佐野市教委 二〇〇五 『日根荘遺跡範囲確認調査・詳細分布調査報告書』
- 一関市教委 二〇〇四・二〇〇五 『骨寺村荘園遺跡』 市埋文調査報告書第5・6集
- 伊藤喜良 一九九五 『中世王権の成立』 AOKILIBRARY 日本の歴史
- 入間田宣夫 二〇〇四 『北から生まれた中世日本』 『中世の系譜 東と西、北と南の世界』 考古学と中世史研究1、高志書院
- 宇野隆夫 一九八六 『10・11世紀の土器・陶磁器』 『中世土器の基礎研究』 II
- 一九八九 『古代の食器様式』 『歴史時代土器研究』 第7号、岩手
- 二〇〇一 『荘園の考古学』 青木書店
- 太田市教委 二〇〇二 『新田氏の歴史遺産を現代に活かす―史跡「新田荘遺跡」の整備と活用―』 シンポジウム記録集
- 大橋保夫訳 一九七六 クロウド・レヴィイ・ストロース原著『野生の思考』 みずす書房
- 大山喬平編 一九九六 『中世荘園の世界―東寺領丹波国大山荘』 思文閣出版
- 小野正敏 二〇〇三 『威信財としての貿易陶磁と場―戦国期東国を例に―』 『戦国時代の考古学』 高志書院
- 甲斐忠彦・海老澤衷編 一九八六・一九八七 『豊後国田染荘の調査I』『同II』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第3・6集
- 川端 新 二〇〇〇 『荘園制成立史の研究』 思文閣出版
- 群馬県教委 二〇〇二 『ふれあい歴史のさと研究検討報告書』
- 小林達雄編 二〇〇七 『考古学ハンドブック』 新書館
- 埼玉県埋文 一九九七 『中堀遺跡』 県埋文調査報告書第一九〇集
- 坂井秀弥 一九八九 『佐渡小泊窯製品の広域流通』 『山三賀II遺跡』 新潟県埋文調査報告書五三第集
- 坂詰秀一 一九八五 『荘園の考古学―その回顧と展望―』 『考古学ジャーナル』 二四一、後同著一九九〇bに再録
- 一九八八 『考古学における文字研究』 『季刊考古学』 18、後同著一九九〇aに再録
- 坂本賞三 一九七二 『日本王朝国家体制論』 東京大学出版会
- 櫻井成昭 二〇〇五 『六郷山と田染荘遺跡』 日本の遺跡4、同成社
- 佐々木宗雄 一九九四 『日本王朝国家論』 名著出版
- 下向井龍彦 二〇〇一 『武士の成長と院政』 日本の歴史7、講談社
- 鈴木陽一 二〇〇七 『日根荘遺跡』 日本の遺跡20、同成社
- 高橋一樹 二〇〇四 『中世荘園制と鎌倉幕府』 塙書房

- 二〇〇五 「中世日本海沿岸地域の潟湖と荘園制支配」『日本海域歴史大系』第3巻中世篇、清文堂
- 高柳光壽 一九七〇 『高柳光壽史学論集(上)(下)』吉川弘文館
- 田中 稔編 一九八六 『国立歴史民俗博物館研究報告第9集 中世荘園の現地調査―太田荘の石造遺物』
- 一九九〇 『国立歴史民俗博物館研究報告第28集 中世荘園遺構の調査ならびに記録保存法―備後国太田荘』
- 土田直鎮 一〇七三 『日本の歴史5王朝の貴族』中公文庫
- 都出比呂志 一九八九 『個人別食器の成立』同著『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 角田文衛 一九五一 『銘辞学の方法論』『文化史学』第4号、後『古代学の方法』(一九八六)に再録
- 一九五四 『古代学序説』山川出版社(『増補古代学序説』一九七六)
- 一九七七 『カール・ロベルトと考古解釈学』『考古論集』松崎先生退官記念論集、後同著一九八〇『ヨーロッパ古代史論考』平凡社再録
- 一九八六 『考古学の概念』『角田文衛著作集 第一巻 古代学の方法』法蔵館
- 一九八七 『銘辞学とその周辺』『季刊考古学』第18号
- 一九九三 『転換期の考古学』雄山閣出版
- 出越茂和 一九九四 『加賀におけるロクロ土師器の出現と展開』『中近世土器の基礎研究』X
- 土井義夫 一九九五 『考古学資料論』『中世資料論の現在と課題―考古学と中世史研究4―』名著出版
- 中条町教委 一九七七 『江上館跡発掘調査報告書』
- 賛 元洋 一九九一 『様式と型式』『考古学研究』38-2
- 西紀・丹南町教委 一九八五〜一九八九 『丹波国大山荘現況調査報告書I〜V』
- 一九九二 『大山荘内埋蔵文化財調査概要報告書』町文化財調査報告第10集
- 新田一郎 二〇〇四 『中世に国家はあったか』日本史リブレット19、山川出版社
- 讃井鉄男訳 一九五六 マルク・ブロック原著『歴史のための弁明・歴史家の仕事』岩波書店
- 羽柴直人 二〇〇一 『平泉遺跡群のロクロかわらけについて』『岩手考古学』第13号
- 濱田耕作訳 一九二七 アドルフ・ミハエリス原著『美術考古学発見史』岩波書店
- 一九三二 オスカル・モンテリウス原著『考古学研究法』岡書院、一九八四、雄山閣より復刻
- 浜名優美訳 二〇〇四 フェルナン・ブローデル原著『地中海』I〜V、藤原書店
- 林 謙作 一九九六 『縄紋研究と型式学』『考古学雑誌』82-2
- 平尾政幸 一九九四 『緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器』『平安京提要』角川書店
- 平田耿二 二〇〇〇 『消された政治家 菅原道真』文春新書115
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 一九九三〜一九九六 『草戸千軒町遺跡』I〜V
- 廣田浩治 二〇〇六 『荘園遺跡の理念と構成・日根荘遺跡を中心に―』『ヒストリア』202
- 福田アジオ 一九九一 『考古学と民俗学―協業のための予備的考察―』『国立歴史民俗博物館研究報告』35
- 福田敏一 二〇〇五 『方法としての考古学―近代における認識―』雄山閣

北條芳隆 二〇〇二 「日本考古学における理論と技術―「型式」・「様式」問題と「文化」概念をめぐる―」『考古学における認識と実測』第2回
考古学技術研究会発表要旨

保立道久 二〇〇四 『黄金国家―東アジアと平安日本』青木書店

松任市教委・石川考古学研究会 一九八三 『東大寺領横江庄遺跡』

水澤幸一 二〇〇一a 「越後戦国期の遺物問題」『新潟考古』第12号

二〇〇一b 「一五世紀中葉後半における北東日本海沿岸地域へのやきものの搬入時期―越後江上館を中心として―」『中世土器研究論集』中世土器研究会20周年記念論集

二〇〇六 『奥山荘城館遺跡』日本の遺跡15、同成社

森 郁夫 一九九六 『平安』グラフィティ日本謎事典⑤、光文社文庫

森 隆 一九九三a 「中世的土器生産の特質と成立過程」(上)(下)―畿内・西日本地域を中心とした―『古代文化』45・5・6

矢田俊文 一九九七 「文書・日記が語る北陸―中世北陸のムラとマチと流通」『中・近世の北陸』桂書房

山口博之 二〇〇五 「空間の考古資料論」『モノとココロの資料学―中世資料論の新段階』考古学と中世史研究2、高志書院

吉岡康暢 一九九一 「中世的食器組成の成立と時期区分覚え書―30年シンポに寄せて―」『中近世土器の基礎研究』VII

一九九六 「北陸の初期庄園遺跡と横江庄遺跡」『東大寺領横江庄遺跡II』松任市教委

第一部 日本海流通の考古学

本編は、「日本海流通の考古学」と題して日本海沿岸地域での土器・陶磁器・漆器等の流通状況の解明を主題としたものを集めた。特に考古学の基礎資料となる中世に大量に流通していた食膳具形態の出土遺物を主に扱ったものである。ここでは、考古学の基本である遺物の共存関係を重視し、それに紀年銘資料や文献などによって時期がはっきりしている遺跡・遺構を組み合わせて搬入時期を求めるという中世考古学特有の手法をとった。さらに、遺物そのものもつ形態変化の方向性や、遺物の分布状況、統計処理的手法等を用いて、日本海沿岸地域の特性を浮かび上がらせることを目的としたものである。

第一章は、貿易陶磁器の流通を追究したものである。

第一節「貿易陶磁器序説」では、中国製の陶磁器と中国史とのかかわりに重点をおいて、日本での出土状況との相関を求めたものである。特に王朝の交代時及び海禁政策に伴う貿易陶磁の流入量は非常に減少し、そこに琉球国の動向が合わさって日本国での出土量に影響していることを明らかにした。また、中国思想史と青磁の紋様構成についても論及した。

次いで、中世前期と後期に大別して、日本各地の貿易陶磁器の出土量を比較検討した結果、日本海沿岸地域が非常に大量の陶磁器がもたらされた地域であることを数値で示して明らかにした。

第二節「中世前期の貿易陶磁器」では、日本に貿易陶磁器が大量に流入してくる十一世紀後半以降、鎌倉時代までの状況を論じた。大量に青磁が入ってくる十二世紀第4四半期以前(あるいは中世段階において)の貿易陶磁の搬入ルートについては、博多から京都を経て、東国へという図式で語られてきたが、ここでは白磁大量出土遺跡の分布状況から京都を経由しない博多からの日本海直通ルートを提示した。さらに、十二世紀末以降も日本海沿岸地域は、大量の貿易陶磁器が持ち込まれていることも明らかにした。併せてその日本海流通を利用した能登半島の先端で焼かれた珠洲陶の流通について考えた。そしてその折に、能登半島の付け根を陸路で横切るルートが、半島を巡るルートに変更されたことも想定した。この珠洲陶については、荘園特に摂関家の皇嘉門院領荘園との関係を重視した。

そして、貿易陶磁の搬入時期を越後国衙と考えられる至徳寺遺跡の共存関係から示し、その搬入が一世紀の前半から始まっていることを明らかにした。さらに鎌倉期の貿易陶磁様相について、鎌倉の膨大な報告書から遺物を抽出する作業を通じて青磁・白磁・土器の関係を論じた。大まかな流れについては、すでに研究がなされているが、細かいところでは、十分な検討がなされたとはいいがたく、遺跡での状況から再検討を加えたものである。

第三節「中世後期の貿易陶磁器」では、北東日本海における一五世紀前葉～中葉にかけての良好な共存関係を示す遺構等を抽出し、青磁・白磁・土器等の出現時期を検討した。これらも、従来おおまかな年代観が提示されてきたものの、各種の製品がいつから生産されて運ばれてきているかという細かい年代については、文献学と対応できるほどの細分がなされていなかったモノであった。旧来の年代観に安住するのみでは、細部がおろそかになることから、この時期の遺物を最も多量に出土する北東日本海沿岸地域の遺跡を主体として、個々の器種の搬入時期をとらえたものである。

また、それに伴って舶載の天目茶碗を取り上げ、遺跡の性格と場での使われ方を検討した。その結果、格の高い遺跡ほど、舶載天目茶碗を消費し、各種茶道具を保有していることが明瞭になった。それらは、信楽壺や茶臼、風炉などとセットとして搬入されたものであるが、セットとしてもてゐる階層と部分的に欠落する階層、持てない階層が存在することも明らかとした。なお、この検討によって、一六世紀末以降に茶陶器として搬入が始まるとされてきた信楽壺についても、すでに一四世紀末の段階で搬入が始まっていたことも判明した。

最後に、一六世紀中葉前後の時期に急激に減少する貿易陶磁器、瀬戸・美濃等を通じて、遺跡が日本海地域でみえづらい状況にあることを指摘し、

生活様式が漆器(特に椀形態)にシフトしていったことを考えた。これは、集落の集村化に伴う現象でもあるが、中国での公的貿易が嘉靖二年(一五二三)の寧波事件によって浙江省船舶司の撤廃が直接的に影響しているものと思われる。また、瀬戸・美濃製品については、明応七(一四九八)年の地震津波による積出港たる安濃津の壊滅が大きく影響していることも明らかである。

第二章では、中世後期における瓦器について器種分類を行い、その性格を考察した。その結果、風炉を中心とした広域流通器種は、支配階級が欲したものであり、舶載天目茶碗、茶入、信楽壺、茶臼などの茶道具とともにセットとして販売された高級商品であったことを指摘した。なお、出土事例として越後国の守護所である至徳寺遺跡の瓦器をとりあげて、その一端を示した。

第三章では、中世土器をとりあげた。土器編年は、考古学の基本であるが、時期によってその精粗があるため、不明瞭な部分もある。そこで、右の諸論文で述べてきた陶磁器との相伴関係とのクロスチェックを行いつつ、土器自身の形態変化を追った。基本的には、越後の資料を用いたが、一部信濃や能登の資料を援用した。土器については、京都との関係が強いつくね成形土器の存在意義が取り上げられることが多く、越後でも政治勢力との関係でとらえることができる。東国における土器は、宴会儀礼に用いられることが多く、西日本のような両義性は薄い(吉岡一九九七a、鈴木二〇〇二a)。越後においては、一五世紀に入ると一二世紀以来のつくね成形土器に替わって関東系とされるロクロ成形土器が一時期主体となる。これは南北朝期最終的に越後守護となった関東上杉氏との関わりを示すものと考えられている。しかしその状況も長くは続かず、一五世紀半ばには、京都から帰越した越後守護の影響によって、ふたたび手づくね成形土器が使用されるようになるのである。この搬入時期については、奥山荘江上館跡における瀬戸・美濃等との相伴関係を通して検討し、至徳寺遺跡での事例で補強した。なお、阿賀北南部地域においてのみは、一三世紀以降主体的にロクロ成形底部窠切という特徴的な土器を使用続けて戦国期にいたるのである。

さらに付論として、京都系土器と方形居館との関係を追究した。その結果、その境界が両者とも越後と出羽の境にあることを確認した(註)。

第四章では、土器・陶磁器類とは、材質が異なった食膳具である漆器を対象とした。越後では、漆が豊富であったことから、中世前期にいたるまで下地に漆を用いるといった地域性があるが、それ以外は浜下地製品との差異は認められない。また、遺存状態に左右される部分もあるが、政所条遺跡群では、中世前期を中心とした二〇〇点を超える漆器が出土しており、その重要性は土器・陶磁器類に匹敵するものである。ここでは、漆器における赤色顔料の導入期やその割合を検討しつつ、年代を押さえた。なお、四柳嘉章による塗膜分析の成果(四柳二〇〇六など)は、それまでの研究を一変させ、塗りと素材の関係から遺跡の性格をうかがえるまでになっている。そして越後でも用材の違いが時代を表しており、一三〇〇年頃を境としてケヤキからブナを中心とする雑多な材へと変化してきていることを明らかにした。このことは、その植生域の違いからそれまでの遺跡内での一貫生産を終息させたのであり、分業制による專業集団が成立したことを意味すると考えられる。最後に至徳寺遺跡出土の一括資料を紹介した。

註

前川要は、津軽十三湊遺跡の居館および函館の志海苔館跡を例に挙げて、方形居館体制に組み込まれたものと考えている(前川二〇〇五)。しかし筆者は、十三湊遺跡の居館が方形居館といえるかどうか疑問視しているところであり、志海苔館跡は立地的にふさわしくないと考えている。まして、土器の大量廃棄という様相がみられないことから、方形居館体制の東端は、越後と出羽との境にあると考えられるのである(第三章付論1、水澤一九九九b・二〇〇五c)。

第一章 貿易陶磁器の流通

第一節 貿易陶磁器序説

1 貿易陶磁の国際情勢―青磁を中心にして―

(1) 貿易陶磁としての青磁

日本の中世を貿易陶磁器でみると白磁で幕を開け、青磁に移り、最後に青花で終わったといえようか。中国の王朝でいえば、白磁は北宋、青磁は南宋より明前期、青花は明後期となろう（今井ほか一九九五）。ただし、一二世紀前半までの白磁は、いまだごく限られた人々の器物であり、一六世紀の主流をなす青花は、中世というよりも近世的な用いられ方（組物としての使用）をしていると理解している。したがって青磁は、中世を代表する貿易陶磁器であるということができよう。もちろん南宋以降も白磁は焼かれていたし、青花は元代から生産が始まっていたことはいまでもないが、中世の大部分において、最も多く輸入された貿易陶磁器が青磁であったということは動かないところである。

そして、少なくとも北陸以北の日本海沿岸地域においては、一二世紀末から一五世紀代まで中世の大部分の時期の碗形態の主流を漆器と二分しており、その遺存状況を考えるとき避けて通れない遺物である。

また輸入品であるが故に、その全容を理解しようとすれば、中国と日本の関係を押えねばならないのは当然のことである。そして、その上で器形なり編年なりを検討したいと思うが、今回は紙幅の関係上、後者についての詳細については後日を期することとし、ここでは中国と輸出品としての陶磁器とのかかわりを問題とし、ついで青磁の具体的な型式変化が中国史とどのような相関関係にあるのかを検討したいと思う。

なお今回の対象は、越州窯系青磁の生産終了後に始まる白磁の時代（一一世紀後半）からとする。

またここでは、一般的に使われている龍泉窯系に対する概念である「同安窯系」という学術用語は、用いない。それは学史的な用語であるが、同安窯は龍泉窯に対置する概念とするには小規模すぎるためである（矢部一九七七・今井一九九七）。さらに、厳密にいつて「同安」と「龍泉」を区別することは難しく、範囲を福建省と浙江省に拡大しても同様であるからである。よって、本稿で用いる「同安」は、純然に「外面櫛描、内面劃花＋ジグザグの櫛当」という技法を意味するものとして使用する。

(2) 中国史と貿易陶磁事情

ここでは、貿易陶磁器の変遷を青磁を柱にして、中国史の中で整理することから始めたい。

北宋 九六〇年

南宋 一二二七年

元 一二七六年（一）

明 一三六八年（二）

まず、現段階で中国の制度と陶磁器を考えようとするとき、その積出港の名を冠した方がよいのではなからうか。例えば、龍泉および景德鎮の一部は慶元（寧波）系、福建諸窯及び景德鎮は泉州もしくは福州系、広東諸窯は広州あるいは潮州系といったように。この同安技法を有する製品の積出港

は泉州で、日本へは慶元經由で齎されたと考えられよう（後述）。

そしてこの泉州は、南宋後期から元代にかけて、広州よりも発展したことにより、南海貿易の中心港となっていた（愛宕一九八七、杉山一九九二）。したがって、それまで北方の慶元に回送されていた福建青磁の多くが南方に搬出され、その結果として日本にはほぼ龍泉窯系の青磁のみが齎されるようになったとは考えられないだろうか。

商品としての陶磁器は、各窯場に商人が仕入れに赴き、河を経て各地の市場へ運ばれるのであり（愛宕一九八七）、その一部が日本に齎されたのである。ただし、日本で出土している青磁・白磁は、中国各地の製品の多様性（出光美術館一九八二）に比して器種が限られている。これは、明らかに生産コストと供給圏との関係、そして各国との交渉窓口である指定港に規定された結果と考えられる。もちろん博多からは多様な製品が出土しているが、全国的な様相としてはほとんどが碗皿に限られている。中国においては、宋代以降になって広く一般に釉の施された器が普及し、官窯が設けられ、高級瓷器と粗瓷器が分化したという（愛宕一九八七）。さらに北宋を経て南宋以降になると、それまで金属や玉で作られていたものまでが焼物で作られるようになったことにより、一段と生産量が増えたことが日本への流入を促したともいえよう。したがって、中国での施釉された器を食器に用いるという最新（一二世紀）の生活様式が日本へ持ち込まれ、その実用の器が徐々に広い階層の人々へ浸透していくことと、青磁の生産体制が急速に整備される南宋代の状況は、一体的なものとして理解する必要がある。また、矢部良明が指摘しているように（矢部一九七七）、南宋後期の一二一九（嘉定一二）年に、外国交易の支払いに貨幣ではなく、絹帛や漆器そして瓷器の類を用いることが命ぜられている（『宋史』卷一八五、食貨志）ことは、貿易陶磁器の性格を考える上で重要である。

いったいに南宋は、金に中原を押えられていた関係上、海に開かれた王朝であり、その中で青磁は主要な輸出品の一つとして位置付けられていた（森一九四八・藤井一九九七）。そして北宋と南宋は、別の国家体制としてとらえるべきであり（宮澤・杉山一九九八）、それと白磁から青磁へと生産の主体が移行したことは偶然の一致とは考えられない。それは、南宋の都「臨安」（杭州）が、秘色青磁の故地「越州」に近かったこと、そしてなにより官窯で青磁を焼かせたこと（長谷部一九七七・今井一九九七・中澤二〇〇〇）が、南宋における青磁の優位性を生んだのではなからうか。

ここでは以上のような状況をふまえ、中国王朝の制度（積出港）と日本への流入経路・事情をまとめておく（関口一九九五参照）。

日本と中国との公式の貿易窓口は、ほぼ明州（慶元＝寧波）に限られていた。これは、一〇八二年に市舶の制度が始まり、一五五一年にその制が廃止されるまで一貫していたのである（斯波一九九二、四頁）。ただし、北宋末の時点で市舶の収益の9割が南海貿易を管轄する広州から上がっていた（斯波一九九二、一三頁）というから、日本・朝鮮貿易の全体に占める割合は、1割ほどに過ぎないことになり、中国側の貿易の主な関心は南海方面にあったことには注意せねばなるまい。

そして貿易には、中国商人がやってくる場合（博多などに居住する中国商人が発注する場合を含む＝住蕃貿易、亀井一九九五・一九九七、北宋～元）と日本の商人や僧侶が公の使節に便乗して買い付ける場合（明）がある。前者の場合、一括して窯ごとまるまる持ち込まれることが多々あったようで、それは博多での破損・廃棄された大量の貿易陶磁器や窯道具の存在が顕著に物語っている（池崎・森本、川添、佐伯一九八八）。また後者では、明の海禁政策により公貿易によりもたらされる絶対量が全く不足していたため、琉球經由（中継貿易）が飛躍的に発展した（高良一九九八）。それは、首里城の倉庫から出土した大量・多彩な貿易陶磁にみられるとおりである（金城一九九八）。ただし、それに加えて中国を対象とする倭寇貿易（田中一九九七、村井一九九七、大隅・村井編一九九七）によるものもかなりの部分を占めていたのではないかと考えられる。

以上を中世前半と後半に分けて、日本国内の流通路を加えて図式化すると第1図・表1のようになる。

(3) 青磁碗の世界観

ここでは、日常品の碗の変化を本に、青磁に込められた意味を探っていききたい。

ひとまず、一二世紀後半〜一五世紀を青磁の時代とするならば、中国の王朝は、南宋―元―明代が対象となる。北宋期は、貿易陶磁器体制の揺籃期であり、すでに日本への輸出はそれ以前から始まっていたが、本格的な流入は南宋期をまたねばならなかったと考えられる。(二)

青磁の画期は、日本の出土状況からみると、南宋代に二回と明代に二回ある。

南宋

最初の画期は、その貿易陶磁体制の成立期である一二世紀第二四半期である。刻花紋、これは明らかに南宋の成立と連動している。それ以前からごく少量の初期龍泉が搬入されていたが、外面無紋で内面刻花紋というスタイルが成立し、大量に輸入されるようになるのは、南宋の成立期以降として大過ないところであろう。(四)

このときから、それまでの白磁中心の世界から青磁が定量を占めるようになる。特にそれは、龍泉の外面の紋様の省略化による量産化が関係してくるものと思われる。しかし遅れて日本列島に登場した福建諸窯の製品は、外面に櫛目紋様を入れ続けている。それを地域性の違いというか、伝統の持続というか、言い方は色々あるが、龍泉に比して手間がかかっている製品であることがいえよう。

南宋の第二の画期は、刻花紋から鎬蓮弁紋への変化である(五)。その時期は、一三世紀初頭と考えられる(矢部一九七七、山本一九九九、森二〇〇〇)。一二〇〇年頃を境に転換していき、一三世紀の半ばにはそれが達成されたものと考えられる。そして「同安」諸窯は、前代の独自性を保つことはできず、鎬蓮弁の波に飲まれて同化していったものと考えられる。そこに残ったのは、おそらく燃料や釉(うわぐすり)からくる黄色味がかった釉調のみである。さらに付け加えると、この時期に龍泉は、砧手青磁を生み出すことになる。砧手は、品質的にばらつきがない高級感をもたせた量産品である。

日本における青磁の流入時期は、山本信夫によれば、劃花紋は一一三〇〜一一四〇年頃で、一二〇〇年前後に盛んとなり、一二五〇年には終息する。鎬蓮弁紋(角高台)は一二〇〇年頃出現し、一二三〇年ころから盛期を迎え、一三〇〇年頃終息する。鎬蓮弁紋(細高台)(及び白磁口はげ)は、一二三〇年頃出現し、一三〇〇年頃盛期、一四世紀まで残る(山本一九九九)。また森達也によれば、鎬蓮弁は幅の広いものから狭いものへと変化するという(森一九九八・二〇〇〇)。そしてその時期は、一三世紀半ば頃よりとする。ただし時期的な問題は、地域ごとの様相を今少しつめる必要がある。

なお、山本が提示した資料で、内面劃花紋外面鎬蓮弁というタイプがある。氏はこのタイプを劃花紋と鎬蓮弁紋をつなぐもの、すなわち転換期の所産(D?E期)とするが、このタイプは森が指摘したように(森二〇〇〇)、蓮弁の幅が狭いことから劃花紋の終末期の所産と考えた方がよいのではないだろうか。

しかしここでの問題関心は、なぜ内外面紋様から、内面刻花紋に移行し、さらに外面鎬蓮弁に収斂したかである。すなわち一二世紀代には内面が重視されていたのに対し、一三世紀以降は外面が重視されるようになることである。両者の最も大きな違いは、視覚的なものである。内面の紋様は、それを使う個人に相對するものである。対して外面の紋様は、使用者以外にみられる(みせる)ことを意識している。みる器からみせる器へと変化したともいい直せよう。これは需要者たる日本側の要請による可能性もあるが、やはり当時の情勢からして、生産者たる中国内部で変化が生じたものと考えた方がよいであろう。では中国での理由はなにか。

ここで窯場の職人はひとまずはずそう。彼らは自由に焼物を作っていないし、徹底的に分業化されている(愛宕一九八七)。問題は彼らにだれが

変更を指示したかである。社会がそれを要請したのならば、どのような要因によったものなのか。

あるいはそこに南宋と金の一二〇六年の開戦が影響し、青磁の意匠の変化がそれを表していると仮定するならば、そこに文化的に他を圧倒せねばならないという切実な願いが込められていた、という想像もできる。そして、紋様が内面（劃花紋）から外面（鎗蓮弁紋）にという現象は、文化を外へ誇示する意図が込められていたとはいえないだろうか。

そして、モンゴルが金を滅ぼした一二三四年には、鎗蓮弁紋は主流となっており、元が南宋に代わる一二七四年頃になると、細鎗蓮弁がそれに代わるようになってくることの意味はなんなのか。

あるいは単に、個人的・趣味的な器から日常的な器へ、という青磁の社会一般への広がりを体现したものの、といえるかもしれない。しかしその日常品化は、すでに北宋末期に生じていたのである（愛宕1987）。そのおりには、内外面の刻花の内、外面を省略するというかたちで量産化が行われたものと考えられ、それが日本などの諸外国へも大量に出回るきっかけとなったものと思われる。そしてこの外面の紋様省略は、青磁を個人的に楽しむという階層の広がりを意味するものといったほうが正確であろう。

なお一方で、需要者の底辺の広がりに反比例して、上流階級では別の動きが認められる。それは、器形と釉調（貫入）のみで内なる美を表現する（ものとされる）官窯に代表される無紋青磁の一群である。

愛宕松男氏は、北宋末の士大夫が日常用いている無紋の磁器について「・・・理想の形、つまり裡に美を秘め誠を蔵して君子の徳に喩えられる玉器にも比すべきもの」ととらえていたことを紹介している（愛宕一九八七、二六六頁）。これらは、元以前においては、紋様を省略して生産量を上げるといったものではなく、確かに意識された所産のものである。たとえそれが支配階級の独善的な価値観に基づくものだとしても、彼らがそれを是としたからには、この時期においては、無紋製品は有紋製品の上位に置かれたと判断せざるをえない。それは、紋様よりも釉調に重きをおいていた。外面より釉調の奥にある精神性が求められたともい直せよう。なお、この色を問題とするためには、最高の焼成技術管理が必要なことはいうまでもなく、それがためにコストを問題としない官窯が存在したといえよう。

そして、砧手といった高級志向の青磁もまた、鎗蓮弁紋と軌を一にして現れてくる。これはこの時点で、高級品に対する民需に答えるかたちで官窯の技術の一部が民間に流出したためと考えることができよう。その結果、文化の体現者としての鎗蓮弁紋青磁にもその技術が取り入れられ、高級品（砧手・細高台）と普及品（角高台）の二種が生産されることになったものと思われる。

ただし劃花の伝統は、鎗蓮弁に移行することによってなくなってしまうわけではない。森氏がいわれるように劃花紋様式が続いていた（森二〇〇〇）とは思われないが、その陰刻技術自体は保持されていたと考えられる。それは、後代の雷紋帯や線描蓮弁紋、さらに下って稜花皿へと受け継がれているのである。むしろ鎌倉での出方からみると、幕府が唐船を制限した一二五四年以降に劃花紋から鎗蓮弁へと転換することから、その選択肢が問題となる可能性がある。鎗蓮弁の外へ発する表現は、武家のイメージに合致するものであり、漆器の絵柄の煩縛化にも共通するものがある。

明

第一の画期は、元末く明初の混乱期である。その一四世紀中頃は、主要生産地である江南が紅布の乱などで荒廃し、生産が衰退した結果、日本への輸出は滞ったと考えられる。

そして明が成立（一三六八年）し、琉球との国交が開かれる（一三七二年）と、堰を切ったように再び青磁の流入が始まる。（六）

明代の磁器は、例えば『世界陶磁全集』¹⁴の「明」をみると、ほとんどが青花で占められていたと思われるかもしれない。しかし日本での出土状況からみると、明代三〇〇年の内前半の一五世紀代までは青磁生産の方が優位を占めていたのではないかと思われる（今井ほか一九九五）。ただし、

南海交易（対イスラム貿易）においては、すでに元代から青花が重要な商品となっていたことからすれば、日本向けには青磁、南海向けには青花という振り分けがなされていた可能性がある。ただしその選別が、中国の市舶司において行われたのか、あるいは琉球においてなされたのかは、検討せねばならないが、琉球での出方からみて中国本土でなされたと考えるべきであろう。

この時の主力製品は、内外面無紋の口縁端反碗である。これは、釉調及び施釉方法、高台の造作、見込みのスタンプなど、非常にバラエティに富み、かつ雑多な品質を含んでいる点で、前代までの製品とは趣が異なっている。もちろん無鎬の蓮弁紋碗や雷紋帯を有する碗も一定量含まれているが、有紋と無紋の比率が逆転するのもこの時期である。これは、明の海禁政策と関連して中継地としての主役となった琉球が、一四二九年の統一まで山北・中山・南山の三山王がそれぞれに朝貢していたという事情がより事態を複雑にしていたものと思われる。また、琉球の中継貿易は、三山が統一された結果、富は首都である首里城に集中した。それを明瞭に示すのが、倉庫からの出土遺物である（金城一九九九）。その遺物からみて、明皇帝からの下賜品をはじめとする優品の多く（あるいは一部）は、首里城に留められていたものと思われ、碗皿類を中心とする安価な量産品を交易の主力としていたのではないかと考えられる。

先に述べたように、それまではほとんどの製品の外面に鎬蓮弁紋があらわれていたのが、端反碗の時期に至って、無紋の製品が量的に優位に立つようになる。これは、施紋工程の省略すなわち飛躍的に製作時間の短縮と量産化を可能にしたものと思われる。

もちろん蓮弁紋の流れは、続いているのであるが、鎬を失し、これも省略化の一途をたどっていくことは研究史に明らかである。とはいえ、無紋のタイプに比べ手間がかかることから、コストが高めの製品であることは容易に想像されるところである。

したがって、この端反碗の登場は、今風にいうと手取り早く外貨をかせぐ貿易品ということになり、元末の混乱で荒廃した江南の窯業地帯を立て直すという明初の政策を具現化しているということになる。そして、明が安定してくるに従って雷紋や蓮弁紋等の紋様が登場してくることから、その余裕が窯業にも生じてきたというところであろうか。あるいは、一四世紀後半の釉の薄さは、戦乱による釉の材料不足を物語っているのかもしれない。

これを消費地たる日本側でみると、鎬蓮弁の時期に比して、量が格段に増加したことから、より下のクラスの人々にも青磁がゆきわたっていくということになる（七）。そこで、一五世紀代には、領主階級の人々は争って前代の骨董品を求めるようになる。南宋代の青白磁梅瓶、砧手青磁、元代の青磁酒海壺・盤・香炉・瓶類、青花、天目茶碗（黒釉）等々の優品を買いあさり、己が地位をみせつけ、由緒を飾り立てたのである。また、その品々を家臣に分け与えることで、その統制に利用したことは十分に考えられるところである。この時期に青磁の器種が多様化したことは、以上のような理由によるものと考えられる。そして中世前期では、博多や鎌倉といった一部の特殊な地域を除いては、器種のバリエーションが碗皿程度に限られていたのが、各地で多様な機種の出土が認められるようになったことは、中国側の事情も関係しているのではないかと思われる。すなわち征服王朝たる元を倒した明が、前代の磁器を意図的に否定あるいは軽視したために優品が大量に流出した、というのは穿った見方であろうか。また、義満以前の断交状態の中での、私貿易や和寇等による取引といったことも考慮に入れる必要がある。

無紋碗に話を戻すと、鎬蓮弁の段階まで非常に均質的であった高台のつくりについても、種々雑多なものが現れる。これらが窯場の状況を反映していることはいうまでもない。そこにはプロポーション以外の共通性をみいだすことは難しい。これが、明初の混乱を物語る証人といえよう。

それが一五世紀も後半になると、全面施釉後底部外面の釉を輪剥ぎする手法に収斂されていくのではないかと思われる（上田一九八二の編年図）。この流入は、永楽年間の海外膨張をピークに、倭寇の跳躍による明の強硬な海禁政策に伴い暫時下降線をたどったと思われる。

明代の第二の画期は、青磁の搬入の終了である。それは、嘉靖二年（一五二三）の寧波事件による浙江市舶司の撤廃である。これにより日本との公

式貿易は打ち切られた。なおこのおりには、より大きな比重をもっていた対琉球貿易の窓口である福建省舶司も共に廃されており、物資の流入は非常に減少したものと思われる。

しかし青花は、日本でも一五世紀後半以降次第に青磁にとって代わることから、一六世紀には多くの生産地が青花生産へと転換したと考えられる。

(4) 白磁の流れ(抄)

白磁については、青磁と組み合わせられて持ち込まれていたが、現在のところ考えが及ばないところであるので、ここでは青磁との関係において記しておく。

白磁の碗は、一一世紀後半～一二世紀にかけて独占的な流入状況が終わり、口禿段階になると皿が中心となり、碗は激減する。これは青磁に碗の機能分担を奪われたかたちであり、白磁が皿に血路を見いだしたという様相である。これは、ひとえに紋様の有無に関係するものと思われる。白磁でも劃花紋様が入れたものがあるが、青磁が外面に紋様を入れ始める(鎬蓮弁)と、白磁は顧みられなくなる。そして、一四世紀も後半になると、ビロースク外反口縁タイプが一瞬の瞬きをみせるものの、ほとんど皿・小坏類にしばった生産体制にシフトするようである。

なお、一四世紀代に位置付けられている枢府系や外反口縁以外のビロースクタイプ碗は、東日本各地ではほとんどみることができず、標識とするには難しいのではないと思われる。

皿は、口禿の後、一四世紀の後半には、枢府系の流れの延長線上にある腰折の角高台のものがある。このタイプの数量は多くないが、伝至徳寺では定量の出土が認められる。そして、一五世紀に入る頃には口径を縮小し、小坏に移行するものと思われる。この小坏は、体部と口縁端部に面取りを行う八角坏がよく知られているが、面取りを行わないものも定量存在する。後者は、一五世紀に通有の丸腰角高台で、口縁はやや外反するものが多いが、直縁あるいは内湾ぎみのものもある。そして一五世紀代には、丸腰角高台で口縁が内湾ぎみに立ち上がる皿が大多数を占めるようになる(八)。内湾小皿の一五世紀代の変化としては、高台の挟り口径の縮小(二→9 cm前後)、全面施釉などが新出の要素としてあげられる。そして、瀬戸大窯の流入前夜には、端反口縁で内直尖高台、すなわち青花写しの白磁が入り始める。このタイプは、一六世紀の主流をなすものであり、本家よりも少し遅れて搬入が始まることに産地の動向(青花の省力化)がみてとれようか。

このように白磁は、日本での状況からみると、元代以降青磁が主に碗形態を担ったのに対し、皿形態を主として生産していたように思われる。それは、紋様には大きな器面が必要であったことと、紋様がわかりやすい釉調(青磁)といった制約があったためであろうか。そこで貿易陶磁器の碗皿の関係を示すと表2のとおりとなる。

(5) ふたたび劃花紋から鎬蓮弁紋へ

最後にもう一度、どのような理由で青磁の紋様が内面(劃花)から外側(鎬蓮弁)へ移ったのかについて、南宋の社会情勢から考えてみたい。

思想的なものでいえば、当時の社会に大きな影響を与えたものに宋学(新儒学)がある(楠本一九六二・山口一九九四)。それを大成したのが、南宋前半期に生きた朱熹(一一三〇～一二〇〇)である。朱子学は、究極的に、北原を金に押えられていた南宋の正当性を主張する学問であったという(藤井一九九七)。それは、軍事的に劣勢であった中国人王朝の宋が、司馬光の『資治通鑑』によってありもしない正当性を主張した中華思想(岡田一九九九)の流れの延長上にあるものと考えてよからう。

この流麗・洗練の劃花紋から、峻厳などちらかといえ北方(遊牧)の流れを汲む鎬蓮弁紋への変化は、朱子学の影響を受け故地奪回を声高に叫ぶ

大学生らの言論（剣）を呈するものというのは、あまりに極端にすぎようか。（九）

あるいは、南宋官窯の製品が無紋であることから考えて、紋様が入る製品はいってみれば一ランク落ちの量産品であり、主要な貿易地である南海や金（あるいは日本も）のリクエストに沿った製品であったのではなからうか。この鎬蓮弁紋の外に発するイメージは、貿易品としてこそふさわしかったのではなからうか。

以上、貿易陶磁器が中国史と連動した産物であることをみてきた。貿易陶磁器とよぶからには、その背景を探っていかなければモノを歴史上に位置付けることはできないという観点から本稿を記述した。

註

（一）一般には、南宋の王族が海に没する一二七九年からが元とされることが多いが、ここでは実質的に元軍が杭州を接收する一二七六年より元朝の統治下とする（杉山一九九二・一九九五）。

（二）実質的に元が江南を失ってしまうのは、張士誠討伐のために至正一四年（一三五四）に南下したトクト軍が瓦解した後のことである（杉山一九九二）。なお、すでに一二五二（至正一二）年には、景德鎮が元末の動乱に巻き込まれていたという（佐藤一九八二）。

（三）ただし北陸では、寛治五（一〇九二）年の時点で、敦賀に宋人が居留していたことに注目せねばならない（『為房卿記』閏七月二一日条、田島（一九九三）参照）。これは、以後の北陸への輸入磁器の流入を考える上で決定的な意味をもっている。吉岡康暘は、中世前期の日本海岸の流通について岩見国府（榑原一九九八）の例をひき、美保関を境に流通が途切れ、北陸以東については畿内經由のルートを考えている（吉岡一九九七）。しかしこれは、上記の宋人の例に矛盾するものであるし、越中の福光町梅原胡摩堂遺跡（富山県文振財団一九九四）や越後国府の一面と考えられる上越市伝至徳寺（笹澤・水澤二〇〇一）などでの白磁の出方をみると、すでに一一世紀後半の段階で日本海ルートは、博多から越後・出羽まで直につながっていたと考えてよいのではなからうか。

（四）龍泉の開窯時期について矢部良明は、一一世紀後半とする（矢部一九七七）。また、亀井明徳は、初期龍泉という内面刻花以前の内外面刻花紋様碗の一群の存在を定置している。しかしそれらは、日本へはほとんど入ってきておらず、広東産白磁の地位を脅かすものでもなかったと考えられよう。

（五）一九九九年五月九日愛知県陶磁資料館において、「宋・元時代の龍泉窯青磁を考える」と題したシンポジウムが開催された。青磁単体を対象とした点で画期的なシンポジウムであったといえよう。ただしここでは、時間が限られていたために特別展の「四川省遂寧」出土品の年代観が議論されたにとどまった。ここでわかったことは、中国側でもまだ窯場の状況をはつきりと把握できていないこと、青磁について細かい検討が必要であることである。そして、私にとって最も知りたかった、「南宋と元の間でどのような制度的な違いが生じたのかということ」と「なぜ刻花紋から鎬蓮弁紋に移り変わったか」ということについては、ほとんど議論されることもなく終わってしまったことは非常に残念なことであった。

なお、近時発表者の一人である森達也によって、南宋く元代陶磁器の年代観がまとめられた（森二〇〇〇）。

（六）しかし最近注目されるようになってきたが、新安沈船をめぐる検討の中で、山本によって提示された青磁Ⅳ類の設定は重要である（横田ほか一九八九）。Ⅳ類の内容は、基本的に明代の青磁と変わるところがなく、その生産が一四世紀前半から始まっていたという点で、その識別が今後の課題となろう。

（七）なお土橋理子は、歴史民俗博物館の集成資料『日本出土の貿易陶磁』（一九九三・一九九四）を基に貿易陶磁器の流通年代を検討している（土

橋一九九七、七三頁「表2 遺跡出土貿易陶磁器の示す時代の傾向」。そして最も遺跡数の多かった一三世紀をピークとしたのである。しかしその表を詳細にみると、一三世紀と一五世紀の遺跡数を都道府県ごとに比較した場合、一五世紀が一三世紀をわずかに上回るのである。これは、一三世紀代には北九州・畿内および鎌倉に遺跡が集中しているが、一五世紀ではそれらの地域が軒並みダウンし、東日本（特に日本海岸地域）が搬入のピークを迎えるということがいえよう（水澤二〇〇〇）。これはこの時期にいたって、貿易陶磁器の主要ルートが、瀬戸内より日本海へ切り替わったことを意味していないだろうか。

（八）なお丸腰角高台で口縁が外反するものもあり、腰折皿から内湾皿への過渡形態かと思われる。例えば、『江上館跡Ⅳ』（中条町教委一九九六）八一頁No.287を参照のこと。

（九）南宋の最高権力者である宰相になるためには、彼らの動向が大きく作用していたという指摘がある（杉山一九九二、二三五頁）。

2 中世貿易陶磁の物量比較にみる地域性

(1)はじめに

先般、中世都市研究会第七回研究集会（山形市）の発表にあたって、政所条遺跡群の性格を考えるために北東日本海沿岸地域の館を中心に各地の陶磁器の点数を点検してみた（一部水澤一九九〇に掲載）。その結果、以前から指摘されているように（佐々木一九八五、吉岡一九九四、飯村一九九七など）、確かに日本海沿岸地域での貿易陶磁器の出土量が東北の太平洋側の地域に比べて非常に多いことがわかった（一）。

しかし、ある地域の貿易陶磁器の流通量が日本の中でどれくらいの割合を占めていたのかについて述べた文献はほとんどみあたらない（二）。それは、種々の制約から、およそ正確にはならないからである。

そこで地域性の抽出にあたつては、百分率を用いて表現することが多い。その場合、土器を大量に消費する遺跡では、外の遺物が全体の10%以下のスペースに押し込められてしまう。それはそれで遺跡の性格や地域性を考える上で意味のある提示方法であるが、あまりにも外の遺物の存在感が薄れてしまうのも事実である。そこで土器を除いた百分率を提示するといった手段が講じられることもある。また、全体量の多寡は、百分率では表現できず、重量を提示する方法が採られることもある。

しかし今回は、あえて外の遺物を度外視し、貿易陶磁器の総量比を概観する試みを行う。ここで提示する数値としては、破片総数／調査面積とする。貿易陶磁器の流通量といった観点からは、本来個体数が望ましいが、実際の個体数は破片数で比較するときほどの差がない、という前提でご了承願いたい（三）。

また貿易陶磁器の多寡が意味するところは、地域性を表すとはいえ、質を問うてこそ遺跡個々の内容が把握できるのであり、破片数の比較はその一助であるということも付け加えておく。

(2)各地の貿易陶磁器の出土状況

ここでは、日本各地の遺跡群から出土している貿易陶磁器の㎡あたりの出土破片数を提示する。

博多遺跡群

まずは、代表的な荷揚港である博多から始めよう。この地は、日本というより中国の一部と考えたほうがよいほどの環境にあり（大庭一九九四）、少なくとも一二〜一三世紀代の貿易船のほとんどが博多に寄港したと考えられる結果、膨大な貿易陶磁器が出土している。

ここでは池崎譲二の成果（池崎一九八四）を用いて、面積あたりの出土破片数をみていこう。

①地下鉄1号線関係調査A・B区 破片数30,269点／調査面積644㎡あたり47,001点（以下同じ、㎡あたりの点数は下3桁まで）

②祇園駅出入口2・3区 3,779／440＝8.588

③4次調査 34,282／1,100＝31.165

④10次調査 786／54＝14.555

以上、地点によってばらつきがあるが、平均すると㎡あたりの点数は、25点以上にも達する。これを二世紀で割ると、一世紀あたり12点前後とひとまず仮定しておく。ただし、これは傷物や不用品を選別した結果による廃棄品を多分に含んでいる可能性があり、あるいは宋人の居住地等の可能性なども考えねばならない。しかしながら、消費地へ出回った分の方が多かったのは当然であり、破損率を考慮すると全体ではどれだけの貿易陶磁器が

持ち込まれたものであろうか(四)。

琉球

明代の海禁政策により貿易が制限された結果、琉球の朝貢貿易を経て入手された陶磁器が、日本へもたらされることになる(中継貿易、高良一九九八)。ここでは首里城の陶磁器をとりあげる。

首里城京の内2,000㎡の調査では、1,205個体の貿易陶磁器が出土している(金城一九九九)。これを破片数に直すと、約10倍と仮定した場合、以下のとおりとなる。 $12,050\text{片}/2,000\text{㎡}=6.025$

この内、倉庫からの出土が96%以上を占めており、その比率の高さが注目される。これを貿易基地としての首里城の位置を示すものとみるか、琉球王朝の宮殿であるが故の出土とみるか、おそらく両方であろうが、その比率の高さは、博多に次ぐものである。ただし、那覇港の荷揚地や「唐宮」などは、博多と同程度あるいはさらに多量の出土が予想されよう。

平泉遺跡群

地点は飛んで、北の王都奥州平泉へ。ここでは八重樫忠郎(一九九六)と山本信夫(一九九八)の成果からみる。

①柳之御所 $2,173\text{片}/42,555\text{㎡}=0.051$

②志羅山 $441/17' \quad 532=0.025$

③泉屋 $305/13' \quad 382=0.02$

柳之御所は、外の2遺跡の倍以上の出土量があることがわかる。ただし全般に白磁四耳壺や水注が多い(五)ことからすれば、個体数としてはやや差し引いて考える必要があるだろう。なおこの比率は、一二世紀後半という時期においては、非常に高いものである。

鎌倉遺跡群

ここでは手塚直樹(本覚寺・蔵屋敷、一九八四)、馬淵和雄(大倉幕府周辺遺跡群・杉本寺・若宮大路周辺遺跡群、一九九七)、宮田眞(今小路西5次、一九九九)、大河内勉(由比ヶ浜の3地点、一九九九)各氏の成果を援用する。

①今小路西遺跡5次 $3,617\text{片}/3,000\text{㎡}=1.205$

②大倉幕府周辺遺跡群 $722/1,000=0.722$

③杉本寺 $1,658/900=1.842$

④若宮大路周辺遺跡群 $2,355/1,500=1.57$

⑤本覚寺 $942/400=2.355$

⑥蔵屋敷 $882/650=1.356$

⑦由比ヶ浜 $4\cdot1136 \quad 513/1,650=0.31$

⑧由比ヶ浜 $4\cdot1130 \quad 423/450=0.94$

⑨由比ヶ浜南 $724/10,000=0.072$

浜地以外の平均は、1.508。浜地はかなりばらつきがあるが、平均すると0.44。全体の平均は、1.152となる。博多の平均と比べると1/11となる。ただし、全国の9%が鎌倉に持ち込まれたというわけではなく、全流通量からみると数%程度にあたるものと思われる。

北東太平洋沿岸地域

ここでは、中三川昇の鎌倉近辺（蓼原東・池子、一九九九）、池谷初恵の伊豆韮山北条氏邸（一九九九）、小野正敏の房総真里谷城（一九九一）、南奥郡山の安子島城（高橋一九九三）、田中則和の陸奥国府近辺（南小泉・新田、一九九七）、南部八戸根城（工藤一九九五）に関する成果を援用する（六）。

- ① 蓼原東（鎌倉近郊拠点遺跡） 69 片／453² $\mu=0.152$
 - ② 池子遺跡群（鎌倉近郊村落） 189／79,785=0.002
 - ③ 史跡北条氏邸第13次（葦戸） 946／3,000=0.315
 - ④ 真里谷城（房総） 856／4,280=0.2
 - ⑤ 安子島城（郡山） 158／12,000=0.013
 - ⑥ 南小泉（仙台） 71／11,767=0.006
 - ⑦ 新田（多賀城） 279／15,305=0.018
 - ⑧ 根城本丸（八戸） 1,032／15,888=0.064
- 鎌倉と関係の深い遺跡での出土率が高いが、真里谷城は戦国期に入るので割り引いて考える必要がある。東北では、鎌倉の1／20～1／100以下の貿易陶磁量となり、ほとんどの遺跡で前代の平泉遺跡群より比率が低い。そして時期幅を考えれば、さらに少ないということになり、貿易陶磁器に対する需要が高くなかった可能性もある（西山一九九四）。

北東日本海沿岸地域

ここでは、越前一乗谷朝倉館（福井県立朝倉氏遺跡資料館一九八四）、加州普正寺（石川県埋文一九八四）、能登西川島遺跡群（穴水町教委一九八七）、越後江上館（中条町教委一九九七・一九九九）、越後宝積寺館（新発田市教委一九九〇）、羽州藤島城・大楯（伊藤一九九七・一九八九）、津軽十三湊（鈴木一九九八）、津軽浪岡城（工藤一九九五）をとりあげる。

- ① 一乗谷朝倉館 1,627 片／8,195² $\mu=0.198$
- ② 普正寺 322／648=0.496
- ③ 西川島遺跡群（七） 805／8,946=0.089
- ④ 江上館 2,368／5,830=0.406
- ⑤ 宝積寺館 97／8,659=0.011
- ⑥ 藤島城 1,107／5,263=0.21
- ⑦ 大楯2次 289／4,615=0.062
- ⑧ 十三湊（八） 539／4,814=0.111
（同館部分 170／814=0.208）
- ⑨ 浪岡城内館 4,377／5,966=0.733
北館 3,936／15,000=0.262

朝倉館は、思ったほど多くないが、かえって武家屋敷（15次、1,371 片／2,400² $\mu=0.571$ ）や寺院（17次、2,830 片／2,050² $\mu=1.38$ ）、町屋（29次、1,956 片／3,200² $\mu=0.61$ 、36次、5,133 片／2,800² $\mu=1.833$ ）の方が比率が高く（小野一九八四）という逆転現象が生じている。確かに町屋で青磁碗の比率が高く、館や寺院で碗皿以外の器種構成比が高いとはいえ、総量では碗皿以外の器種のそれはほとんど変わらない。青磁碗皿以外の破片

数比は、館：218片／8,195^m＝0.026、町屋29次（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡一九九五）では、88片／3,200^m＝0.027となる。したがって一乗谷では、館よりも町屋の方が多くを消費していたことになる。このことは、戦国期の町衆の経済性を表しているように思われる。

一四世紀後半～一五世紀段階の普正寺・江上館は、非常に高い比率を示し、藤島城・十三湊（館）はその半分ほどである。なお浪岡城内館は、瀬戸大窯期にも存続するとはいえず、十三湊の館部分よりも高率を示すものと思われる。また同時期においても、貿易陶磁器をあまり出土しない宝積寺館のような例もある。これは、流通ルートから外れているのか、それとも別の意味があるのか興味深いところである（九）。

西川島は、中世前期では非常に比率が高いが、後期では相対的に低下する。したがって、遺跡の主体は前期にある。また、大楯も中世前期において突出した遺跡である。

畿内

畿内では、上田秀夫の根来寺（一九八四）、佐久間貴志の菱木下遺跡（一九八四）、百瀬正恒の上久世城ノ内遺跡（一九九八）の成果をみてみる。

①根来寺 NG80 2,215片／1,800^m＝1.23

NG81 1,789／1,600＝1¹/₁₁₈

②菱木下 68／8512.3＝0.007

③上久世城ノ内 132／約5,000＝0.026

③は②の3.7倍、①は③の45倍である。

根来寺の比率が高いが、これは3世紀にわたるものであり、一六世紀を含むという点で注意が必要である。

（3）政所条遺跡群（一〇）の貿易陶磁器量

ここでは、越後江上館を含む政所条遺跡群の貿易陶磁器を一四世紀後半以降とそれ以前（一一）に分けて、他地域と比較してみる。

江上館 前期① 30片／5,830^m＝0.005

後期② 2,330／5,830＝0.401

下町・坊城A 前期③ 260／8,826＝0.029

後期④ 457／8,826＝0.051

下町・坊城B 前期⑤ 74／7,682＝0.009

後期⑥ 609／7,682＝0.079

下町・坊城C 前期⑦ 685／8,979＝0.076

後期⑧ 1,432／8,979＝0.159

全体：5,885／31,317＝0.187

前期平均は0.029で、後期平均が0.172であるから、6倍程に増えていることがわかる。これは、中心地の対比（C地点⑦から館②へ）においてもほぼ同様である（5倍強）。ただし、前期に遺跡の薄い①と⑤を除いて考えれば、③と⑦の平均は0.052となり、3倍程度になる。この比率は、平泉・大楯と同程度の比率であるが、時期幅を考えると平泉の1／3程度ということになる。鎌倉からみると、1／20以下である。

後期では、館②と寺院⑥は、その前段階においてほとんど素地のない地点に設けられたことがわかる。最も集中度の高い館②は、それに次ぐC地点

の20倍であり、A・B地点の5〜8倍の物量に達している。館への集中は顕著で、各地の主要城館と比較しても非常に高率であることがわかる。これは、畿内の根来寺の1世紀あたりの比率と比較しても遜色がない数値である。なお、朝倉や浪岡城北館などからわかるように、一六世紀代に入ると領主館の求心性が拡散するような印象をうける。

このようにみると、一五世紀代の江上館の m^2 あたりの貿易陶磁器の出土破片数0.4という数字は、数字上のみかけでは鎌倉の $1/4 \sim 1/5$ 程度であるが、上述の時期的な流通量の格差を考えれば $1/20$ 程度の集中度に過ぎないことになる。とはいえその数値は、三世紀にわたる根来寺と比較しても遜色のあるものではないし、同じ地域の村落や東国の太平洋岸の流通量の数十倍に達していることも事実である。

(4) おわりに

実は今回提示した数字は、ほとんど意味をなさないかもしれない。それは、ごく一部の遺跡をもつて全体を推計していることは仕方ないとしても、地域ごとの遺跡数の根拠となる人口比と人口の中の各層の階級の構成比を追及していないことによる。人口が多ければ多いほど、消費に費えた陶磁器の量が多くなることは当然である。また、広い範囲にまたがる遺跡と狭い範囲に収まる遺跡では、 m^2 単位のもつ意味が異なるという問題が生じる。よって地域ごとの総量の算出はできなかったので、比率のみで対比してみた。「予察」と冠せざるをえない所以である。

次いで時期的に、一二〜一六世紀の遺跡を峻別していないこと。なるべく一六世紀後半以降に主体のくる遺跡は除外し、遺跡ごとに簡単な説明を加えたが、それでも鎌倉以前と以降で貿易陶磁器の総流通量が数倍に達していると考えられることから、その格差が考慮されねばならない。例えば、政所条遺跡群全体の比率では、5倍以上にも達しており、これに一般集落への普及分を加えれば、さらに格差は広がる。この趨勢が、全国的な総量比率を示しているかどうかは問題であり、多くの事例を集積する必要があるが、基本的には時期が下ることに全体的な貿易陶磁器量が減ることはなかったのではないかと思われる。ただし、遺跡の盛衰と陶磁器の流通量は比例すると考えられるものの、一二世紀前半以前や一四世紀半ばといった時期は、貿易陶磁器の流通量が限られており、入手困難な状況にあったものと思われる。前者は陶磁器の流通量がまだ限られていたし、後者は元末の混乱という中国側の事情によるものが大きかったためと考えられる。さらに一五世紀末〜一六世紀前半は、流通量こそ少なくはなかったものの、日常の食膳具類に対する「組物」としての需要が飛躍的に高まった結果(二)、不足が生じているように思われる。そしてそこに、瀬戸の生産体制(藤澤一九九七)の整備が重なってくることは偶然ではあるまい。瀬戸前期〜中期様式は、主に釉のかかった瓶類に対する需要を賄い、一四世紀後半以降は、天目茶碗を含む碗皿類中心の生産に移行している。そして一五世紀の第4四半期には、さらに碗皿(特に皿)の大量生産の傾向を強め、大窯へと転換するのである。

以上、貿易陶磁器の破片数から数字的に各地の遺跡を比較してきた。ひとりそのみから得られることは少ないが、いささかなりとも今後の踏石となれば幸いである。

註

(一)それがわかってきたのは、小野一九八四bに代表される30年来の貿易陶磁器研究会の活動によって、全国規模での様相が明らかとなってきたいることに負うところが大きい。

(二)その数少ない文献として、小野一九九一c・一九九七がある。ここでは、一乗谷の総遺物量などが試算されている。また小野は、たびたび全体の総量というものの必要性を説いている(例えばシンポジウム「貿易陶磁にみる日中関係と国内流通」での発言など。青山考古学会一九九五、八八頁)。

(三)破片数による比較の有効性は、馬淵一九九七を参照のこと。また宇野隆夫がいうように、「個体識別法は、適度の量までの一括遺物を計量する場合に適した方法」(宇野一九九二、一二五頁)である。「適度」というのがどれくらいになるのか示されていないのは、遺物の種類によって異なるためであろうが、経験的には口縁部計測法を中心に、20〜30個体前後まで個体識別できるのではないかと思われる。また、小範囲の発掘調査の場合、そこから求められる口縁部計測法による数値は、破片数が多くても個体数を求めると誤差が大きくなる(例えば、『江上館跡Ⅳ』(中条町教委一九九六)と『同Ⅴ』(中条町教委一九九七)の集計表を比較参照のこと)。そしてそれは、個体数の比率の精度に関して有効なのであって、実際の個体数に近付けるには、遺物の種類ごとに補正が必要なことを忘れてはならない。個人的には、口縁部計測法は、組成比を目的とする場合以外では、土器皿などの「大量であったり個々の個性が少なく個性識別が難しい資料に」(宇野一九九二、一二五頁)限った方が無難だと思う。

なお贅言すると、論文で各遺跡からの出土点数と百分率が記されている場合、面積が不明なものが多々認められた。報告書にあたればことは済むのであるが、そう簡単に入手できるものばかりでもないため、一寸記入をお願いしたいと思う。ただし、調査面積とひとことであっても、遺跡の中での使用状況には濃淡がある。したがって、なるべく広い範囲を調査したものが望ましいことはいまでもないが、都市遺跡では往々にしてそれが適わないため、平均化作業が必要となる。さらには、広い調査面積の中に占める中世遺跡の範囲等の問題がある。

(四)例えば破損率が1割とすると、流通分は9割となり、㎡あたりに換算すると108点となる。同様に3割とすると28点となる。

(五)白磁は貿易陶磁器全体の7割程を占め、その4〜5割ほどが瓶類である(山本一九九八)。

(六)以下については、時期的に数世紀にわたる遺跡があるが、その乗については省略する。

(七)なお西川島遺跡群では、御館・大町・縄手・桜町・白山橋遺跡に限った。

(八)十三湊の性格については、別稿を用意しているのでここでは簡単にふれるにとどめるが、宇野の位置付け(一九九八)には異議がある。それはまず、陶磁器の量が北東日本海沿岸地域の中核遺跡に比して、決して突出したものではなく、東アジア世界の中での十三湊の位置を過大評価しすぎではないかと思うからである。

(九)宝積寺館については、以前、二町四方という規模から、南北朝期の国大将である佐々木加治景綱の居館と考えたことがある(水澤一九九九a)。ただしその折りにも述べたが、地位に伴う遺物の量が少なく、それは今回の比較においてさらに明確となった。したがって、堀を巡らせて直ぐに没落したか、あるいは復郭構造を有するものと仮定し、調査の進展をまちたい。

(一〇)政所条遺跡群は、江上館とその周辺の下町・坊城遺跡からなる奥山荘中条の中心をなす遺跡群の総称である(水澤一九九九b・一九九九c)。

(一一)分別基準は、青磁・白磁とも端反り碗以降を後期とした。

(一二)これは、漆器において最も顕著であるが(四柳一九九七)、青磁稜花皿や白磁端反皿、青花端反皿も同様の動きを示すものと考えられる。ただし、個々においては、微妙に流通の搬入開始時期がずれるようであり、そのあたりは別稿を用意している。

1 一二世紀代の陶磁器流通

(1) 貿易陶磁器

現在日本海流通は、一三世紀前半以前においては、美保関を境としており、博多から北陸以北への直行ルートは考えられていない(吉岡一九九七)。すなわち北陸以北については、平安京経由と考えられているのである。しかるに日本海沿岸における貿易陶磁器の大量出土は、その見解に疑問を呈さざるをえない。吉岡康暢は、一二世紀後半～一四世紀前半に東北関東と中国・四国で中国陶磁の流通量に大差があったとは思えないとするが、例えば中世前期の鎌倉を除く太平洋岸と日本海岸の主要遺跡での貿易陶磁器の出土破片数/面積比を比較すると、彼我の差は少なく見積もっても一〇倍以上にもなる(水澤二〇〇〇a)。平安京経由だとすると、日本海側の流通量が太平洋側に比して格段に多いことを説明できない。博多に入った貿易陶磁器の多くは、一二世紀までは京を、一三世紀以降は京・鎌倉を目指したとはいえ、一定量は日本海を駆け下ったものがあつたと考えるべきであろう。よく日本列島の東と西が対比されることが多いが、日本海岸と太平洋岸の違いも非常に大きい。

では、具体的にみていこう。まず平清盛の大輪田泊への宋船引き入れ以前の平泉の白磁をはじめとする貿易陶磁器(八重樫一九九七)は、どのようなルートで持ち込まれたかを考えてみよう。平泉の貿易陶磁研究をリードしてきた八重樫忠朗は、渥美や常滑などと同様に太平洋岸ルートで持ち込まれたものと考えている(八重樫二〇〇二)。確かにその可能性もなくはないが、平安京以東の太平洋岸で白磁を多量に出土した遺跡(根拠はないが一応一〇〇片以上(一))としては、伊勢平氏関連の雲出島貫遺跡(三重県埋文二〇〇〇)、松本平の吉田川西遺跡(長野県教委一九八九)、伊豆菰山の御所の内遺跡(北条氏邸)、鎌倉(二)の大倉幕府周辺遺跡群があげられるが、鎌倉以東では管見に入つた遺跡はなく、著名な落川遺跡でさえ非常に出土量が少なく(福田ほか二〇〇四)、平泉への道程は遠い。

一方日本海沿岸では、石見国衙関連の古市遺跡・横路遺跡(浜田市教委一九九五・一九九七)、出雲国衙関連遺跡群(広江一九九八)・青木遺跡を始めとして、加賀国府周辺の漆町遺跡(垣内一九九三)、越中梅原胡摩堂遺跡(富山県文化振興財団一九九六)、越後国衙至徳寺遺跡(水澤・鶴巻二〇〇三)、越後沼垂湊関連の山木戸遺跡(笹澤・水澤二〇〇一註5、新潟市教委二〇〇四)、越後城家関連の政所条遺跡群(中条町教委二〇〇一)、大坪遺跡(新潟県教委二〇〇六)、会津陣が峯城跡(会津坂下町教委二〇〇五)、出羽観音寺廃寺(秋田県教委二〇〇一a)と国ごとに大量出土遺跡が存在している(三)。もちろん唐坊のあつた敦賀も含まれよう。また、丹波大内城(京都府埋文一九八四)の貿易陶磁器も、福知山の立地からいって、京との関係よりも日本海側の舞鶴や宮津、あるいは小浜との関係で入手したものと考えられよう。このように日本海沿岸諸国の国衙を始めとする遺跡からは、多量の白磁が出土している。博多からの白磁搬入ルートは、この分布(第1図)をみれば一目瞭然ではあるまいか。高麗青磁の出土状況もそれに矛盾しない(降矢二〇〇二)。

また京と北陸の間に位置する近江からまつた出土例がない(清水一九九一・一九九六)ことも、そのルートで貿易陶磁が運ばれていないことの傍証となる。なお、林文理は、有力寺社に帰属する交易集団(神人ら)が博多から瀬戸内海ルートを使い、唐物を日本各地へ販売していたとする(林一九九八)が、その輸送ルートに関する根拠は示されておらず、京行き物資はともかく、日本海ルートの存在は否定できないのではなからうか。もちろん、平泉における白山社・日吉社の存在から菅野成寛や鋤柄俊夫が説くように、比叡山く北陸く日本海への流通や京を中心とした荘園制的流通網の存在は明らかである(菅野一九九四、鋤柄二〇〇二a)が、こと該期の白磁に関しては、分布状況から畿内經由ルートを採用することは難しい。

さらに珠洲系陶器が平泉や岩手の経塚から出土している（岩手県博二〇〇〇）ことからすれば、日本海側からものがもたらされていることも明らかにである。また文献的にも、元永二年（一一一九）越後北端の小泉荘に平泉から撰関家への貢納品が運び込まれていたことがわかっている。このように平泉の繁栄は、出羽の清原と陸奥の安倍の遺産を引き継いだことにあるのであり、出羽なくして平泉は立ち行かないといっても過言ではなからう（四）。東海産陶器の存在から太平洋岸ルートを否定することはできないが、貿易陶磁器の搬入ルートの比重は日本海岸ルートにあったと考えられよう。

そして冒頭の大輪田泊への直行便は、それ以後の貿易陶磁器（もちろんこの時期は青磁が中心である）の搬入経路に影響を与え、その後の鎌倉への航路を開くことになる。といっても、すべてが鎌倉で消費されたわけではなく、日本海沿岸地域での青磁の出土状況は、前代の白磁に引き続き非常に盛んである。これは、おそらく一二世紀前半以前の白磁搬入段階では、古代の北陸道及び梅原胡摩堂遺跡の存在からみて、加賀より陸路をとり、富山湾へ出るルートであったと考えられるのに対し、一二世紀後半以降の青磁段階では、珠洲開窯に伴う陸路を経由しない能登半島廻りルートへ重心が移ったことにより、より大量の物資回送が可能になったことによるものと思われる（もちろん陸路が廃止されたわけではないが）。そしてそれは、能登から越中を経由せず越後以北へというルートの存在をも想定できる。この一二世紀後半以降の青磁の時代、確かに鎌倉からは大量の青磁が出土する。しかし、一步鎌倉をでた途端、その陰すらもみることができない程、貿易陶磁器の消費量は少ない（日本貿易陶磁器研究会一九九九）。彼らは貿易陶磁器を欲していなかったのか。そうではないだろう、わずかに出土するのである。鎌倉の生活様式に憧れつつ、果せなかったといえよう。鎌倉にすべてが吸い込まれるという、鎌倉ブラックホール論（河野一九九五）を思い出さずにはいられない。しかし、それをかなりの程度実現していた地域があった。どこあろう日本海沿岸地域である。もちろん鎌倉には及ばないが、地域の物流遺跡すなわち地頭館周辺あるいは流通拠点においては、太平洋側とはまったく異なる物の入り方が認められる（水澤二〇〇〇 a・c）。例えば一三世紀代の北東日本海岸をみれば、加賀堅田B遺跡（金沢市二〇〇四）、能登西川島遺跡群（穴水町教委一九八七）、越中梅原胡摩堂遺跡、越後の清水潟周辺の遺跡群（政所条遺跡群・住吉遺跡・ニツ割遺跡）、出羽大楯遺跡（伊藤ほか一九九六）・館堀遺跡（秋田県教委二〇〇一 b）といった貿易陶磁器を多量に出土する遺跡が挙げられる。以前より、非常に鎌倉的であるという評価がなされてきた出羽の大楯遺跡は、鎌倉的というよりも日本海的なのである。その点、北条家が日本海沿岸をまず押えたことは理由のあることであつたといえよう。その後、瀬戸内・太平洋沿岸を押えて承久の乱後に宗像社の預所や肥前神崎荘の地頭を得ていた三浦一族を打倒することによって、北条総領家が得宗化への道を歩むことになるのである（網野一九九〇）。

なお、貿易陶磁器の青磁劃花紋碗皿は、東日本では鎌倉の出方に引きずられて、一三世紀前半に位置付けられることが多かった。しかしその時期にも使われていたには違いない（鈴木一九九五）が、博多との時期差が五〇年もあることはありえず、正しく一二世紀後半に入り始めていたとせねばならない。この点については、別稿を準備しているのでここでは深くふれないが、平泉で相当量の青磁が出土していることを直視せねばならない。

（2）珠洲陶の開窯

珠洲陶は能登半島の先端の珠洲市に所在し、一二世紀中葉以降北東日本海沿岸地域に大量に搬入された無釉の焼物である（吉岡一九九四）。主要生産品は、甕・壺・播鉢の三点セットである。

この珠洲陶に関しては、これまで在地領主層がクローズアップされてきたが、近年の荘園研究の動向からみて（川端二〇〇二、高橋二〇〇四）、中央からの働きかけによる立荘がその開窯に関しても大きな影響力を有していたと考えなければならない。それは撰関家領荘園、なかんずく皇嘉門院領及びそれを継承した九条家領において顕著であり、河内楠葉牧の瓦器碗（五）は殿下渡領に含まれることからひとまずおくとしましても、能登若山荘の珠洲窯、肥前彼杵荘の石鍋などがあげられる。特に珠洲に関しては、一二世紀代の撰関家内部における主導権争いの中で、忠通が皇嘉門院領として一

四三年に立荘した若山荘との関係が見逃せない。

皇嘉門院領は、忠通が父忠実の意向―頼長への関白職の委譲―を拒絶してまで実子へと譲ろうとした布石であり、忠実―頼長ラインによる劣勢の中で事態を打開するための手段であった（橋本一九六四、元木二〇〇〇）。平治の乱直後に忠実より摂関家領を継承することになったとはいえ、それ以前の段階ではその荘園集積こそが忠通の生き残りをかけた戦略であったといえる（六）。そのような意図の下に集積された荘園であった場合、本所たる忠通の意向は、切なるものがあつたと思われる。

そして、北越窯の所在する越後国白河荘も皇嘉門院領として立荘されていることを偶然といえようか。その実行時期は、立荘の長承三年（一二三四）から二〇年ほどの仁平二年（一一五二）に至り、忠通が使者を派遣して検注を実施している時点にある（田村・矢田二〇〇三）。この時期、忠通は一一五〇年に父忠実による義絶・氏長者の剥奪を受け、保元の乱（一一五六）へと至る一触即発の状況にあり（元木二〇〇二）、その時点に検注を実施していることの意味を注視する必要がある。そして、この直接掌握をもって若山荘における珠洲窯のノウハウが伝えられたというのは、該期の窯が発見されていない現状では早計に過ぎようか。しかし同じ摂関家領といえども、忠実が集積した高陽院領に属する北方の奥山荘では開窯されていないのである。さらにいうと、寄進者側である越後城家では、すでに一一世紀段階で摂関家領荘園となっていた奥山荘を宗家の資永が継ぎ、その急死により宗家を継ぐことになった職助（長茂）が新たに皇嘉門院領荘園となった白河荘の現地管理者であつたことから考えて、摂関家内部の抗争に際して両面作戦をとっていたとも考えられよう。また、田村裕は、東福寺（七）との師弟関係から、九条家と白河荘華報寺との関係を推察している（田村・矢田二〇〇三）が、それは一二世紀中葉の皇嘉門院領以来の関係を引き継いだものと考えられる。そこから殺生禁断令を振りかざして（馬淵一九九八）、北越窯を経営した華報寺の姿が浮かび上がる。そして一二世紀後半段階では、奥山荘乙宝寺の宮禪師や会津恵日寺の乗丹坊のように、城一族が住持となり、聖域をも手中に収めたものと思われる（水澤二〇〇一b）。

なお珠洲との関係を考える上で見逃せない珠洲で焼かれた磚佛の同范品が集中的に出土している兵庫県揖保川下流域の新宮町を中心とした地域（吉岡一九九四）は、播磨国越部荘にあたり、鳥羽院御願寺領（大治四年一一二九）とされる（平凡社一九九九）が、もともと摂関家領であつたとされる（三藤一九九七）ことから、摂関家と庶流である預所の御子左流との関係によって理解できよう。特に珠洲開窯期の一二世紀中葉における俊成と忠通との関係は、美福門院を仲介とした近しい関係にあり（元木二〇〇二）、その関係によつてもたらされたものと考えられる。また、次代の定家と皇嘉門院領を継承した九条家との密接な関係（村山一九六二）からも敷衍することができよう。

註

（一）ただし同じ一〇〇片といえども、調査面積比を出すとのおのずと流通量に差があることはいうまでもない。大雑把にいうと、①一〇²m以下である場合、②数一〇〇²mである場合、③数一〇〇〇²mで出る場合に分けられ、①は博多のみである。②は西日本の国衙であり（平安京は詳細な数値がでていないものがないので不明であるが、このグループに入るかと思われる）、③は東日本各地となり、遠くにいくに従い流通量が減るという当然の結果になっている。

（二）鎌倉については、義朝以前に都市として成立していたとされる（野口一九九三）が、源氏館が所在していたとされる寿福寺近辺の発掘調査がほとんど行われていない現状では、その可否を判断できない。

（三）なお、加賀国府推定地の古府遺跡では、一二三二平方メートルという小発掘面積にもかかわらず五〇片もの白磁が出土しており（藤田・滝川一九九二）、加賀での集中が認められる（垣内一九九三）。また、越後でも信濃川河口から一〇〇kmも上流の十日町市河原田遺跡（阿部・石原一九九二）で

五〇片以上の出土をみており、内水面交通の事例として注目される。

(四)清衡に後三年の役で敵対した武衡の血筋をひくとする城資永は、秋田城の官職を名乗りとされていることから、出羽の正統後継者としての意識を強くもっていたと考えられる(水澤二〇〇一a)。そして、二代基衡と争った小館は清原の出であったとすると、越後へ逃れようとしたのも越後平氏城家を頼ろうとした行動であった可能性があろう。なお清衡の正妻である北方平氏もまた城家の出であった可能性があり(川島二〇〇二)では常陸平氏とするが越後平氏の可能性も否定できない)、小館を応援していたが故に平泉を去らざるをえなかったとも考えられよう。そして小館がよった国館も出羽国府であったと考えたほうが理解しやすく、陸奥に対する出羽―越後という構図は、平泉の時代にも顕著であったといえる。

(五)橋本久和は、特に九州西海岸の松浦党に関する松浦市宮ノ下り遺跡から楠葉型が出土することの意義を三浦圭一の所論を引きつつ摂津の渡部党との関連でとらえ、摂関家との関係を示すものとした(橋本一九九二)。しかしその張本は、摂津源氏が右馬允などの牧を管理する馬寮の官人についていたこと(網野一九九二)との関係をも重視すべきものと思われる。そこから楠葉牧との関係が生じ、松浦へと瓦器碗が運ばれたものと考えたい。船を介した牧(馬)ネットワークといえようか。

(六)その後も皇嘉門院領は一つのまとまりとして、一二世紀末以降に九条家に伝領されることになり、近衛家領とは別の扱いが必要である。なお、摂関家を上にいただく荘園の場合、それは領主層だけの問題ではない(高橋二〇〇四)。領域を区切られ、そこに生活する人々もまた摂関家領荘園の民としての意識を抱いていたことは容易に想像される。ことに国衙から遠く離れた越後阿賀北の荘園の場合、摂関家の威光は荘民に有利に働いたと思われる、強大な武力を擁する現地勢力である城家の存在と併せて、国衙使の入部を拒むことに成功したのではなかろうか。この荘民の視点からの考察については、調査の進展をまって再考したい。

(七)東福寺はいうまでもなく一三三二年に沈んだとされる新安沖沈船の派遣主体であり(川添一九九三)、末寺の博多承天寺(釣寂庵)・管崎宮と共に九条家が物流を握っていた証査となる。

2 至徳寺遺跡の遺物様相

(1) 貿易陶磁器の搬入時期(第2図)

至徳寺遺跡に貿易陶磁器が最初に持ち込まれ、廃棄されたのは、一一世紀初頭頃のことと、SK四七四から皿と碗が出土している。ともに青みがかった釉調で、該期の特徴を表している。この二点については、越後で初めての確認例であるため説明する。

皿14は、口径二三・八cm、器高三・二cm、高台径六・三cmを測り、高台の七割が遺存している。胎土は白く光沢があり、釉はほぼ高台側までかかる。低くがつしりした高台を有しており、高台内を浅く削り出し、端部外側を斜に削っている。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁をやや外反ぎみに収めている。見込みには沈線をめぐるせており、釉の表面に氷裂が入る。

碗15は、口縁部片で、口径一五・六cmを測る。器壁が薄く、端部を折り返して扁平な玉縁としている。釉は表面にややムラがあり、胎土は密でなく軽い質感である。

続く時期には、外の遺物との共存関係が認められないものの、一一世紀後半の白磁碗V類や小型碗・坏などが出土している。

そして量的に安定して搬入され始めるのは、一一世紀末頃からで、白磁碗II・IV類、白磁皿I・III・XIII類などが一二世紀前半にかけて入ってきている。なお、SK一一九から出土している有台皿を始め、一一世紀後半代の多様なタイプの白磁がみられることは、遺跡の性格を考える上で非常に注目されることである。

一二世紀中葉には、白磁皿II類が加わり、ほどなく珠洲も入るようになる。

さらに一二世紀後半のSK二八の時期になると、ここに白磁碗VII類が加わり、青磁劃花紋碗が登場する。この青磁は、一二世紀いっぱいには4b・4c類のみで、体部内面を区画する4d類は認められない。

一三世紀初頭のSK六三四からは、白磁・珠洲に加え、青磁劃花紋碗4d類・同安技法の皿2b類が出現する。なお、青磁鎬蓮弁紋碗6a類の体部小片が出土しているが、早い事例であり、類例をまちたい。

一三世紀前半には、白磁碗IX類が現れ、その頃になると白磁碗の出土が減少してくるようになると思われる。

一三世紀中葉のSK四七〇からは、青磁鎬蓮弁紋碗6a類及び鎬のない6b類が伴い、口禿の白磁皿XII類の出土が認められる。本遺跡において、口禿の白磁の出土は非常に少なく、本段階以降、遺跡の性格が変化したと考えられる。なお、それに比して青磁鎬蓮弁紋碗の出土点数は多く、先のSX六三四と併せて白磁の口禿よりも早い段階で鎬蓮弁紋タイプの青磁碗が搬入されていたという、博多・大宰府での詳細が、ここでもシンクロしていることは重要である。

(2) 遺物点数からみた遺跡の性格(表3)

ここでは、白磁、青白磁、青磁、青花、その外の貿易陶磁、瀬戸の順で出土破片点数を提示することを眼目とし、そこから遺跡の性格を考えることとしたい。

白磁は、口禿以前のものが突出しており、特に定窯系の伝世品の存在とII類の多さには注目される。対して、鎌倉的なセットを構成する口禿は、ごくわずかである。次いで内湾・腰折れ皿が多く、後続する外反皿も定量認められる。

青磁は、劃花が鎬蓮弁よりも多い。これは、白磁の口禿の少なさに対応するものであるが、それほどの落差は認められない。あるいは、なんらかの

選択が働いている可能性もある。次いで、端反碗以降は、各器種が揃う。また、碗皿以外の器種が半数近くを占めていることが注目される。

青花は、元青花・釉裏紅の存在が注目されるが、全体には多くなく、七割を端反皿が占める。

その他の貿易陶磁器としては、緑釉盤や青白磁梅瓶・水注・合子、褐釉壺、多数の天目茶碗など各種が揃っている。

これらの貿易陶磁器に比して、瀬戸は非常に少ない。それは、一割にも満たない数量であり、大宰期のもも目立つほどではない。

以上のような貿易陶磁器の様相から、中世後半については、守護所という見解があり、元青花や釉裏紅、青磁酒海壺等の威信財がそれを裏付けている。そして多くの遺物を出土した火災整理土坑は、一六世紀初頭の永正の乱の戦後処理に伴うものと考えられており、その一括性は瞠目される。しかし、その後の遺物は少なく、いったん廃絶したものと思われる。そしてそのことは、伝至徳寺の京都系土器の搬入時期がそれ以前に求められることも意味している。

対して伝至徳寺の中世前期については、これまで具体的に言及されることはほとんどなかったが、その重要性は、後期を凌駕するものと思われる。それは、大量の土器に灰釉陶器・貿易陶磁器・珠洲（一）などが伴っており、全国的にも不明瞭な一一世紀から一三世紀に及ぶ土器様相が遺構単位で明確に位置付けられる資料群が存在しているからである。また、それは同時に北陸における貿易陶磁器の搬入時期が押さえられるということでもある。このような遺跡は、全国的にみても博多などごく少数しか認められない。

そしてこの口禿以前の白磁五二四（二）点という数字は、県内随一であり、一一～一二世紀にかけてコンスタントに白磁が搬入され続けていたことがわかる。そして、そこに大量の土器群の存在をみると、かかる場所が非常なる権力の所在地であることに何人も異論はなからう。

どのような遺構構成にこれらの遺物が伴うのかが興味深いところであるが、現在のところ一二世紀以前の遺物群は、中世後期の南堀の周辺（C・F区）に多いことを指摘できるのみである。今後整理が進むにしたがって、中世前期の国衙と中世後期の守護所の様相がみえる希有の遺跡であることが判明するものと思われる。

註

（一）珠洲をカウントする余裕はなかったが、I・II期のものが多数を占めるように思われた。

（二）それに次ぐものとして、奥山荘の政所条遺跡群（中条町）での出土例一八四点（約三一、〇〇〇㎡調査）がある。これらは越後平氏城家にかかわる遺跡と考えられるが、伝至徳寺の三分の一強の点数であり、土器の廃棄土坑も認められなかった。

なお、新潟市山木戸遺跡では、約二〇〇〇㎡という調査面積にもかかわらず一六四点もの口禿出現以前の白磁が出土している。この出土比率の高さは、おそらく国津である蒲原津あるいは沼垂湊に関連する遺跡であったためと考えられる。なお土器の出土は、非常に少ない。また口禿の白磁の出土がわずかに一点と限られていることは、至徳寺遺跡と共通した様相であり、その盛衰が一致していることは、越後中世史とのかかわりで注目されるところである。

3 出土層位からみた鎌倉遺跡群の遺物様相

(1)はじめに

ここで鎌倉を採り上げる理由は、鎌倉時代の陶磁器は、その中心地である鎌倉からみるというしごく当然の理由である。これまで、その膨大から敬遠されてきたことは否めないが、調査団ごと、すなわち報告書ごとに年代観が異なっており、統一されていないことも大きな要因であろう。もちろん多くの先達が幾多の意見を述べているのであるが、その多くは最も多量に出土する土器に関するものである。

ここでは、地域性が生じる土器をひとまずおき、鎌倉以外でも普遍的に出土する貿易陶磁器の碗皿類を対象として議論を組み立てていきたい。

(2)鎌倉遺跡群の層位的遺物出土状況

ここで扱って立つのは、報告書の記載である。とりあえず各報告者の年代観は横目でみつつ、層ごとのものの出方を検討していく。

まず報告書は、層位的な報告がなされているものと、そうでないものに大別し、前者を対象とした。

鎌倉では、 1m^2 あたり一点以上の貿易陶磁器の出土が認められる(水澤二〇〇〇)が、それが数時期の生活面からの合計数であることを考えれば、面単位ではその数割程度の数量が出土していることになる。もちろん面ごとに出土量が異なるので一概にはいえないものの、面単位では全体より減少することは確かである。

次いで、新製品(新商品)が搬入された場合、それが全体の中に占める割合は不明であり、さらに廃棄される比率も不明である。しかし新しい製品が持ち込まれたからといって、従来製品をすべて廃棄することはなからうし、また特殊な製品を除けば一点のみの搬入というのも考えがたい。仮に全体に占める新製品の比率を1割とした場合、100点中10点となり、まもなく壊れて廃棄されるのがその内の数点ということとなる。ただし破損した場合、破片数は器種によって異なるが10点以上にはなるので、廃棄破片数と新製品の搬入比は近いものと仮定しておく。

そこで、新製品がその面(層)から出土する確率は、全体に占める新製品の比率を仮に1割とした場合、三面ある場合、面ごとに 3m^2 あたり一点、 30m^2 あたり10点となるから、 30m^2 あたりに新製品が数点含まれてくる計算になる。五面ある場合、面ごとに 5m^2 あたり一点、 50m^2 あたり10点となるから、 50m^2 あたりに新製品が数点となる。もちろんここで仮に示した新製品占有率1割、破損率数割、破片化率10倍という数値は、場合によって異なるから、全くの仮想にすぎないが、ここではかなり低い数値と想定する 50m^2 を調査した場合に新製品の破片が数点出土するという予測の下に、それ以上の調査面積をもつ発掘調査を対象とした。

そして最下層からの遺物組成によって、三大別五細別した。具体的には、下記のとおりである。

- 1群 最下層より青磁劃花紋・同安を出土し、青磁鎬蓮弁紋を含まない調査例(表4)
- 2・1群 最下層より青磁鎬蓮弁紋を出土し、白磁口禿を含まない調査例(表5-1)
- 2・2群 最下層より青磁鎬蓮弁紋を出土し、白磁口禿を含まず、青磁劃花紋・同安を調査地内より全く出土しない調査例(表5-2)
- 3・1群 最下層より白磁口禿を出土する調査例(表6-1)
- 3・2群 最下層より白磁口禿を出土し、青磁劃花紋・同安を調査地内より全く出土しない調査例(表6-2)

ここから判明することは、1群は青磁鎬蓮弁紋搬入以前から存在していた遺跡。2群は、青磁鎬蓮弁紋搬入以降、白磁口禿以前に成立した遺跡(一)。3群は、白磁口禿以後に成立した遺跡ということになる。もちろん下層を完全に壊している遺跡もあるかと思われるが、それは層位的には検証できな

い。また2・2・3・2群は、それぞれの中で青磁劃花紋・同安を調査地内より全く出土しない調査例であり、遺跡の上限がさらに限定されよう。分布傾向をみると、1群の遺跡は、大町大路から長谷小路の北側、国道134号線の北にのみ分布しており、鶴岡八幡宮の周辺に比較的多く認められる(第3図)。

2群の遺跡は、前浜へと近づき、狭義の鎌倉の外へも遺跡が認められるようになる(第4図)。

3群の遺跡は、鎌倉全域に広がり、中世都市鎌倉の繁栄を物語る。強いていえば、山際や山間まで開発が及んでいることがみてとれようか(第5図)。

(3)貿易陶磁器とてづくね成形土器の関係

ここでは、上の表をもとに作成した貿易陶磁器とてづくね成形土器(以下てづくね土器と省略する)の関係を示した表7から両者の関係をみていく。表4対照表からわかることは、青磁鎚蓮弁紋出現以降、白磁口禿出現以前までは、てづくね土器が多数認められ、口禿が出現してからもわずかに認められるということ。

表5対照表からは、表1を追認しつつも、10・11の事例より口禿出現以降にもてづくね土器が多数出土する場合がある。(註1)

表6対照表からは、口禿出現期以降にもてづくね土器が使われていたことが明らかで、12・17・19・26・27・28・31などの事例から少なくともその最初期においては、まだかなり用いられていたといえる。それは、青磁劃花紋等を出土しない最も新しいと考えられる表6―2の遺跡群においても、わずかにてづくね土器が出土することからもいえる。

次いで、細分の行われることのなかった白磁口禿の様相にもふれておく。ただし数量的な関係から、皿を対象とする。

まず最も充実した出土量をほこる表4―2『今小路西遺跡』からみていく。量的にまとまっている南谷4面(図480)・3面(図452)・2面(図260)・1面(図69)を対象とする。なお4面は、表7(4―2)のとおり、わずかにてづくね土器を含む段階であり、以上はロクロ成形土器のみとなる。

口径では、明瞭な変化はないが、径高指数(高/口径×100)では、4面で30を超えるものが認められないのに対し、3面・2面では20〜25の間サイズがなくなり、25〜30の身の深いタイプと20以下の扁平なタイプに二極化する。層位的には、4面・3面が連続しており、3面と2面との間には数10cmの間層が存在しているが、様相的には3面・2面で明瞭な変化は認められない。また、口縁部以外に体外下半〜底部に釉がかからないⅩ・3類(博多分類、森本一九九七)は、腰が丸みを帯びて身が深いものが多く、扁平なタイプは認められない。

この変化は、第14図(3・11)『佐助ヶ谷遺跡』でも認められる。すなわちわずかにてづくね土器を含む第8期及びその次の第7期が、今小路西遺跡の4面に相当し、第5期になると深身のタイプのみとなり、これが今小路西遺跡の3・2面に相当するのではないかと思われる。

(4)貿易陶磁器の搬入時期

ここでは、これまでメルクマールとしてきた貿易陶磁器である青磁劃花紋・同安、青磁鎚蓮弁紋、白磁口禿の碗皿の初現時期を整理しておく。なおここで問題とするのは、あくまで初現期であり、当然搬入・使用のピークはその後に来、遺跡での出方から経験的にみれば、初現期から数十年を経て七、八十年後にはほぼみられなくなる。当然、流通期間は、器種・搬入量により長短があることはいうまでもない。

また、湊と集散地遺跡と消費地では様相が異なることも当然ありうるが、量の多寡はあろうが、出現の時期差はほとんどないといってよからう(大庭二〇〇四)。

例えば、草戸千軒遺跡の輸入陶磁器の出方(鈴木一九九五・一九九六・二〇〇二)からみると、各層から古手の劃花紋碗が出土していることも納得

される。それは、従来漠然といわれてきた天地返しによるものもあるが、多くは破損した時点で廃棄されたものと考えられる。この考え方でみれば、下層で白磁口禿が出土しているながら、上層から青磁劃花紋が出土するという鎌倉の状況も理解されよう。もちろん単純に草戸千軒と鎌倉を比較することはできないが、搬入された器物が廃棄されるまでには、ある程度の期間が存在し、主体かどうかは検討の余地があるが、青磁Ⅲ類が鎌倉未まで多量に使用され廃棄され続けていたことも事実であろう。例え新安沈没船にⅢ類がほとんど積まれておらず、中国での生産が終了していたとしても、Ⅲ類は当時の日本で多量に使われ続けていたのである。

そこで、各タイプの貿易陶磁器がいつから入ってくるかであるが、各地の状況からみていこう。

青磁劃花紋

橋本久和は瀬戸内・京都辺りでは一二世紀第4四半期頃とする(橋本二〇〇〇)。一七〇年頃とされる平安京Ⅵ期新の遺構であるSD222・255では、白磁46点に対し青磁2点と非常に限られており、平安京への青磁の入り方を考え合わせると、青磁の本格的な流入は一二世紀第4四半期と考えるのが妥当であろう。

博多の佐藤一郎は、一二世紀第1四半期とされる(佐藤二〇〇〇)が、一一八九年滅亡の平泉から相当量の出土が認められることから、それ以前に遡ることは確実である。

その平泉では、劃花紋が一一五〇年から一二世紀第3四半期の中頃、同安が一二世紀第4四半期前半とされる(八重樫一九九六)。なお、羽柴直人の土器編年(羽柴二〇〇一)では、一一六一〜一一七五年に位置付けられる遺構からの青磁劃花紋碗の出土が認められる(岩手県文振事業団一九九五)。

大宰府では、劃花紋・同安を出土し始めるSK1204の時期に一一五〇年頃の年代を充てているが、相対的な年代観である(横田・森田一九七八)。したがって、鎌倉開府の一二世紀第4四半期の時点では、青磁劃花・同安が主体的に搬入されていたことになる(二)。例えば、報告書(一九九七)では明言されていないが、鎌倉スポーツクラブ建設に伴う若宮大路周辺遺跡の調査では、同安技法の青磁が280個体も出土しており(宮田一九九四)、その量の多さに驚かされる。

青磁鎬蓮弁紋

近年、鎬蓮弁紋について、鎬の幅が広いものから細いものへと変化していくことが指摘され(森一九九八・二〇〇〇)ているが、前者の搬入時期については、一二世紀初頭頃と考えられている。

大宰府では、33次調査SD66より貞応三年(一二二四)銘木簡とともに出土しており、定点資料となる(九歴一九七五)。

博多では、44次SE47よりの出土があり、一二世紀第2四半期に位置付けられている(佐藤二〇〇〇)。

なお、幅が狭いタイプへの変換は、博多62次713号遺構から幅狭の鎬蓮弁紋碗に文永二年(一二六五)と墨書された資料が出土していることから(大庭一九九七)、それ以前に生じた現象と考えられる。

なお、日本に入ってくる細高台鎬蓮弁(無)紋Ⅲ類は、白磁口禿碗皿と共にもたらされており、森達也は幅広の鎬蓮弁紋碗皿でⅢ類の特徴の細高台をもつ一二世紀前半の製品は、ほとんどみられないとする(森二〇〇〇)が、大宰府19次SK004出土資料を自ら引用しているし、越後でも坊城館跡より出土が認められる(中条町教委二〇〇五)ことからすれば、量的には限られているとはいえ、角高台とともに若干数はもたらされていると考えられよう。

よって、青磁鎬蓮弁紋製品の搬入は、確実なところで一二世紀前半の一二二〇年代となる。したがって、鎬蓮弁紋碗が最下層より出土する遺跡は、頼朝の鎌倉入から四〇年ほどが経過し、源家三代の時代が終わり、承久の乱以降に形成された遺跡ということになる。

白磁口禿

大宰府では、白磁口禿が出土し始める 33 次 SK601 の段階である一二世紀中頃の年代を充てているが、相対的な年代観である（横田・森田一九七八）。山本信夫は、一二三〇年頃を出現期としているが、その根拠は、報告書（九歴一九七五）やその後の報告（森田一九八六）では示されていないが、上の 33 次調査 SD605 最下層より貞応三年（一二二四）銘木簡とともに出土した遺物の中より確認されたというもの（山本一九九〇）である。紛れ込みの危険性もあり、類例が外にない現状では確実とはいいたため、資料の追加集積をまつこととし、ここでは採らない。

博多では、上の大宰府 SK601 並行とされる築港線 2 次 411 号土坑より出土し始める（佐藤二〇〇〇）。ちなみに青磁Ⅲ類も同様とされるが、この段階で鎬が細くなった段階のⅢ類が大量に入り始めるのであって、少量ながらそれ以前より幅広蓮弁のⅢ類が入っていることはすでに指摘した。また、細鎬蓮弁紋も同時期に認められ、既述の文永二年銘資料から一二六〇年頃を変換期とする意見もある（森二〇〇〇）。したがって、白磁口禿は、一二世紀第 3 四半期の早い段階で将来されたものと考えられる。この時期は、北条時頼以降の鎌倉の最盛期にあたり、該当する遺跡の数が最も多い。

このように、鎌倉期の貿易陶磁器は、青磁劃花紋・同安技法（一二世紀後半）→青磁鎬蓮弁紋（一二二〇年代）→白磁口禿（一二五〇年以降）が順次搬入されてきたということがいえる。このことは、貿易陶磁器がコンスタントに入ってきている日本海沿岸地域においても認められ（水澤・鶴巻二〇〇三・水澤二〇〇五）、当然ながら列島規模で同時進行した現象と考えられる。

（5）まとめ

以上、鎌倉における出土遺物の層位的検討を行ってきた。ここでは、以下のことを明らかにできたものとする。

- ・青磁鎬蓮弁紋の蓮弁幅が広い古手のもの（一二二〇～五〇頃）は、てづくね土器と共存する。
- ・鎌倉におけるてづくね土器の消滅は、白磁口禿製品の搬入以後しばらくしてからであり、一二世紀第 3 四半期の内に完全にロクロ成形土器へと移行したと考えられる。

・最初期の一二世紀第 3 四半期の白磁口禿皿は、径高指数 30 を超える深身のものが認められず、ばらつきが多いが、その後径高指数 25～30 の身の深いタイプと 20 以下の扁平なタイプに二極分化する。また、Ⅱ・3 類には、身の深いものが多く、扁平なタイプは認められない。

註

（1）表 5 対照表 てづくねの出土していない 8・12 は、たまたま最下層より口禿が出土しなかったものであり、表 6 対照表の 14・15・18・21・24・30・32・33・35 と てづくね土器を出土しない遺跡と同列に扱うべき調査事例である。

（2）（1）では言及できなかったが、鎌倉遺跡群における口禿以前の白磁の有無は、遺跡の初現期とかかわる。すなわち白磁がかなりの量出土する遺跡は、その始まりが一二世紀代にあるということである。鎌倉の場合そういった遺跡は、大倉幕府近辺に多く認められるように思われる。すなわち一二世紀末の段階で鎌倉に集まった人々は、白磁を持ち寄ることができたのであり、もちろん青磁劃花紋が多数を占めていたとしても、一定量の白磁は、この段階では用いられていたものである。そしてすでに述べたように、青磁劃花紋は、数量を減じるとはいえ鎌倉時代を通じて出土しているのであり、鎬蓮弁紋が主体となって以降も壊れるまでは使われ続けられていたのである。

なお近年、中世以前の鎌倉について海上ルート上の位置付けがなされ（平川二〇〇四）、白磁のルートもそれに沿っていることが想定される。

第三節 中世後期の貿易陶磁器

1 一五世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相

(1)はじめに

先般、『明代前半期陶瓷器の研究』（亀井編二〇〇二）に接した（以下、報告書という）。この報告書は、副題に「首里城京の内SK01出土品」とあるように、その出土品に対する考証を中国・日本の出土資料やトプカプサライ博物館を始めとする各地の所蔵品等を用いて行われたものである。したがって、各地の図・写真とともに斯界を裨益するところは極めて大きい。

筆者は、以前一五世紀中葉～後半における北東日本海沿岸地域への貿易陶磁器等の搬入時期を検討したことがあった（本節第二項、以下前稿とする）が、京都系土器の搬入時期に重点を置いたため、貿易陶磁器への説明が不足していたことは否めない。そこで今回は、その前段にあたる一五世紀前葉～中葉の貿易陶磁器様相を含めて検討したいと考えたのであるが、そのためには上記の報告書は避けて通れないところであり、以下その問題点について検討しつつ、論を進めたい。

なお、報告書は二〇〇〇年度の演習報告に基づいており、前稿は一九九九年末に脱稿したものであるため、その後の成果を取り入れつつ進めることとする。

(2)首里城京の内SK01出土陶磁器の下限について

京の内SK01出土陶磁器については、文献にある一四五九年の失火に伴うものという調査者の金城亀信の所説（金城一九九八・二〇〇一）をうけた、一五世紀前半代の標識資料とする亀井明徳の説がある（亀井二〇〇二）。下限年代についてみると、亀井は、青花の年代を永楽から天順（一四五七）の間と推定し、景泰五（一四五四）年銘青磁刻花牡丹文瓶との類似性を指摘、さらに類似する組み合わせをもつ遺物群として福井県興行寺遺跡第二面出土品を傍証としてあげ、一五世紀前半の根拠とした。そして、結論的には金城の説を支持し、本資料を一五世紀前半・中葉に位置付けた。本稿の目的は、この一五世紀前半～中葉の貿易陶磁器様相の細分にある。

最初に訂正しておかねばならないのは、その年代的根拠としてたびたび引用されている興行寺遺跡第二面炭化物層出土遺物についてである。調査者の富山正明は、一五世紀前半（第2四半期）に位置づけており（富山一九九二・一九九三・一九九七・二〇〇一）、筆者も前稿ではそれにしたがった。

しかし、合併している瀬戸陶（富山一九九二・一九九七）をみると、その下限は瀬戸後IV期新段階（藤澤良祐教示）であり、最新稿（富山二〇〇一）においては青磁篋線描蓮弁紋碗（B3）の存在も明らかにされていることから、一五世紀後半（第3四半期か）の火災時に伴う資料群であることとなる（第6図）。したがって、興行寺との類似性を傍証として用いる限りにおいて、一五世紀前半というよりは中葉、一四五〇年代以降の生産年代をもつ製品をも相当数含んでいると考えざるを得ない。すなわち、首里城京の内SK01出土資料と共通性が高いということからみて、その終末である一四五九年に近い時期のものが主体を占める資料群であると考えられるのである。

(3)北東日本海沿岸地域の貿易陶磁器様相

そこでその妥当性を検証するために、首里城京の内SK01出土品に加えて、北東日本海沿岸地域の遺構一括出土品を中心とした資料をとりあげる。

その理由としては、「明代の一五世紀前半から中葉の時期は、中国陶磁器の国外の輸出が減少し、わが国はもとより、アジアの諸地域からの出土資料がほとんど姿をけし」（亀井編二〇〇二、はじめに）たとされた認識に対する疑問である。

その時期についての他地域の様相は、おそらく日本海沿岸地域についてはあてはまらないのではないと思われる。該期を含む一四世紀末から一六世紀初頭にかけての時期は、日本海沿岸地域に最も多量に貿易陶磁器が流通していた時期であるからである（水澤一九九九）。

そして、本稿で行おうとする遺跡ごと出土する貿易陶磁器の種類を抽出する方法については、亀井明徳の先駆的な業績（亀井一九八〇）や大橋康二が尻八館の報告書で試みた（青森県郷土館一九八一）のを始めとして、貿易陶磁器の編年の枠組みを定めてきた一九八一年の『貿易陶磁研究』創刊以来のオーソドックスな手法であり、近年では工藤清泰や藤澤良祐が試みており、より精緻な様相が明らかとなってきた（工藤二〇〇〇、藤澤二〇〇〇）。ここではそれらを応用しつつ、該期の遺構単位での一括資料に主眼を置いて、前稿の続論を展開する。また、貫井美鈴による十三湊遺跡と普正寺遺跡の対比による考察（貫井二〇〇〇）は、本論と深くかかわってくるため、ぜひ一読願いたい。

なお本稿では、袋物等の息の長い資料は除外し、多数を占める碗皿に主眼をおいて取上げることとする。対象とする磁器は、以下の通りであり、（一）内の従来の分類よりかなり細分した（第7・8図）。これらはいずれ、中世全体を通して分類する必要があるため、便宜的に19種を抽出したものである。そして各器種には、結論を先取りして説明を加えている。

挿図は、各典拠の報告書から宿率を整えて（S11/4）転載し、大型製品は（S11/8）としたが、報告書や前稿などに所載の遺物群を省略したものがある。

白磁 (W)

- ① 端反碗 (C群) 金武正紀がビロースクタイプⅠ・Ⅱ類の設定時にそれより時期が下るものとして位置付けたⅥ類外反碗をさす（金武一九八八）。口縁が反り、がつしりした角高台がつく。釉調は、灰く水色を呈する。沖縄以外では、十三湊遺跡で多量の出土が認められるが、外の遺跡では数個体の出土が多い。一四世紀後半が搬入のピークであると考えられる（貫井二〇〇〇）が、瀬戸後Ⅲ期頃まで使用されている。
- ② 腰折坏 (D群) 枢府系の流れをくむ腰折れの小坏。口縁は、外反ぎみに開くものが多い。一五世紀中葉頃まで出土が認められる。
- ③ 内湾皿平高台 (D群) 一五世紀代において最も普遍的な白磁皿。時期が下るほど口径が縮小する。一五世紀第1四半期までは口径が10cmを越えており、中葉になると10cmを切るものが多くなる。数が多いだけに、④などとともに一六世紀代の遺跡からも出土する場合がある。
- ④ 内湾皿挟高台 (D群) 瀬戸後Ⅳ期古段階に入る前後から現れてくるタイプで、高台を4単位に挟むもの。まれに3単位のものがある。重ね焼きを前提とした技法である。十三湊遺跡の火事場整理遺構（一四三二年）以前の遺構からは出土しない。
- ⑤ 挟高台全面施釉皿 (D群) ③④は、外面下半あるいは高台内は施釉されなかったが、⑥は全面に施釉され高台を挟むタイプである。口縁は直に開くものが多いが、内湾するものもある。④⑤に比して数が少ない。瀬戸後Ⅳ期新段階に出現する。
- ⑥ 八角坏 (D群) ④と同時期に出現する体部を面取りする小坏。まれに七角や九角のものもある。高台も平高台と挟高台があり、内湾皿③④と連動している。
- ⑦ 端反坏 (腰丸E群) 腰が丸みを帯びて立ち上がる小坏。口縁は内湾するものと外反するものがあるため、将来細分されよう。⑥の体部の面トリを省略した小坏ともいえよう。②に代わるように出現し、一六世紀代まで残る。相似形をなす碗も同時期の所産と考えられる。
- ⑧ 端反角高台皿 口縁外反で、低くがつしりした角高台をもち、見込みを輪剥ぎする。体外半釉で、釉調は灰くオリーブ色を呈する。釉の端部が赤く発色しているものがある。一五世紀中葉頃の出土例が多い（後述）。

青花 (BW)

- ⑨ 碗 (端反主体) 端反りのものが多いが、直縁のものも少数認められる。瀬戸後Ⅳ期古段階後半から搬入が始まる。
- ⑩ 端反皿 (B1群) 端反りの皿で、碗よりも搬入時期が遅れる。瀬戸後Ⅳ期新段階頃から認められるが、青磁山形線描蓮弁紋碗 (B4群) や稜花皿、白磁端反皿 (E群) よりも出現は早い。なお、首里城京の内SK01や端反かどうか確認できないが江上館 (7) では口径が20 cmを越える大型品が出土しているが、通常の15 cm前後の製品は出土していない。これは、青磁稜花皿も同様であり、それらが小型化し、量産されるまでに10年ほどのタイムラグがあるものと思われる。

青磁 (C)

- ⑪ 薄釉端反碗 (D1群) 一四世紀初頭から続く息の長い器種で、一五世紀前半に⑫と代わるまで青磁碗の主体をなす。一四世紀後半から一五世紀初頭までは、白磁端反碗①とセットをなす。
- ⑫ 厚釉端反碗 (D2群) 一四三〇年代から出現し、玉縁状の口縁となるものも多い。⑮やラマ式蓮弁紋碗 (金城二〇〇〇) は、本類に紋様を加えたやや高級志向の製品である。なお、沖縄以外でラマ式蓮弁紋碗と知れる類例は少ないが、津軽大光寺新城でも出土しており (平賀町教委2000)、破片では⑬などと区別できない場合も多いことから、実際には一定量流通していたものと考えられよう。
- ⑬ 薄釉端反皿 ⑪とセットで流通していたと考えられる端反皿で、碗よりも数量的に少ない。青磁皿については、全般に数量が少ないために、あまり細分がされてこなかったが、碗と連動しているものと考えられる。この点、首里城京の内SK01出土遺物に関する調査報告書の分類及び報告書の中村渉の考察は、先駆的な試みとして評価される。
- ⑭ 厚釉端反皿 ⑫とセットで流通していたと考えられる端反皿で、玉縁となるものも多い。
- ⑮ 端反窠描蓮弁紋碗 (B2群) 江上館出土品 (4) (7) は、口縁外面下に沈線が二条巡るタイプで、首里城や尻八館出土の沈線をもたないものとは区別したほうがよいかもしれない。この沈線を入れる技法は、一四世紀代の新安沈船引揚遺物以来の技法であることから、一四五〇年頃を境に沈線が消失したものと考えたい。
- ⑯ 直縁窠描蓮弁紋碗 (B2群) 本タイプを含め、一四四〇年頃から口縁が直に収められる碗⑮と⑰が次第に主体的になっていく。
- ⑰ 端反窠描蓮弁紋皿 ⑮とセットをなす端反皿である。無紋に比してさらに少ない。
- ⑱ 直縁窠描蓮弁紋皿 ⑯とセットをなす直縁皿である。
- ⑲ 直縁雷紋帯碗 (C2群) 亀井明德は、このタイプを一四世紀中葉〜一五世紀前半とし (亀井一九八〇、Aタイプ)、報告書でも「大きく修正を必要とする新出資料がなく、現在でも変更の要はない」とし、それを堅持する。この見解は、一四四〇年頃から出現するという私見との間にかなりの齟齬が生じる。そこで、以下に亀井が古い時期の根拠とした事例を検討する。
- ・ 沖縄県山田城跡採集品 文献から一四二〇年代の廃絶とされるが、④の袂高台をもつ白磁内湾皿が表採品に含まれていることから、やや時期が下るものと思われる。
 - ・ 福岡県大宰府史跡第57次腐植土層出土品 洪武通宝の出土から一四世紀後半から一五世紀初頭とされたが、根拠薄弱であり、共伴漆器が一五世紀代、直上層の暗茶色層出土遺物が一五世紀後半と考えられ、その土器皿様相との間に連続性が認められることから、その前段の一五世紀中葉あたりに位置付けるのが妥当である (九歴一九七九)。
 - ・ 草戸千軒町SD510・540出土品 永楽通宝を最新銭とする銭貨などから溝の時期を一四世紀後半〜一五世紀前半とされた。しかし⑥白磁八

角坏が出土していることから、最新段階は、一五世紀前半でも中葉に近い時期以降と考えられる。なお本報告では、両溝の下限は、一五世紀後半とされている（広島県草戸千軒遺跡調査研究所編一九九六）。

以上のとおり、報告書の追加事例をみても一五世紀前葉以前に遡る事例は皆無であり、現時点で一四世紀中葉から十三湊遺跡が大打撃を受ける一四三二年頃まで遡る雷紋帯碗の明確な出土事例は確認できない。

なお、首里城（9）・興行寺遺跡（10）の出土例からみて人形手も基本的には同時期の所産と考えられるが、数量が通有の雷紋帯碗に比して少ないため、めだたないのではないかと思われる。

②③ 直縁無紋碗（E群） ①⑥⑨などから紋様を除いた無紋碗。有紋のものより数量的に少ない。

21 直縁無紋皿 ②⑩と組をなす皿。

22 直縁篋線描蓮弁紋碗（B3群） 外の直縁碗に比してやや出現が遅く、一四五〇年以降に認められるが、志苔館・首里城での出方からすれば、五〇年代でも遅い時期に搬入が始まると考えられよう。なお比較的古い時期のものは、蓮弁幅が広く①⑥の雷紋帯と組み合わせられるものがある（第15図）。

23 直縁篋線描蓮弁紋皿 22と組をなす皿であるが、最も確認例が少ない。

24 腰折端反皿 皿の中では23と並んで最も時期が下るもので、内外面に劃花紋を入れるものがある。やがて本タイプから稜花皿が現れてくる。

したがって、これらの資料群に後出する青磁山形線描蓮弁紋碗（B4類）・稜花皿や白磁端反皿（E群）は、瀬戸後IV期新段階でも後半期、おそらく一四七〇年以降に流通し始めると考えられる。

以下、上の根拠とした調査事例をとりあげる。

（1）堀越館跡SX34出土遺物（新潟県教委二〇〇一、第9・10図）

信濃川・阿賀野川河口よりさかのぼった阿賀野川右岸に位置する館跡で、白河荘に属する。享徳三年（一四五四）の「中条房資記録」から、応永三〇年（一四二三）に落城したことが知られ、その火事場整理と考えられる遺構から大量の一括遺物が出土している。

SX34からは、白磁・青磁などの外、多数の天目碗・茶入・黒釉壺といった貿易陶磁、後Ⅱ～Ⅲ期を下限とする瀬戸美濃・珠洲・信楽壺・越前壺・笹神等の国産陶器、瓦質風炉・ロクロ成形土器・茶臼・硯など160点に及ぶ遺物が出土し、国産陶器の年代観も文献と矛盾しない一級資料である。

貿易陶磁は、白磁が①端反碗（C群）、②腰折坏（D群）、③内湾皿平高台（D群）、青磁が⑪薄釉端反碗（D1群）、⑬⑭端反皿である。

（2）十三湊遺跡120次SK06出土遺物（市浦村教委二〇〇一、第11図）

津軽西浜の十三湖に開かれた安藤氏の港湾遺跡。『満濟准后日記』永享四年（一四三二）条に南部氏に攻められて没落したという記事がみられる。安藤氏居館と考えられている地点からは、この戦乱に伴う火事場整理跡と考えられる礫を多量に含む土坑が多数みつかっている。ここではその中で、120次SK06出土遺物を取りあげる。

白磁・青磁の外、瀬戸美濃・珠洲・越前・信楽・土器・粉挽白が出土しており、国産陶器の年代観も文献と矛盾しない。白磁は①端反碗（C群）、青磁は⑪薄釉端反碗（D1群）のみであるが、同時期の遺構群では、白磁③内湾皿平高台（D群）があり、わずかに青磁⑬端反皿、白磁②腰折坏（D群）が認められ、扶高台をもつ白磁の出土は認められない。

その後、遺跡の廃絶する後IV期古段階までに遺跡の中心は大土塁の南側へと移り、貿易陶磁の中心は青磁⑫厚釉端反碗（D2群）白磁③内湾皿平高台（D群）となり（榊原二〇〇六）、わずかに⑥白磁八角坏（D群）及び青磁①⑥直縁篋線描蓮弁紋碗（B2群）、①⑨直縁雷紋帯碗人形手（F類）、②⑩直縁

無紋碗（E類）などが認められる（貫井二〇〇〇）ことから、前二者は一四三〇年代以前より、後者は最終段階までに搬入が始まるものと考えられる。

（3）至徳寺遺跡 SX268 出土遺物（水澤・鶴巻二〇〇三、第 12 図）

越後直江津に所在する館跡で、中世後半には守護所であった可能性が指摘されている（小島一九九四）。各地点から大量の遺物が出土しているが、いっでは一五世紀前半代と考えられる SX268 を取上げる。

SX268 からは、細片となった大量の貿易陶磁が出土しているが、実測に耐えるものは少ない。白磁・青磁の外、多数の唐物天目、後Ⅲ期を下限とする瀬戸美濃、珠洲、信楽、瓦質風炉などが出土している。

貿易陶磁は、白磁が①端反皿（C群）、②腰折坏（D群）、③内湾皿平高台（D群）、青磁が⑪薄釉端反碗（D1群）、⑫厚釉端反碗（D2群）、⑬端反碗描蓮弁紋皿や八角坏、花瓶からなる。本遺構からは、②腰折皿が多量に出土していることが特徴的で、挟高台をもつ白磁の出土はない。⑫の出土から、（1）よりも時期が下ると考えられる。⑬の初現である。

（4）江上館跡第 317 号遺構 3 期炭層出土遺物（中条町教委一九九六、水澤二〇〇一、第 13 図上）

越後阿賀北の国人領主中条家の本拠と考えられる方形居館で、存続時期は一五世紀代のみである。本資料は、主郭南西隅の水溜状の第 317 号遺構に北方から投げ込まれた炭層より出土したもので、白磁・青磁の外、唐物天目、後Ⅱ期を下限とする瀬戸美濃、珠洲、越前、信楽、瓦質風炉・播鉢などが出土している。永享二年（一四四〇）の「黒川氏実知行充行状」にでてくる「中条合戦」後の火事場整理に伴うものである可能性があるが、（5）もその可能性があり、どちらとも決しがたい。

貿易陶磁は、白磁が③内湾皿平高台（D群）、⑥八角坏（D群）、青白磁梅瓶、青磁が⑪薄釉端反碗（D1群）、⑫厚釉端反碗（D2群）、口縁下に二条の沈線を入れる⑬端反碗描蓮弁紋碗（B2群）、香炉、盤などが認められる。瀬戸は古いものばかりであるが、V期の珠洲播鉢や瓦質播鉢を伴うこと及び①端反碗及び②腰折坏、⑤挟高台の白磁を伴わないことから、（3）と（5）の中間に位置付けられよう。

（5）下町・坊城遺跡 C 地点川西端炭化物層出土遺物（中条町教委二〇〇一、第 14 図）

江上館の周辺に展開する遺跡で、奥山荘政所条の中心遺跡である。C 地点は、その荷揚げ場に相当し、大量の遺物が出土している。ここでは、その川跡に投げ込まれた炭層出土遺物を取りあげる。

出土遺物は、白磁・青磁の外、後Ⅲ～Ⅳ期の瀬戸美濃、珠洲、越前、瓦質風炉、漆器、茶臼、硯などが出土している。

貿易陶磁は、白磁が③内湾皿平高台（D群）、④内湾皿挟高台（D群）、⑥八角坏（D群）、⑧端反角高台皿、青磁が⑪薄釉端反碗（D1群）、⑬厚釉端反皿、⑯直縁碗描蓮弁紋碗（B2群）、⑰直縁雷紋帯碗（C2類）、香炉、小坏がある。セット関係から、（6）と非常に近い時期の所産と考えられるが、⑬の端反皿が腰折れタイプ（24）であれば、さらに下る。本期以降、紋様を外面にもつ青磁碗が増加する。白磁④⑧、青磁⑯⑰の初現である。

（6）普正寺遺跡上中層出土遺物（石川県埋文センター一九八四）

加賀大野荘の犀川河口近くに営まれた港湾関連遺跡で、調査面積が 648 m²であったにもかかわらず、多量の遺物が出土している。調査は面ごとに把握されており、ここでは上・中層出土遺物を取りあげる。なお、本遺物群は、嘉吉元年（一四四一）の砂丘活動により廃絶したとされ、瀬戸後Ⅲ期の下限とされてきたが、後Ⅳ期古段階の製品が出土しており（藤澤良祐教示）、その上限が遡るか、遺跡の存続時期が下るか興味深いところである。

遺物は、白磁・青磁の外、唐物天目、青花瓶、後Ⅳ期古段階を下限とする瀬戸美濃（貫井 2000）、珠洲、越前、瓦質風炉、土器、漆器、硯などが出土している。

貿易陶磁は、白磁が②腰折坏（D群）、③内湾皿平高台（D群）、④内湾皿挟高台（D群）、⑥八角坏（D群）、⑧端反角高台皿、青磁が⑪薄釉端反碗

(D1群)、⑫厚釉端反碗(D2群)、⑭厚釉端反皿、⑯直縁篋描蓮弁紋碗(B2群)、⑰直縁雷紋帶碗(C2類)、⑳直縁無紋碗(E類)、盤、瓶などがあり、青花瓶の存在も注目される。青磁⑱の初現となる。

(7) 江上館主郭南東隅炭層出土遺物(中条町教委一九九五、水澤二〇〇一、第15図)

上述の館主郭南東隅で確認された炭化物層一括資料で、前稿では青花の存在や瀬戸の最新年代から(12)と同時期としたが、白磁⑥及び青磁㉓が含まれないことから、その前段にあたる資料と考えておく。なおその折、白磁⑦青磁⑱の存在を見落としていたので追加する。

出土遺物は、白磁・青磁・青花の外、黄褐色釉四耳壺、唐物天目、朝鮮雑釉、後Ⅳ期古段階を下限とする瀬戸美濃、珠洲、越前、信楽、土器、瓦質風炉、小銅碗と多彩である。

貿易陶磁は、白磁が③内湾皿(④は不明)(D群)、⑥八角坏(D群)、青花が⑨碗(端反B群)、口径30cmを越える大型の皿、青磁が⑪薄釉端反碗(D1群)、⑫厚釉端反碗(D2群)、⑮端反篋描蓮弁紋碗(B2群)、⑰直縁雷紋帶碗(C2類)、盤からなる。珠洲Ⅵ期播鉢及び青花の存在が存在し、⑮⑰を含まないことから、一四五〇年代の遺物群かと思われる。青花碗⑨の初現である。

(8) 志苔館跡出土遺物(函館市教委一九八六)

海に面した高台に築かれた館で、長禄元年(一四五七)年のコシヤマインの乱で廃絶したとされる。遺物は、白磁・青磁の外に、後Ⅲ期〜後Ⅳ期古段階の瀬戸美濃卸目付大皿、珠洲、越前、信楽、瓦質風炉、京都系土器、鉄鍋、硯などが出土している。

貿易陶磁は、白磁が②腰折坏(D群)、③内湾皿平高台(D群)、④内湾皿扶高台(D群)、⑥八角坏(D群)、⑦端反坏(腰丸E群)、青磁が⑫厚釉端反碗(D2群)、⑭厚釉端反皿、⑯直縁篋描蓮弁紋碗(B2群)、㉑直縁無紋皿、㉒直縁篋線描蓮弁紋碗(B3群)となる。白磁は、②が存在し、④扶高台が1点と少ないことから古手の様相を呈するが、⑦及び青磁㉑㉒が初出することから、大きくは2回にわたって貿易陶磁器が将来された可能性が考えられる。なお、本遺跡の㉓は蓮弁の幅が広いもので、最初期にのみ認められるものであるように思われる。(7)でみた青花は出土していないが、本時期には幾分流通を始めていたと考えられる。

(9) 首里城京の内SK01出土遺物(沖縄県教委一九九八)

『明實録』卷三〇一の天順三年(一四五九)三月条に記された琉球王府の倉庫消失記事に伴う遺物群で、1,162個体分の陶磁器が得られている。

遺物は、焼失した陶磁器群を倉庫内に土坑を設けて埋めたもので、その前段の琉球王室の器物を示すものと思われる。青磁を中心とし、青花、白磁に加え、タイやベトナム産の陶磁器、備前、瓦、青銅製品、武具、漆器などが出土している。遺物の中で多数を占める碗皿類の多くは、一五世紀中葉の所産と考えられ、一四五九年段階での流通陶磁の見本市の観を呈している。

中国産貿易陶磁については、白磁が③④⑥⑧、青花が⑨青花碗(端反B群主体であるが、直縁もある)、大皿、瓶類、大合子、馬上坏など、青磁が⑪⑫と揃い、皿、盤、瓶類などからなる。

碗をみると、青磁⑱98個体、青花⑨84個体、青磁⑯26個体以上、青磁⑫12個体以上、白磁10個体以上、青磁⑳及び端反ラマ式蓮弁紋各8個体、青磁㉓及び黒釉各7個体、青磁⑮3個体などがあり、青磁㉓が主体となる前の状況をかなりの程度示している。なお、青磁⑫は高台数からみて青磁⑯より多い。また、青花⑨と同じく飾られた碗である青磁碗⑯⑱が多いのは、琉球王府の倉庫という特殊事情によるところが大きいのではないかと思われる。

また、皿については、一四五九年段階で青磁が多くを占めており、その後の主体となる端反青花皿(B1群)が認められないことを押えておきたい。加えて注目されるのは、口径20cmを越える端反青花皿及び口径15cm程の大型青磁稜花皿の存在である。これらはそれより口径を4〜5cmほど縮

小した後出の普及品の祖形にあたると考えられ、すでに青磁については金城亀信の指摘がある（金城二〇〇一）。

(10) 興行寺遺跡第二面炭化物層出土遺物（富山一九九二・一九九三・一九九七・二〇〇一）

最初に述べたように、これまで一五世紀前半の基準資料とされてきたが、一五世紀第3四半期に下る火災痕跡（炭化物層）出土資料である。

遺物は、青磁・白磁・青花の外、褐釉四耳壺、唐物天目・茶入、後IV期新段階を下限とする瀬戸美濃、越前、土器、瓦質土器などが出土している。貿易陶磁は、(9) 首里城に次いで多種類である。白磁が③④⑦、青花が⑨碗及び直縁碗各一個体、青磁が⑫⑭⑯⑰⑱⑲となる。⑤挟高台全面施釉皿の初現である。白磁皿白磁皿は、③平高台が2個体に対し、高台に決りをもつ④⑤が31個体で、⑥多角坏が19個体と圧倒的に挟入高台のものが多く、白磁碗は、③の小坏を大きくした形状(四群)であり、青花皿は出土していない。青磁は、36個体中11個体が⑲雷紋帯碗であり、以下⑯(⑮を含む)が14個体、⑫が4個体、⑳㉑が1個体である（富山一九九二、二〇〇一）。このような⑲⑯が多数を占めるという組成から(9) 首里城と近い時期の所産と考えられよう。

(11) 江上館跡第317号遺構5期炭層出土遺物（中条町教委一九九六、水澤二〇〇一）

主郭西南の水溜状遺構に東方から投げ込まれた炭層に含まれていた遺物群である。切合い関係から(4)の炭層よりも新しいことがわかっている。遺物は、青磁・青花・白磁の外、唐物天目、後IV期古段階の瀬戸美濃卸皿、土器皿、漆塗天目、瓦質風炉、珠洲、越前などがある。

貿易陶磁は、白磁が③④内湾皿(D群)、⑤挟高台全面施釉皿(D群)、青花が3個体の⑨端反青花碗及び⑩端反青花皿(B1群)、青磁が⑲直縁雷紋帯碗(C2類)、⑳直縁無紋碗(E類)、㉑直縁篋線描蓮弁紋碗(B3群)からなる。⑩端反青花皿(B1群)の初現であるが、この製品は見込みにのみ紋様が描かれているものであり、過渡期にふさわしい。

(12) 尻八館跡出土遺物（青森県立郷土館一九八一）

本遺物群も報告書では、興行寺と並んで一五世紀前半の基準資料とされるが、瀬戸陶の年代観からみて後IV期新段階以降の一五世紀後半の資料群である。

遺物は、青磁・青花・白磁の外、唐物天目、黄褐色釉壺、朝鮮陶、瀬戸美濃、珠洲、越前、信楽、瓦質風炉・播鉢、漆塗り土器皿、銅錘、鉄鍋、茶臼など多数が出土している。

貿易陶磁は、白磁が③④⑥、口禿碗、青花が⑨青花碗、青磁が⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲、大香炉、盤、酒海壺などとなり、青磁の大物がめだつ。

なお、瀬戸美濃大窯1段階の可能性のある端反皿(第36図4)及び青磁㉑腰折端反皿(第31図7)の存在、また図化されておらず写真が不鮮明でみづらいが、青磁山形線描蓮弁紋碗(B4)かと思われる破片が写真図版27に載せられていることから、一五世紀後半でも第4四半期まで下る可能性はある。

これらを一覧表にまとめると表8のとおりとなる。

ここで北東日本海沿岸地域に一五世紀中葉の一四四〇年前後から入り始める貿易陶磁器群をあげれば、白磁④内湾皿挟高台、⑥八角坏、⑧端反角高台皿、青磁⑫厚釉端反碗、ラマ式蓮弁紋碗、⑭⑰端反篋線描蓮弁紋碗皿、⑯⑱直縁雷紋帯碗(人形手を含む)、⑳㉑直縁無紋碗皿となり、一気に器種が増える。なお、釉が厚くなる青磁⑫は、外より若干早くから出現しているやに思われ、その変化が外の器種の出現に何らかの影響を及ぼした可能性があるろう。

そして一四五〇年頃を境に⑨青花碗、白磁⑦端反坏、青磁㉑直縁篋線描蓮弁紋碗皿・㉒腰折端反皿が現れ、さらに遅れて一四六〇年以降に白磁⑤挟高台全面施釉皿、⑩端反青花皿と続く。その後、一四七〇年以降に青磁山形線描蓮弁紋碗・稜花皿、白磁端反皿が出現するというのが、ここでとり

あげた資料群からみた現状である。

したがって、これらを除いたものが一五世紀前半の一四三〇年代頃まで流通していた器種ということになる。それは、白磁①端反碗・②腰折坏・④内湾皿平高台、青磁⑪薄釉端反碗・⑬⑭端反皿であり、そこに前代以来の白磁口禿皿や青磁鎬蓮弁紋碗、新安沈船にみられる遺物群（Ⅳ類）などが少数加わるといったところであろう。

さらに、上でみてきた結果は、藤澤良祐が検討した東海・南関東での貿易陶磁器の搬入時期（藤澤二〇〇〇）とも大きな食い違いは認められず、存外的外れなものではないと考えられる。

あくまで各遺構出土資料からみたという限定付きの初現期であるため、流通していても出土していない可能性があるが、ひとまず提示して大方のご批判ご教示を賜りたいと思う。

（4）仮称「首里タイプ白磁皿」について

首里城京の内SK01出土遺物の中に特異な白磁皿（⑧）があり、下町・坊城遺跡C地点より同じタイプの皿が6個体まとまって出土している（前項（5））。この皿については、それまでみたことがなかったので、類例を求めて歩いていたり、偶々沖繩の金城亀信より首里城京の内SK01より出土しているという教示（中条町教委二〇〇一）をいただき、当方の共伴関係と合せて、一五世紀代の遺跡で出土していることがおぼろげに明らかとなってきた。そして、越後での出土例や四国や中国での貿易陶磁研究集会で注意してみていると、わずかに同種のものがあり、一定程度流通していることがわかってきたため、報告書では仮称「首里タイプ」白磁皿として記述した。

ここで管見に入った範囲で、出土遺跡をとりあげると、表9のとおりとなる。

このように、いまだ多くない確認事例ではあるが、一五世紀中葉を中心とした時期に流通していたことがみてとれるかと思われる。すなわち、器種が多様化した時期にやや大きめの皿形器種として一定量が搬入されたものと考えておきたい。

（5）土器皿と瓦質播鉢の共伴関係について

ここでは、上述の年代観をもってその共伴関係から、在地土器の代表である土器皿及び瓦質播鉢について、付言しておきたい。

一四世紀以降の土器皿は、その量的な北限が越後北方にあり、以北では土器儀礼に伴う器種とは考えられない。以北のてづくね成形土器には、百瀬正恒の指摘（二〇〇二）にあるように、非常に焼成がよいものがある。この土器群は、十三湊遺跡の火事場整理遺構（一四三二年）から出土し始めることから、一四三〇年前後には搬入されていた可能性が高い（第二図）。対して越後では、瀬戸後ⅢⅣ期への移行期である一四四〇年前後とやや遅れる（前稿）。この差は、在地の土器生産の差異に基づくものと考えているが、その検証のために次に瓦質製品についてみていきたい。

瓦質製品は、各種紋様で飾られた風炉や火鉢類が目立つが、それは風炉を用いる必要がある上流階級にのみ必要な贅沢品である（水澤一九九九b）。ここで問題となるのは、その色調である。北陸のものは概して暖色系の色調で焼きが甘いものが多い。対して奥羽のものは、表面黒色で硬い焼きのものが多い。この違いは、中世北陸では瓦を焼かず、したがって土器生産には土器工人がかかわることが多かったと考えられるのに対し、奥羽では瓦を焼き、土器を生産しないことから、瓦工人がその生産に関わっていたことに起因するものと思われる。

さて、粉食に対する需要が飛躍的に高まる食生活の変化の中で、珠洲の生産が衰えをみせるのは、粉挽臼の普及に負うところが大きいとはいえ、一五世紀末以降の越前播鉢の存在を考えると、内的な要因も大きかったと思われるが、そこで注目されるのが在地産の瓦質播鉢である。

北日本における瓦質播鉢においては、高桑弘美がまとめている（高桑二〇〇三）が、その範囲は奥羽全域に及んでおり、遅くとも一五世紀後半以降には播鉢の主体をなすようになっていたのではないかと思われる。越前播鉢は、珠洲に比して1/3という主体的期間を考慮しても、珠洲ほどには出土しない。その理由こそは、瓦質播鉢の存在にあるといつてよからう。これまでの珠洲から越前へという播鉢の図式は、少なくとも越後阿賀北以北の日本海沿岸地域においては、珠洲から瓦質播鉢へと転換したといえよう。したがって一五世紀後半～一六世紀の奥羽は、瓦質播鉢の時代といつてもよく、今後その様相の解明は奥羽戦国期の要とならう。

そこでこの瓦質播鉢の出現年代であるが、越後阿賀北においては、瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期への移行期である一四四〇年前後にその後に継続する瓦質播鉢の出土例がある（4）。対して十三湊遺跡では、やはり火事場整理遺構以降に出現し、土器と同じ現象が生じている。

この対応関係が正鵠を射ているとするならば、奥羽の瓦質土器生産は、貿易陶磁とあまり関係なく一四三〇年代頃に始まったのに対し、北陸の瓦質土器生産は、貿易陶磁器の多様化に連動して1440年代に変革を迎えたということになる。そしてこの動きこそが、珠洲陶の衰退を決定的なものとし、瓦器生産へとシフトしていったという図式を描くことができまいか。今後、その仮説を実際的なものにするために、瓦質土器生産の様相を追究する必要を覚える。

（6）おわりに

以上一五世紀前半～中葉の貿易陶磁様相を検討してきた。この時期に、日本海沿岸地域に多量の陶磁器が入ってきている現象と表裏をなすものとして、一四世紀末～一五世紀前半における京都での陶磁器出土比率の低下（鋤柄 1996）があげられる。もちろんそれが貿易陶磁のみにかかわるものではないにせよ、京都に物が入らない時期に日本海ルートで大量の貿易陶磁が運ばれていることは、興味深い事実である。

それが鎌倉末～室町初期の内乱期後に流通ルートの再編があったと考えるべきか、外商が物騒な瀬戸内海ルートを嫌ったととるべきか、ともかく日本海ルートが主体的となった結果、一五世紀には貿易陶磁が手に入りやすい状況にあったと考えられるのである。

そしてその状況が変わるのは、一五世紀末～一六世紀初頭のこと、日本海沿岸への貿易陶磁器・瀬戸大窯の流入が大幅に減少し、領主居館は流通を押さえる立地から要害の地を重視した立地へと移り変わる。それがおそらく流通を分断した領国経済の時代であり、戦国時代後期（Ⅱ近世）の幕開けということになる。

次いでモノが再び列島規模で動き出すのは、秀吉の統一以降の唐津焼の流通をまたねばならなかったのである。

補註一

（貫井二〇〇一）では、十三湊遺跡から雷紋帯人形手碗が出土しているとされるが、市調査担当者の榊原慈高によれば、その事実はないとのことであり、その部分の記述を削除した。

補註二

発表後、首里タイプと仮称した白磁皿について、県内では新潟市三王山遺跡（亀田町教委一九八〇）、柏崎市町口遺跡（未報告）から、県外では沖縄の諸遺跡（新垣・瀬戸二〇〇五）や、高知県春野町の芳原城跡（高知県教委一九八四）での新知見を得た。これらからして、当初漠然と考えていたよりは、広範な分布及び出土量が見込めることがわかってきた。この手の遺物が、調査者間に認知されることによって、報告書にとりあげられることを望みたいと思う。

2 中世北陸の茶道具―越後出土の天目茶碗を中心にして―

(1)はじめに

ここでは、北陸の天目茶碗を中心とした出土傾向を検討し、茶の道具の特質や普及状況についてみていく。なお、個々の詳細なデータについては、北陸中世考古学研究会編『中世北陸の茶道具』(二)を参照願いたい。

(2)茶道具の保有形態―天目茶碗を中心にして

まず天目茶碗の出土する時期であるが、古瀬戸では中Ⅳ期から多く認められるところとなり、一五世紀代に大幅に増加する。舶載天目も同様で、鎌倉期に遡る例は、確実なところでは加賀、能登、越後での四遺跡例のみである(後述)。大窯期の天目茶碗としては、舶載品はほとんど皆無となる。瀬戸・美濃は、越前一乗谷遺跡群ではおびただしく出土し、越中でも倍増するが、加能では減少し、越後では古瀬戸期の1/4にまで激減する。ことに越後では、大窯2段階以降のものは非常に少なくなる。これを国ごとにまとめたのが第26図である。

表10をみて一番に驚くのは、越後での舶載天目の多さであろう。古瀬戸期の舶載品と国産品の量比をみると、全体では四割ほどが舶載品で六割が瀬戸産である。ただしこれは、舶載品が国産品を越える国人領主クラス以上の城館である至徳寺遺跡、江上館跡(含む政所条遺跡群)、新発田城跡、堀越館跡で全体の86%である三〇〇点を出土しているためである(二)。それ以外の集落遺跡では、天目自体をもたないか、あっても古瀬戸製品のみというのが通常であり、舶載天目は、古瀬戸製品の1割程度の数量となる。なお、越前でも一五世紀代の法土寺遺跡で7点、諏訪間興行寺遺跡で13点の舶載天目が出土しており、加能と同程度は入っているものと思われる。

次いで、越後について天目茶碗以外の出土茶道具である茶入・風炉・信楽・茶臼を含めた一覧が表11である。本表を基に遺跡群を下記のとおりランク分けしてみた。

- A・1…舶載天目が古瀬戸製品を越え、茶入・風炉・信楽・茶臼をもつ遺跡・・・江上館・新発田城・堀越館・至徳寺遺跡
- A・2…舶載天目が古瀬戸製品を越えないが、茶入・風炉・信楽・茶臼をもつ遺跡・・・下町坊城C地点
- A・3…天目以外のいずれか1品目を欠く遺跡・・・下町坊城A地点・同B地点・宝積寺館・小木ノ城
- B・1…舶載天目をもち、いずれか2品目を欠く遺跡・・・牧目館・下町坊城遺跡D地点・伊達八幡館・寺町遺跡・中道遺跡
- B・2…舶載天目をもち、天目のほかにいずれか1品目をもつ遺跡
 - ・・・千眼寺・築先遺跡・三貫梨遺跡・古館館・和納館・ソデクネ遺跡・横曾根I遺跡
- B・3…舶載天目と瀬戸天目しかもたない遺跡・・・村松城・子安遺跡
- C・1…舶載天目をもたず、天目のほかにいずれか2品目をもつ遺跡・・・内野遺跡・柏崎町遺跡・馬場館
- C・2…舶載天目をもたず、天目のほかにいずれか1品目をもつ遺跡
 - ・・・黒川西館・奈良崎遺跡・木崎山遺跡・樋田遺跡・古町B遺跡・八反田遺跡
- D…古瀬戸天目のみをもつ遺跡・・・大武遺跡・坪の内遺跡ほか多数
- E…天目をもたない遺跡

もちろん、調査面積の関係や報告されていない遺物の存在などによつては、ランクが上がる可能性が大いにありえるが、一応5ランク10段階に区

別してみた。これら5ランクは、A…国人領主以上のクラス、B…その下の武士クラスあるいは寺院等、C…有勢遺跡、D…一般集落、E…零細集落となるうか。

(3) 天目茶碗からみた場の使われ方―政所条遺跡群

ここでは、越後胎内市の政所条遺跡群の出土事例から、天目茶碗の使われ方をみていくこととする。政所条遺跡群は、江上館とその周辺の下町・坊城遺跡の総称(第17図)で、一世紀以来一六世紀初頭まで連続と続く奥山荘の中心遺跡である。

江上館跡

館は、扇端の段丘低位面に築かれており、ほぼ一町四方の主郭と、その南北に附属する馬出し様の郭からなる。

本館は、遺物の質量及び遺構配置などから、本地域を支配していた国人領主中条家の一五世紀代の本拠地であったと考えられる。

遺物は、同時期の遺跡群のなかで抜きん出ており、舶載天目(39片)の数量が瀬戸天目(58片)を凌ぎ、20個体以上が出土している。また、遺跡群の中で唯一朝鮮雑釉碗を保有しており、中国製茶壺類や信楽茶壺を複数所持していた。瓦器の出土量も飛びぬけている(水澤一九九九)。

舶載天目の出方をみると、井戸廻り、水溜などをはじめ、生活空間から多くが出土している(第18図)。対して、そこからずれる場からも出土がみられ、これらの性格を考える必要がある。

G3グリット南東部については、珠洲甕が数個据え付けられていた場所であり、そこから天目茶碗が出土することをどのように考えるか。また、I3グリットの建物については、これまで門との位置関係から宿直所という見解をとってきたが、天目や最初期の青花、黄褐色釉四耳壺、風炉等の存在、池に面した立地、5度にわたる建替えなどを考えた場合、茶室等の可能性を考えるべきであろうか。

下町・坊城遺跡

調査は、館の西・南側A～Dの4地点で実施しており、平成八年～一一・一五年の5箇年で調査面積が29,000㎡を越えている。

A地点は、江上館の西方に隣接する調査区である。すぐ西側には、40×30m程度の溝に囲まれた石組井戸を伴う一五世紀代の家臣団屋敷が二区画みつかっている。ただし遺物量は、4地点中最も少なく、舶載天目2個体以上、瀬戸天目7個体以上(34片)である。

南北の二つの屋敷地を比較する。南北の屋敷は、舶載天目茶碗とともに3点ずつとほぼ同等に所有しているが、北屋敷では舶載茶入と茶臼を所有していたのに対し、南屋敷では古瀬戸茶入をもつのみである。古瀬戸天目は、南屋敷が多くを所持していたが、北屋敷の方が格の高い居住者が住まいしていたと考えられよう。

B地点では、約50m四方の溝に囲まれた区画が南北の2区画みつかっている。

特に南方の区画は、一五世紀代が中心で、5～7寸の柱根を多く残す3間×7間の身舎に四面廂を有する東西棟建物(9.8m×18m：総床面積176.4㎡)がみつかった。この建物の周囲からは、護摩杓(大杓)・護摩炉2点・金剛鈴2点などが出土しており、密教寺院の御堂と考えられる。また仏具以外の遺物には、青磁水注・太鼓銅盤や櫛子(皆朱漆器)といった領主階級のステイタスが認められ、館と密接な関係にある寺院と考えられる。

天目茶碗は、舶載品7個体以上を出土したが、瀬戸天目が13個体(35片)以上とほぼ倍する。

寺内から多くが出土しており、風炉や茶釜などの瓦器も多数出土している。また、舶載茶入や茶臼の出土も認められた。

C地点は、江上館の西南約400mに位置し、L字形に流れる川の両岸及び南方を区切る川の北方に立地した居住地がみつかった。時期的には、一二世紀後半～一四世紀代が主体であるが、一二世紀前半以前の遺物や川の埋没後に営まれた一五世紀代の遺構・遺物もかなりの量が出土しており、

中世を通じて生活が維持されていたものと考えられる。

本地点を特徴づける遺物は、大量の土器皿と漆器である。土器皿は、中世前期遺物の大半を占めており、越後では特異な組成である。ただし北隅では、小鍛冶の炉跡もみつかり、職人の存在も認められる。

天目茶碗は、舶載が7個体以上出土しているが、瀬戸が30個体(156片)以上と多い。また、舶載茶入や壺が3個体以上出土している。

南方の川に面して3つの建物密集区が認められ、溝に区切られた範囲を南東屋敷・南中屋敷・南西屋敷とよぶ。南東屋敷からは、天目茶碗・信楽壺・茶臼・舶載茶入・瀬戸茶入・風炉、南中屋敷からは、天目茶碗・風炉、南西屋敷からは、天目茶碗・漆塗天目・風炉・茶臼が出土している。したがって茶道具からみて、南東屋敷、南西屋敷、南中屋敷の順に優勢な居住者を想定できよう。

D地点は、南半分から江上館と同時期の室町時代(一五世紀)の遺構群がみつかったが、中心は北半からみつかった鎌倉時代後期の屋敷跡であり、この部分の史跡指定・保存が決定している。舶載天目1個体、瀬戸天目10個体以上の出土があった。

(4) 舶載天目茶碗

基本的な流れは、森本朝子によってまとめられている(森本一九九四)。それによれば、一二世紀前半以前から天目茶碗の使用が認められるという。ここでは、それをベースとして、北陸の事例をみていく。

北陸では、一三世紀代に加賀堅田B遺跡で2点、能登南黒丸遺跡で2点、越後杵伝遺跡、山ノ脇遺跡などでの出土が知られる。基本的に小ぶりで口縁を屈曲させ、見込みをくぼませるが、杵伝例はくぼみが明瞭ではない。胎土は、黒色を呈する。

そして大量に流通し始めるのは、一四世紀半ば以降である。底部形態は、低く削り出すものがほとんどである。釉薬を二度掛けするものも多く、胎土は表面が白く断面が灰色を呈するものが多い。越後出土の舶載天目を口縁部形態で分けると、以下の四群が認められる(第19図)。

I 群…口縁部がほぼ直に開くもの。

II 群…口縁端部を屈曲させるもの。

III 群…口縁をII群よりも長めに折り曲げるもの。

IV 群…その他の口縁形態

これらを古瀬戸の天目茶碗の変遷(藤澤一九九七)に对照させると、I群は古瀬戸中IV期〜後I期に、II群は後I期〜後IV期新に、III群は後I〜後III期に影響を与えた原型にあたるものと思われる。

なお、琉球で少数出土している丸椀等の器形(新垣二〇〇四)は、今のところみつからない。

さらに特徴的なものとして、土師質の胎に漆塗りをする一群が越後の江上館や大館、江島神社遺跡などで認められる。器形的にはやや厚手であるものの瀬戸後IV期新頃の器形を写したのではないかと思われる。また加賀勅使遺跡や津軽浪岡城では、瓦質のものが出土している。これらの製品は、それを出土する遺跡の性格からみて、天目茶碗の補完品といった扱いをするべきものではなく、特注品と考えるべきであろう。

(5) 信楽壺の流通時期について

筆者は北東日本海沿岸地域への物流に興味をもっており、小文(水澤二〇〇一a・二〇〇四・二〇〇五)を公にしてきたが、この地域の城館では信楽壺が少なからず出土しているように思われる。しかし、概説書(滋賀県立近江風土記の丘資料館一九八〇・木戸一九九五・秋田一九九八など)に記

されている流通時期は、一六世紀後半の茶陶生産以後であり、本地域で出土し始める時期とはかなり隔たりがある。そこでこれらについて、検討しておきたい。

まず、我々が信楽と考えている陶器が信楽でよいのかどうかという問題があるが、越前とは明らかに異なる粘りのある胎土や器面に吹き出した長石、また松沢修実見の宝積寺館出土資料（新発田市教委一九九〇）との共通性から信楽と判断した。以下、いくつかの出土例について説明していく（第20図）。なお分類は、木戸型式（木戸一九九五）を用いる。

1・3は、越後江上館からの出土品である。1は、これまで産地不詳としていたが、胎土・色調などから信楽と判断した。口縁帯が垂下するが下端が頸部とくっつかずに、受口状となる甕である。KA類一四世紀前半の所産で、瀬戸後Ⅲ期以前に廃棄されている。2は、口縁端部をわずかに外側に引き出す壺で、TA3類一五世紀第1四半期の所産となろう。瀬戸後Ⅳ期新段階に廃棄されている。3は、報告書にもらした（胴部片のみ『江上館跡Ⅲ』に掲載）が、先に紹介したものである（水澤二〇〇一）。口径13cmで、ややなで肩、器高は4cmに復原した。5同様底部に陶器片が付着している。2と同時期の所産と思われ、瀬戸後Ⅳ期古段階に廃棄されている。

4は、江上館南西の下町・坊城遺跡C地点より出土した壺で、口縁上面に面をとるTA1類一四世紀第4四半期の所産となろう。一四世紀末～一五世紀初頭には、廃棄されている。

5は、越後堀越館の応永三〇（一四二三）年の落城に伴う廃棄土坑から出土した壺で、口縁上面に面をもつ。TA1～TA2類と思われる。

6は、津軽十三湊遺跡第一四五次調査で出土した壺である。TA1類と思われ、一五世紀中葉の遺跡廃絶期以前の搬入・廃棄と考えられる。

なお、図はあげないが、津軽浪岡城でもTA3類～TB2類の壺が7個体以上出土している（実見）。本遺跡は、一六世紀代も存続するため秋田氏のいわれるような流通段階でのストックの可能性（秋田一九九八、一九九頁）を考慮する必要があるが、上の各事例からみて一五世紀代に搬入されていたものがあつたと考えるべきであろう。

以上、終末時期の明瞭な遺跡（遺構）からの出土例をみてきたが、遅くとも一四世紀末～一五世紀初頭に信楽壺が搬入・消費されていたことが明らかになったであろう。問題は、信楽近郊での出土状況との齟齬であるが、これは日常品である播鉢と茶葉壺としての性格の違いに帰したいと思う。なお木戸雅寿は、壺を「蔵骨器として生産されているのかもしれない」（木戸一九九五、四〇八頁）とするが、当人が珍重した茶葉壺からの転用とは考えられないであろうか。すでに秋田が指摘している胎土特性からくる通気性による茶葉の品質保持という信楽壺の性格は、南北朝期以降における喫茶・闘茶の普及、すなわち舶来天目の需要の高まりとそれに伴う国産天目茶碗の量産化（古瀬戸中Ⅳ期以降）の過程で見出されたものと思われる。

そして出土状況からみて、畿内産の茶と茶臼、風炉、呂宋壺・信楽（茶葉壺）、天目・茶入などの茶道具一式が商人の手元に集められて、各地の領主の元へもたらされたと考えられよう。

（6）文献からみた喫茶とのかかわり

中国では、一五世紀半ばまでに抹茶（点茶）が消滅し、煎茶に移行するため、抹茶に必要な天目茶碗や茶入の生産が廃絶し、代わって茶壺が出現するという（布目二〇〇一）。この現象は、一六世紀代に入ると舶載天目茶碗が出土しなくなる日本での発掘状況と一致する。ただし、茶壺の認定については難しいところがある。

次いで、信濃の禅宗寺院の喫茶形態を検討した称津宗伸は、喫茶において中国と直結した禅宗寺院の果たした役割を特筆し、禅僧が日常的に喫する茶は、ほとんどが煎茶であったことを明らかにした。また、煎茶・喫茶が平安時代から行われており、最高級品としての団茶（蠟茶）が一四世紀末まで

中国で生産されていたことも指摘している。そして風炉は、煎茶にも喫湯にも抹茶にも用いられたのであり、天目茶碗のみを出土する遺跡は、煎茶と喫湯の広範な広がりを表しているとした(称津二〇〇三・二〇〇四)。

また、皆川義孝が近年明らかにした皆川二〇〇五とところの万里集九『梅花無尽蔵』内の延徳四年(一四九二)及び明応二年(一四九三)の記事によれば、蝦蛄紋のある饒州茶碗で茶を飲んでいることが書かれている。すなわち、これは斑紋様の青花碗かと考えられ、鶴沼(岐阜県)でおそらく煎茶が飲まれていたことが判明する例である。

このようなことからすると、茶臼を持たずに天目茶碗を出すEランク以下の三貫梨遺跡(寺院や中道遺跡・築先遺跡・大武遺跡・木崎山遺跡などの遺跡は、点茶ではなく煎茶を飲むことが多かったと考えることもできよう)。

また『梅花無尽蔵』の事例からすると、瀬戸・美濃天目の生産地にごく近い岐阜においてでさへ、茶を飲むのに青花碗を用いていることがわかり、天目の用いられる場面といったものを考える必要がある。ちなみに一四世紀後半以降の青磁碗にも茶筌痕のあるものは多数あるのであり、これらは点茶碗として用いられることがあったと考えられよう。

(7)おわりに

以上、天目茶碗を中心にして、北陸への茶の湯の普及についての一端をみてきた。しかし、天目茶碗以外の茶道具である瓦質風炉や茶臼といった素材には、ほとんど言及することができなかった。また、北陸の中での地域差、あるいは茶の湯の場の変化や変遷といった問題にもふれることができなかった。今回は、とりあえず様相を紹介し、いずれもう少し大きな視点で取り組んでいきたいと思う。

註

(一)北陸中世土考古学研究会二〇〇五『中世北陸の茶道具』第18回資料集

(二)一五世紀代の青磁・白磁を主とする貿易陶磁器が日本海沿岸の遺跡で多数出土することは、これまでたびたびふれてきた(水澤二〇〇一・二〇〇四)。今回、舶載天目茶碗においても同様のことが明らかとなった。そしてそれが100点以上出土する遺跡が、管見では越後の至徳寺遺跡・政所条遺跡群の他には、琉球首里城や博多遺跡群に限られていることは、一五世紀代の貿易陶磁の流通経路を象徴しているように思われる。

3 越後戦国期の遺物問題

(1)はじめに

越後の戦国期を守護代長尾為景が守護上杉房能を敗死させた永正四（一五〇七）年前後からとすると、この時期発掘調査で出土する遺物に大きな変化が現れる。

すなわち、瀬戸・美濃の大窯1段階を境に、急に遺物が出土しなくなるのである。この原因としては、これまで広域での遺跡の移動Ⅱ集落の再編によるものと考えられてきた（坂井一九九〇・矢田一九九一）。すなわち現在の集落と重なっているため、その時期の遺跡が調査されていないのだといわれてきた。確かにその動きはあったように思われるけれども、それにしても報告例があまりに少なすぎるというのも事実であり、実に不可解な現象である。

そして一六世紀の前半以前に廃絶したといわれる遺跡からは、一六世紀末～一七世紀初頭の遺物である唐津が出土していることが多い。

したがってここから、ある疑問が生じる。もちろんすべての遺跡が該当するとはいわないけれども、瀬戸・美濃大窯2段階～3段階の時期の遺物搬入量が極端に少なかったため、遺跡が一旦廃絶したかのようにみえる遺跡が相当数存在するのではなかろうかと。

そしてその主因は、我々がその時期の遺物をそれとはつきり認識できていないか、あるいはごく少量なために遺跡が存続していたと報告することに躊躇を覚えざるをえないかのいずれかであろう。

また、前代から引き続き搬入されている器種については、その帰属時期（搬入時期や廃棄時点）を見極めにくく、広い時間幅の中で考えざるをえないという問題がある。

このような状況は、東日本においては珍しい事ではなく、夥しく遺物が出土する一五世紀代の北東日本海沿岸地域の状況が異常と考えたほうがよいであろう。

ここでは、この様相が不明瞭な越後戦国期の遺物についての現状認識を行うことを目的とする。

(2)越後戦国期の遺物概況

まず、瀬戸・美濃大窯製品である。その実年代を藤澤良祐の研究（藤澤一九九三）からみると、以下のとおりとなる。

第1段階	一四七六～一五二〇年（一）
第2段階	一五二〇～一五五五年
第3段階	一五五五～一五九〇年
第4段階	一五九〇～一六一〇年
第5段階	一六一〇～一六七五年（連房式登窯併行期）

今回問題とするのは、主に第2段階（あるいは第1段階第2小期辺り）から第3段階の唐津出現以前の一六世紀代の大部分の時期である。そしてこの時期の大窯製品をある程度まとまって出土する遺跡は、上越市の春日山城くらいであり、外にはあまりわからないのが現状である。そしてその春日山城でさえ、調査面積が限られていることもあるが、前代の伝至徳寺の遺物量とは比べものにならないほど出土量が少ないのであり、その様相が明らかになっているとは言い難い。新発田城でも、神林村牧目館でも、その時期の製品はごく少量であり（神林村教委一九九二、新発田市教委一九九七）、

大窯3段階の瀬戸・美濃製品に至っては、図示されているものは皆無である。また、中条町政所条遺跡群で一六世紀代まで残る下町・坊城C地点の瀬戸・美濃大窯製品は、1段階が60片（破片数）に対し、2段階はなく、3段階はわずかに4片であった（二）（中条町教委二〇〇一）。

また、庄内藤島城は、文献上明らかに一六世紀末まで存続していたと考えられるにもかかわらず、大窯3段階に限定できる資料は1片、2〜4段階でも9片に過ぎない（金子二〇〇〇）。

次いで、この時期に搬入され始める輸入陶磁器はなにかというと、青花が主体で、小野分類（小野一九八二）の碗C群（直縁で見込が凹む…蓮子）・D群（直縁で見込が広い）・E群（直縁で見込が盛上がる…饅頭心）と皿C群（内湾口縁で碁笥底）・B2群（口縁端反で四方襷紋・字款などを有する）・E群（直縁で見込に紋様、高台内に字款）となる。白磁では、青花写しの碁笥底皿と菊皿、青磁では、身の浅い直縁碗がある。しかしいずれも、まとまった報告例を見い出すことはできない（三）。

国産陶器では、越前が主体であるが、甕は少なく、播鉢が多い。ただし、播鉢の搬入の始まる一四八〇年代から一六世紀初頭のもの、それ以降の播鉢との違いは明瞭ではない。卸目が口縁内側の段を越えて上方まで施されるものや角張った口縁などが、新しい要素であるが（福井県立朝倉氏遺跡資料館一九八三、上ノ国町教育委員会一九八四）、古手の要素の中での明確な位置付けは、いまだなされていない。

そして、基本となるべき土器変遷も明らかになっているとはいいたい。近年、品田高志によって、一六世紀代の主体がてづくね成形であることが明らかにされた（品田一九九九）が、一五世紀後半のものと、一六世紀前半のものを区別するのは簡単ではない。土器編年については、近いうちに稿を改めて論じたいと思う。

これらはすべての遺物に共通していることであるが、ひとえに良好な出土状況・共伴関係を抽出できる等該期の遺跡が少ないことに起因している。ようするに八方ふさがりの感があるが、これは人が急にいなくなったのでなければ、遺物が少なくても様相がつかめないということを意味していると考えられる。

このような状況は、一一〜一二世紀前半、一四世紀中葉も同様で、今回の一六世紀を併せて、今後の課題が山積している。

中世考古学においては、一世紀を3〜4段階以上に区別できない場合、文献の解釈に考古資料を用いることに対して曖昧さが残ることとなり、細かい議論を行うことが難しくなると思われる。もちろんそれは理想であり、ことは易しくないが、努力せねばならない。

このようにみてきたところ、細かい年代まで検討できるのは、瀬戸・美濃の年代観しかないことになる。

しかし実は、その頼みの綱の瀬戸・美濃があまり多く出土していないのである。元々越後は、前代から貿易陶磁器が瀬戸・美濃を凌駕している地域であるが、それなりに補完している状況にあった（水澤一九九七）。それが、大窯1段階を境に急に出土しなくなるのは再三述べてきたところである。さらに瀬戸・美濃ばかりか、貿易陶磁器をはじめとする外の遺物までもが、同様の様相を呈しているのである。その理由としては、流通システムの大きな改変が生じたことが考えられる。

そこで次に、越後以外の北東日本海沿岸地域の様相をみることによって、それが越後に限った特殊事情なのか汎広域的現象であるのかを探ることとしよう。

（3）北東日本海域での瀬戸・美濃受容状況

まず、越後以外の北東日本海沿岸地域での瀬戸・美濃の出方をみてみよう。

これらについては、近年（財）瀬戸市埋蔵文化財センターの企画展図録『列島に拡がる大窯製品・東日本の様相』（一九九九）が出版されたので、

それを元にみていくこととする。

まずは、北海道上之国町勝山館（三四〇三八頁）。「第2段階以降のものは量的に少なくな」り、「客殿」地区は「大窯第1段階を中心とした時期と第4段階を中心とした時期」の遺物が多い。ここでも、越後ほど極端ではないが、第2〜3段階の減少が認められる。

次いで津軽浪岡城（三九〇四三頁）では、「大窯第1段階の製品が多いものの勝山館ほど顕著ではなく、各段階ともまんべんなく出土」している。このことと、第2次流通圏（藤澤一九九三）にもかかわらず数点の挿鉢が搬入されていることは、関連があるものと推測される。

対して越前一乗谷朝倉氏遺跡は、細かい様相については不明であるが、全体に瀬戸・美濃が少なく、特に3段階以降のものが少ないようである。

これらの様相に前章の羽州藤島城を参照すると、浪岡城を除いて（四）大窯第2〜3段階の流通量が非常に少なくなっており、越後と共通する様相を呈していることがわかる。

（4）窯場の動向（表12・第21図）

では、なぜ一六世紀に入ると瀬戸・美濃がなくなるのか。ここでは、その一応の回答を追求するために、生産地の動向をみてみたいと思う。

まず、前代の古瀬戸製品が越後に多量に搬入されていることから、それが瀬戸・美濃窯のどこの地区で製品されたものかをみていく。

とりあえず、無釉の山皿・山茶碗をみると、ほとんどが東濃型で、7〜8型式の一三世紀後半〜一四世紀初頭のものが多く、その時期の生産窯は、ほぼ品野区に限られている（藤澤一九九七）ので、そこから搬入されたと考えられる。ただし、この時期の古瀬戸は非常に少ない。

次いで「入子」であるが、これは定量が越後の遺跡から出土している。この入子は、7型式〜9型式にかけて尾張型山茶碗専焼窯で焼かれている（藤澤一九九七、五五頁）ということであるから、瀬戸窯地内の製品が搬入されていることになる。9型式は、後I期までを含む（藤澤一九九七、五一頁表）。

越後では、中IV期以後の古瀬戸製品の出土が多いが、上の「山茶碗（皿）」や「入子」と同一のルートでもたらされたと考えた場合、両者に共通する生産地としては、瀬戸北部の品野区及び水野区が候補地としてあげられる。そして製品は、近世に至るまで庄内川は利用されず、瀬戸街道を経て津に運ばれ、近江を経て日本海側に運ばれたと考えられている（藤澤一九九三）。品野区・水野区ともにほぼ古瀬戸全期間にわたって生産を継続しており（表12-1表）、さらに大窯前半期までの稼働が認められる（藤澤一九九三）。

ではなぜ、生産が継続しているにもかかわらず、大窯1段階を境に遺物量が減少するのであろうか。確かに両地区の窯数が減っていくのもその一因かと思われるが、それにしても消費地での減り方は尋常ではない。なにかもっと大きな打撃があったと考えざるをえない。

ちなみに『瀬戸市史陶磁史篇四』では、信長の統一・畿内への進出以降の第3段階後半から京・堺方面での出土が激増し、その外の地域での出土が減少するという（藤澤一九九三）。しかし越後では、それよりもかなり早い一六世紀初頭の大窯第1段階で、流入量が激減しているのであり、これをいかに考えるべきであろうか。

当時の越後国内の状況として、戦国期に入り、戦乱を販売者側が避けたため遺物が安定的に入らなくなった、あるいは領国政策の一環としての経済封鎖が行われた（戦費調達のために陶磁器の購買力が低下した）といった可能性もある。しかしそれらの国内事情によって、流通経路の変化までが生じたとも考えにくい。

この流通路の変化ということで、想起されるのは、明応七（一四九八）年の地震津波による津の潰滅である。瀬戸・美濃との関係で問題となるのは、すでに矢田俊文が明らかにした（矢田一九九六・一九九八）安濃津の役割である。氏は、陶器出荷の明応地震以前の拠点は、「大湊」ではなく「安濃

津」であったことを明らかにしている（矢田一九九八「安濃津と太平洋海運」）。氏の説に拠れば、遠隔地に輸送される場合、いったん安濃津に製品が搬入されたことが想定される。ただし、古瀬戸の場合、『瀬戸市史陶磁史篇四』でいわれるように安濃津の北方の桑名が集散地であった可能性もある（藤澤一九九三、三九四〜三九六頁）。したがって北陸方面への古瀬戸の搬入ルートは、以下の2ルートが考えられる。

桑名↓八風峠↓今堀・安土↓琵琶湖↓北陸
安濃津↓関↓鈴鹿峠↓草津↓琵琶湖↓北陸

それが大窯期に至り、明応地震によって湊が潰滅し、流通経路が変化した結果、北陸方面への大窯製品の全体量が第1段階の途中を期に減少してしまった、というのは飛躍しすぎであろうか。

（5）北東日本海域の貿易陶磁器事情

次いで貿易陶磁器について、工藤清泰作成の「北日本の中世遺跡における分類別陶磁器出土状況」表13（工藤二〇〇〇、表1）によって、北の城館での青花の出土状況をみてみよう。最初に述べたように一六世紀に特有の青花は、碗C・D・E群、皿C・B2・E群である。これらの内、「多量」に出土しているとされているのは、勝山館と浪岡城での皿C群のみである。しかしこの皿C群は、上の青花の中で最も早く入り始める器種である（小野一九九一、図3）。ことから、瀬戸・美濃大窯1段階までにすでに搬入されたものである可能性が高い（五）。

ここから瀬戸・美濃大窯2段階以降は、貿易陶磁器の流入量までもが落ちていくことがわかる。普通に考えれば、瀬戸・美濃が入ってこなければ、貿易陶磁器がより多く流通しそうなものである。しかしなぜ青花がでないかについては、思い当たる出来事がある。それは、嘉靖二年（一五二三）に起こった寧波事件である。この折りの浙江・福建市舶司の撤廃は、本地域に大きな打撃を与えたと考えられる（水澤二〇〇〇c）。また、瀬戸内海沿岸の畿内においては、一五世紀代の北東日本海沿岸地域を思わせるかのように、一六世紀代の遺物が搬入されているようであり（貿易陶磁研究会一九九八・二〇〇〇）、両者の間には相関関係が認められよう。

したがって、北東日本海沿岸地域で一五世紀代に繰り広げられた生活様式が、一六世紀に至って西日本各地に受容されたようになったため、北陸への供給量が激減してしまったというのは短絡的であろうか。

（6）おわりに

戦国期の越後といえば「上杉謙信」、というくらい全国的に著名であるのに、その時期の考古学的なアプローチは、山城を除いてはひどく低調である。それは、最初へのべたように遺物が出ないからである。謙信が春日山城で没したとき、蔵には大量の黄金が遺されていたという。戦国時代には、強兵のためにそれほどまでに日常生活が犠牲となったのであろうか。

そして秀吉の平和は、その壁を突き破り、その結果再び漳州窯系青花や大窯第4段階の美濃、越中瀬戸、次いで唐津が堰を切ったようにもたらされ、人々の渴望を癒したのであろうか。

しかしその間、北東日本海沿岸地域の人々が、代替品もなしに過ごしたとは思えない。そのようなことが常識的に考え難いとすれば、その時期なにごとが食膳具の主役となったのか。

それはおそらく漆器に相違あるまい。この時期の漆器は、椀が青磁を写して高台を高くし、皿が増加傾向に転じたという指摘（四柳一九九七）や、樹種に広葉樹が大量に用いられ、黒色系漆器の多くに安価な渋下地が施される（四柳一九九六）などの大量生産化は、陶磁器流通の減少と表裏関係に

あるものと考えられる。木製品であることの帰結として、陶磁器より格段に遺存状況が悪かったことが、その実態をみづらくしていたとひとまず考えておきたい。

今回は、「なぜ」出ないかを最も研究が進んでいる瀬戸・美濃の様相を主に考えてきた。今後の課題とした部分が多いが、最後に上記の行論に関連して、瀬戸・美濃大窯期の製品と貿易陶磁器の量比を検討して、まとめにかえたいと思う。

先の図録（瀬戸市埋蔵文化財センター一九九九）（六）において藤澤は、いう（藤澤一九九九）。

福井一乗谷では、瀬戸・美濃小皿類に対し、中国産小皿は3～20倍で、有力な階層ほど中国産の小皿をより多く必要としたとし、それに対し北海道勝山館では瀬戸・美濃1に中国産が、1.4（客殿以外）、3.8（客殿）、津軽浪岡城では3.7（内館）、1.9（北館）倍であり、北の城館における中国製品の使用量は、領主クラスでも一条谷の町屋と同等もしくはそれ以下という（六六頁）。確かに両者の数量比率を較べると氏のいうとおりとなるが、はたしてそれは実態を表しているのだろうか。

先般筆者は、同地域の面積あたりの貿易陶磁器の出土数（破片数）の比較を試みたことがある（水澤二〇〇〇a）。その結果、一乗谷朝倉館ではあたり0.198片、15次（武家屋敷）と0.571、17次（寺院）と1.38、29次（町屋）と0.61、36次（町屋）と1.833という値を得た。それに対し、浪岡城内館ではあたり0.733片、北館では0.262、勝山館ではほとんどの調査地点で1片を越えている。ここから、あたりに換算すると、一乗谷も北の城館も貿易陶磁器の消費量は大きな差がないものと考えられる。それではなぜ、上のような比率の違いが生じたのか。それは、ひとえに瀬戸・美濃の搬入量が格段に異なるからである。すなわち北の城館は、大量の瀬戸・美濃の小皿類を消費したから、比較した場合、貿易陶磁器が少ないような印象を受けたのである。しかし、貿易陶磁器が同量ということは、瀬戸・美濃の分だけ多くの陶磁器を消費していることになるのであるから、経済的にはかつて北の城館の方が優位に立っていたとみられないこともない（もちろん陶磁器のみを対象とした議論であるが）。

また藤澤は、一乗谷では高位の遺跡ほど天目茶碗を多く消費していたことを指摘し、北ではその消費量が少なかったとしている。確かにその傾向は認められるものの、北の城館での小皿類の消費量が非常に多いため、天目茶碗が少なくみえるのではないかと思われる。例えば朝倉館では、大窯製品に占める天目茶碗の割合が64.4%に達しているといえ、実数は中国製品の17%ほどの点数である。同じく浪岡城内館では1.7%（68/3,936）、北館で9%（237/4,377）、勝山館では3～6%の数値となり、貿易陶磁器が同数程度であるとする、主郭級で朝倉館の1/2～1/3程の量となる。よって両者の間には、それほど極端な落差は見い出せない（七）のようである。あるいは、朝倉では瀬戸に占める天目茶碗の比率が高いことから、そのみを欲した結果とも思われ、天目茶碗以外の製品はあくまでも付随したかたちで持ち込まれたにすぎないと考えられることもできよう。

むしろかわらけ地域圏との関係でいえば、天目茶碗よりも土器皿と瀬戸・美濃小皿が相関関係にあると理解すべきであると思われる。したがって、北の城館にとつての貿易陶磁器及び瀬戸・美濃の小皿類は、かわらけ文化圏よりも強く必要とされたのであって、それが越後ほどの落差を生まなかった原因ではなかったであろうか。

註

（一）『瀬戸市史陶磁史篇四』では、大窯の成立期を「一四八五年」（二二二頁）とするが、その説明部分では勝間田城の廃絶年代から、文明八（一四七六）年以降としている（二二二頁）。貿易陶磁器を写す端反皿や稜花皿・丸碗の存在から一四八〇年代まで下らす事を得ず、また越後政所条遺跡群及び北海道勝山館の越前播鉢の搬入状況を併せて、ここでは後者の年代観を採る。

なお、当該期の貿易陶磁器等の出現年代については、別稿（水澤二〇〇一）を参照のこと。

(二)C地点は、以前は大窯2段階以後の遺物量が少なかったことから、大窯1段階の内に遺跡が廃絶したと考えたこともあったが、一六世紀代に搬入が始まる青花などもわずかながら出土していることと、今回の遺物量の減少現象からみて、考えを改めた。なお、分類の中には、大窯1と2段階というものがいくらかあるが、これは底部資料がほとんどで、そのみでは判断できないというものであった。したがって、1段階と2段階の中間に位置付けられる資料という意味ではなく、どちらかに帰属する資料と理解しており、断定された全体の傾向からみて、ほとんどが1段階に属する資料と考えられる。

(三)実際、一六世紀の前半においては、白磁・青花の端反皿及び青磁の稜花皿が量的に多くを占めているのであるが、これらは一五世紀後半から入ってくるため、単独では位置付けが難しいという状況にある。

(四)浪岡城は、なぜ十三湊廃絶後もそれほど求心力が低下しなかったのであろうか。あるいは関東と陸奥経由のルートが存在しており、瀬戸・美濃播鉢の出土もそれと関連すると思われるが、今後の検討課題としたい。

(五)なお、北東日本海沿岸地域における青花の搬入時期は、碗皿ともに瀬戸・美濃後IV期古段階の後半の内と考えられる(水澤二〇〇二)。

(六)ちなみに本図録は、一九九九年一月二八日付で発行されており、対する水澤二〇〇〇a論文の発行は二〇〇〇年二月であるものの、一九九九年一月中には校正を終えていたため、その成果を参照する以前の所産であることをことわっておく。

(七)ただし一乗谷では質を問わなければ、町屋の方が多くの陶磁器を消費しており(水澤二〇〇〇a)、構成比はともかく天目茶碗のmあたりの出土点数も朝倉館より多いことを認識しておく必要がある。

第二章 中世後期における瓦器の位相

1 瓦器の基本的性格

(1)はじめに

先般越後の中世後半期の瓦器をまとめたところ、その出土地の性格に大きな偏りのあることがわかった(水澤一九九七)。そこで今回は、その対象範囲を北陸から東北の北東日本海に拡大し、その様相を検討したい。

なお瓦器には、消耗品的意味合いの強い播鉢・ヒデ鉢(越後阿賀北のみ)の類いと、それと多分に性格が異なる風炉・火鉢の類いがあり、今回は後者のみを扱う。

(2)北東日本の瓦器分類

ここでは、以下の議論の前提をなす基礎作業として北東日本海(北陸諸国・出羽・陸奥国)の瓦器を網羅し分類する(一)。一般的な器種としては、風炉・浅鉢(円形・方形)・小型鉢・深鉢があり、数が少ないものに仏具・瓦燈・天目形等がある。なお、図については、できるだけ北東日本のものを引用したが、破片は出土しているものの全形がわからないものについては、他地域のものを示した。

風炉(第22・23図)

体部上半に透孔を有するものとし、Ⅰ～Ⅵ類に分類した。

Ⅰ類…直立する頸部が球胴にのるタイプで、肩に数箇所の透孔が入る。最も典型的なものである。口縁は、上面を水平にとる方頭である。頸部外面上端と付根に突線を貼付け、間に紋様を押捺するが、透孔を入れる例もある(和納館)。体部は、基本的に肩が強く張るものであるが、あまり張らないものも認められる(横曾根Ⅲ・安子島城)。そして、体部の底部際にも1条の突線が巡らされるのが通常であるが、2条の突線をめぐらし紋様帯をつくるものもまれにある(平泉寺)。体部と底部の境は明瞭である。脚は、3脚もしくは4脚だが、前者の方が多くようである。脚部の形態でさらに細分できる。a…脇に2箇所のえぐりがある猫脚、b…脇のえぐりが省略された猫脚、c…その外の脚部。なお、石製のものが、元屋敷遺跡(三島町教委一九九二)や平泉寺(勝山市一九九二)・一乗谷朝倉氏遺跡(福井県一九八四)から出土している。

Ⅱ類…ほぼⅠ類に同じも、肩部透孔下に2条の突線で構成される紋様帯を有するもの。

Ⅲ類…体部下半に3条の突線及び紋様帯を有するもの(第22図)。紋様は、上段に珠点紋、下段に連子紋という構成である。破片資料が江上館及び宮永ほじ川遺跡で出土しているのみであるが、博多(福岡市教委一九八六)及び草戸千軒町遺跡(広島県一九九三)の事例から口縁部が緩やかに内湾しながら立ち上がるものであることが判明した。脚部は、塊状の獸脚や板状となる。肩に3点の菊花スタンプを三角に配するものが多く、その他にも口縁部や透孔の周囲にも連続スタンプを入れるものがある。なお、同形で下半の紋様帯をもたないもの(b、草戸千軒町遺跡、荒井猫田遺跡(郡山市埋文一九九九)、b類に同じであるが、透孔の下方に2条の突線を巡らし、紋様帯をつくるⅡ類や浅鉢の意匠を取り入れたもの(c、道場Ⅰ(富山県文振二〇〇四)、突帶口縁部がやや上に立つⅠ類の祖形にあたるもの(d、新金岡更池遺跡(堺市教委一九九二)などがある。

Ⅳ類…Ⅰ類の下に筒形の胴部が付されたもの。下端がやや張り出すものが多い。頸部は、連子紋が多いが、浪岡城では連子紋の頸部が出土していないので、別の場合もあるようである。筒形部分は4条の突線で区切られ、上段には連子紋が、中段には蓮弁紋が配されることが多いが、外の紋様の場

合もある。下段の紋様は、様々である。なお、底部際が張り出すものと直に底部に移行するものがある。

V類…無頸で、口縁を内湾させて上面に面をつくるものである。口縁部外面に2条の突線を巡らして紋様帯を設け、さらに底部際にも1条の突線を巡らせる。脚部は猫脚となる。すなわち、浅鉢Ⅲ類に非常に類似する形態のものであるが、器高はその倍程にもなる。よって透孔部分以外の破片資料の場合は、両者を区別することが難しい。

VI類…口縁が強く内湾するもので、胴部と底部の境がなく、中空の脚部が付されるもの。なお石製のものが、一乗谷朝倉館及び平泉寺より出土している。

円形浅鉢(第24・25図)

IⅠⅧ類に分類したが、最も数量的に多く多種多様に及ぶため、今後さらに増えるものと思われる。なお北東日本では、奈良での場合のように器高が口径を越えるものはほとんど確認されていないので、ここでは脚を除いた器高の2倍以上の口径をもつものを浅鉢の目安とした。

I類…口縁と体部が直線的で、口縁を方頭とし、輪花形になるもの。2Ⅰ3個単位の菊花紋が口縁外面に押されることが多い。短い板状の脚部が付く。ただし輪花のないタイプ(b)もある。

Ⅱ類…体部が内湾するもの。口縁は、I類とⅡb類の中間形態をとる方頭となるタイプ(a)と端部を内側に水平にのばし上面に面をとるもの(b)がある。スタンプを口縁外面に押すものが多い。脚部は、I類に同じか乳頭状のものである。

Ⅲ類…器形はⅡb類に共通で、口縁部外面に2条の突線を巡らし、紋様帯をつくる。口縁端部を長く延ばすものと、短く収めるものがある。なお、紋様帯上方の突線と口縁外端の間にも紋様を施し、2段の紋様を巡らせるものもある(西川島)。さらに底部際にも1条の突線を巡らせる。肩径で3Ⅲcm程のものが多く、4Ⅲcm程に達するものや、2Ⅲcm程の小型のものも認められる。無脚のものと、乳頭状脚、猫脚のものがあるが、猫脚は風炉V類である可能性がある。円形浅鉢の中で最も一般的なものである。なお、Ⅱ類と同じく方頭となるものがあり、時期的な変化を追える可能性がある。

Ⅳ類…体部が直で方頭になるもの。Ⅲ類と同様の突線による紋様帯を有するもの(a)と有さないもの(b)がある。また、突線を有さず端部が肥厚するものもある(c)。

V類…体部が内湾し、口縁を外側へ5Ⅰ6cm折り返すもの。口縁上面に1Ⅰ2条の突線を巡らしており、口縁端に雲紋を押すものが多い。突線が1条のもの(a…浪岡城)は、外は無紋であるが、後者(b…江上館)は間に巴紋を押し、口縁帯の体部寄りの部分に4Ⅲcm間隔で小孔を開けている。

Ⅵ類…V類と同じく口縁外側へ折り返すが、折り返しが短く、体部が直なもの。口縁上端に大きな玉縁状の縁が巡る。一乗谷朝倉氏遺跡例では、体部に獅子頭状の把手がつく。近世の可能性があらう。

Ⅶ類…本類は、口縁の外側に3cm角の粘土帯を貼り付けるもの。出土例は、越前国に限られる。口縁帯外面に2条の突線をめぐらせ、猫脚が付く。口縁帯外面の突線間に珠点紋を2個単位で貼り付け、上面にも2条の突線を巡らせるもの(a)と、上面が平らで外面の突線内に珠点紋を連続して巡らせるもの(b)がある。

Ⅷ類…下半にスカート状の脚部が付くもの。上半が、皿状となるものが一乗谷で出土している。ただし、上部が浅鉢Ⅱ類となるものもあるようである(布留)。なお、本例は瓦燈の台である可能性がある。

長方形浅鉢(第25図)

円形に比してやや数が少ないが、一般的な器種の一つである。構成比率は、遺跡によってばらつきがある。I・Ⅱ類に分類した。

I類…口縁を内側に折り曲げるもの。方形であるという点を除けば、突線と紋様の構成、脚部形態等は円形浅鉢Ⅲ類と同様である。また底部

際の1条の突線下にスタンプを押す例もある(和納館)。長辺35〜40 cm、器高11〜14 cm(除脚部)のものが多く、円形浅鉢Ⅲ類と同じく器高が10 cm以下の小型製品も存在する(江上館)。また突線を有さないタイプ(b)や直縁のもの(c)もある(平泉寺)。

Ⅱ類…多角形のもの。体部がⅠ類より厚く、口縁は方頭になる。突線の位置はⅠ類と同様であるが、上2条は右下がりの、下1条は左下がりの刻目が入れている。上2条の突線間には、馬のスタンプが入る。江上館のみでの出土である。

円形小型鉢(第26・27図)

器高10 cm以下の鉢類を一括した(ただしⅢ類を除く)。径は、ほぼ20 cm以下となる。円形浅鉢と並んで多くのバリエーションがあり、Ⅰ〜Ⅴ類に分類した。一般的に香炉と呼称される器種が多いが、機能的には線香立等の別の用途に用いられたものも多くあるものと思われるので、小型鉢とした。

Ⅰ類…体部がやや開きぎみに直立し、断面が箱形を呈するもの。最も一般的なもので、脚部は板状のものや乳頭状のものがある。体部には、スタンプを押すものが多い。口縁部の形態により、方頭(a)、尖頭(b)、外反(c)、外反で波状(d)、有段(e)に5分できる。

Ⅱ類…体部が内湾するもので、口縁を内側に引き出して上に面をとるもの。すなわち浅鉢Ⅱb類を小型化したものである。ただし脚部形態は、乳頭状となる。外面にスタンプを押すものが多い。数的にはあまり多くなく、三貫梨遺跡出土資料や下町・坊城B地点出土資料が好例である。

Ⅲ類…口径20 cm程になるⅡ類の下に筒状の体部が付くもの。ただし、体部が内湾するものの口縁がやや厚肥する直縁のもの(b)もある。最も手の込んだ品で、風炉におけるⅣ類に対応するものである。外の器形と異なる大型の香炉と考えられる。筒形部分は、突線により2分され、上段には連子紋が多く、下段には多様な紋様が入られるものが多いが、紋様帯が1段のものもある。脚部は、板状脚が多いが、獣脚の場合もある。筒状部分の破片の場合、風炉Ⅳ類と混同しやすいが、径が小さいことや筒形部分の紋様帯が少ない(2段もしくは1段)こと、脚部の形態等から識別が可能である。なお完存資料はなく、下町・坊城C地点出土資料及び水原館・和納館資料品から推定される器形であるため若干の不確定要素を含む。また、やや形態が異なるものが安子島城より出土しているが、とりあえず本類に含まれるものと考えておく。

Ⅳ類…袴腰形のもの。内湾する体部に直立する頸部と外反する口縁を付したものである。青磁あるいは瀬戸・美濃製品を写したものであると考えられるが、体部には多段のスタンプが入る。体部片では、燭台や仏花瓶と判別しづらい。

Ⅴ類…短頸壺形のもの。

Ⅵ類…Ⅰ類の体部が直に立ち、方頭を呈し、底部際を駒の爪状に張り出させるもの。内面中位に突起があり、蓋を伴うと考えられる。脚部は板状の三脚。体部外面に二段程のスタンプを押す(至徳寺遺跡、下町・坊城B)。瓦燈の下部である可能性が高い。

方形小型鉢

器高10 cm以下の方形の鉢を対象とした。Ⅰ・Ⅱ類に分類した。数量的に限られているので明確ではないが、円形のものとは異なり素紋のものが多いようである。

Ⅰ類…直縁のもの。

Ⅱ類…口縁に段を有するもの。

深鉢(第26図)

口径が脚を除いた器高の2倍以下となるものを一括し、Ⅰ〜Ⅵ類に分類した。数量的に限られている上に、比較的大型の製品が多いため器高のわからないものも多く、断片では浅鉢と判別できないものがある。

Ⅰ類…直縁のもの。無紋のもの(a…江上館)と、突線が多段に巡らされるもの(b…江上館・浪岡城)、内面に沈線が入られるもの(c…春日

山城)がある。

Ⅱ類…体部が内湾しながら立ち上がり、口縁を外へ折り曲げるもの。深鉢の中では、最もポピュラーなものである。高台が付くものが多いが、側のない猫脚の場合もある(和納館)。体部には1〜3条の突線が巡らされ、間にスタンプを押すものがある。

Ⅲ類…体部が内湾し、口縁が外反するもの。中位に2指でつぶした突線がめぐり、板状の脚部が付く。紋様は、口縁部と突線の間に、雷紋と下向きの半菊花紋を押している。梅原胡摩堂遺跡出土品に限られる。

Ⅳ類…口縁が内湾するもの。浅鉢Ⅱ類を深くしたもので、側のない猫脚が付く。安子島城でのみ出土。風炉Ⅵ類の可能性もある。

Ⅴ類…口縁を内側に折り曲げるもの。体部は直線的で、口縁帯両端及び体部中位に波状突線を巡らし、さらに口縁帯の間にも突線を配する。また体部上半には花紋を貼り付けている。口縁の断面が三角形を呈するもの(一乗谷)と方頭になるもの(浪岡城)がある。

Ⅵ類…口縁に段を有するもの。体部は筒状で、高台が付く。口縁の段の脇及び体部中位に突線が巡らされる。ただし突線は不確定要素である。なお口縁部形態から、蓋が付属する可能性があるように思われる。全形が判明するものは浪岡城でのみ認められるが、藤島城で出土している高台片も本類に含まれると考えられる。

仏具(第27図)

仏具としては、燭台と仏花瓶があげられる。なお、円形小型鉢の中には、Ⅳ類をはじめとして香炉と考えられるものがあるが、多種多様に及ぶため別立とした。もちろん三者がそろって、三具足となる。

Ⅰ類…金属器を写した燭台である。

Ⅱ類…金属器を写した仏花瓶である。基本的に燭台と同工で破片では識別が難しい。ただし中位の胴部は、燭台が丈と幅が同程度になるのに対し、頸部は丈が短いため太鼓胴となる。また花瓶は、太鼓胴部分の下に仕切りを設けるようである。口縁部は、ラッパ状に開く。脚部は、端部が口縁と同様にラッパ状に開くa類(一乗谷・藤島城)と金属器を忠実に模倣している端部が直に折れるb類がある(浪岡城)。そして胴部を中心に、頸部・脚部をスタンプで飾りたてる。

瓦燈

Ⅰ類…釣鐘形の体部に透孔を設けるもので、上に皿を有するa類と有さないb類がある。a類は一乗谷朝倉氏遺跡に多くみられ、多くは素紋である。

b類は浪岡城や伝至徳寺等で出土例があるが、伝至徳寺例では頂部に孔が開けられており、上皿の取り替えができる構造をもっていた可能性がある。またb類は、3条の突線が巡らされ、間に紋様が入り、上段の突線の上に透孔が入れられる。本類は、Ⅱ類のカバーである可能性がある。

Ⅱ類…浅鉢Ⅸ類の中央に皿が付くタイプのものである。一乗谷でのみ認められる。

天目碗

陶磁器の天目茶碗を模したもので、釉垂れを表現する。江上館例では、黒漆を塗って光沢を出しているものや、皿形のものがある。ただし漆塗りのものの多くは、土師質である。あるいは尻八館の漆塗り土師器も本例に含まれようか。村上市大館や伊豆の堀越館での出土もみられる。

その他

壺(浪岡城、下町・坊城C)・蓋(和納館)・茶釜(下町・坊城B、大光寺新城)、羽釜等があるが、資料の増加をまちたいと思う。なお、土師器の中には瓦質を呈するものもあり、両者の関連が注目される。

(3) 瓦器の年代観

ここでは、前章の器種分類をうけて、その概ねの年代観を示す。瓦器は、その壊れやすい脆弱な焼成にもかかわらず、消耗品ではないため、かなり長期にわたる使用状況が認められる。したがって、その間の型式変化は比較的乏しい。それは、器形そのものの変化というよりも、新たな器形の追加というかたち（組成変化）をとって表れたためと考えたい。なおここでは、遺跡の消長に併せて器種の年代観を求めるという方法をとる。

風炉

I 類・II 類・V 類…最も長期にわたって存続する瓦器文化を代表する器形の一つである。一四世紀末～一六世紀。肩がナデ肩になるもの、頸部の紋様帯に複数の種類のスタンブが多段に押されるもの、体部の底部際に2条の突線をめぐらし紋様帯をつくるものは、比較的新しい要素と考えられる。

III 類…博多遺跡群や草戸千軒町遺跡等での出土例から、初現期の風炉の一群であることがわかる。一四世紀第2四半期には確実に現れており、一五世紀代まで一部残るようである。

IV 類…I 類とともに風炉の器形を代表するもので、時期的にも重複し、一六世紀代にも続くが下火となるようである。紋様の基本構成は、頸部・連子紋、筒形部分上段・連子紋、中段・蓮弁紋、下段・不特定となり、そこから逸脱するものは、一六世紀代に下るものと考えられる。

VI 類…一五～一六世紀代。

円形浅鉢

I 類…いわゆる奈良火鉢で、一四世紀代の所産である。この段階で、すでに奈良以外の産地と考えられるものが出現している(二)が、ほとんどは搬入品と考えられる。なお現時点で、山形県の酒田市豊原B遺跡(山形県教委一九八二)や藤島町平形遺跡(山形県教委一九七六)での出土が北限で、日本海沿いに搬入されたものと考えられる。

II 類…II b 類は一四世紀後半。口縁上面に面をとるa 類は、一四世紀末～一五世紀前半。

III 類…器形がII a 類に共通であることから、一四世紀末には出現していたと考えられる。そして一六世紀代まで存続する、最も一般的な器種の一つである。なお、方頭となるIII b 類は、II b 類に対応するものではなく、a 類の退化したもので出現時期は一五世紀代となるものと思われる。

IV 類…b 類↓a 類という流れが考えられる。a 類は一五世紀代と考えられることから、b 類は一四世紀後半としたい。また、突線を有さず端部が肥厚するc 類は、16世紀代に入って現れるもので、近世へと続く器形である。

V 類…VIII 類…V・VII 類が一五世紀後半で、外は一六世紀代。

長方形浅鉢

I 類…突線による紋様帯をもつものは、一五～一六世紀。突線を有さないb 類や直縁のc 類は、新しい要素である。

II 類…一五世紀代の所産である。

円形・方形小型鉢

各器形とも主体は一六世紀代であるが、円形小型鉢I a ↓c 類・II 類・III 類は一五世紀代から認められる。

深鉢

一六世紀代のものが多いが、I・II・IV 類は一五世紀代から認められる。

その外、天目形は一五世紀代、仏具・瓦燈・蓋・壺等は一六世紀代となる。

以上、瓦器は、量的には一五世紀後半代に最盛期を迎える。器種は一六世紀代に入って多様化するが、量的には減少する。そして一六世紀後半には、

円形小型鉢・浅鉢・深鉢・瓦燈の一部を除いて、生産が終息するようである。

(4) 瓦器の地域性の抽出

瓦器を考えるとときまず思い浮かぶのは、奈良の火鉢座であろう。事実、中世の遺跡がまだあまり調査されていなかったところ、瓦器Ⅱ奈良産という図式があったように思う。しかし『西川島』以来、胎土から能登産の可能性が指摘され(三辻一九八七)、最近では珠洲と共通する海成土の証左である海綿骨針の入っている瓦器の一群の存在も知られるようになってきており、産地が奈良以外に存在することは確実視されるところである。

ただし、奈良がその震源地であったことに変わりはなく、ここで問題になるのはその影響の度合である。それを探るためには、まず瓦器自体の諸要素を奈良産のもの(三)と北東日本のものとで比較する必要がある。すなわち瓦器の使用者が、瓦器に何を求めたのかということである。その場合、例えば京都系土師器では、原型と模倣型の概念が提示されている伊野一九八九が、これは京都の土師器をいかにまねるかを判断基準としたものである。しかし瓦器においては、器形が多様であること、いぶし(色調)の問題、紋様の入れ方等々、調整技術以外の要素が非常に多く、また以下のように似せることをそれほど重要視していたとは思えないので、原型・模倣という概念はそれほど重要ではないように思われる。よって、見た目から細部へと段階的にみていこう。

色調

最初に目に入るのは、色である。奈良のものは、概して黒い(特に雑器類)。対して北東日本のものは、そのこだわりがない。黒くても赤くても支障がないため、酸化焼成を示す暗赤く橙く黄白色を呈するものも多い。なお関連して注目されることは、土器との関連である。例えば江上館では、土器皿の中に瓦質を呈するものがあり、一定量を占めている。黒い土器は瓦器との関連をいやが応にも考えざるをえない。それは、焼成技術の共通性を意味するものであり、赤い瓦器と通常の土器皿との関連、すなわち両者の同時焼成、あるいは同様の窯構造で焼かれた可能性が想定される。よって色調に関しては、生産組織の出自を反映したものと考えたい。そして見た目の感じが重要視されていないということは、奈良産が至上のものではなく、その使用形態及び生活様式が主に求められていたことを意味している(四)。

器形

次いで目につくのは、器形である。主要なものは奈良産の器形と共通しているのであるが、奈良に見いだせないものがわずかに存在する。円形浅鉢Ⅶ類、円形小型鉢Ⅰd類、深鉢Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類、天目形などがそれに相当するが、これらも奈良に原型が見出される可能性があろう。ただし、器高が口径を超えるような深鉢器形は、北東日本では出土しておらず、ほとんど流通していなかったようである。北東日本で主要な器種というと、風炉Ⅰ・Ⅳ類、円形浅鉢Ⅲ類、方形浅鉢Ⅰ類、円形小型鉢Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類、深鉢Ⅱ類などがある(表一)。その外の特徴としては、突線を多用するものが多いということや次項のスタンプの多様性ということがいえよう。

紋様構成

スタンプの種類はまだ集成できていないが、幾何学紋、植物紋、動物紋、天文紋等多種多様に及ぶ。そして本地域では、かなり紋様を多用するものも多く、突線や口縁を波状にするものも存在する。以下特徴的な紋様構成を持つものを器種ごとにとりあげてみよう。

風炉では、初現期のⅢ類の特にb類c類では透孔の周囲や口縁部に沿って多種のスタンプを多用しており、揺籃期における不安定さが認められる。Ⅱ類以降は、肩部に突線を伴う紋様帯構成が成立し、以下の主流となる。また、紋様を多用するⅣ類にしても、基本的な連子紋を外の紋様に置き換えることなども行っている。しかし風炉に関しては、それほど奈良の形態を逸脱するものは認められず、その影響力が最も強い器種であるといえよう。

円形浅鉢では、Ⅲ類でも紋様を2段に巡らせるものがある(西川島)。また、Ⅴ類・Ⅵ類は、畿内では素紋であるが、口縁帯や体部に紋様をいれている。

方形浅鉢では、下方の突線下に珠点紋を巡らせるものがある(和納館)。

小型円形浅鉢では、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類共に多段にスタンプを巡らせるものが多く、Ⅲ類に至っては風炉Ⅳ類の小型化といった趣を有している。深鉢では、Ⅳ類の中で2〜3段の突線をめぐらし、その間に1〜2段の紋様をおすものがある。

仏具では、頸部・胴部・脚部に3〜4段の紋様をめぐらせる。ただし頸部・脚部については、無紋のものも多い。

瓦燈でも2〜3段の突線の間に紋様を充填するものがある(伝至徳寺・浪岡城)。

これらのように、紋様を器面に多用することも、地域性の表れといえよう。

調整技法

最後に、ヘラミガキ・布ミガキや突線の取り付け方、底部の離れ砂痕等、細部の技術に関する部分である。これらの整形技法を通じて観察すると、奈良との技術の遠近が判断できる。それは、生産組織の問題である。例えば、江上館の出土瓦器を丁寧観察すると、少なくとも奈良のもの、奈良に近いもの、奈良とかなり異なるもの、奈良にないものが混在しており、奈良を除く複数の産地が想定されるのである(5)。それは、奈良の職人の直接的指導によるものと、製品をみて似せてつくったものに大別される。これを敷衍すれば、色調の部分で述べたように、小地域ごとに様相が異なる土器皿の分布域との関連が問題となってこよう。ただ、これを実証するには、比較資料が限定されていることから、今後の積み残しとしておく。

(5) 瓦器出土遺跡の様相と越後を例にとつて

ここでは、筆者のフィールドである越後の瓦器出土遺跡を一覧し、瓦器がどのような性格の遺跡から出土しているのかを検証したい。越後では管見によれば、30遺跡ほどで瓦器の出土が認められ、それを集めたのが表15である。個々の遺跡の説明は、以前行ったことがある(六)ので、ここでは特徴的な事柄のみをとりあげる。

まず器種であるが、一般的なものとして風炉Ⅰ・Ⅳ類、円形浅鉢Ⅲ類、方形浅鉢Ⅰ類、円形小型鉢Ⅰa・Ⅰc・Ⅲ・Ⅳ類、深鉢Ⅱ類などがある。特徴的な器種としては、江上館の漆塗り天目碗、多角浅鉢、浅鉢Ⅴ・Ⅵ、深鉢Ⅰ類、伝至徳寺での瓦燈などがあり、江上館及びその周辺の下町・坊城遺跡からなる政所条遺跡群での器種の豊富さが指摘できる。越後におけるほとんどの器種は、ここに認め得るのである。なお円形小型鉢Ⅲ類は、これまでに完存の資料がなかったために風炉Ⅳ類と混同していたもので、下町・坊城C地点及び水原館出土資料により新たな器形設定が可能となったものである。反対に、越後に今のところ認められない器種としては、円形浅鉢Ⅶ・Ⅷ類、円形小型鉢Ⅴ類、深鉢Ⅲ・Ⅴ類、燭台等がある。

その外、新発田城では、風炉Ⅳ類の上半が欠損した後に上端を擦り直して使用しているものがあり、その特異性を物語る好例とみなされる。

また、古手に位置付けられる2〜3単位の大型の菊花紋スタンプを押す浅鉢(円形浅鉢Ⅰ・Ⅱ類及び円形小型鉢Ⅰa類の一部)は、新発田城・小本城下館・木崎山遺跡・寺町遺跡・樋田遺跡等で出土しており、一四世紀代における拠点的な遺跡ということがいえよう。

そして出土した遺跡の性格を国人領主級以上・寺院・国人領主の家臣級・有力村落・一般村落に一応類別すると、表15のようになる。

本表を詳細にみていくと、一般村落としたものは、円形小型鉢のみを数点もっていた遺跡であることがわかる。さらにいえば、円形小型鉢Ⅰ類1個体とⅡ類もしくはⅣ類1個体という組み合わせが認められるが、例が限られているので資料の増加をまちたい。もしもこの小型円形鉢を仏前の焼香容器と考えることが許されるならば、一般村落への仏教儀礼の浸透を物語る遺物と考えられなくもない。

次いで有力村落では、円形浅鉢Ⅲ類を持つようになる。ただし、村落につき1個体程度に限られている(七)。

次いで国人領主の家臣クラスでは、風炉をもつようになることがわかる。ただし阿賀北の諸遺跡での出土状況は、種類・量ともに多く、上郡の遺跡と対象をなす。なお、小木城下館は、円形浅鉢Ⅰ類のみの出土であるため、時期的に除外して考えたほうがよいであろう。また、横曾根Ⅲも報告では数量が不明であり、かなり個体数が増加するものと思われる。とりあえず5遺跡と考えると、1遺跡につき風炉1個体、浅鉢1個体、小型鉢2個体、深鉢1個体程度をもっていた勘定になる。この階層から風炉の外に、長方形浅鉢、円形小型鉢Ⅲ類、深鉢Ⅱ類をそろえるようになる。なお、下町・坊城C地点は、その種類の豊富さ及び陶磁器類の質と量から、国人領主級の実力をもった居住者を想定できるように思われる。

寺院では、国人領主の家臣級の遺跡に比して、浅鉢が少なく、風炉が多い傾向が認められる。平均すれば、風炉は3.75個体となるが、寺院にも階層があり、下町・坊城B地点・寺町遺跡と三貫梨・長松遺跡の間には格差がある。風炉で比較すれば、8・4・2・1個体となり、陶磁器にもそれは表れている。

そして地域社会の頂点に君臨したと考えられる国人領主以上の階級では、どのような状況が認められるであろうか。それはなによりも器種が非常にバラエティに富み、数量が格段に増加するということがあげられる。例えば風炉は、Ⅱ遺跡で割ると平均3個体を超え、一見寺院よりも少ないようにみえるが、内実は江上館・宝積寺館・和納館を除くと、数量的なデータがほとんど把握できないというのが現実である。したがって上述の3遺跡の平均である7個体強というのが、実際に近い数量といえるであろう。なお風炉の器形については、Ⅰ類がほとんどを占めるが、Ⅳ類が1遺跡につき1個体の割合で出土する傾向にあり、あるいは陶磁器における青白磁梅瓶に相当する威信財的役割を担っていたのではないかと思われる。これは、Ⅱ個体という越後最大の出土数を誇る江上館においても同様であり、1個体のみというところに意味を見出したいところである。また、円形小型鉢Ⅲ類については、出土状況からみて風炉Ⅳ類の代用品という側面と、風炉Ⅳ類と大小のセットをなす場合の両方が認められよう。

このようにみてくれば、円形小型鉢しかもたない遺跡、円形小型鉢に加え円形浅鉢Ⅲ類をもつ遺跡、風炉をもつ遺跡の三段階に区別することが可能となるものと思われる(八)。この内、前二者の占める割合は、169個体中17個体と全体の1割ほどに過ぎないのである。

したがって越後における瓦器の主要な受容者は、国人領主及びその家臣団・寺院といった支配階級であり、瓦器は彼らの生活様式に密接に関係する遺物という位置付けを再確認することができよう。

(6) 瓦器の出方―北東日本の事例から

前段で瓦器の出土する遺跡に偏りのあることが判明した。ここでは、北東日本の主要なもしくは興味深い事例を有する瓦器出土遺跡を旧国ごとにとりあげ、その出方を検討することとする。そして、それによって北東日本の瓦器の位置付けをより鮮明にするのがねらいである。ただし、調査面積や地点に大きく左右されるという考古資料の特性から、ある程度の調査面積を有し、郭相互あるいは館とその外側といった比較が可能な遺跡に限って検討を行ったので、必ずしも各国一律とはなっていないことを最初にことわっておく(表16・17、第28図)。

津軽では、浪岡城(浪岡町教委一九七八～一九八九、工藤一九八八・一九八九・一九九五(九))を取り上げる。浪岡城は、8郭からなる巨大な城であるが、ここでは発掘調査が進んでいる内館と北館を中心に瓦器の出方をみていくこととする。

内館は、主郭にあたる郭で、それは6点という風炉の点数が示している。総個体数は、13個体で、2個体の天目形を含むことが注目される。ただし円形小型鉢が少なく、一六世紀代には、瓦器があまり使われない生活環境にあったと推測される。すなわち「政庁」としての機能がそれと関係してくるように思われる。

北館は、明確に屋敷割がなされる郭で、瓦器は38個体を数える。器種は、風炉Ⅳ類、円形小型鉢Ⅰ・ⅢⅤ類、深鉢Ⅱ類、仏花瓶などが多く、瓦燈や燭台の存在も注目される。これらはおそらく、屋敷地ごとセットとして搬入されたものと推定される。なお、瓦器の分布傾向及び器種構成からすれば、一五世紀第4四半期〜一六世紀前半にその多くが将来されたと考えられる。

以上、風炉の出土点数から、内館が主郭であることがわかるが、「政庁的」色合いが強いことから数量的には北館を下回っている。これは、北館の瓦器の器種構成が一六世紀前半代の組成を有していることも関係してこよう。なお決定的な事実は、北館の東方の東館では、調査面積1,330㎡で瓦器の出土が皆無であることである。したがって東館の居住者は、瓦器を必要としないというよりも、全く出土しないことからすれば、瓦器の使用を許されない階層の人々が住まいする郭という位置付けができよう。このように瓦器は、居住者の性格及び場の機能を物語る遺物であることがわかる。

陸奥北部では、岩手県水沢市の白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡（お伊勢館）（岩手県埋文一九九七）を祖上にのせる。館はⅠⅤ郭からなる郭群が複合する形態を取るもので、中世の遺物は主にⅠ郭とⅡ郭から出土している。遺物点数は、Ⅰ郭（主郭）が調査面積6,000㎡で174点、Ⅱ郭が同じく2,454㎡で69点と少ないが、瓦器をみると、Ⅰ郭で30点（破片数、風炉3個体）、Ⅱ郭で1点の出土である。調査面積が約2.5倍とはいえ、その格差は歴然としている。すなわち、主郭では瓦器、それも主に風炉が必要とされたことがわかる。

陸奥南部では、福島県中通りの安子島城（郡山市埋文一九九三）をみていく。調査面積は12,000㎡で、12個体（報告書では15個体）程の出土である。東側に存在する郭との関係は不明であるが、比高差及び長期にわたる生活痕跡から主郭に相当する郭と考えられる。円形浅鉢Ⅱ類が出土しており、一四世紀代には地域のセンターであったと考えられる。風炉は4個体程度出土しているが、Ⅳ類が出土しておらず、一五世紀代にはやや求心力を失ってしまっているようである。なお、外に例をみない円形小型鉢が出土していることにも注目される。

出羽では、庄内の藤島城（山形県教委一九九七）にご登場願う。現在まで6,343㎡（2〜6次調査）が調査されており、個体数は30個体にも及ぶ。当然ながら、各次の調査で同一個体の破片が別個に出土する。ここでは、4個体が別次の調査で重複していることを確認した。したがって、総個体数と別個の調査地点の個体数とは一致しない。

主郭に相当する郭内の調査は、3・5・6次が相当する。10個体（風炉Ⅰ・Ⅱ類4、Ⅳ類1等）が認められるが、円形浅鉢は認められない。

主郭の西方の郭（便宜上、西郭とする）では、2次調査が相当し、18個体の出土が認められる。器形にバラエティがあり、主郭よりやや新しい様相を示す。なお、2次調査の瓦器は、奈良産のものの比率が高く、播鉢までが搬入されているという（一〇）。

主郭の北側の郭（便宜上、北郭とする）では、4次調査が相当し、6個体の出土が認められた。調査面積に対する比率は最も低い。なお全郭を通して円形浅鉢がごく限られており、これは東北に共通する傾向である（一一）。

ここで各郭の様相をまとめてみよう。北郭は、風炉Ⅳ類をもっていないこと、量的に劣ることから、もつとも下位に位置付けられることに異存はない。問題は、主郭と西郭の関係である。西郭の調査面積が主郭のその約1.3倍であることや、同一個体破片の重複を考えても、同等かもしくはやや西郭の方が量的に多くもっているようである。これは、これまでの傾向と齟齬をきたすものである。ここでは、とりあえず2次調査の調査地が城館内部の仏堂に関連する（一二）ことからくるものと考えておきたい。

越後では、館とその周辺の事例及び寺院と集落の例をあげる。

まず前者では、中条町の江上館とその周辺に展開する下町・坊城遺跡A〜C地点を取り上げる（中条町教委一九九三ほか）。

一五世紀代地域の中心であった1町四方の居館では、35個体の瓦器が出土している。風炉ⅠⅤⅥ類11個体（Ⅰ類6個体）、円形浅鉢Ⅲ類7個体、方形浅鉢Ⅰ類8個体が主なもので、円形小型鉢は全く出土していない。また、漆塗り天目も3個体出土しているが、これは中国天目20個体、瀬戸美

濃天目18個体以上が存在しており、補完するといった意味合いのものではない。なお、館は一五世紀の内に廃絶する。

館の西側に隣接する下町・坊城遺跡A地点では、溝に囲まれ石組み井戸を伴う屋敷地が2区画みつかっている。これらの屋敷地は、位置関係から家臣団の居住地の可能性が高い。瓦器は少なく、5個体を数えるのみであるが、風炉及び円形小型鉢Ⅲ類、深鉢Ⅱ類といった一般集落ではみられないものが認められる。

A地点の南西に位置するB地点では、密教法具を伴う寺地があたっており、瓦器は20個体出土している。風炉8個体（Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ類）、円形小型鉢6個体、茶釜などが主なもので、館と比して浅鉢類が欠如している。なお本寺院は、館よりやや遅くまで維持されており、それが円形小型鉢や仏花瓶の存在として現れていると考えられる。

B地点の南方のC地点は、一三世紀後半～一四世紀代にピークを迎える物資の搬入口である。いわば川湊とそれに伴う市庭の空間である。そして一五～一六世紀にもかなりの規模で継続されており、最も長期にわたり維持されている。瓦器は、22個体出土しており、風炉と円形小型鉢が多い。また、一四世紀代の円形浅鉢Ⅰb類及び、漆塗り天目・仏花瓶も注目される。

以上、館とその他では質量および器種構成にかなりの相違点があることが判明した。器種構成では、館で浅鉢が多用されているのに対し、館の外では代わって円形小型鉢が多く用いられている。後者については、時期的な問題と考えられるが、前者の役割については、現時点では明らかにできていない。

次いで、東頸城の寺町遺跡と樋田遺跡を比較してみよう。

寺町遺跡(吉川町一九九四ほか)は、その名の示すとおり、遺跡の一角に寺院が存在した遺跡である。調査面積は34,200㎡にも及ぶが、瓦器は寺院が存在したと考えられる第1次調査区に集中している。風炉Ⅰ・Ⅳ類、円形浅鉢Ⅲ類がそろって出土しており、さらに円形浅鉢Ⅱ類が存在していることから、一四～一五世紀にかけての地域の中心地であったことがわかる。

対する樋田遺跡(吉川町一九八九ほか)は、寺町遺跡の北西1kmに同時期に存在した集落遺跡である。遺跡は、溝によって半町程度の屋敷割がなされている。円形浅鉢Ⅰ類が出土しており、一四世紀代には寺町遺跡と同じく地域のセンターとしての位置付けが与えられよう。それが一五世紀代では、調査面積32,000㎡に円形浅鉢Ⅲ類もしくは風炉Ⅰ類が1個体のみとなり、寺町遺跡との間に格差が生じている。このように、寺院(寺町遺跡)と集落(樋田遺跡)では、瓦器の出方に相違が認められることは、再三述べたところである。

越中では、まとまって瓦器が出土した遺跡がなく、中世前期に充実した内容をもつ福光町梅原胡摩堂遺跡(富山県文化財団一九九六)でさえも、6個体程度の出土が認められる程度である。ただし、風炉が半数の3個体を占めていることもあり、調査区の関係が考えられるところである。また、本遺跡でのみ出土している、深鉢Ⅲ類という特殊な器形も注目される。

能登では、中世集落遺跡の代名詞ともいえる西川島遺跡群(穴水町一九九七)をとりあげる。しかしここでも、上の梅原胡摩堂遺跡と同じく中世前期に比して瓦器の出土する中世後期は下降期にあたり、遺跡の調査面積約16,000㎡に対し、24個体が報告されているに過ぎない。機種からみると、風炉が出ていることからみて、ある程度の階層の存在が想定されるが、風炉Ⅳ類の欠如が気にかかる。また、円形浅鉢Ⅲ類及び方形浅鉢Ⅰ類が風炉よりも多く出土していることも、国人領主級の遺跡と異なる点である。それに比して、一四世紀代に遡る円形浅鉢Ⅱ類が2個体出土しているのは当時の状況を表しているよう。なお、同じく能登外浦の門前町道下元町遺跡(石川県埋文一九八五)では、小面積の調査にもかかわらず風炉Ⅳ類が出土している。本遺跡は、石を多用した遺構や石組側溝を有する6m幅の道路及び曹洞宗大本山総持寺との位置関係からすれば、寺院に関連した遺跡と考えることもでき、風炉Ⅳ類出土の背景がみえてこよう。

加賀では、越中同様あまりまとまった出土をみる遺跡がなく、金沢市普正寺遺跡(石川県埋文一九八四)の円形浅鉢Ⅱ類やⅢ類が著名である程度である。ただ、集落ごとにごく少数が出土することからすれば、越後に似た様相がみてとれる。ここでは、宮永ほじ川遺跡(松任市教委一九九五・一九九七)をとりあげる。中心時期が一二―一四世紀であるため、瓦器の出土は多くないが、風炉が3点出土している。風炉は、いずれも2区の約20m四方の区画溝及びその周辺の遺構から出土しており、区画溝内の住人(是時荘の開発領主である宮永氏に関連する人物か)の関与が想定される。

越前では、平泉寺(勝山市)と福井市一乗谷朝倉氏遺跡(福井県立朝倉氏遺跡資料館一九八四ほか)が注目される。比率からいうと、前者での出土量が顕著である。これは、平泉寺の遺物量のピーク時期が、一乗谷よりも古く一五世紀代であることが第一に考えられ、瓦器の消長がうかがえるところである。一乗谷では、特に円形浅鉢のバラエティの豊富さが特徴的であるが、風炉の数量は少なく、一六世紀代の様相を示す。そして、一六世紀後半には瓦器自体が激減するという(二三)。なお越前に特有の浅鉢Ⅶ類という器種の存在から考えれば、両遺跡の近辺に生産地を想定できるのではないかと思われる。

以上のように、城館においては、館の中と外あるいは郭相互で、主郭に近い方に瓦器の出土数が多いことがわかった。また寺院・仏堂での出土も多く、その宗教環境・行事に密接に結び付く性格を有していることも想定された。すなわち瓦器は、城主の仏教信仰という内面的・精神的な生活と密接に結び付いた器物であったと考えてよいのではなからうか。

付、風炉Ⅳ類の性格

なお、瓦器の出方のしめくくりとして、前章以来注目してきた風炉Ⅳ類について、さらに検討を加えてみたい。

前章では、越後において風炉Ⅳ類が1遺跡につき1個体出土していることに着目した。しかるに北東日本では、3個体以上風炉Ⅳ類が出土している遺跡が少なくとも3つある。浪岡城北館・藤島城・平泉寺がそれである。これらを解釈することによって、その性格をより鮮明にしたいと思う。

浪岡城北館の風炉Ⅳ類は、3個体とも胴部上段が連子紋である外は、基本パターンからはずれないものである。まず頸部が連子紋ではない。そして胴部中段は、1個体が半亀甲紋である外は省略されてしまっているものである。よって、これら規範からはずれないものは、比較的新しい時期の所産と考えられる。すでにみたように、北館は一六世紀前半に最盛期を迎え、9ブロックの屋敷割がなされる。このことと、3個体の風炉とは、無関係ではあるまい。すなわち9ブロックの中の3つの屋敷で風炉Ⅳ類が用いられたと考えたい。したがって、1遺跡につき1個体という原則は、屋敷単位という狭い範囲とはなるが、崩れてはいないようである。そして9ブロックとはいいいながら、もたないものももてるものがあり、それが家臣団の中の地位を表していると考えるのは、うがった見方であるうか。

次いで、藤島城である。風炉Ⅳ類は、2次調査で2個体、5次調査で1個体の計3個体の出土がある。主郭西方の郭にあたる2次調査の遺物は、一は胴部上段が雷紋、中段が雑な蓮弁紋、頸部はおそらく花紋スタンプを押すものである。もう一は、中段が蓮弁紋、下段が菱紋となり、上段は明瞭ではないが、連子紋とはならないものである。頸部は、おそらく瓜木様のスタンプを押すものである。5次遺物の遺物は、体部紋様帯はやや連子紋が短いことを除けば基本構成をとるが、頸部は多重菱紋となる(一四)。

2次調査では、いずれも第1面の遺構に伴っており、時期的には一六世紀中―後半頃の所産と考えられる。これは、第2面の寺院の堂舎と考えられる建物の存続期間と連続するものであり、風炉Ⅳ類もこのようなバックボーンの中で考えるべきであろう。そして5次調査は、八幡社の鎮座する主郭の西隅の堀からの出土で、概ね一六世紀の前半としたい。したがって、主郭で1個体、主郭西側の郭で2個体が出土したことになる。ここで1遺跡1個体という原則は崩れてしまうのであるが、これを前述の寺院という性格に求めたいと思う。すなわち御堂ごとに瓦器のセットが必要であったことによるものと考えたい。その理由は、次の平泉寺での出土状況が明らかとしてくれる。

平泉寺は、北東日本の中で最も瓦器の使用頻度の高い遺跡の一つである。小範囲の調査にもかかわらず、3次調査で3個体を認めることができる。そして器種構成からみると、僧房単位で、風炉Ⅰ類・Ⅳ類、円形浅鉢Ⅲ類もしくはⅦ類、長方形浅鉢の4点セットが使用されているという形跡が認められる。ここから敷衍すると、館での出土も、その宗教的環境（儀礼・生活等）の中で必要であったためにセットとして持込まれたものと考えることが可能であろう。なお加えると、円形小型鉢Ⅰ類は、一六世紀に入って瓦質の三具足が整えられる以前には、少なくとも館では必要とされていないと思われる。

（7）城館と瓦器―東と都の瓦器の性格―

瓦器というと、暖房文化の一翼を担うものというイメージが強く、特に火鉢はそのように位置付けられることが多い（12）。それは機能的には、間違いない。しかし中世の瓦器は、その使われた場を問題とせねばならない。

そこで問題となるのは、我々調査担当者が近世後半以降の庶民層にまで浸透した火鉢のイメージをその前提としているということである。中世後半期の北東日本の瓦器がどのような性格をもっていたのかは、これまで縷々のべてきたところから明らかであろう。それは城館や寺院に住む殿原、すなわち支配階級に属する人々が求めたものである（二六）。瓦器は、室礼となる金属器・高級陶磁器・書画等と並んで階級を明示するために必要な権力装置の一つを構成する器物であった、と考えられる。そうであればこそ、石製の風炉までがつくられたのである。ただし、外の家財と異なるのは、そこに宗教的な意味合いが附加されていることにある。僧房でよりその出土率が高いことからすれば、仏具類はもちろんのこと風炉や火鉢類でさえも宗教的儀礼に必要な一連の什器類という位置付けを与えてよいように思われる。

そこで瓦器の使われ方であるが、紋様を押して器面を飾ることからすれば、みせるという要素が重要な位置を占めていたと考えてよからう。有名な「幕帛絵詞」（巻二）の火鉢などは、その最たるものである。ただ、具体的な使用方法については、仏教儀礼の作法とのかかわりの中で探らねばならないと考えているが、後考を期したい。

そして器種の豊富さからして、あらゆる器形に対応できる柔軟な機構を擁していたことが考えられ、それが外の生産組織と異なる特色でもあったであろう。すなわち注文生産的な生産体制が予測されるのである。造形という点においては、中で最も融通の利くやきものが外ならぬ瓦器であったと評価できよう。「まことに土は、萬物をのせたる徳あり、さまざまにつくりだし、やきなせる」（『三十三番職人歌合せ』歌評）ものであった。

最後に、畿内との対比をして、稿を終えたい。

畿内では各種の座の勢力が強く、（土器においてもいえることであるが）最も安価な消耗品という側面が強い。菅原正明氏によれば、「土師器・瓦器は庶民の日常の容器であったが、陶器・磁器・漆器は一般庶民の非日常な容器の一部、または上層階級の容器であった」（二七）という。だが、氏が示した畿内の遺物点数のピラミッド（輸入陶磁器・陶器・瓦器・土師器の順に点数が多くなる）は、北東日本では上下が逆転するであろう。すなわち、土器については山形以北という限定が必要であるが、瓦器は輸入陶磁器よりもはるかに希少品の扱いを受けているのである。それは、上物の代用品という側面をいくばくかもっていたにしても、一般の消耗品的な器種とは区別して考えた方がよいと思われる（一八）。畿内でも風炉・火鉢は、公家や寺院が必要とした器物であり、その使用形態が北東日本に持ち込まれた結果、必需品とされるに至ったものと考えたい。

これまで瓦器といえば、あまり注目されてこなかった遺物群になる。それは出土数が限られていることが多く、器種が判然としていなかったこともあろう。そしてなにより、ストーブやエアコンが普及する以前にどこの家庭でもみられた「火鉢」という安価な消耗品のイメージが我々に染み付いていたことによるものと思われる（もともと一九八〇年代以降に生まれた研究者には、無用の心配であろうが）。ひと昔前の土器が同じように扱われてお

り、ほとんど顧みられなかったことを併せてみれば、もつともつと見直されてよい遺物である。今回の小文がその氣運を盛り上げる一石となれば幸いである。

註

(一)今回は鎌倉を中心とした東国を対象外としたが、河野眞知郎氏の成果(河野一九九三)からみると、北東日本との主要な相違点は、以下の3点である。①鏝を付けた円形浅鉢の存在、②突線よりも沈線多用すること、③紋様に珠点紋が多いこと等である。ただし瓦器の性格については、共通するものと考えている。なお、器種分類にあたっては、工藤一九八九、菅原一九八九、佐藤一九九六、近江一九九七の各文献を参照した。

(二)一九九八年十一月の北陸中世考古学研究会において、富山県婦中町の道場I遺跡出土資料を見せていただいた。輪花形の浅鉢であるが、菊花スタンプが4個以上連続して押されていることから、奈良産ではないと判断した。したがって、この段階からすでに奈良以外の産地の存在が想定されよう(富山県文振財団二〇〇四)。

(三)奈良産の瓦器の製作技法については、近江一九九七を参照のこと。また、佐藤重聖より、実際に物をみながらレクチャーいただいたことが、大きい。

(四)ただし浪岡城や藤島城のものについては、焼きがよく黒色を呈しミガキが施されるもの、すなわち奈良産及び奈良に近い製品と考えられるものが多い。北陸と東北ではやや生産形態が異なる可能性がある。それはひとえに、中世後期の土器生産の在り方によるものであると考えられる。とはいうものの現時点で、それによって北陸と東北の瓦器自体の性格に違いがあるとは考えられないので、ここでは一括しておく。

(五)佐藤重聖の教示による。

(六)水澤一九九七、なお、第Ⅱ図にはその後見出しした出土遺跡を追加してある。そして集成して感じたのは、瓦器が研究上の地位を確立していないために、報告記載が全く不十分であるという点である。したがって多くの遺漏は否めず、不十分な表となったが、一応の傾向をみるには役立つものと思われる。また、出典となる各報告書については省略した。

(七)滝川重憲は、この集落に数点という火鉢の出方について、講もしくは一味神水との関連を考えている。また氏は、能登・加賀においても、奈良産・能登産・梯川流域産といった複数の産地を胎土から想定している(滝川一九九〇)。ともに傾聴すべき意見である。

(八)これは今後、小範囲の発掘調査においても、遺跡の性格を知りうる有効な指標となるものと思われる。

(九)なお、瓦器の個体数はさらに20個体増えるということである(浪岡町教委一九八九)が、ここでは表の作成上、図で確認できたものに限った。

(一〇)佐藤重聖の教示による。

(一一)この円形浅鉢の欠如という現象は、出羽と越後の間に存在する中世後半期のかわけ文化のラインと重なっている。両者は、はたして無関係であるのか。現状では明確にすることができないが、この二つの考古学的事実は、土器工人と瓦器工人の関係を暗示しているのではないかと思われる。

(一二)第2面からは、根石を伴う3間×5間の身舎に四面廂を巡らせる建物が確認されており、その周辺より未報告ながら銅製香炉脚部及び閼伽桶の弦といった仏具が出土していることから、寺院の堂舎にあたるものと考えられる。

(一三)岩田隆の教示による。なお風炉Ⅳ類については、未報告ながら下層より破片が出土していることを、南洋一郎より教示いただいた。

(一四)2・5次調査ともに、連子紋の頸部をもつ風炉(Ⅰ類)が出土しており、紋様構成上こちらといたくなくところであるが、実見の結果、別の紋

様をもつ頸部を同一個体と判断した。

(二五) 例えば、北陸地域の瓦器文化の先鞭を付けた垣内光次郎も、そのようなコンテキストの中で瓦器を扱っている(垣内一九九〇)。しかしそれは、一部の上層階層と限られた空間という限定が必要なように思われる。

(二六) この性格については、今回除外した東国にもあてはまるようである(河野一九九三、小川ほか一九八八)。

(二七) 菅原一九八九、二七二頁。

(二八) 畿内において、風炉や仏具などの特殊品と鍋・釜・播鉢・甕といった消耗品が、どのような出方をするのかということについて明らかにされた論考はなく、私は両者を一律に扱うことに疑問をもっている。

補註一 近年、ようやく佐藤重聖によって畿内の様相の一端がまとめられ、その性格が明らかとされた(佐藤二〇〇六)。それによれば、やはり畿内でも風炉類は、支配階級の家財であるといえよう。

補註二 二〇〇七年一月一日・二日の第26回中世土器研究会において、本論の風炉Ⅲ類が、風炉の最古型式であることが判明したので、それに伴う部分の記述を追加した。また、円形小型鉢Ⅲ類や深鉢Ⅰb類は、成稿当時北東日本海独自の器形と考えていたが、前者は京都の相国寺で出土しており(京都文化博物館一九九六、八九頁)、右の研究会当日に展示された奈良町の阿字万字町遺跡出土品にも認められた。後者についても堺からの出土がある(堺市教委一九八九)ことから、瓦器の基本形態は奈良近辺から発信されたものということとなろう。

2 至徳寺遺跡の瓦器

(1) 至徳寺遺跡の瓦器概要

至徳寺遺跡は、一三世紀半ばを境に一旦衰退し(一)、一四世紀末以降に再び隆盛期を迎える。この中世後半期の堀に囲まれた範囲の性格については、守護所とする説が大勢を占めているように思われる。

中世後半期の遺物については、これまでも部分的に紹介されているが、多数の中国天目茶碗を始め、青白磁梅瓶、青磁酒海壺、元青花、釉裏紅褐釉四耳壺などの最高級貿易陶磁器や大量廃棄された土器が中心であった(二)。もちろんそれらは、いわゆる威信財の一部には違いないが、遺跡の格を示す重要な遺物で落ちているものがある。すなわち、瓦器である。

瓦器は、全体で37個体以上出土している。以下、器種ごとにみていくが、分類は拙稿(前項、水澤一九九九)に準拠する。

風炉(1~10、第29・30図)

1~7は、風炉Ⅰ類である。風炉の形態としては、最もポピュラーなものである。口縁内径は17.6~26.2cmを測る。1は、瓦器としてはめずらしく全形が復原されている個体で、口縁内径25cm、器高27cm(十脚5cm)、胴部最大径43cmを測る。頸部外面には、巴紋が捺されている。肩には、幅18cm弱の蒲鉾形の孔が1箇所、m形の透孔が2箇所穿たれている。脚部は、獸脚であるが、脇に刻りのないタイプで、三脚中二脚が遺存している。酸化焰焼成で、暖色系を呈している。なお高級瓦器は、暖色を呈するものが多く、以下特に断らない限り、暖色系の焼き上がりとする。SK4出土。2は、頸部に透孔を入れるタイプである。この手は、ほとんどみかけないが、岩室村和納館で出土例がある。SK518出土。3は、頸部に劍菱紋を捺し、肩部に三葉形の透孔が入る。表面黒色を呈する。SK641出土。4・5は、1と同じく頸部に巴紋を捺すものである。4は黒色を呈する。4はD区出土。5はA5区出土。6は、頸部を連子紋とするもので、黒色を呈する。北トレンチ出土。7は、頸部に雷紋を2段捺すものである。C2区出土。

8は、破片資料であるが、風炉Ⅲ類の体部下半片となる。上から珠点紋、突線、銭紋が捺され、外面黒色を呈する。SX268出土。

9・10は、風炉Ⅴ類である。9は、口縁内径27.8cmで、突線間に×入り多重方形紋が捺される。肩には、三葉形及び蒲鉾形の透孔が穿たれている。SX268出土。10は、口縁内径32.4cmで、突線間に×形紋が捺されている。肩には、径6cmの円形孔が穿たれている。C4区出土。

円形浅鉢(11~22、第30・31図)

11~19は、円形浅鉢Ⅲ類である。口縁内径は、32.4cm~37.4cmを測る。11は、唯一器高がわかる遺例で、9.8cmに5cmの脚が付く。脚部は、中空のタイプで、通常風炉Ⅵ類に付されるものである。表面があげられているため、ほとんど消えかかっているが、突線間には、雲紋が入られているようである。SX212出土。12は、雷紋が捺されている。SX621出土。13は、雲紋で、表面黒色を呈している。SX642出土。14は、巴紋が捺される。G区出土。15は、雲紋で、表面黒色を呈する。A区堀出土。16は、花菱紋が捺されている。SX268出土。17は、方形菱が捺され、表面黒色を呈する。C3区出土。18は、巴紋で、輪花が入るようである。SX211出土。19は、体部~底部片で、底径34.8cmを測る。底部際に2条の突線が入るタイプで、巴紋が捺されている。表面黒色を呈する。C4区出土。

20~22は、円形浅鉢Ⅴ類である。20は、内径22.8cm、外径30cmで、口縁帯に径5cmの孔が約3.4cm間隔で開けられている。表面黒色を呈する。SK641出土。21は、内径24.8cm、外径31.2cmを測る。器高は、7cm強となる。SK518出土。22は、内径30.2cmを測り、口縁端部を指頭で連続的に押えている。底部には、高台が付く。表面黒色を呈する。本製品は、器形的に近世の所産である可能性がある。出土地点不詳。

円形深鉢 (23、第31図)

23は、円形深鉢Ⅵ類と考えられる。底部に低い高台が付き、体部に1条の突線が巡らされている。高台径25.2 cmを測る。口縁部は遺存していないが、有段になるものと思われる。G区出土。

方形浅鉢 (24、第31図)

24は、方形浅鉢Ⅰ類で、突線間に雲紋が捺されている。器高は、13 cmほどになる。表面黒色である。C1区出土。

瓦燈 (29～36、第32図)

瓦燈は、従来一乗谷朝倉氏遺跡で出土しているような、上のフード部分と下方の台となる部分からなるものが知られていたが、ここでは3つのパーツを合わせる形になっている。29～32がフードにあたり、34～36に33を嵌め込んだ燈火部にかぶせるという組み合わせである(第50図)。全体で3組以上が認められる。

29は、口縁内径11.8 cmを測り、器高は15 cmを越える。体部に3条の突線が巡らされ、上方に双葉形の小透孔が、下半に花頭状の窓が設けられている。突線間には、フリーハンドで桜樹が大きく描かれている。上部欠失。SK4出土。30は、口縁内径10.4 cmを測り、器高16 cmを越える。体部に3条の突線が巡らされ、上方に逆三角形の小透孔が、下半に凸形状の窓が設けられている。上方の突線間には、縦4×横3の12単位の珠点紋が四方に張り付けられているが、正面のみ窓のため10個となっている。なお珠点は、竹管を押した後に貼り付けられたものである。上方には、皿がつくものと思われる。本製品は、珠点紋のため、まったく釣鐘様にみえる。SK19出土。

33は、受け皿に円盤状の台が付く中落し部分である。円盤の径は、12.6 cmを測る。本例の類例は少ないが、中条町下町・坊城遺跡B地点で出土例がある。SK4出土。

34は、中落しを受ける基礎部分で、口縁内径14.8 cmを測る。円形小型鉢状を呈し、底部際に馬蹄形の張出しをもち、板状脚が付されている。内面口縁下1.5 cmのところに、2 cm×8 mm程の小突起が貼り付けられており、右の円盤を受けるようになっていいる。体部外面には、上から巴紋と雷紋が2段に捺されている。また底部外面には、中央に三丸紋が捺され、周辺に草木紋が描かれている。SK4出土。35は、体部片で、中位に突線が巡らされ、その下方に雷紋と珠点紋が千鳥に配されている。SK4出土。36は、底部片で、鐔径一六 を測る。底部外面中央には、丸スタンプが捺されている。SK19出土。

小型製品 (25～28・37～41、第31・34図)

25は器形不詳であるが、円形の製品で、中位に沈線が巡らされており、その上に下向きの半菱と2段の雷紋が捺されている。なお沈線で区画する技法は、鎌倉で多く見られるところである。表面黒色を呈している。SK642出土。

26～28は、口径20 cm前後の円形小型鉢(Ⅲ)Ⅰ類である。26は、直縁のa類で、外面に縦ミガキを施している。A区出土。27・28は、口縁を外反させるc類である。27は、SK642出土。28は、板状脚が付き、表面黒色を呈する。C4区出土。

37は、花瓶の脚部である。表面黒色で、底径8 cmを測る。外のものとは時期が異なり、鎌倉期の所産である。この手の製品は、陸奥松嶋の瑞岩寺境内遺跡など鎌倉と直結した遺跡でのみ出土しており、それ自体、該期の性格を物語る遺物である。A区堀出土。

38は、仏花瓶の脚部である。底径10.7 cmを測る。脚基部に菊花スタンプが捺され、その下は縦ミガキが入れている。SK518出土。

39は、円形小型鉢Ⅰa類である。口縁内径6.4 cm、器高5.2 cmで6 mmの板状脚が付される。体部に2条の沈線を入れ、間に雲紋・巴紋・雲紋が3段に捺されている。SK333出土。

40は、円形浅鉢Ⅳ類の小型製品で、円形小型鉢Ⅵ類として分類を追加する。内径15cm、器高9.9cm（+脚2.1cm）、底径15cmを測る。突線間に×付き多重方形紋を捺し、乳頭状脚が付されている。SX268出土。

41は、円形小型鉢Ⅱ類である。口縁内径17cmを測る。SX268出土。

その外（42・43、第51図）

42は、蓋である。口縁内径27cmを測り、器高は、10cmを超える。表面黒色で、一部漆補修痕が認められる。SK449・518・SD531出土。

43は、内耳鍋である。口径25cmで、両側に内耳が付く。身の深さは7.8cmで、乳頭状脚が付されている。体部外面下半には、煤がこびりついており実際に使用されていたことがわかる。内耳鍋という器種自体から、東日本との関係がうかがえる。SK519出土。

（2）瓦器からみた至徳寺遺跡

ここでは、右でみてきた瓦器について県内の諸遺跡と比較しつつ、性格をみていきたい。なお、瓦器の基本的な性格は、「城館的」であり、權威を示すものである（水澤一九九九）。特に、風炉を初めとする多様な器種の存在は、遺跡の性格を示して余りない。それは、貿易陶磁器類よりも一層明瞭である。この風炉類の性格については、近年南九州についても確認され（佐藤二〇〇二）、畿内でも深鉢や插鉢などの雑器を除いて確認されつつある（佐藤二〇〇六）。

至徳寺遺跡では、風炉10個体、円形浅鉢11個体、方形浅鉢1個体、円形小型鉢7個体、円形深鉢1個体、燭台2個体、瓦燈3組、蓋・内耳鍋各1個体の37個体が出土している。県内で、現時点でそれに匹敵するのは、奥山荘中条の中心地である政所条遺跡群（江上館、下町・坊城遺跡）のみである（表1）が、これは国人領主クラスの遺跡を広く調査した結果によるものと考えられ、一応の基準とみておきたい。そこで両者を比較してみると、至徳寺での円形浅鉢の多さが江上館と共通するが、方形浅鉢が少ないことは異なる。その他の器種については、江上館が一四八〇年代には、廃絶することから（水澤二〇〇一）、円形小型鉢や佛具といった器種は、その後に搬入されたと考えられる。ただし、江上館から瓦燈の出土はなく、それが同時期に搬入されていることが注目される場所である。以上により、国人領主クラス以上の遺跡であることがわかる。

次いで、出土遺構の位置関係及び瓦器同士を中心とした共伴関係を確認しておきたい（第35図、表18）。ここでは複数の瓦器が出土した遺構をとりあげる。なお、瓦器以外の遺物を含む共伴関係は、上越市史叢書（水澤・鶴巻二〇〇一）に譲る。

A地区の北堀の内側には、SX4・19があり、SX4からは風炉（1）と瓦燈（29・33・34・35）がまとまって出土している。加えて元・明青花、青磁小壺・器台なども共伴している。SX19からは、瓦燈（30・36）が出土しており、青磁酒海壺も出ている。両遺構は、同時廃棄と考えられており、一五世紀中頃の所産とされている（小島一九九七）。小島氏は、当初一六世紀初頭の永正の乱の火災整理によるものとされていた（小島一九九四a b）が、伴出土器（ロクロ成形底部系切離し）から、右のように変更された。大規模な火事場整理ということからすれば、守護上杉房定の来越時（宝徳二（一四五〇）年末）における守護代長尾邦景・実景親子との交戦時の所産である可能性も考えられよう。この土器様相は、江上館第317号遺構5期南炭並行遺物とほぼ共通するものであり、京都系土器はこの時点ですでに搬入されている（水澤二〇〇一）。もちろん、SK19でも両者が共伴しているが、まだロクロ成形のものが主体である。

A区の南方のD区のSX268からは、風炉（8・9）、円形小型鉢（40・41）が伴っている。

さらにD区の南西のE区では、SX641から風炉（3）と円形浅鉢（20）が、SX642から円形浅鉢（13）と円形小型鉢（25・27）が出土している。

南堀の内側にあたるF区のSK518からは、風炉(2)、円形浅鉢(21)、佛花瓶(38)、蓋(42)が出土している。なお、この蓋は、南堀外のC・F区SK449及びI区SD531からも出土があった。本遺構からも、少量のロクロ成形及びつくね成形の土器が共伴しているが、後者の方が多くなっている。

第53図は、右の事例に単独出土のものを加えて地区別にまとめたものである。この表からわかることは、堀の外から出土したものは、包含層を含め5個体にすぎず、ほとんどが堀の内からの出土であること。また、堀外の器種も蓋や内耳鍋、深鉢などで、風炉がないことがあげられる。

したがって、瓦器からみた場合、南堀の外側は堀の内から、かなりランクの落ちる場であったことが推測される。このことは、調査担当者の小島幸雄が、堀外の空間を至徳寺に関連するものとする見解(小島一九九四)と齟齬をきたすものである。氏が至徳寺との関連を説かれた根拠は、大量の土器廃棄遺構や墨書「至徳廿内」瀬戸天目茶碗・漆書「楞」天目茶碗の存在などである。確かに、右の出土遺物や至徳寺が守護所より格が落ちることからすれば、あえて不思議なことではないのかもしれないが、風炉の不在は寺院関連遺跡と断定することへの不安材料となる。おそらく、堀外の部分は、宴会時の土器の捨て場所ではなかったかと思われる。

なお矢田俊文は、至徳寺塔頭長松院が越後における公式の饗宴の場、迎賓館であることを論証し、長松院が院として至徳寺より独立した機能をもっていたことを明らかにしている(矢田一九九三)。至徳寺遺跡からは、一応二町半の区画が想定されているが、それとてさらに内部で区画されている可能性は否定できず、守護所・至徳寺・長松院・最勝院等の位置関係は、ほとんど明らかになっていないといわざるをえない。また、土塁・堀の存在は、即寺院を否定するものではない。

この様相は、市史編纂作業が終了した現時点でも変わらなかった。

註

(一)この現象は、鎌倉での宮騒動に伴う越後守護北条名越家の没落(寛元四(一二四六)年以後の国務の分離、田村一九八七)と関係があるかもしれない。

(二)小島幸雄一九九四、一九九四、一九九五、一九九七、小野正敏一九九八、鶴巻康志二〇〇一、など。

(三)前稿においては、器高一〇cm以下でほぼ口径二〇cm以下のものを小型製品とした。しかし、口径二〇cm程度のもので一〇cmのものを、同列に扱うことはふさわしくないかもしれない。いずれ、前者を中型製品として位置付けたいと考えている。

第三章 中世土器

1 越後の中世土器

(1)はじめに

いうまでもなく焼物は、大量に消費され、比較的形態の移り変わりが早く、そして腐らないので、考古学では最も頼るべき基準資料として扱われている。

ことに大事なのは、実物を多くみて、その時代の雰囲気をとらえることであるが、紋様のない土器は、これを正確に他者へと伝えることは難しい。それはあくまでも感覚的なものであり、一見科学的ではないが時代特有の匂ひを発散している。が、しかし、それは細かい年代までを語ってくれるものではない。

我々がモノを認知する場合、プロポジション・色調から入り、次第に紋様・調整等の細部へと観察を進めていく。この詳細な観察なくして、その変化のきっかけに気付くことはできない。特に変化の早い土器は、前後の時代に行ったり来たりしながら徐々に変化していくものだからである。しかしこれも大切なことだが、木をみて森をみないという愚は避けねばならないのはいうまでもない。

遺物について書くとき、報告書をつくるように使う資料のすべてを見ることが望ましいことはいうまでもないが、それには多くの困難が伴う。そこで、実測図が登場し、形の変化を理解するための断面形の変化や紋様といった情報が共有された。しかし、実測図から実際の遺物を理解するためには、実物の雰囲気を知っていなければならない。結局のところ実物観察はかなりの程度必要になるのであるが、人間の感覚は融通無碍であるから、それを図という形で提示した実測図で、感覚的なものを客観的に示さねばならないということになる。したがって、実測図は考古学の命であるといっても過言ではなからう。写真は、時に威力を発揮するが、実測図と同じレベルで扱うことはできない。

(2)研究の前提

越後における中世土器の研究史は、最近鶴巻康志によつて的確にまとめられた(鶴巻二〇〇四)ばかりなので、それに譲り、参考文献(坂井一九八八、品田一九九一、鶴巻一九九二、品田一九九九a・b、春日一九九九、笹澤・水澤二〇〇一、水澤二〇〇一、鶴巻二〇〇四)としてあげるにとどめる。ただし、私の中世代観(二)からすると、その前の世紀も入ってくるため、春日真実や笹澤正史の研究成果(春日一九九七・一九九九、笹澤二〇〇三)を忘れるわけにはいかないが、今回は概ね一世紀前後以降を対象とする。また、とかく北陸との関係が重視されているように思われるが、特に越後府中の所在した頸城地域の場合、信濃との関係をも看過するわけにはいかない。

ここでは、近年良好な資料群が相次いで公表されたことにより、その位置付けを追究することによつて新基軸を組み立てることができるのではないかと考え、本論を叩き台として提出するものである(二)。今回用いるデータとしては、県内でまとまった土器の出土をみた上越市至徳寺遺跡(水澤・鶴巻二〇〇三、水澤二〇〇四)・一之口東遺跡(新潟県教委一九九四)・海道遺跡(新潟県教委二〇〇五)・用言寺遺跡(新潟県教委二〇〇六)、柏崎市下沖北遺跡(新潟県教委二〇〇三)・東原町遺跡(新潟県教委二〇〇五)、土用木西遺跡(長岡市教委二〇〇七)、奥山荘政所条遺跡群(中条町教委一九九三・一九九五・一九九六・二〇〇一・二〇〇五)、馬場屋敷下層遺跡(白根市教委一九八四)、新発田市住吉遺跡(新潟県教委二〇〇六)・二ツ割遺跡(紫雲寺町教委二〇〇四)・新発田城(新発田市教委一九九七)、阿賀野市大坪遺跡(新潟県教委二〇〇六)などの資料を用い、必要に応じて近隣の遺物群を

対比資料として用いた。なお全般に、藤田邦雄の加賀についての研究成果（藤田一九九二・一九九七）を参考にした。

さて、ここで用いる方法は、オーソドックなプロポジションを表す口径と器高という属性をグラフ化し、その関係を明示することによって年代的な変化を追うというものである（三）。なお今回は、頁数の関係で実測図の多くを省略せざるを得なかったことを最初にお断りしておく。

また土器の本文中での表記については、煩雑を避ける意味で珠洲の分類を参照し、てづくね成形については「T種」、ロクロ成形底部糸切りにについては「R種」、ロクロ成形ヘラ切りについては「RH種」とした場合がある。

では以下、一一～一二世紀代、一三～一四世紀代のてづくね成形土器・ロクロ成形土器、一五～一六世紀代のてづくね成形土器についてみていく。

（3）ロクロ成形土器とてづくね成形土器出現期まで（一一～一二世紀）

この時期は、断片的な資料を除けば、上越市の二遺跡から良好な資料がみつかったのみであったが中越の土用木西遺跡や阿賀北の大坪遺跡、石川遺跡（新潟県教委一九九八）等にも該期の遺物が存在していることがわかった。とはいえ、資料数に限りがあるので、ここでは、信濃及び北陸の資料を用いつつ対比する。

まず、至徳寺遺跡からの出土土器R種をみていく（第36図）。

表1 至徳寺遺跡の単独遺構出土のものではないが、一〇世紀末～一一世紀前半の時期の土器をあつめた。大小に分かれる。大：内黒有台碗、有台・無台の碗がある。有台碗は、口径が15 cmを超えている。小：有台皿があり、器高が3 cm超で、体部は直線的である。無台は、口径10 cm、器高3 cm前後のものが多い。柱状高台も認められるが、あまりはつきりしたものではない。共伴遺物は、虎溪山1号窯式後半・東山7号窯式後半の灰釉陶器、白磁などがある。

表2 至徳寺遺跡第107号遺構。大：有台器種がまだある。無台で底部が一樣に厚いのは、次の第382号遺構までで、本期からの短い期間に限られる。小：有台器種、柱状高台がある。無台は、口径8～10 cm、器高2～3 cmで、前代から続く全体が薄手のタイプの最終段階である。器高2 cmという低めのものも出現し始める。

表3 至徳寺遺跡第382号遺構。有台器種はなくなり、柱状高台のみとなる。器種は、以後基本的に無台皿（ここでは有台器種消滅以降の食膳具を「皿」とよぶ）の大小からなり、口縁が内湾ぎみとなる。大：口径14 cm前後、器高4 cm台。小：口径8.8 cm前後、器高2.5 cm前後が主体。

表4～表7 至徳寺遺跡第549・511・512号遺構。大：口径13 cm台を主体とし、高さ3.5 cm以上で、底部外底際の立ち上がりは残るが、内底中央部は厚みを減じる。小：口径9 cm前後で、器高2 cm前半のものに加え、2 cm以下のものが出現する。器高が減じるにしたがい、口縁が内湾できなくなり、内側が直線的になっていく。

表8 至徳寺遺跡第483号遺構。珠洲が伴ってくる段階である。大：点数が少ないため明瞭でないが、口径13 cm前後。小：口径8 cm前後で器高2 cm前後。口縁下を強くなどで、口径が8 cm以下で器高が2 cmを越える身の深いタイプが認められる。

表9 至徳寺遺跡G区土器溜り出土。新旧二様相に分かれる。大：口径14 cm前後、器高4 cm台、小：口径9 cm、器高2 cm前後と、T種の影響を受けた大：口径11 cm前後、器高3 cm台、小：口径8 cm弱、器高2 cm前後に分けられる。前者は珠洲・T種出現前後、後者は一三世紀以降と考えられる。

表10 至徳寺遺跡第53・38号遺構。T種土器が伴ってくる段階であるが、R種土器が主体の段階。大：口径14 cm前後、小：資料数が少ないが、口径8 cm前後、器高1.9 cmと2 cmを切っている。

一一世紀前半については、塩尻市の吉田川西遺跡出土資料を参考とする。ただここで問題となるのは、執筆者の原明芳がこれから問題にする時代について、灰釉陶器との関係で四半世紀ほど遡らせたことである（原二〇〇三）（四）。ここでは後者の年代をとる。以下、各期の様相を報告書（長野県埋文センター一九八九、三〇〇～三〇一頁）からまとめる。

12期（SB84段階：一〇世紀第4四半期）小：口径10 cm前後、器高3 cm前後に集中。

13期（SB32段階：一一世紀第1四半期）小：口径10 cm前後、器高2.5～3 cmに集中。

14期（SB74段階：一一世紀第2四半期）小：口径10 cm前後、器高2～2.5 cmに集中。

15期（SB31段階：一一世紀後半）小：口径8～10 cm、器高2 cm以下に集中。

おおまかにいうと、口径が縮小し器高が扁平化していくことがわかるが、代表例とされた各期の資料をみると、さらに具体相がわかるため、以下に示す（第37図：表28～36）。

SB5（13期：表11）無台大：口径13 cm前後、器高4 cm強、小無台：9 cm台主体、器高2.3～3.1 cm、有台碗：口径15 cm前後で器高6 cm前後、無台と同じ口径器種あり。また脚高高台、黒色器種あり。

SB63（13期：表12）無台大：口径12 cm台、器高4 cm前後、小無台：口径9 cm台主体、器高2～3.1 cm、有台碗：口径14 cm前後で器高6 cm前後、脚高高台、黒色器種あり。

SB141（13期：表13）14期の資料とやれているが、本期に移動した。無台大：口径13 cm台、小無台：口径10 cm前後、器高2.1～3.1 cm、有台碗大：脚高高台のみ。有台小：口径10 cm前後で器高4 cm前後、黒色器種あり。

SB32（13期：表14）無台大：口径12 cm前後、器高4 cm以下主体、小無台：口径9 cm台主体、器高2 cm台主体であるが、2 cm以下が出現する。有台碗：口径14 cm前後で器高6 cm前後、無台と同じ口径器種あり。脚高高台及び有台皿、黒色碗大小あり。

SB99（13～14期：表15）無台大：口径12 cm前後、器高4 cm以下、小無台：口径6 cm台主体、器高2.3～2.9 cm、有台：口径14 cm前後で器高6 cm、4 cm前後あり、口径10 cm前後の有台2種、器高4 cm台及び3 cm台あり、有台皿、脚高高台、黒色器種あり。

SB14（13～14期：表16）無台大：口径13 cm前後、器高4 cm前後、小無台：口径6 cm台主体、器高2.3～2.9 cm、有台：口径15 cm前後で器高5 cm台の脚高高台、口径10 cm前後の有台2種、器高4 cm台及び3 cm前後あり、黒色器種なし。

SB74（14期：表17）無台大：口径13 cm台、器高4 cm前後、小無台：口径9 cm台主体、器高1.7～2.6 cm、有台：口径14.8 cm、器高5 cmの黒色碗、小型器種少量。口径6 cm台、器高2 cm以下の托状の柱状高台皿があるが、有台皿がない。有台器種少量。

SB132（15期：表18）14期とやれているが、小無台の器高低下が著しいので本期に移動した。無台大：口径15.6 cm、器高3.9 cm 1点。小無台：口径6 cm台主体、器高1.4～2 cm、有台：口径15.3 cm、器高4 cmの大型皿1点と器高3 cm以下の小型皿、1点のみ托状皿あり。

SB31（15期：表19）無台大：口径16.7 cm、器高3.1 cm 1点、小無台：口径8.3～9.8 cm、器高2 cm以下、有台：口径10 cm前後で器高3 cm前後の小型器種のみ。托状皿あり。

以上をまとめると、小皿は13～14期の一一世紀前半には口径9 cm台のものが主体を保つが、器高は14期に至って2 cmを割るものが現れ、15期には2 cm以下のものが主体を占めるようになる。この現象は、北陸よりかなり早い。また、一〇世紀末あたりから灰釉皿写しの有台皿がみられ、これが一定の組成を占めるようになる。この皿は、以後一一世紀台を通じてみられるようであるが、同時期の北陸では認められないことからすれば、至徳寺遺跡の有台皿は、信濃の影響を強く受けて成立したものと考えられよう。なお、14期より有台皿の高台を省略して厚底にする托状皿があり、これは

柱状高台皿のはしりというべき存在であり、注目される。

次いで、一之口東遺跡をみていく。本遺跡では、川跡SD1 から多量の土器が出土しており、2層から丸石2号窯式の灰釉碗が共伴したことから、一一世紀前半頃の資料と考えられている。土器はすべてR種である。

SD603 (第38図表20) 切合関係から、SD1 より古い段階とされている川跡で、口径9.7 cm前後、10.6 cm前後、12 cm前半台、14 cm台からなり、有台碗及び黒色無台(回転系切)・有台器種が認められる。

SD1、第5層出土遺物(第56図表21) 大: 点数が少ないが、口径13 cm前後の無台及び黒色有台・無台(回転系切) かなる。小: 口径10~11.5 cmを主体とし、器高2.7~3.6 cmを測る。黒色有台器種がある。

SD1、第1・2層出土遺物(第56図表22) 大無台: 口径12~14 cm、器高4 cm前後と口径16 cmのものがある。また口径14 cmの黒色無台(回転系切)がある。有台大: 基本的に口径15 cm前後の黒色土器であるが、少量の大型土器がある。小: 口径9.5~11.5 cm、器高3 cm前後主体で、口径12 cm以下、器高5 cm台の黒色有台土器がある。

第5層と第1・2層との違いは、小皿の口径が縮小傾向にあることである。後者は、前段の小皿の傾向をみれば、これまでとおり一一世紀前半に位置付けられよう。前者は、その前段の一〇世紀末~一一世紀初頭頃に比定されよう。

この5層に対比される資料が土用木西ST01出土土器で、1・2層が同じく土用木西SD4及び石川SD1である。

そして、一之口1・2層に後続するのが、大坪遺跡SD3538出土土器である。小皿は、径9 cm台であり高さが3 cmを切ること、大皿は、やや深身のものが多いが底部が肥厚することから、やや新しい様相を示すものと考えておきたい。

次いで、一一世紀中葉以降の変遷を知るために北陸で研究が進んでいる加賀・能登の様相をみていく。

加賀では、田嶋明人の漆町遺跡の成果(石川県埋文センター一九八六、田嶋一九九〇)を受けて、古代側から出越茂和の成果(出越一九九四・一九九七)があり、中世側からは藤田邦雄の成果(藤田一九九二・一九九七)がある。対して能登では、一部しか成果が公表されていないが(滝川一九九b)、一九九九年一〇月一六・一七日に富山で開かれた「北陸の中世前半の土師器検討会」での滝川重徳・柿田祐司両氏の資料は、非常に有益である。また、そこで重要な比率を占める貝田遺跡2・3次での考察(安一九九五、柿田一九九五・二〇〇〇)は必読である。ここでは、そこで示された資料を用いて、概要を述べる(第38・39図)。

寺家遺跡砂田地区2層下SK01(第56図表23) 大: 口径13 cm前後主体で、16 cm前後も認められる。柱状ぎみになるものがあり、黒色にも認められる。有台器種はすべて内黒で、口径14 cm前後である。小: 口径8.2~9.6 cm、器高2.6 cm前後主体。柱状高台皿も定量存在する。一一世紀中葉とされる。

三木だいまん遺跡溝6(表24) 大: 口径12 cm台及び14 cm台があり、柱状ぎみの個体もある。小: 口径8 cm、器高2 cm前後と口径9 cm、器高2.5 cm前後からなり、柱状高台が伴う。有台・黒色器種は認められない。一一世紀末~一二世紀初頭とされる。

白江梯川遺跡井戸412(表25) 大: 口径14 cm弱、器高4 cm前後。柱状高台あり。小: 口径8~8.5 cm、器高2 cm台主体で、柱状高台も認められる。一二世紀前半とされるが、器高4 cm以下の大皿及び、器高2 cm以下の小皿が定量認められることから、T種が認められないものの一二世紀中葉以降の資料と考えられよう。

白江梯川遺跡井戸410(表26) 大: 口径14 cm、器高4 cm。小: 口径8 cm台、器高2 cm前後で、柱状高台から退化したベタ高台様となる。本期より

T種が認められるが、まだR種の方が多い段階である。一二世紀後半とされる。

貝田遺跡2次10～12区(第57図表27) 大：口径12 cm前後、器高4 cm前後と5 cm強に分かれる。口径14 cm台の有台黒色器種がある。小：口径10 cm、器高3 cm前後、口径9 cm、器高2 cm強。一一世紀後半とされる。

貝田遺跡2次13・14区(表28) 大：口径14 cm台、器高4 cm台。小：口径8～9.4 cm、器高2 cm台主体、柱状高台がある。一二世紀前半とされる。貝田遺跡3次2区下層・3～6区遺構面(表29～33) 大：口径14 cm台、器高4 cm台。小：口径8～9.5 cm、器高2 cm台。口径9 cm、器高4 cm前後の柱状高台。地点によってT種を含む。一二世紀中葉～後半

貝田遺跡3次3区15・16層(表34) 大：口径14 cm、器高4.8 cm。小：口径8.1～9.2 cm、器高2 cm台。口径8.9 cm、器高4.2 cmの柱状高台。T種を含む。一二世紀中葉～後半。

貝田遺跡3次5区17層(表35) 大：口径14 cm前後、器高4 cm台。器高5.5 cmを超える柱状高台あり。小：口径7.8～9.4 cm、器高2 cm台。T種を含む。一二世紀中葉～後半。

貝田2次10～12区資料については、一之口東SD1、1・2層より小皿の口径・器高ともかなり縮小していることから、一一世紀中葉まで遡らないとされた時期は妥当であろう。

貝田遺跡2次13・14区資料については、有台碗・黒色器種の消失から一二世紀代と考えられるが、中間器種の存在及び、柱状高台の器高が4 cmになっ

ていることから、三木だもん溝6資料より下る一二世紀前半頃の資料と思われる。貝田遺跡3次については、一応層位的に区別されるが、土器様相はほとんど変わりなく、珠洲I1～I2期・T種土器が共伴することから、一二世紀中葉～後半の古い時期の遺物と考えられている。白江梯川遺跡井戸412資料よりも古い時期となろう。

以上を対比したのが、表19である。

一二世紀以降の至徳寺遺跡以外の越後の土器としては、用言寺遺跡SE183出土遺物がある。白磁碗II・IV類などを伴った井戸の一括資料である。

小皿は、口径9 cm前後で器高2 cm前後、同時期の至徳寺遺跡SK512上層に比して、やや深身の小皿が認められることから、一二世紀中葉の資料と考えられる。

海道遺跡SE560は、小皿ばかりの資料であるが、珠洲I期の播鉢・甕・壺が伴う。また、1点のみてづくね皿を伴う。身の浅い小皿がないことから、一応一二世紀第4四半期としておく。そして海道遺跡SE420は、海道560に近い小皿に加えて、浅身の小皿が出土しており、珠洲II期の播鉢を伴う。一二世紀第1四半期に位置付けておく。

(4) てづくね成形土器(一二～一四世紀)

一二世紀代における問題点は、前半と後半であまり形態変化がないということである。大きな目でみれば、口径が縮小化傾向(大：12 cm→11 cm台、小：8 cm→7 cm台)にあることがわかるが、個々の資料では判断がつかない。もちろん、端面面トリで凹線が入るものから溝の消失、そしてそれが丸みを帯びるとい

う口径部の変化があり、ある程度の違いはあるが、非常に漸移的なものである。したがってその区別は、共伴遺物によるところが大きい。

一二世紀前半までの出土事例は、至徳寺遺跡第28・38・55・622・630・634・636号遺構(表42)、政所条遺跡群A地点川跡炭層などがある。

大：口径12.5 cm前後～14 cm前後の2口径があり、大型口径は本期に限られる。小：口径8～9.2 cm、器高1.5～1.9 cm。

政所条遺跡群下町・坊城A地点の川跡の炭層からは、珠洲Ⅱ期の甕、青磁劃花紋碗・同安窰系皿等が端部面取りのてづくね大皿・小皿に伴っており、一三世紀初頭頃の所産と考えられる。

一三世紀後半以降の定点資料は、地理的にやや離れるが加賀の堅田B遺跡SD1出土の建長三年（一二五一）及び弘長三年（一二六三）銘巻数板に伴った資料（金沢市埋文センター二〇〇四）と、馬場屋敷下層遺跡の正応二年（一二八九）～延慶三年（一二三〇）銘木札に伴った資料（白根市教委一九八四）である（五）。

一三世紀第三四半期の基準資料である堅田B遺跡SD1からは、土器以外にも貿易陶磁器、漆器など大量の遺物が出土しており、その資料的価値は非常に高い（向井二〇〇四）。土器は、大：口径11.4～13㎝、器高2.4～3.1㎝、小：口径7～9㎝、器高1～2㎝程度が主体である（第40図表37）。一三〇〇年前後の基準資料である馬場屋敷下層遺跡については、報告書及び土器の追加調査（中条町教委二〇〇五、一六七頁）をご覧いただきたい。土器は小皿が少ないが、大：口径10.6～12.4㎝、器高2.5～3.1㎝、小：口径7.2～8.5㎝、器高1.5㎝前後が主体である（表38）。両者を比較すると、口径が縮小傾向にあるが、器高にはほとんど変化がないことがわかる。

これらを含め、本期に属する遺物群を挙げる。

第40図表43～46は、至徳寺遺跡出土の土器群である。この内、小皿の口径がすべて8㎝を超えており、端部に面トリを行うものが定量含まれているG区土器溜り新相（表6）やD区土器溜り資料（表43）などは、堅田BSD1に先行する資料群と考えられよう。

次いで第397・470・419号遺構（表44～46）出土遺物は、大皿の口径が11㎝台のもの、小皿の口径が8㎝以下のものを定量含むため、堅田BSD1に並行する資料群と考えられよう。このような口径8㎝以下の小皿の出現は、一三世紀中頃出現し、一四世紀代には主體的になるものと考えられる。なお、至徳寺遺跡の資料群は、大皿の器高が3㎝前半主体、小皿が1.5～2㎝主体と、やや深身の器形であることがいえる。

表47は、頸城の東に接する三島郡の柏崎市下沖北遺跡SK86の資料群（新潟県教委二〇〇三）である。大：口径12㎝台主体、小：口径8㎝前後であり、馬場屋敷下層までは下らず、堅田BSD1並行となる。

柏崎市東原町下層のSK106は、121点の廃棄が認められ、口禿白磁碗が伴う。下層が珠洲Ⅲ期に収まり、大皿の口径がほぼ13㎝以下であり、7.5㎝以下の口径の小皿が出現していることから、下沖北SK86に後続する13世紀第四半期に位置付けておく。

東原町SX091は、中層の遺構面にばら撒かれた土器群である。共存遺物はなが、下層のSK106と大差ない様相を示すものの、確認層序を重視して1段階下る馬場屋敷下層併行としておく。

下沖北SK455は方形堅穴遺構で、まとまった遺物の出土があった。東と西の二つの遺構からなるという記述があるが、遺物の区別は不明である。大皿は12㎝強、小皿はほぼ7㎝台にまとまる。珠洲Ⅳ期播鉢、青磁Ⅲ類坏などが共存している。大皿の器厚が厚くぼつりとしており、全体に調整が省略されていることから、14世紀半ばに位置付けておく。

なお、13世紀後半以降、至徳寺遺跡の大皿が急速に口径を減少させるのに対し、柏崎市の下沖北や東原町では、緩慢な口径縮小を示す。表39～41は、政所条遺跡群の坊城館出土資料（中条町教委二〇〇五）である。大：口径12㎝超のものも多いが、11㎝台のものも一定量みられる。

また、至徳寺遺跡ではみられなかった器高3.5㎝、径高指数25を超える深身のものも定量出現している。小：7㎝台主体であるが、6㎝台のものも出現する。この小皿については、形態が上越以西のものと異なり、ロクロ形態のものに近い、底部が厚く、体部を強く横ナデする器高1.5㎝超のものと、器壁が薄く一様で、内面に充具を用いて口縁を起こすタイプに分かれる。前者や大皿の一部には、褐色で雲母を多量に含む胎土をもつものを定量含む。後者は、至徳寺遺跡第397号遺構（表44）などいわずかに認められる。また、わずかであるが口径9㎝台の資料が含まれることにも注目して

おきたい。本資料群は、口径7 cm以下の小皿や中間口径の出現、かなりゆがみがみられること、褐色胎土の出現などといった馬場屋敷下層にみられない特徴から、それに後続する一四世紀前半～中葉の資料群と考えたい。現状では、一四世紀代のT種のまとまった資料は非常に少ない。

次いで、後続あるいは一部並行すると考えられるのが、一括遺物ではないが、政所条遺跡群のC地点資料である(中条町教委二〇〇一)。褐色で雲母が目立ち、他に比して硬質な焼きの一群である。褐色1類・2類と仮称する。この段階で確実に最小口径が出現し、器高が扁平化する最終段階である(第41図)。なお口径11 cm前後で、口径と底径の差が少ない箱形に近いものや、器高2 cm前後のものもこれらに並行する可能性がある。

1類は、前代の流れの延長線上にあるもので、口径がさらに縮小する(表48)。器壁は、ほぼ一様。大:口径11 cm台、中:口径7 cm～8.8 cm、器高1.3～2.0 cm、小:口径5.6～6.6 cm、器高1.1～1.6 cm。

2類は、これまで扁平化し続けた器高がやや深身になる段階である。器壁は、底部中央が厚さを減じ、薄手となる。大:口径10 cm、中:口径6.8 cm～8 cm、器高1.4～1.9 cm、小:口径5.4～6.2 cm、器高1.6～2.0 cm。

以後、京都系第二波がくるまでの間、越後ではT種が認められない。

ここで、品田高志が地域名称を付して提唱した先行研究(品田一九九一)に言及しておく必要がある。樋田遺跡の資料をして「頸城型」と設定された資料は、内外面下半の連続指押痕が特徴的である(六)が、その調整がないものも示されており、器形そのものは阿賀北の政所条遺跡群からも出土している(中条町教委二〇〇一:761・763など)。この深みがあり体部がやや屈曲する器形は、刈羽・三島型とされているものよりも後出のタイプと考えられ、両者には時間差があるように思われる。したがって、それをもって「頸城」を冠することは誤解を招く危険がある。また「刈羽・三島型」とされているタイプは、すでにみたように一三世紀中葉以降のてづくね成形土器における通有の在り方であり、頸城・三島・阿賀北などで広く認められるものであることから、地域名を付す必要はないものと思われる。

このようにみてきた場合、地域型式として設定できるのは、残りの「阿賀北型」のみであるが、すでに阿賀野川北部でも地域差が生じていることが指摘されており(鶴巻二〇〇四)、正確には阿賀北南部型式といふべきであろう。

(5) ロクロ成形土器(一二～一四世紀、第41図)

R種とRH種があるが、前者は量的に限定的となり、後者も地域的に限られた存在である(鶴巻二〇〇四)。

R種は、至徳寺遺跡G区土器溜新相や第419号遺構下層(表50)、第538号遺構(表51)、二ツ割遺跡SD1113(表52:紫雲寺町教委二〇〇四)など一三世紀中葉以降に出現する。

至徳寺遺跡の場合は、同時期のT種より一回り口径が縮小した体部がつるんとしているT種写しの製品であり、それ以前のR種とは一線を画す。

対して、二ツ割遺跡の場合は、特に底部切り離しに鎌倉のR種写しの影響がみられるものの、多くはRH種の写しである点に(おそらく工人の)系譜の違いがある。大中小に分かれ、大:口径12 cm前後、器高3 cm前後、中:口径9.5 cm前後、器高2 cm強、小:口径8 cm前後、器高1～2 cmである。共伴したRH種は、大:口径12 cm台で底部脇に張り出しをもつタイプを含み、小:口径8 cm以下で器高1.4 cm以下(表57)。T種は、わずかであるが大:口径12 cm以下、小:口径8 cm以下である。

なおその後は、T種やRH種あるいは漆器と同様の形態、すなわち大皿は箱形で、小皿は器高がますます偏平になっていくものと予想されるが、量的にまとまった資料の出土は報告されていない。

RH種は、一三世紀代まで遡り、一四世紀段階までは濃淡の差はあるものの阿賀北に広く分布するが、一五世紀代になると加地荘・白河荘へと分布

域が狭まる（鶴巻二〇〇四）。

一三世紀後半代の事例としては、住吉遺跡 SD1203 を取り上げる。本遺構は、20 m 四方の方形溝で、珠洲Ⅱ期叩き壺及び赤坂窯甕、青磁鎬蓮弁紋碗等が伴う。小皿は 7 cm 台中心で、大皿は 12 cm 台が主体である。共伴遺物から一三世紀後半と考えておく。

それ以降については、新発田城 8 地点の発掘成果（新発田市教委一九九七）から一五世紀代まで順を追ってみていく。

層位的に堀 2 ↓堀 3 ↓堀 4 の順であることがわかっている。

堀 2 下層 大：口径 12 cm 強、器高 3 cm 前後、小：口径 7.5 cm 前後、器高 1.3～1.5 cm 主体。

共伴遺物：青磁鎬蓮弁紋Ⅲ類、珠洲Ⅳ期。

堀 2 上層 大：口径 12 cm 強、器高 3.4 cm 前後、小：口径 8 cm 前後、器高 1.5 cm 前後。

共伴遺物：白磁口禿、珠洲Ⅳ期。

堀 3 大：口径 12 cm 以下、器高 3 cm、小：口径 7 cm 前半及び 8 cm 前半、器高 1.5 cm 前後。

共伴遺物：珠洲Ⅴ期。

堀 4 大：口径 11 cm 以下、器高 3 cm 強、中：口径 9 cm 強、器高 2 cm、小：口径 7 cm 前半、器高 1.5 cm 前後。共伴遺物：瓦質播鉢。

堀 2 下層は、一四世紀前半で、大皿の口径が 12 cm を超え、小皿の口径 8 cm、器高 1.5 cm 以下である。二ツ割 SD1113 に近い時期の所産と思われる。堀 2 上層は、一四世紀代であるが、小皿の口径 8 cm、器高 1.5 cm を超えるものがみられる。堀 3 は、一五世紀代であり、大皿の口径が 12 cm 以下となる。小皿は大小二口径に分かれるようにみえる。堀 4 は、一五世紀後半であり、大皿の口径が 11 cm 以下となり、小皿口径 8 cm 台が消え、9 cm 台の口径をもつものが出現し、三口径となる。

（6）ロクロ成形土器 R 種（一五世紀）

この段階の良好な資料は、至徳寺遺跡（水澤・鶴巻二〇〇三、水澤二〇〇四）及び政所条遺跡群の江上館出土資料（中条町教委一九九五～一九九六、品田一九九九 b）がある。

至徳寺遺跡第 215・27・336 号遺構（第 42 図表 58～60）は、T 種を含まない資料であるが、中・大型器種に口縁を外反ぎみに収めるものや底部際周辺の削りが入れられるものがあり、口径分布が 5～6 種認められることから、京都系第二波の T 種土器搬入後の所産と思われる。共伴遺物から一五世紀中葉～後半となるものと考えられる。

至徳寺遺跡第 428・211・591・19・401 号遺構（表 61～65）は、T 種をわずかに含むが、R 種が主体となる資料である。器高 3.5 cm を超えるものがなくなり、やや偏平化している。口径分布は 4～6 種であり、4 種の分布を示す第 19・401 号遺構は、共伴 T 種の形態から比較的新しい時期の所産ではないかと思われる。

江上館主郭内南東炭層（第 42 図表 66）及び第 317 号遺構 5 期南炭（表 67）の資料は、部分的に歯抜けの口径分布を示すが、器高が 3.5 cm を超える資料の存在から、至徳寺の古い時期の資料に対比されよう。

なお、この時期の R 種土器については、関東（上杉氏）に系譜が求められている（坂井一九八八、品田一九九一、鶴巻一九九二）。それは、おそらく正鵠を射たものである。しかし、ここでみてきた多口径に及ぶ R 種については、明らかに京都の土器儀礼（中井二〇〇〇）を意識したものであり、T 種をまねて在地の土器づくりが動員されたものである。例えば、一四二三年に館機能を終了した堀越館出土土器は、R 種・RH 種で占められるが、

総量は限られたものであり、出方も一括廃棄されたものではない（新潟県教委二〇〇一）。すなわち土器の大量廃棄は、京都を模した儀礼の移入に伴って南北朝期の断絶を経た後に再び始まったものといえよう。またその折に、胎土が精良なものとなり、明るい色調へと変化するのである。この現象は、焼成技術にT種の製作技術が導入されたことを意味していよう。したがって一五世紀中葉を境として、両者は同じ製作技法でありながらも区別して扱う必要がある。

(7) づくね成形土器（一五～一六世紀）

一五世紀代～一六世紀初頭にかけての良好な資料も至徳寺遺跡及び政所条遺跡群の江上館出土資料である。

至徳寺遺跡第207・570・1・9・314号遺構（第43図表68～72）は、わずかにR種土器を含む資料である。口径分布は5～7種になり、古手の越前播鉢を含む資料の存在から一五世紀第4四半期～一六世紀初頭頃の所産と考えられる。

至徳寺遺跡第384・519号遺構（表73・74）は、T種のみ資料である。口径分布は、5～6種で上の資料群と同じ様相を示す。

江上館北堀炭層出土遺物（表75）は、器高がわからない資料も多いが、口径分布は7種程度に分かれ、至徳寺と同時期の資料群と考えられる。基本的にこの段階のT種土器の器高は3cm以下であり、先にみたR種土器はT種に連動して口径が細分化したものであることがわかる。

なお、越後における京都系第二波の搬入時期は、京都から守護上杉房定が帰国した一四五〇年に求められ（水澤二〇〇一）、その死（一四九三年）、あるいは息房能の横死（一五〇七年）と共に土器の使用量が激減することは、偶然ではないように思われる。

「永正の乱」以降の一六世紀代の様相は不明瞭であるが、春日山城内堀地区（表76）の資料を示す（戸根二〇〇三）。至徳寺遺跡の資料に比して、器壁が厚く底部が丸みをもつぽつりとしたものが増え、口縁端部の摘み上げが消失し、小皿の深みが増す。

なお、底部内面周囲に工具を用いた凹みを廻らせる一六世紀中葉頃のもの、堀越館SK51（新潟県教委二〇〇一）から出土している。R種が共存していることから、この段階でもR種が生産されていたことがわかる。

(8) 越後における中世土器の展開（表20、第44～46図）

越後における土器は、個々の食膳具が出現した六世紀以降、当初は口径が大きく、やがて徐々に口径を縮小していき、ある段階に達するとまた大口径が現れる。それは須恵器も同様で、五世紀から七世紀にかけて縮小し、八世紀に再編大型化し、また一〇世紀にかけて縮小し、消滅する。

特に九世紀前半代の変化は大きく、それまでの金属器嗜好から陶磁器嗜好へと変化し、偏平な杯形から碗形へと変化し、以後食膳具の主体をなすようになる。

そして、一〇～一一世紀にかけて、須恵器生産の終焉に伴う機能分担及び貿易陶磁器や国産施釉陶、漆器を用いた儀礼の影響を受けて、柱状高台を含む有台器種や黒色器種を生み出しつつ、大きく大小の構成をとるようになる。

次いで一二世紀になるころには、東日本で黒色及び有台器種がなくなり、大小の二口径からなる単純生産へと移行する。さらに、華南産白磁碗や漆器に押されて碗形から器高を低下させ、皿形に近づいていく。この折の重要なファクターは、これまでもたびたび言及されているように、京都でのみ使われていたづくね成形の皿形食器であった。以後口径・器高を縮小しつつ一四世紀へ至る。

上でみてきた様相は、四国でも認められる（池澤二〇〇四）ことから、京都以外の土器使用圏に共通する在り方である可能性がある。

その後、一五世紀・おそらく中葉に、京都系第二波の影響を受けて、口径が5～7種に分かれて大量に消費されるが、長くは続かず一六世紀に入る

と土器の出土そのものが低調となる。

なお、新旧のT種出現期においては、そのごく初期に器形の違いがめだつが、すぐにR種が偏平化し、両者はすみやかになじむ。技法の違いは土器づくりの出自による違いを示すが、使う側は、みなが似ていればどちらでもよかったのであろうか。それともどちらを使うかについて、身分差が設けられていたのであらうか。いずれの場合も、やがて在来R種のR種が駆逐され、ほぼT種のみとなる時期がくる。それはR種の職人集団が、新たな技法を身につけていったことを意味しよう。

さらに、上で述べた越後府中と一部の地域とは別に、T種をほとんど受け入れなかった地域として、ヘラ切り文化圏である阿賀北南部地域がある。ここで全く単純化していえば、現象面では、土器口径が縮小し続け、ある時期に新たな展開が生じて大型化し、また縮小を繰り返すというパターンが認められるように思う。大きく調整が丁寧なものから、小振りで洗練されつつも調整は雑になっていくという流れである。しかしなぜそうなるのかという理由は、明らかではない。律令の令と式の関係のように、時のたつにしたがい、細則が定まり、その結果として使われる食膳具も小回りがきくように小型化するのであろうか。それは一言でいえば、時代精神を体现しているのであらうが、今後はこのラフなスケッチを補綴しながら自分なりの答えを見出してみたいと思う。

なお越後は、日本海という地域性を有しており、一四世紀後半～一五世紀前半代の特殊な政治的状況下のロクロ成形土器を除いて、京都～北陸の影響圏である。ただ、特異な地域圏として阿賀北南部のロクロ成形底部篋切り分布地域があるのみであり、それをことさら協調して越後の独自性をことさら強調する理解を私は採らない。当然地域ごとに微妙な差異はあるにしても、大きくみれば北陸の、そして全国の流れの中で理解できるものと考えている。

(9)おわりに

昨今、発掘調査や遺物実測等の委託がどんどん増えている。そして当たり前であるが、社会における約束事だから、報告書がでる。そのこと自体は、非常に喜ばしい。

だが、たれが地域の歴史を担うのか。いうまでもなく、そこで日々生きる住民に他ならない。業務委託は、塞き止められない奔流かもしれないが、地域に根差した歴史事象は、住民、就中その先端に立つ我々が、伝えねばならない。広域の歴史は、誰にでもできる可能性があるが、地域の歴史研究は、そこに身を置かなければできないと思う。委託した中身を自身で理解し、地域史へと昇華させなければならぬ。

しかし文献がある時代の考古学では、五〇年も違えばまったく歴史的意義が変わってくる。例えば、一三世紀前半と後半ではたして同じ時代としていいのだろうかと思われるほど異なる社会であるから、ある遺物を一三世紀代とのみ規定するのは、その遺物が置かれた歴史的背景は全く異なってしまう。したがって遺物の年代設定は、慎重にならざるをえず、遺構の時期ともなればさらに難しい。しかし、せめてその時期だけでもなるべく絞り込みたいという意図をもって今回の拙文を提出した。

註

(一) 筆者は、中世の始まりを九世紀半ば頃と考えているが(序章付論、水澤二〇〇五)、ここでは蓄積の薄い一一世紀前後から叙述をはじめ。

(二) ちなみに第5回北陸中世土器研究会『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』(二九九二)でとりあげた六野瀬遺跡、中の山遺跡、山木戸遺跡、大藪遺跡、馬場遺跡、北田遺跡、小兒石遺跡、西田・鶴巻田遺跡、河原田遺跡、一之口遺跡(東地区)、子安遺跡、今池遺跡の12遺跡は、15年後

の現時点からみれば、一之口遺跡(ただしこれも本報告前)を除き、土器の一括資料としてはまったく不十分なものであったといえることができる。

なお、二〇〇三年一月の新潟県埋蔵文化財専門職員実務研修「中世土師器概論・遺物検討」において、越後の土器研究を牽引してきた品田高志との越後の中世土器に対する認識の相違が明らかとなったので、自身の考え方を表明する必要にせまられたという事情もあり、それが本稿をまとめる契機となった。

(三) ロクロ成形土器については、口径と底径の比較も有効であるが、別の機会に譲りたいと思う。

(四) 年代観の修正にもかかわらず、一四頁第4図は旧稿の年代となっており、注意が必要である。

(五) 他に正和元年(一一三二)銘木札に共伴した北小脇遺跡(吉田町教委二〇〇二)SE20出土の土器があるが、口径12.4cmの大皿1点のみの出土であり、ここでふれるにとどめる。

(六) 根本的な問題は、報告書(吉川町教委一九九一など)の実測図における器面調整の表現である。土器に関する記述を読むと、「ヘラナデおよびナデツケ」(四〇頁右)とされているが、一五世紀後半に登場するI種にも同じ表現がみられることから、てづくね成形に普通に認められる指頭圧痕を意味するものと思われる。

補註

本稿は、二〇〇五年に発表したものに、二〇〇七年の成果(水澤二〇〇七)である中世前期分を補ったものである。

2 一五世紀中葉～後半における北東日本海沿岸地域へのやきものの搬入時期―越後江上館出土土器を中心として―

(1)はじめに

本稿の目的は、第一に越後以北の日本海岸から出土する中世後期の京都系(産)土器の第二次拡散現象についての具体相を提示することにある。

第二に、同地域への陶磁器の流入開始時期を求めることにある。各種のやきものは、一五世紀中葉から後半にかけて大きな転換期を迎え、相近接した時期に本地域への流入が開始されたにもかかわらず、そこには若干の時間差が存在しているようである。今回は、遺跡の終末が明らかな事例から、それらについて考えていきたいと思う。

(2)越後江上館から(表21～24)

史跡奥山荘城館遺跡のひとつである江上館は、平成三年から平成八年まで6年間にわたって史跡整備の事前調査としての発掘調査を実施した(中条町教委一九九三～一九九七)。その結果大量の遺物が出土し、その中には一般集落からはほとんど出土しない威信財(小野一九九八)の類いが数多く認められた。したがって江上館は、国人領主中条惣領家の本拠地でよいものと考えている(水澤一九九九a～d)。そしてここで問題とする京都系土器も、領主という性格を反映して破片数で1,005片に達している(中条町教育委員会一九九七a)。現時点でこの数量は、越後では府中の伝至徳寺に次ぐものと思われる。

さて、土器自体の特徴については後章に譲るものとして、ここではそれを含む陶磁器群の年代的位置付けを押えておきたい。

第20図は、館西南隅の水溜(第317号遺構)から出土した遺物群である(『江上館跡Ⅳ』。(2期)・3期北炭とした一括資料には、青磁幅広蓮弁紋碗・端反碗、白磁内湾皿、珠洲播鉢、瓦質播鉢、土器などが含まれていた。本資料群は、珠洲播鉢から一五世紀第2四半期頃に位置付けられる。ここで注目されるのは、底部周辺をヘラ削りし口縁を外反させる土器の存在である。これは、明らかに京都系土器を意識したつくりであり、伝至徳寺にも類例がある(小島一九九五・小野一九九八b)。したがってこの段階で、すでに京都系土器が持ち込まれている可能性が高い。そして同じくV期の珠洲播鉢を伴う4期では、確実に京都系土器が共伴している(出土点数が少なく、共伴関係が良好ではないため未図示)。

次の一括資料である5期南炭では、白磁内湾皿の全面施釉タイプ、青磁筋描蓮弁紋碗・直縁無紋碗、青花端反碗・皿、瀬戸卸皿、土器などが出土している。この炭層には、ロクロ成形の土器しか含まれていなかったが、本層と近接した時期の所産である主郭南東隅の炭層一括遺物(第22図『江上館跡Ⅲ』では、少量ながら京都系土器が伴い、引き続き搬入されていたことがわかる。また、ここから搬入量が限られたものであり、ロクロ成形のものが同時期にも引き続き用いられ、そのみが使用されるケースもあったことがわかる。この5期南炭及び南東炭の時期は、ともに瀬戸後Ⅳ期古段階の卸皿を含むことから一四四〇年から一四六〇年の間に位置付けられる(藤澤一九九一)。

遺跡の最終段階の5期炭層以後、6期にかけては、青磁線描蓮弁紋碗・白磁内湾皿・土器・多種類の瓦器などが出土している。この段階では、圧倒的に京都系のでつくね成形土器がロクロ成形のそれを凌駕しており、珠洲播鉢よりも瓦質播鉢が多数を占めるようになってきている。時期的には、同時期の堀の焼土・炭層の一括遺物(第23図『江上館跡Ⅰ』に瀬戸後Ⅳ期新段階の桶を伴うことから、一四六〇年から一四八〇年代(藤澤1986)の中での推移と考えられる。

そしてその後ほどなく館は廃絶し、鳥坂城へと本拠を動かしたものと考えられる(水澤一九九九b・d)。その理由としては、最新の遺物として、瀬戸では大窯1段階の端反皿がわずかに9点3個体、青磁は腰折れ皿4点3個体、白磁は端反り皿13片7個体ほどしか出土しておらず(『江上館跡Ⅴ』、

ほとんど遺構に伴わないかたちでの出土であったことによる。

対して青花は、一五世紀後半の端反り碗・皿が主体で 87 片 22 個体を数え、碁筭底の皿が 1 点のみ出土しているという状況にあり、遺構にも伴っている。

したがって江上館の京都系土器皿は、瀬戸後期様式の後Ⅳ期古段階から大窯の最初期まで、実年代でいくと一四四〇年以降一四八〇年代頃まで（藤澤一九八六・一九九一）の間に収まる資料、ということになる。そして青花端反碗・皿、瓦質播鉢、青磁直縁無紋碗・筋描蓮弁紋碗も、瀬戸後Ⅳ期古段階の内には入り始めており、京都系土器に近い時期に動き始めているものと思われる。また、最新遺物からみて、青磁腰折皿・白磁端反皿の流通が瀬戸の大窯製品のそれと近い時期に連動していたことが予想される。加えて、越前播鉢が 1 片も出土していないことは、注目されることである。

なお越後において、外に京都産を含む京都系土器を多量に出土した遺跡として、先にふれた上越市の伝至徳寺がある。報告書が刊行されていないので、詳細は不明であるが、中世後期のピークは一五世紀後半から一六世紀初頭にあるという（小島一九九四）。よって伝至徳寺は、宝徳二年（一四五〇）の守護上杉房定の京都から越後府中への帰国を契機として、守護館としての機能を充実させたものと思われる。あるいは発端という意味では、房定の前の守護房朝の文安三年（一四四六）の一時帰国もその可能性があろう。そしてそれ以降の守護の在国と京都との密接なかわり（山田一九八七・矢田一九九六）によって、京都産土器が持ち込まれたと推測することはあながち無理な想定ではないように思える。さらにこのようなコンテクストの下、中条氏を始めとする国人領主たちは、京都の土器を手に入れていたものと考えたい。

また、館に限らず、頸城郡の有力村落や寺院などでも少量ながら一五世紀後半代の京都系土器が出土している（樋田遺跡・寺町遺跡など、吉川町教委一九九一・一九九四・一九九六）ことも、この時期の越後ならではの時代性を示しているものと理解できよう。

一方越後以西の北陸では、京都系土器が定量認められるようになるのが一五世紀末もしくは一六世紀に入ってからといった様相が認められ（北陸中世考古学研究会一九九八、三六七～三九二頁）、越後とのいわば「東高西低」現象が生じている。搬入時期については、同様の時期であると思われるが、上述の守護上杉房定の越後在国という政治的契機が量的な搬入状況に大きく与かっていることは容易に考えられるところである。

（3）畿内研究者の土器理解

ここでは、一五世紀から一六世紀の土器の特徴についての整理を行う。しかしここで問題となるのは、小森俊寛・上村憲章両氏が述べられたように、「Ⅶ期（一二六〇年から一二七〇年台）からⅨ期（一五〇〇年代の最初の頃）までは、現状では型式の実年代推定が可能な資料は、今のところ、京域内出土資料では有力なものがない」（小森・上村一九九六、二五六頁）ということである。すなわち一三世紀後半から一六世紀初頭までの 300 年ほどの土器編年は、層位的型式学的な相対編年によって、行われているということを知るのである。それをふまえて以下、各研究者の見解をみていくこととしよう。なお、北東日本海との関係で問題となるのは、白色（淡褐色）系皿である。ただし同じ白色系でもへそ皿はほとんど出土していないので、除外する。またここでは、半世紀以下の細かい時期変遷と、その具体的な技法について述べられているいくつかの文献についてのみ、箇条書であげるにとどめる。

① 鋤柄俊夫（一九八八）

C・5 類（一四世紀第 4 四半期、以下一四・4 と略） 口縁端部のつまみ上げ始まる。

C・7 類（一五・2） 以降皿型となる。

C・8 類（一五・3） 外反状の口縁終わる。

C・9類(一五・4) 底部際の内湾状の立ち上がり終わる。

C・12類(一六・2) 口縁端部のつまみ上げが省略され、外傾する平坦面となる。

②小森俊寛・上村憲章(一九九六)

IX期(一四四〇頃～一五〇〇最初) 白色系厚手化し褐白色化。器種分化進展。器高の低下。口縁が延びやか。中々新段階で、白色系の皿Sに偏った出土例が増加する。

IX古(一四四〇～六〇) 底部から体部には丸み。口縁部先端は小さく丸く肥厚しているものが多く、その直下が5cm程の幅でごく浅く凹み、その下がゆるく丸みをもって内方へ肥厚している形態が主流。

IX中(一四六〇～八〇) 皿S小・皿S中の明確化。全体で7群程度。底部周縁部分に細い凸線状の小さい圈線(なで痕跡)が出現。

IX新(一四八〇～一五〇〇代最初) 口径18cm以上の大型品および器高3cm以上のものは、ほとんどなく、全体に偏平な皿形となる。

X期(一五〇〇年頃～一五八〇代) 口縁の内側は、内傾する端面化。みこみ周囲は、凸状の盛り上がりから、凹線状の圈線へ。白色系最小径は、圈線を喪失し丸底化する。中・新では、15cmを越える資料が伴わないものも多くなる。

X古(一五〇〇代最初～一五三〇代前半) 小口径のものでは口縁端部内面が内傾する端面化したものがあらわれる。

X中(一五三〇代前半～一五五〇代) 体部から口縁が外反するものが少なくなる。口縁端部内面が内傾する端面(ごく浅く凹むものも多い)化。内面の圈線は浅い凹線によるものが多いが、大型を中心に凸状圈線がのこる。ただし、皿S小は凹線を有さず、内面底部中央をなでる丸底小皿として定型化。体部内面の指抜き痕を「つ」の字状に残す例が認められ始める。口径は、最大で15cm台。

X新(一五五〇代～一五八〇代) 底部際に凹線状圈線をもつものが主体。体部は外反状のものはほとんど認められず、短く直線的に開く。口縁内側の内傾する端面(ごく浅く凹むものも多い)は、幅の狭いものとなる。先端部は丸みをもつが、端部は短く尖りぎみに収める。体部内面の指抜き痕が「つ」の字状に残っている例が多い。

③伊野近富(一九九七)

Ia・1(一五世紀前葉) 底部際丸みあり。「の」の字状ナデ上げ。

Ia・2(一五・3) 底部際屈曲明確。口縁端部肥厚。「2」の字状ナデ上げ。

Ia・3(一五末～一六初)

Ia・4(一六・2) 口縁端部薄くなる。

Ia・5(一六中葉) Ia・4と大差なく、縮小化。

Ia・6(一六後半) 口縁の外反なくなる。口縁の内側を強く横なでするため、その上下の器厚が厚くなる。

④岡田保良(一九八五)

山科寺内町石室出土資料 天文元年(一五三二)焼亡。底部平坦。口縁やや外反。みこみ一定方向のなで。みこみ周囲に浅い溝状の圈線。以上の研究成果から、江上館の土器をみてみよう。

形態的特徴としては、多くは口縁端部に小さなつまみ上げを有し、口縁外側の横なでは、強いものと弱いものがあるが、比較的幅の広いものが多数を占める。体部と底部際は丸みを有するものと屈曲が明確なものがあるが、全体的には比較的器高が低く明確に屈曲を有する皿型を呈するものが多い。体部内面に「つ(2)」の字状の指抜き痕を残すものや底部周辺に圈線を有するものも一定量認められる。口径は、8cm台、10cm前後、13cm前後、

15 cm台、16 cm台、18 cm前後、21 cm前後、23 cm台に分布域が認められるが、20 cmを超えるものはそれほど多くない。

これらの特徴から本遺物群は、小森・上村氏のいうIX期の内(二四四〇～一五〇〇最初)、あるいは伊野氏のいうIa・2(一五世紀第3四半期)もしくはIa・3(一五世紀末～一六世紀初)に位置付けられるのではないかとと思われる。なお山科寺内町の石室資料には、ほとんど口縁端部のつまみ上げが認められず、1点をのぞき口径16 cmをこえる大型品はないようである。また江上館の場合、共伴関係から下限を瀬戸の大窯開始直後に求められるため、年代的には一四八〇年代より新しくはならないこととなる。また上限は、瀬戸後IV期古段階(二四四〇～六〇)の内にある。

したがって江上館の京都系土器は、一四四〇年頃から一四八〇年頃までの40年程の時期幅の中に収まるものと考えられる。

(4) 北方の様相

ここでは、江上館での遺物の出方を検証するために、目を北方に転じ、いくつかの遺跡での京都系土器などの出土状況を確認する。なおその年代観や組成については、工藤清泰によってまとめられており(一九九九)、それに与かったものが多いことをこわしておく。

① 十三湊遺跡(国立歴史民俗博物館一九九八)

『満済准后日記』永亨四年(一四三二)に安藤氏の没落の記事が見え、嘉吉二年(一四四二)頃には完全に南部氏に手に落ちるといふ。よって遺跡の存続時期は、一五世紀半ば頃までということになる。これは、瀬戸大窯及び青花が出土せず(鈴木一九九八、一一頁)、青磁直縁無紋碗・筋描蓮弁紋碗もまた出土していない(工藤一九九九)という発掘調査の結果からも妥当であろう。また、最終段階の瀬戸後III～IV期に伴う遺構からのみ京都系土器が出土するという(鈴木同前)。

したがって、ここでは京都系土器が一五世紀半ばに持ち込まれていること、青花、青磁直縁無紋碗・筋描蓮弁紋碗・稜花皿、白磁端反皿が出土していないことを押さえておきたい。

なお、本旨からややそれるが、京都系土器が持ち込まれた十三湊遺跡の性格について少々考えてみたい。それは、十三湊が北日本における重要な物資の集散地であることに異論はないが、最近の宇野隆夫に代表される論調(宇野一九九七・一九九八)には、少々違和感をもつからである。

まず、輸入陶磁器の出土量について、宇野は一六世紀以前の東日本では、鎌倉に次ぐものであるという。しかしそれは、面積比を考慮しても津軽浪岡城や越後江上館などの領主居館の出土量には及ばない(工藤一九九五、中条町教委一九九七・水澤一九九九d)。すなわち非常に多いクラスの遺跡に属しているが、北東日本海沿岸地域においては「突出」(宇野一九九八、一一頁)というほどではないことに注意する必要がある。

そして問題は、古瀬戸の性格付けについてである。宇野はいう。「地域の中核的な遺跡・場ほど瀬戸の量比が高い傾向にあ」(宇野一九九七、二〇〇頁)り、「格の高い場合ほど中国製陶磁器より瀬戸施釉陶器を多く用いたことが明らかである」(宇野一九九八、一一頁)と。しかし、宇野が根拠とした個々の事例(宇野一九九七)を検討していくと、かなりの部分で別のとらえ方ができるのではないかと思われる。例えば、江馬氏館や東日本の太平洋側での瀬戸の多さは、生産地と流通経路との関係によるものと考えられる。また、中心(堀の内)に多いという状況は、格が高い場所ほど中国製品で補えない多種類のものが求められた結果であらうし、鉄釉製品の占める割合が高いということも中国製品にあまりない釉調が求められたため、とも考えられる。そして大体において、瀬戸の比率が高いのは、港湾関連遺跡であることに注意せねばならない。十三湊しかり、西川島もしかりである。これら集散地遺跡では、生産地の状況を直接反映した組成が認められるという。そして湊に残されているものには、博多にみられるような傷物や売れ残りの品が少なからず含まれていた可能性もあろう。すなわちそこに成立していた町では、売れなかつた物品が消費されることがあり、それが組成に反映されているといったことは考えられないのであろうか。十三湊でいえば、最も大口の消費場所の一つが浪岡城であったことは、その陶磁器が物語つ

ているところであり、そこでは瀬戸の数倍もの中国陶磁器が消費されているのである（工藤一九九五・一九九九）。

さらにいうと瀬戸の出土が多い遺跡は、寺社関連の遺跡である場合が多い。館では貿易陶磁器が主体を占める北東日本海沿岸地域においてさえ、寺社においては瀬戸の比率が高い（水澤一九九七）。瀬戸の器種に仏具が多いのは周知のことであり、金属器や貿易陶磁器で量的に対応できなかった部分をカバーするかたちで流通していたのではないかと思われ、これが太平洋岸での瀬戸の出方の意味するところではないかと予想している。したがって格の高い遺跡には違いないが、宗教に近い分野の遺跡で受容されていたといったほうがより正確なのではなかろうか。その意味で今後は、瀬戸の多い十三湊の性格を湊と宗教施設との関係から考えてみたいと思っている。

すでに植崎彰一は、一九九六年に開催された瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』での総括において、宇野が公演の中で提言した「瀬戸は中国陶磁器補完的な役割を果たしたのではない」という論旨に対して、従来の瀬戸Ⅱ中国陶磁器の補完物であるという立場を再度表明されている（瀬戸市埋文センター一九九七、二三七～二四〇頁）。筆者も、現時点で中世の人々が中国陶磁器よりも古瀬戸を特別視していたとは思えない。

なお十三湊は、北方世界への窓口であるが、それはしかし中国との窓口である博多や琉球の扱う物量の比ではないことは認識しておく必要がある（水澤一九九九e）。環日本海交流が叫ばれて久しく、地域史の中では欠くことはできない遺跡であるけれども、その位置付けは、中国を中心とする東アジア世界の中で相対化した上で行われるべきものと思う。

② 志苔館（函館市教委一九八六）

長祿元年（一四五七）、コシヤマインの乱によつて廃絶したと考えられている。遺物量は、多くなく、柱穴の重複も激しくないもので、一五世紀前半～半ばにかけての短期間の所産と考えられる。珠洲はⅤ～Ⅵ期、瀬戸は卸目付鉢のみという特殊な器種組成であるが、後Ⅲ期～後Ⅳ期古段階であり、京都系土器を少量伴う。青花、白磁端反皿、青磁線描蓮弁紋碗が出土していないことは、十三湊と同様であるが、青磁筋描蓮弁紋の出土が認められる（工藤一九九九）。これがあるいは、十三湊との時間差を表しているかと思われる。

③ 尻八館（青森県立郷土館一九八二）

工藤清泰によれば、安藤氏が十三湊の撤退以後の巻き返しに伴う一五世紀後半の遺跡ではないか、とされる。青磁酒海壺・大型香炉や風炉等の威信財が出土したことで著名である。漆塗土器が1点出土しているが、京都系土器の出土はない。瀬戸大窯、白磁端反皿は出土していないが、青花、青磁線描蓮弁紋碗・稜花皿、瀬戸後Ⅳ期新段階の腰折皿は出土している。珠洲播鉢はⅤ・Ⅵ期のものが出土しているが、越前播鉢が出土していないことから、終末は志苔館と勝山館の間に求められよう。

④ 勝山館（上之国町教育委員会）

瀬戸大窯以降に主体を持つ遺跡であり、文明五年（一四七三）に館神八幡宮創祀というから、それ以降に居住を開始したと考えられている（松崎一九九九・工藤一九九九）。青磁端反り碗が一定量残っていることや、少量ながら珠洲Ⅵ期の播鉢・瀬戸後Ⅳ期・内湾小皿が出土していることから、八幡宮創祀後いくばくかの時間をへて越前播鉢が搬入され始めたと考えられる。

⑤ 諏訪間興行寺遺跡第二面（富山一九九三）

一括資料である炭化物層からは、青花端反碗と直縁碗が1点ずつ報告されており、青磁直縁無紋碗、全面施釉の白磁内湾皿も出土している。そして近年、青磁筋描蓮弁紋碗の出土も報じられた。ここからは、京都系土器らしきものが1点出土しており（富山一九九七、五五頁、第50図-20、ただし未実見）、北陸西部でも一五世紀第3四半期まで搬入時期が上る可能性があるように思われる。

(5) 北東日本海沿岸地域へのものの流れ

以上、江上館等への遺物の流入状況をまとめてみると、表24のとおりとなる。

本図を説明すると、瀬戸後IV期古段階でも古い時期に、京都系土器の搬入が始まり、瓦質播鉢（江上館のみ）も入り始めている。次いで瀬戸後IV期古段階の新しい時期になると、青花、白磁内湾小皿（全面施釉タイプ）、青磁筋描蓮弁紋碗・直縁無紋碗が認められるようになる。

瀬戸後IV期新段階になると、青磁線描蓮弁紋碗が入り始め（古段階）、さらに下る（新段階）と白磁端反皿・青磁稜花皿が認められるようになる。そして、それにわずかに遅れて瀬戸大窯と越前播鉢が流通し始めるのではないかと思われる。

なお、中世後期の土器の数量を問題にすれば、現時点では越後と出羽の境で線が引けよう。ただし越後でも、てづくね成形文化圏は府中のある上越地域までで、あとは府中までの政治的距離により出方が異なるように思われる。さらに越後以北の土器は、数量からいってサンプル程度のものであり、陶磁器類と異なり必要とされなかったものである。これは、江上館と津軽の間に位置する庄内藤島城においても認められ（百瀬一九九七）、越後以北の日本海岸に共通の現象と考えることができる。ただし、一六世紀代の共伴事例がほとんど確認できないことは、特筆されてよいであろう。

(6) おわりに

そもそも本論の発端は、貿易陶磁研究会新潟大会（一九九五年）に江上館の京都系土器を京都の研究者に実見いただいたおり、ほとんどの方々から一六世紀前半の山科寺内町石室の資料に類似しているというご指摘を受けたことにはじまる。それは、時期的に一五三〇年前後の所産と考えられるということの意味する。しかし、江上館の土器以外の出土遺物には、ほとんどといっていいくらい一六世紀代のものを含んでおらず、そのギャップに悩んだことであつた。そして報告書には、最新の年代観を有するとされた土器の年代に依拠した変遷案を提示した『江上館跡IV』『同V』。

しかし釈然としない思いが残った。そこで、京都系土器との共伴関係の再点検を行い、さらに多くの研究者のご意見を聞くにつけ、その終末を瀬戸大窯の開始期前後（一五八〇年前後）より新しくもっていくことが難しいことに確信をもつにいたった（水澤一九九九a～d）。

次いで、京都での土器編年の現状を確認する作業を行った（3）。結果、おおまかな流れについての共通理解はあるものの、細部については研究者間においても異同が認められ、一五世紀後半の土器と一六世紀前半のものを判別するのは、そう容易ではないことがわかった。それは考えてみれば当然であるが、主体ではないとはいえ前段階の特徴を有するものも定量認められるのが普通であり、土器一つをみてその年代を特定することの困難さは誰もが知っていることである。したがって、そのあたりを考慮されている小森・上村両氏の編年案が、最も詳しく理解し易いものと考えられた。またそのことは、当たり前ながら共伴関係から時期を求めるという基本に立ち返えることの重要性を再認識する結果となった。

次いでこの状況がひとり江上館だけの状況ではころもとないたため、さらに広い地域での様相を確認することにした（4・5）。その結果、流通量の関係で良好な出土例が限られているという憾みは残るものの、一五世紀半ばの瀬戸後IV期古段階で京都系土器が、少数ながら北海道志苔館にまで達していることがわかった。そして全国的に京都系土器が点的に拡散する一六世紀代においては、かえって分布域を縮小し、北限が越後となるであろうことも予測されたのである。なお、土器の搬入時期を追う過程で、それ以外の陶磁器についても触れざるをえず、それらについても追加した。その結果、ややいびつな叙述となったが、詳細については第一章第3節を参照いただきたい。

今後は、さらに検証を重ね、各地域での個別事例を細かく検討することによって、地域ごとの各種のやきものの搬入時期の差を明らかにできれば、全国的なものの流れがより具体的にわかってくるであろうことが予測されるのであるが、今回はその第一歩としたい。

(一) 第一次拡散は、平泉および鎌倉を典型とする一二世紀後半から一三世紀前半にかけての京都系土器の流通で、この範囲は第2次よりもかなり広範囲に及んでいる。

(二) 個体数は、一応144個体と算定した。ただし時期的・地域的な問題から、ロクロ成形土器の方が多い(3,440片÷203個体)ことに注意する必要がある。

(三) 瀬戸大窯及び白磁端反皿については、再検討の結果、報告書と点数が異なっている。

(四) ただし江上館で越前播鉢が出土しないことに関しては、瓦器の多さから瓦質播鉢を特別視していた可能性があるため、断定はできない。

(五) 伝至徳寺の遺物のピークの下限は、一六世紀初頭の永正年間初期までで、以降の遺物は激減する(上越市教委の小島幸雄氏のご厚意で実見させていただいた)。それが増え始めるのは、一六世紀末の唐津の流通時期をまたねばならないようである。

(六) ただしこれは、一五世紀前半主体という遺跡の存続期から時間的な問題である可能性もある。

(七) 藤澤良祐教示。なお、氏には第5章の表作成に関してご意見をいただいた。

(八) 東北太平洋沿岸の遺跡で、それを端的に表しているのが、瑞巖寺境内遺跡である(新野一九九六)。なお、調査担当の新野氏のご教示によれば、瀬戸は貿易陶磁の10~15倍にも達するという。

(九) なお、厳密にいうとこれは廃棄年代であって、搬入はそれよりも以前となるのであるが、初現時期についてはそれほどの使用期間を想定する必要はないものと考えている。

(一〇) 普正寺遺跡では、全面施釉の白磁内湾皿と青花は出土しておらず、それらの出現時期が嘉吉元年(一四四一)頃以降に下ることを、すでに垣内光次郎が指摘している(石川県立埋文センター一九八四、八四頁)

(一一) なお感覚的な話ではあるが、この段階で青磁の腰折れ皿が遺構に伴っているのに対し、稜花は包含層よりの出土であること、首里城京の内SKOIの両者の数量比などが傍証の一つとなるかもしれない(沖縄県教委一九九八)。

(一二) 以前より京都の百瀬正恒は、藤島城の京都系土器を一五世紀後半のものとされ、江上館の土器についてもそれを示唆していた(一九九七)。

また一九九九年初秋には実見いただき、形式的に一五世紀後半の短い範囲に収まるとのご教示をいただいた。また、一九九九年早春に小野正敏に実見いただいた折りに、事実を事実としてみることをお諭しいただいたことは、それまで俊巡していた気持ちを決めることとなった。この場を借りて、学恩に感謝する次第である。なお、江上館の土器が新しくみられた要因としては、山口や北陸西部などの最も早く京都系土器を受容したと考えられていた地域で、それが定量認められるのがほぼ一六世紀に入ってからという事実関係があり、したがってそれより古くはならないだろうという暗黙の前提があったことは否めないところではなからうか。

3 至徳寺遺跡の中世後期土器

(1)はじめに

先般、『上越市史叢書8 考古—中・近世資料—』が刊行された(上越市二〇〇三)が、中世後期の土器(かわらけ)については、その多くが資料化されないままとなつてしまった。

そこでここでは、その一部を紹介することとしたい。選択条件としては、基本的に10個体以上の完形土器が出土している遺構出土のものとし、17遺構を選出した(内、2遺構は一七世紀)。共伴遺物は、叢書に掲載されているものから宿率を調整して転載した(鶴巻康志担当)が、未掲載分については実見の上、記述を追加した。

以下、出土地点ごとに順次紹介する(第47図)。

(2)北堀の外側(A区)

SD59(第47図) ロクロ成形土器(以下、ロクロ土器とする) 主体であるが、てづくね成形土器(以下、てづくね土器とする)のものも少量認められる。共伴遺物には、青磁筋描連弁紋碗、瀬戸大窯1段階端反皿、珠洲V～VI期播鉢片があり、一五世紀第4四半期頃の所産と考えられる。

(3)北堀の内側(A・B・D区)

SX215(B区:第48図) ロクロ土器のみの組成である。白磁内湾皿・八角坏、青磁端反碗、珠洲IV期播鉢等が伴い、一五世紀前半となろう。

SX019(A区:第49図) ロクロ土器主体であるが、てづくね土器も伴う。青磁酒海壺、青花端反碗・鉢、瀬戸後IV期古御皿・筒型容器、越前壺、珠洲V期甕・罍付壺・VI期播鉢が伴うことから、一五世紀第3四半期頃の所産と考えられる。

SX211(B区:第50図) ロクロ土器主体で、少量のてづくね小皿が含まれる。白磁内湾皿、青花端反碗、珠洲V期甕・VI期播鉢が伴うことから、一五世紀後半に位置付けられる。

SK001(A区:第51図) てづくね土器主体であるが、口縁が開くロクロ土器を少量含む。青花碗C類を伴う。

SK006(A区:第51図) てづくね土器主体で、朝鮮雑釉皿、一五世紀末頃の越前播鉢を伴う。

SD207(D区:第51図) てづくね土器主体である。白磁端反皿、珠洲VI期播鉢が伴うことから、一五世紀第4四半期頃の所産と考えられる。

(4)南堀の外側北方(C・F・I区)

SK027(C区:第50図) ロクロ土器のみで、大型品は底部周囲を削るてづくねを意識したものである。てづくね搬入初期にのみに認められるタイプである。珠洲V期播鉢片が伴う。一五世紀中葉。

SX314(F区:第52図) てづくね土器主体で、大型品の中に内面赤色顔料が付着したものや、外面に引っ掻き痕をもつものがある。瀬戸後期天目茶碗、珠洲VI期播鉢、越前播鉢を伴うことから、一六世紀に入る可能性がある。

SK570(I区:第53図) てづくね土器主体で、小皿の外側に「五月十六日」・「十二月二七日」の墨書銘を記するものがある。また三(四)方

に孔を開けた大型品が認められる。越前壺が伴う。

SK519 (I区…第54図) てづくね土器のみの組成である。大型品の内側に墨書が認められているものがある。土器以外の共伴遺物は認められない。

SE521 (I区…第55図) ロクロ土器は、春日山城最新段階や福島城などでみられるずんぐりとしたタイプの小皿である。備前播鉢が伴う。一七世紀初頭の所産である。

P696 (I区…第55図) SE521と同タイプのロクロ小皿である。

(5)南堀の外側南方(G区)

SK401 (第56図) ロクロ土器主体で、1点のみ体部に孔を開けるてづくね皿が出土している。珠洲VI期播鉢、一六世紀代の越前甕が出土していることから、一六世紀に下る可能性がある。

SK428 (第56図) ロクロ土器主体で、白磁内湾皿、青磁端反碗・巾広蓮弁紋碗が伴うことから、一五世紀中葉頃の所産かと思われる。

SK336 (第57図) ロクロ土器のみで、白磁内湾皿・八角坏、青磁縁描蓮弁紋碗、青花瓶、瀬戸後IV期新折縁深皿が出土しており、一五世紀第三四半期に位置付けられる。

SK384 (第54図) てづくね土器のみの組成で、白磁内湾皿・端反皿、青磁縁描蓮弁紋碗・雷紋帯碗、瀬戸後IV期古卸皿・大窯1段階天目茶碗、一五世紀代の越前甕等が伴うことから、一五世紀第4四半期以降の所産となる。

(6)地点ごとの出土傾向(A区とG区の対比を中心にして)

ここでは、以上みてきた「遺構の土器群の出土地点をみておく。土器の多くは、北堀内側のA区及び南堀南方のG区から出土する傾向が認められる。今回提示し得なかった土器群の多くも、この二地点に集中している。

A区についてみれば、青磁酒海壺などを出土したSK19に代表されるように威信財を大量に廃棄した土坑群が存在することが特徴である。これらは、火事場整理に伴う可能性が高いものであるが、本稿で紹介したものの中には、威信財を伴わないものも多く、土器を中心とした遺物の廃棄遺構の存在が指摘できる。したがって、土器を廃棄する場であったが故に、火事場整理のための廃棄土坑が設けられたと考えられよう。

対してG区を含めて、堀の南側からは、ほとんど威信財に当たるものが出土しない(水澤二〇〇一b)。ただ、土器が大量に廃棄されているのみである。この場所は、「至徳廿内」という墨書をもつ瀬戸後IV期新の天目茶碗底部などが出土したことにより、至徳寺跡と推定されている(小島一九九四、金子二〇〇三)。しかし、はたして、この場所が越後守護上杉氏の迎賓館である至徳寺及びその塔頭である長松院等にあたるのだろうか。確かに遺構構成がはつきりしない段階では、判断を保留せざるを得ないが、ものからみた場合、土器が大量に捨てられている場であるという以外に格の高さを示す物証に欠けているといわざるを得ない。したがって本地点は、土器を処理(廃棄)する場としての位置付けが与えられよう。

(7)至徳寺遺跡のてづくね土器

最後に、てづくね土器を検討して、稿を終えたい。武家儀礼と土器口径の分化については、中井淳史の研究に詳しい(中井二〇〇〇)。要約すると、土器サイズの多様性こそが、武家儀礼に用いる儀器としての用途を意味するということであった。しかし京都以外の地域については、儀礼の所作や作

法に重点がおかれ、土器そのものは二、三のサイズの区別しかないという。

では、至徳寺遺跡では、どうだろうか。表25・第58図は、今回示した資料群の中からつくね土器を口径別に分類したものである。おおむね、五〇六サイズの土器が使われていたことがみてとれよう。なお、これ以外にも最大口径が、16cmを測る大型のものも出土している。

したがって、以前、越後におけるつくね土器の搬入契機として指摘した宝徳二年（一四五〇）の越後守護上杉房定の京都からの帰越（水澤二〇〇一a、前項）こそが、直に都から武家儀礼の儀器としての土器を持ち込んだ契機であると評価できる。なお、この多分化したつくね土器の在り方は、麾下の国人領主の居館でも認められ（江上館・中条町教育委員会一九九七）、守護所以外にも部分的に浸透していたものと考えられる。

1 中世越後の城館

(1)はじめに

一般に「中世城館」とされている遺跡のほとんどは、中世末に廃絶した状態で遺存している。特に越後では、上杉景勝が天正一四年（一五八六）以来臣従した豊臣政権の方針による城割り及び慶長三年（一五九八）の会津国替えに伴って廃城となったものが多いと考えられている。越後でわれわれが中世の「館」と「城」からイメージする「堀と土塁に囲まれた方形居館」と「堀切に区切られた山城」は、多くが中世後半（山城は主に一六世紀）の所産である。言い方をかえると、中世を通じて同じ場所に居住していたとすると、前半の姿を知ることが難しいし、中世前半の居館の様相は、おそらく「城館」らしくないからである。一例をあげよう。一四世紀以前の遺跡の代表として、頸城郡の樋田遺跡（吉川町教委一九八九～九一、第59図）をみてみる。この段階では、約60メートル四方の溝に区切られたいくつかの区域に分けられており、当時の村の在り方がわかる。ここには、あまり突出した屋敷地（館）は、みいだせないのである。

以下、個々の城館を例にとりながら、城館からみた越後の歴史の一端にふれてみたい。なお、城館がはっきりと姿をあらわしてくるのは、中世後期のことであるので、いきおい話が限定されたものとなることをこわしておく。

(2)館という小宇宙―姿を現した中世居館―江上館跡（第60図）

まずは、武士の本拠たる居館からみていこう。ただし調査範囲の関係や報告書の刊行状況から、館の全容がわかっていない事例は、そう多くない。ここでは、史跡整備という目的のために調査を進めている中条町の江上館跡（中条町教委一九九三～九七）を例にとり、当時の武士の生活ぶりをみていくこととしよう。

江上館跡は、奥山莊中条の惣領地頭たる三浦和田氏の本拠地、すなわち中条の殿様の居館といわれている。発掘調査で、その住人が明らかとなることは、ほとんどない。これが考古資料の性質である。現時点で、その可能性はかなり高いと思われるが、断定はできない。

立地は、扇状地の端の平場に位置している。形態は、方形単郭の主郭があり、ある時期に南北に馬出し様の郭が附属する。その時期は、一五世紀後半頃と考えられる。特に北郭は、居住空間から急激に変化しており、土塁で囲われるようになる。

主郭内は、60メートル四方で、遺りのよい基底部幅10メートルの土塁と、15メートル前後の水堀がめぐる。ほぼ一町四方となる。堀は1メートル前後と浅いが、土塁は3メートルを越えている。プランで特徴的なことは、北方の中央部を凸形に張り出させている点である。虎口は、南北に二箇所開かれており、ともに最終的には直進できないように食い違い構造を持たせていたことが判明している。北虎口には、土塁の屈曲に合わせて蒔土塁が築かれ、北門の前方には蒔堀が設けられていた。南虎口の南堀底には、橋脚の基部が遺存しており、南郭側の橋頭には、土落としと考えられる石敷遺構がつくられていた。

次いで郭内の状況をみていく。確認された遺構は、掘立柱建物六十棟・井戸六基・区画溝・水溜め遺構・埋甕遺構・多数の土坑などがある。これらは、六時期の変遷を想定しており、最盛期は一五世紀代にある。建物規模は、柱間三×二間程度で、25～50㎡の床面積をもつ建物が多いが、第六号

建物のように床面積300㎡を超えるものも存在していた。この第六号建物は、コの字状を呈する特異な建物構成をもっている。井戸は、北方中央付近にすべて集中しており、石組のものと木枠をもつものがある。そして特徴的なことは、溝によって西側四分の一が区切られていることで、南西隅には、遺物が大量廃棄された水溜状の遺構が確認されている。北西部は、廃絶時の攪乱がめだつたため遺構が把握し難いが、高級陶磁器の出土が多く、特別な空間と想定される。これらは、橋幅や郭内の建物配置等から考えると、北半分には贅（日常）の生活空間が、南方には晴の空間が設定されていたといえよう。

遺物は、一五世紀代のものが多いが、その前代の時期の遺物も一定量出土している。下限は、一五世紀の内に収まり、館の廃絶もこのころと考えられる。種類には、青磁・白磁・青白磁・青花・天目茶碗・黄褐釉四耳壺・交趾（緑釉）・粉青沙器等の輸入陶磁器、国産施釉陶器である瀬戸・美濃・珠洲・越前・信楽等の国産陶器、瓦器・土師器等の土器類、漆（器）片、釘等の鉄製品、刀装具・鉦鼓等の銅製品、白等の石製品、骨等がある。この内、青白磁梅瓶・砧手青磁・黄褐釉四耳壺・李朝粉青沙器梅瓶・交趾等の高級陶磁器を複数保有していた城館は、本館を始め越後府中などあまり多くない。これは調査地点に大きく左右されるため、調査が進むにつれてかなりの増加が見込まれる。ただし、数量的な面からいえば、国人領主の本拠地級以上の城館からの出土が多く、地位に比例していると考えられる。

なお、注目されるのは、土師器の大量使用である。本館では、主郭北方の堀及び、南西部の水溜遺構からの出土が多い。これらは、一部燈明皿として使用されたものを除き、儀礼に際して用いられたと考えられ、館の性格を考える上で重要である。本館跡以外で大量の土師器を出土している遺跡は、越後府中を除けば、水原館跡（川上一九七七）や新発田城等があげられるにすぎない。しかし、国人領主級の館であれば、どこでも多くの土師器が使用されていたものと予測される。これは、一五〜一六世紀の家中の形成・展開期にあたることから、両者は密接な関係にあると考えられる。なお土師器は、陶磁器類と異なり、廃棄のサイクルが短いため、編年軸として期待される遺物である。地域ごとの編年がまたれるところである。

次に館の周辺について。これまで堀の内側が問題とされており、外側への関心は薄かったといえよう。しかし、館だけが荒野にぽつんと存在し得たであろうか。そんなはずはあるまい。実際、十日町市の伊達八幡館跡（第51図、阿部ほか一九九二）や新井市の坪ノ内館跡（新潟県教委一九八六）では、堀の外に多くの建物が発見されている。さらに前者では、やや細い溝をめぐらせた区画まで附属している状況がみてとれる。このような堀の外の遺構は、江上館跡でも認められており、館の周囲には、関連する建物が立ち並んでいることが普通であったといえよう。

さらにその周辺。一見、堀の側までは簡単にいくことができそうである。しかし、平成八年（一九九六）から開始された江上館跡の西側に展開する下町・坊城遺跡の調査によって、そのイメージは裏切られていく。調査途中で、詳細は未報告であるが、でてくるのは川・川・川、そして溝である。それに囲まれて、そして分断されて、遺跡が認められる。さらに昭和に入ってから行われた区画整理以前は、あちこちに湧水・葦原が点在しており、西側から直進することができなかったという。江上館跡は実に、水に守られた城だったのである。これはおそらく、潟が点在する越後では、特殊な環境ではないであろう。多くの居館は、平場にあっても、地の利を見定めた要害の地に築かれていたと考えるべきである。さればこそ、応永三三年（一二二六）、中条に乱入した大軍に対しても「川間之城」は、落ちなかったのである。

（3）大きな館、主は誰か―宝積寺館跡

館は、身分標識（ステータスシンボル）でもある。身分が高いものほど、大きな屋敷地が許され（与えられ）、それが権威の象徴となっていたのである。これは、一五世紀段階までは確かに守られていたように思う。しかしここに、約二町四方という守護級の館跡がある。新発田市の宝積寺館跡（新発田市教委一九九〇）である。館の最盛期は、遺物からみて一五世紀である。すなわち館が複郭化する以前の所産である。周囲をめぐる堀もまた一五

世紀代に掘削されたと考えられている。館主は、加治荘の竹俣氏に関連する居館と考えられている。確かにその立地から、一五世紀段階では竹俣氏に関連するものと思われるが、それ以前も竹俣氏の系統が居住していたかどうかはわからない。かえって、応永年間（一三九四～一四二八）に館のある三光村に居館を移したという伝承からは、他の可能性も考える必要があるだろう。

所論を述べよう。私は、このように広い敷地を許される可能性があるのは、南北朝期の阿賀北における足利方の国大将である「大將軍佐々木加治近江権守景綱」の「城」しかありえないと思っている。景綱は、加治七郎氏綱の系統であるが、当時は加治氏を代表する立場にあったのである。国大将であれば、方二町の区画も納得できるところである。それがなんらかの事情で系統が途絶えたために、由緒の地に竹俣氏が移り住んだと考えられないであろうか。このように考えた場合の問題点は、一四世紀代の遺物が相対的に多くはないこと、高級輸入陶磁器類が少ないこと等があげられる。ただし瀬戸・美濃には、当該期の優品が含まれている。調査位置の関係もあることから、今後の解明がまたれるところである。

（4）居館からみた中世日本海

ここでは、方形居館を幅広い堀（概ね五メートル以上）と高い土塁に囲まれた方形を基調とする領主館を指すものとする。この居館の出現は、東国では一四世紀末から一五世紀前半を中心とするもので（橋口一九八七、荒川二〇〇二）、大和でも一四世紀中葉を画期として一五世紀中葉以降に大規模化するとされており（山川一九九九）、この動向が東国と畿内でも共通していることが知られる。そしてこの一五世紀中葉という時期は、山城が恒常的に維持されていく時期にあたり（齊藤一九八九）、城郭史研究における大きなエポックと重なる。

この方形居館は、前川要が提唱した居館の規模によって守護↓国人領主↓家臣団屋敷という序列がみられるという「方形居館体制」（前川一九九五）を具現化したもので、在地秩序を反映しているものと考えている（一）（水澤一九九九a）。ただし、方形居館の眼目は、遠方から望める高い土塁の存在であり、防御的な側面も兼ね備えていたとはいえ、外に身分を知らしめる極めて象徴的な権力装置であったと考えるのが妥当である。その意味で、国人領主とその家臣団では、居館規模が隔絶したものでならなかったのである。この体制は、小島道裕が提唱する花の御所を頂点とする体制（小島二〇〇三）であり、少なくとも守護が將軍に相伴して京にいた段階までは機能していたと考えられよう。しかし、一五世紀半ばに地域支配を守護に委ねた（矢田一九九九a）ことによってその体制は動揺し、守護の帰国、応仁の乱を経て、一五世紀末～一六世紀初頭には本拠の移動という大きな波を被ることになるのである。

さてこの方形居館体制には、もう一つ抜け落ちてはならないものがある。それは、室町將軍を頂点とする以上、その器に酒を入れねばならない。すなわち土器儀礼の存在である。土器を媒介とした身分秩序の再生産は、方形館体制の要である。したがって見かけ上、方形であっても、儀礼を示す土器皿の大量出土を伴わない場合は、その体制に組み込まれてはいないということとなる。

例えば、北海道の志海苔館は、大きな土塁を伴う方形館であるが、海に面した高台の上にあるといった立地は、平場の方形居館とは全く異なる。志海苔館は、すでに網野善彦の指摘（一九九〇）にあるように、海賊の海城に相当するものであり、身分標識でもあった方形居館とは性格が異なるものである。ただし、流通を支配するという点では共通性があり、その一面を垣間見ることができる。しかし、土器皿が非常に少ないことから、実を伴っているとはいえず、その体制の外にあると判断せざるをえない。その他、出羽・津軽西浜においても、土器を多量に出土する方形館は、認められない（榊原二〇〇二、伊藤・高桑編二〇〇三）。

このようにみると、現在のところその境界線は、出羽と越後の境にあたる越後北部域の内にあることになる。（二）。

(5) 戦国期城館

中井均によれば、戦国期の城館の在り方には、次の四種が存在するという(中井一九九九)。

- ① 山城に恒常的居住空間をもち、山麓に居住空間をもたないもの。
 - ② 山城に恒常的居住空間をもち、山麓にも居住空間をもつもの。
 - ③ 山城に恒常的居住空間をもたず、山麓に居住空間をもつもの。
 - ④ 山城に恒常的居住空間をもたず、山麓にも居住空間をもたないもの。
- ①②③は、いずれも方形館を放棄し、地形に沿った居館作りであることが特徴で、実際の空間構成となる。④は居館機能を有していないのでここでは検討から省く。各地の守護館は①もしくは②となり、山城に居館の機能の全部あるいは一部が移る(中井一九九九・前川二〇〇三)。方形館体制における守護館は、例えば若狭小浜西津、能登七尾、越後直江津のように湊すなわち流通を押えているのであるが、この段階において守護所は流通からみてやや後退した立地をとる(三)。この現象については、国主として国人衆から出された人質を安全な場所に住まわせる必要があったために生じた現象と理解している(水澤二〇〇〇b・e)。
- なお越後においては、①も認められるものの、国人領主以上のクラスの本拠地では、山城とともに山麓に館をもつという②③タイプが国人領主クラス以上に許されていた形態ではないかと考えられる(水澤一九九六・一九九七、二〇〇〇e)。しかるにこのような形態は、先の方形居館体制に包含される地域以北においては明瞭ではなく、圧倒的に山麓居館がない①のタイプが見受けられる(大場二〇〇二、秋本二〇〇二、伊藤・高桑編二〇〇三)。
- したがって、前段階の境界は、本段階においても依然認められるということとなろう。

(6) 本拠は動く・戦国の越後

領主たちの支配の拠点である館は、南北朝の動乱をへて一五世紀代に入ると、はつきりと土塁・堀を伴う方形単郭としてあらわれてくる。これは、東国全体でも同様の状況(橋口一九八七・一九九六)が窺われ、広範な地域に生じた現象である。館は、村落の中で隔絶した地位を占め、その内側では都市的生活が行われるようになる。ただし規模は、身分によって厳密に規制されていたようで、守護クラスで二町四方、国人領主クラスで一町(約一〇m)四方、それ以下は半町四方程度となるようである。なお、すでに指摘されていること「斎藤 一九八九・九二」であるが、一五世紀後半以降に山城が維持されるようになることが、文献からわかる。

ただしその前提として、要害の地の確保が必要となってくる。それまでの館が荘園経済の中心に位置していた関係から、不便な要害の地は、場合によっては庶子などが先に占有していることもあったようで、それが問題となることもあった。件の奥山荘の中条氏に対する羽黒氏しかり、小泉荘加納の色部氏に対する平林氏しかりである。ただし、この段階では、土塁・堀の出現にみられるように、平場の居館の強化が主体であり、山城は有事の際の避難所として用いられていたようである。この状態は、土塁・堀のかさ上げによる補強や、馬出の用途の郭が附属されること(第一次複郭化)等の努力によって、多くは一六世紀前半のある時点まで継続される。

次いで戦乱の世は、由緒ある本拠さえ移動させることになる。恒常的な根小屋式城郭の成立がそれである。平時は麓の館に居住し、山頂の城はそれと一体化した形で維持されるようになる。先の江上館跡は、一五世紀末には廃され、鳥坂城(第33図)に常住するようになると考えられる。すでにこの段階で、郭は複郭化(第二次複郭化)している。これは、家臣団を居城に集住させ(家中の成立)、さらに城下町を含んだ総構えを指向するという守護・国人領主層の動向へ連なるもので、一六世紀に入ると急速に進んだものと思われる。

そして多くの山城が簇生するのは、一六世紀も後半のことである。これは、右の領主階級の動きに連動したものと考えられ、村落形態が集村化し（坂井一九九〇・矢田一九九一）、いわゆる「村の城」（横山一九九一・藤木一九九五）が築かれたためである。すなわち、村落領主たる家臣団（小領主）が国人領主のもとに集住することによって、はじめて可能になったものと思われる。一六世紀前半以前から維持されてきた領主の山城と、一六世紀後半に築かれた村の山城が別の性格をもっていたことは、遺物の出土状況からわかる（中井一九九二）。ただし越後では、純粹な意味での「村の城」は成立しなかったと考えられる（水澤一九九七）。なお、一六世紀後半にも領主の必要性から築かれた城もあったわけで、これは遺構から読み取らねばならない。いまのところ、（畝状）堅堀群で守られた城は、領主側のものといってよからう。その外の遺構についても、今後検討して行く必要がある。

さらに戦国の末期、上杉景勝が豊臣系大名となって、後に会津に移されるまでの間に、城に大きな変化が生じる。多くの山城は廃され、館は家臣団が集住することによって巨大なものとなっていく（第三次複郭化）。それを典型的に現すのは、岩船郡の平林城（神林村教委一九八三、第63図）である。滝矢川の段丘上に築かれ、最奥に主郭（殿屋敷）があり、その西側一帯に家臣団の居住地（岩館）が広がっている。滝矢川を挟んだ田地には、家老屋敷・古門前という地名があるので、現存する遺構以外にも門前町等があったのかもしれない。主要通路は、主郭の西側の川向いから登っていく折れを伴った部分と、主郭の正面虎口の延長上にある折れを伴った高さ四m以上が遺存する土塁脇の部分である。特に後者は、通るものを圧倒するため築かれており、城主色部長真が豊臣の姓をもらった天正一六年（一五八八）以降の築造ではないかと想定される。なお、本城も本来根小屋式城郭であったと考えられるが、一六世紀末の段階では山城部分が機能しなくなっていたことが、『越後国瀬波郡絵図』の「加護山古城」の記載からわかる。そして、国替えによって地域社会から切り離された武士団のいきつく所は、身分が固定される近世社会であった。

註

(一) ここでさらに注目されるのは、その註の中で可能性を論じられた、守護所の規模と守護の官位との関係である。例えば、越後守護上杉房定は、文明一八年（一四八六）に破格の從四位相模守に任じられている。この官位は鎌倉幕府の執権・連署しかもらえない官職であった（山田一九八七・矢田一九九九）ことからすると、守護館たる至徳寺遺跡の二町四方という規模（小島一九九四、水澤・鶴巻二〇〇三）も、その官職に基づくものであったと考えられよう。なお、前川は、橋口定志の論を引いて、大きな堀の意味するところを灌漑用水体系の掌握とするが、彼らは館内において都市的な生活環境にあり、その水堀は流通機構の掌握を象徴的に示すものと考えたい。

(二) ちなみに陸奥側では、現在の磐越東西線あたりがその境界となろう（菅野二〇〇二）。ただし大量の土器使用という点では、引用事例中「南古館跡」及びやや形態的に難があるが「安子ヶ島城」のみが該当しようが、近年喜多方市新宮城においても多量の土器が出土していることから、概ねこのラインが妥当であるものと考えている。

(三) 地勢的な条件もあるが、ひとり後瀬山城については、小浜湊を眼下に望む地に所在しており（小浜市教委二〇〇〇）、外に比して湊に対する依存度を保たざるを得ない状況にあったことを示すものと思われる。小浜の重要性を語ってあまりないところである。

2 北陸中世後半期における井戸構築技術の流入―水溜・石組側・桶―

(1)はじめに

二〇〇一年一月二三・二四日両日、金沢において第11回北陸中世考古学研究会が開催された。テーマは「中世北陸の井戸」で、資料集には北陸4県のみならず東北の事例までもが集成され、鎌倉の事例も収められた(北陸中世考古学研究会二〇〇一、以下「資料集」と略す)。会自体は、北陸各県の様相が発表され、最後に討論が行われたが、この手の研究会の常として全体の様相を理解した後は、各人が持ち帰ってその成果を元に研鑽を深めることを確認して散会となった。

当然ながら問題関心は参加各人によって異なり、筆者が資料原稿作成から本会までを通じて最も興味をもったのは、井戸の水溜の位置付けと構造(一)、そして石組技術の導入の在り方についてであった。したがってここでは、この問題関心に沿って、論を進めていきたいと思う。

(2)水溜分類

井戸の分類は、宇野隆夫による到達点(宇野一九八二)にみるように、「井壁を保護する技術によるべきである」という考えが主体的である。すなわち、まず井戸側構造で大分類し、その後に水溜等に言及するという方法である。

しかし私は、分類上の有効性を認めながらも、水の確保という根本的な観点からみて、まず水を汲むために釣瓶(曲物)を投入する場所である「水溜を保護する技術」を重視したいと思う(二)。そして件の研究会では、ほとんど話題に上らなかったが、汲水場所(水溜)の確保・堅牢化という点で、水溜への石組の導入は、非常に重要ではないかと考える。

当然、井戸側の技術体系は、その系譜を考える上で重要であり、水溜構造と切り離して考えるべき問題ではないが、崩れない地質の場合は側が素掘りでも十分であるし、多少の不安があっても水溜の上方側を大きめに掘り広げることと解決している場合も多々存在する(三)。それらの多くは、水溜に曲物等の構造部が認められても、大分類は素掘り扱いとされ、あまり顧みられることがなかったのではないかと思う。

しかし私は、上に述べたように水が湧いて最も崩れやすいと考えられる水溜部分にこそ井戸の本質があると考えた。したがって、ここでは水溜の分類を行いたいと思う。なおあまり顧みられていないが、宇野が認定した異素材の水溜が井戸側の最下段を構成している構造の場合は、水溜として扱う(宇野一九八二)。もちろん、別誂えの水溜が認められずに単一構造の枠のみが存在する場合は、その下部が水溜の役割を果しているのであるから、水溜を兼ねたものと考えられよう。

このように考えてくると、曲物積や桶積、さらに木側石側を問わず下方に曲物等を入れていないものほとんどは、機能的に側ではなく水溜とよぶべきであろう。そして側の中で、曲物等を入れるものと入れないものの違いは、側自体が水溜の機能を果たすことに気付いた結果、すなわち省略形であるとともに進化形であると考えられる。

以下、水溜の分類を行うが、各種事例が認められる越後国奥山荘政所条遺跡群の事例(中条町教委一九九六～二〇〇一、第64図)を引きながら、説明する(四)。

I a 類 素掘(図例なし)

いわゆる普通の素掘り井戸で、まったく構造材を用いないもの。下部全体が水溜である。最も崩れやすい故に、最も数が多い。

I b 類 素掘(江上館 902、第 65 図)

側の下方に深めの掘り込みがあり、素掘りとなっているもの。下方が頑丈で擁壁が必要でないものである。側々水溜の形状が凹凸形を呈する。石組側に伴うものがほとんどである。

Ⅱ a 類 曲物 (C 地点 1451・1490、第 65 図、A 地点 494・769、第 92 図)

底板のない曲物を埋けるもの。最も一般的なタイプの水溜といえよう。通常 1 個体であるが、多段 (曲物積とされているもの) やサイズの異なるものを複数埋けるものもある。側は、素掘・木組・石組など各種ある。井戸用に作られる側のみの専用製品の存在も想定されている (北陸中世土器研究会 1995)。

Ⅱ b 類 曲物 + 石組 (A 地点 496、第 65 図)

曲物の上端に石組を数段設けるもの。3 ～ 5 段のものが多い。1 段以外のものは、側石組技術が導入されて始めて可能となる積み方である。石積が播鉢状に開くものや積み方が雑なものは、職人が作ったものを地元でまねたものと考えたい。なお、湧水点が高い場合、これのみで井戸が完結し、曲物とセットの水溜なのか、側なのか判断が難しいが、直積の石組側とは一応区別しておきたい。越中の木舟城下やカドミ関連の遺跡群の事例が典型的である。

Ⅲ a 類 桶 (B 地点 360、第 65 図、A 地点 411、第 66 図)

Ⅱ a 類の曲物が桶に代わったもの。桶積以外の場合は、ほとんど 1 段で、まれに 2 段のものがある。

Ⅲ b 類 桶 + 石組 (A 地点 509、第 65 図)

Ⅱ b 類の曲物が桶に代わったもの。509 は、1 重例で、桶の周りを雑に石で囲っているものである。松任市宮永ほじ川遺跡の 3 区 15 井が典型例。

Ⅳ 類 石組 (A 地点 768、第 65 図)

石組のみで水溜を構成するもの。基本的に側は、素掘である。松任市宮永ほじ川遺跡の 2 区 13 井なども本類に含まれる。

V 類 その他 (不明を含む)

水溜の種類が、くり抜きや横板、縦板、陶器などのもの。全体数は、少ない。

Ⅵ a 類 木側水溜

特別に水溜を設けず、木側の下部がそのまま水溜になるもの。木組の種類によって細分化することも可能だが、今回は保留とする。

Ⅵ b 類 石組側水溜

特別に水溜を設けず、石組側の下部がそのまま水溜になるもの。一乗谷例が典型。

以上、6 類 9 種の水溜類型を設定した。

これら水溜の形態変化としては、以下のとおりの方向性が予測される。

① 曲物のみ (桶等の場合もあり、以下同じ)

↓ ② 曲物 + 石組補強

↓ ③ 石組のみ (曲物の消失)

↓ ④ 側一体化石組 (単独水溜の消失)

もちろんこれは、構造変化のプロセスであり、必ずしも各段階が併存しないことを意味するものではなく、最後まで石組を採用しない場合も当然ありえる。

そこで、各類型の主体的時期であるが、地域によって差異があるものの、大きくは石組側や結桶（Ⅲ類）技術の出現時期とかかわってくる問題である。そこで以下は、両者についてみていくこととしたい。

（3）直積石組井戸の採用時期・各地の様相

当然ながら、木組側と石組側では、目的は同様でも技術体系が異なる。北陸への石組技術の伝来は、古代以来の木組とは異なり、基本的には中世の後半以後である。ただし完成された石組技術（直積）と、それをまねたものの直に積めずに播鉢状に開いたものやあまり高度な技術を必要としないと考えられる10段（約1m）以下の石積は、区別されるべきであろう。もちろん、涌水点が高く、1mも掘り下げない内に用が足りることもありえる訳で、その場合は個々の積み方で判別することとしたい。ここではまず、職人技と考えられる直積の石組を対象とする。以下、資料集によって各地の様相をみていく。

越前

平泉寺・一乗谷朝倉氏遺跡以外の様相は明確ではなく、都市的な場に石組側をもつ井戸が現れるという。ただし平泉寺では、地盤がしっかりしているため、石組の技術は表層付近の崩れやすい部分にのみ施されている。このような上部のみの石組は、外の地域でもまみられるところである。したがって現在のところ、側を1m以上にわたって組み上げる石組技術は、一乗谷の町割りの始まる一六世紀初頭以後ということになる。

加賀・能登

一四世紀後半から増加し、一五世紀には一般的になるようである。ただし、主要井戸観察表からみても、一五・一六世紀に木組側がなくなるわけではない。また、側を高く積上げる技術は、一五世紀代に入ってからと考えられる。

越中

加賀・能登と同じく、一四世紀代に出現し、一五世紀以降主体となる。ただし、石組井戸が集中しているのは、一六世紀を中心とする福岡町の木舟城下の遺跡である石名田木舟、木舟北、開大滝遺跡と、婦中町のカドミ関連発掘調査（清水島・中名・道場遺跡等）の2地点に集中している。北陸中、一乗谷に並んで石組井戸が集中しているが、上でみたように城下町等の各屋敷地割に伴うものが多く、性格的にも類似していると考えられる。ただし、上記2地点とも涌水点の関係もあり、井口城跡例のような直にきっちり積まれているものは多くない。

越後

出現は、あるいは一四世紀後半代まで遡る可能性があるが、確実なところでは一五世紀代である。石組側を有する井戸は、中条町政所条遺跡群の江上館跡と下町・坊城遺跡A地点、十日町市伊達八幡館跡、上越市伝至徳寺跡・高畑遺跡でみつかっているくらいで、非常に少ない。今後確認例が増加していくとは考えられるが、越後府中（上越市）等の都市部を除けば散発的に採用されたのではないかと思われる。

以下は、北陸の東端に位置する越後に接する地域の石組井戸の状況をみてみたい。具体的には、関東、出羽、陸奥各地である。

関東については、鈴木孝之氏や市橋一郎・齋藤和行氏の成果（鈴木一九九一、市橋・齋藤一九九八）に拠る。すなわち一五世紀代に出現し、一六世紀代に城館・寺社・都市等で限定的に普及し、近世まで続くといったものである。また石組技術は、山城の石垣積技術との関係が想定されており、特に太田金山城において顕著である（太田市教育委員会二〇〇一）。

出羽については、日本海沿岸の庄内から秋田、十三湊に至るまで現在のところ木組側・曲物水溜ばかりで、石組井戸は確認できていない。内陸部の山形盆地では、浅いものが多いが、山形城三の丸内の城南一丁目遺跡で、（一六世紀末?）一七世紀前半には、ほとんどの井戸が石組をもつように

なる。それ以外では、東根市小田島城（高桑二〇〇一）及び寒河江市落衣長者屋敷遺跡（黒坂ほか二〇〇一）で一五～一六世紀代の可能性のあるものが調査されているが、前者の本報告をまちたい。

陸奥では、福島から仙台以北まで、基本的には一六世紀末以降、近世に入るものがほとんどである（五）。

以上、北陸での石組井戸の展開は、越前での確証を欠くものの一四世紀代に萌芽が認められ、一五世紀代以降に一定の達成を遂げる。これが、関東の在り方とどのような関係にあるのか、興味深いところである。また、越後～関東より北の地域では、基本的に秀吉による奥州仕置以後に出現してくるものと思われる。

ただし越後（以東）では、縦板組側や素掘井戸が近世まで続く（田辺二〇〇一）であり、石組側井戸の構築は、ごく一部で生じた現象である。

（4）結桶の入り方

まず、井戸に結桶が用いられた始めた時期をみる。

各地の状況をみると、越前では一六世紀代の一乗谷朝倉氏遺跡以外は不詳、加賀・能登で一五世紀に入ってから（白江梯川遺跡、宮永ほじ川遺跡、永町ガノマガリ遺跡、戸水C遺跡…以上加賀、飯田町遺跡、道下元町遺跡…以上能登）、越中・越後では一五世紀後半以降となる（石名田木舟遺跡、友坂遺跡…以上越中、政所条遺跡群、長松遺跡、牧目館跡…以上越後）。なお、越後では、石組側と同じく限定的な出土である。

したがって、桶を井戸の水溜に用いる例は、ごくわずかな例外（後述）を除いて中世後半に限られていることが判明した。これは、本来の容器としての桶の出現時期とも、ほぼ重なっているようである（北陸中世土器研究会一九九五）。

桶自体は、陶製甕壺の生産減少に端的に示されるように、大型の貯蔵器としての地位を不動のものとしていく。それは、珠洲・越前の甕類の出土状況からみて、一六世紀代には北陸を席卷しているように思われる（六）。したがって、井戸に桶が用いられるのも一六世紀以降の事例が多くを占めていることは疑いない。

当初の仮説では、井戸の石組技術と結桶技術がセットで持ち込まれたのではないかと考えたのであるが、石組に比して桶の使用頻度が低く、かえって曲物が水溜として用いられる場合が多数を占めていることがわかった。その理由としては、石組技術の導入以前から水溜に曲物が用いられていたことや、桶の製作技術が曲物に比して難しかったことなどが挙げられる。したがって、可能性としては同時期に持ち込まれた可能性があるものの、桶が根付くのは石組に比して遅れたということがいえる。

付、山木戸遺跡の水溜桶（第67図）

北陸において中世前期に桶を用いた井戸が、管見で1例認められた。それは、新潟市山木戸遺跡のSE2である（新潟市一九九四）。I-1基の井戸の内、I-1基が水溜に曲物を用いており、残る3基の内2基が刳抜材、1基が桶である。SE2は、出土した底部篋切り土器や珠洲播鉢から一三世紀後半の所産と考えられ、遺跡の終末期に位置付けられる。

中世前半に井戸に桶を用いる地域としては、博多や太宰府のみがあげられている（岩本二〇〇一）。それは、絵画資料や文献による桶の使用開始時期についても同様である（高橋一九八五）。

それがなぜに、山木戸遺跡でみつかっているのだろうか。

本遺跡は、越後において口禿出現以前の白磁の出土比率が最も高い遺跡で、国津である蒲原津あるいは沼垂湊に関係する遺跡と考えられる（笹澤・水澤二〇〇一・註5）。また、一一世紀後半～末以後、日本海航路は博多から出羽まで通じていたと想定される（水澤二〇〇〇c・註3）。これらから

井戸に桶を用いるという技術背景は、貿易拠点の博多から直に持ち込まれたという可能性を考えねばならないのではなからうか（七）。

（5）展望

これまでの検討で、北陸における石組と桶の採用が、一五世紀代以降に特定の遺跡において認められることが明らかとなったと思う。一五世紀代といえ、日本海沿岸地域に貿易陶磁器を初めとする各種陶磁器が未曾有の流入を示す時期である（水澤二〇〇〇a）。この陶磁器の流通量は、経済の流れを示すものであり、その時期に石組技術が導入されることも必然であったと考えられよう。すなわち北陸の富力が、畿内の石組井戸技術者を呼び寄せたともいえる。

今回は、水溜分類から派生する石組や桶等の技術移入の时期的な整理に終始したが、最後に奥山荘政所条遺跡群の井戸をまとめる途上で気付いたこと（水澤二〇〇〇b）を中心に、いくつかの問題点を挙げておきたい。

まず、井戸を構築するための掘方の規模である。第65・66図の館内の302号井戸の掘方と外の井戸を比較していただきたい。明らかに館内の井戸掘方の規模は、堀の外側の調査区のものよりも著しく大きい。これは各種絵巻にみられるように、人夫の動員数を端的に示しているのではなからうか（宮本一九八一）。なお、それは木組側の井戸の場合でも同様である。ここから、掘方規模は、投下された労働力の多寡を意味しており、館においては多くの人々が労働に従事したことがわかる。

なお、土塁に囲まれた館の中では、井戸は日常空間である北方の中央付近に固まっており、その位置も限定されていたことが判明している（中条町教委一九九七）。

次いで、館への石組井戸の導入が、館の外（下町・坊城遺跡A地点）より後出するという点である。館では一五世紀半ば過ぎに出現するのに対し、A地点では一五世紀に入る頃にはすでに導入されているのである（中条町教委一九九九、水澤二〇〇〇b）。これは、宇野隆夫が引いた京都市白河北殿北辺地域と同様の状況が本遺跡においても生じていたことを意味しよう。すなわち、石組井戸を採用するにあたり、「依然としてB類木組井戸を重視し」「身分の高い人はB類木組井戸を用い、身分の低い人がC類石組井戸を用いたか、もしくは飲用の清浄な水をB類木組井戸に求め、その他の生活用水をC類石組井戸から得たか、いずれかであると推測」できるのである（宇野一九八二）。

さらに同時期に存在した下町・坊城遺跡C地点では、まったく石組井戸が存在せず、木組側あるいは素掘りで水溜に曲物を入れるものばかりであった（中条町教育委員会二〇〇一）。各地点間で地質的には大差がないことから、石組側・水溜という最新の技術は、館及び館主に近い家臣団居住区の人々によって独占されていたということがわかる。

以上、井戸の諸問題について記したが、今後は上の政所条遺跡群での状況が、外の地域にもあてはまるのか否かについて検討していきたいと思う。

（6）おわりに

石の最大の特徴は、いうまでもなくその不朽性・堅牢性にある。石組側は、管理さえ怠らず、水の枯渇が生じなければ、数百年といった単位で保持可能である。にもかかわらず井戸は、一定期間の後、廃棄され埋め立てられている。それは、おそらく水神（井戸）に対する信仰の問題であり、屋敷地の造成時に穿たれ、放棄時に廃棄されるものなのであろう。したがって廃棄時には、まだ使用可能であろうとも、廃棄されねばならなかったと推察される。そのような井戸に、地質上の必要もないのに、わざわざ手の込んだ側や水溜を設置すること自体、住人の性格を明瞭に示す装置であるということがいえる。このように井戸は、遺跡を再構成する上でまず注目しなくてはならない遺構である。

(一) 資料集への水溜の記載は、側と一体化した下部の曲物 (b) 以外は、詳細が記してある主要井戸一覧表の分類にしか載っておらず、本稿の関心からみると、不明な部分が多い。

(二) 駒見和夫は、水溜部分の名称について、新潟県北蒲原で使われていた「湧髓」という用語 (豊浦町一九八二) が、機能的にも象徴的にもふさわしいとして、その名称を提唱している (駒見一九九二)。ここでは、「湧髓」の用語が熟していないと考えるため、「水溜」と呼称する。しかし意味的には、正鵠を射ており、正に井戸の「髓」であることは疑いない。

(三) その逆で、側部分が軟弱で擁壁構造を必要とし、下層部分が礫等で崩れない場合は、水溜が素掘りというケースも当然認められる。なお、木側では部分的なものは少ないが、石組側では上方の軟質部分だけというタイプが散見される。

(四) 石組側の下方に横棧をわたすものは、側の負重を支えるものと考えられ、水溜とは区別されるべきものであり、分類には含まない。

(五) ただし福島県会津坂下町東館遺跡第3号井戸 (会津坂下町一九九四) は、時期不詳であるが、遺跡の存続時期及び会津と越後との地理的歴史的関係を考えたとき、一六世紀以前に遡る可能性があるかと思われる。また、仙台市の王ノ檀遺跡 T03 井戸 (仙台市教委二〇〇一) は、室町以降とされているが、中世に限定できない。

(六) 川端誠は、加賀地方の結構について「一五世紀以降に出現、一七世紀以降に普及」するとした (川端一九九五、二八一頁)。また、宮本常一は、都市の発達がみられた中世の終わりからと考えている (宮本一九八一)。私見では、陶器生産の動向や井戸への桶の使用状況から、一六世紀代には、かなりの程度普及していたのではないかと考えている。

(七) このように考えてくると、金沢市の戸水C遺跡F区 (石川県立埋文センター一九八六) で、「鎌倉末期」とされた桶水溜をもつ1号井戸が注目されてくる。実は、この井戸は、川端誠によって一五世紀代に位置付けられており (北陸中世土器研究会一九九五)、筆者も山木戸遺跡の事例にあたるまでは、そのように考えていた。しかしながら、1号井戸の掘方地山直上から漆絵椀が出土しており、これが四柳嘉章によって一三世紀中葉前後のもの (四柳一九九七) とされた漆器椀である可能性がある (報告書には、出土記載があるのみで図がないので、調査元に問い合わせたが、古い調査ということもあって、両者が同一のものであるかどうかは確認できなかった)。また、遺跡自体は、少なくとも一〇世紀前葉まで官衙であったことに示されるように、海上交通の拠点に立地する港湾集落であることから、山木戸遺跡同様一三世紀後半に桶水溜が博多から直に持ち込まれた可能性もなくはないものと思われる。もちろん、非常にまれな例ではあることは疑いないところであるが。

原補註 脱稿後、(鈴木二〇〇二)論文が出た。本論と深くかかわってくるので併せて参照いただきたい。

補註

その後、石組側井戸については、金沢市大桑ジョウデン遺跡において一三世紀以前のもの (金沢市二〇〇三・二〇〇四) が、胎内市下町・坊城遺跡D地点の鎌倉後期屋敷地で一四世紀前半のもの (中条町教委二〇〇五) が、東根市小田島城跡から一四世紀後半〜一五世紀初のもの (山形県埋文二〇〇四) がみつまっているが、一五世紀以前においては、点的な採用であったと考えられる。

第四章 中世漆器

1 越後の中世漆器

(1) 研究の現状

越後の漆器編年は、品田高志の先駆的な研究(品田一九九一)があり、一九九七年には北陸中世土器研究会の『北陸の漆器考古学』において、その時点までの越後出土漆器が集成された。また、その前後には、品田の再論 斎藤幸恵、鶴巻康志、田村浩司の紹介が続くが、いずれも品田の大枠に準拠し、図を引用したものであった(斎藤一九九五、品田一九九七、鶴巻一九九七、田村一九九九)。

その後、春日真実は、『大武遺跡(中世編)』二〇〇〇において、古代～中世の挽物変遷を示し、次いで発表した論考(春日二〇〇二)において、品田が一四世紀代に位置づけた「鶴巻田遺跡貯蔵穴」出土漆器を二世紀後半～一三世紀前半に引き上げ、その誤謬を糾した。その周辺の研究状況は、同氏の「研究史」にまとめられているので、参照願いたい。

しかし、二〇〇一年には、150点以上の漆器を出土した『下町・坊城遺跡V』(C地点・総論編)(中条町教委二〇〇二)が刊行され、次いで至徳寺遺跡(水澤二〇〇一)、浦廻遺跡(新潟県教委二〇〇三)、大坪遺跡(新潟県教委二〇〇六)、住吉遺跡(新潟県教委二〇〇六)等が報告されたことにより、大幅に良好な資料が増加した。そこで、なるべく全形がわかるものを選択して、中世全体を通覧するものとした。ただし、資料の残存状況によって、自ずと精粗があるため、一部資料の少ない時期については、他地域のものを参照することとした。

なお、中世漆器の器形については、多少の地域性があるものの、少なくとも東日本全域(一)において大きな様相の違いは認められないため、ここで提示する漆器群変遷がより広域にとっても一定の有効性をもつものと考えている。

また、現在の漆器研究は、四柳嘉章が推進する科学分析を欠いては、不十分となってきた。その塗膜分析から明らかとなってきた出土漆器の品質は、各遺跡の評価を考える上で重要な手掛かりといえる。以下の文章においても、その分析結果を踏まえたものが多々あり、煩瑣となるため一々引用しないが、各報告書所載の分析結果を参照いただきたい。

以下、大きく、九～一三世紀前半、一三世紀後半～一四世紀前半、一四世紀後半～一五世紀代、一六世紀代に分けてみていく。遺物のスケールは、1/4に統一し、遺物番号は各報告書所収のものをそのまま残した(表26)。

(2) 九～一三世紀前半

古代の挽物の主体は盤類であるが、これはその口径変化から主体的な使われ方が後代の折敷や盆の機能を果たしていたことを以前指摘した(水澤二〇〇二b)。盤をはじめとして木地のままのものが大多数であるが、集計されている胎内市内では、5遺跡26点以上の九世紀代の漆器の出土が報告されている(水澤二〇〇二a、胎内市二〇〇六)。しかし、今回の対象とする椀皿類については、出土数がその内の9点と限られている。したがってかなり長い期間を一括し、古い時期については、いくつか木地製品をもとりあげたい。

① 九世紀(第68図)

九世紀初頭のものとしては、厚い底部からわずかに内湾する椀(550)や刳物と見紛うボテツとした椀が出土している。ただし、これらは木地のままで、漆が塗られていない。

漆器碗皿が出現するのは、九世紀中葉の(V2期頃からで、後半になると厚い底部はそのままで体部が直線的に開く碗がでてくる(68)。また九世紀末になると越州窯系青磁Ⅱ類の写しと思われる端反碗(197)も現れてくる。これと同じくして、薄く挽かれた端反の有台皿(694)や皿(699)なども現れてくる。これらの塗りは、漆1層のみの簡素なものが多いが、中には3〜4層塗り重ねたものや油煙を含む黒色漆を用いた上質品などもわずかに認められる。

一〇世紀代の良好な資料はみつからないが、その前後からみれば、前代の様相とあまり変わらない状況であったと類推できよう。

② 一〇世紀末〜一二世紀第3四半期(第68・69図)

次いで、一〇世紀末〜一一世紀初頭頃の資料として、上越市一之口遺跡東地区の川跡出土資料をみていく。取り上げた資料の内、3点は木地製品であるが、九世紀末の様相を引き継いでいる。ただし無台皿の口径がやや縮小し、15 cm前後となっている。ここで注目されるのは、この無台皿の下地が3点とも渋下地であることである(四柳一九九七)。下地に渋を用いるのは、漆を節約し、量産するために生み出された技法と評価されており、本遺跡例が最古の例としてたびたび引用される所以である。

ただし、胎内市下町・坊城遺跡をはじめとする政所条遺跡群では、少なくとも一三世紀代までの製品のほとんどは、ケヤキ材に漆下地を用いる方法を固守しており、地域性がある。

その政所条遺跡群では、一一世紀後半〜一六世紀にかけての200点を超える大量の漆器が出土している。以下は、その漆器群を経系にして、その他の遺跡出土漆器をみていきたい。

第68図182〜188は、下町・坊城遺跡A地点の川下層(一一世紀後半〜一二世紀前半)から出土した漆器である。188の端反碗は、前代以来の器形を引き継いでいる。高台は低く削り出されている。端反皿は認められなくなるが、口径10 cm前後のがつしりとした高台をもつ有台皿と口径10 cm以下の無台皿が新たに出現する。後者の無台皿182や低めの総高台183は、ほかと異なり下地層+漆1層といった簡素な塗りであることから、該期でも新しい時期の所産と考えられる。

これらの器形は、青森県津軽の高館遺跡第86号竪穴住居及び砂沢平遺跡第13号B竪穴住居出土炭化木製品(第95図)にもみとれる。高館遺跡の大振りの碗5は、おそらく想定線よりもやや外に開く器形となるものと思われるが、4とともに低めの高台と合わせて下町・坊城遺跡A地点188と似た器形となるであろう。2の土器柱状高台類似皿も、当該期のものとしてまったく問題はない(水澤二〇〇五a)。砂沢平遺跡では、下町・坊城遺跡A地点185に類似する底部が厚手となる有台皿3があり、ほかに5点以上の端反碗が出土している(二)。高台は、高めに挽き出されるものが多い。

この端反碗の系譜は、会津でも認められ、一二世紀第2〜3四半期の会津坂下町陣が峯城跡での出土がある。ここでは、碗のほとんどの口縁が端反となるようであるが、反りがかなり緩くなっている。高台は、比較的明確に挽き出すものが多いが、図示された12点の高台中、1/4の3点が総高台である。この時点で、総高台が出現していることが重要である。また、皿と考えられるのは1点のみであり、碗に比して非常に少ない。

次いで、ほぼ同時期の阿賀野市大坪遺跡敷墓出土漆器がある。665や680は、実見の結果、木胎が残っており、土圧を受けていることから、図の口縁や高台の形状は原形をそのまま示すものではない。ただし、665が稜碗であることは確実で、680の口縁は直に収められている。ここでは、次代の主流となる腰が張り、たつぷりと開く器形が認められることが重要である。なお、一之口遺跡東地区の川跡出土の無台皿や下町・坊城遺跡A地点の川下層で認められた小型無台皿の系譜を引く無台皿は、わずかに一三世紀へも続くが、小型品はほとんどが高台をもつものになっていく。

第94図最下段は、一二世紀前半頃の下町・坊城遺跡A地点の川上層から出土した漆器である。器形等の詳細は、資料の良好な次項に譲るが、下層に比べて明らかに漆の塗りが簡素になっていることを指摘しておく。

③ 一二世紀後半～一三世紀中葉(第70・71図)

第96図は、下町・坊城遺跡C地点川跡出土の漆器群を層位別に配列したものである。時期は、共伴関係から比定したが、川跡という性質上やや不安定な要素もあることを最初に断っておく。

③ — 1 一二世紀後半

皿の数が増えており、ここでは椀と同数程度が認められた。口径9cm前後で、底部は、総高台のものばかりであり、5mm以上の厚いものも多い。この器形は、ロクロ成形の土器と連動しており、その機能を引き継ぐ形で数量が増えてきたものと思われる。

椀は、腰が丸く立ち上がるもの(1736)、腰が開き、器高が低く扁平なもの(1738)、腰が張らずにすっと立ち上がり、口縁が端反となる前代以来の器形を残すもの(1750)、総高台のもの(1706・1720)と、非常にバラエティに富む。ここでは、1736の見込みに赤色漆による紋様が出現していることが特筆される。

また、1736と1738は、体部に稜をもつ稜椀であり、阿賀北に特有の器形である。时期的には、一二世紀後半～一三世紀中葉まで認められ、本遺跡の外、前述の阿賀野市大坪遺跡、後述の新発田市住吉遺跡、神林村窪田遺跡での出土を確認している。なおこの稜は、二回転で削りだすものと一回転で削りだすもの、下半を削って段を作り出すものがあり、下町・坊城遺跡C地点で出土したものは、1736のみが二回転であった。さらに、片口鉢(1753)にも稜が認められるものがあり、やや口縁形状が異なるが、次代の住吉遺跡でも出土例がある。

これらの内、皿1679・椀1738が4層以上塗り重ねられているが、他は漆下地に1層の塗りといった簡素なものであった。

③ — 2 一二世紀末～一三世紀初頭

前代とあまり変化はないが、皿の総高台は厚みを減じてきており、薄手で小振りの高台をもつ皿1703が出現している。また、皿1762は、底部外面に赤色漆で「太」銘が記されている。1730は漆液容器に転用されており、荒型及び木地製品の出土と併せ、本遺跡内での漆器生産を実証する遺物である。

③ — 3 一三世紀前半

皿は、さらに総高台が低くなって、口径も8cm前後と縮小傾向にある。それに伴い扁平化傾向も著しくなっており、薄手のつくりのものも引き続きわずかに存在する。

椀は、伝統的な端反器形の最終段階であり、代わりに小振りの高台を削りだし、薄い体部がわずかに開き、内外に漆絵をあしらう鎌倉様の器形が出現する(1787)。本例は、下地に渋を用いており、その漆絵の洒脱なことからして、搬入品であると思われる。

外には、口縁がわずかに立ち上がり、高台を低く削りだす盆も認められる。

本時期の製品には、塗りが3層以上の製品が半数以上を占めており、次期にかけて品質重視の生産に転換していた可能性がある。

本期の良好な資料としては、住吉遺跡出土品がある(第71図)。塗膜分析は、実施されていない。ここでは、椀の半数を稜椀が占めており、本遺跡での一三世紀中葉の様相と近い。住吉遺跡との地理的な近さから考えて、本地域においては、一三世紀第2～3四半期頃には椀の中で稜椀がかなりの比率を占めていたものと想定される。ただし、住吉遺跡では、二回転稜タイプが4点中3点と主体的である。これは、大坪遺跡例及び本遺跡で最も古い稜椀1736が二回転であることから、时期的な変化である可能性が高い。そして、住吉遺跡の木棺材の年輪年代調査結果が一二二八年である(光谷二〇〇六ハナカミ、そのから出土した稜椀864・865及び低い総高台皿866・867は、それに近い年代が付与される。したがって、一三世紀第2四半期の内に二回転から一回転・下半削りへと技法が変化したと考えられよう。

③ Ⅰ-4 一三世紀中葉

ここでは皿の様相が不明であるが、碗は半数以上を稜碗が占める。稜碗の底部は、厚めの底部からわずかに挽き出されるものが多い。その外の碗は、浅身で低い総高台のものと、小振りの高台を挽き出すものがある。

ここでも、塗りが3層以上のものが多く、1724の稜碗は漆液容器に転用されている。なお、薄手の器形で華奢な高台をもつ1727は、下地なしで4層を重ねるといふ塗装工程が明らかとされており、やはり搬入品である可能性が高い。

(3) 一三世紀後半〜一四世紀(第72・75図)

① 一三世紀後半

皿は、扁平化がますます進み、7 cm台まで口径が縮小していくものが認められる一方、口径8 cm以上でやや深身の皿が出現する。これは、土器の口径分化にシंकロした現象であろう(三)。高台は、低い総高台が多いが、小振りの高台を挽き出すものが次第に増えてくる。

碗の口径も縮小し、薄い木胎で小振りの高台を挽き出して漆絵を描くものが増加してくる。1788は、口縁部に布着せし、地の粉漆下地で黒色漆を重ね、そこに漆絵を描く高級品で、搬入品と思われる。

その外、口径16 cmほどの大皿も認められる。

② 一四世紀

一四世紀中葉〜後半は、陶磁器類と同じく共伴関係が明瞭ではない。この時期の特徴としては、内面赤色製品がかなり増えてくることが挙げられる。初現期は、一三世紀代である可能性が高いと思われるが、現状では特定できない。

黒色系皿は、口径8 cm台と口径の縮小が止まった結果、扁平化がピークを迎える。高台は、総高台がなくなり、わずかに挽き出すものとなる。

内面赤色系皿は、やや深身でしっかりした高台をもつもので、それまでの黒色系とは系譜が異なる。なお、口径が10 cmを超える内面赤色系皿1791も認められる。

碗は、前代以来の小振りのものが定着し、体部が高台から直線的に開き、口縁部が内湾するタイプが主体となり、高台を方形にしっかりと挽き出すものが次第に増えてくる。

その外、内外面赤色系で腰に稜をもつ豆子1801も本期の内に出現している。

この時期の赤色系製品は、ほとんどがベンガラで、渋下地であることから、比較的安価な普及品であったことがしられる。まずは、内面が赤色の器であることが重要であったのであろう。

なお、鎌倉で特徴的なスタンプ施紋法を用いた製品(四)は、本遺跡では出土していないが、柏崎市琵琶島城跡(実見)での出土が認められることから、部分的に搬入されていたものであろう。

本期の良好な資料として、新潟市浦廻遺跡川跡出土品(第75図)、及び神林村窪田遺跡SE113出土遺物がある。

浦廻遺跡の時期は、個々の出土状況が明瞭ではないが、元応二(一二三〇)年銘木製卒塔婆が出土していることから、鎌倉後期の一三世紀第4四半期〜一四世紀第1四半期頃の葬送儀礼に伴う資料と考えられる(五)。塗膜分析は、実施されていない。

皿は、1点のみの出土で、低い総高台である。

碗は、13点が図示されており、前代以来のたつぷり開く扁平な器形3・4がある一方で、口径13 cm前後の小振りのものが主体となっている。また、

高台の外側が挽き出されていない碁笥底の器形に近く12・14・16もある。総黒色系・黒色系＋漆絵・内面赤色系の比率は、7…4…2である。

その外、17・18が漆絵を施された鉢で、17は片口がつく。19・20は、脚付きの盆である。19は内面赤色系となる。9は、青磁写しの盤であり、類例としては、次に述べる窪田遺跡SE113井戸跡及び富山県小矢部市の桜町遺跡坂東地区(4次調査)SE03(広島考古学研究会一九八五)からの出土例がある。

神林村窪田遺跡SE113からは、大鉢1点、口折鉢2点、碗2点、皿2点、片口鉢1点の8点が井戸廃棄の際にまとまって投棄されている(第73・74図)。また、棒状の烏帽子を被った人形も一緒に出土しており、注目される。碗2点は内面赤色で、外は総黒色である。口折鉢2点は、青磁Ⅲ類写しの製品である。碗2点及び薄手の皿1点がブナで、その他はケヤキを用いている。おそらく前者は越後国外からの搬入品であり、その他は国内産かと思われる。なお、鉢3点の底部外面には、三星紋が付されている。共伴した珠洲Ⅳ期の播鉢口縁部片及び青磁Ⅲ類写しの鉢の存在から、一四世紀前半代の良好な一括資料と考えることができる。

(4) 一五世紀代(第72・76図)

内外面赤色の皆朱漆器がみられるようになり、内底有段器種も出現する。赤色を用いた漆器の割合がかなり増加する時期である。皿は、扁平なものがあまりみられなくなり、数自体が減少する。また、口径13～15cmの皿も定量認められる。碗は、当初内湾ぎみの口縁が主体であるが、中葉頃になると端反口縁を含む皆朱で見込みが有段となる高級器種が出現する。

前代のベンガラ製品は、あまりみられなくなり、渋下地でも朱塗りのものが多い(1759・1806)。その外は、漆下地に朱を塗るものが多いが、漆の塗りは1～2層の簡素なものが多い。ただし、下町・坊城遺跡A地点出土の皆朱内湾有段碗501は、下地なしで4層の透漆に朱漆塗り、古館館跡内堀出土端反有段碗77は、炭粉漆下地に透漆＋黒色漆＋朱漆と高級品の工程をもつ。さらに遺存状態が悪いため図示できなかったが、江上館跡の出土漆器は、布着せ＋漆下地に3～4層の透漆＋2層前後の朱漆と高級品が半数以上を占めていた(四柳二〇〇〇)。このように一部の遺跡では、陶磁器にみられた富が漆器にも及んでいることがしられる。

この時期の資料として、2遺跡からの出土漆器を採り上げる。

① 上越市水久保遺跡出土漆器(第76図上段)

高級皆朱漆器群と黒色系漆器群からなる。

有段器種の櫛子121と鉢117は、布着せ＋地の粉漆下地に透漆2層＋朱漆層という同一の工程をとっており、珠洲Ⅴ期の播鉢とともに同一土坑から出土している。なお、出土地点不明の121と同一器形・塗装工程の櫛子がもう1点出土しているが、これも本遺構に伴ったものである可能性があるう。

端反碗120は、地の粉漆下地＋黒色漆層＋朱漆層であり、117より塗りは1層少ないが、高級品の証左となる黒色漆が用いられている。土坑出土で、共伴遺物はない。

鉢119は、漆1層の簡易な塗りであるが、地の粉漆下地を用いている。たつぷりと開く器形で、高台をわずかに削り出している。珠洲Ⅴ期古の播鉢と瀬戸後Ⅱ期の卸皿とともに土坑から出土した。碗120が出土した土坑と切り合い関係があるが、新旧は不明とされている。

碗118は、炭粉渋下地に漆1層の普及品である。あまりみない器形であるが、底部周辺削りの土器とともに土坑から出土していることから、一五世紀中葉の所産と考えられる。

したがってこれらは、共伴遺物から一五世紀初頭～中葉にかけての資料と位置付けられる。

②上越市至徳寺遺跡 SX201 出土漆器(第 76 図中段)

皆朱 19 点、内面赤色製品 5 点の 24 点もの漆器が一括廃棄されていたものである。

皆朱は、器形が異なる 19 を除いて、組物となる。口径 13.8 cm の櫛子(有段皿…6)が 9 点、端反有段碗が 9 点である。碗の内訳は、口径 12.4 cm・器高 4.3 cm の小碗(10・11)、口径 11.8 cm・器高 5.9 cm の中碗(15)、口径 13.5 cm・器高 7.3 cm の大碗(17)が 3 点ずつとなる。高台が高く挽き出されており、やや外へ踏ん張る器形である。塗りは、中碗が布着せ+地の粉漆下地に黒色漆+朱漆なのに対し、小碗・櫛子は布着せ不明で炭粉漆下地に漆+朱漆とランクが下がる塗装工程であったのは、意外であった中条町教委(二〇〇五)。

内面赤色製品は、口縁部形態がわからないものが多いが、内湾口縁となるものと思われる。器形には、口径 15 cm の皿・碗、口径 20 cm 超の鉢があり、高台が高いものと低めのものがある。塗りは、皆朱の小碗とほぼ同一の工程であった。

したがってこれらは、最上級とはいえないものの、渋下地製品はなく、守護所の家財として備え付けられていた漆器群と思われる。なお本漆器群は、火災に遭って焦げており、永正の乱(一五〇七～一五二〇)時に一括廃棄されたものと考えられる(水澤二〇〇一)。したがって本資料は、一五世紀後半～一六世紀初頭に位置付けられる。

(15) 一六世紀代(第 72・76・77 図)

皿は激減し、少量の端反皆朱皿が流通する(第 98 図 1799・812)。基本的に皿器形は、蓋へと転換していく。碗は、次第に底部が厚くなっていき、高台が高くなっていく。また、腰が張り、扁平となる器形も認められる(第 98 図 1789・1792)。これらには、渋下地でベンガラを用いる普及品が多いが、内面赤色製品の比率が高くなっていく。これに対して、高級品には、腰が丸みをもって立ち上がる少数の皆朱製品がある。

越後では、陶磁器類と同様に本時期の良好な資料が少ないが(六)、岩室村和納館跡外堀出土遺物をあげる(第 100 図下段)。器種は、碗のみ 8 点が出土しており、6 点を示した。上塗りの内訳は、黒色系が 5 点で 3 点の内面に漆絵が描かれている。内面赤色系は、3 点で 1 点は外面に絵が描かれている(492)。共伴陶磁器がないため時期が明瞭ではないが、形態から一六世紀中葉頃の資料と思われる。

次いで、県外の良好な 2 遺跡の資料を紹介する。

第 77 図の最下段を除く漆器群は、越前の一乗谷朝倉氏遺跡群から出土したものである。本遺跡は、40 年にわたって継続調査されている戦国大名朝倉氏の作った城下町であり、天正元年(一五七二)に信長によって炎上・滅亡したことは、広く知られている。また、特別史跡であるため、最上層で調査が止められており、出土遺物の大半は、一六世紀第 3 四半期までに使用されていたものと考えられる。したがって漆器についても、当該期の基準資料となる。

上半は、高級品である皆朱漆器であるが、27 のような前代から続く端反碗は、ほとんどみられなくなっている。72 のような端反坏は、越後でもまみかける器形である。これらは当然ながら数が少ない希少器種である。

それ以下の内面赤色あるいは内外面黒色で漆絵を伴う普及品タイプは、口径 10 cm、13～15 cm、15 cm 以上に分かれ、底部が厚く体部がすつと立ち上がるタイプが主体となっている。高台は、大型品に高いものが目立つようになる。ただし、9・36・5 のような前代以来の体部が開く器形もなくなっている。

材質と塗りの関係は、少数の高級品はケヤキ材に漆下地+皆朱、大半の普及品はブナ材に渋下地+黒色系+漆絵という組み合わせであることが指摘

されている(四柳二〇〇三)。

第77図最下段は、山形県米沢市の荒川2遺跡井戸SE589一括出土漆器である。全漆器23点中18点が内面赤色漆器で、8割近くを占めており、時代を感じさせる。塗膜分析は、実施されていないが、肉眼観察では赤色のほとんどがベンガラと推定されている。

本遺跡は、三引両紋が入る椀5などからわかるように、伊達家にかかわる遺跡であると思われる。報告書には、一六世紀前半に位置付けられるとされている(109頁)が、美濃大窯4段階の折縁皿が共存していることからして、一六世紀末頃に位置付けられる。

図示した一括資料は、浅めの椀1・2と深身の椀からなる。2のような厚手のがっしりした高台は、下町・坊城遺跡(第71図178)や和納館跡(第75図488)でもみられ、一六世紀代の特徴となろうか。また、後者の底部は厚めで、高台が高くなってきた。なお3は、黄漆で鶴丸紋が描かれたものである。

(6) 用材の変化

漆器の用材と塗りの関係については、すでに前章で相關関係にあることをみてきた。ここでは、時期の異なる3遺跡の資料を比較することによって、用材の変化を追ってみたい。

① 住吉遺跡(植田二〇〇六)一三世紀前半～中葉中心

ケヤキ・スギ・トチノキが用いられており、その内訳は25・2・1点であった。

このように一三世紀半ば以前は、ほとんどがケヤキ材を用いていたことがしられる。なお、針葉樹であるスギ材が用いられている例は、非常に珍しく、その器種は皿と大稜鉢であった。

② 浦廻遺跡(バリノ・サーヴェイ二〇〇三)一三世紀第4四半期～一四世紀第1四半期

ケヤキ・カツラ・サクラ属・クリ・ブナ属・ハリギリ・トチノキが用いられており、その内訳は6・1・1・1・2・2・2・5点であった。

非常にバラエティに富んでおり、鉢・盆はすべてトチノキである。それを除いたものの内、約4割強が前代以来のケヤキで、残りが後代の主体となるブナを含む多種多様な広葉樹からなる。試験的に各種の材を用いて、適材を模索している段階を如実に示しているように思われる。

③ 大武遺跡(松葉二〇〇〇)一四～一五世紀

挽物には、ケヤキ・カツラ・ニレ属・クリ・ブナ属・ハリギリ・トチノキが認められ、その内訳は4・1・1・1・1・27・1・5点であった。

バラエティの多さは、浦廻遺跡と同様であるが、次第に高級器種に限られるようになるケヤキ材は、1割に減じる。また、浦廻遺跡では、1割に過ぎなかったブナ属が7割近くを占めており、南北朝以降は主用材になるものと思われる。

これは、標高の比較的低い場所に自生する良好な材であるケヤキ資源が枯渇し、代材としてブナ材が選択されるようになったためであろう。そして、人里から離れた標高の高い山奥に自生するブナ材が選択されたことは、専門性が高まる結果をもたらし、これが一三世紀以前にあちこちでみられた遺跡内での漆器生産が衰退していった主因であろう。

このようにケヤキ材からブナ材への転換は、一四世紀、おそらくその後半代を境に生じた現象であると考えられよう。

したがって仲田茂司がいうように(仲田一九九九、八三)、軟らかいブナ材の採用が、底部の厚い一六世紀以降の漆器椀に直結するわけではない。底部が厚く体部がすっと立ち上がる器形は、南洋一郎がつとに指摘するように(南一九九七)、一五世紀代の椀形態を代表する青磁の流通量が一六世紀代に入ると激減してしまったために採用されたものと思われる。同様に、高級器種の皆朱端反椀も青花B1類の影響を受けて成立したと考えると、その

成立は一五世紀中葉頃となろう。

(7) 漆器の位相と土器との相関について

仲田茂司が一九九九年に発表した論文「東国中世の漆器」は、すでに註(二)や前章で述べたように事実誤認を含んでいるが、それを差し引いてありあまる非常に興味深い論考である。以下、内容の一部を要約すると、中世漆器は、一一世紀中葉に成立し、一三世紀後半～一四世紀初頭以降を中世後期様式とし、一六世紀前半の画期を経て近世漆器に転換するとした。漆器と土器の関係についても、一方的な用途ではなく、互いに補完しあって用いられ、鎌倉後期の轆轤技術の革新が大量生産を可能し、土器・漆器・陶磁器が組み合わされて使用されるようになり、一六世紀前半にはブナ材を用いた大量生産によって土器を駆逐したとした。

この漆器と土器の関係について、互いに補完しあって用いられたという所論や一六世紀代が漆器からみて近世とする考えは、筆者の考えと近しい(水澤二〇〇五b)。これは、西日本あるいは北陸西部の土器を日常的に大量に消費する地域については、かなりの程度正しい見通しであるものと思われる。しかし土器についていえば、東北では平泉滅亡後にほとんどみられなくなるものであり、越後でも一四世紀後半以降では限られた遺跡でしか出土しなくなる。以前述べたように、土器文化は畿内に震源するものであり、それを中心とした同心円の縁辺部から新時代の幕開けが始まり、土器の用途も限られるようになっていくのである(水澤二〇〇五b)。そこに氏が描かれたような土器との一律的な関係は、存在しない。

それにもかかわらず、漆器形態が広域で同じように変化していく理由としては、土器とは異なった生産・流通体制が構築されていたからに他ならない。京での出土漆器の少なさは、土器と同じような情報発信地であったことに疑問をいだかせる。もちろん最高級の漆器食膳具や各種調度品の加飾紋様・技法といった貴族文化に負うものがあつたにせよ、あえていえば弓や鎧・鞍などの武具の必要性和漆産地の近さといった理由によって、(東国武家の食膳に漆器が採用されていたと考えられようか。

また、仲田は一三世紀後半～一五世紀代を一括するが、この時期は漆絵の普及、内面赤色漆器の出現・普及、内外面赤色漆器の出現・普及という漆器史上重要な現象が順次生じている。四柳がしばしば言及するように、渋下地でベンガラを用いたものであっても、禁色であつた赤色が漆器に持ち込まれた意義は、非常に大きい。鎌倉後期に一気に広まった漆絵が描かれた器の魅力は、上流階級への憧れを容易に入手することを可能にした。さらに禁色を取り込んだことによって、ついに漆器は中世後期土器の持つていた晴れの器としての機能をも吸収したのである。そして一六世紀代の土器がほとんど認められない越後では、その時点で漆器揃い碗が晴れの場の食膳を飾るようになっていたと考えたい。

註

(一) 例えば、『中世遺跡出土の漆器』(広島考古学研究会一九八五)所載の図からみれば、おそらく全国一律の形態変遷を呈するものと思われるが、西国では草戸千軒町遺跡の一部しか実見していないため、一応東日本としておく。なお、越後を含めた東国の様相については、仲田茂司の論考「東国中世の漆器」(一九九九)があり、全般的に参照させていただいたが、事実誤認が認められるため、おおい言及していきたいと思う。

(二) 仲田茂司は、現況で深身の端反碗2や、やや高い高台をもつ5をもつて一六世紀代の器形とする(仲田一九九九、八五頁)が、2は明らかに土圧でひしゃげた結果であり、元々は1に近い器形である。5については、次に取り上げる会津陣が峯城跡出土例にも認められるものであり、高館遺跡例よりもやや新しい様相といえようか。さらに仲田は、共伴土器が欠落するとした(同八五頁)が、土師器甕形土器が共伴しており、堅穴住居から出土していることをふまえれば、所属時期に問題があるようには思えない。また、論文論旨からしてそれらの所属時期を下げる必要があるよう

にも思えない。

なお仲田は、一之口遺跡東地区川跡出土遺物の年代観の根拠となった丸石2号窯式の灰釉陶器の所属時期について、一九九〇年の坂井秀弥の成果(坂井一九九〇)を下に一一世紀中葉として中世漆器の成立期とするが、その後の生産地での研究で年代が一一世紀初頭に遡上したことに伴う報告段階(一九九四)での年代訂正が反映されていない。したがって、このような重要な事項の記述にあたつて、報告書にあたっていないものと思われる。加えて一六世紀前半とした荒川2遺跡についても、共伴関係をみれば一六世紀末の資料であることは明らかである(後述)。

(三) 漆器と土器の相関については、鎌倉での出土例から漆器が土器に影響を及ぼしたという大河内勉の所論がある(大河内一九九三)。

(四) スタンプ施紋による加飾技法は、量産化に対応した技法であろうが、手描のものと比較してみればまったくの下手物であり、それを好んで欲したとは思えない。それこそが、本技法があまり広まらなかった理由であるように思われる。なお、大武遺跡の漆器観察表には、3点の漆絵がスタンプと記されているが、手描きの誤りと思われる。

(五) 浦廻遺跡については、葬送の概要をまとめたことがあり、併せて参照いただきたい(水澤二〇〇七)。

(六) 本期の前半あるいは一五世紀後半の最高級品以外の椀皿に関する良好な資料として、新発田市箱館の堀跡出土資料がある。詳細は、報告書の刊行をまちたいが、椀皿15点の出土の内13点が皆朱もしくは内面赤色系であり、注目される(新発田市教委鶴巻康志教示)。

補註

本稿は、原文「越後の中世漆器」の(3)②に、窪田遺跡SE113出土遺物の成果(新潟県教委二〇〇七)を加えたものである。

2 至徳寺遺跡の漆器

(1) SK201一括出土漆器(第78・79図)

至徳寺遺跡の漆器については、遺存状態の問題もあり、全体像を明らかにできないが、ここでは北堀の内側のD区SK201から一括出土した二四点の漆器を紹介することで、その一端を示したいと思う。

なお、これら漆器は、すべて焼けているが、延焼途中で火が消し止められたようで、原形をうかがえるものが多かった。しかし、使用に耐えるものはなかったため、一括廃棄されたものと考えられる。そして被災の結果として、ややゆがみが生じているため、多少の計測誤差が認められたが、本来は同形態の皆朱漆器は同じ大きさであったと考えられる。

①皆朱漆器(1～19)

19点の内、19を除いた18点は、見込みに段を有する塗りのよい皿・端反碗で、組関係にあるものと思われる。すべてヨコ木取り(柁目)で、樹種はケヤキと思われる。全体に塗りが厚く光沢のある上質の漆器で、内外面に刷毛目痕跡をとどめている。なお、口縁端部及び高台内は、黒色漆で止めている。

1～9は、皿である。体部は、内湾ぎみに立ち上がり、底部中央が厚い。口径一三・八cm、器高二・七cm、高台径九・八cm前後となる。6のみ底部外面に「太」字が朱書されている。

10～12は、小碗である。口径二一・四cm、器高四・三cm、高台径六・四cm前後となる。11の底部外面に「太」字が朱書されている。
13～15は、中碗である。口径一一・八cm、器高五・九cm、高台径六・七cm前後となる。15の底部外面に「太」字が朱書されている。
16～18は、大碗である。口径一三・五cm、器高七・三cm、高台径七cm前後となる。18の底部外面に「太」字が朱書されている。

19は、見込みに段をもたない碗である。高台径六・五cmを測る。口縁が外反する可能性がある。

②内赤外黒色漆器(20～24)

器種は、皿・碗・鉢がある。

20は、皿である。口径一五cm、器高三・一cm、高台径七cmを測る。

21～23は、碗である。21は高台径六・六cm、22は高台径七・五cmを測る。23は、内湾ぎみに体部が立ち上がり、高めの高台が付く。口径約一四cm、器高約七・一cm、高台径八cmを測る。ヨコ木取り(柁目)となる。本製品は、口縁部及び高台畳付に布着せが施された上質漆器である。

24は、鉢である。高台径一四・八cmを測り、器高は七cm、口径は二二cmを越える。ヨコ木取り(柁目)となる。均一な厚さに挽き出されたロクロの上手な製品で、高台裏の塗りもしっかりと施された上質漆器である。

なお、塗装工程については、分析が終了していないが、水久保遺跡出土漆器(四柳一九九六)のように、多くが地の粉漆下地に2～3層の漆が塗り重ねられ、最後に朱漆が施された上質品と考えられる。あるいは、中塗りに油煙を含んだ黒色漆が施される最上質品もあるかと思われる。

(2) 共伴遺物(25)

漆器と共伴した遺物は、珠洲ロクロ成形壺(25)口縁のみである。V期一五世紀前半の所産となる。

(3)まとめ

ここから出土している漆器は、珠洲壺との共伴関係からみて一五世紀以降の製品であることがわかる。そして下限は、遺跡の消長から永正の乱と考えられるため、ほぼ一五世紀代の所産として大過ないものと思われる。

次いで漆器の内容であるが、18点の皆朱有段漆器が注目される。皿9点、碗大中小各3点となり、4器種ごとに1点ずつ底裏に「太」銘が認められている。これが本来の組物であると仮定すると、皿3点に対し、碗大中小各1点という組み合わせになる。それが3脚分まとめて廃棄されたということとなる。

さらに注目されるのは、全点が赤色漆を用いていることにある。越後における赤色の出現（漆絵）は遅くとも一三世紀初頭、内面赤色は一四世紀代である（中条町教委二〇〇一）が、一五世紀以降になると、多くが赤色漆を用いたものとなる（皆朱・内面赤色・漆絵）。もちろん本遺跡においても総黒色漆器がなくなったわけではないが、それらの占める割合は非常に低くなる。当然、遺跡の性格によつて、比率が変わるであろうが、一般集落でさえ安価な渋下地・ベンガラ漆ではあるが赤色を用いた漆器が主体を占めるようになっていたと考えられる（四柳二〇〇〇）。こうした社会の趨勢の中で、権力者はより上物を求め、それを表すのが19点もの皆朱漆器であると結論付けることができよう。

第一編 引用・参考文献

あ

- 会津坂下町教委 一九九四 『坂下北部地区遺跡発掘調査報告書 東館遺跡』文化財調査報告第12集
二〇〇五 『陣が峯城跡』文化財調査報告第13集
青森県立郷土館 一九八一 『尻八館調査報告書』調査報告書第9集・歴史1
青山考古学会 一九九五 『青山考古』第12号、特集号「貿易陶磁にみる日中関係と国内流通」
秋田県教委 二〇〇一a 『館堀城跡』県文化財調査報告第321〇集
二〇〇一b 『観音寺廃寺』県文化財調査報告第3211集
秋田裕毅 一九九八 「信楽焼に関する一考察」『榑崎彰一先生古希記念論文集』真陽社
秋元信夫 二〇〇二 「出羽北部の城館」『中世出羽の領主と城館』高志書院
愛宕松男 一九八七 『中国陶磁産業史』愛宕松男東洋史学論集第1巻、三二書房
穴水町教委 一九八七 『西川島 能登における中世村落の発掘調査』
一九九七 『美麻奈比古神社前遺跡』石川
阿部恭平・石原正敏 一九九二 「河原田遺跡」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会資料
阿部恭平 一九九二 「第4章城館跡資料」『十日町市史』資料編三 古代・中世
阿部洋輔ほか 一九八〇 「第三章 鎌倉・室町期の新発田」『新発田市史』上巻
網野善彦 一九九〇 「北国の社会と日本海」『海と列島文化 第一巻 日本海と北国文化』小学館
一九九一 「中世前期の瀬戸内海交通」『海と列島文化 第九巻 瀬戸内の海人文化』小学館
一九九六 『日本中世都市の世界』筑摩書房
新垣 力 二〇〇四 「遺跡出土の「茶道具」からみた茶道の展開」『グスク文化を考える』新人物往来社
新垣 力・瀬戸哲也 二〇〇五 「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理 付、14～16世紀の青磁の様相整理メモ」『沖縄埋文研究3』
荒川正夫 二〇〇二 「北武蔵における中世方形館の成立と集落―武蔵国児玉郡・嘉美郡を中心に―」『中近世土器の基礎研究』XVI
荒野泰典・石井正敏・村井章介 一九九二 「時期区分論」『アジアのなかの日本史III』アジアと日本、東京大学出版
い
飯村 均 一九九七 「北海道・東北地方における古瀬戸流通」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯、愛知
池崎譲二 一九八四 「博多出土陶磁器の組成について」『貿易陶磁研究』No.4、日本貿易陶磁研究会
池崎譲二・森本朝子 一九八八 「海を越えてきた陶磁器」『よみがえる中世1 東アジアの国際都市博多』平凡社
池澤俊幸 二〇〇四 「四国における古代後期から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』XVIII
池谷初恵 一九九九 「伊豆北条氏関連遺跡出土陶磁器の様相(仮題)」『日本貿易陶磁研究会第20回研究集会資料集』
石井進・大三輪龍彦編 一九八九 『よみがえる中世3 武士の都鎌倉』平凡社
石川県埋文 一九八四 『普正寺遺跡』

- 一九八五 『門前町道下元町遺跡』
 一九八六 a 『金沢市戸水C遺跡』
 一九八六 b 『漆町遺跡Ⅰ』
 一九八八 『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』
 一九八九 『白江梯川遺跡Ⅱ』
 一九九五 『富来町貝田遺跡・貝田C遺跡』
 市橋一郎・齋藤和行 一九九八 『足利市内の井戸遺構について』『唐澤考古』第17号
 伊藤喜良 一九九二 『南北朝の動乱』日本の歴史⑧、集英社
 一九九五 『中世王権の成立』青木書店
 伊藤邦弘ほか 一九九六 『小特集 出羽国遊佐荘から中世の読む―大楯遺跡を中心に―』『月刊歴史手帖』第24巻10号
 伊藤邦弘 一九八九 『大楯遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第一三九集
 一九九七 『藤島城出土の陶磁器』『東北の貿易陶磁』貿易陶磁研究集会平泉大会資料集
 伊藤邦弘・高桑登編二〇〇二 『主な発掘城館の概要』『やあべい』第20号
 伊藤武士 一九九七 『出羽における一〇・一一世紀の土器様相』『北陸古代土器研究』第7号
 伊藤裕偉 一九九九 『安濃津の成立とその中世的展開』『日本史研究』四四八
 二〇〇〇 『中世安濃津の交通路と物流』『織豊期の政治構造』吉川弘文館
 二〇〇〇 『中世成立期の「居館」をめぐる諸問題』『嶋拔Ⅱ』三重県埋文調査報告書
 出光美術館 一九八二 『近年発見の窯跡出土中国陶磁展』図録
 井上寛治 二〇〇一 『中世の港町・浜田―港湾都市浜田の成立と日本海水運に果たした役割―』石見学ブックレット2
 井上雅孝 一九九七 『陸奥における一〇・一一世紀の土器様相』『北陸古代土器研究』第7号
 伊野近富 一九八九 『原型・模倣型による平安京以後の土器様相』『中近世土器の基礎研究』V
 一九九七 『制作技術から見た京都系土師器皿の伝播と需要』第16回 中世土器研究会報告資料』京都
 伊原弘・梅村巖 一九九七 『宋と中央ユーラシア』世界の歴史7、中央公論社
 今井 敦ほか 一九九五 『日本出土の中国陶磁』平凡社版中国の陶磁12
 一九九七 『青磁』平凡社版中国の陶磁4
 入間田宣夫 一九九八 『中世武士団の自己認識』三弥田選書27
 入間田宣夫・豊見山和行 二〇〇二 『北の平泉、南の琉球』日本の中世5、中央公論新社
 岩瀬由美 二〇〇一 『能登の様相』『中世北陸の井戸』第14回北陸中世考古学研究会資料集
 岩田 隆 二〇〇一 『越前・若狭の様相』『中世北陸の井戸』第14回北陸中世考古学研究会資料集
 岩手県埋文 一九九五 『柳之御所跡』県埋蔵文化財調査報告書第二二八集
 一九九七 『白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』県埋文調査報告書第二四八集

岩手県博 二〇〇〇 『岩手の経塚』第30回企画展

岩室村教委 一九九七 『和納館遺跡』

岩本正二 二〇〇一 「中世の井戸」『中世北陸の井戸』第14回北陸中世考古学研究会資料集

上田秀夫 一九八四 「根来寺坊院跡における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』No. 4

植田弥生 二〇〇六 「出土木製品の樹種同定」『住吉遺跡』新潟県埋文報告第一五七集

宇野隆夫 一九八二 「井戸考」『史林』65-5、後『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社一九八九に再録

一九八六 「一〇・一世紀の土器・陶磁器―第4回研究集会の総括―」『中世土器の基礎研究』II

一九八九 「古代の食器様式」『歴史時代土器研究』第7号、岩手

一九九二 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集

一九九七 「中世陶器の生産と流通について」『研究紀要』第5輯、(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

一九九八 「北の国際港湾都市十三湊をめぐる中世社会」『幻の中世都市十三湊―海から見た北の中世―』国立歴史民俗博物館

え

榎本 渉 二〇〇一 「宋代の「日本商人」の再検討」『史学雑誌』第110編第2号

お

近江俊秀 一九九七 「広域に流通した中世大和の土器―大和産・大和系瓦質土器の分布について―」『中近世土器の基礎研究』XII

大石一久 一九九九 『石が語る中世の社会』ろうきんブックレット9

二〇〇一 「引久石塔に関する一考察―とくに長崎県下の分布状況から見た大量搬入の背景について―」『日引』第1号、石造物研究会

大石直正ほか 一九九四 「特集／古代末・中世初期の東北日本」『歴史評論』No. 五三三

大石直正編 二〇〇一 『中世の奥羽と板碑の世界』高志書院

大河内勉 一九九三 「漆器とかわらけの器形比較と相关性について」『鎌倉考古』No. 26

一九九九 「鎌倉市由比ヶ浜地域周辺の様相」『貿易陶磁研究集会鎌倉大会資料集』神奈川

大隅和雄・村井章介編 一九九七 『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社、

太田市教委 二〇〇一 『史跡金山城跡環境整備報告書 発掘調査編』

大場雅之 二〇〇二 「出羽南部の城館」『中世出羽の領主と城館』高志書院

大庭康時 一九九四 「博多綱首殺人事件・中世前期博多をめぐる雑感」『法哈た』第3号、博多研究会

一九九七 「博多遺跡群の陶磁器埋納遺構」『貿易陶磁研究』No. 17

一九九九 「集散地遺跡としての博多」『日本史研究』四四八

二〇〇一 「博多綱首の時代」『歴史学研究』No. 七五六

二〇〇四 「中世史研究と貿易陶磁器」『中近世土器の基礎研究』18

岡田保良 一九八五 「山科寺内町の遺跡調査とその復原」第1・2章『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集

- 岡陽一郎 一九九五 「中世居館再考―その性格をめぐる―」『中世の空間を読む』吉川弘文館
- 小川望・小俣 悟 一九八八 「関東の瓦質土師質火鉢類」『考古学ジャーナル』No.299
- 沖縄県教委 一九九八 『首里城跡・京の内跡発掘調査報告書(1)』・『沖縄県文化財調査報告書第一三二集
- 小野正敏 一九八二 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
- 一九八四 a 「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』No.4
- 一九八四 b 「第4回貿易陶磁研究会」、その成果と課題」『貿易陶磁研究』No.4
- 一九八五 「出土陶磁よりみた一五、一六世紀における画期の素描」『MUSEUM』四一六
- 一九九一 a 「房総の城館出土中世陶磁器の問題」『千葉史学』第18号、千葉歴史学会
- 一九九一 b 「中世陶磁器研究の視点と方法・消費地遺跡からみた問題」『考古学と中世史研究』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集、名著出版
- 一九九一 c 「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 一九九七 『戦国城下町の考古学』講談社選書メチエ108
- 一九九八 a 「戦国期の権威と富を象徴する貿易陶磁器」『貿易陶磁研究会関西大会資料集』京都
- 一九九八 b 「かわらけと権威」『陶磁器の文化史』国立歴史民俗博物館
- 二〇〇三 「威信財としての貿易陶磁と場」『戦国時代の考古学』古志書院
- 小浜市教委 二〇〇〇 『史跡後瀬山城跡保存管理計画書』
- 小葉田淳 一九四一 『中世日支通交貿易史の研究』刀江書院
- か
- 加賀市教委 一九八七 『『三木だいまん遺跡』市埋文調査報告17
- 垣内光次郎 一九九〇 「中世北陸の暖房文化」『石川県考古学会々誌』第33号
- 一九九三 「日本海における中国陶磁の流れ」『青山考古学会設立15周年記念シンポジウム資料』
- 柿田祐司 一九九五 「貝田遺跡出土の中世土師器について―加賀地域と対比して」『富来町貝田遺跡・貝田C遺跡』
- 二〇〇〇 「能登地域における一・一二世紀代のロクロ土師器について」『石川県埋蔵文化財情報』第3号
- 春日真実 一九九七 「越後における一〇・一一世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号
- 一九九九 「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 二〇〇一 「柏崎市鶴巻田遺跡出土漆器の編年の位置」『新潟考古学談話会会報』第23号
- 勝山市教委 一九九〇・一九九一・一九九三 『白山平泉寺 南坊院跡発掘調査概報』I～III、市埋文調査報告第7・8・10集
- 金沢市埋文センター 二〇〇三 『大桑ジョウデン遺跡I』市文化財紀要二〇一
- 二〇〇四 『堅田B遺跡II(本文・遺物編)』金沢市文化財紀要二二三
- 二〇〇四 『大桑ジョウデン遺跡II』市文化財紀要二二四
- 金沢 陽 一九九九 「明から清にかけての海禁政策と民間貿易への影響について」『貿易陶磁研究』第19号

- 金子健一 二〇〇〇 「中世後期における瀬戸窯製品と貿易陶磁」『貿易陶磁研究』NO.20
- 金子拓男 一九九九 「守護所とその周辺」『新潟県の考古学』高志書院
- 鎌倉市教委 一九九〇 『今小路遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』
- 神木哲夫 一九九六 「平清盛のベイエリア開発 大輪田泊から兵庫津へ」「中世の瀬戸内海と兵庫津「兵庫北関入船納帳」が語るもの」『歴史海道のターミナル』
- 上ノ国町教委 一九八〇～一九九九 『上之国勝山館跡』Ⅰ～ⅩⅩ
- 神林村教委 一九九二 『牧目館跡発掘報告書』村埋蔵文化財報告書4
- 一九八三 『史跡平林城跡保存管理計画書』新潟
- 亀井明德 一九七七 「宋代の輸出陶磁 日本一出土品を中心として」『世界陶磁全集12 宋』小学館
- 一九八〇 「日本出土の明代青磁碗の変遷」『古文化論攷』鏡山猛先生古希記念
- 一九八六 『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎
- 一九九二 「竜泉窯青磁創焼時期への接近」『貿易陶磁研究』No.12
- 一九九五 「日宋貿易関係の展開」『岩波講座日本通史』第6巻、古代5
- 一九九七 「東シナ海をめぐる交易の構図」『考古学による日本歴史10 対外交渉』雄山閣
- 亀井明德編 二〇〇二 『明代前半期陶磁器の研究―首里城京の内SK01出土品―』専修大学アジア考古学研究報告書1
- 亀田町教委 一九八〇 『三王山遺跡発掘調査報告書』
- 川島茂裕 二〇〇二 「藤原清衡の妻たち」『平泉の世界』高志書院
- 川添昭二 一九九三 「鎌倉末期の対外関係と博多―新安沈没船木簡・東福寺・承天寺―」『鎌倉時代文化伝播の研究』吉川弘文館
- 一九八八 「海にひらかれた都市 古代・中世の博多」『よみがえる中世1』平凡社
- 河野真知郎 一九九三 「中世鎌倉火鉢考―東国との関連において―」『考古論叢神奈河』第2集
- 一九九五 『中世都市鎌倉―遺跡が語る武士の都』講談社選書メチエ49
- 川端 新 二〇〇二 『荘園制成立史の研究』思文閣出版
- 川端 誠 一九九五 「中世加賀地方の木製容器の概要」『中世北陸の木製容器』第8回北陸中世土器研究会資料
- 菅野崇之 二〇〇二 「陸奥南部の方形館」『鎌倉・室町時代の奥州』高志書院
- 菅野成寛 一九九四 「都市平泉における鎮守成立試論―霊山神と都市神の勧請―」『岩手史学研究』77
- 木戸雅寿 一九九五 「信楽」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 九州歴史資料館 一九七五 『大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報』
- 一九七九 『大宰府史跡 昭和53年度発掘調査概報』
- 京都府埋文 一九八四 『大内城跡』府遺跡調査報告書第3冊
- 京都文化博物館 一九九六 『京都・激動の中世―帝と将軍と町衆と―』展覧会図録

金城正紀 一九九八 「沖縄出土の貿易陶磁器」『月刊考古学ジャーナル』№427
金城亀信 一九九八 「首里城跡「京の内」跡出土の陶磁器資料について」『日本貿易陶磁研究会第20回研究集会資料集』

二〇〇〇 「青磁ラマ式蓮弁文碗について」『貿易陶磁研究』№20
二〇〇一 「首里城京の内跡土壇SK01」『季刊考古学』第75号
二〇〇三 「首里城「京の内」跡倉庫跡出土の陶磁器について」『東洋陶磁』第32号

く

楠本正継 一九六二 『宋明時代儒学思想の研究』広池学園事業部、千葉
工藤清泰 一九八八 「浪岡城跡の発掘調査成果から見た北日本における中世城館研究の課題」『よねしろ考古学』第4号
一九八九 「浪岡城出土の瓦質土器とその考察」『浪岡城跡X』浪岡町教委

一九九五 「中世・近世」『新編弘前市史 資料編1—1考古編』弘前市
二〇〇〇 「北日本における中世後期の貿易陶磁様相」『貿易陶磁研究』№20
二〇〇三 「48 弁天島遺跡」『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』

こ

高知県教委 一九八四 『芳原城発掘調査報告書』
郡山市埋文 一九九三 『安子島城跡』安子島地区土地改良関連発掘調査報告書4
一九九九 『荒井猫田遺跡(Ⅲ区)第1次発掘調査報告』

小島道裕 二〇〇三 「江馬氏館と江馬氏—室町期の国人領主と館—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇四集
小島幸雄 一九九四 a 「春日山と越後府内の発掘成果」『守護所から戦国城下へ』名著出版
一九九四 b 「伝至徳寺跡の調査—越後府中における中世遺跡の調査—」『日本歴史』五五六

一九九五 「越後府中とその周辺遺跡出土の陶磁器」『越後の出土陶磁器』貿易陶磁研究会新潟大会資料集
一九九七 「伝至徳寺跡」『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』北陸中世土器研究会編、桂書房

駒見和夫 一九九二 「井戸をめぐる祭祀—地域的事例の検討から—」『考古学雑誌』第77巻第4号
小森俊寛・上村憲章 一九九六 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、京都市埋文研

さ
齋藤秀平 一九三五 「北蒲原郡鳥坂城址」『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯
齋藤慎一 一九八九 「中世後期の本拠と国人領主」『中世城郭研究』第3号

一九九一 「本拠の展開—十四・十五世紀の居館と「城」・「要害」—」『中世の城と考古学』新人物往来社
齋藤幸恵 一九九五 「越後の木器—漆器を中心に」『中世北陸の木製容器』第8回研究会資料集
佐伯弘次 一九八八 「大陸貿易と外国人の居留」『よみがえる中世1』平凡社
堺市教委 一九八九 「堺環濠都市遺跡(SK1202)」市埋文調査報告49
一九九一 『新金岡更池遺跡』市埋文調査概要16

- 坂井秀弥 一九八八 「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟県考古学談話会会報』第1号
- 一九九〇 a 「新潟県の戦国期城下町について」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第3集
- 一九九〇 b 「三和村の開発史」『法花寺遺跡（廃寺）他発掘調査報告書』三和村教委
- 一九九〇 「越後における古代末・中世の土器様相と画期」『土器からみた中世社会の成立』
- 酒井龍一 二〇〇三 「考古学者と弥生土器 一九八四～一九九五年論」『文化財学報』第21集、奈良
- 佐久間重男 一九九二 『日明関係史の研究』吉川弘文館
- 榊原博英 一九九八 「島根県古市遺跡・横路遺跡と出土陶磁」『貿易陶磁研究』No.18
- 榊原滋高 二〇〇二 「中世港湾都市十三湊遺跡の発掘調査」『北の環日本海世界』山川出版
- 二〇〇六 「十三湊遺跡の一括資料と基準資料」『貿易陶磁研究』No.26
- 阪口弘之校注 一九九九 『さんせう太夫』『古浄瑠璃説経集』新日本古典文学大系30、岩波書店
- 坂本賞三 一九七二 『日本王朝国家体制論』東京大学出版会
- 佐久間貴志 一九八四 「大阪菱木下遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.4
- 桜井甚一 一九五八 『能登と加賀の板碑文化』石川県図書館協会
- 佐々木達夫 一九八五 『元明時代窯業史研究』吉川弘文館
- 笹澤正史・水澤幸一 二〇〇一 「伝至徳寺跡の遺物様相と中世前半を中心として」『上越市史研究』第6号
- 笹澤正史 二〇〇三 「(古代) 時代概説」『上越市史 資料編2 考古』
- 佐藤重聖 一九九六 「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI
- 二〇〇一 「南九州における瓦質土器の特質―鹿児島県出土資料を通じて―」『鹿児島考古』第35号
- 二〇〇六 「瓦質土器の需要―大和における出土傾向とその背景―」『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集
- 佐藤一郎 二〇〇〇 「中世前期の博多出土貿易陶磁の年代について」『貿易陶磁研究』No.20
- 佐藤雅彦 一九七七 「宋の白磁」『世界陶磁全集12 宋』小学館
- 一九八一 「元代の白磁と青花」『世界陶磁全集13 遼・金・元』小学館
- 竺沙雅章編 一九九四 『アジアの歴史と文化3』中国史―近世1、同朋舎出版
- 市浦村教委 二〇〇〇 『十三湊遺跡 第18・76次』村埋蔵文化財報告書第10集
- 二〇〇一 『十三湊遺跡 第一四五次』村埋蔵文化財調査報告書第13集
- 二〇〇三 『十三湊遺跡 第九〇・一二〇次』村埋蔵文化財調査報告書第15集
- 二〇〇三 『十三湊遺跡―平成13年度 第一四五次発掘調査報告書―』
- 紫雲寺町教委 二〇〇四 『二ツ割遺跡・中住古遺跡発掘調査報告書Ⅱ』町埋文調査報告書3
- 塩田明弘 二〇〇一 「越中の様相」『中世北陸の井戸』第14回北陸中世考古学研究会資料集
- 滋賀県立近江風土記の丘資料館 一九八〇 『信楽焼と近江の蔵骨容器―信楽の歴史とその編年―』

- 品田高志 一九九一 a 「越後における古代・中世の漆器―漆器食膳具を中心にして」『新潟考古学談話会会報』第7号
 一九九一 b 「越後の中世土師器―編年的研究の現状と課題」『新潟県考古学談話会会報』8
 一九九七 「北陸における古代と中世の木製食器」『北陸古代土器研究』第7号
 一九九九 a 「中世土師器」『新潟県の考古学』高志書院
 一九九九 b 「越後における中世後期の土師器Ⅲ―京都系土師器第2波の流入と展開―」『中近世土器の基礎研究』XIV
 新発田市教委 一九九〇 『三光館跡・宝積寺館跡』市埋蔵文化財調査報告第13
 一九九七 『新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ（第7～10地点）』埋蔵文化財調査報告第17
 斯波義信 一九六八 『宋代商業史研究』風間書房
 一九八八 『宋代江南経済史の研究』東京大学東洋文化研究所報告、汲古書院
 一九九二 『港市論―寧波港と日中海事史―』『アジアのなかの日本史Ⅲ』東京大学出版
 清水 尚 一九九一 「近江出土の中国陶磁ノート―Vol.1 基礎データ―」『中近世土器の基礎研究』VII
 一九九六 「近江出土の中国陶磁ノート―Vol.2 前半期（一―一四世紀）データの検討―」『中近世土器の基礎研究』XI
 下仲隆浩 二〇〇三 「福井県小浜市における中近世石造物の様相」『日引』第四号、石造物研究会
 下向井龍彦 二〇〇一 『武士の成長と院政』日本の歴史07、講談社
 白根市教委 一九八三 『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』市文化財調査報告（2）
 宗臺秀明 二〇〇二 「鎌倉出土の14世紀代かわらけ」『かながわの中世』神奈川県考古学会
 新宮町教委 一九八八 『城山城』町文化財調査報告書10、兵庫
 水原町教委 一九七七 『水原城館址及水原代官所址発掘調査報告書』
 菅原正明 一九八九 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集
 杉山正明 一九九二 『大モンゴルの世界―陸と海の巨大帝国』角川選書二二七
 一九九五 『クビライの挑戦 モンゴル海上帝国への道』朝日選書五二五
 鋤柄俊夫 一九八八 「畿内における古代末から中世の土器―模倣系土器生産の展開―」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会
 一九九六 「土器と陶磁器にみる中世京都文化」『京都・激動の中世―帝と将軍と町衆と―』京都文化博物館
 二〇〇二 a 「都鄙のあいなか」『国立歴史民俗博物館研究報告』第32集
 二〇〇二 b 「市と館―館の成立とその背景―」『長野県考古学誌』九九・一〇〇号
 鈴木和子 一九九八 「青森県十三湊と出土陶磁器」『貿易陶磁研究』No.18
 鈴木孝之 一九九〇 「古代～中近世の井戸跡について（1）―埼玉県における形態分類を中心として―」『研究紀要』第7号、（財）埼玉県埋文
 一九九一 「石組の井戸跡について―古代～中近世の井戸跡について（1）―」『埼玉考古学論集―設立10周年記念論文集―』埼玉県埋文
 二〇〇二 「日本中世における桶・樽の展開―結物の出現と拡散を中心に―」『考古学研究』48-4
 一九九五 「草戸千軒町遺跡における貿易陶磁の変遷―特に廃棄量の変化をめぐって―」『青山考古』第12号

- 一九九六 「輸入陶磁器の廃棄と集落の変遷過程」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
 二〇〇二a 「中世土器の象徴性―「かりそめ」の器としてのかわらけ―」『日本考古学』第14号
 二〇〇二b 「考古資料からみた中世集落における消費活動 草戸千軒町遺跡における資料形成過程の分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第92集

せ

関 周一 一九九五 「日中関係史と陶磁器」『青山考古』第12号
 瀬戸市埋文 一九九七 「付編」『研究紀要』第5輯

一九九七 『瀬戸・美濃系大窯とその周辺―大窯生産の成立と展開―』企画展図録
 一九九八 『列島に拡がる大窯製品―東日本の様相―』企画展図録
 二〇〇一 『王ノ壇遺跡』市文化財調査報告書第二四九集

仙台市教委
 た

胎内市教委 二〇〇六 『市内遺跡Ⅰ』(六斗蒔遺跡)埋文調査報告第1集

高桑 登 二〇〇一 「小田島城跡 第5次調査」『平成13年度山形県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』(財)山形県埋文

高桑弘美 二〇〇三 「瓦質土器」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院

高梨清志 一九九五 「越中の様相」『中世北陸の木製容器』第8回北陸中世土器研究会資料集

高橋一樹 二〇〇四 『中世荘園制と鎌倉幕府』塙書房

高橋隆博 一九八五 「漆器の素地について―桶物木地をめぐる―」『MUSEUM』No.四一三

高良倉吉 一九九八 『アジアのなかの琉球王国』歴史文化ライブラリー47、吉川弘文館、東京

滝川重徳 一九九〇 「瓦器調度類」研究覚書『金大考古』第18号

一九九九 「能登地域の土師器系供膳具―11世紀―」『中世北陸の石文化Ⅰ』第12回北陸中世考古学研究会資料集

竹内 実 一九九七 「北方のみやこ・南方の文化」『故宮』第4巻、日本放送出版協会

田嶋明人 一九九〇 「古代から中世にかけての土器の推移(加賀)」『土器からみた中世社会の成立』

一九九二 「古代の土器と中世の土師器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会資料集

田島 公編 一九九三 「日本・中国・朝鮮対外交流史年表」『貿易陶磁・奈良・平安の中国陶磁』由良大和文化研究協会

田中則和 一九九七 「宮城県南小泉遺跡 追加資料」『東北の貿易陶磁』貿易陶磁研究集会平泉大会資料集

田中健夫 一九五九 『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会

一九九七 『東アジア通交圏と国際認識』吉川弘文館

田辺早苗 二〇〇一 「佐渡・越後の様相」『中世北陸の井戸』第14回北陸中世考古学研究会資料集

田村浩司 一九九八 「漆器」『新潟県の考古学』高志書院

田村 裕 一九八七 「鎌倉殿と御家人」『新潟県史 通史編2 中世』

田村 裕・矢田俊文 二〇〇三 「中世史料」『笹神村史 資料編1』原始・古代・中世

高良倉吉 一九九八 『アジアのなかの琉球』歴史文化ライブラリー47 吉川弘文館

ち

中世都市研究同人会ほか 一九九八 『中世遺跡出土の漆器』資料集

つ

土橋理子 一九九七 「日本貿易の諸相」『考古学による日本歴史10』対外交渉、雄山閣

鶴巻康志 一九九二 「越後における中世土師器の動向」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会資料集

一九九七 「越後における古代・中世の漆器」『北陸の漆器考古学』第10回研究会資料集

二〇〇一 「伝至徳寺跡出土の青磁酒海壺とその系譜について」『上越市史研究』第六号

二〇〇四 「土師器からみた中世の小地域圏―新潟県北部阿賀北地方を中心に―」『中近世土器の基礎研究』XVIII

て

出越茂和 一九九四 「加賀におけるロクロ土師器の出現と展開」『中近世土器の基礎研究』X

一九九七 「北陸古代後半における椀・皿食器（後）」『北陸古代土器研究』第7号

手塚直樹 一九九三 『喫茶をめぐって（1）―鎌倉市内出土天目茶碗について―』『青山考古』11

一九八四 「鎌倉出土の陶磁器について」『貿易陶磁研究』No. 4

と

鳥取県教委 二〇〇一 『霞遺跡群』調査報告書73

戸根与八郎 二〇〇三 「（春日山城跡内堀地区）遺物」『上越市史叢書8 考古中・近世資料』

富山正明 一九九二 「興行寺遺跡」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会資料集

一九九三 「福井県興行寺遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』第13号

一九九七 「諏訪間興行寺遺跡」『中・近世の北陸―考古学が語る社会史』桂書房

二〇〇一 「福井・諏訪間興行寺遺跡第2遺構面」『季刊考古学』第76号

戸谷邦隆 一九九九 「掘り方」からみた中近世の石組み井戸」『富山考古学研究』紀要第2号

富山県文振財団 一九九六 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』県埋文調査報告第7集

二〇〇四 『道場Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』県埋文調査報告第22集

豊浦町教委 一九八一 『曾根遺跡』『豊浦町文化財報告』三

な

中井 均 一九九二 「中世城館調査の成果と課題」『考古学ジャーナル』二五三

一九九九 「居館と詰城―発掘成果から見た山城の成立過程―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集

中井淳史 二〇〇〇 「武家儀礼と土師器」『史林』83-3

二〇〇一 「一六世紀地域社会における献盃儀礼―『長楽寺永禄日記』・『色部氏年中行事』を中心に―」『日本語・日本文化』27

二〇〇二 「土器の名前―中世土師器の器名考証試論―」『日本史研究』四八三

二〇〇四 「憧憬のなかの京都…動く〈モノ情報〉と価値形成―日本中世の土師器における」『うごくモノ』平凡社

長岡市教委 二〇〇七

『土用木西遺跡』市埋文調査報告

中澤富士雄 二〇〇〇 「南宋官窯の新知見―老虎洞窯址の発見」『陶説』第五六三号

中条町教委 一九九三～一九九七 『江上館跡Ⅰ～Ⅴ』町埋蔵文化財調査報告第2・6・8・10・13集

一九九七・一九九九～二〇〇一・二〇〇五 『下町・坊城遺跡Ⅱ～Ⅵ』町埋蔵文化財調査報告第12・18・20・21・33集

二〇〇一 『船戸桜田遺跡2次』町埋文調査報告第22集

二〇〇二 『船戸川崎遺跡4次』町埋文調査報告第24集

二〇〇二 『船戸桜田遺跡4次・5次 船戸川崎遺跡6次』町埋文調査報告第25集

二〇〇四 『下名倉遺跡4次』町埋蔵文化財調査報告第28集

二〇〇五 『町内遺跡Ⅵ』(古館館跡)町埋文調査報告第34集

仲田茂司 一九九九 「中世東国の漆器」『考古学研究』46-1

長野県教委 一九八九 『吉田川西遺跡』中央道長野線埋文調査報告3

中野豈任 一九八八 『祝儀・吉書・呪符―中世村落の祈りと呪術―』吉川弘文館

中三川昇 一九九九 「横須賀市・三浦半島地域」『貿易陶磁研究集会鎌倉大会資料集』神奈川

浪岡町教委 一九七八～一九八九 『浪岡城跡Ⅰ～Ⅹ』
に

新潟県教委 一九八八 『西田・鶴巻田遺跡群』埋文調査報告第27集

一九九四 『一之口遺跡東地区』埋文調査報告第60集

一九九六 『水久保遺跡 宮平遺跡Ⅱ』埋文調査報告第79集

一九九八 『天王前遺跡・有明的場遺跡・石川遺跡』埋文調査報告第89集

二〇〇一 『堀越館跡』県埋蔵文化財調査報告書第39集

二〇〇〇 『大武遺跡Ⅰ(中世編)』埋文調査報告第97集

二〇〇三 『浦廻遺跡』埋文調査報告第一二六集

二〇〇五 『東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ』埋文調査報告第一四〇集

二〇〇五 『海道遺跡・大塚遺跡』埋文調査報告第一五〇集

二〇〇六 『大坪遺跡』埋文調査報告第一五三集

二〇〇六 『住吉遺跡』埋文調査報告第一五七集

二〇〇六 『用言寺遺跡』埋文調査報告第一五九集

二〇〇七 『窪田遺跡』埋文調査報告第一七六集

新潟市 一九九四 『新潟市史 資料編1 原始古代中世』

新潟市教委 一九九九 『山木戸遺跡第2次発掘調査概報』

二〇〇二 『内野遺跡発掘調査報告書』
二〇〇四 『新潟市山木戸遺跡』

新潟県考古学会編 一九九九 『新潟県の考古学』高志書院、東京

新野一浩 一九九六 「瑞巖寺境内遺跡」『東北中世考古学の現状と課題』東北中世考古学会第2回研究大会資料、山形

西山眞理子 一九九四 「南陸奥の焼物は何を語るか?—福島県内における一五・一六世紀の城館出土陶磁器から—」『福島考古』第33号

日本貿易陶磁器研究会 一九九九 『貿易陶磁研究集会鎌倉大会資料集』

二〇〇二 『中世後期における貿易陶磁器の様相』中国大会資料集、鳥取

ぬ

貫井美鈴 二〇〇〇 「北東日本海域における貿易陶磁の年代観—瀬戸美濃との併行関係について—」『十三湊遺跡—第86次発掘調査報告書—』市浦

村埋文調査報告第11集

布尾幸恵 二〇〇一 「加賀の様相」『中世北陸の井戸』第14回北陸中世考古学研究会資料集

布目潮颯 二〇〇一 『中国喫茶文化史』岩波現代文庫学術46

ね

柁津宗伸 二〇〇三 「大鑑清規と五山文学における喫茶の諸形態—中世信濃からの視角—」『長野県立歴史館研究紀要』第9号

二〇〇四 「中世信濃の喫茶—開善寺文書、守矢文書、定勝寺文書、蓋、湯瓶および瓦質風炉による考察」『長野県立歴史館研究紀要』第

10号

の

野口 実 一九九三 「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』第四五卷第九号

は

羽下徳彦 一九八七 「米山より奥」『新潟県史しおり』

函館市教委 一九八六 『志苔館跡』北海道

羽柴直人 二〇〇一 「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学』第13号

橋口定志 一九八七 「中世居館の再検討」『東京考古』5

一九九六 「東京の中世遺跡」『資料と遺跡が語る中世の東京』新日本出版社

橋本久和 一九九二 『中世土器研究序論』真陽社

橋本久和 二〇〇〇 「紀年銘資料を中心とした貿易陶磁の年代観」『貿易陶磁研究』No.20

橋本義彦 一九六四 『藤原頼長』人物叢書、吉川弘文館

長谷部楽爾 一九七七 「宋の官窯青磁」『世界陶磁全集12 宋』小学館

畠中 弘 一九八四 「概説・山陰の石仏」『日本の石仏』3、山陰・山陽編、国書刊行会

浜田市教委 一九九五 『古市遺跡発掘調査報告書』島根

一九九七 『横路遺跡（土器土地区）』島根

原 明芳 二〇〇三 「灰釉陶器考―松本平の平安時代の食膳具様式の関連で―」『長野県考古学会誌』一〇三・一〇四
パリノ・サーヴェイ 二〇〇三 「木製品の樹種」『浦廻遺跡』県埋文調査報告第一二六集

半沢 紀 一九九七 「青森県に広く分布する中世貿易陶磁器からみた十三湊」『北奥古代文化研究』第26号
ひ

久田正弘 一九八七 「石川県内出土の井戸について」『米光萬福寺遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

平尾政幸 一九九四 「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』角川書店

平川 南 二〇〇四 「中世都市鎌倉以前―東の海上ルートの実相―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第二一八集

平田耿二 二〇〇〇 『消された政治家 菅原道真』文春新書一一五

広江耕史 一九九八 「出雲の様相」『山陰における中世前期の貿易陶磁器』第26回山陰考古学研究会

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 一九九三 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ』
一九九六 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』

広島考古学研究会 一九八五 『中世遺跡出土の漆器』第5回中世遺跡研究会資料集

平賀町教委 二〇〇〇 『大光寺新城跡遺跡―第10次発掘調査―』町埋蔵文化財報告書第26集
ふ

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 一九八三 『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』
一九八四 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（一九七六）
一九九五 『朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅳ』第29次第77・78次

福井県立若狭歴史民俗資料館 二〇〇〇 『特別展 羽賀寺―日本海交流と若狭』
福岡市教委 一九八六 『高速鉄道関係埋蔵文化財報告Ⅴ』
福岡市健司ほか 二〇〇四 『落川・一の宮遺跡を考える―多摩の古代―中世をめぐって―』東京考古学談話会パネルディスカッション発表要旨

藤井勝夫 一九九七 「美は江南にあり―南宋」『故宮』第3巻、日本放送出版協会

藤岡了一 一九七七 「宋の天目茶碗―建盞と玳瑁盞を中心として―」『世界陶磁全集12 宋』小学館

藤木久志 一九九五 『雑兵たちの戦場』朝日新聞社

藤澤良祐 一九八六 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』
一九九一 「瀬戸古窯址群―古瀬戸後期様式の編年―」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』
一九九三 「瀬戸市史 陶磁史篇四」瀬戸大窯の時代
一九九七 「中世瀬戸窯の動態」及び討論発言部分・付編『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯
一九九九 「北東日本海域における瀬戸・美濃大窯製品の受容」『列島に拡がる大窯製品―東日本の様相』瀬戸市埋文企画展図録
二〇〇〇 「遠江出土の瀬戸美濃焼」『横地城跡 総合調査報告書 資料編』
一九九二 「古府遺跡」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会資料

藤田邦雄・滝川重徳 一九九二 「古府遺跡」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会資料

藤田邦雄 一九九二 「加賀における様相―土師器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会資料

一九九七 「中世加賀国の土師器様相」『考古資料が語る北陸の中近世』桂書房

藤田裕嗣 二〇〇一 「元寇時代の歴史地理」『月刊地理』46-8

二〇〇二 『中世瀬戸内水運からみた地域構造の歴史地理学的研究―文安2年「兵庫北関入船納帳」の分析―』平成一〇度～平成一三年度
科学研究費補助金・基礎研究(C)(2) 研究成果報告書

藤原良章 一九八八 「中世の食器・考 かわらけノート」『列島の文化史』5

古林森廣 一九八七 『宋代産業経済史研究』国書刊行会

古川久雄 二〇〇〇 「日本海を遠距離搬送された若狭の中世石塔」『中世北陸の石塔・石仏』第13回北陸中世考古学研究会資料集

古屋奎二 一九九一 『故宮博物院秘宝物語』淡交社

降矢哲男 二〇〇二 「平泉出土の貿易陶磁―柳之御所跡出土の韓半島産陶磁器から見える流通経路―」『平泉文化研究年報』第2号

へ 平凡社 一九九九 「越部荘」『兵庫県の地名II』

ほ 貿易陶磁研究会 一九九八 『貿易陶磁研究会関西大会資料集』長岡京

二〇〇〇 『城館出土の貿易陶磁器』貿易陶磁研究会四国大会資料集、松山

北陸中世土器研究会 一九九一 『城館遺跡出土の土器・陶磁器』第4回研究会資料集

一九九二 『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回研究会資料集

一九九三 『中世北陸の家・屋敷・暮らし』第6回研究会資料集

一九九五 『中世北陸の木製容器』第8回研究会資料集

一九九七 『考古資料が語る北陸の中近世』桂書房

一九九七 『北陸の漆器考古学』第10回研究会資料集

北陸中世考古学研究会 一九九八 『北陸中世の金属器』第11回研究会資料

二〇〇〇 『中世北陸の石塔・石仏』第13回資料集

二〇〇一 『中世北陸の井戸』第14回資料集

二〇〇七 『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施釉陶器・瀬戸美濃製品』第20回資料集

ま

前川 要 一九九五 「当該期の平地方形館の位置付けと「方形館体制論」の提唱」『江馬氏城館跡―下館跡発掘調査報告書I―』神岡町教委・富山

大学人文学部考古学研究室

二〇〇三 「能登七尾城下町の空間構造とその変遷」『蜃気楼』富山大学考古学研究室論集

二〇〇五 「北方史における津軽十三湊―「中心」「周縁」論から見た試論―」『十三湊遺跡(第1分冊)』青森県埋文調査報告書第三九八集

松崎水穂 一九九九 「勝山館跡 変貌するアイヌ社会と抬頭する和人社会の接点」『別冊歴史読本』16(第24巻 16号)新人物往来社

- 松田直則 一九九九 「城郭が語る地域史―四国西南部の中世城郭調査事例から―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告書』第9集
- 松任市教委 一九九五 『松任市宮永ほじ川遺跡』遺構・遺物図編
- 一九九七 『松任市宮永ほじ川遺跡』本文・写真編
- 松葉礼子 二〇〇〇 「大武遺跡出土木製品の樹種同定」『大武遺跡Ⅰ(中世編)』県埋文報告第97集
- 馬淵和雄 一九九七 「食器からみた中世鎌倉の都市空間」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- 馬淵和雄 一九九七 「鎌倉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- 一九九八 『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社

み

- 三重県埋文 二〇〇〇 『嶋拔Ⅱ』調査報告212
- 三島町教委 一九九二 『元屋敷遺跡』福島
- 三島道子 一九九五 「石名田木舟遺跡の井戸について」『埋蔵文化財年報』(6)―平成6年度―、富山県文化振興財団
- 水澤幸一 一九九六・一九九七 「越後国奥山荘の城館」(上)(下)『新潟考古』第7・8号
- 一九九七 a 「越後の瓦器」『東北地方の在地土器・陶磁器Ⅰ』東北中世考古学会第3回研究大会資料集、福島
- 一九九七 b 「中世越後国の土器・陶磁器」『中・近世の北陸―考古学が語る社会史―』桂書房
- 一九九九 a 「越後国奥山荘の考古学的研究の現状と課題―地域史研究の実践から―」『立正史学』第35号
- 一九九九 b 「中世越後の城館」『中世の越後と佐渡』高志書院
- 一九九九 c 「下町・坊城遺跡―奥山荘政所条遺跡群の提唱」『新潟県考古学会第11回大会研究発表要旨』
- 一九九九 d 「瓦器、その城館的なもの―北東日本の事例から―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集
- 二〇〇〇 a 「中世貿易陶磁の物量比較にみる地域性(予察)―越後国奥山荘政所条遺跡群の位置付けのための基礎作業―」『新潟考古学
談話会会報』第21号
- 二〇〇〇 b 「謙信と春日山城」『定本上杉謙信』高志書院
- 二〇〇〇 c 「越後国奥山荘政所条の都市形成」『中世都市研究』7 都市の求心力
- 二〇〇〇 d 「貿易陶磁の国際情勢―青磁を中心にして―」『貿易陶磁研究』20
- 二〇〇〇 e 「越後戦国期城郭の中の春日山城」『川中島合戦再考』新人物往来社
- 二〇〇一 a 「食膳具の変遷」『下町・坊城遺跡Ⅴ―C地点・総論編』中条町埋文報告21
- 二〇〇一 b 「越後城家にみる「兵」の家系とその展開」『おくやまのしょう』第26号
- 二〇〇一 c 「越後戦国期の遺物問題」『新潟考古』第12号
- 二〇〇一 d 「一五世紀中葉―後半における北東日本海沿岸地域へのやきものの搬入時期―越後江上館を中心として―」『中世土器研究論
集』中世土器研究会20周年記念論集
- 二〇〇一 e 「政所条遺跡群」『中世北陸の井戸』第14回北陸中世考古学研究会資料集
- 二〇〇一 f 「信楽壺の流通時期について」『中世土器研究』1011

二〇〇一 g 「伝至徳寺跡出土の威信財―瓦器と漆器―」『上越市史研究』第7号

二〇〇二 a 「古代の漆器について」『船戸川崎遺跡4次』中条町埋文調査報告第24集

二〇〇二 b 「古代の挽物製品について」『船戸桜田遺跡4次・5次 船戸川崎遺跡6次』中条町埋文調査報告第25集

二〇〇二 c 「阿賀北の中世石仏」『新潟考古』第13号

二〇〇四 a 「至徳寺遺跡の中世後期土器（補遺）」『上越市史研究』第9号

二〇〇四 b 「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』24

二〇〇五 a 「越後の中世土器」『新潟考古』第16号

二〇〇五 b 「奥山荘政所条遺跡群の展開―坊城館から江上館へ―」『中世の城館と集散地』高志書院

二〇〇五 c 「中世日本海域物流からみた地域性・境界性」『日本海域歴史大系 第3巻中世篇』清文堂

二〇〇五 d 「越後の様相」『中世北陸の茶道具』北陸中世土考古学研究会第18回資料集

二〇〇六 a 「奥山荘城館遺跡」日本の遺跡15、同成社

二〇〇六 b 「中世北陸の茶道具―越後出土の天目茶碗を中心にして―」『中近世土器の基礎研究』XX

二〇〇七 a 「浦廻遺跡にみる地表葬」『墓と葬送の中世』高志書院

二〇〇七 b 「中世越後の土器と陶磁器―Ⅰ―」『四世紀前半』『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施釉陶器・瀬戸美濃製品』第20

回北陸中世考古学研究会資料集

二〇〇三 「至徳寺遺跡」『上越市史叢書8』考古―中・近世資料

三辻利一 「穴水町周辺の遺跡出土土器の胎土分析」『西川島』穴水町教委

光谷拓実 「住吉遺跡出土木製品の年輪年代調査」『住吉遺跡』新潟県埋文報告第157集

皆川義孝 「中世考古学のための梅花無尽蔵解説 椰子椀・中国陶磁器」『第3回中世考古学のための日本中世・近世初期文献研究会資料集』新潟大学内同グループ

集』新潟大学内同グループ

南洋一郎 「一乗谷出土の漆器に関する形態分類について(その2)」『北陸の漆器考古学』第10回研究会資料集追加資料

三藤秀久 「越部荘」『日本荘園大辞典』東京堂出版

宮澤知之 「宋代中国の国家と経済―財政・市場・貨幣―」創文社

宮澤知之・杉山正明 「一九九八 「東アジア世界の変容」『中国史』世界各国史3 山川出版社

宮田 真 「若宮大路周辺遺跡群出土の渥美刻画文壺」『鎌倉考古』32

宮本常一 「鎌倉市今小路西遺跡（御成小学校内）追加資料」『貿易陶磁研究集会鎌倉大会資料集』神奈川

「工匠と民具」『絵巻物に見る日本庶民生活誌』中央公論社、後、木下外編『生産技術と物質文化』日本歴史民俗論集2、吉川

弘文館、一九九三、に再録

む

向井裕知 「金沢市堅田B遺跡の紀年銘共伴貿易陶磁」『第25回貿易陶磁研究集会資料』

村井章介 「海から見た戦国日本―列島史から世界史へ―ちくま新書一二七

邨岡良弼 一九〇二 『日本地理志料』(『諸本集成倭名類聚外篇』臨川書店に一九六六年再刊)
村山修一 一九六二 『藤原定家』人物叢書、吉川弘文館

も

元木泰雄 二〇〇〇 『藤原忠実』人物叢書、吉川弘文館

二〇〇二 『院政の展開と内乱』『院政の展開と内乱』日本の時代史7、吉川弘文館

百瀬正恒 一九九六 『東北中世考古学会』と青森県の古代から中世の遺跡』『中世土器研究』83号

一九九七 『貿易陶磁研究集会 平泉大会』『中世土器研究』86号

一九九八 『南山城の貿易陶磁器』『貿易陶磁研究会関西大会資料集』京都

二〇〇二 『京都を旅立った土師器のゆくすえ』『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』

森 克己 一九四八 『日宋貿易の研究』國立書院

森 隆 一九九三 a 『中世的土器生産の特質と成立過程』(上)(下)——畿内・西日本地域を中心とした——『古代文化』45・5・6

一九九三 b 『中世地域社会の形成過程——畿内・畿内周辺地域の事例より——』『古代文化』45・12

森田 勉 一九八六 『九州の紀年銘資料共伴の出土陶磁器』『貿易陶磁研究』No.6

森 達也 一九九八 『遂寧窖藏出土陶磁の年代について』『封印された南宋陶磁展』朝日新聞社

二〇〇〇 『宋・元代竜泉窰青磁の編年的研究』『東洋陶磁』第29号

森本朝子 一九九四 『博多遺跡群出土の天目』『唐物天目』茶道資料館ほか

一九九七 『出土遺物の分類』『博多六〇』福岡市埋文調査報告書第五四三集

一九九七 『博多出土の貿易陶磁——その分類試案(1)——』『博多研究会誌』第五号

や

八重樫忠郎 一九九六 『平泉出土の輸入陶磁』『貿易陶磁研究』No.16、日本貿易陶磁器研究会

一九九六 『輸入陶磁器から見た柳之御所跡——内部地区と外部地区——』『中近世土器の基礎研究』XI

一九九七 『輸入陶磁器からみた平泉——分布傾向からの考察——』『貿易陶磁器研究』第17号

二〇〇二 『陶磁器が語ること』『白い国の詩』五五

安 英樹 一九九五 『(貝田遺跡3次) 遺物小結』『富来町貝田遺跡・貝田C遺跡』

矢田俊文 一九九一 『中世越後における集落の移動に関する一考察』『新潟史学』第26号

一九九三 『延徳三年細川政元の越後下向と越後守護上杉氏の饗宴の場』『環日本海地域比較史研究』第二号

一九九六 『明応地震と港湾都市』『日本史研究』四二二号

一九九八 『明応地震と太平洋海運』『民衆史研究』第35号

一九九九 a 『戦国期越後の守護と守護代——上杉房定と長尾為景——』『中世の越後と佐渡』高志書院

一九九九 b 『中世水運と物資流通システム』『日本史研究』418

八 峠 興 一九九八 『山陰における中世土器の変遷について——供膳具・煮炊具を中心として——』『中近世土器の基礎研究』VIII

二〇〇〇 「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」『中世土器の基礎研究』XV

二〇〇一 a 「因幡・伯耆における中世前期の貿易陶磁器」『立命館大学考古学論集Ⅱ』

二〇〇一 b 「柱状高台考」『中世土器研究論集』中世土器研究会 20 周年記念論集

柳原敏昭 一九九九 「中世前期南九州の港と宋人居留地に関する一試論」『日本史研究』四四八

矢部良明 一九七七 「宋代青磁の展開」『宋代の輸出陶磁 東南アジア』『世界陶磁全集 12 宋』小学館

一九八一 「元代の青磁」『世界陶磁全集 13 遼・金・元』小学館

山形県教委 一九七六 『昭和 48・49 年度山形県営農林事業関係遺跡』県埋文調査報告書第 6 集

一九八二 『豊原 B 遺跡発掘調査報告書』県埋文調査報告書第 32 集

山形県埋文 一九七九・一九九〇・一九九〇～一九九三 『藤島城跡』第 1～5 次発掘調査報告書、県埋文調査報告書第 25・159・160・181・193 集

一九九四 『藤島城跡 第 6 次発掘調査報告書』県埋文調査報告書第 18 集

一九九七 『荒川 2 遺跡』県埋文調査報告書第 43 集

二〇〇一 『落衣長者屋敷遺跡発掘調査報告書』県埋文センター調査報告書第 79 集

二〇〇四 『小田島城跡』県埋文調査報告書第 103 集

山川 均 一九九九 「居館の出現とその意義」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 9 集

山口久和 一九九四 「宋学の大成」竺沙雅章編『アジアの歴史と文化 3 【中国史—近世 1】』同朋舎出版

山田邦明 一九八七 「上杉房定」『新潟県史 通史編 2 中世』

山本信夫 一九九〇 「一・一二世紀の貿易陶磁器——一九八〇年代の編年研究を中心として」『大宰府における一三世紀中国陶磁の一群』『貿易陶磁

研究』No.10

一九九五 「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

一九九七 「新安海底遺物」『考古学による日本歴史 10』対外交渉、雄山閣

一九九八 「中世前期の貿易陶磁器 追加資料」『山陰における中世前期の貿易陶磁器』第 26 回山陰考古学研究会集會資料

一九九九 「九州地方の消費地遺跡から見た宋・元時代の龍泉窯青磁」シンポジウム『宋・元時代の龍泉窯青磁を考える』資料集、愛知

ゆ

弓場紀知 二〇〇〇 「中国の白磁展ノート」『陶説』第五六三号、日本陶磁協会

よ

横田賢次郎・森田勉 一九七八 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について——型式分類と編年を中心として——」『九州歴史資料館研究論集』4

横田賢二郎・森本朝子・山本信夫 一九八九 「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁器——森田勉氏の研究成果に寄せて——」『貿易陶磁研究』No.19

横田賢次郎 一九九七 「大宰府検出の井戸——とくに形態分類を中心として——」『九州歴史資料館研究論集』3

横山勝栄 一九九一 「山間地域的小型城郭」『中世の城と考古学』新人物往来社

一九九六 「越後北部山間集落の城郭について」『新潟史学』第三十七号

吉岡康暢 一九九一 「中世的食器組成の成立と時期区分覚え書——90 年シンポに寄せて——」『中近世土器の基礎研究』VII

- 一九九四 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 一九九五 「珠洲焼くその歴史と再興」 珠洲市
- 一九九七 a 「補論 埴と皿」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第11集
- 一九九七 b 「新しい交易体系の成立」 『考古学による日本歴史』 9 交易と交通
- 吉川町教委 一九八九～一九九一 『樋田遺跡発掘調査概報』 第1～3次
- 一九九四～一九九六 『寺町遺跡発掘調査報告書』 第1～3次
- 吉田町教委 二〇〇二 『北小脇遺跡・天神堂城跡・館屋敷遺跡・大橋遺跡』 町文化財調査報告9
- 四柳嘉章 一九九一 「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」 『石川考古学研究会会誌』 第34号
- 一九九六 a 「漆器考古学の方法と中世漆器」 『考古学ジャーナル』 四〇一
- 一九九六 b 「富山県梅原胡摩堂遺跡群出土漆器の科学的分析」 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書(遺物編)』 富山県文振財団調査報告第7集
- 一九九六 c 「新潟県水久保遺跡出土漆器の塗膜分析」 『北越北線関係発掘調査報告書』 県埋文調査報告書第79集
- 一九九七 「北陸の漆器概説」 『北陸の漆器考古学—中世とその前後—』 第1分冊、第10回北陸中世土器研究会資料集、石川
- 一九九八 a 「漆の考古学—その方法と近年の話題をめぐって」 『榑崎彰一先生古希記念論集』
- 一九九八 b 「第10回大会『北陸の漆器考古学—中世とその前後—』の記録と若干の補遺」 『北陸中世の金属器』 第11回研究会資料集
- 二〇〇〇 「新潟県中条町江上館跡出土漆器の科学分析」 『下町・坊城遺跡Ⅳ～B地点』 中条町埋文調査報告第20集
- 二〇〇三 「一乗谷朝倉氏遺跡出土漆器の科学分析」 『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要』
- 二〇〇五 「新潟県中条町古館館跡出土漆器の科学分析」 『町内遺跡Ⅵ』 中条町埋文調査報告第34集
- 二〇〇六 『漆Ⅰ』『漆Ⅱ』ものと人間の文化史131、法政大学出版局
- 李 知宴 一九八二 「龍泉青磁の発展と輸出」 『貿易陶磁研究』 第2号
- 歴民博 一九九八 『幻の中世都市十三湊—海から見た北の中世—』
- 若宮大路遺跡群発掘調査団 一九九七 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』
- 脇田晴子 一九八六 「中世土器の生産と流通」 『中近世土器の基礎研究』 II
- 一九九二 「物価より見た日明貿易の性格」 『日本史における国家と社会』
- 渡邊ますみ 一九九〇 「新潟県における古代・中世の井戸」 『新潟考古学談話会会報』 第6号

第二編 仏教考古学

本編は、「仏教考古学」と題して、越後を中心とした仏教系の遺物を扱ったものを集めた。ある特定の地域に仏教系遺物が集中している場所は、地域の霊場であるということができよう。もちろん、仏教以外にも神道があるし、陰陽道等を組み込んだ民間信仰も存在していたから、中世の人々の心をとらえたのは、そのみとは限らないが、それらは混淆することによって、互いに影響を与えてきた。ことに、死後の安寧にかかわって建てられた石塔は、古くは造寺からはじまったものが、不朽の素材とあいまって、特定の個人から、時間を経てある程度の階級まで広がって、それが布教・信仰の手段とされていったものである。しかし越後では、銘文の少なさから、死後にも自分の生きていた痕跡を文字として残したかったとは思えず、残されたものが菩提を弔うために供養したものであろう。そして石に梵字を刻み、五輪形を現したものは、空海がもたらした真言密教思想の大なるを思わずにはいられない。もちろん仏教諸宗自体は、鎌倉新仏教を含めて個々に異なった内容をもっているのであるが、強烈なカリスマ性をもつ教祖亡き後の教団の成長期には、死者への拠所となる造塔行為は、方便として広く行われたのであろう。あるいは、始祖の供養塔の造塔行為そのものが、重要な意味を持っていた場合もあったと考えられる。それがいかなる理由によって、板碑、石仏、五輪塔、宝篋印塔といった様々な形をとったのかについては、宗教者の選択であるのか、そこに領主の嗜好というものが介在する可能性があるのか、にわかに断じがたいところである。

ここでは、その基盤となる各種石塔類について行ってきた分布調査及び実測作業等を中心にして、その存在形態を明らかにすることを目的とした。ほとんどの石造物が紀年銘を刻まない越後の中世石造物の時期比定をその形態的検討から位置付けを試みたのが本編第三章の諸論文である。それらが妥当であるとすれば、そこから地上に残る考古遺物(地上資料)を文献資料と突き合わせて位置付けを与えることが可能となってくる。中世人が残した供養塔は、ただ古いモノというだけではなく、そこにどのような思いが込められていたのかということを解き明かしていかなければならない。

そして、それらに関連してくる葬送儀礼や法具類についての研究も並行して行ってきた。特に、伝世品が多い仏具について、出土資料からの検討を行い、その形態変化を追究したのが本編第二章である。

第一章では、越後阿賀北の霊場をとりあげ、地域ごとに供養塔の種類が異なることを指摘した。次いで御堂然とした建物の遺跡での確認例を示した。さらに領主墓の一例として韋駄天山遺跡の概要を述べ、その在り方を示した。最後に川辺での葬送儀礼を具現化する浦廻遺跡での事例をとりあげ、火葬でも土葬でもない葬送例を示した。これら霊場、寺院、墓、葬送儀礼といったキーワードについては、今後深化させていかなければいけない分野である。

第二章では、宗教儀礼に用いられた仏具について検討を加えた。基本的なスタンスは、かわらず、出土仏具を主要な資料として用いて論を展開した。第一項では、密教法具全般及び三具足について出土状況から時期を特定し、それぞれの法具の時期的変遷に迫ることができた。第二項では、鉦鼓をとりあげ、これも出土状況の検討や紀年銘資料から、鎌倉以降戦国期にかけて径が縮小していくことを論証した。そして、江戸時代に入って一四世紀代の作風を写すものが現れることも判明した。第三項では、日光男体山出土錫杖を検討し、その出土状況や鋳型の存在から、これまで奈良時代といわれてきたものが平安中期以降に下ることを検証した。また、錫杖と金剛鈴・金剛杵との技術的交流についても言及した。

第三章では、板碑、石仏、五輪塔、宝篋印塔といった中世石造物を取り扱った。

第一節の板碑では、北東日本海型板碑を設定し、その後の畿内型板碑への変遷を述べ、越後における様相を詳述した。第二項では、地域ごとの様相、造立年代、石材、銘文、種類、装飾等について、越佐の全体像をまとめたものである。その結果、越後の板碑は、阿賀北、魚沼に偏在しており、その中でも荘園単位で様相が異なることを明らかとした。第三項は、越後で最も板碑が集中している阿賀北の紀年銘板碑を図化し、蓮台相の変遷をまとめ

たものである。本論文によって、蓮台をもつ無紀年銘板碑の年代観を明らかにすることが可能となった。また、本地域に特徴的な墨書板碑についても注目し、それが回忌供養と密接な関係にあることを示した。そして第四項、第五項では、蓮台相から帰納した年代観をもとに、最密集地域である小泉荘加納の栗島及び本土部分の板碑の時期的分布を導き出し、その歴史的意義について述べた。そして同様の検討を奥山荘において行ったのが第六項である。この第四、六項の論考は、板碑を地域の歴史へと還元するための資料として用いる方法を模索したものである。本章の最後に付編として、頸城郡の板碑を紹介した。

第二節では、第一項で阿賀北の石仏についてまとめた。まず、形態から三種四類に分類し、その実測図を示し、各種類の分布状況を示した。そして、それらについて、北陸、畿内各地の様相から時期比定を行った。その結果、石仏の一部は、板碑と並行して造立が始まるが、その主体的時期は板碑が廃れる一五世紀以降に最も多く造られたことを明らかにした。そして、第二項では、第一項の石仏とは全く異なった様相をみせる頸城郡の石仏を紹介した。頸城郡の石仏には、平安期以来の大型丸彫りである関山タイプと、戦国期に特有の板状石仏がある。

第三節では、頸城に集中する五輪塔・宝篋印塔等を取り上げた。第一項では、紀年銘のない頸城の五輪塔の分布及び形態変遷から、時期比定を行った。その結果、頸城の五輪塔は、一四世紀初頭頃から造立が始まり、初期段階では、平野部の東側山裾一帯に分布が認められる。そして一五、一六世紀にかけて爆発的に造られ、分布も平野部はいうに及ばず、桑取谷等の谷間へも造立されるようになっていくのである。次いで、諸論考の基礎となった五輪塔、一石五輪塔の実測図を示し、併せて宝篋印塔等の実測図も提示した。そして頸城以外では珍しい新発田市の法音寺五輪塔の実測図を紹介し、最後に頸城の一七世紀代の様相の一部について述べた。

以上のとおり本章においては、石造物調査における実測図の重要性を提示してきた。学問的な検討に耐えうる実測図の提示は、考古学が得意とする分野であり、その基礎作業である。その上で各地の石造物を比較検討することが、望まれるのである。

第一章 墓地・霊場と葬送儀礼

1 越後国阿賀北の霊場


(1)はじめに

阿賀北の霊場については、中野豈任『忘れられた霊場』(一九八八)が著名であり、ここでもそれを参考にしつつ叙述を進める。以下、氏の論文は、上記文献からの引用である。

ところで、霊場とはどういう場所のことをさすのかというと、『国語大辞典』(小学館)では、霊場＝霊地とあり、霊地とは「神仏の霊験あらたかな地。神仏をまつてある神聖な地。また、神社や寺など。霊域。霊境。霊区。」とある。すなわち中世においては、寺社仏閣があるところということとなる。

すると、規模の大小はあれども、霊場がいたるところに存在していたことは間違いない、ここではそれらを順次とりあげてみたい。

(2)小泉荘加納

粟島の内浦湊の観音寺周辺で一四世紀代の板碑が「」基ほどみつかっている(第80・81図)。他に五輪塔、宝篋印塔、石仏などもあり、五輪塔の下からは珠洲製骨蔵器が出土している。板碑は、元来折り重なるようにまとめられていたということであり、現在の境内に林立する様子は、近年に整備が行われた結果である。

小野田政雄は、領主である色部氏の墓所と想定されたのに対し(小野田一九七二)、中野豈任は、色部氏が青竜寺を重要視していることから、より広い範囲の人々による観音補陀落浄土と考えた。そして板碑は、浄土信仰をもった地方の武士、先達、在家といわれる階級の人々のいずれかが造立したものとしている。

そうした中で筆者は、まず越後に存在する板碑の皆悉調査に着手し、所在地を明らかにした(水澤一九九四)。次いで紀年銘板碑の実測図を公にしつつ、大部分の無紀年銘板碑を連弁形式から時系列にならべられるのではないかという見通しを示した(水澤一九九七)。そして、粟島については、板碑全体を観察した結果、色部領内の岩船港(宿)にかかわる人々が板碑造立に主体的にかかわっていたものという結論を出した(水澤一九九九b)。なお、色部本領を含めた全体様相についてもまとめており、併せて参照願いたい(水澤二〇〇〇a)。

(3)奥山荘

石造物関係では、本間弼(一九六八)、小野田政雄(一九六八)両氏による研究があり、中条町史によって集成された(小野田一九九二)。ここでも筆者は、実測図を公にしつつ、荘園内における板碑様相からその背景を追究した(水澤二〇〇二)。その結果、同じ荘園内でも、家ごとに石造物の様相が異なり、嗜好が異なることが判明した。

中野は、大輪寺の所在地を中条家領鼓岡地内に比定し、その位置付けを、廻国聖による経筒及び熊野三山信仰と結びつけて理解した。熊野信仰については、重要な指摘であるが、大輪寺の所在地については、近年反論したところであり、現位置から動いていないと考えている(水澤二〇〇三・二〇〇五)。

なお、忘れてはいけませんが、阿賀北で最も古い由緒をもつ乙宝寺である。本尊は、平安後期の城家が将来した胎藏界大日如来で、阿弥陀如来、薬師如来坐像も伝わっていた(昭和一二一年焼失)。城家が一二世紀後半に中興して、舍利を納め、地域の霊場となったのである。境内には、板碑・石仏が散在しており、領主である黒川家から金銅玉幡・華鬘が施入されている(県指定)。

さらに黒川家では、蔵王権現を信仰しており、金銅鉢・懸佛・鰐口などを寄進している。

なお、発掘調査によって、中条総領家の一五世紀代の本拠地である江上館の南西200mの地点から、同時期の寺院がみつかり、出土した護摩炉や護摩杓などの密教法具から、密教寺院と考えられる(中条町教委二〇〇〇)。なお、その境内地からは、一六世紀後半の年号をもつ墨書板碑等が出土している。

(4) 加地荘

加地荘では、新発田家が滅亡したため文書が残っておらず、細かい様相が不明であるが、石造物の数量は県下でも有数であり、中野もそれらに注目している。筆者は、さらにそれを進め、石仏の多様性を提示したところである(水澤二〇〇二)。

なお、中野は、熊野那智大社文書に「越後国佐々木一族」を見出し、彼らの熊野信仰にも言及している。

その他、重要と思われるものに、岡田法音寺があげられる。本尊は、乙宝寺と対になる平安期の金剛界大日如来であり、越後城家が大きな役割を果たしたものと考えられる。境内には、板碑・石仏などとともに阿賀北では珍しい完存の五尺五輪塔が遺存しており、注目される(水澤二〇〇〇b)。

(5) 白河荘

中野は、その信仰の中心地である五頭山の修験と出湯の華報寺について、製鉄遺跡や石造物などから検討しており、熊野、法華経、浄土信仰、時宗、禅宗などの信仰の存在を推測している。そして華報寺の周辺には、蓮台野とよばれる地点があり、大量の石仏を中心とする石造物が出土しており、石仏工房が存在していたのではないかと思われる(水澤二〇〇〇b)。なお、寺裏の墓地には、塔身を欠くものの鎌倉期の宝篋印塔が遺存しており、地頭の大見氏の関与が考えられるところである。

(6) おわりに

中野は、阿賀北各地で熊野信仰を取上げていることから、阿賀北にはかなりその信仰が根付いていたと考えられよう。そこで思い当たるのが、吾妻鏡文治四年(一一八八)九月一四日の城長茂に関する記事である。長茂は、頼朝が帰依する熊野の定任僧都と師檀関係にあったと記されており、その信仰が越後城家の時代である一二世紀代に遡ることは注目されてよからう。

また、出土仏具からみて、かなりの程度密教及び浄土系信仰が浸透していたこともうかがえるところである(水澤一九九九a)。

2 越後の仏堂及び周溝建物

(1) 仏堂(第82図)

① 三島郡柏崎市田塚山遺跡群B地区(柏崎市教委一九九六) 第二二五号建物

低丘陵上から本堂と庫裏及び両者をつなぐ廊下がみつかっている。本堂は三間四方の外陣に一間四方の内陣が置かれ、四周に縁がめぐり、縁は北東の角が詰められており、鬼門との関連が説かれている。下限は、一三世紀後半。

② 北蒲原郡中条町下町・坊城B地点中条町教委二〇〇〇) 第三三三号建物

平地に溝で大きく区画された寺地がみつかった。仏堂は、七×三間の礼堂(外陣)の中央に二×二間(あるいは二×一間+後戸)が配置され、四縁がめぐり、東方の礼堂の柱間が一間短いことから、増築された可能性がある。周囲から護摩炉や護摩杓(大約)などが出土しており、密教寺院の御堂と考えられる。時期は、一五世紀後半。

このように越後では、はっきりと仏堂とされる建物があり、今後の調査に期待したい。

(2) 周溝建物(第83・84図)

ここでは、周囲を溝で囲まれている建物を、周溝建物とする。墓などの可能性もあり、周溝規模の違いによって性格が異なるものと思われるが、一括しておく。荒川一九九三参照。

③ ④ 北蒲原郡新発田市宝積寺館(新発田市教委一九九〇) 建物一・二、五

堀に囲まれた平場の館内に約二三×二四mの周溝を巡らし、中央に桁行五間の建物一・二が三回にわたって建て直されている。周溝は、南東部が途切れており、この部分が入り口と考えられる。ここでは、入り口内側のピット2基を門柱とし、方位や位置関係から建物一二や土坑一一八は、別時期のものと考えておきたい。本遺構は、一四世紀代のものと思われる。

建物五は、建物一・二の北東に位置し、周溝の切り合いから建物一・二に後続するものである。中央に二一×一一mの周溝が認められ、さらに外側に一五×二〇mの周溝を巡らせているが、外側の周溝は二箇所で途切れている。一五世紀前半。

⑤ 南蒲原郡見附市三ツ塚遺跡・片桐遺跡(見附市教委一九八四、一九八六)

東福寺の所在伝承や塚群・銅製花瓶等の出土から、寺院があったと考えられる(安藤一九九六・一九九七・二〇〇〇)。周溝建物は、片桐塚群で三棟、三ツ塚遺跡で一棟みつかっており、二重のものもある。塚との関係も考えられる。一五世紀代。

⑥ 北蒲原郡中条町下町・坊城B地点(中条町教委二〇〇〇) 第三六号建物

先の仏堂の前段にあたる一五世紀中葉の遺構で、一×一間の小規模な建物である。周囲が五×六m(外幅)の方形溝で囲まれており、祠や持仏堂等の性格を考えている。周溝は南東隅から東へ、そして北へと延長されている。

⑦ 頸城郡上越市保坂遺跡(上越市教委一九九八) 2区

自然堤防上の平場に位置しており、九m強及び五mの二重周溝に囲まれた三m四方の区画地が認められた。さらにその両脇(東西)にも溝が巡らされ、そこに小規模な建物が設けられていた。礼拝所等の性格が考えられよう。なお、本遺構群の後、南東部に七mの周溝が穿たれており、五輪塔の火輪が集積されていた。本地点は、墓地内の様相が知られる良好な事例であろう。時期は、一五世紀後半となる。このように、区画された小空間に建てられた周溝建物は、宗教関連の建物であった可能性が高い。

3 韋駄天山遺跡・奥山荘北条の中世墓地

(1) 韋駄天山遺跡の現在

新潟県胎内市平木田地内(第88図)に所在する韋駄天山遺跡は、平成六年三月三〇日付けで国指定史跡奥山荘城館遺跡の一つとして追加指定され、整備・活用を待つばかりとなっている。

出土遺物の一部は、平成一四年にオープンした奥山荘歴史の広場(江上館跡)のガイダンス施設である「奥山荘歴史館」に展示され、ようやく目のみている。

ここでは、整備に併せて整理を実施した出土石造物についての全容を報告し、韋駄天山遺跡の現状を提示し、今後の整備に資したいと思う。

(2) 韋駄天山遺跡の発掘調査

韋駄天山遺跡は、早くも昭和二九年(一九五四)に発掘調査が実施されている。担当者は、当時国学院大学考古学研究室の小出義治で、乙村教育委員会が調査主体であったが、実情は平木田部落を中心とする有志が主体となって推進したものであった。発端は、その三月に宝篋印塔の相輪が発見され、さらに珠洲壺(骨蔵器)が掘り出されたことにあった。

調査期間は、昭和二九年八月一二〜一八日の七日間で、五月には中川成夫(東京大学)が現地を視察し、十一月には大場磐雄氏(国学院大学)による講演会なども実施された。

さらに、韋駄天山遺跡保存顕彰会が設立され、昭和三〇年四月一七日には、現地で納骨式が行われ、七重層塔(池上年による復原)・板状一石五輪形顕彰碑が建てられた。また翌三一年には、韋駄天山遺跡記念碑も設置された。

ただし、発掘調査報告書は、昭和三一年の乙村と中条町との町村合併及び主導者の渡辺栄三郎氏の逝去によって頓挫し、さらに小出氏宅の冠水によるデータ類の流失が重なり、ついに刊行されずじまいとなってしまうている。

そして韋駄天山遺跡発掘調査に関する基本文献に、『おくやまのしやう』第八号(中条町郷土研究会、一九八三)の巻末に付された「特集 韋駄天山」がある(一)。当時を知る縁は、その「韋駄天山墓地発掘写真集」(斎藤正治氏所蔵写真及び説明文)六頁と斎藤正治「韋駄天山回顧」などによる他は無く、本稿の発掘経緯や調査状況についての記述もそれらによっている(以下引用は、回顧〇頁とする)。

回顧及び現地踏査によって、当時の発掘状況を再現してみると、墓域は東西二〇メートル、南北三〇メートル、幅一メートル余の楕円形周溝(現存、(二))によって区切られた二二メートル×二〇メートルほどの丘陵頂部の平坦地に営まれていた(第87・88図)。

その北よりの部分には、径七メートル程の葺石で覆われた範囲があり、中央に大型の層塔が建てられていた。さらにその前方(南)の溝の内側には、径一・二メートル程の小型葺石群が数箇所認められたとされる。

なお調査は、主として墓地の中央、長径に沿って設定した一幅のトレンチ調査であったとされている(回顧一二頁)が、トレンチ位置図及び写真さえ残っていない状況であり、そのわりに骨蔵器が二点も出土していることなどから様相が不明確である。したがって、近い将来に再発掘によってどの部分が調査されたのかを確かめたいと考えている。

(3) 出土遺物

昭和二九年に出土した遺物は、以下のとおりである（回顧11～12頁）。珠洲ロクロ壺2点、層塔残缺、宝篋印塔残缺（相輪9点）、板碑1基、渡来銭7枚、青白磁合子1点、鉄製骨蔵器1点、人骨炭がますに一俵半ほど。

これらの内、銭六枚・青白磁合子・鉄製骨蔵器の所在が不明で、人骨は現地に収められた（回顧10頁）。また、特に砂岩製の石塔類は、五回にもわたって遺物の保管場所が変わった（回顧13頁）ため、非常に破損がひどく、みるも無残な姿となってしまうている。着任以前のことはいえず、誠に遺憾である。以下、石塔類、珠洲製骨蔵器の順にみていきたい。

① 石塔

石塔の種類には、層塔・宝篋印塔・板碑がある。

a 層塔（第89・90図）

層塔は、砂岩製のものと花崗岩製のものがある。

砂岩製のものは他に比して大型であるが、材質から破損が激しい。しかもこの破損が移動に伴うものであったことは、返す返すも勿体ないことである。

初軸1は、高さ45cmで、上辺が41cm、下辺が45cmを測る。上下に貫通しており、上方は18cm角の方形孔が、下方は29cm角の方形孔が認められる。内面には、鑿の痕跡が顕著に認められる。さらに29cm×20cm以上、厚さ9cmほどで上面が1.5cmほど刳られている板状材1があり、これが軸部の底部に嵌め込まれていたのではないかと考えられる。この軸部は、地表下40cmから発見されたという（回顧写真10）。

最下層の屋根2は、高さ24cmで軒幅65cmを測り、高さ7cmの軸部が付されている。本製品も上下に貫通しており、上方は径7cmの円形孔となり、下方は21cm×22cmの方形孔が認められる。上の軸部同様内面の鑿跡が顕著である。

さらに全形がわかる屋根3は、高さ13.5cmで軒幅16cm、高5cmの軸部が加わる。上面は平らで、下方には一辺10cm方形で1cmの刳りが入れられている。

相輪4・4は、6点以上にバラバラになっており、全体高は不明である。径は、15～17cmで、最下部に径8cmの突起が彫り出されている。ただし九輪は、間を平らにするものと、そろばん玉形に削り出すものがあり、下部の突起が二個あるので、二個体存在していたらしい。

その外に少なくとも軸部下端が20cmとなる屋根が一点認められ、相輪の突起を受ける孔を有する最上層の存在と併せて五重塔以上の層塔であったことが推測され、池上年氏が七重塔とされたのも故なしとはいえない。相輪は、後補されたものであろうか。全体高は、優に二メートルを越えるものと思われる。

花崗岩製のものは、屋根が五層認められる。

屋根が10cm以下の5・6と10cmを越える7・9がある。軒幅は23cm～27cmの間に収まる。

5・6は、同質の花崗岩で、形状から同一個体と考えられる。

7・9は、それぞれに岩質が異なり、共に相輪を受ける孔を有することから別個体と考えられる。したがって、花崗岩製の層塔は、四個体が認められる。

なお相輪は、後述する宝篋印塔の相輪と同工のものが用いられていたと考えられ、区別できない。

b 宝篋印塔（第91・92図）

砂岩製のものと花崗岩製のものがある。

砂岩製のものは、上方六段で下方二段の笠が一個体と相輪四個体以上(二)が認められるが、破損が著しく図示できなかった。

花崗岩製のものは、相輪16点以上、笠4点、塔身1点、基礎3点(四)である。

相輪は16点中、少なくとも4点が層塔の相輪と考えられるので、宝篋印塔の数は、12基以上といえる。完形は10点あり、高さは25～27 cm(下部の突起を含まず、以下同じ)が4点、28～30 cmが4点、34 cmが1点(13)、45 cmが1点(14)ある。鎌倉期のものに比してかなり形骸化が進んでおり、請花に蓮弁を刻むものはなく、九輪も三もしくは四条の沈線で表現するものがほとんどで、まったく刻まないもの(13)やえある。

笠は、上部の段が五段のもの1点(17)、四段のもの1点(16)、三段のもの2点(15)で、裏面は段を刻まない。下段は二段三面のもの(17)や、二段正面及び脇数cmのみ二段に刻むもの2点(16)、斜めに削るだけのもの(15)がある。

塔身は、高さ16.5 cm、幅18 cmで、正面にキリク、向かって右側にサ、左側にサクを刻み、阿弥陀三尊を表している。裏面は、未加工のままである。

基礎は、高18～24 cm、幅24～28 cmを測る壇上積式である。上部には、形骸化した複弁の反花が三弁半ずつ巡らされ、中位に方形の輪郭が設けられている。ただしこの輪郭は、裏面には刻まれず、下方も粗仕上げで終わらせている。

以上、本宝篋印塔は、非常に形骸化してしまっているが、基礎の形態から一応関西形式の流れを汲むものと考えておきたい。また、相輪の法量から、四尺五寸塔・三尺塔が一基ずつで、外は二尺五寸前後の小型宝篋印塔であったことが想定される。

c 板碑 (第91図)

板碑は、一基のみ出土した。水色を呈した安山岩製で、器高101 cm、最大幅32 cm、最大厚23 cmの方柱状を呈している。上半やや下方に、縦29 cm、横21 cmの方形外面線を刻み、内部に月輪を伴うキリクを配している。さらに下方に斜め上からみた蓮肉をあらわした蓮座を刻み、下方外面線から上9 cmのところにも一部横位の区画線を入れている。この外面線は、北越後ではほとんど認めることができないが、黒川領に四基が遺存している特殊なものである。また、蓮弁上に細く浅い縦線を刻んでいることも特徴的である。時期は、一四世紀前半代の所産と考えられる(水澤二〇〇一)。

②骨蔵器 (第93図)

11点出土している骨蔵器は、すべて珠洲陶のロクロ成形小壺で、10点が図化されている(戸根一九八二、第1図)(五)。口径8～11 cm、器高19.5～23.5 cm前後で一点が瓶子様を呈し、一点は肩に九弁の菊花紋スタンプが二つ捺されている。これらは、三点がIV期後半(一四世紀後半)、7点がV期(一五世紀前半)の所産とされている(吉岡一九九四、第29表)。なお、鉄製骨蔵器も一点出土したとされている。

なお、これらの壺の一部には、珠洲挿鉢が蓋として用いられていたものがあつたらしい(回顧写真3)。一点のみ残されていた挿鉢の口縁部片を示す(11)。口縁端部の内傾が顕著で、波状紋が施されている。明らかにV期末期の所産であり、V期の小壺に伴うものと考えられる。また口縁端部が擦られており、使用されていたものを転用したものと考えられる。

(4)韋駄天山中世墓地の景観復原

以上の二・三から、当時の墓地景観を復元してみよう。

まず地表面は、不明瞭であるが、葺石の範囲が把握されていることから、部分的に石が敷かれていたようである。

石塔の配置は、北方葺石中央に砂岩製の大型層塔が建てられていた外は不明であるが、周囲には花崗岩製の小型層塔4基、砂岩製の宝篋印塔4基、花崗岩製の宝篋印塔12基、安山岩製の板碑1基の21基以上の石塔が所狭しと林立していた様が想定される。

なお、造られた順序は、まず大型層塔が一四世紀前半に建てられ、引き続き砂岩製の宝篋印塔及び板碑が置かれ、一四世紀後半～一五世紀前半にかけては花崗岩製の層塔・宝篋印塔が造立されたという流れが想定される。

次いで地下遺構であるが、図面類が現存しないため、手掛かりは「二」個体の骨蔵器のみである。これらは、中央を南北に横断するトレンチ内（幅不詳）から出土したと一応は考えられるが、小葺石群が確認されながらその下部に手が付けられなかったかどうか。また、石塔の下から出土したのかどうかははっきりしないが、時期的には花崗岩製石塔に伴うものと考えられよう。

そして部分的には、今後の調査で明らかにすることが可能かと思うが、記録類の亡失は致命的で、石塔類の出土位置がわからないことや、発掘後に復元的な環境整備？が行われている（六）ことから、当時の正確な状況を復原することは、極めて困難と思われる。

また、周溝の外側の北方及び西方に階段状に認められる腰部様の平場についても、後世のものなのか、中世墓地に伴うものなのか今後の調査に負うところである。

（5）韋駄天山遺跡の来歴

さて、韋駄天山が近世以前において「村上山」とよばれていたことは、高橋亀司郎によって明らかにされている（高橋一九八三）。

この村上山（村）は、いくらかの中世文書に記されているところであり、所属地域の特定に関して次の二点の文書がある。

一点は、正応五年（一二九二）の「四三 越後国奥山庄一分地頭和田茂長代・同国荒河保一分地頭河村秀通等代連署和与状」〔中条町史〕資料編第一巻二四八頁）で、「和与 越後国荒河保与奥山庄堺事」と題する文書である。関係部分を抄出すると、「右件の堺者、（中略）自件曲目至村上山北麓与蓮妙之非人所南垣根之中間、自件中間之傍示」となり、荒河保と奥山庄の堺が村上山北麓と蓮妙非人所の南垣根の間を通り、中間には傍示があったことが記されている。

もう一点は、元徳三年（一三三一）の「一〇〇 海老名忠顕・和田茂実和与状」〔中条町史〕資料編第一巻二八九～二九〇頁）で、「和与（中略）越後国奥山庄内山上・江波多自河北・村上・山野以上肆箇村地頭職以下堺事」と題され、「次村上山堺事東者切田名、西者山野村法蓮屋敷堺之、南者江波多、北者荒河保限之」と記されている。

以上の二点の文書から、村上村は北方の荒河保と堺を接する奥山庄北条内の村であり、村上山はそのほぼ北限に位置していたことがわかる。

そしてその村上山は、中世には墓地となっていたのである。中世の墓地が、境界の地に営まれたのは周知の事実である。韋駄天山中世墓群は、まさに荒河保と奥山庄の境に位置していたのである。

また、その立地は、平野部に起立した独立丘陵であり、「勝地」であったということができよう。西隣の丘陵の方が13～15メートル高かったにもかかわらず東方の丘陵先端が選ばれている（七）ことからわかるように、明らかに荒河保との境界を意識したものであった。

さらに村上山は、傍示を挟んで「蓮妙之非人所」に相對しているのであり、彼らが葬送行事に關係していたことも想定されよう。

このように、韋駄天山遺跡は、結界の地に位置しているのであり、奥山庄北条を守る役目も果たしていた墓所であったのではないかと思われる（八）。

（6）まとめ

以上現状把握できる韋駄天山遺跡の様相を提示してきた。最後に造墓主体を推定して、稿を終えたい。

まず、そこには、大型層塔を中心にして周囲を多数の小型層塔や宝篋印塔が取り囲むという景觀が認められた。それらは、周溝で区切られた墓地の

規模から察して、一族墓と考えられる。そして、一四〜一五世紀代という遺跡の存続時期に遺体を茶毘に付し、石塔を伴う造墓行為を継続して行える主体としては、右にみてきたように村上村の領有関係が決した元徳三（一三三一）年以後の国人領主黒川氏の存在が浮かび上がってくる。

右の理由から韋駄天山中世墳墓は、黒川家代々の墓所であったと想定しておきたい。詳細は、今後の調査にまっとうところが大きいが、中世の支配階級の遺した一墓地の現状把握に努めた。今後の史跡整備の糧となれば幸いである。

註

(一) 同源によって記されたものとして、戸根一九八〇、一九八二、水澤一九九四、二〇〇〇等がある。就中、戸根一九八二年文献には、珠洲壺製骨蔵器一〇点の実測図が、拙稿二〇〇〇には、板碑の実測図が提示されている（ともに後掲）。

なお齋藤氏には、「特集」以前にそのダイジェスト版の報告がある（一九六六・一九七一）

(二) 略測によって現存する周溝規模を補正したが、略図には東西 10 m、南北 20 m とあり、非常に掛け離れているので、あるいは二重に周溝が巡っていたのかもしれない。

(三) 水澤二〇〇一では、砂岩製相輪の宝珠く請花部分を細片化していたため、五輪塔の空風輪と誤認してしまった。しかし改めて整理してみると、五輪塔の外の部分が確認できないことから、それらは宝篋印塔の相輪と考えるのが妥当であるとの結論に達した。したがって、本稿をもって訂正する。誠に粗忽さを恥じ入るとともに、混乱を生じさせたことをお詫びする次第である。

(四) 基礎は全部で4点保管されていたが、一点は中条町大字羽黒字極楽寺からの出土品という（回顧写真9）。

(五) ただし図の縮小率は、示されているスケール（1/3）と一致しておらず、1/4よりやや小さくなっているので注意が必要である。

(六) 善意に発していることであるから、責めることはできないが、せめて盛土されていることを祈りたい。

(七) 全体名称が「韋駄天山」であるが、個別的には西側の韋駄天山神社が鎮座していた山が「韋駄天山」で、東方北側の遺跡所在地が「五輪山（ごり山）」、その南方が「籠ほろぎ山」とよばれていた。なお、最も大きい「韋駄天山」丘陵は、昭和五〇年代に土取りによって消滅してしまった。

(八) 石井・萩原編一九九三での伊藤正義氏の発言（282〜283頁）を参照。

補註 韋駄天山遺跡は、その後、確認調査及び整備事業を経て、平成一八年度より一般公開している。詳細は、中条町教委二〇〇四を参照のこと。

4 浦廻遺跡にみる地表葬

(1) 立地及び遺物包含状況

浦廻遺跡は、信濃川の沖積低地に位置している(第34図)。堆積層から知られるように川成り・滞水をくりかえすような場所に立地しており、住居にかかわる遺構は存在していない。このような立地環境でありながら、否、あったからこそ本遺跡からは、葬送にかかわる遺物群が大量に出土したのである。

中世遺物の多数が出土したのは、Ⅷ層であり、本層の珪藻化石分析から当時の環境は、沼沢湿地であったことが判明している。そしてそのほとんどは、調査区南端の西寄りの川辺から出土している(第36図)。この低み部分は、大きくみれば中之口川の旧流路にあたるといえよう(第35図)。

(2) 浦廻遺跡における骨とその出土状況(第37・38図)

人骨についての詳細は、藤田尚の報文(藤田二〇〇三)に基づく。人骨としては、壮年男性のもの2体(骨1・6号)、6―7歳の小児1体(骨5号)、その他成人骨数体分で併せて72点がみつかった。腕骨及び脛骨に刃物等の傷跡を残すものがある。

これらは、解剖学的に正常な位置関係を示しておらず、通常の埋葬とは異なるという所見が出されている。ここから本遺体の中には、本位置に運ばれた段階で腐乱していたために置かれたときに肉がちぎれたものや、切断されたような不自然な遺体が含まれていた可能性があろう。ただし、研究会上で図示した骨の出土状況についての鶴澤和弘のタフオノミー(埋蔵の法則的見地による指摘によれば、水流等による大幅な移動は認められないということであり、川本流ではない川辺に置かれていたと思われる。

また、本文にふれられているように、骨1・6号は犬による噛み痕跡(パンクチャー)をとどめており、犬が屍肉を漁れるような環境、すなわちなんら埋葬されずに地表面に放置されたような状態であったと考えられよう(もちろん藎等がかけていた可能性等を否定するものではないが、発掘時には残らないため、不明)。

獣骨は、181点の犬の骨と1点の鳥の骨がみつかった(堀川二〇〇三)。犬の最小数は、4個体である。

犬骨は、人骨よりやや陸地側の東寄りからの出土が多いように思われるが、骨5号の小児骨はさらに東方からの出土であり、図示された以外の人骨・犬骨の個別分布が報告書に記載されていないことから、現状ではなんともいえない。ただ、人も犬もなんら区別なく出土しているようである。

(3) 浦廻遺跡の骨以外の出土遺物Ⅱ木製品

ここでは、木簡、漆器、その他の木製品にわけてみていく。なお通常、遺物の中心となる土器・陶磁器類は、柄杓の底として用いられていたであろうね成形土器が1点出土したのみである。水に浮かぶ木製品とその場に沈む陶磁器類では、廃棄地点が同一でも出土地点が異なるということも考えられる(戸根二〇〇四)が、骨の一部については、移動があまり認められないという学的所見(鶴澤教示)を参照して、これらの遺物は一定度のまとまりを持つものと考えておきたい。あるいは川辺の葬送の場に土器がなくて当然とも考えられよう。ただし、層位的所見では、水流の認められるⅧb層(砂層)に挟まれた間の滞水(粘土層)あるいは湿地状(腐植土層)となっていたⅧy・z層から大量の遺物が出土しているのであり、水流があつた時期の遺物は、より下流へと運ばれていったと考えるべきであろう。

① 葬礼木簡(第 99～101 図)

ここでは、文字の認められる 66 点について、前嶋敏の整理を基にみていく(前嶋二〇〇五)。

①梵字バンに法華経の一節や南無阿弥陀佛、南無大日如来などを記したもの。②梵字ア+急々如律令などを記したもの。③符籙+急々如律令や五芒星を記したもの。④頭部を黒く塗りつぶすもの、南無大日如来や「元應二年十月」銘を記すものがある。⑤南無阿弥陀佛、南無大日如来など文字のみを記すもの。⑥法華経を記した柿経。⑦人面十五芒星などのみで文字がないもの等が認められた。

④の元応二年(一二二〇)銘木簡は、本遺物群の少なくとも一部は一四世紀第 1 四半期に位置づけられることを意味する。なお、遺物の多くが含まれていたⅧ y 層の放射性炭素年代は、骨 5 号人骨の歯が一二七五・一二九五(100%)、木片が一二九五・一二二一〇(32.4%)・一二五五・一二八五(67.6%)であった。

ここで注目されるのは、本遺跡から 4 km 離れた同時期の紀年銘木簡を出した集落遺跡である馬場屋敷遺跡下層(白根市教委一九八三)から出土した呪符木簡 15 点中 7 点を占める「蘇民将来」札が、本遺跡から出土していないことである。いうまでもなく蘇民将来は、無病息災を祈るものであり、死者を弔う場であった本遺跡では必要のないものであったために用いられなかった、ということとなろう。

② 漆器(第 102 図)

20 点出土しており、器種は皿が 1 点、盤が 1 点、椀が 13 点、片口鉢 2 点、盆 2 点、大鉢 1 点である。3・6・10 は、やや古手の様相を呈し、11・12・19 は内面赤色で、13～18 は漆絵を描くものである。

碗が主体であること、青磁Ⅲ類写しの盤(9)や碗皿以外の器種があることなどが特徴的である。塗膜分析が実施されていないため、個別の品質は不明であるが、椀の半数ほどは高級品のケヤキを用いていることや特注品の青磁写し盤、内面赤色盆等の存在などから考えて、かなりの元手がかかっていると想定される。

そして、越中から越後にかけての中世前期の土葬墓(屋敷墓)には、漆器特に椀を供える場合が多いことから、これらも葬送に伴うものであったと考えることができよう。

③ その他の木製品(第 102 図)

祭祀具では、刀形・陽物形・箸状木製品・杓子、火鑽板などがあり、容器としての曲物・箱物・折敷、その他行火・扇・鞘・下駄・草履芯・遊戲具などがある。

箸状木製品は、1000 点以上の出土があり、全出土遺物の半数近くを占めている。この手のものは、祭祀遺物と考えられており(畑二〇〇六)、本遺跡でも人骨に伴うものがある(第 97 図)(補註)。

これらの祭祀具及びおそらく供物などを入れた漆器を載せた 10 点以上の折敷の存在は、葬礼木簡の存在と併せて葬送儀礼に伴うものであろう。もちろん曲物や箱物は直接供物を入れた容器であったと考えたい。遊戲具の竹とんぼ、扇、鞘などは故人の持ち物であったろうか。

(4) おわりに

前節でみてきた各種木製品の出土から、これらは出土人骨から帰納される遺体の葬送にかかわるものであると考えられよう。

そして葬礼木簡の書風には経費がかかっているという矢田俊文(註)や前嶋敏の指摘(前嶋二〇〇五)、木製形代や豊富な漆器の存在からみて、これらにはかなりの財が費やされているといえよう。

このようにみることが妥当であるならば、この一見遺棄されたような人々は、決して単に打ち捨てられたのではないこととなる。たとい川による浄化作用に遺体を委ね、犬と葬送場所を共有していたにせよ、犬とは異なった扱いがなされていたと考えることができよう。

本時期(鎌倉後期)の越後の墓制は、ごく少数の屋敷墓といわれる木棺墓や盛土をもつ塚墓(墳丘墓)があるのみで(品田一九九四、水澤編二〇〇六)、その他の大多数の人々の遺体処理方法は、不明といわざるをえない。したがって、地下に痕跡の残らない葬送としては、水に流すのが最も手っ取り早い方法であったと考えることができよう。もちろん、ただ流すだけではなく、応分の葬送儀礼を行った階層は存在していたのであり、それが今回の浦廻遺跡での事例ということとなろうか。

よってこのような葬送方法に対しては、水葬とよぶべきであろうが、その場で流すことを意図していなかったと思われるため、じっくりこない。いずれにせよ、野に置いてくる方法を含め、「遺棄」という言葉は、葬送名としてふさわしくない。遺体を骨にする方法として、土に埋めるのを土葬、火で燃やすのを火葬というのであれば、日の下に晒す日葬、あるいは地中に対して地上葬とでも呼ぶべきであろうか。もちろん地上と一言にいつても、遺体を地表に置くだけの地表葬、あるいは火葬に付された骨を撒く散骨葬、寺院や霊地の骨堂などに納骨する納骨葬(これらは火葬した後に行うものが多いので一義的には火葬に属する)、特殊な例としてミイラとして信仰対象に付されるものなど多くの葬法があるが、中世以前の大部分の人々は地表葬というべき方法によつて遺体を自然に帰していたと考えておきたい(表27)。

原註

平成一五年二月二七・二八日に実施された平成一四年度新潟県埋蔵文化財専門職員実務研修における講演「中世考古学と文献史学」及び調査者の本間克成の事例報告「浦廻遺跡の調査概要」に対する矢田俊文の発言

補註

県内では、新発田市砂山道下遺跡での箸状木製品的大量出土が注目され(新潟県教委二〇〇六)、ここでも浦廻遺跡同様土器類を伴わないことに特徴がある。

第二章 仏具

1 密教法具考―出土仏具―

(1)はじめに

これまでの仏具研究は、主に大寺院などに所蔵されている伝世資料を中心に行われてきたといえよう。それらは、豊かな成果をもたらし、大きな流れがとらえられている。しかし伝世品は、ピラミッドの頂点に位置するものであるが故に、実際に各地で出土する仏具類と趣を異にするものも多い。また、石造物などとも共通することであるが、多数の普及品が存在する中世後期の仏具は、平安・鎌倉から衰退したものとして一括され、それを具体的に論じた考察は、ほとんどないといっても過言ではない。

そのような折、その渴を癒してくれたのが、立正大学考古学会の『考古学論究』第五号の「出土仏具の世界」特集であった。坂詰秀一は、その巻頭において、仏教考古学的立場における不十分な分野として「出土仏法具に対する研究」を挙げている（坂詰一九九九）。その個別の仏具研究についての研究史は、山川公見子が同書においてまとめている（山川一九九九）ので参照願うとして、ここでは出土資料を基にして、考察を試みたい。

(2)研究小史

ここでは、密教法具についての到達点といえる研究成果を二点取り上げる。一つは、石田茂作「密教法具の研究」『密教法具』（一九六五）、今一つは、それを受けた岡崎譲治「密教法具」『仏具大事典』（一九八二）である。それまでの講座や概説書類では、簡略な説明がなされているのみであったが、それを具体的に詳説されたことで検証への道が開かれた。

そこで、一般的な器種であり、かつ出土事例の比較的多い金剛杵、金剛鈴、火舎、六器、飯食器、花瓶の形態変遷をまとめたのが表28である。なお、表中の太字は、岡崎が石田の成果に新たに加えた事項である。

一見して、室町期以降の記述が弱いことが知れよう。そしてそこが本稿の動機である。

(3)出土密教法具（第103～105図）

以下では、図化されている資料を用いて、研究史との整合性を検証する。

本来は、全体を出土資料で検討するのが望ましいのであるが、一部伝世資料を用いる。検討する密教法具としては、金剛杵、金剛鈴、花瓶、飲食器、六器、火舎とする。なお、次章以下で関連する三具足及び金剛杵（鈴）と一体的に理解する必要があると思われる錫杖頭を扱う。

なお各図に用いた実測図は、原著に当たり得ることができた参考文献に挙げた報告・論文以外は、『密教法具』（一九六五）、『仏具大事典』（一九八二）及び『考古学論究』第五号所収図版より転載した。

またいうまでもないが、出土品はあくまで埋納もしくは廃棄年代を示しているのであり、かなりの伝世期間を考慮に入れなければならない場合がある点で、焼物類よりかなり注意が必要であり、それぞれに検討が必要である。とはいうものの、全部に当たすることは全く能力を超えているので、その場合は『考古学論究』第五号所載の「出土仏具地名表」の年代を採った。

①金剛杵(第103図)

1・9は、独鈷杵である。表28のとおり、時期が下るにしたがって鈷に対する把の比率が増大するものと思われる。

1・2は、時枝努によって室町時代に位置付けられている(時枝二〇〇三)が、鈷の比率が非常に長大で、鈷の本来の形状に近いのではないと思われる。また鈷面が匙状になっていることも古い時期の特色を示しており、日光男体山山頂遺跡出土独鈷杵の中でも最も古くに位置付けられよう。

4の松野千光寺経塚出土品の時期である一二世紀前半代では、鬼目が厚みを増し、鎌倉期ではまゝ認められる珠紋帯の存在からみて、次代への胎動がみられる。また、鈷の節に紐帯が廻らされているのは、一二世紀代の特徴といえるのではないかと思われる。類例としては、日光男体山山頂遺跡で三例ほど、京都の花背別所山第二号経塚出土品などがあり、鈴の4・5などにも同意匠が認められる。

鎌倉期の5・6にかけては、把が重厚で比率を高めて鈷を上回るようになる。6は、鈷の節に紐帯を廻らせる最新例であり、鎌倉でも最初期の所産と考えておきたい。

その後の様相は不明瞭であるが、把が張りを失い、7のように鈷先が丸みを帯びてくる。

三・五鈷杵(鈴)についても独鈷杵に準ずるが、脇鈷について述べる。最も古手の一群に全体が大きく屈曲する素紋のもの(鈴4・5)や錫杖と通じる金剛牙をもつもの(10)があり注目される。錫杖の変遷(後述)を考えると、屈曲(素紋)のみのもの、屈曲部を避けて金剛牙が付されたもの、屈曲部に金剛牙が付きそれが嘴形突起へという流れが想定される。嘴形突起は、平安後期に一旦小型化し、鎌倉期に大型化し、以後徐々に形骸化していく。

また、室町期以降、脇鈷は融着するようになり、細く稜が目立たないようになる。大きさも小型化していき、室町後期で一〇cm内外、江戸期には一〇cm以下に矮小化している。

②金剛鈴(第103図)

知りえた中では、特殊なものを除き、出土品の一二世紀代の器高は一二cm前後のものが主体を占め、鎌倉期には一七cm前後に大型化し、室町期に一五cm以下に縮小するようである。次いで、杵部分については、前項ですでに述べたので、鈴についてみていく。

鈴の全体比率は、鎌倉期に縁が張り出すため径高比が偏平化することが指摘されている。具体的にみると、一二世紀以前のものは、鈴高が口径を上回っているのに対し、鎌倉期以降は口径と鈴高がわずかに逆転する。以後、比を保ったまま徐々に小型化していく。

最もわかりやすいのは、区画線であり、二重線から珠紋帯、そして中央が強調される子持帯へと変遷している。なお、この子持帯は、花瓶や飯食器からみて鎌倉後期より出現するとされている(第128図)が、今回みた限りでは器種によって出現時期が若干ずれている。おそらくそのズレは、将来解消されると思われるが、類例をまっして再考したい。現時点では、11・13といった珠紋帯と子持帯の併存個体を過渡期ととらえて、一四世紀頃から徐々に採用されていった意匠と考えておきたい。

口縁部形態は、わずかに膨らむものから、鎌倉期に至り、横に飛び出すようになる。ただし裾に蓮弁をめぐるものは、断面三角形を呈し、鎌倉期に限られるようである。近世については、18の一例しか知りえなかったが、杵を挿入する受口が延びている。

③垂字形花瓶(第104図)

最も古いものは、素紋(1)であり、以後は頸及び腰部に二条線を入れるようになるが、形態変化に乏しい。

器形的には、古いものは胴が張り、器高に対する胴部最大幅比が〇・六を超えているが、鎌倉期以降は〇・五台となる。

8は、薄手の仕上がりから鎌倉前期頃の所産と考えられ、室町期以降は器壁が厚くなるようである(9・11)。また戦国期になると、口縁端部が厚

くなり、立ち上がり不明瞭となるようである(12)。

④水瓶(第104図)

徳利形とも称される鶴頸の水瓶は、類例が少ないが、2や3で子持帯が肩及び胴に認められる。また、両者は口縁端部が厚く立ち上がり、垂字形花瓶16に共通する。なお4では、口縁端部の厚みが減じ、脚部がやや高くなっており、時期的な変化である可能性がある。

⑤飯食器(第104図)

時期が下るに従い、鉢が深身になるとされているが、あまり変化は認められなかった。脚部が時期を追って高くなることが指摘されているが、脚部の器高に占める割合は、平安期では○・五以下、鎌倉期○・五台、室町期には○・六を越えるようになる。

口縁端部は、平安期は内湾し、鎌倉期に肥厚し直に立ち上がり、以後厚さを減じて開きぎみとなる。

脚部は屈曲させるのが普通であるが、わずかに曲げただけのものもある(3)。なお屈曲部は、素紋のものと二線で画するものがある。

⑥六器(第105図)

鉢の口縁部は、平安期には端反であり、施釉陶との相関があるが、もちろん金属器が本来であろう。鎌倉期に入ると、口縁端部が肥厚する。この肥厚は、一四世紀に入ると目立たなくなっていくようである。

径高比は、平安期○・三台、鎌倉期○・五前後、戦国期には○・六を越えるようになる。なお高台径は、ほとんど変化がないか、わずかに縮小傾向にあるため、深身となった分、新しいものほど高台が華奢にみえる。

台皿は、脚部が高くなっていく傾向にあるが、室町期以降の資料が少ないため、不明瞭である。鎌倉期の台皿は、口縁端部及び高台受け部分が鉢の口縁部と同様に肥厚する。一四世紀以降になると、口縁の膨らみが目立たなくなるのも鉢と同様である。

⑦火舎・香炉(第105図)

火舎の出土は、一四世紀代までに限られており、以後は蓋を伴わない香炉がそれに替わるようである。したがって、陶磁器類も中世後期のものは、火舎ではなく香炉としたほうがよいのではないかと思われる。

火舎は、1をみると身が開いており、それがどこまで一般化できるか不明であるが、一二世紀代にはやや開きぎみで広い鍔が廻らされるようになる。そして、鎌倉期には口縁端部が内湾ぎみに立ち上がるようになり、甑が付き、身の蓋・甑受け部分が大きく立ち上がる。脚の取り付け方も、側から差し込むものから、底面に釘で打ち付けるものへと変化する。その変化は、1と2・3の関係から一一一二世紀代に生じたものと考えられる。

香炉は次項で述べるが、新来器種であり、火舎にとって替わった。7のように蓋が付くタイプから、一五世紀代には蓋が伴わないものへと変化する。蓋が付かないのは、木製品を当てる場合もあるが、焼香あるいは線香立てという行為の普及を物語っているのではないかと思われる(一)。筒形、袴腰形があり、胴部の意匠は、燭台などと同様に三々四段の雷紋帯をめぐらせるものが多い。

以上、研究史をなぞったに過ぎない部分もあるが、出土密教法具の変遷を述べた。

(4) 觚形花瓶・燭台・管耳壺等(第106図)

ここで取り上げる比較的大型の一群は、これまでの一連の仏具研究でほとんど言及されることがないものである。それは燭台の場合、木製品が多かったことによるという理由もあるが、最も大きな要因は、おそらく禅宗の仏具として比較的新しい時期に持ち込まれたものであったがためと思われる。その初現は、韓国の新安沈没船(文化財管理局一九八八)から出土した多数の金属器にみられるように、鎌倉後期の一四世紀以降ということとな

ろう。

觚形花瓶・燭台は、3を除いて同意匠で、胴部に雷紋を四段配し、脚基部に二列の突線を廻らせている。時期は、一五世紀代のものが多い。

また、蒜形口壺や管耳壺、環付壺といった器種もまた、中国的な意匠で飾られており、あまりなじみのない遺物である。これらは、前項の香炉とともに三具足として用いられたものと考えられよう。

ただし、数が少ない故に、青磁（香炉）や瀬戸（垂字形花瓶・花瓶・燭台）、瓦器（燭台・花瓶・香炉）といった焼物で代用されており、ある程度の需要があったものと考えられよう。

(5) 錫杖頭 (第107図)

古手のものについての基本資料は、『日光男体山山頂遺跡発掘調査報告書』所収の錫杖頭群である(三宅一九六三)。それ以前においては、香取秀眞(一九三一)の考察が要を得ており、発掘調査後には大和久震平(一九八九)による分類が提示されている。以下、両氏の考察に基づき、錫杖頭を考えていく。

まず素材は、奈良時代が鉄あるいは白銅で、平安期には金銅製へと換わっていく。日光男体山山頂遺跡では、金銅製錫杖頭が一点ほど出土しているが、環がわかるもので鉄製が五点(A種と仮称)、銅製が四点(B種と仮称)とほぼ拮抗している。鉄製頭には鉄環が付き、後代のものが銅環を付することからすれば、鉄製環を銅製頭に付すものは、両者の過渡期にある製品と考えることができよう。ただし、銅同士と銅と鉄とで異なった音色が出ることからして、時期比定の根拠とはならない可能性もある。そこで、両者の外輪の縦横比を比較してみよう。

A種(22・25・30・34: 報告書番号)は、横一に対し、縦が〇・八二、〇・八九、〇・八三、〇・八二となる(ともに最大値)。

B種(23・27・28・29: 同右)は、同様に〇・九二、〇・九二、〇・八五、〇・八五となる。

このように、鉄環が付されるものは、銅環が付されるものに比してやや偏平であることが知られる。鎌倉期には、ほぼ同比率となり、古式のものより縦長になることから、A種からB種へと変遷したといつてよいかと思われる(二)。

次いで、輪と柄の関係をみていく。輪が柄に接する部分までの長さで輪の最大幅を比較してみる。

A種(22・25・30・34)は、輪幅一に対し、柄が〇・四八、〇・五八、〇・四六、〇・六一となる。

B種(23・27・28・29)は、同様に〇・六七、〇・五二、〇・五一、〇・四八となる。

両者に大きな差はなく、この段階では輪幅の半分くらいの長さの柄が付されていたことがわかる。なお、輪に括れをもつ最も新相を示す23(第133図10)は、最も柄の比率が高い(三)ことから、一二世紀代には〇・六五を越える程度の比率にまで柄が長くなるものと思われる。柄は以後、さらに延びていくようであり、鎌倉期には〇・八を越え、近世に入ると柄の長さが輪径を越えるようになる。

これは、輪が小さくなっていくことと表裏の関係にあり、括れがなくなる新しいものの場合、幅9cm以上で一〇cmを越えるものも多い。鎌倉期には9cm前後となり、近世以降は、6cm以下にまで縮小し、5cmを切るものも認められる。

次に、輪の形状をみていく。

錫杖頭は、先にも少しふれたように、金剛杵(鈴)の脇鉈と相関があるように思われ、その括れの採用に大きく預かっていた可能性が高い。古手の錫杖頭は、すでに指摘されているように、輪に括れをもたないのであるが、素紋のものから、金剛牙や蔓草・飛雲意匠などが輪上に配されるようになり、やがて脇鉈状の括れが入られるようになる。それを如実に表しているのが10で、括れは下半の対ししか認められず、上の蔓草部分が後に上部

の括れへと換わる。この過渡期の様相については、すでに滋賀県石部の常楽寺所蔵品を例として、香取氏が述べられているところである（香取一九七六、二三四頁）。外に¹²の新潟県柏崎市庚申塚の経塚出土品も形態的にはその一例となろう（四）。ここで注目したいのが、金剛牙等の付される位置である。それらは、括れの前段では、6や7の例のように基本的に輪の四方に付されているのが通例である。そこに括れが加わると、当初は^{10・11}のように屈曲部を避けて付されている。それが、上下に括れを付けるようになると、¹²のごとく屈曲部の外側に装飾を付すようになる。それらは金剛杵の嘴形突起の位置変遷と同様であり、両者の間に何らかの技術交流が存した可能性を考えることはできないだろうか。ただし金剛杵の場合、遅くとも一二世紀に入る頃には屈曲部の外側に嘴形突起が付されるようになっており、それが金剛杵（鈴）と錫杖頭に同時に生じた技法変化であるとするのであれば、無括れから括れへの変化も一二世紀代の早い時期に求めなければいけないかもしれない。あるいは、多系統の技術系譜の存在を考えるべきであろうか。以後は、時期が下るにしたがって括れや稜が不明瞭になっていく。

そして、輪中の意匠であるが、平安期から鎌倉期にかけては凝ったものが多く、中央の柄上に塔形、両脇に水瓶を置くものが多い。また、輪の上部を折り返しその上に塔を乗せる凝った造りのものは、鎌倉期に多いようである。それが戦国期に下ると、ほとんど形骸化してしまっており、江戸時代には塔はただの棒となり、水瓶は一对の突起と化してしまっている。

なお、江戸時代の柄には、画一的な装飾意匠が施され、四区画から三区画へと変遷することが指摘されている（市橋ほか一九九七、（五））。また、柄に施される蓮弁紋も、三重から二重になり、やがて消失するようである。

（6）仏具の出土傾向

前章まで仏具の変遷を考えてきたが、ここで『考古学論究』第五号所載の「出土仏具地名表」から、どのような種類の仏具が、いつ、どこで出土しているのかを簡単にみていこう。

最も特徴的なのは、平安期に岩手から青森にかけて分布する鉄製三鈷鏡及び錫杖状鉄製品である。これらについて井上雅孝は、雑密に伴う宗教具であると考えている（井上二〇〇二・二〇〇四）。共に音を鳴らす仏具であることに意味が認められ、またそれが鉄製であることは中世を貫徹する鉄への「北」的な意識の在り方（工藤一九九五）であるように思われる。

その外では、全時期を通じて六器が最も出土例が多いが、これは点数が多いことによるものである。

全体的にみれば、経塚出土品を含め一二世紀以前の仏具類が目立ち、以後は埋納品や墓出土品にまとまりをみる。仏具は特殊な遺物であるので、見逃されることは少ないと考えれば、被災などによる廃棄はもちろんあるけれども、埋納以外にはまとまって出土することが少ない遺物であるということがいえる。金属器が土器よりももちがよいのはもちろん、法具として大切に扱われていることから、多くの伝世品が現存していることはいうまでもない。

したがって次には、一括埋納遺物について検討していくべきであるが、紙数も尽きた。ここでは先行研究として、足立順司の文献（一九八一）及び、それを受けた坂井隆の考察（一九九六）、さらに坂詰秀一の論考（二〇〇三）を挙げ、後考を期したいと思う。

（7）おわりに

仏具は、それ単独というよりも器種を越えた共通意匠やセット関係に重点をおいて考察する方向性が必要であり、本稿はそのための第一歩である。いずれ機会があれば、金工史を含めた工芸史の中に考古資料を位置付けていきたいと思う。もちろん、続いて歴史資料へと昇華させる階梯がまってい

るのであるが。

最後に、本来金属製品以外のコピー商品である土製品（陶磁器・瓦器・土器）をも対象としなければならないのである（山川一九九九）が、紙数の関係で今回は見通しを述べるにとどめたい。

最も古い段階から宮都では、香炉や碗皿類の写しが盛んに焼かれており、須恵器生産でさえもその影響で各器種が成立したことは周知の事実である（西一九八九）。が、施釉陶器が中国産磁器に替わられる一〇～一二世紀代には、国産の焼物による写しは一旦下火となる。

次いで鎌倉期では、瓦器生産が行われている。この土器群は、鎌倉及び松島瑞厳寺等といった鎌倉と非常に近い寺院等においてわずかに認められるのみであり、ごく限られた階層に供されたものである。

そして一四世紀に入ると、瀬戸で香炉や燭台、大型の花瓶が器種組成に加わるようになるが、これは新安沈没船にみられるような新たな将来品が大量に齎された影響といえよう。

さらに一五世紀に入ると、青磁の小型香炉を出土する遺跡が増えるが、瓦器はこの段階では大型の風炉等の高級品を製作しており、小物はまだ普及していない。

それが一六世紀に入ると、瓦器及び土器質の香炉がかなり普及し、多くの遺跡で出土がみられるようになる。おそらくこの戦国時代（後期）とされている一六世紀前半代は、庶民のニーズに職人集団を擁した商人が非常に敏感になる時期であり、儲かる場所に集中的に売れるモノを持ち込む時期である。この段階で瀬戸が仏具の生産を止め、売れ筋の茶湯陶に絞り込み、仏具はさらに安価な土器集団が受け持つようになる。ここに至り、金属製品との格差がさらに開くことになるものの、土製品（主に香炉）は広範な普及をみるようになる。この段階で、ようやく仏具は、庶民への市民権を得たということになる。

註

（一）『日本国語大辞典』第二二卷（小学館）「線香」の項目によれば、『御湯殿上日記』の文明一〇（一四七八）年の記事が引用されており、少なくとも一五世紀代には線香の使用が認められる。

（二）ちなみに環のなご21・24・31・32・33の縦横比は、〇・八五、〇・九二、〇・八二、〇・八六、〇・九四となり、31以外は銅環が付されていた可能性が高いものと思われる。なお、鉄製の独鈷杵・御正躰・鰐口なども基本的に変遷をたどる可能性があろう。

（三）大和久は、男体山山頂遺跡の出土品について、すべて括れないとする（大和久一九八九、六八頁）が、本例のみ括れが認められる。

（四）報告書では、中世後半の所産とされている（伊藤二〇〇〇）が、私見では宝珠形から括れ形への過渡期の形態と認められる。ただし、幅が七・五cmと小型化していることからすれば、中世後期という年代観にふさわしく、ここでは復古調の作例と考えておきたい。なお、庚申塚の経塚からは一六世紀代の鉦鼓が出土しており（水澤一九九六）、埋納棄年代はそのころと考えられる。

（五）市橋文献によれば、四段から三段、そして二段へという変遷が想定されているが、三段とされた多くは最上部を含めて四段の部類に含めてよいと思われる、二段とされたものは三段の意匠が認められることから、大きくは四段区画から三段区画へと変遷したものと考えておきたい。

補註 註4の庚申塚の経塚出土錫杖は、復古調というよりも、一二世紀代の錫杖を踏み返して作成されたものと考えたい。

(1)はじめに

本稿の契機は、現在調査している越後国奥山荘の江上館跡より鉦鼓が出土したことによる。そこで参考文献を探したところ、とりたててまとめられたものもないようである。解決の糸口たる『新版仏教考古学講座』にも、その性格上簡単に概要が記されるのみであった(香取一九七六)。ただその中の「鎌倉新仏教各宗の仏具」(久保一九七六)は、本稿をまとめるにあたつて参考となった。

たまたま本江上館跡例では、出土時の状況が明らかであったため、おおよその埋められた時期がわかるけれども、それとても製作年代に答えることは難しいことがわかったのであった。さらに、多くの遺例は不時発見によるもので、遺物自体の年代は、紀年銘を有するものを除けば特定できない、という研究段階にあることがわかった。そこで、本報告を書く責任上、非力を顧みず小文をまとめることとした。

まず、本論に入る前に、現時点でわかっている事柄を要約しておく。

鉦鼓は、元来雅楽で用いた打楽器であるが、浄土教で念仏・勸進に用いるようになったという。その仏具(梵音具)としての使用は、空也(九〇三〜七二)に始まるといわれ、京都六波羅密寺の称名遊行像は有名である(一)。また『一遍上人絵伝』には、六箇所鉦鼓が描かれ(二)、踊り念仏の拍子をとるのに用いられたことがわかる。これらによると、鉦鼓は鉦架にぶら下げ、槌で打つものであり、首から下げるため小型軽量化していったものと思われる。また、吊り下げる鉦鼓から、置いて叩く伏鉦へという一変形が生み出されていったことも見逃せない現象である。これは打撃面として、雅楽では凹面(内面)を打っていた(三)ものが、念仏時には両面を使用するようになっていく(四)という使用方法と、軌を一にしていると考えられる。すなわち当初は面がふくらんでいたものが、中世の遺例のように平坦化し、やがて脚が付き一面のみを打つ伏鉦の登場となったことが予想されるのである(五)。

よって以下に越後を中心とした中世の出土事例を紹介し、そこから一応の位置付け及び問題等を明確にしたいと思う。

(2)出土事例(第108〜110図、表29)

①新潟県胎内市(旧中条町)「江上館跡」北郭出土例(中条町教委一九九三)

本例は、阿賀北の国人領主中条氏の本拠地と目される、江上館跡の北郭より出土した。口唇端部を除き、ほぼ完形である。縁部径一一、三cm、口径一二、八cm、器高四、一五cm、重量五三〇gを測る。外面は、断面が緩い三角状となる界線を一重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。体部上方の縁下二cmには、耳が二個付けられており、向かつて右側は、左上がりの半円形、左側は、下側をやや延ばした鰭状を呈している。この耳部には、径四mmほどの孔が開けられており、出土状況から、紐が通されていたことが確認され、懸垂されていたことがわかる。縁は、やや外側に面をとり、ごくわずかに水平方向に張り出す程度である。口唇部は、内側が直に落ち、外側は直線的に斜行する。その断面は、二等辺三角形形状を呈し、端部を丸く収めている。なお口唇端部の遺存状況は、よくないが、上方中央がややえぐれていることがわかり、これは意図的あるいは、使用に伴って生じたものと考えられる。

本遺物は、主郭の北方に付属する北郭のほぼ中央、径三〇×五〇cm、深さ二〇cm程のピットから出土した。出土状況は、ピットの底に口唇部をがちりと突き立てており、意図的と判断せざるを得ない。このとき体部には、藁が巻付けられた状態で出土し、耳孔には懸垂に用いた紐の一部がつまっていた。そして本遺構の年代であるが、掘り込み面から一五世紀末頃の周囲に遺構がほとんど存在しないと考えられる北郭の性格の転換期以降の時期

となり、興味深いところである。

②新潟県新発田市(旧豊浦町)「こうやどう様」出土例(新潟県博二〇〇六)

本資料は、コウヤドウ様といわれる神社を移築する際に発見されたもので、出土状況は不明である。縁部径一九、四cm、口径二一、一cm、器高五、七cmを測る。外面は、断面が半円形の界線を二重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部は外へと張り出しており、鐘座区は縁よりも高く突出している。体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付けられている。口唇部断面は、内側へやや張り出し、外側が丸くふくらむ、いわゆる駒の爪形である。そして胴部には、「正和元年六月日 從阿弥陀佛(割書)」の銘が刻まれている。銘文に「從阿弥陀佛」という文言があることから、念仏聖の存在が推定されている。なお本資料は、昭和五十七年三月二六日付けで、県指定有形文化財に指定されている。

③新潟県北蒲原郡聖籠町「聖籠観音」出土例(新潟県博二〇〇六)

本資料は、聖籠観音所在地から、木造阿弥陀如来立像とともに出土したといわれるが、出土状況は不明である。新潟市西福寺所蔵。縁部径一九、九cm、口径二二、二cm、器高五、四cmを測る。外面は、断面半円形の頂部に沈線を入れた二重界線を二重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部は丸く収めているが、縁・胴部との境に沈線を各々めぐらせている。鐘座区は、縁よりもやや高く突出している。体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付けられているが、口唇底部に後補の孔三箇が認められ、伏鈕としても使用された時期があったと考えられる。口唇部断面は、(二)と同じく駒の爪形を呈する。そして胴部には、以下の銘が二行にわたって刻まれている。

「正和三年甲寅月十五日「沙弥佳性」

本資料と(二)の鈕鼓とは、二年しか隔たっていないこと、距離的にも六kmしか離れていないこと等、両者の関係に関心がもたれるところである。

④新潟市寺山出土例(新潟市一九九四、藤塚一九九四)

本資料は、かつて「石仏新田」といわれた場所にある三体の中世石仏板碑の前方(南)六mの地点から出土した。これは、戦時中に防空壕が掘られたときに出土したもので、銅製鏡・香炉各一点、真鍮製の香炉一点、銅板断片一点という仏器が伴出しているため、本鈕鼓も仏具と考えられている。出土状況は不明である。縁部径一五、九cm、口径一八、二cm、器高四、七cm、重量九八五gを測る。外面は、断面半円形の頂部に沈線を入れた二重界線を二重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部は斜めに突出し、縁・胴部との境をくびれさせ、段を有している。体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付けられている。口唇部断面は、ほぼ駒の爪形を呈するが、内面端部を内側に引き出しており、外側のふくらみもやや少ない。

⑤新潟市(旧巻町)「興業墓」出土例(山口一九九五)

本資料は、住宅の新築に伴い砂丘を削平したところ、鏡等と伴出したものである。土壙断面が残っており、その覆土に腐食した人骨が認められたため、墓跡であることが確認されたものである。遺物は、径・深さともに一、五mの土壙の中央部より出土したという。まず、菊花双鶴鏡が背面を上にしてほぼ水平に置かれ、その下に鈕鼓があり、さらに鈕と同じレベルに三五枚の鍔着した銭貨が認められている。そして土壙の時期については、和鏡及び永楽銭の年代観から、一五世紀後半から一六世紀にかけての所産とされている。鈕は伏鈕で、縁部径八、七cm、口径九、八cm、器高三、七cmで、脚部を含めると四、二cmとなる。外面は、断面半円形の頂部に沈線を入れた二重界線を二重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部はやや水平方向にふくらみをもたせ、縁との境に段を有している。体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付けられている。口唇部断面は、駒の爪形を呈し、内面端部がほぼ直に落ちる。底面の円周中央には、板状の三脚を配している。

⑥新潟市(旧小須戸町)「九ツ塚・第一号塚」出土例(小須戸町教委一九八七)

本資料は、九ツ塚第一号塚(六×六、八m)の発掘調査に伴って出土したものであるが、報告では塚の直下に存在した竪穴遺構に伴うものとされて

いる。ただしこの遺構は、塚と密接な関係を有するものとされており、出土遺構（塚・堅穴遺構）及び遺物（土師器・須恵器・鉄片・鉦鼓・錢貨）の帰属年代は、「二応二一世紀」とされるが、いかなるものであろうか。これは、鉦鼓の年代観ともかわってくるので、ここで少しく検討してみたい。まず須恵器・土師器の年代であるが、細片が多いため明瞭にし得ないが、図からみておおむね、九世紀後半頃の所産といえよう。次いで錢貨については、錢種が明確でないのはつきりいえないが、渡来錢の流通は、中世に入ってからであることが一般論としていい得るであろう。そして、堅穴遺構内出土といわれる鉦鼓は、写真六〇九・一一から判断して、堅穴遺構の埋土の上に置かれているのであって、堅穴遺構に伴うものではないことは明らかである。実はこれらの遺物については、出土層位及び位置等の記録が落ちているので、報告者の所見を尊重するしかないのであるが、断面図と記述の不一致も認められ、塚と堅穴遺構の関係については、別個に考えることとする。よって、土師器・須恵器は堅穴遺構に、鉦鼓・錢貨は塚に伴うものとして取り扱う。

鉦鼓は、縁部径九、九cm、口径一〇、五cm、器高三、五cmを測る。外面は、断面半円形の頂部に沈線を入れた二重界線を一重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部は水平方向にふくらんでおり、体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付けられている。口唇部断面は、駒の爪形を呈するが、内面端部を内側に突出させている。なお、鉦鼓の下部に接して木片が出土しており、鉦架の一部と考えられている。

⑦新潟県柏崎市「半田塚群・第三号塚」出土例（柏崎市教委一九八五）

本資料は、半田の塚群九基の調査に伴って、低丘陵中央の径六、一mの第三号塚から出土したものである。出土状況は、塚の西南部基底部下に掘り込まれた径二、二m・深さ一、二mの円形土坑の底面近くのレベルに、表面を上に向けた状態で出土したものである。さらにその下には、半分に欠かれた径八cm程の河原石が置かれており、鉦鼓は土坑の底に安置されたものと考えられる。そしてそれに接して錆びて棒状となった二七枚の錢貨が出土している。さらに錢貨の下に接して、木組みの差し込み部分を含む木質の細片が確認され、位牌かと推測されている。なお、本塚群の推定年代としては、一六〇一七世紀とする品田高志の考察があるが（品田一九九〇）、本鉦鼓が出土した土坑は、位置関係から考えて塚群に先行して穿たれたと考えられる。

鉦鼓は、縁部径一一、五cm、口径一三、一cm、器高三、八五cmを測る。外面は、断面がやや山形となる二重界線を一重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部は、やや水平方向に張り出し、縁と面の境に沈線を、縁と体部の間に段を有している。体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付けられており、向かって右側の耳孔には、釣紐の断片が認められる。口唇部断面は、外側がややふくらむが、内面が二mm程浮き上がり、先端のみが接地する。また、伴出した位牌と推測されている木片は、あるいは鉦架の一部である可能性があると思われる。なお本遺物については、柏崎市教育委員会のご厚意で実測の機会を得た。

⑧新潟県柏崎市「横山東遺跡群・庚申塚の塚」出土例（柏崎市教委二〇〇〇）

本資料は、庚申塚の塚の発掘調査に伴って出土したものである。出土状況は、三回に及ぶ塚の変遷の初回に伴うもので、この段階では封土はなく、巨石を四方に配して結界としていたと思われる。伏鉦は、面を上にして置かれ、上に布のようなものが被されており、下部に木片が伴ったという。また、近接して錫杖も出土しており、興味深い。詳細は本報告をまちたいが、ここではご厚意により実見を許されたので、ここに紹介する。

鉦は伏鉦で、縁部径九、〇cm、口径一〇、〇cm、器高三、一cmで、脚部を含めると四、〇cmとなる。外面は、ごくわずかな盛り上がりをもつ二重界線を一重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部は、やや張り出し、体部との境に段を有している。体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付けられている。底面には、三脚を配している。本遺物は、次の北塚出土のものと、やや大きさが異なるものの、形態的に類似している。

⑨新潟県上越市「北塚」出土例（平野一九七五、上越市立総合博物館一九八九、金子一九九四、戸根二〇〇三）

本資料は、居多神社四至絵図に載る北塚の性格究明を目的として、発掘された際に出土している。記録としては、調査後二五年を経て書かれた平野団三の報告があるのみである。それによれば、遺物は伏鉦一面をはじめ、和鏡一八面、漆塗りの鏡箱（曲物）一箱、鏡を包んでいた和紙一七枚、頭髮三束、硯一面、腰刀二佩、筭一本、鍋一個、錢貨一一枚と、おびただしく出土した。そして各遺物は、間層をはさむ上下三層から出土したとされ、各層は上から室町後期、南北朝、室町前期、鎌倉末、南北朝に比定されている。これらは、和鏡の年代観からいつて、おおむね妥当であると考えられる。鉦鼓は、この最終段階に伴っているが、細かな出土状況は不明である。そして北塚の性格については、護摩修法壇塚・水壇塚（平野一九七五）、鎮魂供養塚（上越市立総合博物館一九八九）が挙げられ、越後守護が五智国分寺に執り行われたものとされている。なお本資料群は、上越市指定文化財に指定されており、伏鉦については、上越市教育委員会のご厚意で実測の機会を得た。

伏鉦は、縁部径七、七cm、口径八、六cm、器高三、一cmで、脚部を含めると三、四cmとなる。外面は、ごくわずかな盛り上がりをもつ二重界線を一重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部は、やや張り出し、体部との境に段を有している。体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付けられている。口唇部断面は、他に比してあまりふくらみをもたず、内側が二mmほど浮き上がる。三脚は、口唇の先端にやや外へ開きながら付されており、正置すると真上から認めることができる。

⑩新潟県佐渡市(旧羽茂町)「堂城」遺存例(羽茂町一九八九)

本資料は、伝世品であるが、(三)と形態が類似している。縁部径一九、〇cm、口径二一、三cm、器高五、三cmを測る。図がないので、はっきりしたことはいえないが、外面は断面半円形の界線を一重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部は丸く収めるが、縁の境に沈線をめぐらせている。体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付けられおり、口唇部は、駒の爪形を呈する。

以上が新潟県内で確認し得た中世の遺例である(六)。

以下、管見に入った県外の遺例を少しくみていくことにする。

⑪青森県八戸市「根城跡」本丸出土例(八戸市教委一九九三)

本資料は、南部氏の居城根城の本丸より出土している。体部、口唇部にかけての破片資料であるが、口径一五、〇cmを測る。体部と口唇部との境及び口唇裏面先端部に、段を付けており、内側をやや浮き上がらせている。口唇部断面は、ほぼ駒の爪形を呈するが、内面端部を内側に引き出している。

⑫青森市(旧浪岡町)「浪岡町城跡」内館出土例(浪岡町教委一九八九)

本資料は、北畠氏の居城浪岡城跡の政庁的性格をもつ内館の、竪穴建物跡S X四〇二から出土している。遺物は青磁等が多量に出土しているが、鉦鼓自体は覆土内からの出土であり、縁、口唇部にかけての破片資料である。縁部径一〇、八cm、口径一二、〇cm、器高四、二cmを測る。縁部下にややふくらみもち、体部には鰭状を呈する耳が一個のみ遺存する。口唇部は内側が三mm程浮き上がり、先端のみが接地する。

⑬福井市一乗谷朝倉氏遺跡「西光寺」出土例(福井県一九七六、岩田一九九四)

本資料は、一乗谷朝倉氏遺跡の谷中に存在した、日蓮宗寺院と推定される西光寺(サイゴ寺)より出土した。本堂裏の溝跡付近より同型のものが二個発見されたが、出土状況は不明瞭である。

鉦は伏鉦で、縁部径七、四cm、口径八、六cm、器高三、一cmで、脚部を含めると三、六cmとなる。外面は、断面半円形の頂部に沈線を入れた二重界線を一重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部は、やや斜めぎみに丸く収めており、縁内側及び体部との境に段を設けている。体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付されている。口唇部断面は、内側を一mmほど浮き上がらせて斜行させているが、ほぼ駒の爪形を呈する。そして口唇部裏面先端から一mm程内側に三脚を配しているが、これは本体とは別個に作られ鋳付けられたものである。本遺物については、岩田隆氏のご厚意によつ

て実測の機会を得た。

⑭長野県下高井郡山ノ内町出土例(長野県一九九二)

本資料は、畑より出土したとされるが、出土状況等は不明である。縁部径二一、二cm、口径二三、一cm、器高五、五cmを測る。外面は、断面半円形の頂部に沈線を入れた二重界線を縁及び鐘座区との間に二重にめぐらせて画している。縁部は外へと張り出しており、体部との境に段を設けている。体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付されている。口唇部は、駒の爪形を呈する。そして胴部には、「観阿彌陀佛 延慶元年十二月一日」の銘が刻まれている。銘文に「観阿彌陀佛」という文言があることから、念仏聖の介在が推定される。

⑮群馬県高崎市「下佐野遺跡」出土例(群馬県埋文一九八九)

本資料は、館跡を構成する堀跡の覆土からの出土であるが、その直下から一三枚の中世土師器皿が出土していることから、置かれたものと考えられている。そして本遺物について、報告者の木津博明は、「一応の年代観としては、一四世紀中頃一五世紀後半の約一五〇年間に考えられる」と一応の範囲を示し、「当遺跡で館の構築される一四世紀後半代頃に推定しておきたい」としている。この鉦は伏鉦で、縁部径九、七五cm、口径一一、三五cm、器高三、〇cmで、脚部を含めると四、九八cmとなる。外面は、断面半円形の頂部に沈線を入れた二重界線を一重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部は、やや斜めぎみに丸く収めており、体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付されている。口唇部断面は、外側がややふくらみ、内側を三mmほど浮き上がらせその端部をも内側に張り出させている。そして口唇部裏面先端に三脚を配しているが、これは本体とは別個に作られ鑄付けられたものと考えられる。なおこの脚は、断面が半円形を呈し、ここで採り上げた外の遺例と異なる。これはあるいは、報文中でも触れられている「上野鑄師」との関係を想起すべきであろうか。

⑯神奈川県海老名市本郷出土例

本資料は、承応三(一六五四)年銘を刻む宝篋印塔を、道路工事のため移動させたときに出土したものである(須田誠教示)。出土状況は不明であるが、菊花散双雀鏡及び年号不詳の板碑が伴出している。

鉦は伏鉦で、縁部径八、三cm、口径九、九cm、器高三、九cmで、脚部を含めると四、二cmとなる。外面は、断面半円形の頂部に沈線を入れた二重界線を一重めぐらせて画し、中央に鐘座区を設けている。縁部は、やや斜めに突き出しており、体部上方には、鰭状を呈する耳が二個付されている。口唇部断面は、外側にふくらみをもたせ、内面を四mmほど浮き上がらせて斜行させている。そして口唇部裏面先端に、三脚を配している。

⑰神奈川県三浦郡葉山町「間門遺跡」出土例(間門遺跡調査団一九九四)

本資料は、遺構外の攪乱土からの出土で、強い熱を受けている。変形が著しいが、ほぼ縁部径一五cm、口径一七cm、器高五、二cmで、脚部を含めると七cmとなる。外面には、二重界線を一重めぐらせており、縁部は斜め上方に突き出している。耳は鰭状を呈しているが、一方はほとんど原型を止めていない。口唇部断面は、駒の爪形を呈し、内側端部を水平方向に突出させている。そして底面には、円柱形の三脚が配されている。本例は近世遺物と報告されており、中世の模倣品である可能性がある(補註参照)。

⑱静岡県掛川市高御所「行人塚」出土例(静岡県埋文一九六五)

本資料は、丘陵上に築かれた行人塚の発掘調査に伴って出土したものである。出土状況は、高さ一、二mの塚の墳頂から五〇cm下方に埋納されていたとされるが、これは自然地形であることから旧地表近くにあたるものと思われる。鉦鼓は、凹面を上に向けて確認され、中に箱と火打具(鎌と燧石二個)が納められていた。また、墳丘上と西方には、一石五輪塔が存在し、さらに文政十(一八二七)年銘の供養石も確認されている。

鉦鼓は、縁部径一五、五cm、口径一七、八cm、器高四、八cmを測る。外面には二重界線を一重めぐらせ、縁部は斜め上方に突出させている。鰭状の

耳が二個付されており、口唇部は斜行させ内側を3mmほど浮かせ、先端のみが接地する。本資料について報文では、江戸時代のものとされ、塚の造営時期を江戸時代中ごろと結論付けられている。しかし、墳丘上の一石五輪塔は、火輪からみて中世の所産とみられ、西方の一基についても、近世初期を下ることはないと思われるところである。したがって供養石が江戸中期のものであるにしても、そのみで鉦鼓を近世の所産とすることはできない。また、塚の築造年代がそのまま鉦鼓の生産年代を意味するものではないこともいうまでもない。よってここでは、五輪塔の年代観から、中世の所産と考えておきたい。

(3) 時代相

本章では、紀年銘をもたないものを、伴出遺物や出土状況から時期をしぼり込み、次いで鉦鼓の形態変化の検討を行う。

伴出遺物をもつものとしては、③木造阿弥陀如来像、④銅製鉢・香炉各一点、真鍮製の香炉一点、銅板断片一点、⑤菊花双鶴鏡一面、錢貨三五枚、⑥木片、錢貨三枚、⑦木片、錢貨二七枚、自然石、⑧錫杖、⑨和鏡七面、和紙七枚、錢貨数十枚（上層のみ）、⑩青磁碗、白磁皿、青花皿、瓦器、埴塼、中世土師器、播鉢、錢貨、小札、皮札、鋤先、横斧、鉄鏃、砥石、自然石、⑪中世土師器皿一三枚、⑫菊花散双雀鏡一面、板碑、⑬木箱、鎌、燧石2点の一例がある。これに併せて、前述の出土状況を勘案し、廃棄・埋納時期をまとめると、以下のようになる。

①一五世紀末、⑤一五世紀後半～一六世紀、⑦一六世紀～一七世紀、⑨室町後期、⑫一六世紀後半、⑬一五世紀後半～一五七三年、⑮一四世紀中頃～一五世紀後半、⑯一七世紀前半以前、⑰一七世紀前半以前。

ただしこれは、鉦鼓の下限年代を示すものであり、そこから使用・伝世期間を引いたものが遺物自体の製作年代となる。そこでこれらを勘案し、最も年代を反映していると考えられる口唇部の形態に注目することによって、鉦鼓の型式学的な変遷を想定してみると、以下のような変遷が考えられる（第二図）。

I期 内側にも張り出す駒の爪形・・・②、③、⑩、⑭

II期 先端が内側へ突出するもの・・・④、⑥、⑪、⑰

III期 直に落ちるもの・・・①、⑤、⑬、⑮（II期か）

IV期 厚みを減じて斜行し先端のみが接地するもの・・・⑦、⑧、⑨、⑫、⑯、⑱

このようにみると、伏鉦はおおむねIII期以降に普及してくるものと思われる。

そこで、各期の年代であるが、I期は紀年銘から一四世紀前半に位置付けられる。II期は、I期にその萌芽が認められるので、それに比較的近い時期、一四世紀後半としたい。次いでIII期であるが、①の江上館跡の例から一六世紀には入らず、一応一五世紀代の所産と考えたい。そしてIV期は、⑨の応仁・長享前後（一五世紀後半代）とする平野氏の説があるけれども、外の事例から一六世紀代に位置付けたい。

このようにみてきた場合、若干の例外は認められるものの、時期が下るにつれて小型化する傾向にあることがわかる。例えば口径をみると、I期には20cmを超えていたのに対し、III期以降では10cm前後にまで縮小する。すなわち器高に比して口径が小さくなることから、古いものほど扁平であるといえよう。また、同時期の鉦鼓と伏鉦では、後者の方がひとまわり小さく造られていたようである。

(4) 鉦鼓の性格

性格などというと、鉦鼓は「仏具」にきまっているのではないか、といわれるかもしれないが、そのように単純に決めつけてもよいのであろうか。『日

『本国語大辞典』(七)をみると、①いくさで、合図などに用いるたたきがねと太鼓、②雅楽に使う打楽器の一つ、③仏家で、勤行の時などに打ちならす円形青銅製のたたきがね、という三つの用途が記されている。現在我々が一般的に使う場合には、③の仏具として扱う場合が多いが、外の用途に使われたものはなかったであろうか。

鉦鼓は、機能的には音を鳴らす打楽器の一種である。そして同じ音を鳴らすという行為にも「合図」と「拍子」という二つの側面がある。例えば、多数を占めると考えられる念仏者の仏具としては、主に拍子をとるのに用いられるが、最初と最後に鳴らされるのは合図といえる。そしてこの「合図」という機能にのみ使われた場合は、仏具であるをまたない。また、仏事以外での「拍子」、すなわち諸芸能に用いられたと仮定した場合、これも仏具とはいえないであろう。

ただし、ここで断っておくが、私は鉦鼓が仏具ではないことを、論証しようとしているのではない。ただ、仏事以外での使用を喚起し、外の梵音具(梵鍾・鰐口・磬・雲版等)とは、やや異なつた、より俗に近い性格をもっていた可能性を考えてみたいと思うのである。しかしこれは、遺物だけでは明らかにし難い。そこで、第二章でとりあげた一六例について、出土地点(遺跡)の性格から鉦鼓の使用形態を類推していくことにする。

これらは、不時発見のため正確な出土状況がわからないものが多いが、一応以下のように整理される。(2)参照。

館……………①、⑪、⑫、⑮?

寺社……………②?、⑬

塚……………⑥、⑦、⑧、⑨、⑮

墓……………⑤

不明……………③、④、⑩、⑭、⑯、⑰

この内、塚や墓に納められていたものは、その性格上信仰遺物としての仏具とみなしてよいであろう。さても、奇異に感ずるのは、寺院からの出土が少ないことである。これは、寺院に必要なものであるから、「出土」しなかったのであろうか。しかしそれならば、館からの出土が多いのは、なぜであろうか。資料数が限られている現状で速断するのは危険であるが、館の場合、戦陣での「陣鉦」としての鉦鼓、あるいは合図としての鉦鼓がかなりの程度保有されていたのではないか、という推測が浮かんできく。しかしまた、各地の館からは、一々例を挙げるまでもなく、多くの仏具が出土しているという実態もあり(八)、一概に決し難いものがある。今はこれ以上立ち入れないが、鉦鼓という器具は、仏事以外にも用いられた可能性のあることに注意を向ける必要がある。

(5)おわりに

以上、越後から出土した鉦鼓を中心に、時期比定に重点をおいてみてきた。これらの信仰用具については、伝世することもあるが、個々の所産時期を明確にするのは難しく、どこまで当を得ているのか心もとないところである。また、その変遷に当たっては、口唇部形態のみで立論したが、外にも界線や縁の形態、耳の孔の開け方、伏鉦の脚の付け方等々、多くのバリエーションがあり、意を尽くせなかったところも多い。なお、近世の鉦鼓については、縮小化傾向は止まるものの、耳の下部の鰭が矮小化していくようである(九)。まずは、一応の叩き台として愚見を提示し、大方のご叱正・ご教示を乞うものとしたい。

(一) 平成七年一月に、京都六波羅密寺を訪れ、空也遊行像を親しく実見する機会を得た。その感動はいうまでもないが、ここでは本稿との関係で一言だけ述べておく。それは、空也がぶら下げていたものが鉦鼓ではなく、両面に打面がある鰐口状の「かね」であったということについてである。それまで一方からの写真しかみたことのなかった私にとつて、それは改めて仏具としての鉦鼓の始原を考えさせられるものであった。ただし鰐口についても、盛行は一三世紀に入ってからであるので(久保常晴「平安・鎌倉時代鰐口銘文集」『仏教考古学研究』一九六七、一一、ニュー・サイエンス社、東京)、空也が使っていたものは鉦鼓・鰐口の転用ではないということになる(ただしこれは、像の写実性を信じての議論ではあるが)。よつてここでは、かねをぶら下げてたたくという宗教行為自体については、通説のごとく空也に始まることを疑うのではないが、そこにはつきりと鉦鼓を用いるのは、一遍(一二三九〇八九)の登場してくる、一三世紀をまたねばならないと考えたいと思う。

(二) ここでは一遍(一二三九〇八九)の弟子聖戒の描いた歎喜光寺所蔵本を底本とした『一遍上人絵伝』(日本の絵巻二〇、中央公論社、一九八八)を用いた。鉦鼓は、すべて踊り念仏のシーン(一六四〇五、一八〇、一九五、二二一、二三八、二九四頁)でのみ描かれている。

(三) 増本喜久子「鉦鼓」『国史大辞典』第七巻、五〇二―三頁、一九八六

(四) 『一遍上人絵伝』では鉦架をもつ手と鉦鼓の関係から、両面を槌で打つ場合があつたものと考えられる。なお、一遍は凹面内面を打っているようである。

(五) 蔵田編一九八七、四九頁、所載の伏鉦をみれば、鎌倉時代より存在したようであるが、出土例からみると、民衆に浸透するのは室町時代以降のことと思われる。

(六) 外に戸根与八郎氏より、北魚沼郡守門村に天文八(一五三九)年銘を持つ鉦鼓が存するというご教示をいただいたが、未見。後日を期したい。

(七) 第十巻、五〇五頁、一九七四、小学館

(八) 私は先の概報(中条町教委一九九三)に、次のように記した「中世が信仰の世界であれば、そしてそこに生きていたからこそ、両者の境界は認めにくいといえるであろう。すなわち、城館跡から出土した鉦鼓の場合、城という機能に注目すれば、いくさ時に用いたものの、生活拠点という面に注目すれば、日常の信仰にかかわるもの、という二様の考え方ができようかと思われるが、多くの場合、それを判断することは困難である。(中略)まずは、両方の可能性をもつもの、というだけにおきたい。」(六四〇六五頁)と。この考えは改まつていないが、今回はさらに合図の道具としての可能性を追加した。これに関連して、館内の持仏堂といった問題をつきつめて考えていかねばならないが、館と寺院の関係については、新潟県新発田市の宝積寺館跡をめぐる、それを寺院とする中井均・橋口定志の論考(中井一九九一、橋口一九九二)、及びそれに対する調査者の田中耕作の反論(田中一九九四)がある。ここでは、その内容にはふれられないが、私見では、館あるいは寺院を構えるほどの武士及び僧侶は、ともに領主階級といつてよく、したがって館主が僧侶である場合も当然あるから、明確な伽藍配置をもつ寺院以外は、館(俗)と寺院(聖)を分離峻別することは難しいと考えている。なお、宝積寺館跡の性格については、近々別稿を用意している(本書第一編第三章付編)。

(九) 東博一九九〇、九三頁、参照。

原補註

脱稿後、中条町に隣接する岩船郡荒川町海老江の馬頭観音堂を訪れたおり、延享二(一七四五)年銘の伏鉦を確認した。それは、円柱状の脚部を有しており、本稿でいうⅡ期一四世紀後半代の特徴をもつものであつた。ただ本例の場合、紀年銘は体部の側面に彫られているが、さらに口唇部下面に「越

後国岩船郡海老江村施主」以下村人八名の名が刻まれている。このような例は、今のところ中世では確認できないので、一応次のように解釈しておきたい。すなわち伏鉦を造る際に、それまであった中世のものと同じ形に模倣したと考えたい。この問題については、今後近世の遺例を検討していきたいと思う。

補註

その後、岩船郡塩谷円福寺で縁部径二七cm、口径三〇、三cm、器高八、三cmの鉦鼓を調査する機会があった。口唇部下に「京堀川住 筑後大塚常味作 越後之国岩船郡塩屋町 塩屋円福寺求之 寛文六丙午年五月日」の銘が彫られている。口縁部は、Ⅱ期の特徴を備えている。

このように、江戸時代に京都では、一四世紀代の鉦鼓を見本として同形のものを製作していたことがわかる。したがって、出土状況が明らかでない本文中の⑩、⑰は、近世の所産である可能性を考慮に入れる必要がある。

3 古式錫杖考―日光男体山山頂遺跡出土錫杖の位置付けをめぐる―

(1)はじめに

先般筆者は、主に出土仏具資料を用いて密教法具の変遷を概観したことがあった(本章第一項、水澤二〇〇六)。そこでは、三具足や錫杖にも言及したが、行論の一部であった関係で深く掘り下げることができなかった。そこで本稿では、古式錫杖を多数出土した日光男体山山頂遺跡出土品を中心に、その位置付けを考えていきたいと思う。

なお、遺物の縮尺は、四分の一に統一した。図は、基本的に各発掘調査報告書及び『日光市史上巻』(日光市一九八六)のものを引用したが、錫杖6・9は(大和久一九八九)所載図から、錫杖19は筆者が写真から起こし、独鉈杵・三鉈杵は(時枝二〇〇三)所載図から、それぞれスケールを調整して転載した。

(2)古式錫杖の分類(第112図)

ここでは、外輪に括れない古手のタイプのタイプを古式錫杖とする。古手のものについての基本資料は、『日光男体山山頂遺跡発掘調査報告書』(日光二荒山神社編一九六三)所収の錫杖頭群三四点である。また、それらを含めた古式錫杖について、大和久震平による分類整理が提示されている(大和久一九八九)。以下、両氏の分類を示す。

三宅分類(日光二荒山神社編一九六三)

第一形式 柄に宝珠形の輪を付着させるもの。鉄製品二点のみ。

第二形式 輪が蕨手状になるもので、柄が輪の上まで続くものと、輪内にとどまるものがある。柄下端は、挿入形と袋穂形がある。ほとんどが本形式に区分されている。

第三形式 輪が逆蕨手形となっているもの。鉄製品一点のみ。

第四形式 輪が二重になり、柄の先端は内輪内にとどまる。鉄製・銅製各一点。

大和久分類(一九八九)

第一類 鉄柄に輪を付するもの。柄が上まで突き抜けている。

第二類 輪が蕨手状を呈する。柄と輪の関係は第一類に同じで、柄下端は、挿入形と袋穂形に細分される。三宅第三形式も本類の一分類とされる。

第三類 柄の先端が輪中にある。柄が輪に付着する場合と離れる場合があり、蕨手形を有する。

第四類 輪が大小にかかわらず、二重となる。

大和久分類は、形態と材質の関係を確かめるために、あえて材質を問題とせずに分類を行われたものである(一)。その結果は、同氏が示されているとおりであるが、明らかに形態と材質との相関が認められるため、ここではそれを勘案し、以下の修正分類を示す。

本稿の分類

I類 柄の先端に輪が付されるもの(大和久第三類の一部と第四類)。鍛鉄製品(a類)と鑄銅製品(b類)がある。柄下端は、袋穂形が主流となるが、鉄製品の半数は挿入形である。

II類 I類の柄先端と輪上端がつながったもの。すべて鑄銅製品で、柄下端は袋穂形のみである(大和久第三類の一部)。

Ⅲ類 柄が上まで突き抜け、輪の下端が蕨手状に折り返されるもの。柄下端は、挿入形と袋穂形がある(大和久第二類)。鍛鉄製品のみ。

Ⅳ類 柄が上まで突き抜け、素環の輪がつくもの。柄下端は、挿入形のみ(大和久第一類)。鍛鉄製品二点のみ。

Ⅰ類は、柄の先端近くに輪下方の折り返しをつなぎ、柄の先端よりも上方で輪の上端を合わせたものである。鍛鉄製品(a類：第112図4～8)は、剥がれやすかったために、柄と輪を鉄紐で留めているものがあり(第112図3・4)、これは痕跡として銅製品(第113図6～12)に連綿と引き継がれていく。この鑄造製品に必要のない痕跡装飾の存在は、銅製品より鉄製品が先行することを表しているが、その変化がいつ頃生じたかは、後段で検討したい。なお、輪頂部を尖り気味に収める銅製品(第113図6・11・12・14・17)は、心葉形をなす古手の鉄製品の影響を残すものであろうか。なお、鉄製で装飾性を高めたものとして、輪下端の折り返しをつないで二重としたものがある(第112図5)。

本類の鑄銅製品(b類)の装飾は、蕨手状を基本として多岐にわたり、輪頂や四座などの多様性を考えれば、次のⅡ類と合わせて将来的には細分類が必要となろう。ここでは、素紋から輪上に金剛牙・雲形・蔓草節などが置かれるようになり、柄端や輪頂・蕨手上等に塔形・水瓶・宝珠・仏像などが配されることを確認しておく。また蕨手を双龍鳳頭にみたり、渦巻き状に変形させたりするもの、上や側につないだりするものも現れる。

Ⅱ類は、Ⅰ類の柄と輪が離れていることからくる脆弱性を補強するために、柄の先端と輪の頂部をつないだものである(第140図14～17)。本類は、すべて銅製品である。なお、蕨手を柄の上で一体化させて輪となし、さらに輪頂とつないだ13は、Ⅰb類とⅡ類の中間形態といえよう。以後、Ⅰ類との並存を経て、本類が中世錫杖へと連なっていくことから、最新型式と考えられよう。

Ⅲ類は、輪の上端を柄に沿わせ、下端を蕨手状に对称に折り曲げるものである(第112図2)。Ⅲ類は、柄が中央を貫くという違いはあるが、Ⅱ類と形状が類似することから、その亜流と考えられよう。なお、一点のみ上を折り返した逆蕨手形が認められる(第139図3)。柄下端は、袋穂状となるものが多いが、挿入型もあるようである。

Ⅳ類は、柄の上端近くに輪の両端を打ちつけ、下端を柄に重ねる(第112図1)。柄下端は、挿入型で長く作られる。二点のみの出土であることから、柄が長く不安定であったために、あまり用いられなかったものと思われる。本類の輪の形態は、技巧的に拙く、原初形態と考えられないこともないが、すでに仏具として下部を折り返して柄に添わせるという儀軌が成立している以上、退化形態の一種と考えるべきであらう。

(3) 古式錫杖の年代観について

① 鍛鉄製錫杖

大和久震平は、柄が挿入形になることを、古い特徴の第一に挙げ、それらを九世紀初頭以前に位置付けている(大和久一九九二)。しかし、挿入型は鉄製品を袋穂型につくる技術的な問題からくる形状の可能性が高い。さらに原初形態と考えられた輪を柄の側で蕨手に折り返さず下部を柄に打ち付けるタイプ(Ⅳ類)を、七世紀末～八世紀前半に位置付けているが、これもまた省略(手抜き)技法である可能性がある。Ⅳ類が日光男体山山頂遺跡のみで二点しかみつかっていないこともそれを示唆する。そもそも想定された時代に、男体山頂遺跡はまだ形成されていないのではなからうか。

次いでⅠa類については、延暦元(七八二年)に日光男体山山頂遺跡を開いたとされる勝道上人の所持品と伝えられている輪王寺所蔵錫杖がある(第112図8、輪幅一二・五cm)。これは、総鉄製で輪上に装飾のないシンプルなものである。伝承をそのまま事実と考えてよいかどうかはひとまず措くとして、奈良時代の遺例としてしばしば引き合いに出される正倉院蔵の鉄製錫杖に輪形(心葉形)が類似する(第112図6、光森編一九九三(二))。正倉院例の場合、後代のものに比べて大型であることに、まず特徴がある(輪幅一四cm)。そして、蕨手部分が円形に巻き込まれている。これが後に開いて蕨手状を呈するようになるのであろう。実際、右の輪王寺例では、通常の蕨手状となっており、柄の先端や輪頂も相輪状であることから、正倉院例より

時期が下るものと思われる。この蔵手部の巻き込みに関する類例として、岩手県宮古市山口館跡出土品がある(第122図7、岩手県埋文一九九三)。本錫杖は、一〇世紀後半の堅穴住居跡が埋まりかけた段階で鉄製三鈷鑊等と共に廃棄されたものである。輪の両肩二箇所には宝瓶を付し、柄下端が穂袋状となり、小型化している(輪幅一〇cm)といった相違点があるが、全体的な形状は右に挙げた正倉院例に最も近い。

なお、Ⅲ類の類例として、青森県南津軽の平川市(旧尾上町)李平下安原遺跡からの出土品がある。遺構に伴っていないため時期は明確ではないが、遺跡の存続時期である八世紀後半～一世紀初頭あるいは一二世紀後半以降の所産と考えられる。全長三〇cmの挿入型で、輪径9cmほどのものである(青森県教委一九八八、青森県二〇〇三・二〇〇五)。

以上、伝世品はともかく、山口館跡の出土例から一〇世紀以降に鉄製品が存在していたことを押さえておきたい。なお、鉄製品については、次節において再度ふれる。

② 銅製錫杖

奈良時代とされる正倉院の白銅製錫杖(第113図9)は、Ⅰb類で輪上四座に蔓草節裝飾を付するものである。未図示のもう一点は、輪上に瓶や金剛牙を付し、蔵手に挟まれた柄部分に「×」を付す白銅製のⅠb類で、径一七・五cmの大型品である。9は、柄に紐帯を鑄出していないことから、Ⅰb類の中では古様を呈するが、正確な時期は不明である。ここでは、その所在が南倉ということもあり、『東大寺要録』にある天曆四(九五〇)年の絹索院双倉からの移入品の一つである一〇世紀前半頃の遺物と、ひとまず考えておきたい(四)。これに関する類例としてよく引かれる法隆寺所蔵の二点の銅製錫杖の一点は、四座に金剛牙を置くⅠb類である。もう一点が四座に蔓草節を配するもので、先に挙げた正倉院の白銅錫杖に類似するが、柄の先端を欠くものの輪頂部下に欠失痕跡が認められることから、Ⅱ類と考えられ、さらに新相を示す。これらについては、天平一九(七四七)年の資財帳記載錫杖に充てられることが多いが、これは仏像用のものであり、確実なところでは、『金堂日記』の承暦四(一〇八〇)年以前である(香取一九三一a)。

Ⅰb類の類例として、鹿島神宮寺経塚出土銅製錫杖(第113図11、阿久津一九八五)を取り上げる。本例は、鉄製環の残決が残り、柄と輪を鉄紐帯で結わえている。また同時に鉄製独鈷杵を伴う。本錫杖は、経塚出土遺物であることから、一一世紀以降の生産年代をもとむ。

その他のⅠb類としては、那智経塚(第113図10、東博一九八五)、越中の剣岳・大日岳出土例があり、特に大日岳は素輪例として注目される(香取一九三一b、大和久一九八九)。

ここで、出土鑄型をみていこう。第114図aは、群馬県前橋市(旧粕川村)友成遺跡から出土したⅠb類の鑄型である(能登ほか二〇〇四)。堅穴住居からの出土で、相伴土器から一〇世紀第3四半期に位置付けられている。四座に金剛牙を置き、双龍が外を向くタイプである。本鑄型は、器面観察から踏み返して造られたと考えられており、それ以前からⅠb類が存在していたことは明らかである。なお、能登・梅澤両氏が集成された鑄型出土遺跡の一覧表をみると、錫杖鑄型は、平安とのみされていてそれ以上時期がはっきりしない遺跡を除くと、ほとんどが一〇世紀以降の所産である(五)。唯一、「九一〇世紀」と九世紀代の可能性がある長野県上田市の国分遺跡群出土錫杖鑄型が第3図bである(上田市教委二〇〇二)。一見Ⅱ類にみえるが、写真図版からⅠb類であることがわかる。本例は、一回り小型ではあるものの、四座の飛雲、蔵手上の反り返り、柄先端や輪頂の形状等、第2図9の那智経塚出土品と非常に似通っており(六)、その踏み返し品であると考えられる。

次いで、輪の大きさを比較すると、Ⅰ類・Ⅱ類ともに径八～一〇cmとなるものが多く、鉄製品も同様である。ただ、正倉院とその後継の輪王寺の鉄製品(第139図6・8)や那智経塚など古手と考えられるものは径一二cm以上とやや大きめで、裝飾もシンプルであることから、時期が遡る可能性が高い。なお、全体形状として横幅に対する高さの比率をみると、Ⅰb類では〇・八二前後のやや扁平となるもの(A群)が多いのに対し、Ⅱ類は〇・八五程度とやや縦長となるもの(B群)が多い。これまでの検討により、Ⅰb類がⅡ類に先行すると考えると、一一世紀から一二世紀へかけて、やや輪

が縦長になるという見通しを立てておきたい。ただ、両者ともに○・九を超える縦長タイプ(C群)のものが少数あり、ここに下方に括れをもつ製品第115図18が含まれていることから、最も新しい一群と考えておきたい(七)。したがって、両者はある時期から並存するのであり、徐々にIb類からII類へと変遷したものと考えておきたい。なお、男体山山頂遺跡出土鉄製品の輪の縦横比も銅製品と同様に各タイプがあり、並存していた可能性が高い。これらをまとめたものが、表30である(八)。

さらに、遊環をみていく。日光男体山山頂遺跡出土銅製錫杖で、環がわかるものは、鉄製が五点、銅製が四点である。内訳は、銅製錫杖に鉄環がつくものはすべてIb類であり、銅環がつくものはすべてII類という結果になった。この点は、先に述べた鹿島神宮寺経塚出土銅製錫杖でも同様であった(九)。鉄製錫杖には鉄環が付き、後代のものが銅環を付することからすれば、鉄製環を銅製輪に付すものは、両者の折衷様式にあたる一群と位置付けることができよう。この点からもIb類は、II類に先行するということが明らかである。

ここで、柄下部についても検討しておこう。銅製品の輪下の部分については、素紋で下端部のみ区切るもの(第140図11・12・13)のもの、二条紐等(一〇)で四分割(第113図10)、三分割(第113図14・16)、二分割(第113図15・17)するものがある。素紋のものは、Ib類に多いが、II類にも認められる。紐で分割するものは、Ib・II類ともに三分割のものが多く、輪に括れを入れ始める第115図18と同じ輪のグループ(C類)では、二分割のものが目立ち始める。古様を呈する那智経塚出土錫杖第113図10が四分割柄であることから帰納すれば、徐々に区画数が減っていく方向性を認めてよからう。なお、柄の下端についても、第113図17はやや裾が開ききみとなり、鎌倉以降の先駆けをなしている。

以上の検討の結果、少なくともIb類は一〇世紀前半に、II類は一一世紀後半に出現していることがわかる。

ここで、古式錫杖の下限を考えるために、最も新しく位置付けた銅製錫杖の輪の括れについてみていこう。これについては、以前にも少しふれたように、金剛杵(鈴)の脇鉗と相関があるように思われ、その括れの採用に大きく預かっていた可能性が高い。古手の錫杖頭は、これまでみてきたように輪に括れをもたないのであるが、素紋のものから、金剛牙や蔓草・飛雲意匠などが輪の四方に配されるようになり(四座)、やがて脇鉗状の括れが入られるようになる。それを如実に表しているのが第115図18に示した男体山頂出土錫杖で、括れは下半の一对しか認められず、やがて上の蔓草部分が上部の括れへと換わる。この過渡期の様相については、すでに滋賀県湖南市(旧石部町)常楽寺所蔵品などを例として、香取秀真が述べているところでもある(香取一九三一a・b)。

ここで注目したいのが、金剛牙等の付される位置である。金剛杵(鈴)の脇鉗では、最初は括れを避けるように付されるものが、すぐに括れの外側に付されるようになる(一一)。錫杖でも、四方に括れを入れる康治元(一一四二)年銘をもつ静岡県鉄舟寺錫杖では、括れ部を避けて付されている。それが、建久八(一一九七)年銘をもつ埼玉県歓喜院例になると、四方括れの外側に装飾を付すようになる(一二)。この動向は、金剛杵の金剛牙の付し方に通底するものと思われる(一三)。したがって、これらを同時に生じた技法変化と考えるならば、無括れから括れ入りタイプへの変化は、一二世紀代の早い時期に求められるであろう。

なお、右の鉄舟寺錫杖は、蕨手が輪につながり、眼鏡状を呈するものである。これは、先程柄の分析から最も新しく位置付けた男体山頂出土錫杖II類の第113図16と同工であり、最も新しい一群に位置付けられよう(一四)。したがって、無括れの古式錫杖の生産は、一二世紀前半頃を下限とするものと考えておきたい。

(4)日光男体山山頂遺跡Bトレンチ出土品

ここで、『日光男体山山頂遺跡発掘調査報告書』(以下、単に報告書という)に戻ってみよう。共伴関係は不明とされているが、出土土器・陶器の大半

は、九世紀後半～一二世紀代に所属するものである。開山期とされる八世紀末～平安初期にかけての遺物は、忿怒型三鈷杵などあるにはあるが、土器を含めてもごく少量であり、この時期に錫杖の大半をもつてくることはいかにも無理がある。

ここで、遺物の平面図が示されているBトレンチに的をしぼって検討してみよう。本遺物群については、すでに時枝務が一部言及しているところであり(時枝二〇〇三)、椋山林継も注目している(椋山二〇〇六)。遺物群は、幅二〇～三〇cmの岩の隙間にぎつしりと詰め込まれていたもので、層位的には、図からみて表土下六〇～一〇〇cmの間に集中しているようである(第116図上)。平面図の出土状況が、どれくらい深さの状況であるのかについて言及はないが、右の集中範囲の主なものとして推測される。ただし、出土状況図(第116図下)に遺物番号が記されていないことから、現物の比定が難しいものもある。

さて、これらの遺物について報告書では、他のトレンチ出土遺物を含めて、繰り返し過酷な自然環境によって移動しているため、層位的に区別できる状態にないことが強調されている。しかし、ことBトレンチに関して椋山は、鏡が鏡面を内側に向けて置かれていることを指摘され、遺物の大部分が(二〇世紀頃に)一回あるいは二～三回という数少ない回数による一括埋納物である可能性を想定している(二五)。筆者も空間的出土状況からいって同感であるが、椋山は個々の遺物について言及していないことから、次に平面図に示された遺物の検討に移りたいと思う。

まず、第116図右の銅盤下の主要遺物を含めた微細図の遺物数を確認しておこう。

銅鏡一〇、銅印一、鉄製錫杖四、銅製錫杖一、銅製独鈷杵二、銅製三鈷杵二(二六)、銅製三鈷剣一、銅製塔鉢形合子二、銅盤一、銅製蓋一、銅製柄香炉一、鉄・銅製鈴四、鉄鉢類二、鎌一、刀子三、土器二の三八点となる。これらは先に述べたように、特定することが難しいものもあるので、微細図出土遺物を含むBトレンチ出土遺物の主なものを示したのが、第117図である。

銅鏡は、唐式鏡三面と大型の八稜鏡は確実であるが、その他六面は、特定できない。このように古いものを含むが、平面図の点数からいって、報告書で平安末期に位置付けられている小型八稜鏡を含むものと考えられる。ただし、円形の藤原鏡は含まれておらず、全体についても藤原鏡が広く流行した一二世紀後葉には男体山頂への納鏡の風習が衰退しつつあったという指摘がある(一七)ことから、これらは一二世紀前半頃を主体とする埋納と考えておきたい。

銅印は、「陽城私印」と「球私印」がある。編年が確立されているわけではないが、有孔形態から九世紀後半以降の所産であると考えられよう(歴民博一九九九)。

鉄製錫杖は、第112図1のIV類一点、第117図5のIII類一点、同図16・17のIa類二点が出土している。IV類は南端、柄の折れている16は西壁際のものが相当し、17はそれより小型であることから16の東南に描かれているものであろうか。もう一点は、銅盤下に描かれている蔵手が逆に書かれているものであるが、III類の5とは、異なる形状である。

銅製錫杖は、第113図の15・16の二点。鉄製錫杖IV類の脇の岩際に立てられた状態で出土している。小型であることやCトレンチ中央(報告書第11図微細平面図)に15と思われる錫杖が書き込まれていることなどから、16が該当するものと思われる。

銅製独鈷杵は、四点が出土しているが、長さから銅盤の上の一点は4あるいは7、銅盤下は8と考えられよう。4が最も古様で鈷部に匙面をもつ。7・8は、鈷部の匙面を失っているが、柄部より鈷の方が長いこと、鈷の節に紐帯が巡らされていることから、一二世紀代の所産と考えられる(一八)。

銅製三鈷杵は、全長16cmの大型品である。藤原時代とされている。

銅製三鈷剣は、剣が地中に残された柄部のみが取り上げられている。報告書では、嘴状突起や蓮弁形態から藤原様式をとどめるとしながらも、鈷の形状から鎌倉時代とされている(一九)。

銅製塔鉤形合子は、四点が出土しているが、内二点が微細図に描かれている。南側のものは先端を欠いているようであり³、もう一点は大型で丸みをもつことから²あるいは⁷であろう。製作技法から、正倉院南倉の合子よりも時代が下るものと考えられており、相輪数も正倉院の七・五層から三層に減少している。南倉遺物については、すでに銅製錫杖の検討にあたつて一〇世紀前半頃の年代を想定したことから、それより下る一〇世紀後半以降の製品と考えられる。

銅盤は、にわかに時期を特定できないが、三鈷杵を覆うように伏せて置かれている。

銅製柄香炉は、中尊寺例以前の経塚遺物に類例が求められている。縁の厚い正倉院南倉例よりもかなり時期が下るものである。

鉄鉢は、三点が出土しているが、微細図の形状から¹³が該当しよう。

土器類は、四点が報告書に載っており、微細図には完形品と思われる二点が描かれている。しかし、口径¹¹cm強の土器皿²⁵⁵が微細図の一点に該当すると思われる以外は、小型土器と墨書土器・灰釉陶器の破片資料であり、今一点は不明である。²⁵⁵は、下野国府の最終段階の遺物群栃木県埋文一九八八)よりも底部が広いことから、一二世紀中葉以降で一二世紀中葉の内に収まるのでないかと思われる(二〇)。

以上の遺物群を年代順にまとめると、以下のとおりとなる。

九世紀後半以降・・・銅印

一〇世紀後半以降・・・銅製塔形合子

一一世紀後半以降・・・銅製錫杖、銅製三鈷杵、(銅盤)、銅製柄香炉、土器

一二世紀・・・銅鏡、銅製独鈷杵

鎌倉・・・銅製三鈷劍

さて、これらのうち密教法具については、一二世紀に入ってからまとまった量がもたらされた可能性が指摘されており(二一)、その他の製品も伝世の可能性は十分ある。まして、銅印や塔型合子に関しては、編年の位置が不確定なものであり、一一世紀以降の所産である可能性を否定できないものである。したがって、これらもその他のものと同時期のものと考えても大過ないであろう。また、鎌倉時代とされた三鈷劍も「嘴状突起や蓮弁形態から藤原様式をとどめ」ているものであり、一二世紀代に遡る可能性を否定できるほど編年観が確立しているわけではない。

このように考えてくると、これらの遺物群は、八咫鏡から圈円鏡に移り変わる段階である一二世紀前半の内にまとめて納置されたものと考えられよう。実際、最も年代を計る上でのスケールとなり得る土器がはつきりしないことは残念であるが、伝世遺物をいくらか含む可能性があるとはいえ、これらBトレンチ出土遺物群を該期の基準資料として位置付けることによって、男体山山頂遺跡もまた再評価していくことができるのではなからうか。

(5) 小結

前節の検討によつて、Bトレンチで共伴した鉄製錫杖各種(Ia類・III類・IV類)及び銅製錫杖II類は、一二世紀前半に使用されていたことが明らかとなった。そしてそこにIb類の鑄銅製錫杖が伴わなかったことは、その主体的な時期がそれ以前にあることを示唆している。

最後に以上をまとめて本稿を閉じることとする。

・ 鉄製錫杖で最も古い形態と考えられる正倉院例Ia類は、山口館跡例との比較及び文献から一〇世紀前半あるいは九世紀後半まで遡る可能性がある。したがって、それに次ぐ輪王寺勝道錫杖は、一〇世紀中葉以降となろう。

・ 鉄製錫杖III類・IV類は、その存続時期から考えて、Ia類の先行形態ではなく、Ib類から派生したII類を真似たもの、あるいは省略形であつ

たと考えられる。したがって、Ⅱ類と併行する時期の所産である。

文献から、白銅製錫杖Ⅰb類は一〇世紀前半、Ⅱ類は一一世紀後半には出現している。なお、Ⅰb類については、出土鑄型からもその年代が支持される。

鉄製錫杖Ⅰa類の柄と蕨手部分に巻かれている鉄帯は、Ⅰb類の装飾に影響を与えていることから、それが採用されていない正倉院例以降である一〇世紀中葉頃に銅製品に採用されたものと考えられる(ただし必ずしも柄に紐帯が鑄込まれるとは限らない)。なお、素材についても、その頃に白銅製品から銅製品へと変更されたものと思われる。

銅製品は、一一世紀から一二世紀にかけて、輪がやや縦長になっていく。

銅製品の柄は、素紋のものも存在するが、二条紐などで四分割するものから三分割、そして二分割へと区画が減少していく。二分割のものは、一二世紀代に出現するものと思われる。

男体山山頂遺跡のⅠb類には鉄製遊環が付くのに対し、Ⅱ類には銅製遊環がつく。これは、鹿島神宮寺経塚出土銅製錫杖(Ⅰb類)でも同様であり、東国の特徴である可能性がある。

輪に括れを入れる錫杖型式は、一二世紀前半の内に始まる。この時期は、八稜鏡から圈円鏡への転換期にもあたり、男体山山頂での祭祀行為が変換期を迎える。それを象徴するBトレンチ一括遺物に、唐式鏡等の非常に古い鏡が含まれていることは、古きものへの決別といった意味が籠められていたのではなからうか。

註

(一)大和久一九八九、七三頁下段

(二)大和久一九八九、六九頁下段参照。なお輪王寺鉄錫杖は、柄及び輪頂先端が相輪状に細かく分割されており、輪中の蕨手も後代のものに近いため、やや時期が下るものと思われる。

(三)堅穴住居の共伴土器からみた年代比定は、(井上二〇〇六)による。

(四)当然ながら天平勝寶八歳(七五六年)の「東大寺献物帳(国家珍宝帳)」に、錫杖は記載されていない。また、天曆四(九五〇)年の移入品の一つという仮定とても、明確な根拠があるわけではないが、南倉の遺物相からみて時期的にふさわしいのではないかと思われる。例えば、南倉の銀鉢には、延喜一四(九一四)年の施入銘があり(松嶋編一九七八)、傍証となろう。もちろん、先の鉄製錫杖も同様である。正倉院宝物は、一万点余からなるが、その内わずかに一五〇点のみが聖武天皇所縁の宝物であり、施入以後に随時追納されてきたことが明らかにされている(由水一九七七)。なお、平成一八年度の第五八回『正倉院展』図録(奈良博二〇〇六)には、右にふれた国家珍宝帳及び銀鉢のほか、後段でふれる塔鉢形合子や柄香炉が原色で収録されており、参照願いたい。

(五)(能登ほか二〇〇四)七〇頁表1。錫杖鑄型出土遺跡は八遺跡あり、三遺跡が平安と記されている。

(六)このことについては、すでに(能登ほか二〇〇四)七四頁に指摘がある。おそらくその同型品の踏み返しであることから、輪径が縮小したものと思われる。

(七)なお今回は、詳しくふれられないが、第142図20は、輪王寺所蔵の正応元(一二八八)年銘錫杖で、縦横比〇・九二と18とほぼ同じとなり、一三世紀代が同様の比率で推移した可能性がある。次いで、第142図22は、輪王寺所蔵の秀海銘錫杖で、人名から一四世紀初頭に位置付けられてい

る(大和久一九八九、六八頁)ものである。本例では、縦横比がほぼ等しくなっており、さらに縦長となっていくようである。ただし、同図の19の長谷寺の健長三(一二五一)年銘錫杖桜井市一九八九)や、同図21の鎌倉期とされる妙楽寺錫杖(瀬戸谷二〇〇五)は、やや扁平であり、それが大型品であることからくるのか、西日本の地域性であるのかは、今後の課題である。

(八) 鍛鉄製品は、铸銅製品ほど形状に規格性があるとは考え難いが、各種のサイズがある。

(九) 那智経塚資料では、記述がないが、写真からみて銅環が付されているように思われる。この差異は、多様な鉄製仏具が存在した東国と、それが少ない西国で違いがある可能性があるが、現時点では不明である。ただ、音色は、やや異なるものであったであろう。

(一〇) (日光市一九八六)二三八頁第一三〇図から引用した第123図17の男体山山頂遺跡大正一三年出土Ⅱ類錫杖の柄の中位の紐帯は、図では一見子持紐のように表現されているが、(栃木県一九二七)所載の写真から判断して、下部と同じ二条紐である。子持紐は、正応元(一二八八)年および一四世紀初頭の輪王寺所蔵錫杖(第115図20・22)に認められるように、鎌倉後期以降に多用される意匠であり、本錫杖の段階では、出現していないものと思われる。なお、(水澤二〇〇六)を参照のこと。

(一一) (香取一九七六)二三四頁。ただしこの場合は、男体山頂と反対に上半に袂りが入れられている。(滋賀県立琵琶湖文化館一九八三)一〇九図を参照のこと。

(一二) (後藤一九三七)六一二頁、図版第九四

(一三) (水澤二〇〇六)参照。ただし嘴形突起は、おそらく獅嚙裝飾から派生したもので、基本的にはその意匠を錫杖は採用していないように思われる。

あるいは蔓草節がその影響を受けた可能性があらうか。したがって嘴形突起は、それ以前から存在していた可能性が高い。なお石田茂作は、藤原時代の「子島曼荼羅」中に嘴形突起のない三鈷杵が描かれていることに注意を喚起している(石田一九六五)。

(一四) 同工の三鈷鑊(報告書一九三頁第60図4)も同時期の所産と考えたいところである。

(一五) (梶山二〇〇六)六一二頁

(一六) 三鈷杵は、微細図に二点が表示されているにもかかわらず、遺物各説では一点のみしか報告されていない。このことは、すでに時枝の指摘がある(時枝二〇〇三)。

(一七) (時枝一九九一)一三頁。なお、(久保一九九九)を参照のこと。

(一八) (水澤二〇〇六)四八五頁

(一九) 図は、蓮弁の状況などを勘案して、(日光市一九八六)所載のものを採ったが、剣側の並行沈線が落ちていたので書き足した。

(二〇) なお、(田熊ほか一九九〇)及び(服部一九九七)を参照したが、当該期の土器様相は不明瞭であり、一点のみでは時期比定が難しいところがある。

(二二) (時枝二〇〇三)七〇一頁

第三章 中世石造物

第一節 板碑

1 北東日本海型板碑

政治的な混乱期である南北朝期を中心に板碑が日本海沿岸地域に広がる。これらの板碑の多くは丸みを帯びた河原石を用いているが、板状の石材を用いる地域もある。いずれにせよ、武蔵型板碑とは同じ板碑という名前で呼ぶことも躊躇してしまいそうな不定形のものである。最も多いのは、河原石に種子のみを刻むもので、紀年銘等の銘文を刻むものは少ない。また、能登・加賀から津軽西浜を分布域として、時期的にはほぼ一四世紀代に限られる（北陸中世考古学研究会二〇〇〇）。ここでも越後では、信濃川河口から一〇〇km上流の群馬県境近くの魚沼地域にまで同タイプの板碑がまとまって所在しており、関東圏の影響をうけているとはいえず、内水面交流を物語るものとして注目される。これらの造立年代は、鎌倉・奥州街道沿う太平洋岸地域の地域と較べるとかなり始まりが遅く、かつ多くを板状に造る彼の地のものとは対照的である（大石編二〇〇一）。ここでは、この時空のまとまりを有する板碑群を北東日本海型板碑とよぶ。

これらの板碑群は、北東日本海域に広く分布しており、その発端は最も古い紀年銘からみて能登半島に起源をもつものと考えられる。とするならば、これらの板碑群は、関東の影響と畿内の影響が結びついて成立したといえるかもしれない。ただし種字相の違いから、おおまかにいって密教系の大日信仰から浄土系の阿弥陀信仰への流れがみてとれ、複雑な様相を呈している。そして、南北朝期以降に限っていえば、造立者銘に「阿」号をもつものが多いことなどから考えて、浄土・時宗系の人々が深くかわっていたものと考えられる。時衆の商業的性格は、つとに指摘されているところであり（網野一九九六）、都市的な場と板碑造立の関係からも注目される。板碑の造立に際しては、非常な金銭的負担が必要であり、都市住民こそがその造立者にふさわしい。卑近な例を引くと、奥山荘中条の「七日町」には一四〇〇年前後に「道場」があったことがわかっており（二〇）、規模の小さい町場においても宗教的空間が設けられていたことが知られる。

北東日本海型板碑の造立が終焉を迎えると、三尺以下となる小型の五輪塔・宝篋印塔が各地で認められるようになるが、これは日本海沿岸に限ったことではない。かえって越後以東においては、上越までを一次分布圏として、その東方では点的な分布状況となる。そこで日本海に特有な石造物としては、畿内に出自をもつ石仏及び板碑がある（桜井一九五八）。

能登半島を中心には、頂部を尖らせた方錐状の板碑が存在しており、外の北東日本海域において板碑が一五世紀前半代までに終焉を迎えるのに対し、石仏と並行して造り続けられるのは興味深い。

そして後出の畿内型板碑は、頂部山形の板状を呈し、額と顎の間に像様あるいは五輪塔等の塔形を彫り出すものである。これらは、能登半島を中心に分布し、以東では越後直江津で少数が認められるのみである。時期的には一六世紀代を中心とするものである。

なお、畿内からの情報発信基地である若狭においては、能登と共通した様相が認められる（下仲二〇〇三）が、間の越前は笈谷石文化圏として独自の造形を行っており、他地域と様相が異なる。

さらに西日本海沿岸地域については、畠中弘が能登との類似性に言及しており、畿内型板碑が中世の湊に濃密に分布しており、美保、境湊、安来を始め、益田にまで及んでいることを指摘している（畠中一九八四）。

このように、畿内の影響下に造られた石造物群は、種類ごとに分布域が多少異なるが、若狭・上越あたりまでを一次文化圏域とすることで共通して

いる。このことは、京都系土器の第二次拡散現象と時期的にも空間的にも重なる部分が多く、両者の展開において共通の下地が存在していたのではないかと思われる(第118図)。

2 越佐の板碑

(1)はじめに

越佐の板碑研究については、小野田政雄(十九)の業績(小野田一九六八ほか多数)に負うところが大きい。それまでは、銘文解釈を中心とした研究が多く、板碑そのものを対象としたものは少なかった。したがって、紀年銘を有する板碑の多い魚沼地域中心の研究であったが、小野田氏等が阿賀北等の他地域の板碑を紹介されるにおよび、県内全般の傾向を知ることができるようになった。また魚沼においても、穴沢吉太郎がそれまでの成果をまとめたことにより(穴沢一九七七)、様相がはつきりしてきた。加えて、県史資料編にも、紀年銘を有する板碑の一部が採録され(新潟県一九八四)、その意義は認められつつある。このような流れの中で、各市町村史類にも板碑が登場するケースが増えてきており、誠に結構なことではある。しかし、まだまだ金石学的な興味が先行しているようにも思われるところである。そこで以下、越佐各地の板碑の実際を、できるかぎり提示してみたい。

(2)各地の様相(表32)

越佐の板碑は、現時点で総数741基を数え(第119図、表31)、越後706基、佐渡33基の内訳となる。この数には、石仏板碑(後述、約400基、小野田一九八六)は未集計のため入っていない。よってそれ以後の新発見等による増加分を見込めば、1,200基を超えるのではないかと思われる。地域的には、阿賀北に最も多く487基、次いで魚沼111基、村松・五泉47基、佐渡33基、およびその外の地域に31基が遺存する(表31)。さらに阿賀北の場合は、石仏板碑の中心地である出湯(笹神村)をも擁しており、県内における板碑文化の一大中心地といえることができる。ちなみに、一箇所に10基以上の板碑が遺存している地点としては、村上市岩船地区、粟島浦村内浦、神林村山田、同飯岡慈雲寺、同牧目、中条町関沢寺山、同東本町大輪寺、新発田市岡田報音寺、笹神村出湯華報寺一帯、村松町寺町、大和町大崎竜谷寺などがあげられ、ほとんどが寺院へ集められている。この越佐の板碑は、ほとんどが非整形のものであり、縦横比5・3程度の石材を用いるものが多いが、かなりばらつきがある。以下、その個性豊かな様相を地域ごとに概観していく。なお、種字相等の細部については、章を改めて述べる。

阿賀北1(荒川以北)

阿賀北の場合、荒川の南北で様相がかなり異なっている。よって南北で二分し、別個に説明する。

本地域の304基のうち、旧小泉荘加納(神林村・村上市岩船地域・粟島浦村)内には、287基(94%)が遺存している。このことから、地頭の色部氏との関係を抜きにして語ることはできないであろう。分布域としては、加納の全域に及んでいるが、特に日本海に浮かぶ粟島は内浦の140基が抜きん出ている。これは、加納の本土側の総数とほぼ同じで、観音寺に林立する板碑は壯観である。このようにな板碑の在り方は、信仰の島としての粟島を物語っており、その説明が期待される。外では、神林村山田34基、同飯岡・牧目各10基、福田9基、村上市岩船地域34基等が特に集中している地域である。なかでも山田には、当地域では最大規模の碑高1mを超える金剛界五仏を刻むものがあり、粟島と似た状況にあるように思われる。

当地域の板碑の特徴としては、非整形の河原石を用いているものが多く、石材には、黒っぽい粗粒玄武岩が好んで使われている。また蓮台・天蓋等

の装飾が豊かで、4基のうち3基までには、なんらかの装飾が施されている。しかし、それにもかかわらず、在銘率は2%以下とすこぶる低い。石材の大きさは、碑高30～110cm(地上高、以下同じ)、幅25～60cmの間にいるものが多く、立てたときの碑高40～90cmくらいが標準となる(第120図)。基本的には、種字を刻んでいるが、五輪塔を線刻あるいは陽刻したものもある。また石仏板碑では、種字板碑に使われている蓮台と同じ陰刻蓮台を有するタイプが主流を占めている。特異なものとしては、宝塔を線刻した村上市岩船八日市弘願寺例や、同じく岩船地区の題目板碑(2例)などがある。また、神林村北新保には、山形2条線で額が突出する、山形置賜地域の影響を受けたと考えられる板状の板碑がある。碑高40cm、幅18cm、厚さ10cm(額部13cm)と小型で、バンを刻んでいる。

なお本地区には、赤く黄色の輝石安山岩を用いた方柱状の一群が存在する。これは今までに、神林村牛屋で4基、同長松遺跡出土の1基、村上市岩船八日市弘願寺で3基の計8基(一)を確認している。本例は、阿賀北はおろか越佐全域でも特異な存在であり、牛屋タイプとタイプ設定することが可能であろう。これが、なぜに本地域に現れたのかについては、今後検討を加えねばならない(二)。さてもこのタイプについては、加工の容易さからか8基中3基に銘文が刻まれている。あるいは一群の中心となる板碑は、銘を刻むことを意識して造立されていたということも考えられよう。例えば、牛屋の板碑については、4基すべてが種字を異にしているが、その内のキリクとアーンクには銘が刻まれており、同日の造立であることがわかり、セットとしての造立が考えられる。

阿賀北2(荒川以南)

本地域には、183基の板碑を認めることができる。中心は、中条町・新発田市・笹神村にある。また、数は限られているが、周辺地域にも特色のある板碑が認められる。形態は、碑高30～80cm、幅20～50cmで非整形の河原石タイプが多いが、碑高80cm、幅50cmを超える大きなものについては、板状に割って碑面をフラットに微加工しているものが多い。この大型のタイプについては、種字相や蓮台の形態・在銘品から、初発期の所産のものが多数を占めるのではないかと思われる。石材は、ほとんどが白っぽい花崗岩を用いている。板碑の現存する場所としては、山沿いの集落に多く、海沿いの地域には、ほとんど認めることができない。

中条町では、関沢・東本町・本郷などに集中しており、これは領主の中条氏・関沢氏の本拠地に重なり、神林村と同じく地頭とのかかわりが強いものと考えられる。なかでも、関沢の大型板碑には「元享」「嘉暦」年号を刻んだものがあり、本地域における板碑受容が奈辺よりおこったのがわかる。この外、赤川の生仏、塚の上の野中の石仏等、町内には13基におよぶ1mを超える板碑が存在し、外の地域に比して、巨石を用いる比率が高い。また本地域の石仏板碑には、出湯系・色部系の阿弥陀像、中条系の金剛界大日如来像等が認められ、混淆地帯の様相を呈している。なお胎内川北側の平木田韋駄天山遺跡より出土した板碑は、淡緑色の安山岩を用い、多くの装飾が施されており、黒川村下坪穴例とあわせて、黒川氏との関連をうかがわせる。この胎内川北岸は、当該期には黒川氏の影響が強く、板碑数の少ないこともそれと関係していると考えられる。なお、乙の乙宝寺には、板碑をはじめとする中世石造物が点在しており、海沿いの立地といい、古い由緒といい、武士団との関係といい、特異な位置を占めている。

新発田市域では、加治川及びその支流域に分布しているが、岡田に23基、五十公野に9基が集中しているほかは、1～2基が分散しているにすぎない。このうち岡田では、以前寺域に散在していたものを集めたという報音寺の境内に19基が遺存しており、信仰の中心地域であったと思われる。形態的には、碑高32～80cm、幅24～38cmの間に集中しており、外の地域に比してまとまりがある。また五輪形を刻んだものとしては、線刻5基(うち1基は残闕)、陽刻1基の計6例(12%)が遺存し、外の地域とはやや異なった傾向も認められる。

笹神村は、出湯を中心とした石仏板碑(出湯系、200基以上も未集計)が圧倒的多数を占めているため、種字を刻んだ板碑は影が薄い。ただし、出湯の華報寺に阿賀北最古の永仁七(一二九九)年銘をもつ名号板碑があるのをはじめ、名号板碑3基、五大種字板碑4基があり、外とはやや異なった信

仰形態をもっていたのではないかと思われる。この華報寺一帯は、経筒・中世墳墓などが多数認められ、中世の一大霊場であったと考えられる。よって板碑等を含め、総合的な研究を行うことにより、地域的な中世信仰の姿を明らかにできうる可能性をもった鍵地域である。

その外の地域では、荒川町の縦一列一体型阿弥陀三尊を刻み、さらに下に馬頭観音（カン）及び地藏（イ）を刻む荒島東岸寺例、関川村沼の碑高2mを超える応永在銘碑例、黒川村の阿弥陀三尊を1つの碑面に3つ刻む下館例、加治川村の金剛界大日如来（バン）及び阿弥陀三尊を刻む下小中山例、同村のキリーク及び「阿□」銘をもち、塚状のマウンド上にのる貝屋例、新発田以南では最も大きく、バン及び中房・蓮台を刻む豊浦町荒町例等々、興味深い事例がある。

村松・五泉(表33)

本地域には47基の板碑が認められ、凝灰岩などを方柱状に加工したタイプと、花崗岩製の非整形のタイプがある。最大の特徴は、マン（文珠）を刻む種字板碑1基及び少数の出湯系石仏板碑を除いて、五輪塔形及び五大種字（種字のみのもの2基を含む）を刻んでいることで、中世越後の宗教文化の中に異彩を放っている。大きさは、五輪塔形を刻むことから、外の地域に比してやや縦長のものが多く、縦横比2…1程度となる。一般的には、東方発心門（キャ・カ・ラ・バ・ア）を刻むが、方柱タイプの中には、四面に四門を刻む村松町木越常照寺例や、一般的な東方を除いた三門（正面は西方菩提門）を刻む五泉市馬下例等の例外もある。また、正面あるいは側面に銘文が刻まれているものが三割程度認められるが、石材との関連性は薄い。紀年銘を有するものでは、県内最古の弘安八（一二八五）年（あるいは正安二（一二三〇）年）に始まり、正慶二（一二三三）年までの間、約15034年間に15基が認められている。外の無銘のものも、ほぼ同時期の所産と考えられることから、ごく短期間に集中的に造立されたことがわかる。次いで、これらの板碑を概観していく。まずマンを刻んだ種字板碑1基・石仏板碑及び不明2基を除き、44基の五輪線刻タイプについて考えていくことにする。これらは、五輪塔形の表現方法によって、三分できるものと思われる。一は、厳密に言えば五輪塔形ではないが、五大種字のみを刻むものである（2基）。残りの42基は、各輪を区切るもの（7基）と、外形のみを刻むもの（35基）に分けられる。これを紀年銘の有無でみていくと、各輪を区切るものは、7基中5基に年号が刻まれており、なんらかの関連性があるのではないかと思われる。また、これらの火輪の表現方法についてみると、軒を方形につくるものと、鋭角に尖らせるものがあるが、これはそれほど数に開きがなく（17:21）、タイプとは関連していないようである。ただ石材との関連でみると、花崗岩で15基中11基までが、軒を尖らせるタイプであり、やや比率が高くなっていることがいえようか。また、太い線刻の内側を深く刻むことによって、結果的に陽刻にみえる半肉彫りタイプのものが、矢津泉福寺（3基）をはじめ4基程認められる。これらはさらに、外形のみを刻み、軒を方形につくり、種字が月輪に囲まれる（川内永谷寺例を除く）、という共通性をもっているため、泉福寺タイプとして外と区別したい。一応このように整理できるが、これらの違いが、どのような歴史的事象を反映したものは、今後検討していかなければならない。

魚沼

基本的には、緑泥片岩を意識してか、淡青く緑色の非整形の安山岩を用いているが、板状に加工した例として、津南町赤沢の表面に阿弥陀三尊を刻み、裏面に金剛界大日如来（バン）を刻んだものがある。大きさは、碑高33～72cm、幅21～51cmのものが多く、当地域の板碑には、在銘碑が多いのが特徴的であるが、装飾を施すものは、蓮台もしくは月輪が少数例あるだけで、阿賀北の荒川以北の事例と対照的である。また、緑泥片岩を用いた関東からの搬入品が、古い段階で入ってきており、そこから在地産の石材へと移り変わっていく過程が興味深い。この魚沼地域には、現在141基の板碑が認められるが、分布の中心は南魚沼の大和町・六日町、中魚沼の川西町にあり、やや偏在している。種字板碑の年紀は、延慶四（一二二一）年～文安元（二四四四）年まで認められるが、中心は一四世紀代にある。

大和町では、59基の板碑を確認することができたが、その内の56基までが大崎竜谷寺に集められている（二）。この竜谷寺の板碑群は、ほとんどが

近隣から二次的に運び込まれたもので、出土地点がわからないものが多い。が、例外的に隣接する穴地新田の三ツ塚上に立てられていた3基の板碑が移設されており、原地点の明らかである点、塚上に立てられていた点から、貴重である。これらは、緑泥片岩製のものを除けば、月輪3基、杵線1基が認められるのみで、基本的には種字＋銘文しか刻まない。なお無銘のものが、約1/3を占める。種字では、大日関係の比率が高い。紀年銘については、南朝年号と北朝年号の両方が認められるが、両者に重なりがないことから、当時の政治情勢と関連して理解されている(穴沢一九七七、二四四～二四五頁、川西町史編さん委員会一九八七、四三四頁)。なお、その中には9基の緑泥片岩製の板碑が含まれており、1箇所12基以上所在する例が県内で外にないことから、ここで紹介しておく。3基を除いては、下半部が欠失しているが、種字は、阿弥陀三尊が3基、キリクのみが5基、三尊か一尊かわからないものが1基である。大きさは、碑高58～102 cm、幅11.5～32 cm、厚さ1.5～3 cmで、比較的小型の部類が多い。来歴がはっきりしないのが惜しいが、2条線をもつものは1基だけで、年号をもつ可能性が3基以下であること、蓮台以外の装飾が認められないこと、やや質の悪い岩質を用いていること等から、少なくとも2条線のもの以外は、原材が搬入され、現地で加工されたものではないかと思われる。

六日町には、20基の板碑が分散している。内、月輪4基、杵線1基が認められるが、多くは種字＋銘文という大和町と同様の傾向を示している。なお、無銘のものも3基ある。この中で注目されるのは、立地的には、田崎の20基以上の塚群の中央の塚上に立てられていた至徳二(一三八五)年在銘の山の腰板碑、墓地上に立つ康暦元(一三七九)年在銘の野田蟹沢板碑があげられる。板碑そのものでは、比較的時期の下る五日町宝蔵寺の、永享五(一四三三)年紀を刻む縦一列阿弥陀三尊例、及び非整形のもの頭部に2条線を線刻する文安元(一四四四)年銘例の2基の板碑が注目される。特に後者は、非整形のタイプで2条線を刻する県内唯一の例であり、時期的に終末期にあたることと併せて、注視せねばならない。

川西町には、39基の板碑が認められるが、内1基は武蔵型で、魚沼で2番目に古い応長元(一三一一年)一〇月銘をもつ長徳寺板碑である。さらに、6基は石堂の中に入れられている板状の陽刻五輪で、これの時期は不明瞭である。そして残りの33基が、種字を刻む非整形のものである。当町の場合、南魚沼とは異なり、非整形の内9基に蓮台が刻まれていることが特徴的である。また、キリクのイーをアク点の間に通す変態キリクも多い。約2/3は無銘で、南魚沼とは比率が逆転している。これは、種字相からもいえることで、本地域ではキリクが8割を占めている。この中で立地的に注目されるのは、上野の2基の板碑で、内1基は塚上に立てられていたという。その外、キリクのカの終点を左にはねた鶴吉釈迦堂例、バンの4基中3基までが、アン点と荘厳点を「の」の字状につなげて一体化させている事、五大種字を刻む正平一四(一三五九)年銘碑の存在等、興味深いところである。

そのほかの地域では、塩沢町長恩寺に、当地方最古の延慶四(一三一一年)三月銘をもつ、上部の欠けた緑泥片岩製の搬入板碑がある。また、塚の上あるいは塚に埋められていた板碑としては、上述の大和町・六日町の事例の外に、広神村連日塚より掘り出された武蔵型の正中二(一二二五)年在銘碑、十日町市大黒沢の火葬墓上に立っていた正平八(一二五三)年在銘碑、小千谷市千谷の岡林の塚上の貞和六(一二五〇)年在銘碑等があり注目される。

加茂・三条・栄

この地域では、碑高35～52 cm、幅12～21 cm、厚さ9～12 cmで、淡緑色の凝灰岩を加工して頭部を山形にした板状に作り、額部に横2条線を線刻し、その下を方形に1 cm程彫窪め、下部にほぞを付けるという基本形をもつタイプのものが特徴的である。この横2条線は、側面までめぐらせるのが普通であり、現在までのところ彫窪めた部分に種字等は認められない。分布は、加茂川流域及び三条市・栄町の山際を中心に散らばっている。この一群が板碑の範疇に入るのかという議論はあろうが、加茂市ではその直接の祖形となると思われる板碑も確認でき、類例からも中世の所産と考えられることから、板碑の一類型(加茂・三条タイプ)として扱いたい。そこでこのタイプへ至る祖形と考えられる加茂での事例をみてみたい。このタイプは、下高柳善興寺や宮寄上で確認される例で、頭部山形で太い2条線を刻み、その下を一段窪めて碑面をつくり、杵線をもつものである。これは、板状を

呈し、武蔵型のものほとんど変わらず、材質のみ凝灰岩を用いるというものである。そこから、頭部山形は変わらないが、2条線が線刻となり、その下の枠線を彫窪めた前述のタイプと、碑面全体を窪めた宮寄上のタイプに分岐していったと考えられる。なおこの時点で碑面に種字は刻まれなくなるが、これは未完成品であるのか、墨書が前提とされていたのか、外の理由によるものか、現時点では不明であるが、遺例からみると未完成品ではないののではないかと思われる。このタイプについては、ごく最近三条の田村浩司氏のご教示によって知ったもので、調査が十分ではなく、近隣の田上町・下田村を含めて、かなりの数の遺存が予測され、今後の研究の進展が期待されるところである。

なお、柏崎市東之輪出土品及び糸魚川市山寺金蔵院のものも、似かよった形態をもっており、なんらかの交流があったものと考えられる。前者は、方形の彫窪め部の下の埋める部分及び裏面を生のままに残しており、内1基には題目を彫っている。後者は、線刻の2条線がなく、彫窪め部分の下に線刻蓮台を刻み、永和二(二三七六)年銘及び名号を彫っている。

佐渡

佐渡については、越後の板碑に比して、かなり様相を異にしている。種字が4基(うち五輪形のもの3基)を除いて、認められないこと。頭部山形の下に続く2条線が線刻で、線刻が1〜5条のものが存在すること。五輪塔形のもの(6基)は、板状(3基)、もしくは五輪塔形に陰刻するもの(3基)である。前者の種字が認められないものを板碑と認めることについては、問題があるが、越後での加茂や三条等の例からして、板碑の範疇に入れるのが適当と判断した(四)。

今回確認したものの中で、種字を刻むものは、五輪タイプのものを除けば、真野四日市大願寺の1例のみである。2条線の間隔は狭く、その下に、キリークを刻む。おそらく本例は、板状五輪形を除く、外の板碑の祖形的位置を占めるものであろうことが予想される。それはその後の板碑に、種字が認められないこと、2条線の意義が忘れられ、間隔が間延びし、条線数が1から5条と多様化していくものが認められること、さらに慶長以降の墓碑の直接の祖形となると考えられる、碑面を頂部山形方形の武蔵型板碑形に彫窪め、横1条線を刻むタイプ(ただし、まだ板状ではなく非整形の石を用いる)のものが存在するためである。よって、佐渡の板碑は、板状+2条線+種字のものから、板状2条線のもの、やがて条数が増減し、間隔が広がり、そして条線が消滅するという流れが一方にあり、さらには後の墓碑の祖形となる、五輪塔形および武蔵型板碑形を陰刻するという、2系統のものがあると考えたい。

その他の地域

上で述べた以外では、米山西麓の吉川町や浦河原村等に所在する、山形2条線の板状のものや、上越市の五輪形線刻板碑、新井市の板状で山形2条線額突出タイプのもの、糸魚川市の緑泥片岩製のものなどがある。このうち新井市の例は、山形が内側に挟れるタイプで、山形県の成生荘型ではないかと思われ、興味深い。碑高72 cmで、バンを刻んでいる。糸魚川市の例は、2基の欠損品で、1基には正慶二(二三三三)年銘が刻まれており、長野から搬入されたと考えられている。

(3) 造立年代

越佐の板碑の中で紀年銘を有するものは、現在のところ119基程確認されている(表34)が、それは全体のたかだか17%弱に過ぎない。しかもそのうち2/3程の80基が魚沼地域に集中している。最密集地域である阿賀北地域での紀年銘率は、わずかに21基4.3%と極めて低い。この紀年銘からみると、一四世紀第3四半期が39基と最も多く、一四世紀代に90%の39基が立上げられている(第120図)。阿賀北・魚沼・村松の無紀銘のものも、種字相等からみて同様の年代に収まるものとみて大過ないものと考えられる。

ここで、最古の紀年銘を刻む板碑を、板碑の集中する地域ごとにあげておく。

まず阿賀北では、栗島浦村内浦観音堂の文和三(一三五四)年銘、神林村山田の元享二(一二三二)年銘、中条町関沢の元享三(一二三三)年銘、新発田市上石川の元応元(一二二九)年銘、笹神村出湯華報寺の永仁七(一二九九)年銘がそれにあたる。村松では、矢津泉福寺の弘安八(一二八五)年銘であり、これは村松だけでなく県内最古の例であるが、明確ではなく、確実なところでは寺町正円寺の正安二(一二三〇)年銘があげられる。魚沼では、塩沢町塩沢の長恩寺の延慶四(一二二二)年銘、川西町伊勢平治長徳寺の応長元(一二三二)年銘、大和町大崎竜谷寺の康永二(一二三三)年銘、六日町寺尾阿弥陀堂の貞和三(一二四七)年銘、小千谷市吉谷の貞和三(一二四七)年銘等がある。その他の地域では、三条市如法寺海蔵院の元享元(一二三二)年銘、糸魚川市上刈の正慶二(一二三三)年銘等が認められ、佐渡では、真野町真野宮の元享二(一二三二)年銘があげられる。これらは、その地域の中で必ずしも最古の板碑であるとは限らないが、板碑の初発期のおおよその目安とはなるであろう。

さて、ここで問題となってくるのは、加茂・三条・柏崎・糸魚川そして佐渡などで認められる、頭部山形で横2条線を刻み、無種字無銘で碑高80cm以下の板状を基本形態とする一群(2)参照の帰属年代である。これらは、武蔵型の影響下に成立したと考えるべきであろうが、時期的には、不透明な部分が多い。また越後のタイプと、佐渡のタイプでは、前述のとおりやや異なっており(2)、一応別個に考える必要がある。その外では、柏崎東之輪

越後では、頭部山形2条線タイプの中で例外的に永和二(一二三六)年銘を刻む名号板碑が糸魚川金蔵院で確認されている。その外では、柏崎東之輪で題目の刻まれたものが1基認められるのみである。資料が限られている現在では、帰属年代を求めることは困難であるが、小型の製品が多いこと、碑面を方形に彫り窪めるという形態及び唯一の在銘資料から、一四世紀後半以降の所産として扱えられるであろう。ただし、ほぞをもつ三条や加茂の場合は、外に比して時期が下る可能性がある。なお種字等が刻まれていないこれらの板碑について、墨で書かれていた可能性を考えるならば、遺例から一五〜一六世紀代の年代が与えられるかもしれない。次いで佐渡の板碑であるが、真野の元享二(一二三二)年銘を有する板状五輪形板碑が突出しているが、ここで問題としているタイプのものについては、かなり年代が下降すると思われる。それは、慶長以降の供養碑に認められる頭部山形板状といった特徴や、墓碑の直接の祖形と考えられる、碑面を方形に彫り窪める形状をそれらの板碑がもっているからである。すでに述べたような、2条線がすたれていく間に、どれくらいの時間幅を認められるかは明らかではないが、祖形と考えられる真野大願寺の板碑のキリークは、かなり貧弱であり、一五世紀以降の所産ではないかと思われる。したがってここでは、一五〜一六世紀にかけてのものと仮定しておきたいと思う。

(4)石材の選択(表34)

板碑の石材の選択については、何が重要視されたのであろうか。加工の容易さ加減?耐久性?それとも色調?はたまた入手の難易度であらうか。これらについて答えるには、実際の様相をみていく必要がある。そこで地域ごとの石材の在り方をみていくことにする。

荒川以北の阿賀北では、主に粗粒玄武岩を用いており、灰く黒色を呈するものが多い。天蓋・蓮台等の装飾が施されているものも多いが、銘を刻むものは限られている。次いでやや白っぽい花崗岩を用いているものも、少数派ではあるが一定数存在する。そしてごく少ないが、輝石安山岩や砂岩を使っているものがある。前者は方柱形の形態(牛屋タイプ)と結び付いているが、現在では風化が著しい。また、蓮台を陰刻する石仏板碑の中心地が本地域にあることも、粗粒玄武岩という石材と関連しているのであらうか。

荒川以南の阿賀北では、花崗岩が多く、石仏板碑の中心地である出湯に近づくにしたがって、その割合が高くなる。最北の中条や関川でも、大多数は花崗岩製であるが、少数の粗粒玄武岩が用いられており、緩衝地帯の様相を呈している。さらに中条平木田韋駄天山遺跡、新発田虎丸新光寺、笹神出湯石水亭には、淡青緑色を呈する普通輝石安山岩製の板碑が存在し、特異な存在である。ところで、阿賀北で最古の紀年銘をもつ出湯華報寺の名号

板碑の材質は、花崗岩ではない。花崗岩製品を中心地帯にある古手の板碑が、非花崗岩であることは、何らかの意味がないだろうか。石水亭の板碑と併せて、興味深い例である。

村松・五泉では、灰く淡青緑色を呈する安山岩・凝灰岩製の方柱形のもの、非整形の花崗岩製のものに二分される。唯一の例外として、村松町新屋勝泉寺の板状の泥岩製品がある。これらは同じ五輪塔形を彫りながら、仕上がりから受ける印象は、全く異なっている。この選択がなぜに生じたのか、今後考えていかねばならない問題である。

魚沼では、ほとんどが青色もしくは緑色があった安山岩を用いている。また、関東から持ち込まれた緑泥片岩が存することが、本地域の特色でもある。その外の石材を使用した例としては、大和町竜谷寺で2例の花崗岩製品が認められる。また特異な存在として、紺に白の縞の入った流紋岩を用いたものがある。これは、六日町寺尾正眼寺で1例と大和町大崎竜谷寺で2例の計3基を確認したが、なぜにわざわざみにくい石材を選んだのか、理解に苦しむところである。

加茂・三条・栄では、ほとんどが淡緑色の凝灰岩を用いている。これは柔らかい石材を利用して板状に仕上げたもので、非整形のもの(安山岩)では、三条で1例が認められるのみである。

(5) 金石学的・文献学的様相

魚沼地域では、紀年銘及びなにがしかの銘文をもつものが多く、141基中80基の57%の在銘率をもっている。これに対して県下最大の板碑密集地阿賀北では、487基中21基の4%に銘文が刻まれているにすぎない。また、ほぼ五輪線刻板碑の単一分布地域である村松・五泉地域では、47基中15基の約32%の在銘率である。この安山岩・凝灰岩の方柱タイプのもの、花崗岩の非整形タイプのももの、在銘率をみると、加工しやすい前者(38%、26基中10基)の方がやや多いが、花崗岩製も22%(18基中4基)となり、石材と銘を刻むという行為との関連性は明確ではない。

さて銘文の内容であるが、阿賀北では単に年号のみを刻むのが多く、例外的に造主「成空」を刻む関川村沼例、「逆修」を刻む栗島観音寺例がある。また墨書のもものは、「孝子敬白」や偈を書き、菩提を弔う供養碑である。村松・五泉でも、年号と人名を刻むものが多く、「逝去」2例や偈1例が認められる。魚沼では、「施主」あるいは「孝子」「敬白」及び人名・年号を刻むものが多い。また偈を刻むものも多い。外に注目される銘として、「逆修」「塔婆一基」を刻む六日町野田例、「(南無)妙法蓮華經一部」を刻む大和町穴地新田の塚上に立っていた(現在は竜谷寺に移動)2例、「一乗妙典一(二)部」を刻む大和町竜谷寺2例、「十三季忌」「石塔一基」を刻む竜谷寺例等がある。これらの銘文から、越後では、供養碑として造立されたものが多いことがわかる。ただし「逆修」銘は、3例と少なく、死後の造立がほとんどの場合だったと考えられる。

ところで、武蔵型板碑の場合は、一四世紀に入ると「逆修」趣旨のものが圧倒的に多くなり、一五世紀以降になると、講による民間信仰的な板碑、または墓碑へと転化していくとされている(千々和一九八八、一〇二〜一〇七頁)。この傾向は、銘文からみた越後の板碑には、あまりあてはまらないようである。越後では、その初発期〜隆盛期である一四世紀には、「逆修」はあまり行われず、もっぱら追善を目的としていたことがいえ、その後一五世紀には板碑文化が衰退し、一六世紀にわずかに残る墨書銘板碑をみても、趣旨に大きな変化は認められない。ただ私は、この「追善」について、地域の板碑による供養を受け容れる側の人々が、板碑の本来の造立趣旨である「仏」に対する供養と、「死者」の供養を、はたしてどこまで分かつて認識していたか、ということに疑問をもっている。それは、後で(8)に述べるように、越後では墓と石塔が密接な関係にあり、当初から墓標としての造立を意図していた例が多かったと考えられるからである。

(6)各説

本来第2章で地域ごとに述べていくべきであろうが、その概要については、すでに小野田政雄によってまとめられている(小野田一九八三)ので、ここでは板碑の種類ごとにみていくことにする。

①名号板碑

「南無阿弥陀佛」と名号を刻んだものは、梵字体のもの3基、漢字4例の計7基を認めることができる。内訳は、梵字体はすべて栗島にあり、漢字で書かれているものは、笹神村出湯で3例、糸魚川市山寺で1例となる。

栗島の場合は、碑高222 cmの巨大なものがあり、文和三(一二三四)年銘が2基に認められる。これらは、140基に及ぶ板碑の中心的存在と考えられ、見事な刷毛書体で刻まれている。

笹神村の3例は、信仰拠点の出湯華報寺に安置されている草書体に近いものと、出湯石水亭の庭にある楷書体の2基で、華報寺のものには阿賀北最古の永仁七年(一二九九)銘が刻まれていることは、すでに述べた。書体は異なるが、残る2基も、外に類例がないことから、それほど永仁銘碑と変わらない時期の所産であると思われる。これらは名号を刻む関係で、やや方柱ぎみで、碑高各79・55・73 cmを測る。この名号碑は、後の阿弥陀仏(石仏)板碑と何らかの関係を有しているものと考えて、重視したい。

最後の1例は、地理的に大きく隔たった西頸城の糸魚川市寺山にある。墓地から掘り出され、現在金蔵院境内にあるという。筆者は、実見していないが、線刻に近い楷書体で名号が刻まれている、唯一の整形板碑で、加茂・三条タイプと似かよっている。本例は、越後最西の板碑の一つで、永和二(一三七六)年銘が刻まれていることから搬入経路等を考えていかなばならない。

②題目板碑

「南無妙法蓮華經」と題目を刻んだ板碑は、現在のところ村上市岩船地区2基、柏崎市東之輪町出土の1基の計3基を認めるのみである。

村上市の一例は、八日市の真言宗不動院の板碑で、永徳二(一三八二)年銘を刻む。もう一例は、三日市の日蓮宗本證寺にあり、題目の上に天蓋をあらわしている。この両寺院の創建は、板碑よりも新しいことから、後に持ち込まれたものと考えられる。

柏崎市の一例は、写真で確認できるものの内、唯一文字が刻まれているものである。ここからは、96基以上の同型の板碑がまとまって出土したとい(五)、千体供養の跡かとされている(田村一九八七)。このようなケースは、県内でも例がなく、板碑が散逸してしまっていることと併せ、出土状況が不明瞭なことが惜しまれるところである。

越後で題目を刻んだものについては、ほとんどが一七世紀以降の所産であるが、今後確認例の増加が期待されるところである。

③塔形板碑

板状で、五輪塔形につくるものが佐渡で3例認められるが、それ以外は、すべて五輪塔形等を刻むものであるため、塔形を刻む板碑を略して塔形板碑とよぶ。塔形は、五輪塔がほとんどを占め、唯一の例外は、塔身・基礎に2個ずつバンを刻んだ村上市八日市弘願寺の宝塔例がある。五輪塔形は、線刻・陽刻・陰刻・板状・五大種字刻・板状陽刻のものがある。

線刻のものは、最も広く分布しており、村松・五泉の42例を始め、村上市1例、栗島浦村1例、新発田市5例、三条市1例、上越市1例の計57例がある。五大種字を刻むものが多いが、新発田市の5例と上越市例は無刻である。線刻五輪塔地域である、村松・五泉については、すでに述べたので割愛するが、その外で注目されるのは、村上市八日市宝勝寺例、新発田市古寺例、同市岡田法音寺例である。これらは、五輪塔形の両脇に武蔵型板碑形を刻んでいるものである。古寺・法音寺例では、頂部山形の棒状のものが刻まれているにすぎないが、宝勝寺例では、山形に加え2条線・種字が

刻まれており、明らかに武蔵型板碑とわかる。五輪塔の両脇に板碑を描くという構図は、いかなる意図をもっていたのか。私には、板碑と五輪塔の関係を暗示しているように思われて仕方がないのであるが。

陽刻のものは、3例のみが確認され、山北町今川大雲寺、栗島浦村内浦観音堂、新発田市東姫田の阿賀北にのみ遺存している。山北・新発田例では五大種字が刻まれているが、栗島例では、水輪にバンを刻むのみである。

陰刻のものは、佐渡真野町竹田に所在する3基がそのすべてである。全国的にみても非常に珍しく、かつコントラストが甚だしいため、視覚的な効果は、各手法の中でも抜群である。1例のみ、五大種字を刻む。

板状のものは、佐渡真野町真野宮の五大種字を刻む元享二(一二三二)年銘のものと外の1基、同町豊田大光寺の例がある。後者は風化が激しく、種字が刻まれているかは、不明である。

五大種字を刻むものは、栗島浦村内浦観音寺例1、村上市八日市弘願寺例1、笹神村出湯例4、村松町寺町例2、川西町伊勢平治例1の9例を数える。これらは、三尊以下の種字板碑とは明らかに区別されるべきで、五輪塔形の範疇でとらえるべきものである。

板状陽刻例は、川西町で6例が認められているが、すべて石堂の中に入れられているものである。したがって、大きさは縦25cm、横14cm、厚さ7cmくらいと、やや小型で、板状を呈する。そして五輪塔形を陽刻するのであるが、彫り方にやや差異があるものがあり、確認数のわりには複数の手になるものと考えられる。ただし本例については、最初から石堂に入れることを意識して造られたのか否かが問題になる。なぜなら石堂は、近世の所産であり、何も入れないのが通常であるからである。現在比定時期等について、成案をもたないが、今後佐渡での一石五輪塔を納める四十九院型石堂等石堂内への納入例等をも視野に入れ、考えていきたいと思う。

以上のように、一応計76基の塔形板碑を数えることができるが、これは石仏板碑を除いた板碑全体の1割程を占めていることになる。この五輪塔を刻むという行為は、五輪塔の造立の簡略化ということができ、費用や石工の技量等の問題は当然生じてくると思うが、造立者の意志は奈辺にあるのかということが重要であろう。そして村松のような状況がなぜ生じたのか、外の種字板碑等とどのような関係にあるのかを考えていかねばならない。

④種字板碑

塔形を刻んでいるもの及び種字の認められないものを除いた、越佐の板碑全体の85%以上を占めるのが、種字を刻んでいるものである(六)(墨書を含む)。よって単に板碑といえ、このタイプを指すが、本稿では外と区別するために種字板碑とよんでいる。ここでは、各地の板碑集中地域の種字相を紹介し、その地域の在り方をみていきたいと思うが、これについては小野田政雄の仕事がすでにある(小野田一九八三)。それによれば、阿賀北では阿弥陀信仰が優位に立っているが、中条町では大日関係の比率が高いこと、南魚沼郡では大日関係が最も多くなっているが、阿弥陀も同じくらいの比率を示していること、種字の種類が多いことなどをあげられている。しかしその後、同じ魚沼でも、中魚沼郡の川西町では、阿弥陀関係が8割近くを占めていることが明らかにされており(川西町史編さん委員会一九八七)、比率に変更が必要であるため、次にみてみよう。

阿弥陀関係69基(12基は武蔵型)、大日関係29基(金剛界23基、胎藏界5基、両界1基)、釈迦関係6基、地藏関係6基(イ2基、イー1基、カ2基、未確認1基)、観音5基、勢至3基、阿3基、虚空蔵2基、文珠・不動・薬師各1基となる。阿弥陀関係は126基中69基の55%となり、大日関係の29基23%に大きく水をあけている。このように、越後では阿弥陀関係の種字が選ばれることが多いが、武蔵地域程の比率ではなく、大日特に金剛界(バン)が刻まれる場合もかなりあることがいえよう。しかし、このような地域設定では、焦点がぼやけてしまうおそれがあるので、以下では板碑の隆盛期である一四世紀代という、いわゆる南北朝の動乱期に着目してみたいと思う。

すなわち阿賀北では、領主層があまり変わらなかったという点から、その支配地域ごとにみていき、その好みといったものが、どこまで板碑に反映

しているかといった問題を考えてみたいと思う。魚沼では、かなり勢力関係が入り乱れているため、地域ごとではなく、紀年銘資料が多いことを生かして両朝の年号ごとの種字相について、みていくことにする。

阿賀北粟島浦村（色部領1）140基

阿弥陀関係74基、地藏関係17基、大日関係16基、釈迦関係16基、観音7基、梵字名号3、阿閼・薬師＋阿弥陀・勢至・文珠・五大種字・五輪陽刻・五輪線刻各1となり、阿弥陀関係が半数以上の53%、大日関係・釈迦関係がともに11%を占めるが、注目されるのは、地藏関係が12%にも及ぶことである。

阿賀北神林村・村上市岩船地区（色部領2）130基

阿弥陀関係79基、大日関係19基、釈迦関係10基、地藏関係6基、観音3基、勢至2、題目2、阿閼・薬師・不動・愛染・金剛界大日＋地藏・釈迦＋金剛界大日・釈迦＋勢至・五大種字・五輪線刻各1となり、阿弥陀関係が61%を占め、大日関係15%、釈迦関係8%、地藏関係5%となる。粟島とそれほど顕著な違いは認められないが、こちらでは大日でも金剛界より胎藏界が勝っていること、地藏関係がそれほど多くないこと等の小異がある。

阿賀北中条町（三浦和田中条領）43基

阿弥陀関係20基、大日関係14基、地藏（カ）3基、勢至2基、釈迦・胎藏界大日＋阿閼・金剛界大日＋阿閼・不空＋宝生各1基となり、阿弥陀関係は47%で首位を占めるが、大日関係は2尊のものを加えると40%にも及ぶ。なお、地藏（カ）が羽黒・野中にのみ極限分布していることから、中条家の庶子家である羽黒氏と関係している可能性がある。そして、この所領の板碑7基を羽黒家の遺したものとみて、中条領の集計から外すと、阿弥陀関係17基に対し、大日関係は16基となり、ほぼ同数という状況が生じる。

阿賀北中条町・黒川村（三浦和田黒川領）12基

阿弥陀関係10基、胎藏界大日・不動各1基で、阿弥陀関係は83%にも及ぶ。

阿賀北中条町（三浦和田関沢領）22基

阿弥陀関係12基、大日関係7基、阿閼・地藏（カ）・胎藏界大日＋釈迦各1基となり、阿弥陀関係が55%を占めるが、次位の大日関係も32%とかなりの比率を有している。

阿賀北新発田市・加治川村・豊浦町（佐々木加地領）48基

阿弥陀関係24基、金剛界大日14基、線刻五輪5基、陽刻五輪・虚空蔵・阿弥陀＋地藏（イ）・金剛界＋胎藏界＋蘇悉地・金剛界大日＋阿弥陀三尊各1基となり、阿弥陀関係は50%、次いで金剛界大日が29%と高く、五輪塔形も12.5%を占めている。

阿賀北笹神村（大見領）29基

阿弥陀関係16基、大日関係6基、五大種字4基、名号3基で、阿弥陀関係が55%を占める。ただし、名号を阿弥陀に、五大種字を大日に、それぞれ含めるとすると、本地域の板碑は、大きくは2種類しか認められないことになる。

このようにみてくると、どの地域においても阿弥陀関係の種字を刻む率の高いことがわかる。それに対して、バンを中心とした大日種字の在り方は、かなり地域性を表しているといえよう。最も比率の高いのは、三浦和田氏の中条家で、阿弥陀とほぼ拮抗する様相を呈している。次いで、3割程度を有する三浦和田氏の関沢家、佐々木加地氏、1～2割程度の色部氏・大見氏領となっている。

大見氏の場合は、阿弥陀像を刻む出湯系石仏板碑の中心地であるので、ことさらいうほどのこともないのかもしれない。また分布域からいうと、大

見氏よりも、華報寺を主体として考えたほうがふさわしく、今後その係わり合いを追及せねばならないであろう。

色部氏の場合は、外の地域に比して阿弥陀関係の比率が飛び抜けて高いということもないので、むしろその種字の多様性について注目すべきである。これは、その装飾性と合わせて、色部氏の好みを反映した結果と考えてよいであろう。

奥山荘の場合については、惣領家の中条家ではかなりの程度、金剛界大日を重要視していたことがいえ、乙の乙宝寺の大日信仰とのかかわりを想定できるのではないだろうか。またこれと同じく、佐々木加地域氏の場合も、岡田法音寺の大日信仰との兼ね合いを考えるのが、妥当であろう。

次に、魚沼の状況について、みていくことにする。

魚沼1北朝年号

大和町・六日町・津南町・塩沢町・堀之内町・広神村・川西町・小千谷市・松代町に所在し、阿弥陀関係1基、金剛界大日2基、地藏4基、勢至2基、釈迦2基、虚空蔵1基、胎蔵界大日1基の、計38基が認められる。

魚沼2南朝年号

川西町・大和町・六日町・広神村・十日町市・柏崎市に所在し、阿弥陀関係1基、釈迦関係3基、地藏(カ)1基、五大種字1基の、計16基が認められる。

これら南北朝期の板碑の種字相からわかることは、南朝年号在銘碑では、阿弥陀関係が多く、69%を占めていることがあげられる。これは、上述の魚沼全体の比率(35%)よりかなり高く、注目されることである。また釈迦関係が3基と、北朝の2基を上回っていることや、魚沼で唯一の五大種字を刻んでいることには、どのような造立意識が働いたのであろうか。次いで、北朝年号在銘碑では、阿弥陀関係が45%とやや低く、大日関係の比率が高い(32%)。特に1基を除いて、金剛界大日であることは、動乱期という世情を表しているよう。また地藏も、延命地藏のイが選ばれているところに、同様の心情を汲み取るべきであろうか。

⑤石仏(図像)板碑(表36)

阿賀北には、種字を刻む板碑の外に、主に阿弥陀像を刻んだ板碑がある。これらは、図像板碑の一類型であり、小野田政雄によって研究が推し進められてきた(小野田一九六八、一九八三、一九八六、一九九二)。これらが中世の所産であることは、小泉莊加納の色部領(神林村・村上市岩船地区・粟島)を中心とした陰刻蓮台を刻んだタイプから明らかである。また、中条町西栄町地藏堂の阿弥陀像の両脇に梵字でサ・サクを刻んで阿弥陀三尊とした例も参考となる。小野田は、これに「磧石仏」という名称を冠しているが、ここでは板碑であることを強調するために、直截的ではあるが「石仏板碑」とよぶことにする。この石仏板碑は、400基にも及ぶとされており(小野田一九八六)、それを考慮に入れることなくして阿賀北の板碑を語ることはできない。しかし現段階では、ごく一部を調査したに過ぎず、データとしては提出することができなかった。そこで、詳細については後日を期すこととし、ここではアウトラインを述べる。

出湯系石仏板碑

石仏板碑の分布の中心は、笹神村出湯にあり、その周辺には200基以上が遺存している。これは、種字板碑の39基に比して、格段の相違である。このように出湯は、石仏板碑文化圏といった様相を呈し、色部領と並ぶ阿賀北の板碑の最密集地域という位置にある。したがってその分布も広く、北は神林村から南は加茂市辺りにまで及んでいる。出湯石仏の特徴をあげると、大きさが、特大(70 cm以上)・大型(40~70 cm)・小型(40 cm未満)の3種類ほどがあること。頭部に段をもたせ、螺髪を表現し、衲衣のひだを刻むこと。顔容が、大型以上は明確に表現するが、小型製品ではあまりはつきりしないものもあること。印相が、特大では阿弥陀定印の上生印を表現するが、大型以下では跏趺座上に横棒状の一体化した腕が配され、まったくわからないものもあること。印相が、特大では阿弥陀定印の上生印を表現するが、大型以下では跏趺座上に横棒状の一体化した腕が配され、まったくわからないものもあること。

いものが多いこと。大型以上のものには、陽刻蓮台がつくことが多く、小型のものには、蓮台を刻まずに生のままに彫り残しているものが多いこと。石材に花崗岩を用いるため、白っぽい外観を有することなどである。以上により、出湯系石仏板碑の図像は、阿弥陀如来を表しているということができる。この特大のものは、出湯石水亭の碑高84cmを誇るものや、出湯から横越村の北方文華博物館に貸し出されている碑高84cmのものなどがあり、出湯系石仏板碑を代表するものといえよう。これらの碑量と分布域は反比例しており、出湯から離れるにしたがって、小型製品が流通する傾向にある。また小型のものほど仕上げの雑なものが多いことも、量産品であることをうかがわせる。ただし、小型であっても、出湯華報寺境内例や新発田市御幸町普門寺例等の、やや仕上げの丁寧なものが（風化の度合いを考慮するとしても）存在しており、そこに生産者側の作り分け、あるいは受容者側（需要者側？）の選択等といった要因が認められるのではないだろうか。

中条系石仏板碑Ⅰ類

出湯系の影響を強く受けている阿弥陀像を刻むが、大きく異なる点は、蓮台部分にある。中条系の蓮台は、跏趺座の下を生のまま彫り残すのではなく、きつちりと陽刻蓮台を作りだして、線刻で蓮弁を刻んでいることに特徴がある。分布は、ほぼ奥山莊中条を中心としており、基数は限られている。代表的なものは、碑高92cmを測る中条町表町観音堂の例をあげられるが、一般的には30～60cm程度のものが多い。石材には、花崗岩を用いている。

中条系石仏板碑Ⅱ類

特徴としては、頭部が細長く、印相がはつきりしないが、胸の辺りまで持ち上げて結んでいることがあげられる。蓮台・分布・形状・石材は、Ⅰ類に同じい。このⅡ類の図像は、印相の位置から、智拳印を結び宝冠を被った金剛界大日如来を表していると考えたい。大きさは、Ⅰ類とほぼ同様の傾向を示している。

色部系石仏板碑

一番の特徴は、蓮台を陰刻することである。次いで、石材が粗粒玄武岩を用いていることにより、黒っぽい外観をもっていることである。そして、印相部分に2本の短い線刻を横に並べることで、阿弥陀上生印を表現していることである。その外の特徴としては、丸い大きな頭部をもち、線刻で目を表現している。うっかりすると地蔵と間違っ外見をもっているが、上のごとく阿弥陀如来を表しているものである。代表的なものとして、碑高69cmの村上市岩船地区三門市諸上寺例があるが、全体的にやや縦長で40～60cmのものが多く、分布は、神林村を始めとする色部領に多くが認められるが、北は朝日村（七）、南は新発田市にまで及んでいることから、出湯系とは比較できないにしても、ある程度広域の分布域をもっていたことがわかる。

さて、これらの石仏板碑から、一体なにが考えられるであろうか。

第一にこれらの多くが阿弥陀如来、すなわち種字板碑のキリークと同等の意味をもつと考えられることから、阿弥陀信仰の盛興という点があげられる。またなげに、石仏と種字という表出方法の違いが生じたのかという問題もある。

第二に、種字板碑が地域ごとに特色をもっているのに対し、出湯系の石仏板碑は、それを越えた広域流通品という、かなり商品化された性格をもっているのではないかとことである。そして、中条系Ⅰ類は、その在地化の所産であり、Ⅱ類は、中条地域の種字相の傾向から、必然的に要求され、そして作り出されたとみることができる。それに対して色部系は、陰刻蓮台・石材・分布域からして、出湯系・中条系に対抗するかの感がある。ただしこれは、出湯系・色部系の分布の在り方からみて、領主間の対抗意識というよりも、石工あるいは僧侶等の勢力関係を反映している可能性が高いと思われる。

そして時期比定という問題がある。紀年銘資料の皆無という状況の中で、これまでは、発掘事例や蓮弁の様相などから、出湯系（鎌倉後期）→中条

系・村上系(筆者のいう色部系)(南北朝)↓山屋系(筆者未見)(室町)と比定されてきた(小野田一九九二)。一応、中条系・色部系は、基数からして短期間の所産と考えられよう。しかし出湯系については、短期間にあれだけの数が造られたのか、という疑問がわく。さらに小野田が根拠とした出湯華報寺の高阿弥陀佛廟で経筒と伴出したという事例が確認できないことから、鎌倉後期という年代観より検討し直す必要がある。このような場合、我々は現物にかえる外はないであろう。よって、石仏板碑については、まだまだ問題が山積みされており、調査を終えた上で再考したいと思う。

⑥武蔵型およびその影響下に成立した板碑

武蔵型の板碑で、明らかに関東から製品として持ち込まれたものは、魚沼地域の塩沢町塩沢長恩寺、川西町伊勢平治長徳寺、小千谷市吉谷、大和町大崎竜谷寺例等をあげるとどまる。次いで、緑泥片岩を原材としているが、現地で加工したかと思われるものとしては、塩沢町思川、広神村連日、大和町大崎竜谷寺、糸魚川市上刈例等(八)をあげることができる。さらに、材質は緑色凝灰岩と異なっているが、武蔵型と同じ技法で仕上げたものとして、加茂市宮寄上、同市下高柳善興寺例がある。

その外に、武蔵型からかなり隔たっているが、山形2条線という属性のみを有するものに、先述した加茂・三条タイプ、柏崎東之輪例、佐渡の五輪塔形を除いたもの等があり、何らかの関連性がうかがわれる。

また、非整形のものの中で、形態的に武蔵型の影響を受けたかと考えられるものは、頂部に二条線を線刻する六日町五日町宝蔵院の文安元(一四四四)年在銘板碑と中条町本郷町鷺麻神社例以外には認めることができない。

なお、武蔵型以外では、神林村北新保と新井市小出雲経塚山の2例が、頂部山形で2条線を刻み、額を突出させるという、山形県地域に多い板碑の特徴をもっていることに注目される。

(7)装飾性

板碑の装飾ということを考える上で、一番に思い出されるのは、栗島から出土した金箔をおした釈迦三尊板碑のことである。金箔あるいは金泥で板碑を装飾するという行為については、確認例が増加しつつある(小野田一九八六、千々和一九八八)が、越佐では唯一の例である。また、断片ではあるが、小千谷市桜町竜ヶ池出土の緑泥片岩製の板碑の枠線には、漆が埋め込まれていた痕跡が残っており、注目されるところである。このように、別の素材を用いて完成した板碑に装飾を施す事例は、上記の2例を認めるのみであるが、ここでは刻むという碑面への直接的な働きかけに対して、考えていきたいと思う。

①種字

種字自体も、というより、種字こそは、板碑としての本質であり、最も重要な装飾である。事実、種字のみを刻んだ板碑も相当数存在する。ここでは、その定まっている種字について、どのように装飾性をもたせているかを、みていきたい。

まず最も著しい例は、キリーク(阿弥陀)の変態形である。これについては、小野田がまとめたもの(小野田一九八三)がある(第121図)。以下この分類に沿ってみていく。Ⅰ類は基本形。Ⅱ類はイーをアク点の間に通すものである。所作が容易なためか最も多く、中条町本郷町に1例、魚沼に2例。例程を認めることができる。Ⅲ類は、Ⅱ類に加え、ラを上にはねてイ状を呈させ、カの終末を大きく右側へうねらせているもので、かなりの装飾的效果を認めることができる。本例は、大和町大崎竜谷寺及び広神村長松のおこり塚板碑の中に各1例が確認される。Ⅳ類は、ラを上にはねてイ状を呈させ、イーにも変化をもたせ、下にアク点をうつものである。大和町大崎竜谷寺に1基のみ認められる。Ⅴ類は、カの終末を左側にはね、ラを表現しているものである。アク点は、下にうつっている。神林村山田に1例のみ認められる。また、Ⅱ類に属するが、カの終末を左側にはねる川西町鶴吉釈

迦堂例もある。VI類は、カ及びイーの終末を長く下へと延ばし、ラの下にアク点をうっており、あたかもアン点が3点うたれているかの感を呈する。栗島の9例をはじめ、色部領に「IO」基程認められる。VII～IX類は、通常三角形に配される阿弥陀三尊を、縦に並べて一体型にしたものである。カもしくはカ・イーの終末を下へと長く延ばし、それをサ・サクの右側部分とし、カの向かって左側にサ・サクの左側を刻むものである。各類1例ずつが認められる。VII・VIII類は、村上市岩船地区八日市の弘願寺に、IX類は荒川町荒島東岸寺に所在する。なお、追加として、中条町東本町大輪寺の、アク点を下にうつ例、神林村平林・福田の阿弥陀重安体（ロ・キリク）をあげておく。これらは、中条町大輪寺例及び荒川町東岸寺例を除けば、阿賀北の色部領及び魚沼地域に限られ、独特の文化圏を彷彿とさせる。ただしこれらの地域においても、正字を用いているものが大部分を占めているのであり、今後この意味を考えていく必要がある。なお六日町五日町宝蔵院には、一体型ではない縦一列配置の阿弥陀三尊がある。また、黒川村下館には、上に横1列に三尊を並べ、その下にさらに三尊を二群刻むという、阿弥陀三尊三群板碑があり、これなども装飾の一種といつてよいであろう。外には、キリクの上に三弁宝珠を刻んだ、神林村宿田大智院例・同村牧目福厳寺例・同村福田庵寺例がある(九)。

次いで外の種字では、バン（金剛界大日）のアン点と莊嚴点の結合があげられる。すなわち両者を「の」の字状に一体化させ、莊嚴点の終わりを、向かって左上へとねるといふものである。これは、阿賀北の中条町で4例、南蒲原の加茂市で1例、中魚沼の川西町で3例、南魚沼の大和町で3例が確認された。

また、破勝地藏イの上のタを、月輪状に大きく刻み、その中に地藏菩薩力を刻み、さらに残ったタ2つのタの下に、六地藏の一、宝処ダを刻むという、複雑な構成をもつ地藏三尊が、栗島に1基存在する。またダを刻まないこのタイプの地藏2尊は、5基を認めることができ、種字を月輪に用いたユニークな遺例である。

ここで、本題からやや外れるが、上の「ダ」について考えてみたい。このダを刻む板碑は、色部領の外には、山形県酒田市生石地区で2例認めることができる（小野田一九八六、1例のみ延命寺で確認した）が、色部領のもつ躍動する美しさとは比較にならない、硬直化した彫りのものである。これについては、従来仏種字の施与を意味するものといわれてきた（小野田一九八三、一九八六）。それについては、ダが文末の終字を意味するものではなく、仏種字ダの誤刻で、仏の教えを求道する善財童子を表しているとする説がある（田中一九九二）。私も誤刻ではなく、はっきりとダを刻んだ神林村飯岡慈雲寺の勢至下の例があるから、ダが仏種字を意味するものという説をとる。そしてその仏種字については、全確認例¹¹基中、最も多くの15基³⁴%が地藏関係の種字と組合わされていることから、当初は六地藏の一である宝処を意味していたものと考えたい。そして、そのデザイン秀抜さから、外の種字とも組合わされるようになっていき、この時点で種字の意味を喪失していったのではないだろうか。すなわち、種字（宝処）から装飾（二〇）として、受け入れる側の意識が変化していったことを表しているものとみたい。ちなみに外の種字としては、阿弥陀関係¹²基、釈迦7基、観音7基、勢至2基、文珠・胎蔵界大日各1基があり、この割合は、地藏関係に多く用いられることと、大日関係にほとんど組合わされないことを除けば、色部領全体の種字相を、ほぼそのままに反映しているものであり、特に問題とはならないであろう。ただ、ダを仏種字とみなす場合の唯一の難点は、それが常に外の種字の下に刻まれ、それを単独で用いた例がないことである。いずれにせよ、色部領の石造文化を考えていくうえで、今後避けて通れない問題である。

最後に、石材の使用方法についてみておこう。基本的には、1面のみが使用されるのであるが、村松・五泉の方柱タイプのものの中には、四面あるいは三面を使って、種字及び銘を刻むものがある。その外の地域では、三面に「バン・イ」「バク」「カーン」を刻む山北町今川大雲寺例、三面に阿弥陀三尊を刻む中条町関沢例、裏表に阿弥陀三尊とバンを刻む津南町赤沢例等があげられ、これも装飾の一種と考えてよいであろう。

次いで、種字の周辺の装飾についてみていきたい。

②天蓋

天蓋については、色部領に集中しており、外には奥山荘に散見される程度である（魚沼の武蔵型を除く）。天蓋の付くものが、全体に占める割合は、2割程度である。この形態についても、小野田のまとめがある（小野田一九八三、第126図）。蓮台を倒立させて、宝珠を付し両端にはねかえりをくわえるもの（a）と、付さないもの（b）、蓮を上からみたもので、真中に中房を描く、蓮台平面型（c）、瓔珞を条線で表す瓔珞抽象型（d）、瓔珞付本格型（e）、うろこ様の線刻を施す、うろこ型（f）、抽象型（g）、といった7タイプに分類されている。かなりの多様性であり、数の少ないものが別地点で認められた場合、両者は何らかの関係を有していた可能性がある。そこでこれらの分布をまとめておく。

a・b 神林村里本庄2・桃川2・山田2、栗島浦村26、村上市岩船地区三日市4・八日市2

c 神林村山田4

d 神林村山田1・飯岡1

e 神林村福田1

f 神林村山田2・桃川1・有明1・指合1

g 神林村福田1・平林1

これらの中で注目されるのは、山田の場合である。抽象型以外のものは、ほとんどが遺存しており、色部領の中で特殊な位置にあることがわかる。なお、指合の1基（バーンク）には、種字の上方に縦の線刻があり、先端になにかが刻されている。これは、なんらかの仏具かと思われるが、今後検討したい。

③蓮台

蓮台の上に種字がのる割合は、阿賀北ではほとんどの地域で5割を越えており、栗島に至っては9割にも達している。これに対して、魚沼の様相をみていくと、南魚沼では、武蔵型を除けば皆無であり、中魚沼の川西町では3割程度である。阿賀北の場合、在銘率が低いことから、蓮台の形態分類を行い、時代的推移をつかむ必要がある。よってその編年は、第一の課題であるが、現時点ではまだ成案をだすに至っていない。そこで今回は、奥山荘の板碑（蓮台の部分）に対する、本間弼氏の仕事（本間一九六八）を紹介し、責を塞ぎたい（第123図）。

④月輪

種字を月輪で囲むものは、阿賀北で16例、村松で3例、魚沼で10の、計29基をあげることができる。阿賀北の場合は、栗島に10基（二重線に囲まれたもの4基及び前述の地藏イを月輪化したもの6基）が集中している外は、村上市岩船地区三日市例、釈迦を始めとする3尊を二重線で個々に囲む神林村九日市例、同村長松遺跡出土例、関川村沼例、杵線をも併せもつ中条町平木田韋駄天山遺跡出土例、杵線をもつキリクを主尊とし、その左右に月輪に入ったサ・サクを刻む同町関沢例、同町本郷町例、が散発的にあげられるにすぎない。村松町では、矢津泉福寺の五大種字の内、火・水・地各輪のラ・バ・アを囲んでいる。魚沼では、小千谷市千谷岡林例、広神村長松おこり塚2例、大和町大崎竜谷寺3例、六日町寺尾観音堂3例、同町妙音寺例となり、六日町の寺尾例では阿弥陀三尊を囲い込んでいる。これらの種字をみてみると、阿弥陀関係7例、地藏力6例、胎蔵界大日4例、金剛界大日2例、観音2例、釈迦関係・地藏イ各1例、不明2例となる（村松は除く）。ここから、栗島の地藏信仰はひとまずおくとして、月輪の性格からして、胎蔵界大日種字との関連性が強いことが認められる。

⑤杵線

方形の杵線を刻み、碑面を区画するものは、阿賀北に14例、魚沼に3例が認められる。分布は、北から神林村福田で2例、同町長松遺跡出土例、

同町桃川例、二重線で区切られている同町平林千眼寺例・村上市岩舟地区八日市弘願寺例・黒川村下坪穴例、種字上をさらに区切る黒川村須巻例、梓線の中に月輪を配し、種字下をさらに区切る中条町平木田韋駄天山遺跡出土例、梓線（キリーク）と月輪（サ・サク）を3面に配し、阿弥陀三尊を刻む同町関沢例、同関沢例2例、梓の外に天蓋をもつ同町東本町大輪寺例、笹神村出湯例をあげることができ、魚沼では、小千谷千谷岡林例、二重線で区切られている大和町大崎竜谷寺例、六日町妙音寺例が遺存している。種字では、阿弥陀関係が13基と多く、大日関係3基、釈迦1基となっている。この梓線で碑面を区切ったり、月輪で種字を囲うという装飾は、青森県の深浦町と弘前市、秋田県の若美町と八郎潟町、山形県酒田市という、まったく乏しい私の調査例からみて、日本海沿岸地域の特色といえるのではないだろうか（二一）。特に越後以北では、その感を強くもったが、越後より西方は全く状況を把握していないために明確ではない。なお、神林村平林で確認される、梓に沿って蓮弁様の彫り込みをめぐるという手法は、秋田県若美町福川福昌寺例にもあり、両者の関連に注目されることである。また、あるいは本例と類縁関係にあるかと考えられる、青森県深浦町関や北金ヶ沢の月輪内の小蓮弁については、すでに越前との関係が説かれている（千々和一九八八）。

（8）石塔と墓

中川成夫は、十日町市の大黒沢の板碑及び、その下から出土した骨蔵器の報文（中川一九六三）の最後の部分で、以下のように述べた。「南朝治下における魚沼地方では、この種のいわゆる梵字碑は、追善をかねた墓碑として用いられたであろうと、蔵骨器の出土と相まって私は推察する」と。そして「今後この種の遺構の発掘例の増加によって、この推論が実証されることを期待するものである」と結ばれた。そして、爾来30年以上の月日が経ったが、この提言は今も新鮮に響いている。越後において、これまで石塔と墓との関係についてまとめられたことはなかったのではないかと思う。そこで今回、本資料集に品田高志がまとめている「越後における中世墳墓・墓地」（品田一九九四）及びその資料編を参考にして、以下に両者の関係を素描してみたい。

資料編の「遺跡のうち、石塔類が出土した例として、内浦観音堂（五輪塔）、韋駄天山（宝篋印塔・層塔・板碑）、大薮（五輪塔・宝篋印塔）、竜ヶ池観音堂（宝篋印塔・板碑）、岡林（板碑）、大黒沢（板碑）、小児石（宝篋印塔）、千古塚（五輪塔）、宝積寺（墨書板碑）」の9例を数え、半数を越えている。これらの石塔については、おおよそ板碑は一四世紀、墨書板碑は一五世紀後半から一六世紀代、五輪塔は一五世紀から一六世紀代、宝篋印塔は一五世紀から一七世紀前半代という年代観が与えられる。ここから板碑が最も早く標識として現れ、次いで五輪塔・宝篋印塔が用いられていたといえよう。越後の板碑が隆盛を極めるのは、一四世紀代であり、これは品田の言を借りれば「墳丘墓から土壙墓」への「転換期」であり、その過渡的な墳墓型式として「方形基壇墓」が出現する時期にあたる。よって地域差という問題は残るが、基本的には、板碑―方形基壇墓、五輪塔・宝篋印塔―（小マウンドを伴う）土壙墓という関係が成り立つといつてよいであろう。さらに発掘調査はされていないが、マウンド上に置かれた板碑の確認例はかなりの数に上り、原位置を離れているものの中にも、その可能性のあるものがある。これに大胆な推論を加えれば、越後における板碑受容の実際の一端は、埋葬される人々の増大に伴う墓標としての造立を目的としてなされたということが考えられる。これは、群集する墳墓群の中央に置かれていたという六日町田崎の山の腰板碑のような場合もあったであろうし、冒頭の十日町市大黒沢のような例もあったであろう。なお、これらの板碑に刻まれた銘文からは、墓標としてより追善供養の要素が強いが、それは武蔵型板碑の影響下にある当時の魚沼地域での限界を示すものと考えるべきであろう。また、これは墓標以外の受容を否定するものではないことは、もちろんである。特に阿賀北の石仏板碑の場合は、墓標とは考えにくく、広域に流通していることとの間には、何らかの相関関係がないだろうか。

(9)まとめにかえて

中世の石造文化から過去の人々を考える場合、板碑はそれ単独で把らえるべきではない。板碑が数量的に石造物の圧倒的な割合を占めていようとも、それがすべてではないかぎり、外の石造物―代表的なものでいえば五輪塔・宝篋印塔―を抜きにして石造文化を語ることはできない。ましてや越後では、板碑をほとんど受け容れず、五輪塔を造立していた頸城のような地域もある(一二)。また板碑の密集地域においても、多くはないが、確実にそれらは存在するのである。どうして中世の人々が、宝篋印塔を、五輪塔を、そして板碑を選んだのか、それらは受容層の違いからくるのか、あるいは造立を勧める側の問題であるのか、それとも時期差を示しているのか。そして、各石造物が信仰の結果であるからには、当然その信仰基盤から考えていかねばならないが、それらの差異がなぜに生じたのかという問いに、今は答える術をもたない。

以上、管見に及んだ範囲で越佐の板碑を概観してきた。今回は、一通りみてまわった概要をまとめたに過ぎないが、多くの課題が後に残った。今後、本稿が、中世越佐の人々の信仰形態を考える際に、少しでも参考になれば、望外の幸いである。

註

(一)あるいは関川村沼所在の応永銘板碑も、同様の石材を使用している可能性があるが、板状であることもあり、一応除外した。

(二)なお弘願寺の2例では、キリークのカ・イーを下に延ばすことによつて、縦一列に一体的に阿弥陀三尊を配置するといった変わった手法をとっており、系譜的に追いつける可能性がある。現在のところ、大同小異の意匠をもつものとして、神林村の南に接する荒川町荒島東岸寺例、徳島県で2例(石川重平「徳島県」(坂詰編一九八四所収)、北海道で1例(平成6年度、新潟県庁における文化財指導者講習会での千々和到氏の配布資料による。)があり、本例と併せると6例が認められる。これらがどのような関係にあるのかは、今後検討したい。

(三)少なくとも竜谷寺には、3基以上の板碑があつたと考えられるが、一部盗難にあつたとのことであり、本堂前の7基を除いては、屋内に保管されている。

(四)なお、今回数えたものと同様の形態に作られているが、額部に線刻のないものも少数遺存するが、これは集計から除外した。

(五)文献からは、3基以上が出土したとされているが、現在確実なものとしては、市立博物館に展示されている5基と、写真で確認できる題目例1基(現所在地不明)を加えた6基である。

(六)ただし石仏板碑を加えれば、阿賀北での比率は、5割強にまで下がるという興味深い状況にあることがわかる。

(七)山形県鶴岡の致道博物館で1基確認しているが、その由来については確認していないので、参考として付言するにとどめる。

(八)外に柏崎市立博物館で、碑高94 cmの緑泥片岩製品が保管されているが、故人よりの寄贈品であり、来歴等は一切不明であるという。

(九)これらはあるいは、地蔵イとキリークの2尊かもしれないが、一応(小野田一九七〇)に従っておく。

(一〇)もともと、当時の人々にとつて、梵字は神秘の文字として映つたと考えられ、字義の理解と板碑の造立は別問題であつたのではないだろうか。もちろん宗教者が介在していることから、簡単な説明はなされたとは考えられるが、受け容れる側としては、造立による功德により強い関心が払われたと解したい。この場合、ダが種字であるのか、そうではないのかということは、造立者については、二義的なことだったといえるであろう。

(一一)例えば、620基を越える板碑の調査がなされた宮城県北部の河北町・北上町(勝倉ほか一九九四)では、杵線や月輪はごく限られており、特に前者はほとんど認められないという状況にある。

(一二)五輪塔・宝篋印塔の多くが、中世後半期の所産であると考えられることからすれば、あるいは越後守護上杉氏や守護代長尾氏との関係が想定さ

れるかもしれない。しかし、しばしば述べきたったように、板碑の最盛期は一四世紀代にあり、時期的にややずれがある。

原補註一

脱稿後、長野県上水内郡三水村に、本稿でいう「加茂・三条」タイプ等と類似する遺例があることを、長野市の前島卓より教示を受けた（小山一九九三）ので、ここに紹介する。

本例は、頭部山形で線刻の横線を有し、碑面を方形に彫り窪めるといふ、共通性をもっている（第124図）。ただ、相違点もあり、線刻が1条で、底部に孔を穿つこと（加茂・三条タイプは、2条線ではぞがつく）、線刻上に日輪付キリクを刻むこと等である。そして、「名号」及び「永享」（一一一四三〇）年銘が、確認されている。このような相違はあるものの、形態の共通性及び、糸魚川市寺山金藏院の「名号」及び「永和」（一一三三七六）年銘例を比較すると、加茂・三条タイプと何らかの関係があるものと考えられるのではないだろうか。そしてこの三水村例及び糸魚川市例では「名号」が、柏崎市東之輪例では「題目」が、それぞれ刻まれていることから、「頭部山形」（二）条線線刻・碑面彫窪め」という形態は、特定の宗派と結び付いたものではないかという予測がなされる。このようにいえるのであれば、三条市に法華宗陣門流総本山本成寺があることと、加茂・三条タイプとの関係が問題となってくる。もしも、この推測が当を得ていたなら、宗派の布教方法の在り方及び地域への浸透について、その一端を明らかにできる可能性があり、注目されるべき資料群といえよう。なお、2つの紀年銘資料を得たことで、時期的にも一四世紀後半から一五世紀中頃という範囲が想定され、一応の所産時期と仮定したい。これは、県内の種字板碑群よりやや後出的であることを意味し、それらの関係にも注目されるところである。

原補註二

補註一の文献で、（平野一九九二）の存在を知った。それに既知の分を合わせると、頸城地域には、種字板碑8基、五輪塔形7基、武蔵型系2基、名号板碑1基、不明3基、石仏板碑11基の、計23基が存することになる。これらについては、踏査を行った上で再検討したいが、あえて感想を述べれば、種字板碑の中に東北系統の影響が認められるものがあること、石仏板碑に外ではほとんど認められない地藏像を刻むものが多い（8基）あること、五輪塔形を刻むものが多いこと等があげられる。

3 阿賀北の紀年銘板碑

(1)はじめに

筆者は以前、小野田政雄の業績（小野田一九六八・一九八三・一九八六など）に学びつつ、新潟県内の板碑についてまとめたことがあった（本章第二項）。これは、当時概数さえはつきりしていなかった板碑について、一応の現状を記したものであった。その結果、総数七四一基という値を得た。その後の出土例や栃尾市等での追加調査、柏崎市（渡邊一九九六）・上越市（吉川一九九五）での調査例等により、総数は八百基近くに及んでいる。ここでは、次の基礎作業の一として、阿賀北の紀年銘板碑を图示し、検討を加えることを目的とする。

なお、ここで単に板碑という場合、種子などが刻まれているものを指し、墨書されているものは墨書板碑とよぶこととする。

(2)阿賀北の紀年銘板碑

阿賀北という阿賀野川の北側の地域で、板碑は五百基ほどが認められる。集中しているのは、旧小泉荘加納にあたる神林村・栗島浦村・村上市岩船地区、旧奥山荘中条・南条及び北条の乙宝寺の所在する中条町内、旧加地荘にあたる新発田市域、旧白河荘に所在する霊場の出湯華報寺などである。これらの中で、紀年銘板碑はわずかに二六基（内墨書板碑六基）（二）、五%ほどに過ぎず、年紀が刻まれる例はきわめて限られている。

ここでは、所在不明（中条町関沢元亨三（一三二三）年銘、黒川村下館慶長三（一五九八）年銘）の二基及び墨書板碑の四基を除く、二一基ほどの事例を图示する。なお、图示できなかった六基については、中条町史資料編第一巻（小野田一九八二）によって、概要を記することとする。報告順序は、阿賀北最古の板碑が所在する出湯華報寺（笹神村）から始め、以下北方へと向かう。すなわち笹神村一基、新発田市二基、中条町六（八）基、黒川村一基、関川村一基、神林村六基、栗島浦村二基、村上市二基（二）を紹介し、次いで墨書板碑として新発田市（一）基（二）、中条町四基、黒川村二基を取り上げる。また紙面の都合で、断面・側面図は、基本的に省略する。

①板碑

1、阿賀野市（旧笹神村）出湯華報寺（第125図）
名号板碑で、全長八〇cm、幅二七・五cm、厚さ二〇cmを測り、銘は以下のとおりである。

永仁七年

南無阿弥陀佛（蓮台）

二月十六日

永仁七（一二九九）年は、県内最古の在銘であり、自然石に碑面を平らにしただけの加工を施している。名号は行書体で、蓮台は端正、中房は表現していない。現在は、華報寺の堂内に収められている。

2、新発田市上石川（第126図上）

阿弥陀三尊板碑で、地上高六四cm、幅五三・五cm、厚さ三〇cmを測り、銘は以下のとおりである。

サ

キリク 元應元年十月 白

サク 廿日 敬

三尊ともに蓮台をもたず、脇待の間に元應元（一三一九）年の年紀を刻んでいる。脇には、もう一基板碑があり、阿弥陀三尊の下にさらに地藏種子（イ）を刻むという特異なものである。

3、新発田市岡田法音寺（第126図下）

阿弥陀三尊板碑で、全長五七・五cm、幅三六・七cm、厚さ一七cmを測り、銘は以下のとおりである。

正中二年

サ

キリーク（蓮台）

サク

蓮台は、主尊にのみ刻まれており、非常にシンプルである。年紀は、蓮台とサの脇に正中二（一三二五）年と刻まれている。これは、中野・大沼説（中野・大沼一九八〇）に従ったものであるが、それ以前の定説であった正平二（一三四七）年と読めないこともない。しかし後述のように、蓮台相よりみれば正中でよいと思われるのである。法音寺には、五輪塔・宝篋印塔・板碑・石仏といった多数の中世石造物が集中しており、地域における霊場の役割を担っていたことがうかがわれる。

○胎内市（旧中条町）関沢七十刈（小野田一九八二）

阿弥陀三尊板碑で、全長二〇五cm、幅一二五cm、厚さ一三cmを測り、銘は以下のとおりである。

元

サ（蓮台） 亨

三

キリーク（蓮台）

天

サク（蓮台） 時

正

となる。中条町最古の元亨三（一三二三）年銘を有するが、団地造成の折に行方不明となっている。非常に薄手のつくりである。碑高が五尺を越えるものは、紀年銘資料では本例を含め六例、無銘を含めても二〇基に満たない。

4、胎内市（旧中条町）関沢（第127図）

全長一六九cm、幅一二五cm、厚さ一三cmを測り、銘は以下のとおりである。

嘉

暦

二

バン（蓮台）

天

一 十

月

「二」以外肉眼では確認できないが、拓本でかろうじて判読できる。元亨銘板碑が行方不明の今、嘉暦二（一三二七）年銘は、胎内市最古の現存板碑となる。非常に薄手のつくりで、現在に向かつて左上が欠けてしまっている。バン及び蓮台の彫りは深く、蓮台は横幅三〇cmにも及ぶ。

もと虚空蔵堂跡にあったものを大正六年に七十刈に移し、さらに昭和四六年に現在の関沢公会堂前に寺山出土の板碑群と共に移設し現在にいたる（小野田一九八二）。

5、胎内市(旧中条町)西栄町地藏堂(第128図上)

地上高七五cm、幅一〇六cm、厚さ三七cmを測り、銘は以下のとおりである。

バン(蓮台)

貞和二年

現在二分割され向かって右には後刻の四十八日の銘が刻まれている。さらに上が欠け、紀年銘の部分も剥離してしまっている。本板碑は、江戸時代の小泉蒼軒『辛丑随筆』などに記述があることから、貞和二（一三四六）年につくられたことがわかる。本例も板状に割った製品である。

6、胎内市(旧中条町)長橋(第128図下左)

地上高六四・五cm、幅三八cm、厚さ二七cmを測り、銘は以下のとおりである。

文和

三 三月

□□日

サ(一枚蓮弁)

キリーク(蓮台)

サク(一枚蓮弁)

町史では延文／三紀三月／戊戌とする（中条町一九八二）が、二行目の三 三月以外は明確ではない。年号の一字目目は「文」もしくは「延」、二文字めは「文」ではなく「和」、すなわち文和三（二三五四）年としたい。石材は、角のとれた偏平な河原石を用いている。脇待の蓮台は、一枚蓮弁である。

7、胎内市(旧中条町)東本町大輪寺(第128図右下)

全長六三cm、幅二六cm、厚さ二二cmを測り、銘は以下のとおりである。

サ(一枚蓮弁)

(天蓋) キリーク

貞治五年七月十日

サク(一枚蓮弁)

天蓋は中央及び両脇に三つの房をたらし様式である。奥山荘内に天蓋を刻むものはほとんどなく、貴重な遺例である。年紀は、貞治五（一三六六）年。脇待の下に一枚蓮弁を刻む。石材は、偏平な河原石である。

8、胎内市(旧中条町)野中(第129図)

全長五九cm、幅三一・五cm、厚さ二三cmを測り、銘は以下のとおりである。

永和
カ
年

「永」、年は「」につくり、ともに上を「(なべぶた)」に刻む。石材は、偏平な河原石である。なお、本板碑を含む四基の板碑が奥山荘城館遺跡の一「野中石塔婆群」として国史跡に指定されている。ここでは、同じ塚上に置かれている、阿弥陀三尊板碑と地藏板碑を紹介する。

阿弥陀三尊板碑は、地上高一四四cm、幅一三〇cm、厚さ三三三cmを測る割石を用いた大型のものである。キリークの下に中房・蓮台を刻み、脇待の下には一枚蓮弁を配している。

地藏種子板碑は、地上高三七cm、幅二五cm、厚さ一三三cmを測り、永和板碑とほぼ同様の形態である。

二基の地藏板碑は、あるいは阿弥陀三尊板碑の脇待に相当するかとも思われる。また、塚上に立てられていることから、原位置を保っている可能性があり、今後の調査が注目される。

○胎内市(旧黒川村)下館(小野田一九八二)

高さ一二〇cmほどで、所在不明であるが、文政一三(一八三〇＝天保元年)年に館村より掘り出されたことが、小泉蒼軒の『辛丑随筆八〇』に記されている。今、町史に従い銘を記す。

再法 覚平五郎

海仙 道教

諸行無常 明見 蔵平治

是生滅法 大檀那道門 彦五郎

生滅滅為 〃〃覺 左近五郎

寂滅為樂 道通 〃郎太郎

行道 徳太郎

金股五郎 令道

同妻 経身

慶長三年三月十八日

左

馬五郎

奉 聖 坊阿者梨

構成は、阿弥陀種子・槃経経の偈・二〇人の人名・年号となり、慶長三(一五九八)年の結縁関連の板碑と考えられる。

9、岩船郡関川村沼(第130図)

地上高二三〇cm、幅一三〇cm、厚さ五四cmを測り、銘は以下のとおりである。

(月輪) 二丁 三

バン(中房)(蓮台)

応永 年 十月

奉造立大旦那成空

越後最大の板碑である。応永四（一三九七）年の造立で、成空は佐々木加治氏の系譜に連なる片貝氏の一族という。時期的に外の板碑よりやや下るためか、種字・蓮弁は薬研彫りではなく、浅く彫り窪め中央に線を入れている。

10、岩船郡神林村牧目福厳寺（第131図）

地上高一〇四cm、幅四八・五cm、厚さ三五cmを測る阿弥陀三尊板碑で、三尊ともに中房・蓮台を刻む。銘は向かつて左の側面に「元應」（一二三一九〜二〇）とのみあるが、位置的に不自然である。形態的には、偏平な河原石を用いており、特に加工を施さない。

11・12、神林村牛屋社（第132図）二基

牛屋の村社の脇に四基が並べられているが、その内の二基に紀年銘が認められる。この板碑群は、その他大多数を占める河原石を用いるタイプと異なり、方柱状に加工している。石材は、赤みがかった黄く黄白色を呈し、村上市の柏尾石と考えられる。

11は地上高一四四cm、幅四五cm、厚さ二四cmを測り、銘は、以下のとおりである。

十

キリーク（蓮台） 元亨元年八月

三日

元亨元年は一三二一年で、蓮台は非常に貧弱なものである。

12は地上高一〇五cm、幅四九cm、厚さ四二cmを測り、銘は、以下のとおりである。

「」見□

「」

アंक 元亨元年八月十三日

□人行□□

「」

種字はアंकに近いが、修行点がないためアंकとする。次いで、偈が刻まれているが、風化のためほとんど判読できない。そして、偈四行の真中に、右記と同年月日の「元亨元年八月十三日」が刻まれている。したがって、両者は双碑とみなされよう。ただし、さらに残りの二基がバン・アンのであることから、バン・アंक、アン・キリークの組み合わせも想定され、四基が同時に造立された可能性も考えられよう。

13、神林村山田（第133図右）

全長七二cm、幅三八cm、厚さ二二cmを測り、銘は以下のとおりである。

サ（蓮台） 願似此功德

普及於一切

キリーク（蓮台） 元亨二年十月

我亦与衆生

サク（蓮台） 皆共成佛道

阿弥陀三尊板碑で、三尊ともに蓮台を刻む。種子の下には、妙法蓮華經化城喻品第七の偈及び、中央に元亨二（一二三二）年銘を刻む。キリークの剥離が著しい。偈の三行目「ホ」は「等」の異体字である。用材は、偏平な河原石である。

14・15、神林村山田墓地（第133図右、134図）二基

14は、地上高八八cm、幅四三cm、厚さ三二cmを測り、銘は以下のとおりである。

バク・ダ（中房）（蓮台）

甲 逝去

貞治第三辰七月廿六日阿妙

釈迦如来（バク）・ダの二尊種子板碑で、ダが中房を貫いている。ダの向かって左側に、貞治三（一二三四）年銘が刻まれている。用材は、方柱状の河原石である。

15は、14の横に並んで置かれており、全長八〇cm、幅四五・五cm、厚さ二六cmを測り、銘は、以下のとおりである。

宗妙大禅定尼

バク・ダ（中房）（蓮台）

應安第六癸六月五日

丑

14と同じ二尊種子で、ダの下端が中房を貫き、蓮台に達している。銘は、向かって右側に人名、左側に年紀を刻む。人名中の「尼」はヒをエにつくる。紀年銘は、従来応永六（一二九九）年とされていたものであるが（竹内ほか一九八四）、応永の場合、干支が「己卯」となるが、無理がある（四）。応安の場合は、「癸丑」となり、丑を異体字と考えれば整合する。また、向かって右の「妙」の「女」と「安」の下「女」が類似していることも有力な追証となろう。したがってここでは、応の下「安」と読み、応安六（一二七三）年造立の板碑として、取り扱う。用材は、偏平な河原石である。

16・17、岩船郡栗島浦村内浦観音寺（第135・136図）二基 日本海に浮かぶ栗島には、一四六基の板碑が残されている。それらの大部分は、内浦観音寺・観音堂境内に集められており、それらが居並ぶ様は、見るものを圧倒せざるを得ない。中でも一際目立つ二基の巨大な板碑には、梵字名号が刻まれ、この二基にのみ紀年銘が認められる。

16は地上高一六〇cm、幅七〇cm、厚さ三七cmを測り、銘は以下のとおりである。

沙弥入阿弥陀佛

（天蓋）ナン・ム・ア・ミ・ダ・ブツ（中房）（蓮台）

文和第三天甲六月一日

午

本梵字名号は、非常に裝飾性に富んだもので、全板碑中の白眉である。文和三（一二三四）年に、入阿弥陀佛によって造立。用材は、偏平な河原石である。

17は地上高二二〇cm、幅七六cm、厚さ五八cmを測り、銘は以下のとおりである。

沙弥良阿弥陀佛逆修

(天蓋) ナン・ム・ア・ミ・ダ・ブツ (中房) (蓮台)

文和三年甲七月十四日

午

二二〇cmという法量は、9に次ぐ越後第二の大きさである(五)。装飾的には16よりもおとなしいが、彫りがより深く、力強い。逆修供養のため、良阿弥陀佛により文和三(一三五四)年、16より一月半遅れて造立。用材は、方柱状の河原石である。

この二基の板碑は、法量及び在銘から、栗島の板碑全体の総供養碑としての位置を占めているものと考えたい。

18、村上市三日市諸上寺 (第137図)

全長九七・六cm、幅四一cm、厚さ二三cmを測り、紀年銘は裏面に刻まれている。表面は、

(天蓋) イ・ダ (中房) (蓮台)

となり、裏面に

理法禪尼廿一歳

延文二丁五九日卯

西 剋

と、二行にわたって銘が認められる。尼のヒはエ、廿は、卯は左を方につくっている。すなわち本板碑は、理法禪尼が延文二(一三五七)年五月九日卯の剋に二十一歳で亡くなったことを記し、その追善供養のために造立されたものと考えたい。

19、村上市八日市弘願寺墓地 (第138図)

地上高一九三cm、幅五四cm、厚さ三八cmを測り、方柱状を呈する牛屋タイプの板碑である。銘は、以下のとおりである。

(二重枠線)

光明遍照

弟子

縦一体型

十方世界

丁

阿弥陀三尊 (中房) (蓮台)

至徳四年 孟秋

念仏衆生

卯

撰取不捨

合衆

構成は、上半分に二重枠を設け、その中にカ・イーを下方へ延ばして、カをサ・サクの右部分とし、その左側にサ・サクの左半を縦に重ねるという縦一体型の阿弥陀三尊を配する。なお、アク点はイーの横に打っている。種子の下には、二重枠の中房・蓮台が配される。次いで枠線の下方に、観無量寿経の偈・紀年銘・造立趣旨を刻んでいる。すなわち本板碑は、師の追善供養のため、至徳四(一三八七)年七月(孟秋)に弟子らによって造立されたと考えられる(六)。

なお、同所には八基の板碑があるが、その内の三基が牛屋タイプである。さらに三基の内、19の外にさらに一基に縦一体型阿弥陀三尊が刻まれている。これは、イーをキリークのアク点の間に通し、カのみを下へ延ばすものである(七)。

なお、つとにその存在を知られるほぼ同意匠の阿弥陀三尊は、徳島市丈六寺のもので、建武四(一三三七)年の銘がある(川勝一九四四・石川一九八三)。本例との時期差は五〇年。遠く阿波と越後、さらに北海道にも類似の例があるという(八)。これをいかに考えるか、今後の課題であるが、同一人物の作とするには無理があろう。また、個々に細部が異なることから、偶発的なものと考えたい。

②墨書板碑

20、新発田市上三光、宝積寺館跡出土資料(第139図)
全長三九・五cm、幅一八cm、厚さ八・七cmを測り、銘は、以下のとおりである。

□□□□(側面)

一念弥陀佛

伏遇勝光禅尼大(祥)(九)

之辰奉彫刻本□

石塔婆一本仰□

即滅無量罪

依此功因積怨頓

キリク

倩以

釋若氷迷於長所

現受無比楽

罪消滅如霜融於

遷日脱離九壞了悟三乘

後生清浄土

悉見本性文陀自遊佳心

□六□□□□

惜しくも紀年銘は読み取れないが、キリクの下に観世音菩薩往生浄土本縁経の偈四行、さらに造立趣旨が九行にわたって書かれている。趣旨は、勝光禅尼の三回忌に本塔婆を奉って供養するというものである。報告書では、一定期間を経た後に、当初から埋める目的で造られたと推定している(田中・鶴巻一九九〇)。また出土状況は、字面を仰向けにして同程度の石七個とともに土壙の上方に埋められていた。用材は、偏平な河原であり、墨書板碑の中では最も大型の部類に属する。

○胎内市(旧中条町)乙、乙宝寺出土資料(小野田一九八二)

全長約二四cmで、長楕円形の河原石の周囲に墨書されている。銘は、以下のとおりである。

毎日晨朝入諸定

入諸地獄令離苦

無仏世界度衆生

今後世能引導

敬白

于時文安三年□月「」

光明真言・ソワカ

□尊靈德禅禅門故也

孝子

敬白

構成は、延命地藏経の偈・紀年銘・光明真言といったもので、板碑というよりも供養碑の一種としたほうがよいかもしれない。

胎内市(旧中条町)築地出土資料(小野田一九八二)

地上高三〇cm、幅一二cm、厚さ七cmを測り、銘は以下のとおりである。

大永六年五月十日

文珠大聖尊三世諸仏師

マン 右為遊□□門兼也 敬白

師依供養教□□仏供養 三十七日

南無大師遍照金剛

(裏面) 南無大師遍照金剛

構成は、種字・紀年銘・造立趣旨・金剛名号であり、遊□(禪)門の三七日供養のために大永六(一五二六)年に造られた墨書板碑である。旧街道沿いの畑より出土した。

21・22、胎内市(旧中条町)江上、下町・坊城遺跡出土資料(第140・141図)

武家居館である史跡江上館跡の西々西南側に広がる下町・坊城遺跡は、八〜一七世紀まで連綿と続く集落跡であるが、中世の段階で方形の溝に囲まれる景観を呈する。詳細は、今後順次刊行予定の報告書でふれていく予定であるが、本資料はあまり周囲に遺構のない地点にある五×三m程の楕円形の土坑から出土している。本土坑からは、多数の円礫が埋められた状態で出土したが、この中に八点の墨書石が含まれており、その内の二点に紀年銘が認められた。なお墨書は、ほとんどがうつ伏せ状態となった石に遺存していた。

21は、全長二一・二cm、幅一四・六cm、厚さ一〇・七cmを測り、銘は正面から向かって左側面に認められる。

白

ウーシ 光明真言

施主

(五行)

敬

十四

時天文十八己年七月

西

為□□第七廻忌

構成は、ウーシ・光明真言・年紀・造立趣旨等で、□□の七回忌の供養を天文一八(一五四九)年七月十四日に行ったことをあらわしている。

22は、全長二三・七cm、幅一四・五cm、厚さ九cmを測り、銘は、以下のとおりである。

「」南無大師遍照金剛

元龜三年壬正月三日施主

申 敬白

「」は「剛」である。この「南無大師遍照金剛」銘は、八点の内四点に認められ、すべて「」を用いていることから、同時の所産と考えたい。元龜三年は一五七二年。

この二基の塔婆は、二十三年余の開きがあるにもかかわらず、共に同じ土坑から出土している。したがって、墓地整理にしては、天文銘の墨書が残っていることが不自然である。よってここでは、二十三回忌の法要に伴い、過去に埋めた板碑(ここでは七回忌の天文銘板碑)を掘り出し、まとめて供養したのと考えたい。

○胎内市(旧黒川村)上坪穴出土資料(小野田一九八二)
全長三八cm、幅一九cm、厚さ九cmを測り、銘は以下のとおりである。

趣意

今此三界 右相当過去
皆是我有 見秀大姉二

七日忌上辰奉

バク・ダ

書写塔婆也

乃至法界平等

其中衆生

利益故也

悉是吾子

敬白

長祿二才

構成は、種子・法華経譬喩品の偈・趣意・紀年銘からなる。趣意は、見秀大姉の二七日忌供養であり、それに相当するバクが大書されている。年紀は、長祿二(一四五八)年で、前述の乙宝寺出土例と合わせて、一五世紀半ばには、石に刻むのではなく墨書するという形式が成立していたことがわかる。昭和四一(一九六六)年上坪穴より出土。

○胎内市(旧黒川村)下館出土資料(小野田一九八二)

全長一九・五cm、幅一五・五cm、厚さ五・五cmを測り、銘は以下のとおりである。

天文十一年壬寅十月七日

承□於諸仏

伏値 禪門六七日□之

辰彫刻□□塔

ユ 敬以

驪珠獨曜於滄海踞涅槃

岸桂輪孤朗於碧天普

生 導世間同登覺路者也

孝子敬白

□呼春風

構成は、種字・偈・紀年銘・造立趣旨からなる。趣旨は、天文一一(一五四二)年に某禪門の六七日忌の供養を行うというもので、それに相当するユが大書されている。

(3) 板碑の様相

ここでは用材・種子相・蓮台相・銘を刻む位置などについてみていくこととしよう。

高さ四〇cm×八〇cmとなる偏平な河原石が多い。表面を多少平滑にしている場合もあるが、顕著な加工痕は認められない。例外として、12・13・

19といった方柱形の牛屋タイプがあり、これは阿賀北全体の2%を占めるに過ぎない。また、奥山荘内には、1mを超える大型製品の中に、明らかに割れ裂いたと思われる材を用いたものがある。それは、4・5・中条野中例等である。したがって阿賀北の板碑は、九五%までが非成形のタイプであることがいえ、それでないものは、あくまで例外的なものということができよう。

種子相

今回示した二〇点ばかりの資料のみでは、はっきりしたことがいえない。次の蓮台相をもとに多くの資料を集積する必要がある。紀年銘数は、阿弥陀三尊七、名号・バン各三、バク+ダ二、カ・イ+ダ・アंक・キリーク各1となる。ただ一点だけ現時点で指摘できると思われるのは、一三五〇年頃を境に、キリークのイーの終点やバクのバの終点が横方向に長くはねるようになっていくという現象である(2・3・10・13→6・7・14・15)。なお、14・15のバク、18のイの下に刻まれている「ダ」についてふれておきたい。先稿(水澤一九九四・本章第二項)では、施与の意味とする小野田政雄説(小野田一九八三・一九八六)、善財童子とする田中真吾氏の問題提起(田中一九九二)を紹介した後、ダが組み合わされる比率の最も多い地藏種子に係する六地藏の宝処を意味するものとした。ただ、その折りにも記したが、ダが常に外の種子の下に刻まれ、単独の遺例がないことがずっと気にかかっていた。そうしたところに、色部氏の居館平林城の堀から、「善財童子如諸法」という木簡が出土していることを知った(小林一九九二)。不明を恥じるばかりではあるが、少なくとも一六世紀において、色部領内で善財童子の信仰が行われていたことが事実となった。よってここから敷衍して、「ダ」が「善財童子」を意味するとした田中氏の所説を支持したい。また、常に種子の下に刻まれるということの意味も、仏の下で教えを請うという善財童子の姿を表現していると考えられよう。

蓮台相

阿賀北の場合、在銘率は約5%と極めて低いが、蓮台を刻む比率は半数を越えており、栗島に至っては九割に達している。したがって、蓮台の時代相を把握することこそが、板碑の時期比定にあたっての決定的な意味を有しているといつて過言ではない。そこで、前章でみた紀年銘板碑の内、蓮台を刻むものを集成して、その変遷を考えることとしたい(二〇)。

第177図は、紀年銘板碑の蓮台を色部領(神林村・村上市岩船地区・栗島浦村)と、奥山荘中条以南(二一)の地域に分けて時代順に配列したものである。両者を比較すると、一見して異なっていることが認められよう。そこで、両者を具体的にみていこう。

最古の紀年銘を有する出湯板碑(1)は、上の蓮弁が縦長で五弁、反花(下の蓮台部分)は大きくは五弁で、間に小さく点を刻む。この縦長の蓮弁というのが、一三〇〇年前後の指標となる。また、中房を刻まないものが多いというのも、中条以南の板碑の大きな特徴でもある。

次いで、一四世紀第二四半期に入るところになると、蓮弁がやや外側に傾いてくるようになってくるが、まだ縦長の印象は残っている(3・4)。

それが、一三五〇年前後になると、縦長というよりも、斜めに開くようになり、反花が七弁に増える(5・6)。また、この時期の大きな特徴としては、阿弥陀三尊の脇侍の蓮台が、一枚蓮弁に省略されるものがあることである(6・7)。

ただし全体として、どの程度の比率でどのように変化するかは、さらなる精査が必要であり、脇侍に蓮台を刻まないものの位置付けを含めて、結論を次へ持ち越さざるを得ない。

なお、野中の大型板碑は、上の中央の蓮弁が輪状に刻まれているが、その脇の蓮弁が斜めに刻まれていること及び脇侍が一枚蓮弁を伴うことから、ほぼ一四世紀の第三四半期ごろに比定できよう。すると、脇の永和四(一三七八)年地藏種子板碑にやや先行するところに造立されたことが予想される。したがって永和碑は、大型板碑が造立されて後に、さらなる供養に伴って無銘のもう一基とともに追加造立されたものと、現時点では考えておきたい(一一)。

そして、最新の年号、すなわち一四世紀末の応永四（一三九七）年銘を刻む沼の板碑（9）は、平彫りという彫り方や蓮台の様相がまったくそれ以外のものと異なっており、中条以南はもちろん色部とも別の系統を想定せざるを得ない。ただし、中房の枠が二重であることにのみ、時代相をみることができようか。

次いで色部領の板碑をみていく。

色部領の場合、装飾に富む板碑が多いことは、以前から指摘されている（小野田一九七〇・一九八三・一九八六など）。したがって蓮台には中房を伴うことが多く、中条以南と対照的である。

当地域の最古の紀年銘は、牧目福厳寺の元應銘（一二一九～二〇）である。上段の蓮弁を九弁刻むが、中条以南のように縦長という印象は受けない。また、この九弁という数は、牛屋タイプの元亨元（一二三二）年銘とも共通しており、注目される。ただ、山田の元亨二年銘板碑では、七弁となっており、すでに以降の基本数に近いものが認められる。しかし、この山田碑は、中房を刻まず中央部分が高くなる山形を呈する点で以後のものと異なる。なお特徴としては、阿弥陀三尊の場合、三尊ともに蓮台を刻むという点が指摘できよう。

その後の一四世紀第二四半期の様相は、明らかではないが、一四世紀後半の様相から考えて、福厳寺の元應銘板碑がベースとなつての変化が予測されよう。

一四世紀第三四半期の様相（一四～一八）は、明らかに定型化したものである。上下段に七弁ずつの蓮弁を刻むのを常とし、さらに中房を囲むように蓮弁を散りばめている（散蓮弁）。しかし、当該期の終わりころには、下段の蓮弁（反花）が省略されるようになっていくようである（一五）。

色部領最新の至徳四（一三八七）年銘を刻む、弘願寺板碑（一六）では、蓮台が崩れ、蓮弁及び散蓮弁は線状に硬直した記号と化している。また、中房が二重枠を有するものであることは、沼と共通している。ただし、牛屋タイプが外の板碑群とどれだけの共通性があるかは、今後の課題である。

以上、二地域の蓮台の変遷をみてきた。ここで対象とできた板碑は、たかだか二〇基にも満たず、不備の目立つものであることは承知している。ただ、これを骨子とし、以後肉付けする作業を通じて、より具体的な変遷を明らかにしていきたいと思う。

銘文

まず、銘文の刻まれている位置であるが、種子の脇（一・三・五・六・一四～一七）、種子の下（二・四・七～九・一一・一三・一六）、側面（一〇）、裏面（一八）がある。種子の脇には、八例が認められ、種子の下は九例と拮抗している。側面・裏面は、各一点のみである。これは、種子と石材の形状に規制されているのは当然として、特に法則性は認められず、空いている場所に刻んでいると考えてよさそうである。ただ、側面については、不可解である。

次いで銘自体の大きさは、偈を除けば添えられるに値する程度のものであるが、8及び18については、銘が種子に比して大きく、その内容に特に主眼が注がれたものと考えたい。

銘の意味については、年号を除けば、人名が9・一四～一八の六例、偈が13・一六の二例に過ぎない。内容がわかるものとしては、追善供養と考えられる14・一八・一六、逆修供養の17と、四例をあげられるのみである。このように、5%以下という在銘率の低さは、それが重視されていなかったことを意味すると考えざるを得ない（二二）。したがって、あくまでも仏種子の供養を通じて作善を行うという行為に、板碑の主眼がおかれていたと考えられる。そこに板碑を受容した当時の人々の信仰の在り方がみられよう。

（4）墨書板碑の様相

墨書板碑は、紀年銘からみて、一五世紀後半から一六世紀に造立されたものであることがわかる。それらについての内容を一覧にしたものが、表

37図である。

これをさらに単純化すると、右のとおりである。

宝積寺館跡(20)	種子+偈+造立趣旨 (+紀年銘)
乙宝寺	偈+紀年銘+光明真言+造立趣旨
上坪穴	種子+偈+造立趣旨+紀年銘
築地	種子+紀年銘+造立趣旨+金剛名号
下館	種子+偈+紀年銘+造立趣旨
下町・坊城遺跡(21)	種子+光明真言+紀年銘+造立趣旨
下町・坊城遺跡(22)	金剛名号+紀年銘+造立趣旨

これらの中で共通するものは、「種子 (もしくは光明真言・金剛名号) +紀年銘+造立趣旨」という構成であり、そこに場合に応じて偈が書き加えられるというものである。その書かれる順番や場所に異同はあるものの、内容自体は一五世紀後半から一六世紀にかけて変化していないといえよう。また造立趣旨は、ほとんどが故人に対する回忌供養であり、種子が十三仏に対応するものであることは、表に明らかである。したがって、種子・年紀・造立趣旨という基本要素を除いた部分が、その板碑の個性をあらわしているともいえるわけで、ここでは、乙宝寺・下町坊城遺跡(21)の「光明真言」、築地・下町坊城遺跡(22)の「金剛名号」、宝積寺館跡・上坪穴・下館の「偈」がそれに相当しよう。

(5) 板碑と墨書板碑の間

ここでは、回忌供養という墨書板碑の在り方が、どこまで遡るのかという問題を考えていきたい。例えば、最も頻出するキリクは三回忌、バンは十三回忌の仏種子にあたり、それが故人との回忌供養と関連していることができるのであれば、越後における板碑受容についての有力な手掛かりとなるからである。ちなみに十三仏板碑については、確実なところでは南北朝頃(一四世紀半ば)、おそらくは鎌倉末期より造立が始まると推定されており、一五世紀以降に全盛を迎えるという(石村一九八四)。これは、その初発期における時期が、越後での板碑造立の開始と重なることを意味する。越後において、十三仏を一堂に刻む板碑は認められないが、少なくとも講や結衆などによる民間信仰的な板碑は、ほとんど造られることはなかった(二四)ので、その造立階層に大きな変化を認めることは難しい。ただ、種子を刻むものから、墨書するものへという変化を認めるのみである。それは、大きな変化には相違あるまいが、そこに造立趣旨の変化が認められるか否かが問題である。

越後で種子が刻まれるのは、一四世紀代から一五世紀前半が中心であり、これは武蔵型板碑の最盛期とも重なってくる。その特徴を、千々と和氏の言葉借りれば、「二三世紀末からの「没年時銘」塔婆の盛行」であり、多種多様な板碑の出現・展開期にあたるということになる(千々と一九七三)。直接的な影響はともかく、その造立行為において無関係とは言いがたく、14の「逝去」や15・18の没年銘、19の追善銘にそれが認められよう(一五)。したがって、一五世紀前半までの板碑と墨書板碑の追善供養的な在り方に大きな隔たりは認められず、造立趣旨に変化はなかったものと考えられる。これは、とりもなおさず、越後阿賀北地域における供養碑としての板碑の墓碑への移行段階が、一四世紀〜一六世紀の長期にわたって継続していたことを意味しているよう(一六)。

そして、両者をつなぐキーワードとして、十三仏をあげたい。九五%が無銘という板碑の現状を鑑みれば、それを直接実証することはできないといわざるを得ないが、回忌供養という方法をもって地域に板碑を根付かせ、それが墨書板碑に受け継がれていったという仮説は、あながち無理な想定で

もないように思われるがいかなるものであろうか(二七)。

ただ、多様な種子相の展開は、十三仏回忌供養だけでは律しきれず、当然外の要因を考えていかなければならないが、ここでは色部領における地藏及び善財童子信仰を指摘するにとどめる(一八)。

(6)おわりに

以上、阿賀北の紀年銘板碑について、紹介してきた。その中で思ったことは、図の必要性である。拓本・写真も必要であるが、実測することによって、一画一画の彫り方をつぶさに見ることができ、そのものひいては背景への理解も少しずつ深まるのではないかと思われる。また比較にも有効である。文章より図は雄弁に実像を語るものである。したがって、本稿はその第一歩にすぎない。このようにして各地を歩き、板碑を実測し、位置付けていくという作業は、時間はかかるが地域史を考える上で欠かせない作善といえよう。

なお、ここでふれられなかった問題として、板碑造立の風の伝播経路がある。現時点で成案をもたないが、阿賀北の場合、第一四半期に地域に受容され、おおよそ一世紀ほどで使命を終えているようである。その後は、墨書板碑へと命脈が受け継がれていくものの、量的には及ぶべくもなく、風化し消え去った墨書銘は、現時点での議論をしようがない。そこで問題を初源にもどすと、阿賀北における板碑の造立が、武蔵型板碑の動静と無関係に行われたとは考え難いが、形状や銘の在り方から直接的な影響もまた考えにくいところである。ここでは、青森での板碑の在り方(千々和一九八八)から、日本海ルートの中での伝播経路を想定したいと思う(二九)が、詳細は今後改めて考えていきたい。

付 牛屋タイプ板碑について

先に、外の板碑群と明らかに異なる石材を用いた二・12に代表される板碑群を、牛屋タイプとしたことがある(水澤一九九四)。ここでは、その判別が容易であることから、その分布・時期について一言して、今後の参考としたい。

一四世紀代の分布は、神林村牛屋の四基の外、神林村長松の長松遺跡出土イ(地藏)種字十月輪(田辺一九九一)、19を含む村上市八日市弘願寺の縦一体型阿弥陀三尊二基十キリク一基の八基である。内三基に紀年銘が認められる。

次いで、本石材が用いられるのは、中条町乙宝寺の二基の寛永一一(一六三四)年供養碑(日輪二十イー十胎藏界大日如来報身真言(ア・ビ・ラ・ウン・ケン)十人名・紀年銘)、荒川町大津延命寺の日輪二十アーシク十「尊雅」「宗海」銘板碑、村上市三日市最明寺の日輪二十イー十五輪東方発心門(キャ・カ・ラ・バア)十銘などがある。この時期の供養碑の特徴については、日輪を一もしくは二箇所に配することで、一七世紀前半の指標となる(二〇)。

このように本石材は、中・近世の一時期に限定的に用いられた(二二)ことがわかり、板碑の墓標化を示す時期の好例であると思われるので、最後に付記した。

註

(一)このうち天文一八年銘及び元亀元年三年銘のものは、胎内市江上の下町・坊城遺跡より出土したもので、今回初出の資料である。

(二)二基の内、岩船三日市諸上寺の境内に寝かされている地藏種子(イ)板碑(18)の紀年銘については、田中真吾より教示を受けた。また、氏によれば本板碑は、近接する村上市八日市の宝勝寺より移動したものであるとのことである。

(三) このうち、新発田市宝積寺館跡出土の墨書板碑は、年紀が消えており読み取れないが、書式の一例として取り上げる。

(四) これは、干支を左に「己」、右に「卯」の通常の逆位置に刻むという苦しい判読を行っており、従い難い。

(五) ただし、ともに地上高であるため、今後入れかわる可能性もある。

(六) この「弟」字について、当初は「茅」(亡)とよんで、亡子の供養と考えていた。ところが、田中真吾より「弟」の異体字であるという教示を得て、弟子による師の供養と考えるようになった。記して謝意を呈する。

(七) 縦一体型阿弥陀三尊種子板碑は、さらにもう一基ある。岩船郡荒川町荒島の東岸寺に所在しており、(二六)とほぼ同じ構成であるが、サクのアク点を下方に打つところが異なっている。そしてさらに右下にイ(延命地藏)、左下にカン(馬頭観音ではなく宝印手地藏としたい)を配し、五尊種子板碑としている。石材は、牛屋タイプの柏尾石ではなく、花崗岩製である。

なお、これらの縦一体型阿弥陀三尊については、すでに小野田政雄による報告がある(小野田一九七〇・一九八三など)。

(八) 千々和到の教示による。

(九) この部分に本来「祥」が記されていたと考えられること、すなわち大祥忌(三回忌)として、ギリークに対応するものであることを千々和到より教示いただいた。なお、十三仏については、(石村一九八四)を参照のこと。

(一〇) 当地域の蓮台の変遷を図示して考察した仕事は、本間弼によるものがあるのみである(本間一九六八)。本業績は、时期的・全体的な位置付けに難があるとはいえ、三〇年前という時点ですでに基本的な流れについて把えられており、大いに評価されるものである。

(一一) 奥山荘でも、胎内川より北の黒川領では、色部領の様相に近い。これらを含めた全体的な様相については、稿を改めて後日検討したい。

(一二) ただ、一四世紀第4四半期の様相が明らかでないため、依然として同時期の造立の可能性は残る。

(一三) なお、種子だけの板碑は、造立趣旨や紀年銘が墨書されていたとする説がある(中野・大沼一九七三)。非常に魅力的な説であるが、将来発掘調査によって墨書銘が残っている板碑(種子陰刻)が発見されるまでは、あくまで可能性の問題であって、議論できない。もっとも、発掘調査によって出土する種子を刻んだ板碑は、人為的にせよ自然にせよ、一定期間太陽や風雪にさらされた後、没したと考えられるため、墨書銘が残っている可能性はかなり低くなるものと思われる。

(一四) 唯一の例として、(二)で紹介した黒川村下館出土のものがあるが、あくまでも例外である。

(一五) これは、越後国第二の板碑密集地域である魚沼においては、六割近くと在銘率が高い分、顕著である。例えば追善の「孝子敬白」は四割以上に上り、死去一基、逝去一基、三十五日二基、七回忌二基、十三回忌二基が認められる(細矢一九七二・大沼一九七七・穴沢一九七七)。ほぼ一四世紀後半の所産である。

(一六) ただし魚沼地域では、一五世紀前半で造立が途絶える。また、五輪塔優位の頸城地域でも別の様相が認められよう。

(一七) 板碑が回忌供養と密接な関係にあることは、すでに佐藤雄一氏によって指摘されている(佐藤一九九七)。

(一八) 外に名号・題目・塔形・複数の種字を刻むものがあり、これらについても個別に考えていかねばならない。

(一九) なお、阿賀北に近い会津の様相については、近時石田明夫によってまとめられた(石田一九九七)。図から判断する限り、阿賀北との関連性はあまり認められないようである。かえって管見の範囲では、会津の板碑の一部は、山形県酒田市の生石の板碑群と類似しているように思われる。

(二〇) これらについては、すでに小野田十九(政雄)氏による調査報告があり、詳しくはそれによらねばならない(小野田一九七九)。また、日輪についても指摘がある。

(二二) 例えば、柏尾や岩船地区の墓地のように、産地に近い地域では近世を通じて使用されていた可能性がある。

補註

8 については小林昌二・矢田俊文の、13・19については三宅宗儀の教示により銘文を一部改めた。

4 越後國小泉莊加納の板碑群―栗島

(1)はじめに

越後で石仏を巡礼するものは、いつの日にか荒波を越えて、栗島にたどりつく。そして、観音寺の境内に林立する百を越える石仏群を目の当りにし、驚き、感動し、畏敬の念にかられる。そして、その興奮が過ぎ去った後、誰もが思う。いったい誰が何の目的でこの板碑群を建てたのか。それを語る刻銘は、一四六基中わずかに二基。残りの一四四基は、黙して語らず。否、銘こそないが、御仏は多くを語りかけている。我々は、その尊顔を凝視し、真摯に耳を傾けねばならない。

(2)阿賀北における色部領の板碑群

中世において阿賀北（揚北）とよばれた阿賀野川の北側の地域で、板碑は五百基ほどを確認できる（水澤一九九四）。この中に武蔵型板碑は認められず、九五%までが丸みを帯びた河原石を用いた非成形のものである。集中しているのは、旧小泉莊加納にあたる神林村・栗島浦村・村上市岩船地区、旧奥山莊中条・南条にあたる中条町内、旧加地莊内にあたる新発田市域、笹神村出湯などである。さらにその中での集中地点をみると、小泉莊では栗島観音寺・観音堂、栗島雲照院、岩船諸上寺・弘願寺周辺、山田白山社・飯岡慈雲寺の4エリアがある。奥山莊では南条の関沢寺山、中条の大輪寺、加治莊では岡田法音寺・五十公野一帯、白川莊では出湯華報寺周辺があげられ、厳密な原位置はおくとして、地域の信仰拠点に多くが所在していることがわかる。基本的には、莊園単位で一箇所の集中地点といえようが、小泉莊加納についてのみ4箇所の集中地点が認められる。しかしこれは特異な現象というよりも、数量が多いために顕在化した特徴と考えられる。すなわち、栗島を別格として、地域信仰の拠点（地域霊場＝寺社勢力）に加え、都市的な場（商業地域＝湊・宿）に伴う板碑群の存在が浮かび上がってくるであろう。

しからば、栗島の板碑群は阿賀北全体の中で、どのような位置付けを与えられるのであろうか。

一、一〇〇基以上が集中する場所は、栗島において外にない。

二、種子の多様性及び蓮台等の装飾性、そして石材については、本土側の色部領との共通性が高い。

三、在銘率は、一四六基中二基と極めて低く、阿賀北の傾向と一致している。

以上のような特徴があり、数量・集中度において、阿賀北の中で特異な位置を占めていることがわかる。しかし、それがどこからきているのかは、解明されていない。そこでここでは、栗島と本土側の色部領との比較を通してその性格にせまってみたいと思う。

なお、阿賀北の板碑群の中で紀年銘板碑は実に二〇基（墨書板碑六基を除く）四%ほどに過ぎず、年紀が刻まれる例はきわめて限られているという状況にある（水澤一九九七a、以下「前稿」という…本章第3項）。また、このように在銘率は極めて低いのであるが、それと対照的に蓮台を刻む比率は過半を越えている。したがって、蓮台の時代相を把握することは、板碑の時期比定にあたっての決定的な意味を有している。その認識に立ち、前稿では紀年銘板碑の蓮台を一覧表にして提示した。そして、この作業は、蓮台の彫刻率が八割を越えている栗島板碑群において、もっとも有効性を發揮するものと予測されるのである。

(3)色部領の板碑概要

日本海に浮かぶ栗島には、一四六基の板碑が遺されている（一九九五年調査時）。それらの大部分は、内浦観音寺・観音堂境内に集められており、

それらが居並ぶ様は、まさに壮観である。現在栗島は、栗島浦村となっており、板碑の建てられた中世においては、小泉莊加納方の地頭である色部氏の所領であった。

まず、件の二基の板碑から始めよう。

板碑群の中には一際目立つ二基の巨大な板碑があり、そこには莊嚴された梵字名号が刻まれている。そして銘は、この二基にしか認められないのである。

1は、地上高一六〇cm、幅七〇cm、厚さ三七cmを測り、銘は、以下のとおりである(第135図)。

沙弥入阿弥陀佛

(天蓋) ナ・ム・ア・ミ・ダ・ブツ (中房) (蓮台)

文和第三天甲六月一日

午

本梵字名号は、非常に裝飾性に富んだもので、全板碑中の白眉である。文和三(一三五四)年六月一日に、沙弥入阿弥陀佛によって造立された。用材は、偏平な河原石である。

2は、地上高二二〇cm、幅七六cm、厚さ五八cmを測り、銘は、次のとおりである(第136図)。

沙弥良阿弥陀佛逆修

(天蓋) ナ・ム・ア・ミ・ダ・ブツ (中房) (蓮台)

文和三年甲七月十四日

午

二二〇cmという法量は、越後第二の大きさである。裝飾的には1よりもおとなしいが、彫りがより深く、力強い。逆修供養のため、沙弥良阿弥陀佛により文和三年七月十四日、1に一月半遅れて造立された。用材は、方柱状の巨大な河原石である。

これら栗島の板碑の個々の内容については、『栗島の板碑文化』(小野田一九八六)が到達点である。ただしその重要性から、全点の実測を行った上で種子等の細かい検討が必要不可欠であるが、いまだ果たせないでいる。

そして、この板碑群の性格については、小野田政雄による「地頭色部氏の墓域」という所論(小野田一九七二・一九八六)と、中野豈任による「浄土の霊地」であり、板碑群は「浄土的信仰を持つ一般の多くの人々(上は地方武士から下は在家、或はそれ以下の階級を含む)によって造立されたもの」(中野・大沼一九七三)という二つの説が提起されている。この当否については、以下の作業の後に考えてみたい。

次いで、本土側の色部領であるが、こちらでも見劣りしない一三四基もの板碑が造立されている。これらは、領内くまなく建てられており、中世を考える際に欠くことのできない資料群である(次項参照)。

このように、一四世紀代の阿賀北は、板碑造立ラッシュに沸いていたのである。そしてこれは、少なくとも能登半島以東の汎日本海沿岸地域に共通する現象である(一)。

(4) 栗島と色部本領の比較

色部領の場合、裝飾に富む板碑が多いことは、以前から指摘されている(小野田一九七〇・一九八三・一九八六など)。そしてその中には、栗島も

含まれているが、詳細にみると本土側の板碑との相違点も認められる。例えば天蓋を例にとると、栗島では蓮台を逆さにしたものが認められるのみであるが、本土では多様な展開をみせていることや蓮台相の違い等といったようなことがあげられる。

手初めに栗島と本土側で、種子と蓮台の関係からみていこう(表38)。

まず、種子の多様性が目に付くが、ともに一番多数を占める種子は、阿弥陀関係(二)で栗島五五%、本領六〇%となる。阿弥陀関係種子の蓮台は、その全体の比率が高い栗島では明確ではないが、本領では地藏関係に次ぐ蓮台彫刻率を誇る。なお地藏関係では、イの上丸を大きく月輪状に刻み、中に力を入れ、残るイの下丸二つを蓮台に充てるといふタイプを除き、ほとんどがJ型の蓮台(後述)を付しており、色部領に特徴的なダ種子(善財童子)を伴うものが多いことから、栗島と色部本領との密接な関係を語るものとして注目される。

次いで、蓮台相の比較(三)を絡めて考えていこう。

蓮台は、系統的に大きく二分される。その概ねの様相は、前稿で示した(第12図)。

一は、八方に蓮弁が開くタイプで、基本構成は上下左右、左右斜め下、左右斜め上各二弁の一〇弁を刻むものである。これを「八方型(H型)」と仮称する。阿賀北の板碑の初期からみられ、やや崩れながら終末期まで存続する。ただし、栗島を除く色部本領で認められるH型蓮台は、神林村の宿田大智院・有明光浄寺・福田応庵寺例等初発期に位置付けられるもの(種子は、キリーク一尊が多いがバンもある)があり注目される。

「上下対型」は、色部領で特徴的に認められる蓮台で、蓮弁の受花と返花が上下対に刻まれるタイプで、受花は七弁、返花は五・七弁のものが主体を占める。これはさらに、両端から散蓮弁が刻まれるもの(JT型)と、それがないもの(JO型)に分けられる。数的にはJT型がJO型の3倍近くに上るが、その違いに何らかの意味があるのかどうかについては、現時点では不明である。ここでは数量の多い上下対型について、簡単に時代相を説明しておく(第13図)。なお、詳しくは前稿を参照のこと。

元應年間(一一一九～一二〇)段階では、上段の蓮弁(受花)が九弁であるが、一四世紀の半ばになると、受花が七弁となる。そして受花が最小の5弁のものは、板碑の終末期の一四世紀末の所産にかかるものと考えられる。

また、反花も受花に対応して刻まれるが、後半になると受花7弁に対して5弁に省略されたり、あるいは崩れだすものが増加し、中よりのものがつながらり出す(いつきに彫られる)傾向にあり、より時代相を反映するものとして注目される。

なお一四世紀の前半の阿弥陀三尊の場合、三尊ともに蓮台を刻むという点が指摘される。すなわち時期が下ると、主尊の阿弥陀のみに蓮台が付されるようになることも重要な変化である。

この阿弥陀三尊の蓮台に注目すると、栗島では三尊すべてに蓮台を刻むものが4基に対して、阿弥陀のみに蓮台を刻むものが一八基。本領では、三尊蓮台が一五基で、主尊蓮台が七基、無蓮台が九基となる。無蓮台をひとまずおくとして、三尊蓮台と主尊蓮台のものの比率が逆転していることが知れよう。ここから、本領の方が早くに阿弥陀三尊を造立していたことが考えられ、造立の時期にずれがあることがわかる。

ここで、J型蓮台の遺存基数をみると、共に受花七弁・反花七弁が最も多く、造立のピークが同じころに起こることが推測できる。しかし、受花が九弁のものは本領がやや多く、受花七弁で反花が五弁以下のものは栗島が本領に倍する。本領の場合、無蓮台が四割近くを占めているため、結論は早急に出せないが、蓮台からみても右にみた阿弥陀三尊の様相と同様の傾向が認められよう。

次いで阿弥陀三尊の蓮台の種類をみると、本領ではほとんどがJ型なのに対し、栗島では七割強がH型で占められているということがわかる。これは、栗島の阿弥陀三尊が、本領とは異なった造立者によつて建てられたことを意味しよう。

そして、それを端的に表しているのが、バン(金剛界大日如来)種子である。実にバンは、栗島・本領を問わず、蓮台を刻む八基の内七基までが、

H型で占められているのである。バンは、特に奥山莊中条以南で好まれた種子であることから考えて（水澤一九九四）、色部領でもごく限られた人々の遺したものと考えられる。また、ほとんどがJ型蓮台で占められている地藏関係種子であるが、唯一バン・イ二尊板碑（神林村大塚河内社）のみにH型蓮台が認められることもそれを物語っているように。

このように、同じく色部領といっても、栗島と本領ではかなり板碑の様相に違いのあることが判明した。これを全体の蓮台比率でみると、H型は本土側の八・七五％に比して、栗島では三〇％にも達する。すなわち栗島においては、三割の板碑が色部本領とは系統の異なった技法を用いて造立された板碑であることがわかる。これが何を意味しているかについては、いくつかの解釈ができようが、ここでは色部領内でも特定の人々が栗島板碑の造立に深くかかわっていたと考えておきたい。

（5）板碑造立の背景

前稿においては、栗島の二基の紀年銘板碑を「法量及び在銘から、栗島の板碑全体の総供養碑」とした。しかし、その後の調査で蓮台からみてそれよりも古い時期の所産と考えられるものがいくつかでてきた。したがって、この二基が最初に建てられたものではないことになる。そこから帰納される答えは、一四世紀に入って板碑が建てられ始めたが、文和三（一三五七）年に及んで色部領を越える範囲の地域霊場として確立されるに至った、ということである。したがってこの二基の板碑はその記念碑であり、総供養碑であることに変わりはない。また、この二基は典型的な上下対型の蓮台を有しており、1のデザインの卓拔性、色部領内で最大法量の2という諸点から、造立者は色部領内の有力者以外は考え難いと思われる。では旦那は、色部氏であろうか。これは、中野豈任がすでに指摘しているように、色部氏の法名に「忍」を持つものが多いことがネックとなる（中野・大沼一九七三）。すると、外に誰がということになる。ここで先にみた板碑の集中地域を思い起してほしい。領主と関係の深い寺社を外すと、残るは港湾都市たる「岩船宿」である。現在の汽船が岩船港から発しているように、島と湊の関係は非常に密接である。また宗教勢力が湊と切っても切れない関係にあることは枚挙にいとまがない。したがって、この「入阿弥陀仏」と「良阿弥陀仏」は、宿（湊）の長であった可能性を考えたいと思う。

そして越後の板碑が、基本的には一四世紀～一五世紀前半代の所産であり（水澤一九九四）、その造立の終わりとともに、栗島の霊場としての在り方もまた変化したものと思われる。よって中野がいうように、「色部年中行事」の作成時期において、栗島観音寺が重要視されていない（中野・大沼一九七三）のは、当然のことであった。板碑造立のイニシアチブは岩船宿の人々が握っていたのであり、領内の広い信仰を集めていたとはいえず、ついに色部惣領家が主導する在り方はみられなかったと考えられる。よって、「行事」には組み込まれなかったのである、と。

ただし、前稿において指摘したように、色部領の板碑に特徴的な「ダ」種子（善財童子）については、色部氏の居館平林城の堀（一六世紀）から出土した「善財童子如諸法」木簡（小林一九九二）の存在により、その信仰が連綿と息づいていることが確認できる。そこから、在地の信仰は場所を変え、形を変えているが、脈々と生き続けていたことは特筆されねばならない。

最後に板碑の造立者について、私見をまとめておく。栗島の板碑は、小野田がいうように、色部氏にのみ関係するものではない。それは、都市民の所在する岩船宿の存在から明らかである。では、中野がいうように、上は地方武士から下は在家、或はそれ以下の階級を含む人々によつて造立されたものであろうか。まず、造立経費を考えてみよう。種子以外の装飾は、費用面でかなりの違いがでてくるものと思われる、また石工の技術的な問題も介在してくる可能性がある。実際栗島では、装飾性をもたない一尊種子のみの板碑は、わずかに四基のみである。これは三％に満たない比率である。本領でも、その比率は二割に満たない。これらは、板碑の中にも格差があることを意味しよう。一尊、二尊、三尊、多尊、それに天蓋・月輪・蓮台・中房を彫る石工の手間賃と、それをデザインし墨書した僧侶への謝礼、石材調達にかかる費用、運搬費、造立後の供養にかかる費用等といった諸経費が

組み合わせられて、総経費が算出される。これは、現在の墓石造立を考えればわかることである。とてもではないが、当時の一般農民がそれを負担できるとは思えない。考えてみれば、板碑の造立期間を約一〇〇年と仮定した場合、年間で平均すれば色部領内でも3基にも満たない数である。一四世紀の半ば頃のピーク時においてさえ、幾人の人間がそれをなしたであろうか。ごく一部の経済的に恵まれていた人々が遺したと考えるべきであろう。

なお、造立者について色部領を越える範囲に想定する中野説(中野ほか一九七三)については、種字相・蓮台層より色部領との関係で無理なく理解できると考えられるため、ここでは採らない。

したがって栗島の板碑は、色部領を中心とした地頭クラスあるいはその有力家臣、僧侶、有力商人等によって造立供養されものと考えたい。なお、今回触れられなかった「時期的な種子の量比と分布」については、次項を参照のこと。

註

(一)近年、板碑を西大寺律宗・得宗に結び付けて理解しようとする馬淵和雄の見解が出された(馬淵一九九八)。非常に多くの示唆を得ることができたが、板碑の日本海沿岸地域での展開と時間的に半世紀ものずれが生じること、五輪塔ではなく、なぜ板碑なのかということ、種子の多様性をどのように説明するのか等々、問題はそう単純ではないように思われる。

(二)なお、栗島の阿弥陀三尊の脇待のさらに下にイ二尊を刻む板碑の類例は、村上市内に一基あり、ともにH型主尊蓮台であり同一者による造立ではないかと思われる。また神林村牧目福巖寺で阿弥陀の脇待にイ2尊が刻まれている例があり(丁型主尊蓮台)、地藏信仰が色部領にかなりの程度浸透していたことが確認できよう。

(三)当地域の蓮台の変遷を図示して考察した仕事には、本間弼による成果がある(本間一九六八)。この業績は、時期的・全体的な位置付けに難があるとはいえず、三〇年前の時点で蓮台から板碑の時期をみてとろうという視点は、高く評価されるものである。

(四)文和五年前後の色部氏関連の法名としては、尼誓忍、浄秀(長倫)、沙弥宗長、沙弥長忍(長忠)などがみられ(田島編一九七九)、伝統的な「忍」を名乗るものも多いが、必ずしも有するものばかりでもない。したがって、造立者が色部氏である可能性がまったくないわけではないが、□阿弥陀仏を名乗るものがないことから、ここではとらない。

(五)色部領に特有の「ダ」種字については、小野田政雄の「施与」説(一九八三・一九八六)と、田中真吾の「善財童子」種字説(一九九二)があり、著者は最終的に後者を是とした(水澤一九九七)。しかるに田中は、近稿において「檀波羅蜜菩薩」(施与)と変更している(一九九九)。その経緯の説明はないが、筆者は変わらず「ダ」＝善財童子として考えたいと思う。

(1)再論

前項において、越後國小泉莊加納の板碑について述べた（水澤一九九九b、以下前稿という）。ここでは、その折りに積み残した課題の一部について考えることとしたい。また前稿では、一四〇基以上が一地点に集中する粟島の板碑群に論点をおいたが、その性格をより明確にするためにも、今回は色部本領の様相を主に考えることとする。

ここでは、色部本領の板碑群について、簡単に見直しておこう。

色部本領の場合、装飾に富む板碑が多く、蓮台の彫刻率は六六%にも上るが、紀年銘資料は八基六%弱に過ぎない。時期的には、ほぼ一四世紀代から一五世紀初頭頃までの所産と考えられる。種子は、阿弥陀関係が六〇%となる。そこで、この蓮台率の高さに注目し、その時期的な位置付けを目指した。この蓮台相は、系統的に二分される。詳しくは、拙稿（水澤一九九七a）を参照いただきたいが、一は八方に蓮弁が開くタイプで、基本構成は上下左右、左右斜め下、左右斜め上各二弁の一〇弁を刻むものである。これを「八方型（H型）」とした。このタイプは、時期が下ると斜め上方の蓮弁が縦から斜めへと変化し、弁数が減少していく。小泉莊よりも南の阿賀北地域で主体をなすものである。

もう一方は、「上下対型」で、色部領で特徴的に認められる蓮台である。これは、蓮弁の受花と返花が上下対に刻まれるタイプで、受花は七弁、返花は五・七弁のものが主体を占める。これらはさらに、両端から散蓮弁が刻まれるもの（JT型）と、それが無いもの（JO型）に分けられる。このJ型蓮台についても時期が下るごとに受花・返花が減少していく傾向にある。

なお一四世紀前半の阿弥陀三尊の場合、三尊ともに蓮台が刻まれ（三尊蓮台）、時期が下ると、主尊の阿弥陀のみに蓮台が付される（主尊蓮台）ようになることも紀年銘資料から指摘した。

(2)蓮台相からみた板碑の時期的分布（表39・40）

ここでは、色部本領の板碑を蓮台相から時期別に分け、時期ごとの特徴をみていくこととする。ただし阿弥陀三尊が三尊蓮台から主尊蓮台にかかわるとはいえ、その変化はある時期にすっぱりと切り替わるものではなく、漸次的に変化していったものと思われる。したがって、各段階にはいくらかの重複が存することが通有であることはいうまでもない。

I段階（一四世紀第1四半期）第143図

加納に板碑が建てられ始めた時期で、数は少ないが多様な在り方が認められる。最も初期に位置付けられるのは、牛屋条の福田応庵寺のH型蓮台を刻む二基の板碑である。一基はキリーク、もう一基はバンである。

この初期段階では、まだJ型蓮台は出現していないものと思われる。しかし、受花9弁以上のJ型蓮台は、本段階の後半には主流を占めるに至っており、以後のはしりが認められる。特にJ型は指合に集中し、その発信源が那邊にあったかが想定される。なお、この段階では以後の中心地である色部条ではわずかに二基、岩船湊周辺にいたっては皆無という状況にある。

また外では、牛屋法徳寺の二基の紀年銘板碑が注目される。これらは、ともに元亨元年（一二二一）銘を刻むが、特筆されるのはその石材である。これは、外の大多数の非成形の河原石を用いたものと異なり、方柱状に仕上げられた黄白色を呈する流紋岩を素材としている（牛屋タイプ）。この石材は、岩船潟の北方の海岸にみられる「柏尾石」で、近世以降になると岩船地域の墓石としてまま用いられているが、中世においては八基が認められ

るのみである。このように牛屋条は、H型蓮台の板碑といい、牛屋タイプといい、初発期の多様性が現れており、板碑受容の中心的位置を担っていたと考えられる。

Ⅱ段階（一四世紀第2～3四半期）第14図

本段階では、J型蓮弁の受花が減少し、上下7弁に収斂され定型化する。散り蓮台が付されるJT型が主流を占め、最も多量の板碑が遺された時期である。本期の途中で阿弥陀三尊の蓮台が三尊蓮台から主尊蓮台に変化する。本来はこの現象をもって二分したいところであるが、外の種子についてはつきりしていないので、現状では一括した。特に山田近辺と岩船地区に集中傾向が認められるが、全域に広がっている。

そして本時期にのみ、地蔵種子が三日市と桃川・牧目で現れ、これは岩船潟の内水系に位置していることに注目される。この地蔵種子の存在と粟島の板碑の在り方（前稿参照）から、両地域の関連がうかがわれるところである。

また、Ⅰ段階では牛屋条に限られていたH型蓮台が、少数ながらも荘内全域に分布していることに注意せねばならない。

Ⅲ段階（一四世紀第4四半期～一五世紀第1四半期）第15図

本段階は、J型蓮台の下弁が省略されていく時期で、岩船地区～九日市・牧目～山田・飯岡という岩船潟南辺に沿ってのみ分布が認められる。すでにこの時期には、本庄地域の造立が止まっていたものと思われる。

本期に特徴的な種子として山田のバク・ダ及び九日市の釈迦三尊といった釈迦関係種子があげられる。ただしバク・ダは、前段階の一三六四年にすでに山田で現れており（水澤一九九七a）、その頃から始まっているものと思われる。このバク種子も、粟島で目立つものであり、色部惣領家の関与を想定できよう。

無蓮台（第146図）

次いで、蓮台の刻まれていない板碑をみておこう。これらについては、全体の四割近くを占めており、看過できない一群である。現時点では、細かな時期を求めるまでには至っていないが、蓮台付きのものと種子を比較することによってそれが可能になるものと思われる。したがって、ここでは分布傾向からみた多分に感覚的な部分が残ることを前提に話を進める。

無蓮台板碑が集中している地域は、大きく三地点となる。まず色部条にあたると考えられる山田・飯岡・小（古）色部、そして牛屋条の長松・福田・牛屋、岩船宿のあった八日市である。

この内、特徴的なのは牛屋条で、初発期のものを除くとほとんどの板碑に蓮台が付されなくなる。これは分布状況から時期的なものと思定され、十四世紀後半に至って地域性が生じたものと考えることができのではなからうか。

色部条・岩船宿においては、半数近くを無蓮台板碑が占めており、両者が併存していることがわかる。したがって、ここでは経済的・身分的に異なる階層による板碑造立がなされたと考えておきたい。ただし、蓮台をもたない板碑といえども、だれにでもそれができたわけではないことに注意する必要がある。

次いで本庄領をみると、無蓮台の板碑が皆無に近い。これは元々全体数が少ないこともあるが、一つの特徴である。そしてこれは、板碑の造立が十四世紀前半を中心とした時期に限られていることとも関係している。すなわち、阿弥陀三尊の脇侍の蓮台が省略されていく傾向の中で、その主尊蓮台を有する時期の板碑がないことを意味している。本庄領では、蓮台自体を刻まない板碑の造立時期をまたずしてその風が廃れていったものと思われるのである。

このようにみてくると、逆説的ではあるが、無蓮台板碑の多くは一四世紀後半の所産にかかると考えて大過ないものと思われる。

最後に時期ごとの法量をみておこう。数の多い阿弥陀三尊の碑高を例にとると、Ⅰ段階では七四〇一〇三cm、Ⅱ段階三尊蓮台では四九〇九三cm、Ⅲ段階主尊蓮台では四二〇六九cm、Ⅳ段階では四六cmとなり、徐々に小型化していくことがわかる。これは外の種子についても同様の傾向が認められ、おおむね碑高（地上高）が七〇cmを超えるものは一四世紀の前半に収まるものと考えてよいものと思われる。

（3）天蓋の地域性

ここで目を上にむけよう。蓮台・中房の上には、種子が乗り、その上には天蓋がかけられているものがある。天蓋は、H型蓮台の莊嚴宝珠を除けば、J型蓮台のものに限られて付されている。蓮台が付かずに天蓋がつくものとして、三田市本證寺の題目板碑と福田応庵寺のバーンクがあるが、基本的にはJ型蓮台と対をなすものである。ただし、J型蓮台すべてに付されているのではなく、全体で二二基（抽象型二基を除く）の三割ほどの板碑に刻まれているものである。

天蓋には、いくつかの種類がある。これはすでに先学によって指摘（小野田一九七〇・一九八三）があり、筆者もまとめたことがある（水澤一九九四）が、今回はそれをベースとして再構成し提示することとしよう（第145図）。

瓔珞型（Y型） 図例なし

傘から瓔珞が下がるタイプで、武蔵型板碑にもしばしばみられるものである。山田墓地一例、飯岡慈雲寺一例、福田応庵寺一例の三例にすぎない。

蓮台倒立型（R型） 第135図参照

蓮台の受花を反転させたもので、宝珠を付し端を上方へはねさせるものが多い。なお、本タイプもY型ほどではないが武蔵型板碑にもみられるものである（一）。最も遺例が多く、里本庄三例、三田市四例、八日市二例、桃川二例、天神岡一例の一二基を数える。ただし、里本庄石神の2基と天神岡常栄寺1基の三例は変形タイプであり、別分類とした方がよいかもしれないが、現時点では亜流としておく。なお栗島では、R型のみ三三例が認められていることに注意せねばならない。

中房型（C型）

蓮台を上からみた図案で、中房・蓮弁が平面的に表されているもの。山田に七例のみである。第146―1図は、山田白山社下の阿弥陀三尊板碑で、地上高四九cmを測る。JT7―7型の三尊蓮台で、Ⅱ段階の所産である。天蓋は、中房から触手状に花弁・枝を刻んでいる。

雲型（K型）

鱗様の連続網目状紋が施されるもの。指合光明寺一例、有明光浄寺一例、桃川一例の三例のみである。第146―2図は光明寺例で、地上高九八cmを測る。JT9―7型の三尊蓮台を有する阿弥陀三尊板碑で、Ⅰ段階の所産である。天蓋は、六単位五段のU字型線刻を網目状に刻んでいる。本例は、三例中最も剥離が著しかったため、急ぎ図化した。

莊嚴宝珠（二）

種子の上に三連宝珠が刻まれるもの。イ（地藏）と同意匠であるが、下の種子より小型であることから莊嚴宝珠と判断できる。宿田大智院のキリーク（J型蓮台）、福田応庵寺のキリーク（無蓮台）、牧目福巖寺のキリーク（J型蓮台）がある。第147―3図は、大智院例で、地上高七三cmを測る。JT7―7型の蓮台を刻むキリークで、イを涅槃点の間に通すタイプである。彫りは比較的浅い。中房は二重となるが、彫るのではなく敲打の連続によって仕上げている。

これを全体でみると、阿弥陀三尊が約半数の一〇例を占め、キリーク関係九例、地藏関係三例、大日関係三例と続く。特に、阿弥陀三尊の三尊蓮台

のものと地藏関係で添刻される比率が高いが、ここで注意せねばならないのは阿弥陀三尊の比率が高いといえども、そこには地域的偏差が存在するということである。

そこで地域別の分布状況をみると、山田・飯岡で八例（Y型二・C型七）、指合・有明で二例（K型二）、里本庄で三例（R型一・R変形二）、天神岡一例（R変形）、桃川三例（R型一・K型一）、三日市・八日市で六例（R型六）、宿田・牛屋・牧目で三例（莊嚴宝珠）となる。すなわちここで、蓮台相に現れなかったより細かい地域性が明らかとなる。

山田・飯岡の色部条では、まずY型という武蔵型板碑密集地でみられる天蓋を刻むものがあることに注目される。それは、造立者が武蔵での板碑の在り方を知っていた可能性を考えられよう。そして、山田にのみC型天蓋が分布していることから、本地域が色部条の中でも特異な性格を有していたことがうかがえる。

指合・有明といった初発期のJ型蓮台が集中する地域においては、K型天蓋のみが認められる。したがって、このK型天蓋は最も古い段階で出現したタイプであることが想定できよう。なお有明は、一六世紀末の瀬波郡絵図で大国（旧本庄領）・色部入会地となっていることからすれば、天蓋からみて本庄側が造立した板碑と考えられよう。

里本庄では、R型が存在することに注目せねばならないが、石神の二基の板碑は、R型の下方に手を加えたR型変形である。この変形タイプは外に天神岡で認められるのみ（合計三基）で、K型天蓋とともに本庄領内に限られることを押えておきたい。

桃川では、栗島との関係の強いR型天蓋と地藏種子が存在することに目がいく。しかしながらK型という本庄地域との関係を物語る天蓋の存在にも注目せねばならない。桃川も先の瀬波郡絵図で色部・大入会地とされていることから敷衍すると、R型天蓋は色部側の桃川氏による板碑、K型天蓋は本庄氏側の勢力によって造立されたものと考えることができよう。

三日市・八日市の岩船湊では、R型天蓋のみであり、これが栗島との関係を語る上で重要である。さらに注目されるのは、三日市本證寺の題目板碑である。天蓋がなければ近世の所産と見逃してしまいそうなこの板碑は、湊に当時から日蓮宗関連の施設があったことを物語る重要な資料である。

次いで栗島のR型天蓋三三基の種子の内訳をみると、名号二基、キリーク一二基、キリーク・ダ三基、アン、アー、アーンク各一基、カ・イー、カ・ダー、カ・イ・ダ、キ・ダ各一基、サ・ダ、マン・ダ各一基、バク二基、バク・ダ二基、バク・アン・マン一基となる。

ここに、キリーク・ダ及び地藏関係という岩船地区とのかかわりの強い種子が多く含まれていることがわかる。したがって、この天蓋と種子の共通性から岩船地区と栗島の密接な関係が推し量れる。ここにいたって、前稿において想定した「栗島の板碑群の主体者Ⅱ岩船湊の有力者」という図式は、有力な徴証を得たことになる。ただし、前節で指摘したバク種子のことを勘案すると、「栗島の板碑は、岩船湊の有力者が主体となりながら、色部惣領家等の有力者も参加して造立されたもの」といったほうが正確であろう。

（4）板碑造立の歴史的背景

ここでは、一四世紀の小泉荘がどのような状況に置かれていたのかをみていき、板碑造立の意味を考えたい。

まずは文献から当時の領主階級の状況をみてみよう。文献については、近年刊行された『村上市史』通史編一（村上市一九九九）に詳しい。これを要約すると、以下のとおりとなる。

色部氏が現地支配に入部してきたのが、文永五年（一二六八）頃で、一三世紀末には、すでに三系統の家に分立していた。一四世紀にはそれはさらに加速し、色部条・栗島の色部惣領家、湊と三日市を含む岩船潟北辺（諸上寺周辺）の色部庶家（浦氏）、牛屋条宿田村の色部庶家（宿田氏）、牛屋条

牛屋の色部庶家（牛屋氏）、色部条飯岡の色部庶家（飯岡氏）、有明の色部庶家（有明氏）、桃川の色部庶家（桃川氏）らが各々地域に根を張り、八日市・五日市のあった岩船宿は港湾都市的な町場を形成していた。また、松沢も牛屋条内に含まれていた。

このように一四世紀代の加納は、色部一族を中心とした分割支配が進行していたということがわかる。この段階では、色部惣領家の立場は、非常に不安定なものであったと考えられる。そして自立を目指した庶子家が惣領の下に集まり、国人領主の家中を形成するのは、越後では応永の乱後の一五世紀初頭以降（三）のことであり（水澤一九九三）、それに符号を合わせるかのように、板碑の造立も終焉を迎えるのである。

これは偶然ではあるまい。板碑の地域性は、競合しあう地域勢力によって顕現し、家中の形成とともにそれが必要とされなくなった、あるいは惣領家に祭祀権が収斂されたものと解したい。なお、一四世紀が鎌倉末期から南北朝の動乱にいたる混乱期にあたること、板碑造立供養の契機とはなっただであらうが、その後も戦乱は打ち続いてるのであり、もっと大きな中世を二分する動き（北陸中世土器研究会一九九七）がその主因であったと考えられよう。板碑は、その地域に生きた彼らの生き証人であり、一四世紀の特定の人々の願いを語るものである。

（5）おわりに

最後にいくつかの問題を考えて、稿を閉じたい。

まず問題となるものに、岩船湊の浦氏と岩船宿の関係がある。浦家は、色部氏略系図によると長信（一二八五年譲状）の庶子某（法名長仙）が興したが、二代後の惣領長倫（一三四七年譲状）の庶子長貞が浦家を相続したことになる（田島編一九七九）。そこにどのような事情があり、湊に対する浦氏の権限がどのようなものであったかについては不明である。ただし岩船湊は、「市」地名や戦国期の領主の生活を物語る「色部年中行事」（田島編一九七九・中野一九八八）から遡って推測すれば、御用商人（布川氏？）をはじめとする商工業者や船運業者が頻繁に出入りする町場であり、岩船宿と一体的に賑わいをみせていた都市的な景観が想定される。浦氏は、そこから関銭などの上納分を得ていたことは間違いないものと思われるが、色部惣領家の湊に対する権限とどのようにかわっていたか、あるいは諸上寺や岩船社とのかかわり等、不明な点が多い。また市には、無縁無主の論理（網野一九八七）があり、世俗権力が手をだせなかった可能性もある。よってここでは、湊と宿を一体的なものと理解し、そこに都市的な場が形成されていたとすることで満足せねばならない。ただ板碑相から、かれら都市民こそが栗島の板碑造立の主体的存在であったということは、すでに述べた（四）。

転じて、本庄領をみると、高橋一樹は小泉荘本庄の政所に村上市天神岡を比定している（村上市一九九九）（五）。天神岡では、二基の板碑が確認されている。これは本庄領内では、指合・里本庄に次ぐものであり、傍証の一つと考えられなくもない。その場合、指合・里本庄の性格付けを抜きにしては、片手落ちといわざるを得ない。

それでは、里本庄く指合の一带はどのような地域であろうか。里本庄・殿岡等の地名や、一四世紀前半の「藤原宗清・清光」銘経筒を出土した里本庄経塚の存在、最も初発期の板碑が集中していること等を考えると、本地域は中世前半においては小泉荘の預所である中御門家に関連する地域と位置付けることができよう（六）。ただし、天蓋及び種子相からみた場合、里本庄と指合は異なった様相を呈しており、これをどのように考えるかが今後の課題である。

以上、板碑分布と部分的な実測によって導き出せることを述べてきた。畢竟、より細かい地域史にせまるには、実測作業が欠かせないということを再確認して稿を閉じる。

註

- (一) 例えば鈴木道也『板碑の美』（西北出版、東京）所載の板碑天蓋など。
- (二) 莊嚴宝珠は、天蓋とは意味が異なるものである可能性があるが、ここでは便宜上同列に扱う。
- (三) ただし、この時点では家臣団の集住を意味していないことに注意する必要がある（水澤一九九九）。また、この現象は越後だけではなく、北陸・北東日本海沿岸地域で一斉に生じた現象である。したがって板碑同様、国人領主への集中化も同時期に生じた可能性が高いものと思われる。
- (四) 近年粟島については、「観音霊場」とする意見が提起された。（大場一九九九）。しかし板碑相からみてここではとらない。
- (五) なお高橋は、加納の政所を飯岡にあったとするが、その根拠とした文書には「政所給分」とあるのみで、そこに政所が所在した否かは不明といわざるをえない。また色部条飯岡の「西殿跡」が色部庶子家の高長（飯岡氏祖）に譲られていることは、その否定的要素と考えるべきではなからうか。
- (六) 近年、里本庄で発掘調査が行われた。ここからは、中世前期の土器や青磁蓮弁紋碗、漆絵描き漆器などが出土しており（神林村教委二〇〇一）、その可能性が高まったといえよう。

(1) 越後阿賀北(一)の板碑特性

奥羽の板碑について書かれたものをみるにつけて、銘文の存在が大きくクローズアップされていることがまある。すなわち、板碑イコール石刻文書であり、すべて貴重な文献を刻む史料であるかのような錯覚に陥ってしまう。しかし多くの板碑は、単に梵字のみを刻み、寡黙に、そして実にそつなく立っている。実際、越後最密集地の阿賀北の板碑は、ほとんどが梵字のみで、まれに紀年銘を有するものがあるといった具合である(二)。主要な造立時期である一四世紀代の板碑の在銘率は、わずか4%にも満たない。さらにそこには、文書とよべるものは存在しないといっても言い過ぎではない。それは、石材に制約された結果ということもあたらないう。現に彼らは、細かい装飾やわずかなかりの銘を刻んでいるのであり、技術的には可能であったはずだからである。

このようにみえてくると、そもそも中世人は何を求めて板碑を建てたのかという当然の疑問に行き当たる。彼らの目的は、板碑造立の趣意を刻んでそれを後世に知らしめる、といったものではなかったと思われる。もちろん外の地域では、文献板碑がかなりの高率で存在する場合もあるから、すべて同じであるとはできないが、私には彼らがあえて梵字のみの板碑を欲していたように思えてならない。

そして日本海沿岸地域では、この梵字を刻む板碑が、ほぼ一四世紀代に限って造立されたという共通した存在が認められる。本稿では、その意味するところを越後国奥山荘での様相を例にとりて、探っていくものとした。

(2) 奥山荘の板碑

まず、越後の板碑は、その遺存数からいつて地域社会の上層部に位置する一部の有力者が造立したものであると考えられる。それは、越後最密集地の小泉荘加納でも同様で、武士や高僧、豪商の間に広まった領主層の供養形式であった(水澤一九九・二〇〇)。まして、それより少ない地域では、おのずと造立階層は限定される。もちろん奥山荘でも同様であり、以下「板碑」は、武士団等領主層の遺したものであるという前提で論述する。

奥山荘の板碑法量は、初期のものに碑高1mをこえる大型のものが多く、一四世紀後半になると小型化する傾向が認められる(水澤一九九四)。これはごく初期においては、石を割って板状のものを作ったのに対し、ほどなく容易に手に入る河原石を用いるようになったことを意味するものと思われる。とはいえ、一四世紀後半においても割石を用いる大型板碑も少数ながら存在しており(水澤一九九七、第190図・1・2)、多分に供養される人物の社会的地位を反映しているのではないかと考えられる。これらの石材は、多くが花崗岩で、白っぽいごつごつした外観を呈するものが多く、彫りが浅いものは種子等がみづら。なお、各板碑の時期比定に関しては、(水澤一九九七)で試みた蓮台相比較による方法を判断基準とした。

以下、北条・中条・南条の三領域ごとに板碑群の様相をみていく。なお、奥山荘全体の板碑総数は、九三基(現存数は八一基)で、ほぼ北条一に對し、中条二、南条一・五の割合となる(第148図)。

①北条(黒川)領の板碑一八(二〇)(三)(表三)*地名は大字名()内は推定旧地名、数字は現在所在不明のものを加えた点数

黒川領の特徴は、まず偏在しているということがあげられる。高坪山系の海側の黒川条、高野、江端、山屋などの村々には皆無であり、多くが谷あいの村々に点在している。種子では、キリークが半数以上を占め、これは草水条内での在り方が大きくかわっている。

この草水条には、全体の半数以上が集中しており、外画線を有するものの4基中3基が本条内の坪穴(二基)及び須巻に所在している(もう一基は、韋駄天山遺跡出土)ことも造立主体を考える上で注目される。

韋駄天山遺跡出土板碑(第149図・1)は、外面線に加え月輪をも配する唯一の例で、石材もひとり緑がかった方柱状の安山岩を用いたものである(外は花崗岩)。しかし、キリーク種子に外面線及び蓮弁上に線上の花弁を刻むという意匠は、須巻(第189図・5)例に共通していることから、両者間の関係が推量され興味深い。

下館板碑は、阿弥陀三尊を三群刻む特異な遺例である(第149図・2)。

大日関係は、坪穴の一基を除いて、歙江条及び関郷に所在しており、特にバンは関郷の一基のみに限られている。

②中条領の板碑三八(四四)(四)(表42)

中条においては、羽黒の3基を除くほとんどが中条惣領家領に所在している。もちろん町場のものは、寺社に集められているものが多いが、政所条(五)地内に多くが伴うものと考えられる。

造立時期は、種子相からみて南条よりやや遅い元弘・建武の一三三〇年代に始まったと思われるが、北条と異なつて一四世紀後半に多くが造立されたものと考えられる。

種子は、キリーク、次いでバンが多い。また、胎藏界大日(ア関係)の種類と外の種子との組み合わせに特色がある。また、外の2地域に比して、大日関係の種子の比率が高いことがみてとれる。特に、北条の金剛界大日如来信仰の薄さと比してそれが際立っている。

そして、北条や中条でのキリークと阿弥陀三尊の数量のアンバランスさからみて、同じ阿弥陀とはいえ両者は同列に扱えないように思われる。今後、その違いを追究する必要があるところである。

なお、種子で経年変化を示すものとして、バンのアン点の変化がある(小野田一九六八・本間一九六八)。通常のバン(第151図・1)に対し、アン点が「」の字状につながっていく(第151図・2・4)ことがみてとれる。この手は、今のところ大輪寺と赤川に限られており、その関連性が注目される。また、北条・南条では確認できないことからみて、中条独自の造形である可能性がある。あるいは、外二地域が中条よりも早くに造立が廃れてしまったことを意味しているのかもしれない。

また、一四世紀前半においては、花崗岩製品に年号を刻んでいるが(第194図・1、(水澤一九九七)第192図・5)、みづらかったために、一四世紀後半に入ると紀年銘資料(第150図・3・4、第5図・5)に限って、細工の容易な石材を用いていることが看取される。そして、この貞治五(一三六六)年銘板碑(第150図・3)のみに天蓋が付されているのも同様の事情によるものであろう。

③南条(関澤)領の板碑二五(二九)(表43)

南条の地頭関澤家については、金山郷を除けば文献がほとんど残っておらず、ほか二家に比して不明瞭な部分が多いが、板碑は比較的多くを遺している。ゆえに板碑の占める位置が大きいともいえる。

種子からみると、阿弥陀三尊がキリークより多いことがまずみてとれる。そのキリークは、ほぼ関沢に限られており、惣領家独自の信仰形態であった可能性はある。ただし関沢には、阿弥陀三尊や金剛界大日も同数程度造立されており、キリークのみに限られていた訳ではない。関澤における最初の板碑は、元亨三(一一三三)年銘阿弥陀三尊(現在所在不明)、嘉暦二(一二二七)年銘バン(第152図・1)、無銘アーンク(現在新潟市内に所在)と多様で、三面にキリーク・サ・サクの阿弥陀三尊を刻む荘内唯一の遺例(第152図・2)も造立されている。そして、南条の半数以上が関沢に集中しており、それらのほとんどが鎌倉末期の所産と考えられることは、惣領家の動静を表しているようで興味深い。

その外では、アーンク・バク(第152図・3)、バン・ウーンという特殊な二尊種子が二基存在することが注目される。また、長橋のウーン一尊種子(第152図・4)は、荘内唯一の例である。

金山郷では、下小中山板碑が一・五に及ぶ大型品で、阿弥陀三尊の上にバンを乗せている(第152図・6)。彫りが浅くけっして上手くはない書体であるが、蓮台相からみて嘉暦以後おそらく建武・貞和年間の南北朝初期の所産と考えられる。

また貝屋の二基は、嘉暦前後の様相を呈しており、南北朝まで下がないことから、造立主体は金澤称名寺の関係者である可能性もあろう。

(3) 鎌倉後期から南北朝前期の奥山荘小史——一二七七年—一三五九年——

ここで、板碑造立の背景を探るために、奥山荘の領主たちの動向をみていくこととしよう。

奥山荘の領主のうち、中条家と黒川家は比較的多くの文書を伝えており、一応の動向がうかがえる。以下は、鎌倉後期—南北朝前期の奥山荘について諸先学の研究成果(藤木一九七四、羽下一九六六、服部一九八〇、田村一九八七・一九八八・一九九〇・一九九九、田村・樋口一九九〇など)に拠りつつ、略述する。

① 鎌倉後期の奥山荘

阿賀北の領主たちの多くは、鎌倉幕府創設の功労者の子孫である。彼らは、祖先の勲功により、阿賀北の地の地頭職を得た。小泉荘は秩父家、加地荘は佐々木家、白河荘は大見家といった具合に。

奥山荘も三浦和田一族に伝えられ(中一)、和田合戦(一二二三年)・宝治合戦(一二四七年)を経て、嫡流が没落した後は、越後三浦和田家の一所懸命の地となった。

建治三(一二七七年)年、奥山荘は北条(以下、黒川家)・中条・南条(以下、関澤家)に三分され(中三一・三三三など)、以後地域ごとに独立した地頭として幕府から認知された。なお、奥山荘に三浦和田一族が本格的に移りすむのは、地頭請を実現した仁治元(一二四〇)年(中一一)をそれほど遡らないころからと思われ、建治分与の時点では一族が広く荘域に根を張っていたものと考えられる。

しかし分与後の鎌倉期における各家の歩みは険しく、文書の残っている黒川・中条では、所領の取り分をめぐって骨肉あるいは得宗権力との争いが続いていたことがわかる。

黒川家は、所領の多くが鎌倉末期には傍系の海老名家に譲られていたし、残りの所領についても茂実・章連・女子の兄弟姉妹間が争っていた。

中条家では、訴訟に伴い、茂明が中条相統分を取りあげられ(永仁五、一二九七)、北条宗方と接近することによって返還を実現する(正安三、一三〇一、(田村一九八八)が、その政争にかかわり再び得宗領となる(嘉元三、一三〇五)といったように、めぐるましい浮沈があった。

関澤家では、ほとんど文書が残っていないが、霜月騒動後に陸奥国標葉郡惣地頭職等を得る(『鎌倉遺文』八九三八)など三家の中で最も得宗勢力に近い関係にあったと考えられている(田村一九八八)。

総じて鎌倉後期には、関澤家を除いては得宗専制のあおりを受けて逼塞を余儀なくされていたといえよう。

② 南北朝前期の奥山荘

そして板碑の造立された一四世紀代、阿賀北武士団のほとんどの惣領たちは、鎌倉北条(得宗)家に見切りを付けて、足利尊氏の下に各地を転戦していた。幕府の滅亡(元弘三、一三三三)前後、在地には新たな動きが生じていたのである。

彼らは、数十人の家の子・郎党を引き連れて、京都・関東あるいは九州まで、己が一族の命運をかけて戦場に臨んでいたものと思われる。越後に残された人々は、戦費の調達に苦しみつつ、彼らの無事を祈っていたのであろう。しかも在地に残ったわずかな勢力である庶子家までもが、国大将あるいは守護の下、国内の戦鬨に駆り出されるという状況にあったのである。

以下、鎌倉幕府滅亡以後の奥山荘各家の動向をみていこう。

黒川家では、惣領茂実が尊氏に属して、京・鎌倉・越前などを転戦し、その地位を不動のものにしていく。それは、鎌倉北条家の後盾を失った海老名家の所領や対立していた弟章連とその母妙智の所領を併せた康永四（一三四五）年〜貞和二（一三四六）年にほぼ達成されたといえよう（中一六五・一八八・二〇五）。また茂実は、建武元（二三三四）年以後、中条及び南条内金山郷などの領有をめざす（中一一七）。これは、中条が得宗領であり、元弘没収地にあたるという主張の下に行われたものである。しかし、中条は翌建武二（二三三五）年中条家に安堵され（中一二二）、金山郷も最終的に文和三（一三五四）年以降中条家の下に落ち着くことになる（中二三五、田村一九九〇）。

中条家もまた、惣領茂継が尊氏に属して京・鎌倉・駿河などを歴戦し、建武四（一三三七）年、弟の茂資に家を譲り、動乱を乗り切っていく（中一四三）。そして、近衛家の奥山荘雑掌や黒川家の干渉を排しつつ、阿波国勝浦山地頭職の維持に努めている（中二〇一・二二一・二三五・三二六）。そして、文和元（一三五二）年には豊田荘并小泉荘内一分方を（中二三二）、文和三（一三五四）年には重ねて豊田荘と先述の奥山荘金山郷を充行われている（中二三五）。

なお、茂継の父茂明の弟の茂泰の系列（羽黒家）は、建武三（一三三六）・四年に奥山荘一分地頭と称して軍忠状を提出し、所領安堵を願っている（中一三八・一四〇・）。しかし、貞和三（一二四七）年にも重ねて所領安堵を訴えている（中二〇二）ことからして、ついに安堵の下文は発給されなかったようである。貞和三年に出された黒川茂実の章連跡に対する安堵申請（中二〇六）については、下文が存在する（中二二〇）ことから、史料の遺存状況による不在の可能性があるものの、幕府の方で茂資の惣領権を認めていたため、庶子家には与えられなかったと考えておきたい。

そして、観応の擾乱後の文和三（一三五四）年以後になると、そういった状況がより明らかになってくる。それは、それまで国大将に従っていた庶子家の軍忠状に、「惣領」の手に属し云々」という文言が付されるようになるのである（中二四〇・二四二）。この頃になると、惣領のみが幕府に本領安堵を認められ、惣領家はそれを背景に庶子家を押え込んでいく方法を模索していたのではなからうか。中条家では延文元（一三五六）年譲状（確実には、永和元（一三七五）年譲状）で、黒川家では延文四（一三五九）年譲状で、それまでの惣領制的分与から嫡子単独相続へと移行しており、庶子家を家臣に取込んでいくという動きが顕著になっていく。しかし中条家においてそれが達成されるのは、最大の庶子家である羽黒家を滅ぼした応永三四（一四二七）年のことであり、文和から3/4世紀、永和からでも半世紀を経た時点をもってようやく国人領主化が達成されたとみてよいのではなからうか。

関沢家は、得宗に近かった（田村一九八八・一九九〇）ため、元弘没収地となり、惣領家は没落した。堰（関）沢家は、康永三（一三四四）年に三浦道祐に与えられている（中一八二）。しかし、南条祖義基の嫡子義章の弟義親（基連）の系列は、長橋・鱒河・二柳等を維持していたと思われ、三浦道祐の子孫が観応以来堰沢条・金山郷を義親の孫にあたる堰沢孫次郎が押妨していると訴えている（中二六五）ことからすれば、非公式にせよ南条を押さえていたと考えられよう。そして関澤家は、応永末の大乱時にいに守護の被官となる途を選び（中三六〇）、在地から後退することになる。

（4）奥山荘の板碑の存在意義

本論のテーマは、右にみてきたような領主層の動向の中で、どのような契機で板碑が造立されたのかを解明することにある。

まず、各条の板碑の造立主体を確認しておこう。

北条の場合、地域霊場である乙宝寺の数基及び韋駄天山中世墓群（村上山）の一基を除いたほぼすべてが、茂実の実弟である章連の所領である「草水条内持倉・長谷・栖巻・坪穴」（中八二）に所在している。章連は、暦応二（一三三九）年に男子なく没し（中一六五）、茂実は貞和二（一三四六）

年にその跡を得ている。その後、黒川領内にほとんど板碑が造立されていないことからみて、坪穴や須巻の板碑は、章連及びその親族が関与したものと考えられる。このようにみえてくると、下館の阿弥陀三尊三群板碑という特殊な板碑は、子の章連に先立たれた妙智が、章連と自分、そして亡夫兼連あるいは尼覚性、生蓮などを供養するために造立したものであるという可能性が考えられるのではなかろうか。

なお、右記の韋駄天（村上）山は、奥山荘北条と荒川保の境付近に位置しており、荘保境が「村上山北麓与蓮妙之非人所南垣根之中間」（中四三）を通ることから、奥山荘内に含まれることは明らかである。昭和二十九年に発掘調査が行われ、宝篋印塔一四基以上（相輪九基現存）、珠洲壺製骨蔵器一一個体、板碑一基、層塔一基などが出土している（戸根一九八二、水澤一九九四）。遺物の年代は、層塔以外は一四世紀代南北朝期の所産と考えられる。本墳墓の位置する村上村は、康永四（一三四五）年以後に黒川惣領家の所領となる（中一九五）ことから、ほとんどを黒川家が遺した可能性が高い。したがって、南北朝期の黒川惣領家の供養塔としては、板碑よりも宝篋印塔形式が採られていたと考えられる。ここからも黒川領内の板碑の多くは、惣領茂実の弟の章連の系列が遺したと考えて大過ないのではなかろうか。

中条においては、ほとんどが惣領家の遺したものと考えられる。本郷町江上館のバン、大川町のキリーク（現在所在不明）、西栄町の貞和碑（バン）などの数基が一四世紀前半に遡るが、大部分は一四世紀後半の所産と考えられる。南条においては、惣領家が鎌倉得宗家と命運を共にしたと考えられるならば、関沢の板碑も鎌倉末期〜南北朝初期に集中的に造立されたものといえよう。もちろんその後に関沢を名乗る庶子家の長橋家が遺した板碑には、それより下るものも含まれよう。ただし、長橋分の板碑数が限られていることからすると、それほど熱心であったようにには思われなところである。

このように奥山荘の板碑に文献からみた歴史を重ね合わせると、その造立が南北朝の動乱とまったく軌を一にしていることがわかる。これは北方の小泉荘や魚沼地域でも同様であり（水澤一九九四b・一九九九e・二〇〇〇a）、越後全域に共通した様相であることが予測される。板碑の多くは、動乱に伴って没した人々ひいては留守を守る武家の子女たちの鎮魂碑であったと考えられる。しかし、右にみてきたようにすべての武家が遺したのではなく、特定の人々が受容したことも明らかとなった。

したがって越後の板碑は、動乱期の戦死者の供養形態として鎌倉末期に採用され、特定の人々に受け入れられたが、惣領制的所領分与から国人領主化（嫡子単独相続制）への移行の過程で廃れていったものと考えられる。あるいは、板碑造立という供養儀礼を行うことによって、庶子家や家臣団を集結させることに意義を見いだした人々が造立したものでなかろうか。

そして日本海沿岸地域に一時期に広がった板碑も、多くが一四世紀中に消えてしまうことから考えて同様の契機で造塔された、というのは単なる思い込みにはすぎないであろうか。

註

（一）阿賀北とは、会津から流れてくる阿賀野川の北方の地域名称である。一六世紀代その地域の越後府中から比較的独立性の高い奥郡の国人領主たちは「揚（阿賀）北衆」とよばれた（例えば『中条町史 資料編第一巻』五二〇号文書以下「中〇〇」と引用する）。板碑の造立された一四世紀代には、まだ国人領主連合であるところの揚北衆は成立していなかった（藤木一九六八）が、ここでは地域名称として「阿賀北」を使用する。

（二）越後においては、関東の影響を多分に受けた魚沼地域において在銘率が高く、地域により1/3〜2/3とややばらつきがあるが、全体で六割近く（80/141基）に及んでいる。現在のところ、武蔵型板碑が搬入されているのは、この魚沼地域と糸魚川市のみである。また、それを在地産の緑石凝灰岩でかなりの程度忠実に模倣しているのは、加茂市での遺例のみである「水澤一九九四」。

(三) 脱稿のごく直前、黒川村内の板碑十二基が同村教育委員会の伊東崇によって図示された(伊東二〇〇〇)。併せて参照いただきたい。

(四) 野中においては、惣領家の石曾根条が羽黒家の羽黒に含まれるのか微妙な位置にある。種子からみて、「カ」が羽黒に所在することから以前には羽黒家に関するものと考えたことがあった「水澤一九九四」。しかし阿弥陀三尊は、中条家にしか所在しておらず、どちらとも決しがたい。ここでは、青山宏夫の波月条絵図の現地比定(青山一九九九)から判断して、石曾根条内とした。

(五) 奥山荘中条の政所条の比定地については、いままで漠然と江上付近とされてきた(中三七二註2)。近年、町教育委員会は、江上館およびその西南方で約三万㎡に及ぶ大規模な発掘調査を実施した。その結果、そこが政所条の中心地である可能性が非常に高くなったと考えている(水澤二〇〇〇g)。

付、頸城の板碑(第153・154図)

ここでは、頸城の板碑を紹介しておく。

48は、板倉町上筒方に所在する安山岩製品である。塚上に所在していたというが、現在は下方に降ろされている。高さ196 cm以上×最大幅39 cmで、最大厚49 cmを測る。優に8尺を越える石材を用いている。上方にバンを刻み、その下に蓮台を刻む。頸城最大の板碑で、唯一頭部に加工を施さないタイプである。

49は、上越市西寺山白山社に所在する安山岩製品である。76 cm×20.5 cmで、基部が幅29.5 cmと広くつくられ、凸形に造られている。塔身の厚さは、10 cmを測る。頂部に太めの2条線を側までめぐらせている。種子は、ア・バン二尊で、向かって右下に「□永五□八月」銘が刻まれている。種子相からみて、応永であろうか。

50は、上越市上真砂勝名寺に所在する大光寺石製品である。下方を欠き、遺存高55 cm×23.5 cm、塔身厚13.5 cmで、額が6.5 cm突出する。主尊のバンが力強く刻まれ、種子上半に黒色顔料が付着していることから、金箔が押されていた可能性が高い。頂部の2条線は深く、側までめぐり、角が面トリされている。

51は、上越市五智十念寺に所在する安山岩製品である。下方を欠き、遺存高41 cm×24 cmを測る。種子は、彫りの弱いバンが刻まれる。頂部に深い1条線が入れられており、側へとめぐらされている。

52～54は、柿崎町平澤光宗寺脇の山際から14・15などの五輪塔とともに4基出土したものの内、残りのよいもの3点を図化した。全体に小型化しているが、種字の彫りは深く、地上にあった期間が短かったものと思われる。すべてバンが刻まれる凝灰岩製品である。

52は、下半を欠き、遺存長38 cm以上×16.5 cmで、塔身厚7.5 cmを測る。主尊にはバンが力強く刻まれ、額が3.5 cm突出する。頂部の2条線は深く側へとめぐり、角が面トリされる。

53は、頂部を欠き、遺存高47 cm×14.5 cmで塔身10 cmを測る。額が造られ、下部も突出する。

54は、ほぼ完形で、64 cm×15.5 cm、塔身厚14.5 cmを測る。額・膝ともにわずかに突出し、頂部に側までめぐる2条線が施されている。主尊はバンである。

55は、新井市小出雲の経塚山墓地に所在する安山岩製品である。70.5 cm×20.5 cmで、塔身厚10.5 cmを測る。額・膝ともに4.5 cmも突出させている。主尊はバンである。頭部には2条線を側までめぐらせ、頂部をやや尖りぎみに仕上げている。なお本地点には、61の石仏とともに長さ40 cmを測る空風輪をはじめとする五輪塔部位が40基以上集積されている。

以下の3点は、畿内もしくはその系統を引いた能登系の板状の製品である。

56・57は、上越市五智十念寺に所在する。

56は、主尊に五輪塔を半肉彫りした花崗岩製品で、47 cm×23.5 cmを測る。五輪塔の上下を区画し、頂部を尖らせている。

57は、主尊に像形を彫り出す安山岩製品で、40 cm×21 cmを測る。56の五輪塔を佛像に置き換えたものである。大日如来と思われる。なお下半及び背面は、粗彫りのままである。

58は、上越市港八幡宮に所在する二尊板碑である。お助け地藏とよばれている。輝石安山岩製で、41 cm×39.5 cmを測る。塔身厚は5.5 cmで、額が5 cm突出する。額には浅い沈線が1条施されている。主尊は、地藏二尊と思われる。

板碑は、板倉町上筒方例を除いて、すべて板状に加工したものである。石材は、搬入品と考えられる畿内系の少数例を除き、在地の安山岩を用いたものがほとんどである。唯一大光寺石を用いたものとして、上真砂勝名寺板碑がある。種子は、ほとんどがバンであり、五輪塔卓越地域における在り方を示している。形状は、頂部に2条線を刻み先端を尖らせるといふ、武蔵型の影響を受けつつ、額・膝を突出させるといふ山形あたりでまみられる在り方を呈している。これらはやがて、額・膝を消失し、1条線あるいは浅い2条線と力強さを失った種子の組み合わせとなり、ついには種子さえも失ってしまう。

上越市内では、五智十念寺に4基、寺町・石沢・上真砂・港八幡・西本町・西寺山・高住（近世か）に各1基の二基が確認できる。頸城全域をみても、現在のところ30基強が確認されているのみである。なお糸魚川には、緑泥片岩製の武蔵型板碑が所在しており、信濃経由でもたらされたものと考えられ、注目される。

第二節 石仏

1 阿賀北の中世石仏

(1) 研究史

阿賀北の中世石仏研究の嚆矢は、故本間弼による『奥山庄における中世の石造物』（一九六八）である。この著書は、時代的制約があったとはいえ、その内容に非凡な着眼点が随所にみられ、中世石造物研究の格好の手引書であった。しかしガリ版刷の私家版であったため、故人が会長を務めておられた中条町郷土研究会の関係者を中心に配布されたのみであったのが非常に残念なところである。今回の石仏については、概要を記された後、紀年銘がないため時代推定は困難とされ、中世のものとのみ言及された。

次いで、精力的に各地を歩き回って、中世石仏の存在を社会に認知させたのは、小野田政雄である。『越後石仏雑記』（一九六八）の段階で273基を一覧表化し、近年に至るまで石仏の周知・保護に大きな成果を挙げている。おそらく、その集成にはかなりの歳月が費やされたことと思う。先人の学恩に畏敬の念をもたざるを得ない。また氏は、石仏について独自の説を展開されており、それについては後に述べる。

以後は、小野田の独壇場の感があるが、新潟県文化財調査の『水原郷』における坪井良平氏らによる的確なまとめ（坪井・楯一九七一）及び、中野筆任が霊場論の中で各種石造物を地域史の構築に用いた（中野一九八八）業績は押さえておく必要がある。

筆者も奥山荘に職を得て以来、地域信仰の解明の鍵として各種石造物に注目してきた。まず、当地の主要な石造物である板碑・石仏の皆悉調査から始め、県内に範囲を広げて駆け巡った。そして板碑については、その結果を公表し（水澤一九九四）、その後も折りにふれて実測図の公開を心掛けてきた（水澤一九九七・二〇〇一a）。しかし石仏については、一九九七年頃から実測を始め、板碑に付随するかたちでいくらかの概要を紹介してきた（水澤一九九四a・一九九九a・二〇〇〇c）ものの、そのベースである皆悉調査の結果及び実測図を公表していなかったため、全容をはっきりさせられない憾みがあった。

そのようなところへ、北陸各地の様相を概ね知る機会があり（北陸中世考古学研究会二〇〇〇）、畿内での良質な調査例が報告された（市本・瀬戸二〇〇一、大阪府文化財調査研究センター二〇〇〇）ことにより、外堀から埋めることが可能となってきた。また、一昨年来新発田市教育委員会の鈴木曉から市内の追加例を多数教示いただき、ようやく一区切りをつけることとした。

(2) 形態分類

阿賀北の中世石仏は、蓮台型式から大きく3型式4分類できる。以前は、地名や領主名を付して分類していたが、今回全体の分布域を落としたところ、かなり広い地域に及んでいることが判明したため、ⅠⅡⅢ類と表現することとした（二）。以下、実測図を提示しつつ、説明していく。

① 石仏Ⅰ類・陽刻蓮台（第155～157図）

蓮台全体を陽刻し、そこに蓮弁を線刻するものである。これまで「中条系」とされてきたものである（小野田一九六八）。座像のみ。

笹神村出湯石水亭石仏（第155図）（一）

碑高33cmの石材に46cmの座像を彫りだし、幅46cm高13cmの陽刻蓮台に乗せている。本石仏は、印相から阿弥陀如来と考えられ、肉髻・顔容・衲衣がしっかりと刻まれ、跏趺部も整っている。誠に阿賀北の石仏を代表するものといえる。なお、石材80cm・座像高40cmを越えるものとしては、

本例の外に次の中条町表町石仏、安田町大岡家石仏、水原町遠藤家石仏、横越町北方文華博物館石仏、新潟市新崎日長堂石仏があり、中条町・水原町の2例を除いては出湯から運ばれたもので、水原町例もその可能性がある。また、前3体は蓮台が付されるⅠ類であるが、後3体は無刻のⅢ類である。

中条町表町観音堂石仏(第156図)

大正三年頃、羽越線中条駅の工事に伴う土取り中に駅西から発見され、現在地に移されたものである(本間一九六八・小野田一九六八)。碑高82cmの石材に43cmの座像を彫りだし、幅4cm高22cmの陽刻蓮台に乗せている。この蓮台を鉢形に彫り出す手法は、石水亭石仏以外に通有のものである。印相はやや不明瞭であるが、阿弥陀定印と考えられる。肉髻・顔容・衲衣・跣座はしっかりと表現され、蓮台には2段の蓮弁が刻まれている。ただ、蓮台を大きくとった関係で跣座部が小さめになっており、ややアンバランスの感がある。なお、背面下端より40cmほどのところに6×6cm・深さ5cmの隅丸方形の孔が穿たれている。これは光背を固定したものか、あるいは像自体を背後の壁に固定したものかのいずれかと考えられよう。いずれにせよ堂内仏として安置されていたものであろう。なお阿賀北の石仏には、このような類例を知らないが、妙高の関山石仏群に背後に孔が穿たれているものがあり、願文等の納入孔と考えられているが、それらも光背を固定したホゾ孔である可能性があるのではなかろうか。

笹神村出湯華報寺石仏(第157図1)

像高28cmを測る小型品で、出湯周辺で蓮台を刻むものは、管見では石水亭石仏と本例のみである。本石仏は、印相から阿弥陀如来と考えられる。肉髻・顔容・衲衣・跣座部がしっかりと刻まれているが、蓮台はおそらく石材が足りなかった関係で、下辺ぎりぎりまで使われている。蓮弁は、側面のみ2段刻まれている。

中条町西栄町地藏堂石仏(第157図2)

像高33cmを測る阿弥陀如来像である。蓮台は、下部がコンクリートで固定されているため不明瞭であるが陽刻であり、石材高は80cmを越えるものと思われる。顔容等ははっきりしないが、印相・跣座部は刻まれている。しかし本石仏の最大の特徴は、なんととっても頭部の両脇に刻まれたサ・サクの梵字と、それらを囲む月輪である。いうまでもなく阿弥陀三尊を表しており、唯一の遺例である。なお、裏面には彫りかけの像が認められ、彫成途中で現在の面に変更されたか、裏面にも仏像を彫ろうとしたかのいずれかと考えられる。

中条町東本町大輪寺石仏(第157図3)

像高31cmを測り、印相・顔容は不明瞭であるが、肉髻・衲衣・跣座部は明瞭である。蓮台は、小型品の中で最も優美なもので、2段に蓮弁を配している。像周辺から蓮台下方まで面とりがされていることが、中条近辺の特徴である。

中条町乙乙宝寺石仏(第157図4)

像高23cmで蓮台を含めて40×30cm弱の範囲を加工する。像及び蓮台の彫りは薄めで、上記のものに比して、細部が省略されている。肉髻は認められず方頭で、蓮台の刻みは簡略化したものとなっている。本例では明瞭でないが、手を胸で組む智拳印と考えられるものもあり、金剛界大日如来像を刻んだ可能性が有るものも一定数認められる。

中条町村松浜石仏(第157図5)

像高20cmの小型品で、蓮台を含めても30cmの範囲にコンパクトに刻んでいる。まったく薄肉彫りという表現がびつたりとくる像容である。風化していることもあるが、像容は不明瞭で、かろうじて跣座部と蓮台に表現がのこる。

村上市柏尾墓地石仏(第157図9)

像高21cmの小型像を2体横に並べた双体石仏である。阿賀北では、唯一の遺例である。肉髻が認められ、顔容も明瞭であるが、以下は像形をラフ

に刻むのみである。蓮台は、連結させている。

②石仏Ⅱ類：陰刻蓮台（第158・159図）

蓮台を陰刻するもので、板碑様の蓮台を刻むもの（Ⅱa類）と、1列のみ波状に蓮台を刻むもの（Ⅱb類）がある。Ⅱa類は、小野田が「村上系」（一九六八）、筆者が「本庄系」（一九九九a）とよんだもの、Ⅱb類は小野田が「山屋系」、筆者が「鮎川系」としたものである。

なおⅡa類の中には、蓮台部分を含めて面とりしているものがあり、一見薄肉彫りした陽刻蓮台様を呈するものがある。これは、新発田市内の加治川沿いに限定的に認めることができたため、以前「加地系」とよんだものであるが、ここでは蓮弁が板碑様の陰刻であることから、Ⅱa類に含めて考えておきたいと思う。

Ⅱa類（第158図）

栗島浦村内浦墓地石仏（第158図1）

1は、跌座の下部を彫り出すほぼ唯一の例である。丸みを帯びた腕は、神官像を想起させるが、印相から阿弥陀如来を表していることが知れる。像高30cmを測る。蓮台は、色部領の一四世紀後半頃の板碑の蓮台と類似する。

栗島浦村内浦旧役場石仏（第158図2）

2は、典型的なU字状の腕をもち、像高は25cmとなる。蓮台中央の上方に浅い彫り込みを入れ、跌座下部を表現している。蓮台は、やや彫りが弱いが、やはり色部領の板碑蓮台と共通するものである。この蓮台型式の採用は、内浦の石仏にのみ認められる特徴である。

村上市一日市諸上寺石仏（第158図3）

3は、長径71cmという最大規模の石材を用いている石仏で、像高37cmを測り、顔高17cmに達する。長頭・U字状腕で衲衣を表現しないという典型的な姿である。肉髻が認められ、白毫までも表現している。印相から阿弥陀如来であることがわかる。蓮台は、栗島のものとは異なり、中条以南の板碑に類似するタイプであるが、それと大差ない時期の所産と考えられる。

村上市一日市地藏堂石仏（第158図4）

4は、地藏堂内に所在する石仏であり、像高21cmとやや小型の部類に入るが、蓮台からみて3に近い時期の造立と考えられる。ただし大きな違いは、頭頂が円頭であることと、印相の違いである。印相は、合掌しているようにもみえ、珠あるいは鉢を掌上にのせているようにもみえる。可能性としては、地藏、勢至、普賢、観音等の諸尊が想定されるが、円頂を重視すれば、地藏がもっともふさわしいのではないかと思われる。

中条町乙宝寺石仏（第158図5）

5は、乙宝寺墓地の池辺に所在するもので、本類の中で最も古様な蓮台を刻んでいる。像高29cmを測り、厚手に彫り出している。円頂で、印相は合掌タイプである。蓮台型式（水澤一九九七）からみて、一四世紀前半代まで遡るものと考えられる。

中条町築地墓地石仏（第158図6）

6は、像高19.5cmとやや小型で、彫りも浅い。印相は、合掌様に中央が突出しているが、阿弥陀定印を刻んでいる。おそらくⅡa類の末期の製品と考えられるが、蓮台からみて一四世紀代には収まるものと考えられる。

中条町東本町大輪寺石仏（第158図7）

7は、像高27cmを測る阿弥陀如来像である。像容ははっきりしないが、肉髻を彫り出し、阿弥陀定印を刻む。なお、胎内川以北のⅡa類が衲衣を表現せずにU字状に腕を彫り残すのに対して、以南では胸に衲衣を表現するものが多い。

新発田市下羽津宝昌寺石仏(第158図8)

8は、像高33cmを測る阿弥陀如来像である。肉髻・顔容・印相は明瞭で、かなり形骸化しているが衲衣も表現されている。また、跏趺座中央の凹みはつきりと刻まれている。この特徴もⅡa類に特有のものであるが、これはⅠ類の跏趺座中央の裳に対応するものであろう。

以上により、肉髻を表現するものは「阿弥陀如来」、円頭のタイプは「地藏菩薩」を表しているのではないかと思われる。

Ⅱb類

村上市鑄物師河内社石仏(第159図1・2)

鑄物師の川内社には、5体の石仏が参道脇に並べられているが、内2体が典型的なⅡb類、1体がⅢ類で、のこり2体がここで示したⅡb類の原初形態を表すと考えられる石仏である。

1は、頭頂に突起を有し、印相・衲衣が明瞭である。また、顔の脇にフード状の高まりがあるのも本類の特徴である。法界定印から、胎藏界大日如来あるいは釈迦如来像かと考えられる。像高25cmで、跏趺下に蓮弁を1列に5弁以上浮き彫りしている。本例がなぜに祖形と考えたかというところから蓮弁の縁取りのみを意識的に刻むと、通有のⅡa類となるからである。また、蓮弁下が粗彫りのままであることから、それ以下は埋めるという前提で造られたことがわかる。したがって、素材の石材の下方の形状には、意が払われていない。

2は1と像容が同じいが、像高18cmと小型化し、蓮弁が矮小化して縁取りが連続する浮き彫り蓮弁となっている。そして下方を埋めると蓮台が隠れてしまったため、堂内仏と想定されていたと考えられ、過渡的な形態を示すものと思われる。

村上市柏尾墓地石仏(第159図3)

3は、像高22cmで、蓮弁がm字状に刻まれる典型タイプである。印相も1・2と同じである。本石仏の石材は、地元の海岸で採れる黄色凝灰岩(柏尾石)が用いられている。

山北町寒川河内社石仏(第159図4・5・6)

寒川の川内社には、3体の石仏が参道脇の小祠に安置されている。この3体は、遺存状況がよく、ともに水色の安山岩で造られており、一見一時期の所産かと思われるが、すべて像容が異なり、蓮弁の彫り方にも違いがみられる。

4は、肉髻・像容・衲衣が明瞭に表現され、印相から阿弥陀如来であることがわかる。蓮台は、m字状に5弁半表現されており、間弁まで彫られている。像周囲の面トリ範囲が蓮台脇まで認められることと併せて、古手の要素といえよう。

5は、宝冠を被り智賢印を結ぶ金剛界大日如来像である。蓮台は、6弁がm字状につながって彫られている。なお蓮弁は、5〜8弁まで認められるが、5弁のものが最も多い。

6は、顔容はつきりしているが、衲衣は雑である。印相は、上をくぼめるもので、1・3と同じく胎藏界大日如来か釈迦を表したものと思われる。また、跏趺下部に沈線を入れる。蓮弁は、Y字状の彫り込みを6つ入れて表現している。

上の3体は、4から6へと蓮弁が省略されていく過程を追える貴重な例であり、その時間差と像容の違いに興味もたれる。

朝日村早稲田常林寺石仏(第159図7)

7は、一石二尊の唯一の例である。最大幅33cm、最大厚25cm、高さ67cm以上の石材を用いて、下方に2体の仏像を横に並べて彫り出している。像高は、ともに23cmを測る。右側の仏像は、印相不明であるが、法界定印であろうか。蓮台部分は、コンクリート潰けされておりみえない。左像は、左手を胸に上げ、右手を跏趺の上に横に置く。蓮台は外と異なる長めの逆U字を4つ彫り、間をつなげている。本石仏は、像容の弱さから、Ⅱb類で

も最も新しい時期の所産と考えられる。

③石仏Ⅲ類…無刻蓮台(第160図)

手首の下線以下を彫り残すことによって、河原石の自然の丸みで蓮台を表現する無刻蓮台の石仏である。全体の3/4が本類に属する。像容は、肉髻・顔容が表現されるのに対し、衲衣は不明瞭で、印相はほとんどが省略されている。像側の彫り出しに伴って、跏趺部分の側が表現される。ごくまれに、跏趺部の下線を刻むものがある。特に、大型のものに彫りが厚い傾向がある。なおこの蓮台の省略は、大量生産に対応する効率面と下半が土に埋められるという前提に立つものと考えられる。したがって、本類が盛んとなった時期は、かなり需要層の裾野が拡大してきた段階といえよう。しかし、多数の割には個性に乏しいので、2点を図示するに止める。

笹神村出湯華報寺墓地石仏(第160図1)

石仏の生産地(工房)と目される蓮台野(中川一九五九)を擁する出湯は、Ⅲ類の一大集中地域である。ここでは、比較的顔容がはっきりしているものが多いという印象をうける。図示したものは、華報寺北方の墓地のもので、最も顔容がはっきりしているものの1体である。像高は、跏趺脇まで29cmを測る。彫りは深く、手と腹部の段差もはっきりしている。

神林村牧目墓地石仏(第160図2)

像高26cmを測るもので、1に比してやや形骸化が進んだ段階のものである。肩の張りが弱まり、衲衣の表現も不明瞭となってきた。しかし、顔容がまったく認められず、彫りの薄いものに比べれば、まだ1に近い時期の所産と考えられる。

本節の最後に、尊名と石仏類別との関係を整理しておきたい。Ⅰ類では、阿弥陀如来が主で、金剛界大日如来が従となる。Ⅱa類では、阿弥陀如来が主で、地藏菩薩が従。Ⅱb類では、胎藏界大日如来(あるいは釈迦)及び阿弥陀如来が主であるが、金剛界大日如来も認められる。Ⅲ類は、ほとんどが阿弥陀如来を表しているものと思われる。

④その他の石仏

以下は、確認例が少ないものを紹介しておく。

新発田市上楠川神明社石仏(第160図3)

立像は、中条町で1体、新発田市で3体、水原町で1体、安田町で1体の合計6体を確認している。中条町鷲麻神社・新発田市正法寺・水原町隻善寺・安田町考順寺例は無蓮台で、隻善寺例が地藏立像である外は像容未詳。新発田市五十公野龍昌寺・上楠川神明社例は、陰刻蓮台を伴う地藏立像である。ここでは、新発田市神明社例を紹介する。

像高30cmを測り、石材は、外の座像と同じ花崗岩である。像が薄肉彫りで周囲を面トリするのもⅡa類の技法そのままである。顔容・衲衣は不明瞭で、両手で宝珠を持っている。蓮弁は、立像のためか、通常の市域の蓮台型をとらず、上下対となる色部領に特有の形態である。なお、上段の蓮弁数は、非対称である。時期的には、蓮台相から一四世紀代の所産と考えられよう。

新発田市浦一石六尊石仏(第160図4)

新発田市内で2基のみが確認されている。六体の光背付き立像が彫られているが、やや軟質の安山岩が用いられており、永く野外にあったために表面の風化が著しく、像容は不明である。石材の大きさは、高さ84cmと大きなものである。通常、一石六尊ということであれば、六地藏が相場で、10世紀後半の所産のものが多く(桜井一九五八)。しかし本例の場合、中央下段の一尊のみが23cmと大きく、外は25cmと小型に仕上げられていることが気にかかり、三尊を二段に、あるいは主尊を五尊がとりまくという配置も想定したくなる。そして、全体の大きさと軟質石材を用いていることから、

一六世紀まで下らない時期の所産と考えておく。

なお外では、神官像が朝日村・神林村・栗島浦村で各1体ずつの3体、栗島浦村でⅡa類の未製品が1体認められている。

(3) 形態比較

各石仏については、写真撮影に併せて、石材高（地表高）、像高（跏趺座部下まで）、肩幅、頭長、頭幅、頭厚を計測している。ここでは、各分類の特徴を抽出できるのではないかと考え、像高、頭長、頭厚の各計測値を比較・集計した表を作成した（表44）。

まず3点の平均値をみてみよう。像高は、Ⅱa類が最も大きく、Ⅲ類がそれに次ぎ、Ⅰ類・Ⅱb類はⅢ類よりも3cm以上も小さい。それに比例して頭長も同様に推移しているが、像高に対する頭長の比率を出すと、Ⅱa類が48%を占めるのに対し、外は40%前後である。こうして、Ⅱa類の大きな顔という印象は、数値的にも実証される。しかし、像の彫り出しの目安となる頭厚を比較すると、Ⅲ類が最も肉厚で、Ⅰ類・Ⅱa類が同等、Ⅱb類がもっとも薄い半肉彫りであることが判明する。Ⅲ類とⅡb類との差は、2cmもある。しかし、像高に対する彫出し率をだしてみると、Ⅲ類が14%、Ⅰ類が10.5%、Ⅱa類・Ⅱb類がともに8%となる。したがってⅢ類とⅡ類では、彫り出す比率が倍近くも違うことがわかる。

以上を総合すると、像が最も大きいのはⅡa類で、顔が大きく、彫りが浅い。Ⅲ類は、大きさこそⅡa類に次ぐものの、最も彫りが深く、小顔となる。Ⅰ類は、像が小さい割に、厚く彫り出される。Ⅱa類は、最も小柄で彫りも浅い。ただしⅢ類以外は、蓮台が付くので、全体像としては35cmを越えるものも多く、Ⅱb類でさえ25cm以上となりⅢ類と同程度になる。さらに蓮台を刻むⅠ・Ⅱ類は、埋めると蓮台が用をなさないものが多いため、堂内に安置されることを前提としていたと考えられるのに対し、Ⅲ類は地中に下半を埋め、いわば大地を蓮台とするという違いがある。それが故に、風化に耐えるために、深彫りされたというのうがった見方であろうか。このように、両者の間には像容以上に、大きな違いがあると考えられる。

さらに詳細にみていこう。像高分布では、Ⅰ類は20cm以下が最も多いが、20～30cmまでがほぼ同数となる。Ⅱa類は、26～30cmのものが最も多く、その前後5cmのものがそれに次ぐ。20cm以下のものは、6点と少ない。Ⅱb類は、25cm以下のものがほとんどで、36cmを越えるものはない。Ⅲ類は、21～25cmのものが最も多く、26～30cmのものがそれに次ぎ、両者で7割を占める。その前後のものは、約15%ずつとなる。そして、像高1尺2寸を越えるものは6%ほどにすぎず、それらは時期が遡るものか、特注品の可能性があるろう。そして像高20cm以下で彫出の浅いものは、型式的に退化傾向にあるものと考えられる。

頭厚分布では、Ⅰ類・Ⅱa類はともに2～3.9cmに収まるものが最も多く、それよりやや少ないのが1.9以下で、両者でほとんどを占めている。Ⅱb類は、前二者と逆で、1.9cm以下が最も多く、4cmを越えるものはない。Ⅲ類は、2～3.9cmが最も多く、次いで4～5.9cmが多く、両者で9割を越える。1.9cm以下は、3%にすぎない。

頭長分布では、Ⅰ類では8cm台が最も多いが、かなりのばらつきをみせる。9cm以下が2/3を占めている。Ⅱa類は、12cm・13cm台が多く、16cm台も7点ある。10cm以上が9割近くを占める。Ⅱb類は、8cm台が最も多く、Ⅰ類によく似た分布をみせる。ただし13cm以上のものは認められない。Ⅲ類は、9cm台のものが最も多く、8～11cm台に7割が集中している。

(4) 分布圏

表45は、各タイプの石仏の数量を市町村ごとに示したものである。第161図は、表45を市町村ごとの白地図に落としたものである（二）。以下、両図表を基に論を進める。

I類は、確認数46(二〇〇一年現在、以下同じ)で、半数以上が中条町に所在している。小野田が「中条系」としたのも故なしとはいえない。そして、新発田市分10基を合わせると全体の8割にも達する。最も早く現れた笹神村では、移設されたものを含めてもわずかに数基を数えるに過ぎない。

II a類は、確認数63基で、豊浦町以北にのみ認められる。新発田市内が22基と最も多く、次いで中条町・村上市が次ぐ(各8基)。小野田は、初期の調査で村上市内を中心があったことから「村上系」としたが、現状では不適切となっている。(2)でもふれたが、蓮台は、栗島浦村の6基を除けば、ほとんどが一四世紀後半の中条以南の板碑の蓮台と重なってくるものであり、基数も半数以上が中条以南に所在している。

II b類は、荒川町以北にのみ認められる。朝日村が最も多く30基と全体の2/3を占め、村上市内が8基と続く。基本的には、門前川以北に所在している石仏型式である。

III類は、510基と最も数が多く、北は朝日村、南は加茂市まで分布している。製作地とされている出湯華報寺周辺に最も濃く所在している(120基)。しかし、村外へ移動したのも多く(表5下参照)、遺跡地図に示される場所で確認できないものも相当数に上がったため、新発田市内の確認数が上回る結果となっている。いずれにせよ、水原町・新発田市域が分布の中心で、北方は中条、南方は五泉あたりまでが二次流通圏といえよう。

なお、板碑においては、莊園ごとの地域性がかなり色濃く現れていた(水澤一九九四・二〇〇一)が、石仏に関してはどうかだろうか。例えば、I類に関しては、奥山莊中条に集中する感があり、そこに金剛界大日如来像が認められることは、板碑の様相に類似する在り方である。そしてII b類は、小泉莊本庄に集中している。また、II a類は、やや分布がばらけているが、加治川沿いに多く認めることができる。したがって、数量の少ないものは、ある程度の地域性を有していると考えられよう。

対して、III類は、数が多いこともあって、各地に分散している(四)。もちろん出湯やその近辺に多いのであるが、同心円的に分布が認められる。ここから、本類は商品流通していたという可能性を考えるのは、早計にすぎようか。なお、出湯の板碑については、分布圏の南端近くにあたり、村域全体の確認数も30基以下と限られたものである。そして、阿賀北としては例外的に蓮台の刻まれる比率が半数以下と低く、五輪種字・名号板碑が3基ずつ認められる。これらの特徴は、地域性が顕著であり、石仏と対照的な在り方を示している。

(5) 時期比定

阿賀北の石仏は、1点も紀年銘資料が確認されておらず、定点を求め難いところである。それは、III類と型式が共通する北陸(加賀・越中、特に能登)・畿内の石仏でも同様で、編年的位置付けを困難にしている。これらは、概説書の類いでは概ね室町期のものと考えられているが、小型化し大量生産されたことにより、美術的に価値の低いものとして扱われてきたものである。したがって、石造美術研究者の関心は薄く、それを主題として扱ったものは非常に少ない。しかし、この数が多いという特徴は、考古学的に比較可能な資料ということを意味している。ましてやIII類は、畿内・北陸に広く分布しているのである(櫻井一九五八)。そしてここから、板碑とは系統の異なつた信仰石造遺物であることが明らかとなる。

そこでまず、広範囲に分布し、多数を占めているIII類を組上にのせ、その後にI・II類について検討していくこととする。

① 石仏 III類

まず、小野田政雄の所説の検討から始めねばならない。氏は、そのすべてを鎌倉時代後期の所産とされ(小野田一九六八)、その見解を依然として堅持し続けられている(一九九二)。その根拠は、徳治三(一二三〇)年銘青銅製経筒を出土した出湯の中世墓の調査(中川一九五九)で、石仏が出土したこと、像の彫出しの深さにある。すでに後者については、第3章の形態分類で、堂内から屋外へと安置場所が変化したことにより、風雪に耐

えるために厚彫りされるようになったのではないかと考えた。次いで、前者を検討してみよう。件の石仏は、件の経筒と一緒に埋められていたわけではなく、廟所の敷石として嵌め込まれていたものでもない。ただ、南側から倒れた状態で出土したに過ぎない。墓所に後になって石造物を置くことは、珍しいことではない。ここで、一旦譲って、徳治三年に石仏が置かれたと考えたところで、そのみですべての石仏を鎌倉後期の所産とするのは、はたして妥当であろうか。すでに一九七一年の段階で、「その大多数は室町時代の所産とすべき」という指摘がある（坪井・楯一九七二）。同様に各地の概説書でも室町時代とされている（京田一九七六・一九八三、望月一九八三）。しかし、紀年銘がないことから、納得されないむきもあろう。そこで以下では、管見に入った発掘調査出土例から年代的位置付けを試みたい。

まず、『中世北陸の石塔・石仏』（北陸中世考古学研究会二〇〇〇）所収遺跡から、石仏Ⅲ類が出土しており、おおよその年代が得られるものを取りあげると、以下のとおりとなる。

- ・石川県鹿島郡中島町「上町マンダラ中世墳墓群」……………一五世紀中頃～一六世紀前半代
- ・石川県鹿島郡鹿西町「阿弥陀菽遺跡」……………一四世紀末～一五世紀代
- ・富山県氷見市「菽田薬師中世墓」……………一五世紀
- ・富山県氷見市「脇方谷内出中世墓」……………一五世紀前半
- ・富山県氷見市「上熊無中世墓」……………一四世紀後半～一五世紀

能登半島に偏りがみられるが、それは石仏の分布上仕方ないことである。よって、北陸では一四世紀後半から一六世紀前半、特に一五世紀代にその中心があることが認められよう。

次いで、畿内の例をみってみる。ここでは、現在管見に入った調査例の中で最も詳細な検討が行われている「栗栖山南墳墓群」（大阪府文化財調査研究センター二〇〇〇、市本・瀬戸二〇〇一）をとりあげる。

ここで当面問題となるのは、Ⅲ類と同形態の「光背形石仏」であり、額を有する「板碑形石仏」は除外する。ただし、後者が越後でほとんど認められないこと自体が当地の石仏の時期比定の一助となる。

さて、栗栖山南墳墓群の石仏の変遷については、2つの仮説が提示されている。

仮説1は、石仏型式からみて、3類（台座を含めて座像を表現したもの）から、2類（座像全体を表現）、そして1類（腕より上半身までを表現したもの）…本稿でいうⅢ類）へと形骸化していったとし、「3類が本来の形態」とするものである。

仮説2は、出土状況からみた石仏変遷である。仮説1とは逆に、1期（一二世紀後半～一四世紀中葉）に1基、Ⅱ期（一四世紀後半～一五世紀後半）には10基以上が1類であり、Ⅲ期（一五世紀後半～一六世紀中葉）にいたって2・3類が認められるようになってくるというものである。また、Ⅲ期には、板碑型や双体石仏など多様な石仏が出現するが、1類もかなりの比率で認められることにも留意しておきたい。

以下、この注目すべき調査成果に対しての私見を述べる。

まず石仏変遷において、光背型石仏と板碑型石仏を混同することは不適切と考える。仮説2にみるように、後者は後発し一六世紀代に盛隆するタイプであるからである。そして光背型については、像容で肉髻や手首のふくらみ、衲衣などの細部が表現されるものほとんどは、1類に属するという報告書の観察結果がすべてであろう。型式変遷は、1類を最古に置くべきことを示している。したがって仮説1は、板碑型に対してのみ有効な仮説である。もちろん報文にあるように、墓の埋葬時期と石仏を含む上部施設の設置時期は、同時ではない可能性がある。しかし、1例しかないⅠ期はともかく、10例以上に達するⅡ期においては、それを否定することは難しいのではなからうか。

よって、型式的にはⅠ類が最も古く、一五世紀代を中心に造立されたと考えて大過ないものと思われる。これは、先にみた北陸の様相ともまったく矛盾しない。なお2・3類の出現については、板碑型の古型式の2・3類に触発されたという説明で事足りよう。

以上より敷衍して、阿賀北の石仏Ⅲ類の造立時期も、主体は一五世紀代にあると考えられる。そして、無刻蓮台のⅢ類は、Ⅰ類・Ⅱ類の蓮台を省略した大量生産品であると考えると、Ⅰ・Ⅱ類の主體的時期は、それよりも遡ると想定されよう。

なお、後述するⅠ類・Ⅱ類は、蓮台の様相から比較的型式的流れを追いやすいと考えられるのに対し、Ⅲ類は像容から追究せねばならない。ここでは、十分な準備がないが、とりあえずあたりをつけておきたいと思う。

第203図のⅢ類の数値を再度用いつつ、南栗栖山墳墓群の石仏と比較してみたい。南栗栖山の石材の全体高の平均は40 cm前後、跣座部までを含んだ像高は20 cm強であった（大阪府文化財センター二〇〇〇（五））。対して、阿賀北の石仏Ⅲ類では、地上高平均が40 cm程になる。よって、少なくとも半数近くは、数10 cm程度大きめの石材を用いていることとなる。そして像高は、同程度の20 cm台前半のものが最も多い（40%）が、それより一回り大きい20 cm台後半のものがそれに次いでいる（30%）。したがって、両者の間に相関が認められるとするならば、像高20 cm前半台のものは一五世紀でも新しい時期を中心としたもので、20 cm後半台のものはそれよりもやや古く位置付けられるのではなからうか。いずれ、型式変遷を追って、確かめたいと考えている。

② 石仏Ⅰ類

彫りのはっきりしているものから、第199図4・5のように全体に薄肉彫りで像容が不明瞭となるものへという変遷が想定される。時期的には、第199図2の地藏堂石仏のサ・サク種子の板碑との対比から、それが一四世紀第2四半期に位置付けられることが想定されるのみである。

そこでプロポーシヨンの変遷をはっきりさせるために、第2章で紹介した石仏の計測値を基に、第3章の形態分類で用いた方法で示してみよう（表45）。

まず、彫出しの厚い出湯の2体は、明らかに外のものと異なる。さらに頭長比率も、37・36とⅢ類の平均よりも小顔に仕上げられている。そして、Ⅰ類の平均となる彫出率10前後で頭長比率40前後の中間に位置付けられるのが、上記の地藏堂石仏である。したがって、出湯の2体は鎌倉期に遡る時期の所産と考えられよう。

そして、観音堂石仏（第156図）や大輪寺石仏（第157図3）などの尊像・蓮台が肉厚のものは、南北朝期の内に造立されたものと考えておきたい。なお、全体に面とりをするという技法の採用は、やや時期が下るものの指標となろう。

次いで、彫面を面とりし、薄肉彫りで蓮台も薄い生産効率を重視した石仏（第157図4・5）は、明らかに型式的に退化傾向を示しており、一五世紀まで下るものと思われる。実際、Ⅰ類の多くは、本時期の所産である。

そして柏尾石仏（第3図6）は、双体という特徴からして、一六世紀代に下る可能性があるが、像・蓮台ともかなり厚みを残しており、越後で外に類例をみないため、所屬時期は保留しておきたい。

なお参考例としては、遠方の地藏立像であるが、陽刻蓮台をもつ応永一三（一四〇六）年銘の兵庫県指定の上郡町皆坂石仏（上郡町教委一九九五）をあげておく。

③ 石仏Ⅱa類

板碑様の蓮弁を刻むことから、南北朝（小野田一九六八）とされている。確かに、時期的な両者の相関は、認められる。おそらく最も古手に属するのは、乙宝寺石仏（第158図5）で、蓮台相から南北朝前半期と考えられる。最初期のものは、厚みがあるが、急速に薄くなっていくようである。外

の大部分のものは、一四世紀後半に属すると考えられる。

なお、粟島浦村の石仏（第158図1・2）のみは、色部領の同時期の板碑蓮台の主流型（上下対型）に類似しているが、その外の蓮台は中条以南に多い八方型の系統のもの（水澤一九九七a・一九九七b・二〇〇〇a）であることに注目しないわけにはいかない。また、(3)でみた分布域からみて、新発田市域にも中心があることが判明している。これらを総合すると、八方型の蓮台を刻む石工集団は、注文主の要望に応じて板碑と石仏を造り分けながら、新発田以北の地域をカバーしていたという姿が浮かび上がってくる。対して色部領の石工集団は、板碑を中心とした生産活動を行っていたことになり、領主お抱えの職人集団であった可能性が考えられよう。

④石仏Ⅱb類

第2章で述べたように、蓮弁に膨らみをもたせた鑄物師河内社石仏を祖形とし、間もなく波状の線刻蓮台に形骸化していったものである。特に第159図1は、蓮台以下を粗彫りのままとしており、土中に埋設する石仏であった。しかるに、それ以降のものは、堂内に置くことを前提としたものであり、扱いに変化がみられる。

しかし、Ⅱa類と異なり、時期比定の直接的な手掛かりはほとんどないといわざるをえない。ここでも、表44・46を参照してみよう。最も集中しているのが、像高21～25cmの19基で、その中には頭厚2cm以上のものが14基含まれている。それとほぼ同数なのが、像高20cm以下の18基である。これらは、小型化傾向にあり、彫出しが薄いものであることから、より新しい時期の所産と考えられよう。この薄い彫出しで、頭長比率が40前後というプロポーションは、Ⅰ類の偏平化した時期の様相に類似しており、所属時期が仄かに推察される。したがって、一応一五世紀代に造立の主體的時期を想定しておきたい。

ただし、いったいに小泉莊本庄は、板碑をあまり造立しなかった地域であり、小泉莊加納の色部領と対照的である。それに比して、朝日村内でのⅡb類石仏の集中には、著しいものが認められる。すなわち、周辺の状況という消極的な理由ではあるが、一四世紀後半代に造立が始まっていた可能性は視野に入れておく必要がある。

以上をまとめると、表47のとおりとなる。

(6)阿賀北における中世石仏

石仏の性格については、中条町表町石仏が出土した中条駅の付近が駒込という地名で、それが永仁二（一二九四）年の中条家文書にでてくる「駒籠の酒町」に相当すると思われることから、町場の御堂に安置されていたかと想像されるくらいである。そして蓮台をもつものの多くは、そのような堂内仏であったと考えられる。

そして最も多数を占める無刻蓮台のⅢ類は、当初の原位置が不明であるが、笹神村出湯の中世墓にも置かれていたことや他地域の出土例からみて、石仏も中世においては墓標として用いられることがあったと考えられよう。無論、板碑・五輪塔等の石塔類も同様である。本来的な供養塔の意味合を全く否定するものではないけれども、墓を作る人が多くなればなるほど、石造物を墓上に置くことも普遍化していったものと考えられる。

そこから供養を主目的とした近世石仏への道程は、石仏には字が彫りにくかったという理由があげられよう。まさか仏像の正面に、戒名などを入れる訳にもいかず、さらに光背をなくした丸彫り像では、背面にでも刻む他あるまい。それが外の石造物に比して一早く墓上から下りることとなる原因であろう。ただし、五輪塔などの外の石造物にしたところで、正面に人名を刻むことが憚られた結果、近世には例外を除いて廃れてしまったのである。近世は、墓石を立てたことに象徴されるように、個人が主役となっていた時代である。それは、量産化（商品化）されるという石造物の在り方

からすれば、関東の板碑にみられるように（千々和一九七三）、すでに一五世紀代に胎動が認められるといえよう。そして、一六世紀代にはかなり浸透していたと想像されるが、越後においては考古学的にあまり明瞭ではない（水澤二〇〇一b）。阿賀北の石仏についても、以上のように、主に一五世紀以降に造立のピークを迎えたと考えることができ、続く一六世紀代の石造物の様相は、はっきりしない。

なお今回は、特定の地域内での細かい分布状況についてふれることができなかった。今後、一定の地域を取り上げ、板碑・石仏という中世阿賀北の二大石造物の在り方を追究していきたいと考えている。

註

（一）出湯系という呼称に対しては、「特定の名称を付するほど特異なものとは思われず、返って混雑を招くおそれがある」（坪井・楯 1971）という批判がある。

（二）小野田は、本石仏を出湯系とされている（小野田一九六八）が、像容や陽刻蓮台の存在から明らかにそれ以外の大多数の小型石仏とは区別されるべきである。

（三）本来「所在地一覧表」を添付すべきであろうが、多くの紙幅を費やすことになるため、『中世北陸の石塔・石仏』（二〇〇一）所収の一覧表を参照いただきたい。なお、板碑・石仏の詳細なデータについては、国立歴史民俗博物館の「板碑データベース」（平成七・八年度提出済）上で公開される予定である。

（四）「南栗栖山墳墓群」では、石仏の像容表現として、「1類―腕より上半身までを表現」として、2類の跌座を刻むものと区別している。しかし、当地域の石仏Ⅲ類は、跌座を完全に彫り出さないものの、その脇を削ることによって、跌座を表現している。したがって、南栗栖山墳墓群の石仏2類の像高の数値を参考とした。

2 頸城の中世石仏

以下では、頸城の石仏四種について紹介する。

(1) 関山系石仏 (第162・163図)

59は、妙高村仲町の高水家前に祭られている妙高最大の安山岩製石仏である。左手を欠くが、地上高133 cm×幅110 cm以上を測る。顔厚65 cm、体軀厚85 cmと非常にいい感じを受ける。なお、最大の関山系石仏は、新井市堀之内菓成寺に所在する像高240 cmの石仏である。また関山には、佛足石が存在し、注目される場所である。

60は、上越市大町西光寺境内に所在する安山岩製品である。87 cm×71 cmを測る。市内には、その外、南本町、荒町、向橋、下正善寺に所在する。

61は、新井市小出雲の経塚山墓地に所在する砂岩製品である。40 cm×30 cmと小型である。

62は、新井市志の荒川神社跡に所在する安山岩製品である。石祠内に二体が納められており、向かって右側は41 cm×31 cmで合掌し、向かって左側は41 cm×26 cmで印を結ぶ。石祠は、82 cm×97 cmで、軒幅93 cmを測る。側石は、高さ46 cmで厚さ12 cmで、向かって右側に「諏訪八幡宮」、左側に「永享八年七月十七日」と彫られている。ただしこの側石は、外の部材とやや石質が異なっている。また永享八年は一四三六年であるが、石仏との関係は明瞭とは言い難い。

本石仏群については、古くから平野団三により紹介されてきた(平野一九六一・一九六六・一九七九・一九八六)。平野は、関山と法定寺の石仏群に関する見解を最終的には同一線上に位置付けられており、それは型式的にも肯定される。ただし年代的には、関山石仏群を平安末、法定寺石仏群を鎌倉以降とし、両者を区別している。確かに後者は、小型化傾向にあり、時期が下ると思われるものも多いが、それは関山石仏群においても認められる現象である。したがって、平安末に造佛が始まり、五輪塔造立以前の鎌倉・南北朝前期に盛行した石仏群と考えておきたい。なお尊名は、多くが阿弥陀如来と思われるが、定かではない。また本石仏群の中には、背面に孔を開けたものが少数存在し、平野は経文等の納入孔と考えているが、それは形状からいって難しく、木造の光背を固定するための膺孔ではないかと思われる。

次いで本石仏群の分布は、関山・法定寺を中心に、頸城平野の南・東山沿いに点在しており、そこに初期の大型五輪塔の分布が重なってくることは、偶然ではあるまい。なお、関山石仏群の北限は、柏崎市内の2体の石仏であるが、北蒲原郡笹神村の石仏にもそれに連なる可能性のあるものが存在する。数量は、関山石仏群31体、法定寺石仏群38体をはじめとして、優に100体を越える。これは、中世前半期の石仏としては非常に多数であり、全国的にも注目されるところである。

(2) 板状石仏 (第164図～第165図)

63～66は、発掘調査で出土したものである。

63は、上越市横曽根の横曽根 遺跡のSK65より出土したもので、高さ73 cm×最大幅34.5 cm、最大厚15 cmを測る安山岩製品である。立像が浮き彫りされており、坊主頭で合掌し、脚部が表現されている。容貌も明瞭である。報告書では、時宗系の像容ではないかとされている(上越市一九九六)。板状石仏の中で最大の法量を有し、最も写実的であることから、本類のプロトタイプに相当するものと考えたい。なお本類は、基本的に安山岩製であるので、特に断らない限りは石材の記述を省略する。

64～66は、上越市東雲町至徳寺遺跡から出土したものである。

64は、SE281から出土した五輪塔火輪である。便宜的にここで紹介する。14 cm×23 cmで、正面の軒厚が6 cmと厚いⅡ型である。図化していないが、唐津が相伴している。

65・66は、SE515から出土したものである。65は、頭部がデフォルメされ、合掌部及び脚部が省略される段階の製品である。石材も高さ35.5×幅21 cmの小型であり、66の口径10 cmの美濃大窯6段階前半期（月山窯）の丸皿が相伴している。

67～75は、一尊石仏である。

67は、三和村川浦墓地に所在している6体の内の1体である。55 cm×31.5 cmを測り、頭部及び合掌部が突出する。耳が刻まっているが、脚部は3条の沈線で表現されるのみである。

68は、上越市村松新田諏訪社に所在するもので、67と同じの製品である。51 cm×28 cmを測る。69は、上越市上宮川八社神社に所在する。55 cm×25 cmを測る。錫杖を右手にもっており、左手は胸の上に置いている。脚部は、3条の沈線で表現されている。地藏菩薩像と考えられる。

70・71は、安塚町本郷神明社に所在する。二体共に紀年銘を有している。70は、高さ36 cm×幅23.5 cmで、最大厚12 cmを測る。頭部に護讃地藏を意味するイー種子が刻まれ、左袖に「道林」、右袖に「逆修」銘が彫られている。裏面に、「大永六丙戌年六月吉日」銘が認められている。71は、38 cm×20 cmで、最大厚11 cmを測る。頭部に（不休息）地藏を意味する力種子が刻まれ、左袖に「□光」、右袖に「逆修」銘が彫られている。裏面に、「大永六丙戌年六月吉日」銘が認められている。以上の銘文から、おそらく夫婦の「道林」と「□光」が生前に自分達の冥福を祈念し（逆修）、お互いに大永六年（一五二六）六月吉日を期して造立した石仏であることが知れる。本資料は、唯一の基準資料として非常に重要である。

72は、上越市春日山十二社に多くの五輪塔や石仏とともに集められているものの一体である。46.5 cm×26.5 cmを測る。合掌脇が大きく彫り込まれ、袖が腕状に形骸化したものである。脚は、沈線3条で表現されている。なお図化していないが、頭部上方に「山下」銘が刻まれている。

73・75は、上越市黒井大慈院に所在しているものである。

73は、35 cm×25.5 cmを測るもので、72と同じの製品である。

75は、39 cm×25 cmを測る。頭部と合掌部のみからなるもので、ほとんど石仏の体をなしていない。

74は、上越市藤野新田水神宮に所在するものである。39 cm以上×28 cmを測る。合掌部が肥大化し、腕状の袖は本来の意味を喪失し、方形を呈している。

76～79は、一石二尊石仏である。

76は、上越市東中島諏訪社に所在している。43 cm×27 cmを測る。脚部の表現がなく、全体に造作が甘い。

77は、上越市五智十念寺に所在している。33 cm×28 cmを測る。外とはややタイプが異なる。なお、頂部に切れ目が入られ、二つに分けられている。

78は、上越市黒井大慈院に所在している。向かって右側に石仏形、左側に五輪塔が配されている。高さ51 cm以上×幅31 cmを測る。

79は、上越市安江神明社に所在している。合掌袖付き沈線脚タイプであるが、頭部がえぼし状に刻まれている。修験者を表現したものであろうか。

55 cm×31.5 cmを測る。

80は、上越市飯田日月社に所在する一石二尊石仏である。59 cm×41 cmを測る。合掌袖付き沈線脚タイプである。脇持が乳房にみえることから、乳観音とよばれている。本タイプは、三和村中野にもう一体類例があるのみである。油田より出土したという。

81 は、上越市村松新田諏訪社に所在する。袴を付けた神官様の像が彫られている。全体に彫り込みは浅く、胸には合掌部が形骸化したような彫り込みが認められる。頭部脇に方形の段が彫られ、上方に小さな刳込みが二つ刻まれている。あるいは、笈を背負った行者を表現しているのであろうか。なお、頂部をやや尖らせている。60 cm×29 cmを測る。

本石仏群は、紀年銘資料にみられるように戦国期の所産である。63 の横曽根Ⅱ遺跡出土品を祖形とし、以後急速に写実性が薄れていく。すなわち頭部がデホルメされ、合掌部分が頭部の直下に付され、脚部は3条の沈線で表現されるようになる。また袖及び合掌部分を表現するために、合掌部の脇が方形に彫られるものが多いが、やがてその彫り込みが省略されるものや、脇にそれるもの、外形に沿って腕状に大きく彫られるものなどが現れ、当初の在り方とは趣が異なるものになっていく。また1割にも満たない少数例であるが、二尊や三尊、五輪塔と組み合わせたもの、修験像や神官像などが認められる。数量は、上越市内で141体が所在している。頸城全体の数量は、調査が不十分で明瞭ではないが、200体を下ることはないものと思われる。この数量は、五輪塔に次ぐものであり、五輪塔造立が衰えた一六世紀代の石造物の主体をなすものとして位置付けられよう。

(c) 一石六尊石仏 (第166図)

82 は、上越市東高津に所在する。上記までの石仏とは趣が異なり、石材は黒っぽい火山岩で、白い斑点が入る。高さ62.5 cm×最大幅50 cmを測る。すべて袈裟を付け、錫杖をもっている地藏菩薩で、上下に三体ずつ配し、六地藏としている。戦国後半期の所産となろう。

(4) 地藏菩薩石仏 (第166図)

83 は、新井市広島五社神社に所在する。通有の板状のものとは異なった安山岩を用いている。光背を有し、蓮台上に立ち、錫杖を持っている。像様・衲衣も明瞭で、高さ103 cm×最大幅57 cmで、像高64 cmを測る。頭部上方に「地藏」、その右側に「弘治三年」、左側に「丁巳霜月辰日」、左袖の脇に「廣島村」の銘があることから、一五五七年十一月の造立であることがわかる。最も近世的な石仏であり、越前一乗谷の笏谷石製品を彷彿とさせる製品である。

第三節 五輪塔・宝篋印塔等

1 頸城の五輪塔分布と年代的位置付け

(1) 上越市内の五輪塔分布

上越市内に所在する石塔の中で最も多い五輪塔の分布状況を提示し、その後若干の考察を行うこととする。
まず地域区分として、4つに市域を区分する(第213図)。

① 関川左岸で、正善寺川以北(正善寺川流域を含む)

② 関川左岸で、正善寺川以南

③ 関川右岸

④ 桑取、谷浜地区

4 地域の数量は、表48のとおりである。

全体でみると、三三一点で約一一五〇基以上の組合せ塔の造立が認められたが、地輪が最も少ない。これは方形であるために、石塔の一部との認識がなされなかったことや、土台石に転用されることがあったためと考えられる。また一(二)石五輪塔は、三七基にすぎず、その普及率はすこぶる低調である。なお、併せて石仏の数量を載せておいたが、これは9割ほどが戦国期の一六世紀の所産と考えられる板状の地藏尊であり、一石五輪塔と空風輪Ⅱ型(空輪と風輪の間が長く造られ、相輪状の形態を呈するもの)の造立時期を考えるための参考とするためにあげたものである。

なお農村部では、屋敷墓として五輪塔を有している旧家が数々あり、一部については調査を行ったが、多くの見落としがあるものと思われる、実数はやや増加する可能性が高い。

地区別にみえていくと、④の谷を除く地区は、③がやや多いくらいでほぼ同数となる。ただし、①の所在地数は、②・③の1/3以下で、五智十念寺など数箇所に集積されていることが大きい。

各地点で、約二〇基以上が認められた所在地をまとめたのが、表49である。

①地区では、春日山十二社、西本町泉蔵院、五智国分寺・十念寺があげられる。国分寺では、大型のものがめだつ。十念寺は、市域で最も多数の集積が認められ、全体の一割以上に達している。大型の製品や一石五輪塔、大型宝篋印塔等、各種板碑などが集中しており、一大センターの感を呈する。

②地区は各地に分散しており、3尺以下の造塔が中心である。なお、高田寺町には一七世紀の大名墓である有銘宝篋印塔・五輪塔が数多く認められ注目される。

③地区も②地区同様各地に分散しているが、圃場整備に伴って出土したという下池部の五輪塔群が注目される。発掘調査に伴わなかったことが残念であるが、長年地中にあつたことから遺存状況も良好で、中世寺院の存在も想定されるところである。また本地区は、石材産地である三和村に接することもある。黄白く黄褐色の太光寺石(凝灰岩)の製品も多い。ちなみに、最も太光寺石製の五輪塔が集中しているのは、浦川原村法定寺ではないかと思われる。関山系石仏群の存在と併せて、頸城の石造文化に欠かせない存在である。

④地区は、谷間を中心とした一つの文化圏で、小型の製品が多い。なお、茶屋ヶ原の五輪塔群は、土地改良に伴って出土したものであり、詳細は不明であるが、地形的にみて境界に営まれた墓塔群ではないかと思われる。

なお、今回は市域を4つに分けてみたが、①の直江津・春日山地区と④の桑取・谷浜地区はよいとして、②は南方の新井・妙高方面に分布が延びており、③も東方の三和村・浦川原村や南方の板倉町などに多くの分布が認められることから、それらを視野に入れた上で市域の分布状況を考えねばならない。特に五尺以上の大型五輪塔は、高田平野の南く東縁辺部に分布が認められることから、五輪塔の受容がそちらから始まった可能性が高く、注目される。

(2)五輪塔研究の視点

五輪塔の研究については、川勝政太郎氏の研究に代表される石造美術の蓄積(川勝一九五七)や、石田茂作氏の仏教美術・考古等の観点(石田一九六九)より大まかな流れがとらえられており、五輪塔の全国的様相が示されている文献としては、川勝政太郎『日本石造美術辞典』(一九八二)や元興寺文化財研究所編『五輪塔の研究』(一九九三・一九九五)などがある。

なお、北東日本海型板碑がつくられていた頃、若狭の日引石塔が日本海を東西に広がることも、注目されることである(大石一九九九、二〇〇一、古川二〇〇〇)。ただし板碑が地域地域の石材を用いるものが多いのに対し、日引石塔が海運を用いて運ばれていることに決定的な違いがある。人の動きと物の動きと換言できようか。この点、各地の五輪塔・宝篋印塔をみても、地元の石材を用いているものが多い中で日引石塔の動きは、それ自身がもつ畿内ブランドとしての商品価値を有していた(古川二〇〇〇)と考えざるを得ない。このように広範に物が移動する石造物は、外に例をみず、その前提として日本海流通の存在があげられる。

しかし、組合式五輪塔の紀年銘資料が一六世紀後半の二基しか認められない本地域の現状では、形態的な検討から時期を決めていく必要がある。そのためには、正確な実測図が必要であり、写真や模式図での検討には限界がある(狭川二〇〇四)。

そこでここでは、原則的に磯部淳一が群馬県の紀年銘五輪塔に対して行った手法(磯部一九九二、以下磯部の研究視角は本文献から引用するため、併読いただきたい)を参考にしながら頸城野の五輪塔を読み解いていきたい。(一)

なお、本稿で用いる図は、『市史叢書8』所載の五輪塔図を主体とし、新しい時期のものについては『旧得法寺』(新潟県教育委員会一九九八)出土資料を用いる(二)。

また、群馬以外に近接する北陸や長野などの様相については、必要に応じて参照することとする。

(3)磯部淳一「群馬県における五輪塔の編年」(一九九二)

磯部の研究視角は、一言でいえば、紀年銘資料を計測することによって、数値に裏付けられた形態的変遷を明らかにしていくという点にある(三)。ただし完形塔を元にするとはいえども、組み合わせに疑義があるものも定量含まれているものと思われるが、それでもここで析出された傾向は、かなりの程度時代相を捉えることに成功しているように思われる。もちろん地域性は考慮せねばならないが、それらの特徴は他地域の五輪塔群にもかなりの程度当てはまるように思われるため、以下各部位ごとに要点を列記しておく。

地輪

高／幅は、鎌倉初期以前は〇・8以下、鎌倉後期く南北朝期は〇・7く1・〇で前代より高くなるが個々のばらつきが激しい。平均値は〇・85程度。応永期以降は〇・8前後で一定。

水輪

高／幅の平均が〇・七で、一三五〇年代までは〇・七～〇・九と球形に近いが、南北朝期にはばらつきが大きい。一三七〇～一四六〇年代までは〇・七以下とやや潰れた形となるが、これは前代に比して上下のカットが大きくなるためである。さらに一四八〇年代以降になると高さが再び増加し、〇・七前後となる。

火輪

一三八〇年代までは、軒口が垂直に近いが、以後外開きになっていく。軒上端部の反りがだんだんと急になっていき、一五〇〇年以降では急激な反り上がりとなる。軒下端部は、一四〇〇年以降反りがなくなる。

空風輪

最も地域差が生じる部位で、最大幅／高は古いものが1／1・4以下であり、一三九〇年以降1／1・5以上のものが現れ、一五五〇年以降にはほとんどが1／1・6以上になる。

磯部は、以上のように個々の部位を検討した後、一三九〇年代及び一五〇〇年頃に画期をみいだしている。そして地輪以外の各輪について群馬県内の地域差を指摘している。

(4)他地域との比較

ここでは、磯部の研究成果が他地域の様相とシンクロするかどうかを検討する。ここでは、『五輪塔の研究』東日本・近畿編（元興寺文化財研究所編一九九三）所載の紀年銘塔の内、一覽表に細かな数値が記されているものを抽出し、それに磯部が集成した群馬県内の例を合せ、さらに若干例を加えて年代順に並べたものを示す（表 50・51）。

地輪

鎌倉期には高／幅比が〇・七以下のものが多数を占めているが、南北朝期以降よりほとんどがそれを上回るようになる。〇・八を越えるものは、一三世紀末頃より現れ、南北朝期に比率を増し、一四世紀末より東国では主体をなすようになる。ただし、〇・九を越えるものは、一六世紀中葉の二基を除けば、南北朝期に限られる。なお、北陸では、一五世紀末より再び〇・七を割り込む偏平なものが現れる（表 52）が、これは原料の枯渇を示すものである（四）。

水輪

高／幅比が〇・七五を越える球胴のものは、全時期を通じて存在するが、一四世紀末頃より〇・七以下の偏平なものが多数を占めるようになり、一五世紀末頃より再度高さを増すものと偏平傾向が進むものに分かれる。また、〇・八を越えるものは、鎌倉後期～南北朝前期（一三六七）にやや多く、火輪の比高が増す時期と重なる。

越後では最も古いと思われる一群の中に、方形材の肩を落とすことによって丸みをもたせた側面が偏平ぎみとなるタイプがある。

火輪

軒反や屋たるみについては、群馬の傾向が当てはまるが、時期的な変化が認められないとされた高幅比についても、〇・六五を越えるものが、鎌倉後期から南北朝初期（一三四二）にかけてやや多く、一六世紀代まで散見される。特に〇・七を越える高いものは、一四世紀から一五世紀に集中している。

また、群馬では明瞭でないが、越後では一六世紀に軒が厚くなっていく（Ⅱ類・幅の三割以上の厚さをもつ軒厚タイプ。例えば二一cm幅で軒中央厚

が7cm以上を測るもの)。この流れは、越前の笏谷石製の堀秀治塔(13)でも認められるので、畿内からの流れの延長線上にあるものと考えられる。

空風輪

最も置き換わりやすいので注意が必要であるが、群馬での傾向は他地域では当てはまらない。全般的な傾向としては、空輪高が半分程度の低いものは一四世紀以前の古いものが多く、その後は風輪が高さを増し、四対三程度となるが、時期が下るに従い、側面が丸みを失い直線的となり、空輪の頂部が突出するようになる。具体的には、一五世紀以降、空輪に先立ち風輪側面が丸みを失い、一五五〇年以降空輪頂部が突出するようになる。

(5) 頸城野の全体的傾向

ここでは、頸城野の各五輪塔部材について、前章で導き出した傾向からみていきたい。なおデータは、現地調査時の計測値をパソコンに入力し、それをグラフ化したものを示す(第168～170図(五))。

地輪は、高／幅〇・九を越えるものが定量を占めており、水輪と同様が認められる。また、〇・七を切る偏平なものも相当数存在しており、一六世紀代のもも定量存在する。ただしその中には、幅五〇cm近く的大型品が数点含まれており、鎌倉時代の所産である可能性もあろう(第168図)。

水輪は、高／幅〇・八を越えるものが定量存在することから、鎌倉後期頃より造塔が始まっているものと思測される(第169図)

火輪は、軒の厚いⅡ類は一割に満たず、一六世紀後半には造塔活動は下火となっていたものと思われる。また、高／幅〇・七を越えるものも多数認められ、一四～一五世紀代にも多数が造られたものと考えられる(表5)。なお、すでに京田良志氏は、このような丈の高い火輪が北陸の古石塔(一四世紀代)にままた認められると指摘している(京田一九七六)。

空風輪は、高さ一七～二四cmが多数を占めており(第170図)、空風輪Ⅱ類(六)は、丈の長い分二四～三〇cmが主体となる(第173図)。その多くは三尺程度の小型塔に伴うものと考えられる。すなわち大多数を小型塔が占める一五～一六世紀代の所産と考えられる。

以上のことから、頸城野における五輪塔造立の始まりは、鎌倉後期に求められ、南北朝期に確立し、一五～一六世紀前半にかけて造立階層の裾野が広がり、一六世紀後半には下火となっていたと考えることができよう。

(6) 頸城野における無紀年銘五輪塔の検討

ここでは、以上のとおり抽出してきた結果をもとに無紀年銘塔について、検討する。

1 上越市史叢書8所載五輪塔(表53)

空風輪は、風輪3・21が高さを増していることから、当初の組合せではなく、一五世紀に下るものと思われる。その他では、風輪が偏平な1・2・25が古く、空輪下半を挟むように削る19・22・23などがそれに後続するものと思われる。また同じえぐるタイプでも、風輪側面が直線的な22は最も新しく位置付けられよう。

火輪は、ほとんどが高／幅〇・七五を越えており、一四から一五世紀に収まるものと考えられる。軒口は、多くが直に近いものであるが、6はやや開きぎみで種字も彫りの弱いものである。屋たるみは、8・11・22がやや強く、中でも11は軒が厚くなってきた。22は、軒厚は一定ながら端の反りが大きい。10や23は、屋たるみがほとんどなく、反りもわずかであり、特異な存在である。

水輪は、ほとんど高／幅〇・七～〇・七六に収まる。比較的偏平な7・11・15・16・22は、外に比して新しい時期の所産となろう。なお23は、

○・六八とやや偏平であるが、側面が直線的となる古様を呈するものである。

地輪は、すべて高／幅○・八五を越えており、○・九を越えるものもⅡ点中8点を数えることから、多くは一四世紀代の所産と考えられる。そして、21・22・23・25は、台形を呈し、該期の南頸城の特徴である可能性がある。この特徴は、南北朝期の下野の五輪塔様相（松原一九九六）及び越中での様相（京田一九七六、（七））と共通しており、注目される。

以上のことから、23板倉町米増恵信尼塔、25妙高村仲町塔、18頸城村島田八幡社塔（八）、1上越市宮野尾塔などが一四世紀前半前後、20三和村末野塔、三和村中野社塔、吉川町泉塔などがそれに次ぎ、8上越市五智国分寺塔、22新井市吉木勝得寺塔、11の上越市指定五智十念寺塔などが一四世紀末～一五世紀初頭頃となり、12は軒が厚くなり軒の反りが異なる（九）ことから、最も新しい様相を呈する（表52（九））。

2 旧得法寺跡出土五輪塔（新潟県教委一九九八）

ここでは、一五世紀以降の大多数を占める小型量産塔について、図化されている旧得法寺出土遺物を用いて、組合わせを考えていくこととする。

まず、石塔以外の出土遺物からみて、一四世紀代に造塔が開始され、一六世紀代の遺物が認められないが、文献からみて天正六年（一五七八）の観音堂廃絶時期までの石塔が存在していたものと考えられる（一〇）。

報告書の分類は、空風輪・火輪と水輪・地輪の分類基準が異なるが、これは形態変化の差異がでやすい部位とそうではない部位があるため、詮方ないことであり、肯首される。

地輪五八点は、高／幅比○・八以上のものが二割、○・七以下の偏平なものが三割四分となっており、大きさは一尺以下が九割五分を占める。

水輪六二点は、高／幅比○・七以下の偏平なものが、八割を越えており、約五割に種字が彫られている。また、幅一尺以下のものが九割を越えており、中でも八寸～九寸のものが七割近くと主体を占めている。

したがって、水輪・地輪の多くは、一五～一六世紀に小型化、偏平化した時期の所産と考えられる。

火輪一二点は、一七類に細分されているが、軒厚の高さに占める割合で分類するとすっきりするのではないかと思われる。

ホゾ穴のないⅧ類及びⅠ・Ⅱ類の一部が一四世紀代～一五世紀の初頭、Ⅰ・Ⅱ類の多くが一五世紀前半、Ⅲ類の多くは一五世紀後半、Ⅲ類の一部及びⅣ～Ⅶ類が一六世紀代の所産となろうか。一五世紀代三割六分、一六世紀代五割強となろうか。

なお、旧得法寺跡では、他地域に比して軒の厚いⅡ類の比率が高く、全体からみると、五輪塔造立が遅くまで残った地域ということがいえよう。

空風輪八四点は、一類に細分されているが、ホゾの有無と風輪の低いⅠ・Ⅱ類はともかく、Ⅲ類以下については特に分類と物との対応関係に再考の余地がありそうである。ここでは一応分類にしたがって形式的変化を追って、時期をあてはめると、Ⅰ・Ⅱ類は一四世紀代～一五世紀初頭、Ⅲ～Ⅰ・2が一五世紀代、Ⅲ～Ⅳ・4・5・3は一五世紀末～一六世紀初頭、Ⅳ～2が一六世紀前半、Ⅳ～1・4・3が一六世紀中葉～後半と考えられよう。数量的には、一五世紀代四割強、一六世紀代五割弱となろうか。

なお、宝塔相輪とされている空風輪Ⅱ類も52点認められ、ホゾ穴の大きく深い軒の厚い火輪に乗る形で一六世紀代を中心に造立されたものと思われる。

上の結果を基に、試しみに組み合わせたのが、第175図である。

以上、頸城野の無銘五輪塔について、数値化を通して検討してきた。小稿がいささかなりとも、今後の研究に寄与するところがあれば、史市に携わったものとして望外の幸いである。

(一)磯部の研究については、「石塔婆としての形態をもつ五輪塔の各部分を計測し、その平均値を求めてみても明確なる形式は示せない。数量化も一般的な傾向は指摘できるが、各石塔婆についての断定的視準とはならないだろう」という齋木勝の見解(一九九六)があるが、本地域のような紀年銘資料がない場合には、数量化によって一般的な傾向を見出すことがまず必要であると考えられるものである。

(二)近年刊行された『三和村史資料編』(秦ほか二〇〇二)では、「伝阿弥陀寺遺跡」に所在する四〇〇点余の五輪塔部位について、詳細なデータを付して資料化している。このような地域史が増えることを望んで止まない。

(三)惜しむらくは、図が比較検討に耐えられない略図である点である。

(四)三浦純夫は、石川県内の紀年銘五輪塔地輪について、「室町前期から中期にかけて縦長の傾向があらわれ、同後半には横長化・小型化する」(三浦一九九〇)としたが、縦長傾向は越中及び越後の様相からみて、一四世紀代から始まっているものと考えられよう。

(五)当初、関川流域で主体をなす安山岩製品と頸城平野東縁に分布する凝灰岩(大光寺石・米山石)製品を区別する必要を感じていたが、形態を検討したところ、それほど差異を認められないことが判明した上に、後者の数量は全体の二割に満たないことから、特に必要があるとき以外は石材についての記述は省略した。

(六)空風輪Ⅱ類については、宝塔の相輪とする考え方もある(新潟県一九九八など)。しかし、両者は思想的にも造形的にも重複するのであり(小林二〇〇二)、火輪以下の形態にほとんど変化がないことから、筆者としては五輪塔の亜種として扱うのが妥当と考えるものである。

(七)京田は特に指摘していないが、京田一九七六所載の小矢部市金屋本江出土品(一三一頁)などに認められる。

(八)ただ本塔は、外と異なり、種子の彫りが浅く、さらに時期が遡る可能性がある(古川・村上二〇〇四)

(九)埼玉県では、上側の軒反りが下側より強く、軒口が外へ開き、屋たるみが強い形のもので、一四世紀後半代に出現しているとのことである(栗岡二〇〇一)が、軒が厚くなる方向性は認められないようである。

(一〇)遺物には、一七世紀代のものが認められるが、これは寛永九年(一六七二)以降に建てられた得法寺に伴うものであり、石塔類とは一応切り離して考えておく。

2 頸城の五輪塔(第176図～第184図)

調査は、平成九年度から平成一一年度にかけて上越市内を中心に700箇所以上の分布調査を実施し、平成一二年度・平成一三年度には、その中から重要と考えたものを選択実測した。

1は、上越市宮尾に所在しており、言い伝えによれば謙信の母、虎御前の墓塔とされている。これは、古い五輪塔にまみられる曾我物語の虎御前の墓塔とする伝承が、後世に混同されたものと考えられる。単独で一組が建てられている。

法量は、空風輪が高さ29㎝×幅24㎝(以下同順とする)、火輪43×59㎝、水輪38×50.5㎝、地輪46×47㎝を測る、総高156㎝の凝灰岩製の五尺二寸塔である。空風輪及び火輪の一部が欠損しており、若干の補修がなされているが、ほぼ原形を保っている。火輪以下にラン・バン・アンと五輪種子の西方菩提門が深い葉研彫で刻まれている。風化・破損のため明瞭ではないが、空風輪にも本来はキャン・カンが刻まれていたと考えられる。

形態的にみると、火輪は長く延び、下辺はややいびつで、左右が非対称となる。縁は法量に比して薄く、軒の反りは緩やかである。水輪は、寸胴ぎ

みで古様を呈する。地輪は、ほぼ正方形となる。

2は、上越市四辻町薬師堂に所在する。集積されたものの中から、大光寺石（凝灰岩）製の大型五輪塔の空風輪・火輪を示した。両者は、月輪の有無からみて別塔と思われるが、法量的には釣り合っている。空風輪は、高さ33cm×幅28cmで、向かって左半の一部が欠失しているが、月輪をもつ（キャン）・カン種子が刻まれている。火輪は、40.5cm×49cmで、ラン種子が刻まれている。軒がやや反るが、底辺はほとんど反りがない。

3は、上越市下池部に所在するもので、圍場整備に伴って大量に出土したものの一つである。現在集積されているものの内訳は、五輪塔空風輪2点・火輪4点・水輪5点・地輪3点、宝篋印塔相輪1点・笠2点・基礎1点等と多数に上る。空風輪は、通常の形状のもの外に、12のような相輪状のタイプがあり、それを空風輪Ⅱ型としておく。このタイプは、おそらく一五世紀後半以降に出現し、上越市内の空風輪全体数の中で1/4を占めるものである。ここでは、Ⅱ型が10点であった。また、大光寺石（凝灰岩）製品は、空風輪8点・火輪6点・水輪2点・地輪4点を数えた。

3の3点は、西方菩提門が刻まれている大光寺石製品を図化したものであるが、少なくとも水輪は別個体である。空風輪は高さ約32cm×幅21cmで、風輪の占める比率が高いタイプである。火輪は37cm×42cmで、やや底辺が反る。水輪は33cm×46cmで、月輪をもつバンを刻んでいる。寸胴ぎみの古いタイプである。

4～8は、上越市五智国分寺に所在する五輪塔である。すべて安山岩製である。4・5は同一個体で、4の火輪は高さ40.5×幅45、5の地輪は42.5cm×46.5cmを測る。それぞれ月輪が付くラ・アが刻まれている。5尺塔となると思われる。6は、36cm×46cmの火輪で、やや彫りの弱いランが刻まれている。7は、36.5cm×54cmの水輪で、月輪付きのバンが刻まれている。6尺塔となるうか。8は、ほぼ組み合わせのよい塔で、火輪38cm×44cm、水輪28cm×39cm、地輪36cm×38cmを測る。全高4尺2寸程度となるうか。各輪に西方菩提門のラン・バン・アンが刻まれている。

9は、上越市黒井大慈院に所在する大光寺石製の大型水輪である。高さ45cm×幅60cmを測り、七尺塔になるかと思われる。中世最大級となる。四面にバの四転が刻まれている。図は、バーを正面に図化したもので、向かって左がバン、右がバ、裏側がバーンクとなる。

10～12は、上越市五智十念寺に所在する五輪塔である。10は、最大の火輪で、安山岩製である。高さ49cm×幅54cmを測り、6尺塔となると思われる。ラン種子を刻み、軒の反りはわずかである。11は、市指定のもので、組になるものと考えられる。安山岩製で、面一杯にラ・バ・アを刻んでいる。火輪は31cm×41cm、水輪26.5cm×38cm、地輪31.5cm×37cmを測り、4尺塔になるものと思われる。12は、空風輪Ⅱ類である。高さは、突起部分を除き33cmで、最大幅15.5cmを測る。上部と下部の間がさらに長いものや、蓮弁をあしらうものがある。本類を通常の空風輪の代わりに置くものを宝塔とみる意見もあるが、本地域は宝塔の伝統がなく、火輪以下はほとんどが五輪塔の各部位と同一形態であることから、五輪塔に宝篋印塔の相輪の要素が融合したものと考え、五輪塔の亜種と位置付けておきたい。

なお十念寺には、頸城全域で最も数多く石造物が集められている。その内訳は、五輪塔空風輪73点・空風輪Ⅱ類37点・火輪126点・水輪149点・地輪36点、一石五輪塔3基、宝篋印塔相輪2点・笠3点・基礎4点、板碑4基、石仏9体であり、多種多彩である。

13は、上越市春日山林泉寺に所在する堀秀政塔である。堀家の越後入封以前の領地である越前笏谷石製品である。空風輪は高さ44cm×幅38cmで、空輪がややつぶれる在地にはない形状である。火輪は33cm×57cmで、軒下に段を持つ。軒が非常に厚く造られており、当該期の特徴を示している。水輪は38cm×57cmで、中央に2段の方形枠を彫り、文字を刻んでいる。地輪は41cm×54cmで、中央に越前型の蓮弁を伴う月輪を設け、その中に「道哲」と刻む。下方には蓮座を配し、向かって右に「天正十八年」、左に「五月廿七日」と刻んでいる。天正一八年は、一五九〇年であり、堀家来越前の造立であることから、移封時に旧領から持ってこられたものと考えられる。また、14cm×84cmの複弁を配する基壇を置いており、それ以前の越後にはない在り方である。基壇を含めて170cm、本体5尺2寸の五輪塔である。

14・15は、柿崎町平澤光宗寺脇の山際より出土した20組以上の五輪塔の一部である。52～54の板碑もその折りに一緒に出土したものである。すべて凝灰岩製である。また、珠洲IV期の播鉢やロクロ壺・甕なども出土しており、五輪塔下の骨蔵器の存在が伺われる。14は、高さ30㎝×幅34㎝の火輪である。15は、27㎝×38㎝の水輪で、バンが彫られている。

16は、宗光寺境内に所在する安山岩製の水輪である。34㎝×48㎝を測り、バが刻まれている。寸胴タイプで、上面を3㎝ほど凹ませている。五尺塔となる。また、墓地にも10個体以上の五輪塔が所在している。

なお図化できなかったが、柿崎町内には、五～六尺塔となる凝灰岩製の五輪塔が米山寺の旧寺院跡（集会所裏手）に所在している。

17は、浦川原村法定寺境内で最大の法量をもつ火輪である。大光寺石製で、高さ58㎝×幅66㎝を測る。7尺塔の火輪となる。なお、寺へ行く途中の道路脇に、沖見地蔵といわれる関山系石仏が祭られているが、堂内には法定寺最大の地輪（52㎝×53㎝）が台石として用いられている。

18は、頸城村島田八幡社に安置されている凝灰岩製の五輪塔である。船津から出土したもので、空風輪が失われているが一具のものと考えられる。

火輪は高さ57.5㎝×幅64㎝、水輪は45㎝×53㎝、地輪は52.5㎝×58㎝を測り、7尺塔と考えられる。水輪は寸胴タイプで、バが浅く刻まれ、四面に刻まれているが堂内のため字形を確かめることができなかった。なお現状は、天地逆に積まれており、地輪も90°転じている。

19は、吉川町泉に所在する凝灰岩製の五輪塔で、地輪を欠く。空風輪は高さ約39㎝×幅31㎝、火輪は51㎝×50㎝、水輪は40㎝×46㎝を測る。6尺塔となる。水輪は寸胴ぎみで、三面に阿弥陀三尊（キリク・サ・サク）が雄渾に刻まれている。頸城で阿弥陀三尊を刻む唯一の例と思われる。

なお、本水輪下に水輪様の石が地輪代わりに置かれており、風化が著しく、下方が不明であることから水輪とは断定できないが、径70㎝を測る。

20は、三和村末野公会堂裏手に所在する大光寺石製品である。末野城廃寺から移築されたものという。空風輪高さ29.5㎝×20㎝、火輪41㎝×48㎝、水輪33㎝×45.5㎝、地輪47㎝×48.5㎝を測る。総高151.5㎝の五尺塔である。水輪は寸胴タイプで、バンが刻まれている。地輪は外に比して風化が少ないことから、別石の可能性がある。

21は、三和村中野諏訪社に所在する大光寺石製品である。空風輪高さ30㎝×20.5㎝、火輪34㎝×50㎝、水輪35㎝×48㎝、地輪46㎝×50㎝を測る。各輪風化の度合いや色調が異なることから寄せ集めの可能性が高いが、水輪と地輪は五尺塔となる元来の組み合わせと思われる。火輪も形態的には、釣り合っている。かなり損壊が激しいことから、あえて図化に努めたものである。水輪は、四面にバの四門が刻まれているが、現状では天地逆に積まれている。地輪はわずかに台形を呈する。

22は、新井市吉木勝得寺の安山岩製品である。ほぼ完形の七尺塔である。本塔は、1/12で示してある。空風輪高さ54.5㎝×41.5㎝、火輪58.5㎝×74㎝、水輪43㎝×60㎝、地輪54㎝×53～60㎝を測る。空輪下部が削り込まれ、火輪の軒厚は一定であるがかなり反る。水輪は丸みを帯び、月輪をもつバンが彫られている。地輪はやや台形となる。なお他にも、高さ47㎝を測り、月輪を有するキャ・カを刻む空風輪があり、六尺塔にのるものと思われる。

23は、板倉町米増に所在する安山岩製品である。恵心尼塔とされている。空風輪高さ40.5㎝×27.5㎝、火輪44㎝×58.5㎝、水輪33㎝×49.5㎝、地輪49㎝×47.5～50.5㎝を測る五尺五寸塔である。空風輪がややいびきであるが、ほぼ一具と考えられる。水輪は寸胴タイプで、彫りの浅いバンが刻まれている。地輪は、一辺がやや斜になっている。

24は、板倉町上久々野福因寺裏山墓地に所在する安山岩製品である。42の宝篋印塔も同所に建てられている。空風輪を欠き、火輪高さ45㎝×50㎝、水輪34㎝×45㎝、地輪39㎝×45㎝を測る。五尺塔と考えられる。水輪やや上部に月輪付きのアンが刻まれている。月輪径が14㎝と外に比して小さい。水輪が円形に近いタイプである。

25は、妙高村仲町のJ-A前に所在する安山岩製品である。風輪高 \times 39 cm \times 29.5 cm 、火輪39 cm \times 59 cm 、水輪38 cm \times 53.5 cm 、地輪40 cm \times 47 \sim 54 cm を測る五尺二寸塔である。水輪は、円形タイプで、月輪付きのバンを大きく刻む。地輪は台形を呈する。

26は、妙高村関温泉姥堂に安置されている安山岩製品である。非常に遺存状況がよく、あたかも彫りたての感をもつ。当初から堂内に置かれていたと考えられる。風輪高 \times 20.5 cm \times 19 cm 、火輪15.5 cm \times 23 cm 、水輪12 cm \times 21.5 cm 、地輪16 cm \times 20 cm を測る二尺一寸五部塔である。各輪に五輪種子キャ・カ・ラ・バ・アが、地輪ア字の向かって右側に「天正五年」、左側に「九月二日」、下に「専佛房」の銘が刻まれている。頸城で管見に入った、唯一の在銘組合式五輪塔である。なお、種子・銘文を刻んだ後、接着剤として漆を塗り、その後に金箔を捺しており、部分的に金箔が残っている。当初は燦然と輝いていたことであろう。空輪がアンバランスに大きく、先端が突出し、火輪の軒が厚い。水輪は偏平で、地輪下面を1 cm ほど刳っている。天正五年（一五七七年）という時代相を示す好資料である。

以上26基について、紹介してきた。五輪塔は、中世頸城を代表する石造物である。総数は、不明であるが上越市内だけでも1,150基以上、組み合わせを考えれば2,000基を越えるものと思われる。頸城全域といういことになれば、優に5,000基を越えるものと思われる。頸城以外では調査が進んでいないので正確な数字は出せないが、外は郡単位でも3桁に達するのがやっという状況であり、さすがは国府域との感をもつ。

まず、上越市内の様相をみていくと、平成一一年度末での集計数は、311地点に空風輪869点、空風輪Ⅱ型313点、火輪1,145点、水輪870点、地輪564点を確認した。多数の集積地点としては、春日山十二社、西本町泉蔵院、五智国分寺・十念寺、下池部、茶屋ヶ原などがあげられる。国分寺では、大型のものがめだつ。十念寺は、市域で最も多数の集積が認められ、全体の一割以上に達している。下池部は、圍場整備に伴って出土し、発掘調査に伴わなかったことが残念であるが、長年地中にあつたことから遺存状況も良好で、中世寺院の存在も想定されるところである。また関川右岸地域は、石材産地である三和村に接することもあって、黄白く黄褐色の太光寺石（凝灰岩）の製品も多い。ちなみに、最も太光寺石製の五輪塔が集中しているのは、浦川原村法定寺であり、関山系石仏群の存在と併せて、頸城の石造文化に欠かせない存在である。茶屋ヶ原の五輪塔群は、土地改良に伴って出土したものであり、詳細は不明であるが、墓地が存在していたものと思われる。なお、高田寺町には一七世紀の大名墓である有銘宝篋印塔・五輪塔が数多く認められ、注目される。

石造物は、頸城全域でみていかねばならず、南方の板倉・新井・妙高方面く東方の三和村・浦川原村・柿崎町・吉川町等を視野に入れた上で市域の分布状況を考えねばならない。特に、今回多くを報告した五尺以上の大型五輪塔は、高田平野の南く東縁辺部にかけて分布していることから、五輪塔の受容がそこから始まった可能性が高く、注目されることである。

なお上越市内の五尺を越える中世五輪塔は、25基を認めることができる。内訳は、五智十念寺4基、五智国分寺3基、黒井大慈院・四辻町観音堂・寺町長遠寺・東本町大仙寺各2基、下野田本覚坊・上雲寺浄雲寺・西田中諏訪社・中央五丁目観音寺・滝寺毘沙門堂・下正善寺長坂寺跡・中門前林泉寺・宮尾・寺町念妙寺・南本町乗国寺各一基となる。ただし、五輪が揃っているのは、宮尾塔のみである。

また、造立時期については、紀年銘資料がほとんど認められないことから正確を期し難いが、全般的な傾向として一四世紀代に4尺を越える少数の大型塔が造られ始め、一五世紀代には3尺以下の小型塔が爆発的に造立されるようになる。これは、造塔階層の裾野が拡大した結果であり、京都での供養様式が広く頸城地域に受け入れられたことを意味している。越後府中の政治的背景を考え合わせると、その定着及び最盛期は、15世紀後半代を中心とした時期となろう。なお空風輪については、臍がないものとあるないものがあり、形状からみて前者は古い時期に限られ、後者は各時期を通じて存在するようであり、系譜を異にする工人集団の存在が想定される。そして、一石五輪塔の少なさと、妙高関温泉姥堂の紀年銘資料にみられるような軒の厚い偏平な火輪総数が90点余と火輪全体の1割にも達しないことからして、一六世紀後半には急速にその風が廃れたものと考えられる。

3 頸城の一石五輪塔 (第185図)

27～31は、上越市内に所在する安山岩製品である。

27は、東本町大仙寺に所在している。空風輪を欠いており、火輪以下の高さが41cm、最大幅23cm、地輪高は16.5cmを測る。水輪にバンが刻まれている。

28は、島田上新田の墓地に所在している。空風輪を欠いており、火輪以下の高さが32cm、最大幅20.5cm、地輪高は11.5cmを測る。火輪の軒が直線的にくられている。

29は、寺町妙行寺に所在している。空風輪が別造りの二石五輪である。火輪以下の高さが57cm、最大幅32cm、地輪高は25cmを測る。管見では、越後最大の一石造りの製品となる。火輪の軒が直線的にくられており、頂部がわずかにへこむ。

30は、五智十念寺に所在する。空風輪が残る貴重な遺存例である。高さが51.5cm、最大幅23cm、地輪高は15cmを測る。形態的には、27の大仙寺例に類似する。

31は、藤野新田水神社に祭られている。水輪が方形に造られ、空風輪も異形である。高さが39.5cm、最大幅20cm、地輪高10cmを測る。

32～35は、越前笏谷石製品である。

32は、吉川町大乘寺に所在する。高さが59.5cm、最大幅16cm、地輪高23cmを測る。空風輪から水輪にかけて五輪種子の南方修行門キヤー・カー・ラー・バー・アーを刻んでおり、地輪を空けるために火輪にラー・バーが入られている。地輪は、底面中央の径6cmほどの範囲が1cmほど凹ませている。また、中央に「□□禪定門」、向かって右側に「永禄十一年」(一五六八)、向かって左側に「十一月廿九日」と銘が刻まれている。

33・34は、上越市寺町来迎寺に所在する。33は、高さが64cm、最大幅19cm、地輪高24.5cmを測る。地輪上部に「ア」が、中央下方に「□妙春」、向かって右側に「文禄二年」(一五九三)、向かって左側に「五月十二日」と銘が刻まれている。34は、高さが59cm、最大幅19cm、地輪高21cmを測る。地輪中央に「豊田氏」と銘が刻まれている。

35は、上越市寺町華園寺に所在する。空風輪を欠いているが、最大級の笏谷石製一石五輪塔である。高さが61cm、最大幅23.5cm、地輪高31.5cmを測る。地輪上部に「ア」が、その下に続いて「□一峯□□禪定門」と刻まれ、向かって右側におそらく年号が刻まれているが、判別できない。

一石五輪塔は、上越市内で37基を数えた。その内7基が笏谷石製品であり、これらは吉川町例を含めて基本的に堀家移封時に持ち込まれたものと考えられる。その他は、在地産の角閃石安山岩を用いたものである。多くは、形態から一六世紀代の所産と考えられる。

4 頸城の宝篋印塔 (第186図～第188図)

36～38は、上越市南城町稻荷社に所在する。3つのパーツが積み重ねられているが、別個のものである可能性が高い。石材は、すべて安山岩である。巴御前の墓という伝承がある。36は、高さ56cm×最大幅76.5cmで、耳高43cmを測る笠部である。下方に段はなく、上方は3段でやや歪つである。37は、57cm×91cmで耳高31cmを測る笠部である。38と同じく下方に段がなく、上方に不規則に4つの段が削り出されている。耳は四隅に加えて、中間にも設けられている。36・37ともに宝篋印塔の定型化以前の古い形態ではないかと思われ、伝巴御前墓というのも頷ける。38は、36cm×

53～56 cmを測る方形の石材で、五輪塔の地輪と思われるが、36・37に伴う可能性も捨て難い。

39は、上越市五智十念寺に所在する砂岩製の笠部である。46 cm×74 cmを測り、下方2段、上方4段を削り出す。耳はやや外へ傾く。6尺を越える一五世紀以前の大型宝篋印塔は、先の南城町の2例と本例、そして次の両善寺例の4例を認めるにすぎない。

40は、新井市両善寺に所在する安山岩製品である。全体に破損著しく、相輪が崩壊しているが、唯一原形を留める古塔である。上越市宮尾五輪塔1と同じく、虎御前の墓という伝承がある。相輪30 cm以上、笠53 cm×62 cm、塔身37 cm×33 cm、基礎40 cm×61 cmを測る。6尺塔と考えられる。笠の露盤に格狭間を刻んでおり、耳はすべて欠けているが、直立するものと想定される。基礎の形状などから関東型式の流れを汲むものと思われる。

41は、上越市中桑取の墓地に所在する。安山岩製であるが、関川沿いの角閃石を含む黒ごま状のものとは異なり、やや赤みを帯びるものである。相輪52 cm、笠33.5 cm×40 cm、塔身25.5 cm×27 cm、基礎22 cm以上×38 cmを測る。基礎の上部を欠いているが、4尺8寸塔となろう。笠はかなり耳が外へ開く。塔身には、バンが刻まれている。なお塔身及び基礎は、天地逆に積まれている。

42は、板倉町上久々野福恩寺の裏山墓地に所在している安山岩製品である。相輪46.5 cm、笠部24 cm×31 cm、塔身18.5 cm×18 cm、基礎26.5 cm×30 cmを測る。塔身は別石であるが、法量はほぼ釣り合っている。3尺8寸塔となる。塔身には、四面に金剛界四仏が刻まれている。

43は、板倉町猿供養寺に所在する安山岩製の基礎である。25.5 cm×35 cmを測る。蓮弁下向かって右側に「応永五〇刀」、左側に「四月十二日」、中央に「永高」という銘が認められる。永高は現在も頸城にみられる姓であり、彼らの祖先が一三九八年に造ったものと考えられよう。なお、上に別石かと思われるパーツが積まれているが、図化できなかった。

44は、上越市五智十念寺に所在する安山岩製の相輪の上半部である。遺存高さ30.5 cmを測り、本来は60 cmを越える製品と思われる。

45は、上越市春日山林泉寺に所在する笏谷石製品である。寛永年間松平光長代の造塔であるから江戸期の所産になるが、領主が石工を連れてきた好例と考えられるため、図化したものである。相輪78.5 cm、笠46.5 cm×79 cm以上、塔身34 cm×38.5 cm、基礎56 cm×64.5 cm、台石22 cm×92 cmを測る。台座を含めて7尺9寸となる。塔身には、笏谷石製品に特有の蓮弁月輪及び蓮台が、基礎にも特有の方形格子が上段に2箇所、下段に格狭間付きのものが2箇所刻まれている。また、基礎向かって右側には「干時寛永九」、左側には「二月拾〇日施〇右〇〇」、中央に「關翁源無居士」及び蓮台が刻まれている。

宝篋印塔は、五輪塔に次いで数量の多い石塔であるが、鎌倉期に遡るものは、上越市南城町所在の2点の笠と新井市両善寺塔の3基にすぎない。その外は、一五世紀以降の所産である。市内の総数は、相輪16点・笠73点・塔身11点・基礎39点である。これは、五輪塔の6%程度の数量である。

5 頸城の多層塔 (第189図)

46は、上越市御殿山の公園内に所在する安山岩製品である。四層が遺存しており、上から33 cm×65 cm、26.5 cm×74 cm、24.5 cm×73 cm、28 cm×81 cmの計112 cmを測る。各層の軒下に長軸16 cm・短軸10 cmの削りが入れている。

47は、上越市五智国分寺に所在する越前笏谷石製品である。相輪の宝珠を欠き、屋根も二層しか遺存していないが、唯一の笏谷石製の層塔である。層輪40.5 cm以上、上層19 cm×38.5 cm、下層20.5 cm×45.5 cm、塔身30 cm×30 cm、基礎23.5 cm×48 cmを遺存高133.5 cmを測る。5層と想定すると、6尺7寸程になる。塔身には、阿弥陀如来が彫られている。時期的には、笏谷製品が入ってくる戦国末期～江戸初期にかけての所産と考えられる(水澤11001)。

層塔は、非常に少ない。市内全域で、笠が2層確認されたにすぎない。ほとんど根付かなかったといえよう。なお、図示できなかったが、下宮川浄願寺に所在する四面に仏像を半肉彫りする基礎は、層塔の基礎である可能性が高く、貴重な遺例である。

6 新発田市岡田法音寺の五輪塔(第190図)

今回紹介する五輪塔は、法音寺の大日堂前に多数の五輪塔・宝篋院塔・板碑・石仏とともに並べられているものである。本塔は、昭和六三年二月二四日付けで、新発田市指定考古資料に指定されており、すでに小野田政雄が「頼朝公五輪塔」と題して報告しているが(小野田一九九九、一八〇～一八三頁)、実測図の提示を最大の眼目として報告するものである。

この立地は、眼下の加治川が山間を抜け出て、まさに平野部へと流れ出す喉元を扼する重要な位置を占めており、そこに信仰拠点が存在していた意義は大きい。また、秘仏である本尊の金剛界大日如来は、中条町乙宝寺の胎藏界大日如来(昭和一二年焼失)と対をなしたといわれる藤原仏であり、越後平氏城家の関与も仄かにうかがわれるところである。このような由緒の地に本五輪塔は、建てられている。それは現在、石塔類の中央に置かれており、傍らには「源頼朝公塔」と刻まれた石碑がある。

塔は、空風輪の先端の一部及び火輪の軒上端が欠けている外は、ほぼ原形を留めている。法量は、空風輪長 38.4 cm ×幅 26.7 cm 、火輪 38.6 cm × 51.3 cm 、水輪 36.4 cm × 52.1 cm 、地輪 42.0 cm × 46.8 cm 、総高 155.4 cm を測る堂々たる5尺塔である。空風輪は、空輪部が約8寸、風輪が5寸で、宝珠のくり込みが深い。風輪は鉢形を呈する。火輪は勾配がきつく、軒(先端欠)がやや開いている。水輪は、上位に最大径がくる怒肩形で、地輪との接地点がすばまる。石材は花崗岩で、荒川以南の阿賀北地域の石造物に共通するものである。種子は上方から、東方発心門の「キヤ・カ・ラ・バ・ア」を刻む。彫りは、深い薬研彫りで、均整がとれており、周囲の板碑の種子とは一線を画している。おそらく、遠隔地から石工を招来して造立した結果と思われる。ただし種子相自体は、阿賀北の最盛期の板碑群と共通するものであり、火輪の軒がやや開くこと、水輪が鎌倉期のものに比してやや偏平になって下部がせばまっていること等から一四世紀半ば頃の造立と考えられる。

本塔については、加地荘の初代地頭であり、越後国守護でもあった源(佐々木三郎)盛綱が、頼朝の供養のために建立したと伝えられているが、上述のとおり一世紀半ほど新しい時期の所産と考えられる。

本五輪塔は、中世越後府中の所在した頸城地域以外では、ほぼ県内唯一といえる中世の5尺の完存五輪塔である。府中以外で本塔に比肩する組合わせ塔としては、栗島浦村内浦観音堂の空風輪があるのみであり、外には笹神村出湯の華報寺の宝篋院塔(塔身欠)や少数の層塔があるのみである。ただし、板碑や石仏造立の波に隠れてみえにくいのが、小型の五輪塔・宝篋院塔が点的に入ってきている。ここでは、本塔が遺存していたことに改めて驚嘆するとともに、先人の努力に畏敬の念を表すものである。

次いで、5尺塔の周囲に目を向けると、20基以上の小型五輪塔(完存塔なし)、7基の宝篋印塔(笠のみ)、19基の板碑(内1基に正中二(一三二五)年銘、新発田市一九八〇、水澤一九九四)、10基の中世石仏などがところせましと並べられている。これらは、堂の立つ丘陵一帯から出土したものを集めたものである。このように各種の石造物が集中しているのは、栗島浦村内浦、中条町乙宝寺、笹神村華報寺といった地域霊場ばかりであり、本地点も加地荘を越えた地域信仰圏のセンターとして位置付けられよう。

なお、新発田市内全体でみると、板碑48基に対し、石仏は160基の多数に上る。これらの石仏は、板碑と同時期に彫刻が始まり、板碑の終息後により盛んとなったと考えられる息の長い信仰遺物である。石仏の種類(水澤一九九九a)としては、彫残し蓮台(Ⅲ類)が最も多く130基弱の8

割を占めており、残りを蓮台半肉彫り（Ⅰ類）、陰刻蓮弁（Ⅱ類）が等分する。その数量からして、新発田市域の中世信仰遺物に占める石仏の位置は大きく、今後調査の深化が求められるであろう。

7 高田における一七世紀代の石塔

高田寺町及び春日山林泉寺には多くの有銘石塔が造立されており、ここに紹介する（表24）。

石塔は、供養塔一基、宝篋印塔五基、五輪塔十三基を確認した。

供養塔は、林泉寺の川中島供養塔で、元和九年の造塔である。この時点の藩主は、旧川中島城主の松平忠昌で、その関連が注目される。あるいは人心収攬のためであったろうか。さらに注目されるのは、その石材である。石材は、笏谷石すなわち越前の産と考えられる。忠昌以前の越前石工との関係を探ると、越前北ノ庄から春日山に入った堀秀治が浮かび上がる。林泉寺にある堀家三代の五輪塔は、笏谷石製の五輪塔であり、彼らは越前石工を帯同してきたのではなからうか。堀家改易後も彼らが上越に残っていたかどうかは不明であるが、本供養塔に彼らがかかわっていることからして、住み着いていた可能性が高いのではなからうか。なお、五智国分寺の層塔も笏谷石製であり、彼らによって造られたものと考えられる。

宝篋印塔と五輪塔については、松平光長の襲封以後、改易までの間に銘が集中している。紀年銘からみると、入封後しばらくは宝篋印塔が造られたが、正保ころを境に五輪塔に主体が移行していったように思われる。また、ここでも光長の旧領越前北ノ庄を反映して、笏谷石製品のものが多く認められた。宝篋印塔は五基中四基、五輪塔でも十三基中六基を笏谷石製品が占めている。特に太岩寺の五輪塔は、二・八m＋台座〇・五mの三・三mにも達する巨大なもので、川中島供養塔と並び屈指の規模を誇る。これは、高田姫の三・二m（台座含む）をしのぐものである。

そして光長改易以後、笏谷石製の五輪塔はみられなくなるが、代わって高安寺墓地の元禄五（一六九二）年銘石仏や各地の墓地でみられる屋根を有する板状の墓石などが造られるようになる。ここから、越前石工が時代の荒波を越えてしぶとく生き残り、需要に応えていたことが知れよう。

第二編 引用・参考文献

あ

- 青木忠雄 二〇〇一 『石仏と石塔』文化財探訪クラブ8、山川出版社
- 青森県教委 一九八八 『李平下安原遺跡』第一集
- 青森県 二〇〇三 「李平下安原遺跡」『青森県史 資料編 考古4』
- 二〇〇五 「李平下安原遺跡」『青森県史 資料編 考古3』
- 青森県立郷土館 一九八三 『青森県の板碑』県立郷土館調査報告第15集 歴史・2
- 青山宏夫 一九九九年 「絵図が語る奥山荘の景観」『中世の越後と佐渡』高志書院
- 青山博樹 一九九九 「仏具」『松野千光寺経塚』喜多方市埋文調査報告第五集
- 阿久津久 一九八五 「門毛経塚遺物と中世陶器」『茨城県立歴史館報』12
- 足立順司 一九八一 「掛川市大竹遺跡の研究 中世埋納遺物の分析」『森町考古』一六
- 穴沢吉太郎 一九七七 「魚沼地方の板碑文化」『大和町史 本編上巻』第1章、新潟
- 穴水町教委 一九八七 『西川島』（白山橋遺跡）
- 網野善彦 一九八七 『増補 無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和—』平凡社選書五八
- 網野善彦・石井進編 一九八八 『中世の都市と墳墓 一の谷遺跡をめぐって』日本エディタスクール出版
- 荒川正夫 一九九三 「中世における「周溝に囲まれた小型建物址」の問題について—「屋敷神信仰」との関連において—」『翔古論聚』
- 安藤正美 一九九六・一九九七・二〇〇〇 「片桐遺跡(廃寺跡)出土の中・近世陶磁器についてⅠⅡⅢ」『越佐補遺些』第一・二・五号
- い
- 石井進・荻原三雄 一九九三 『中世社会と墳墓』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集、名著出版
- 石川重平 一九八三 「徳島県」『板碑の総合研究 二 地域編』柏書房
- 石田明夫 一九九七 「板碑」『会津高田町史 第二巻』考古・古代・中世、資料編
- 石田哲弥 一九九七 『石仏学入門』高志書院
- 一九九八 『越後・佐渡の石仏』新潟日報事業社
- 石田茂作 一九六五 「密教法具の研究」『密教法具』講談社
- 一九六九 『日本佛塔の研究』講談社
- 一九七七 『佛教考古学論攷』五 仏具編、思文閣
- 石村喜英 一九八四 「題目・名号・十三仏板碑」『板碑の総合研究 総論』柏書房
- 磯部淳一 一九九二 「群馬県における五輪塔の編年」『高崎市史研究』2
- 糸魚川市教委 一九八九 『糸魚川市の文化財』新潟
- 伊藤啓雄 二〇〇〇 「庚申塚の経塚における経塚造営とその時期」『横山東遺跡群Ⅰ』柏崎市埋文調査報告第三四集
- 市橋一郎・上野川勝 一九九七 「栃木県下の近世塚上遺構について—近世修験とのかかわりを含めて—」『唐澤考古』第一六号

市本芳三・瀬戸哲也 二〇〇一 「栗栖山南墳墓群で出土した石造物について」『日引』第1号

伊東 崇 二〇〇〇年 「黒川村の板碑群」『新潟考古学談話会会報』第22号

井上雅孝 二〇〇二・二〇〇四 「錫杖状鉄製品の研究」(同(2))『岩手考古学』第一四・一六号

二〇〇六 「古代鉄製祭祀具から見た蝦夷の信仰と儀礼―錫杖・三鈷鏡・鉄鐸・錫杖状鉄製品―」『立正史学』第九九号

一乗谷朝倉氏遺跡資料館 一九七六 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅶ』第一次調査

岩田 隆 一九九四 「一乗谷西光寺跡」『中世北陸の寺院と墓』第七回北陸中世土器研究会資料

岩手県埋文 一九九九 『山口館跡発掘調査報告書』第三二〇集

う

上田市教委 二〇〇二 『国分遺跡群』第八六集

お

大石一久 一九九九 『石が語る中世の社会』ろうきんブックレット9

二〇〇一 「引久石塔に関する一考察―とくに長崎県下の分布状況から見た大量搬入の背景について―」『日引』第1号

大阪府文化財センター 二〇〇〇 『栗栖山墳墓群』調査報告第257集

大沼淳一 一九七七 「南魚沼郡の板碑」『南魚沼』新潟県文化財調査年報第十五

大場喜代司 一九九九 「粟島の板碑と観音信仰」『村上市史 通史編一 原始・古代・中世』

大和久震平 一九八九 「古式の錫杖」『山岳修験』第五号

一九九一 「古式錫杖の形状」『帝京大学短期大学紀要』第八号

岡崎譲治 一九七六 「密教法具」『新版仏教考古学講座』第五卷仏具

一九八二 「密教法具」『仏具大事典』鎌倉新書

小野田政雄 一九六八・一九七九 『越後石仏雑記』巻1・5、私家版

一九七〇 「色部領の中世石造遺物」『越佐研究』第二七集

一九七二 「粟島の石造遺物」『粟島』新潟県文化財調査年報第二

一九七三 「佐渡分布の板碑の考察」『佐渡相川の歴史 資料集2 墓と石造物』相川町

一九八二 「紀年遺物」『中条町史 資料編第一巻』考古・古代・中世

一九八三 「新潟県」『板碑の総合研究2 地域編』柏書房

一九八六 「粟島の板碑文化」『粟島浦村教育委員会』

一九九二 「中世の石造遺物」『中条町史 資料編 第5巻』民俗・文化財

一九九九 『阿賀北遺石志』私家版

か

垣内光次郎 一九九五 「中世の考古学資料」『中島町史 資料編上巻 中島町の考古』

柏崎市 一九八二 『柏崎市史資料集 考古 2』

- 柏崎市教委 一九八五 『柏崎市半田赤坂山墳塚群調査報告書』
 一九九六 『田塚山遺跡群』市埋文調査報告書第二一集
 柏崎市教委 二〇〇〇 『横山東遺跡群Ⅰ』市埋文調査報告書第三四集
 勝倉元吉郎ほか 一九九四 『北上川下流域のいしぶみ―河北町・北上町の「板碑」―河北地区教委
 香取忠彦 一九七六 「梵音具」『新版仏教考古学講座』第五卷、仏具、雄山閣出版
 香取秀眞 一九三一 a 「錫杖に就いて」『なかのこゝろ』後『金工史談』正編、一九七六、国書刊行会に再録
 一九三一 b 『佛具(錫杖)』日本考古図録大成
 金子拓男 一九九四 「「居田四至絵図」の製作年代に係る再検討」『研究集録』第二二号、新潟江南高校
 上郡町教委 一九九五 『上郡の文化財』兵庫県
 神林村教委 一九九一 『長松遺跡発掘調査報告書』村埋蔵文化財報告第三
 二〇〇一 『里本庄遺跡群』村埋蔵文化財報告第一一
 川勝政太郎 一九四四 『梵字講話』河原書店
 一九五七 『日本石材工芸史』
 一九七八 『日本石造美術辞典』東京堂出版
 一九八一 『新版石造美術』誠文堂新光社
 川西町 一九八七 『川西町史 通史編 上巻』
 元興寺文化財研究所編 一九九三・一九九五 『五輪塔の研究』平成四・六年度調査概要報告書
 間門遺跡調査団 一九九四 『間門遺跡』
 き
 喜多方市教委 一九九九 『松野千光寺経塚』市埋文調査報告書第五集
 木村善吉 一九八三 「韋駄天山発掘のきっかけ」『おくやまのしょう』第八号
 京田良志 一九七六 『富山の石造美術』富山文庫5、巧玄文庫
 一九八三 『日本の石仏5北陸篇』国書刊行会
 く
 工藤清泰 一九九五 「金属製品」『新編弘前市史』資料編一考古編
 久野 健 一九七五 『石仏』小学館、ブックオブブックス、日本の美術36
 久保常晴 一九七六 「鎌倉新仏教各宗の仏具」『新版仏教考古学講座』第五卷、仏具、雄山閣出版
 一九七七 『続佛教考古学研究』ニューサイエンス社
 久保智康 一九九九 『中世・近世の鏡』日本の美術三九四、至文堂
 蔵田蔵編 一九六七 『仏具』日本の美術一六、至文堂
 栗岡眞理子 二〇〇三 「埼玉県の中世五輪塔編年案」『研究紀要』23、埼玉県立歴史資料館

群馬県埋文 一九八九 『下佐野遺跡Ⅰ地区・寺前地区(四)、中世・近世編』県埋文調査報告第七七集

け

計良勝範 一九七三 「墓と石造物」『佐渡相川の歴史 資料集2 墓と石造物』相川町

こ

小須戸町教委 一九八七 『九ツ塚緊急発掘調査報告書』町文化財調査報告一

後藤守一 一九三七 『日本歴史考古学』四海書房

小林昌二 一九九二 「八幡林遺跡等新潟県内出土の木簡」『木簡研究』第十四号

小林義孝 二〇〇二 「宝塔と五輪塔の關係」『摂河泉とその周辺の考古学』

小山丈夫 一九九三 「長野盆地の板碑」『東国文化』5

さ

齋木 勝 一九九六 「関東北西部における五輪塔造立の様相」『考古学の諸相』

齋藤正治 一九六六 「韋駄天山遺跡―北蒲原郡中条町―」『郷土新潟』第八号、新潟郷土史研究会

齋藤正治 一九七一 「韋駄天山の遺跡―北蒲原郡中条町 五輪山墓地―」『蒲原』第二十五号

坂井 隆 一九九六 「五二九一号土坑一括埋納遺物」『上栗須寺前遺跡群Ⅲ』群馬県埋文調査事業団報告第二〇五集

坂詰秀一編 一九八四 『板碑の総合研究 総論』柏書房、増補改訂版一九九一

坂詰秀一 一九九九 「出土仏具の世界」『考古学論究』第五号

二〇〇三 「仏法具一括埋納遺跡考」『法華仏教文化史論叢』渡邊寶陽先生古希記念論文集

狭川真一 二〇〇四 「石塔の実測図」『元興寺文化財研究』八四

桜井市 一九八九 『桜井市史』上巻

桜井甚一 一九五八 『能登と加賀の板碑文化』石川県図書館協会

一九九〇 『能登加賀の中世文化』北国新聞社

佐藤進一 一九七四 『日本の歴史9 南北朝の動乱』中公文庫八六〇

佐藤雄一 一九九七 「卒塔婆造立の風習」『石巻の歴史』第一巻

し

滋賀県立琵琶湖文化館 一九八三 『特別展 近江の密教美術』

静岡県教委 一九六五 『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』県文化財調査報告第6集

品田高志 一九九〇 「塚の群構成とその類型―柏崎平野における塚(群)の事例から―」『柏崎の民俗』第三号

品田高志 一九九四 「越後における中世墳墓・墓地」『中世北陸の寺院と墓地』第1回北陸中世土器研究会資料集

新発田市 一九八〇 『新発田市史 上巻』

新発田市教委 一九九〇 『三光館跡・宝積寺館跡』

下仲隆浩 二〇〇三 「福井県小浜市における中近世石造物の様相」『日引』第四号

上越市教委 一九九八 『保坂遺跡発掘調査報告書』
上越市立総合博物館 一九八九 『上越後の懸仏と経塚供養塚出土品展―平安・鎌倉・室町―』
白根市教委 一九八三 『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』

す

相山林継 二〇〇六 「山岳信仰遺跡の再検討」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古希記念論文集

せ

瀬戸谷皓ほか 二〇〇五 「密教法具の調査」『妙楽寺ヒシロ遺跡』豊岡市教育委員会

た

高橋一樹 一九九九 「五章鎌倉時代の小泉荘園」『村上市史 通史編一 原始・古代・中世』

高橋亀司郎 一九八三 「平木田村覚書」『おくやまのしょう』第八号

高橋健自 一九一一 「古式の錫杖」『考古学雑誌』第一卷第七号

田熊清彦・梁木 誠 一九九〇 「栃木県の黒色土器」『東国土器研究』第三号

竹内晃・大沼淳・中野豈任・佐藤和彦 一九八一 「岩船郡神林村山田の板碑群」『高志路』第二六一号

田島光男編 一九七九 『越後国人領主色部氏史料集』神林村教委

田中一穂 二〇〇二 「浦廻遺跡」『木簡研究』24

二〇〇三 「浦廻遺跡」『木簡研究』25

田中耕作 一九九四 「宝積寺館跡」『中世北陸の寺院と墓』第7回北陸中世土器研究会資料

田中真吾 一九九二 「―と―」について（阿賀北板碑考続論）」私家版

一九九九 「石造物にみる中世の信仰」『村上市史 通史編1 原始・古代・中世』

谷口鉄雄・片山撰三 一九五八 『日本の石仏』朝日新聞社

田村愛之助 一九八七 「東之輪出土板碑」『柏崎市史資料集 考古篇1』柏崎市史編さん纂委員会

田村 裕 一九八七年 「鎌倉武士」ほか『新潟県史 通史編2 中世』

一九八八年 「奥山荘波月条絵図の作成背景をめぐって」『日本史研究』三一〇

一九九〇年 「南北朝期の奥山荘金山郷―三浦和田茂実との関連を中心にして―」『北日本中世史の研究』

一九九九年 「越後における南北朝の動乱」『中世の越後と佐渡』高志書院

田村裕・樋口純子 一九九〇年 「鎌倉・南北朝期の奥山荘北条をめぐる女性たち（上）―中世武士団三浦和田氏像の再検討―」『越佐研究』第四七集

田村裕・坂井秀弥編 一九九九年 『中世の越後と佐渡』高志書院

ち

千々和到 一九七三 「東国における仏教の中世的展開」『史学雑誌』八二・二・三

一九八八 『板碑とその時代―てごかな文化財・みづかな中世―』平凡社選書 116

一九九一 「板碑・石塔の立つ風景―板碑研究の課題―」『考古学と中世史研究』名著出版

千々和實 一九八七 『板碑源流考 民衆仏教成立史の研究』 吉川弘文館

つ

つくば市教委 一九九四 『三村山極楽寺遺跡群所在石造五輪塔解体修理調査報告書』

坪井良平・楯英雄 一九七一 「五頭山周辺の石造物」『水原郷』新潟県文化財調査年報第10
と

十日町市教委 二〇〇五 『伊達八幡館跡』

東 博 一九八五 『那智経塚遺宝』東京美術

一九九〇 『東京国立博物館図版目録 仏具篇』

時枝 務 一九九一 「日光男体山頂遺跡出土遺物の性格―新資料を中心として―」『MUSEUM』四七九

時枝 務 二〇〇三 「日光男体山頂遺跡出土の密教法具」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集

栃木県 一九二七 『栃木縣史蹟名勝天然記念物調査報告第二輯』

栃木県埋文 一九八八 『下野国府跡Ⅷ 土器類調査報告』県埋文調査報告第30集

戸根与八郎・中野豈任 一九八〇 「六七日忌の墨書供養塔婆」『高志路』第二五五号

戸根与八郎 一九八〇 「韋駄天山墳墓」『中条町遺跡詳細分布調査報告書』

一九八二 「韋駄天山墳墓」『中条町史 資料編第一卷 考古・古代・中世』

二〇〇三 「北塚」『五智国分寺境内遺跡(仏具出土地)』『考古―中・近世資料―』上越市史叢書八

二〇〇四 「書評(浦廻遺跡)『新潟考古』15

富山県文化振興財団 一九九六 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)』第七集

な

中井 均 一九九一 「中世の居館・寺そして村落・西国を中心として」『中世の城と考古学』新人物往来社

長岡京市埋文 一九九一 『勝龍寺城発掘調査報告』市埋文調査報告第6集

中川成夫 一九五九 「越後華報寺中世墓址群の調査」『史苑』20・2、後同著『歴史考古学の方法と課題』雄山閣出版一九八五、に再録

中川成夫 一九六三 「十日町市小黒沢発見の正平在名碑について」『越佐研究』第20集、後『歴史考古学の方法と課題』雄山閣出版、に再録

中条町編 一九八二 『中条町史 資料編第一卷』考古・古代・中世

中条町教委 一九九三 『江上館跡Ⅱ』町埋文調査報告第六集

二〇〇〇 『下町・坊城遺跡ⅣⅢ 地点』町埋文調査報告第20集

二〇〇四 『韋駄天山遺跡』町埋文調査報告第32集

長野県 一九九二 『長野県史美術建築資料編全一卷(一) 美術工芸』

中野豈任・大沼淳 一九七三 「中世栗島における霊地信仰」『高志路』第二二七号

一九八〇 「中世の信仰」『新発田市史 上巻』第3章第4節

中野豈任 一九八八 『忘れられた霊場―中世心性史の試み―』平凡社選書一二三

- 一九八八 『祝儀・吉書・呪符―中世村落の祈りと呪術―』吉川弘文館
 浪岡町 二〇〇四 『浪岡町史 第二巻』
 浪岡町教委 一九八九 『浪岡城跡Ⅹ』
 奈良博 二〇〇六 『平成十八年 第五八回正倉院展』図録
 に
 新潟県 一九八三 『新潟県史 資料編4』中世二文書編
 一九八四 『新潟県史 資料編5』中世三文書編
 新潟県教委 一九九八 『旧得法寺跡』県埋文調査報告第八六集
 二〇〇〇 『大武遺跡Ⅰ（中世編）』県埋文調査報告第九七集
 二〇〇三 『浦廻遺跡』県埋文調査報告書一二六集
 二〇〇四（一九九二）『木崎山遺跡』県埋文調査報告書第二八集
 二〇〇六 『野中土手付遺跡 砂山中道下遺跡』県埋文調査報告書第一六四集
 新潟市 一九九四 『新潟市史資料編一、原始古代中世』
 西村公朝 一九八三 『やさしい仏像の見方』新潮社とんぼの本
 日光市 一九八六 『日光市史上巻』
 日光二荒山神社編 一九六三 『日光男体山山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店（一九九一、名著出版再刊）
 の
 能登健・梅澤克典 二〇〇四 『友成遺跡出土の錫杖頭鑄型について』『群馬県立歴史博物館紀要』第二五号
 野呂肖生 二〇〇〇 『仏像の世界』文化財探訪クラブ9、山川出版社
 は
 橋口定志 一九九二 『中世居館と方形区画溝遺構』『平井尚志先生古希記念考古学論攷』第Ⅱ集
 羽下徳彦 一九六六 『惣領制』至文堂
 秦繁治ほか 二〇〇二 『伝阿弥陀寺遺跡』『三和村史資料編』
 畑 大介 二〇〇六 『中世前期の村落祭祀と串状の木製品』『鎌倉時代の考古学』高志書院
 畠中 弘 一九八四 『概説・山陰の石仏』『日本の石仏』3、山陰・山陽編、国書刊行会
 服部英雄 一九八〇 『奥山庄波月条絵図とその周辺』『信濃』第三二巻第五号
 八戸市教委 一九九三 『根城―本丸の発掘調査―』市埋文調査報告第五四集
 服部敬史 一九九七 『下野―国立歴史民俗博物館研究報告第Ⅱ集 中世食文化の基礎的研究』
 服部清道 一九三三 『板碑概説』鳳鳴書院、一九七二新版、角川書店
 羽生令吉・金沢和夫 一九六九 『F. 板碑』『佐渡国府緊急調査報告書（若宮遺跡）Ⅱ』真野町教委
 羽茂町 一九八九 『羽茂町誌第二巻通史編 古代中世の羽茂』

播磨定男 一九八九 『中世の板碑文化』東京美術、東京

ひ

P H P 研究所編 一九九一 『「図解」仏像のすべて』

日野市栄町遺跡調査団 一九九五 『日野市栄町遺跡』東京都住宅局

氷見市教委 一九八五 『富山県氷見市藪田薬師中世墓発掘調査報告書』

二〇〇〇 『協方谷内出中世墓』市埋蔵文化財調査報告第31冊

平野団三 一九七五 『謎の北塚』『越佐研究』第三五集

一九九二 『上越地方の板碑と板石塔婆』『頸城文化』47

広神村 一九八〇 『広神村史 上巻』

ふ

福井県博 一九八九 『石をめぐる歴史と文化―忽谷石とその周辺―』

藤木久志 一九五七 『国人領主制の成立過程―越後国三浦和田氏の惣領制―』『文化』二二―三、後同著一九七四年『戦国社会史論―日本中世国家

の解体―』東京大学出版、に再録

一九六八 『中世後期における三浦和田氏について』『新潟史学』創刊号

藤田 尚 二〇〇三 『人骨』『浦廻遺跡』新潟県埋文調査報告書一二六

藤塚 明 一九九四 『寺山から出土した鉦』『市史にいがた』第十四号

古川久雄 二〇〇〇 『日本海を遠距離搬送された若狭の中世石塔』『中世北陸の石塔・石仏』第13回北陸中世考古学研究会資料集

古川登・村上雅紀 二〇〇四 『越前地方における石造多層塔の研究』『片山鳥越墳墓群・方山真光寺跡塔』清水町埋文調査報告書第Ⅷ集

文化財管理局 一九八八 『新安海底遺物綜合篇』韓国

ほ

北陸中世考古学研究会 一九九八 『北陸中世の金属器』第一一回資料集

一九九七 『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』桂書房

二〇〇〇 『中世北陸の石塔・石仏』第一三回研究会資料集

細矢菊治 一九七二 『南魚沼郡の歴史 先史時代から中世まで』私家版

堀川秀夫 二〇〇三 『獣骨』『浦廻遺跡』新潟県埋文調査報告書一二六

本間 弼 一九六八 『奥山庄における中世の石造物 中間報告』石造物研究第3集

ま

前嶋 敏 二〇〇五 『浦廻遺跡』『中世の城館と集散地』高志書院

松嶋順正編 一九七八 『正倉院寶物銘文集成』吉川弘文館

松原典明 一九九六 『下野・五輪塔考』『考古学の諸相』

み

- 三浦純夫 一九九〇 「加賀鶴来における有紀年銘五輪塔とその周辺」『石川考古学研究会々誌』第三三号
- 三浦純夫・垣内光次郎 一九九四 「能登の鎌倉時代板碑を読む」『加能資料』第7号
- 水澤幸一 一九九三 「奥山荘江上館の発掘調査について―越後奥山荘研究1―」『新潟県考古学談話会会報』第二二号
- 一九九四 a 「韋駄天山遺跡」『中世北陸の寺院と墓地』第7回北陸中世土器研究会資料集
- 一九九四 b 「越佐の板碑」『中世北陸の寺院と墓地』 第七回北陸中世土器研究会資料集
- 一九九六 「中世越後の鉦鼓」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念論文集
- 一九九七 a 「阿賀北の紀年銘板碑」『新潟史学』第39号
- 一九九七 b 「中世越佐における板碑文化の諸相」『中近世の北陸』桂書房
- 一九九九 a 「新潟県」『考古学論究』第5号
- 一九九九 b 「中世越後の城館」『中世の越後と佐渡』高志書院
- 一九九九 c 「信仰関連遺物」『新潟県の考古学』高志書院
- 一九九九 d 「上越市宮野尾の五輪塔」『上越市史研究』第4号
- 一九九九 e 「粟島の板碑」『考古学論究』第6号、立正大学考古学会
- 一九九九 f 「越後国奥山荘の考古学的研究の現状と課題―地域史研究の実践から―」『立正史学』第八五号
- 二〇〇〇 a 「板碑分布からみた越後国小泉荘加納の地域信仰圏」『考古学論究』第7号
- 二〇〇〇 b 「新発田市法音寺の五輪塔」『新潟県考古学談話会会報』第22号
- 二〇〇〇 c 「越後国奥山荘政所条の都市形成」『中世都市研究』7
- 二〇〇〇 d 「越後・佐渡」(遺跡1・3を除く)「北陸の石塔・石仏」『中世北陸の石塔・石仏』第13回北陸中世考古学研究会資料集
- 二〇〇一 a 「越後戦国期の遺物問題」『新潟考古』第12号
- 二〇〇一 b 「越後国奥山荘における板碑の存在形態―鎌倉後期〜南朝期の造立背景―」『中世奥羽と板碑の世界』高志書院
- 二〇〇二 「阿賀北の中世石仏」『新潟考古』第13号
- 二〇〇三 a 「石造物」『考古―中・近世資料』上越市史叢書8
- 二〇〇三 b 「城館と荘園・奥山荘の景観」『戦国時代の考古学』高志書院
- 二〇〇五 「奥山荘政所条遺跡群の展開―坊城館から江上館へ―」『中世の城館と集散地』高志書院
- 二〇〇六 a 「密教法具考―出土仏具を中心にして―」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古希記念論文集
- 二〇〇六 b 「新潟県」『中世墓資料集成―北陸編―』中世墓資料集成研究会
- 見附市教委 一九八四 「三ツ塚遺跡」
- 一九八六 「片桐塚群遺跡Ⅱ」
- 光森正士編 一九九三 「正倉院宝物にみる仏具・儀式具」紫紅社
- 三宅敏之 一九六三 「錫杖頭」『法具』『日光男体山山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店、一九九一年名著出版再刊

- む 村松町 一九八〇 『村松町史 資料編第1巻 考古・古代・中世』
も 望月友善 一九七九 「板碑の本質と生成」『日本の石仏』一九七九年第12号
一九八三 『日本の石仏5 北陸篇』国書刊行会
や 安田町教委 一九七九 『横峯経塚群』文化財報告(四)
山川公見子 一九九五 「出土仏具研究の回顧」『考古学論究』第五号
山口栄一 一九九五 「興業墓」『卷町史資料編一 考古』
ゆ 由水常雄 一九七七 『正倉院の謎』徳間書店、中公文庫一九八七として再刊
よ 吉岡康陽 一九九四 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
吉川 繁 一九九五 『謎の上越市石造文化 続野仏が語る郷土史』私家版
り 立正大学考古学会 一九九九 『考古学論究』五、出土仏具の世界
れ 歴民博 一九九九 『国立歴史民俗博物館研究報告第79集 日本古代印の基礎的研究』
わ 渡邊三四一 一九九六 「柏崎市の板碑概観―追加報告を兼ねて―」『石仏ふおーらむ』第二号

終章 越後国奥山荘

本論を終えるにあたって、序章での視点に基づき第一編・第二編で積み重ねてきた諸論考の成果の上にたった奥山荘論を提示する。「1 奥山荘の景観」では、文献と地勢・考古資料との突合せを行い、「2 奥山荘政所条遺跡群・坊城館から江上館へ」では、奥山荘中条の中心地である政所条の発掘調査成果を基軸にして、その変遷を明らかにした。これらの作業の積み重ねによってのみ、遺跡群を包括した中世荘園景観論へと研究段階を進めることが可能であると考えられるものである。

1 奥山荘の景観

(1)はじめに

越後国奥山荘は、多数の古文書が遺されており、著名な荘園絵図が存在することから、中世史学会では古くから注目されてきた。ここでは、そこに地元からの視点を加えて奥山荘の全体像に近づいていきたいと思う。

地元からの情報発信源としては、考古学的発掘の成果、石造物をはじめとする各種信仰遺物の在り方、城館の分布状況、地籍図や古地図類からみた水系や旧道の復原、地名や伝承の採録などが考えられよう。

この内、前3者については、平成一〇年度にその時点での到達状況をまとめたことがある(水澤一九九九)。今回は、その詳細を再録することはせず、それらを基にしてもう少し広い観点から奥山荘にせまっていきたいと思う。

そこでまず、奥山荘の研究史を簡略にまとめて、現状を把握しておきたい。

戦前では、斎藤秀平による『縣史蹟名勝天然記念物調査報告』への鳥坂城・江上館・黒川館の紹介(斎藤一九三五)があり、関連文書が採録されている。

戦後は、早くも昭和二九年(一九五四)に國学院大学の小出義治を招請し、韋駄天山中世墳墓の発掘調査が実施された。多くの石塔類や骨・骨壺等が出土したが、諸般の事情により報告書が刊行されなかったため、事実関係の確認に支障が生じている(斎藤ほか一九八三・水澤二〇〇二)。

次いで昭和三七年には、新潟県教育委員会によって「旧奥山荘地域学術調査」が実施され、新潟大学の井上鋭夫を首班とする編集委員によって奥山荘関係の文書類が『奥山荘史料集』として結実した(井上編一九六五)。以後、奥山荘の文献研究における本史料集の果たした役割は非常に大きく、その後の研究の基を築いたと評価できる。その後文献資料は、井上の遺鉢を継いだ中野豊任・金子達らによって『中条町史』資料編第1巻(高橋ほか一九八二)、『新潟県史』資料編4(新潟県一九八三)に集成され、さらに広く知られるところとなっている。ここで奥山荘に関する膨大な研究を逐一紹介することは不可能であるが、上の成果を基にして、羽賀徳彦・阿部洋輔・田村裕・黒田日出男・青山宏夫らによる惣領制や荘園絵図、荘保境などに関する研究が行われ、奥山荘を舞台にした様々な世界が描き出されていったのである(新潟県一九八七など多数)。

なお、件の学術調査では、三浦和田一族の惣領である中条家の居館と伝えられてきた江上館跡の発掘調査が学習院大学の奥田直栄を担当として昭和三七・三八年(一九六二・六三)の両夏に実施された(中条町教委一九七七)。調査は、上の韋駄天山遺跡と併せて越後における中世遺跡学術調査の草分けと評価される。

この江上館は、鳥坂城などとともに昭和五九年(一九八四)に史跡「奥山荘城館遺跡」として指定され、その後旧奥山荘内の黒川村・加治川村など

の遺跡が追加指定となり、合併を経て2市1町地点が史跡指定を受けるにいたっている。そして中条町教育委員会では、平成三年度より江上館跡の整備を開始し、一年後の平成一四年五月に「奥山荘歴史の広場」として開園した(中条町教委一九九三～一九九七・二〇〇二)。この歴史の広場には、小規模ながら「奥山荘歴史館」が併設され、奥山荘の理解を助けている。その後、韋駄天山遺跡などの整備を経て、坊城館の整備へと向かっている。

また、発掘に関しては、江上館跡の西へ南方にかけての下町・坊城遺跡が調査され、館の周辺の様相が明らかとなってきた(中条町教委一九九七・一九九九～二〇〇一・二〇〇五)。そして奥山荘北条領主の黒川家関連遺跡でも調査が実施され(黒川村教委二〇〇一・二〇〇四)、徐々に資料が蓄積されてきている。

外にも、平成以前の考古資料については県教委の戸根与八郎、城館については伊藤正一、石造物については小野田政雄・本間弼に負うところが大きい(戸根ほか一九八〇、高橋ほか一九八二、小野田一九六八・一九六九・一九九二、本間一九六八)。また、中野豈任のユニークな研究も異彩を放っている(中野一九八八)。しかし何といっても永年郷土の歴史研究に精根を傾けてきた高橋亀司郎の果たした役割は、非常に大きく、生き字引的なその存在は各研究者に大きな影響を与えてきたと評価される。

幸いにこのようなフィールドを得た筆者も、諸先学に学びつつ、文物両面から奥山荘の往時に近づいていきたいと日々努めているところである。以下、上の史資料を用い、研究の到達点及び疑問点を示しながら奥山荘の実際にせまりたい。

(2)奥山荘の地勢からみた景観

まず地理的な景観をおさえることから始めたい。

第191図は、一六四七年の正保越後国絵図の北半部分である。一七世紀に入っているが、おおよその土地感はつかめると思う。また、本絵図が示す上限は、九世紀代におきたといわれる大地震であり(高濱二〇〇二)、その後中世を通じて地理的環境にそれほどの変化を考える必要はないものと思われる。ただ、中条町内の発掘状況からみると、近世絵図にみられる規模の清水潟出現は、一〇世紀初頭頃と考えられる(中条町教委二〇〇二a)が、ここでは大きな問題ではない。

最初に絵図をみて目に付くのは、多くの潟湖の存在であろう。多くの河川は砂丘に阻まれて直接日本海へ注ぐことができず、淀みをつくっていたのである。これは、湿地の耕地化に際して排水技術が非常に重要であったことを意味している。さらに重要なことは、本地域においては、河川と潟湖を結ぶ潟街道とでもいうべき内水面交通が第一の交通手段として想定されるということである。特に物資の運搬に際しては、ほとんどが水運を利用していると考えられ、潟はその物資が集散するターミナルであった(坂井一九九六)。それは、真平らな越後平野の地勢とも大きな関係がある(坂井一九九三・一九九五)。

次いで奥山荘であるが、荘域を南北に2分する胎内川があり、北方は荒川で外洋に達するが、南方は五〇kmほど内水面を下つてようやく河口に達する(中条町教委一九九三)。北方の荒川には大きな湊がないことから、多くの物資は信濃川・阿賀野川が合流し外洋にでる地点に築かれた沼垂湊・蒲原津・新潟津を経由したと考えられる。

また胎内川は、分水嶺にあたり、そのすぐ南方に位置する清水潟は、新潟からみて最上流のターミナル基地という位置付けが与えられる。おそらくこの点が、奥山荘の存立基盤であり、それが同様の立地をもつ福島潟の白河荘とともに、撰関家領荘園(『町史』古代51)として立てられた理由と考えられる(正保絵図に「新潟からの船着」の註記あり)。

(3) 奥山荘の村々

まず、荘園の住人をみていくこととしたが、これは考古学による分布調査も有効であるが、なにより譲状などにでてくる地名と現在の地名がかなりの比率で合致することから、往時の村々の概ねの位置を特定することから始めることとする。

譲状などにある地名で、現在の大字・子字などが残っているものを抽出すると以下のとおりとなる。

奥山荘北条領・胎内川以北

黒川・草水・江端・高野・東牧・塩谷・塩沢・山野・切田・波月・宮瀬・桑江・村上・荒井・金屋・乙・関・栖巻・荒沢・持倉・長谷・坪穴・黒俣・幾地・山本・赤谷・勝蔵・六本杉・窪・鮎谷・安角・大石・金俣・沼

奥山荘中条領

羽黒・極楽寺・飯積・赤川・鷹巣・笹口・中村・築地・村松・鼓岡・夏井・駒籠・鶏冠（鳥坂）

奥山荘南条領

関沢・長橋・鱒川・大塚・塩津・柴橋・貝屋・金山

これらを城館と共に地図上に落としたのが第162図となる。北条領が多いのは、山本以下の現関川村内の村々が一六世紀末の越後国瀬波郡絵図に記載されているためである。その外の地名は、譲状や相論などでほとんどが一四世紀以前から認められる地名である。

村々の立地は、大きく3つに分けられる。荒井や村松などの浜の村と塩谷や関沢・持倉などの山脈から延びる山間地に所在する谷間村、高野や大塚などの胎内川の扇状地の微高上に位置する湿地の村々である。ただし、浜の村にも田地が存在しているので、現在海岸沿いに地名が残っているのも、当時の範囲は砂丘内側にまで及んでいたことが知られる。

そして中世後半の館は、黒川、高野、金屋、鉾江、関、政所、柴橋、築地、金山などに認められ、境目の城と考えられる関、鉾江、金山を除けば、平場の流通の結節点に築かれていたことが看取される。

なお、唯一の砂丘上に存在する築地館は、荒川から砂丘内側に沿って存在した幹線道を押さえる立地であるということが出来る。現に伊達へ御料人が向かう際に、築地を通っていることをうかがわせる史料が残っている（『町史』428・486長谷川一九九五）。また、応永の大乱後、守護代方が永享元年（一四二九）〜宝徳元年（一四四九）まで築地を押領していた（『町史』360）のも、交通上の要地であったがためと考えられる。

(4) 奥山荘の境界

奥山荘は、建治三年（一二七七）に北条・中条・南条に三分された後、その所領ごとに流転を繰り返した。ここでは、荘境を改めて見直し、今に残る景観を抽出することを目標としたい。

現在荘境については、井上鋭夫説が出された後、北方の荒川保と奥山荘北条との境について井上説の明らかな誤謬を正した丸山・田村裕説が出され、さらに絵図が残る部分から西方の山塊部分についての細部を論定して地図にラインを引いた青山宏夫説（一九九四）に至っている。

しかるに胎内川を境とする奥山荘北条と中条境はともかく、中条と南条境、奥山荘南条と加地荘境については、井上説から進展していないようである。その後、本稿と前後して、青山宏夫がそれを検討している（青山二〇〇四）が、荒川保と奥山荘北条との境以外には地図にラインを落としていない（補註）。

実際、奥山荘を著名にしているところの井上鋭夫が中世の勝示と考えた巨石は、ほとんどが資料批判に耐え得ないものである。さらに無理に境界と

すると矛盾が生じることから、いわゆる傍示に関しては白紙に戻して検討する必要がある。また、きちんと製図された地図上に落とされた境案も提示されていないというのが現状である。

そこでここでは、一定の限界を認めながらも地図に境界を入れてみた（第245図）。

奥山荘北条―荒川保境（『町史』43・100・101・108・絵図2葉）

鍬江（桑柄）付近を描いた絵図を現地比定した青山宏夫の説に則り、絵図の地点から高坪山系にかけてのラインを定めた。このラインは、西方から鍬江館、根小屋城、吉ヶ沢城、蔵王城、円山城を通るのであり、これらの城は境目の城という位置付けが与えられる（水澤一九九七）。

蔵王の山麓から海までの境界は、丸山・田村説にほぼ従ったが、それが中世墳墓群である韋駄天山遺跡「村上山」の北麓を通ることが注目される。それは、墓地が境界の地に築かれるというシンボリックな事例を体现するものであり、主に黒川家が一四世紀後半から一五世紀前半にかけて残したものと考えられる（水澤二〇〇一）。また、海岸の境は、一六世紀末の瀬波郡絵図の郡境を念頭においたものであるが、北方の金屋は黒川領に含まれており（『町史』101・108・276・473・477・535）、荒川保領である新光寺・新保から北方へ境界が向かっていった可能性を考える必要がある。

一方鍬江の西方は、西側の小丘陵の尾根を北方へ走り、境目の城と考えられる南赤谷城を通って荒川へと下り、そのまま川を境とするラインを想定した。南赤谷城の東方は、基本的に郡絵図の知行主に拠ったものである。ここでも、郡境を越えて奥山荘域が存在していることに注目する必要がある。

中条―南条境（『町史』29・31）

櫛形山脈の西方の平野部については、関沢と飯角の境から、柴橋館をめぐり、柴橋川を南西に下り、城の山で西方へ折れ、村松浜小鷹宮へというラインを想定する。この内、譲状にでてくる「九郎大夫が新保の北の高き丘」は、現存する高さ5m・長径四五mの円墳である「城の山」（大塚）に比定され、浜の境の小鷹宮も現存しており史跡に指定されている。なお、平成一四年度の発掘調査で、城の山の南方から鎌倉きの遺物が出土しており（中条町教委二〇〇四）、その一帯が九郎大夫の新保にあたるものと考えられよう。そして山間部については、全く不明といわざるをえないが、西方から市ノ沢城、高つむり城のラインを結び、東方は坂井と上荒沢間の尾根筋を仮に想定しておく。

奥山荘南条―加地荘境

文書が残っていないため図示できないが、とりあえず金山のすぐ南方の境集落から大峰山、新発田市溝足城を結んだラインを想定しておきたい。西方の境は、いうまでもなく塩津潟で、浜は藤塚浜より北方となろう。

（5）政所条の所在

「政所条」は、荘園の中心であるにもかかわらず、長らく所在が判明していなかった。それは中世文書にみられる地名の多くが残っているにもかかわらず、政所地名が残っていなかったためである。ただ、本郷町が漠然と政所に含まれると想像されていたにすぎない。

ここでは、中条で最も重要な「政所条」の比定を行いたい（第193図）。

まず仁治二年（一二四一）の譲状（『町史』16）から始めよう。

「（前略）高野条のうち、三郎が所領政所条赤川村に胎乃川を越えて少分の田畑あり（中略）高野と赤川の境は胎乃川の北の端より高野の内たるべし。ゆめゆめ川を越えて高野の内あるべからず（後略）」

政所条赤川村という記述から、赤川村が政所条に含まれていたことがわかる。またこの境は、建治三年（一二七七）の譲状（『町史』29）でも「川を越えて高野の分あるべからず」と繰り返されており、胎乃（内）川の北岸にも赤川村の田畑があったことがわかる。

そして一三世紀末頃の製作とされる(田村一九八八・黒田一九八九)「波月条近傍絵図」によれば、胎乃川の北に「波月条」、南に「石曾祢条」が記されている。波月条と現在の並槻集落が全く重なるとは考えられないにせよ、地形的にみて波月条西境が現高野橋よりも西方にいくことはないと考えられる。

したがって政所条に赤川村が含まれるとするならば、石曾祢条の西側一帯が政所条に属する地域ということになる。

そして、それはまさしく地中から姿を現したのである。下町・坊城遺跡がそれで、D地点は鎌倉後期の領主居館、C地点は川沿いの立地で、潟から遡上してきた最終集積場であつたと考えられる。

これら遺構・遺物の質量からみて、本地点が奥山荘の鎌倉期の政所条の中心地にあたる可能性を考えている(水澤二〇〇〇・中条町教委二〇〇一、次節)。

そしてその周辺の状況であるが、まず水路をみていこう。明治期の地図からみて水上交通路は、大きく三つの水系に分けられる。山間の沢水を集めて南方に流れる船戸川水系、羽黒及び胎内川の水を集める坊城川水系、胎内川から水を引く大江水系である。現在と最も異なっているのは、昭和四一年の水害以降羽黒の水が南西の船戸川へと付け替えられたことである。これら三水系の水は、最終的に清水潟へと注ぎ、阿賀野川と信濃川の合流地点へと向かう。基本的に大江水系・坊城川水系が中条領、船戸川水系が南条領の船運・農業用水として用いられていたと考えられる。

このようにみれば、江上館が中条領の両水系を押える立地をもっていたことがみてとれよう。それは、主に坊城川水系を押えていた鎌倉期以前の下町・坊城遺跡D・C地点から、北方二〇〇〜四〇〇mの江上館へと拠点を移すことで、二水系を押えるとともに、庶子家である羽黒家の所領である羽黒―鷹巣間のルートへ圧力をかけるといった眼目があつたのではなからうか。

なお胎内川は、一三世紀代にはすでに「たいない(乃)川」(『町史』16 仁治二年一二四一)とよばれている。

陸路は、南北幹線としては、江上館から南方の駒籠の酒町を経て南条領へいくルート、赤川から柴橋を経て南条へ至るルートがある。東西幹線は、築地から草野、駒籠の酒町を経て坊城館の東側を通り、大輪寺を経て、羽黒へ到るルートがあり、これが坊城館から江上館への本拠地の移動に伴い、築地から鷹巣を経て江上館の北方を通過し、羽黒へと至るルートに変更される。この坊城館と羽黒を結ぶ道路は、「大道」(『町史』288)にあたると考えられ、鳥坂城が維持され始める一五世紀半ば以降、江上館の北方を通る直線道路へと重点が移ったと思われる。

(6) 信仰と寺社

ここでは、奥山荘の信仰をみていきたいが、史料の遺存状況から、黒川領と中条領についてみていくこととしたい。

黒川領 (表 56)

領内で確認できるのは、乙宝寺(乙寺)、金光山(金峰神社)・蔵王権現、山屋神社、東牧庵などで、特に前二寺に黒川家から寄進された奉納物が多い。

乙宝寺は、創建が天平年間に遡ると伝えられる古刹で、城家が奉納した本尊をはじめ、中世に遡る文化財が多数残されていた(水澤二〇〇二)。また、舍利が一三世紀後半に掘り出され(史料1)、それが応永の大乱時に黒川家の館にあり、危うく国外に持ち出されようとしたこともあつた(史料7)。また、一六世紀前半に集中して玉幡や華鬘が奉納されているが、これは享祿天文の乱前夜の不穏な情勢時に、当主黒川盛実の病氣平癒を祈願したものと考えられよう。

そして黒川家が最も尊崇していたのが蔵王権現で、鎌倉末期の柴燈鉢以来、懸佛、鰐口、神社建物を奉納している(史料2・5・8・20)。また、

一六世紀の末には、神社の狛犬を笹口村の沢惣平衛の子孫が奉納している。この一對の石造物は、越前の笏谷石製品であり、広域流通品である（水澤二〇〇一）ことからすれば、沢家は笹口浜に拠点をおく船持の海商であったと考えられよう。したがって、近世に繁栄を誇った浜の村々は、遅くとも一六世紀後半にはその基礎を固めていたということがいえよう。

なお、「奥山荘の境界」の項でも触れたが、境界に築かれた墓地である韋駄天山遺跡は、黒川家代々の墓所と考えられる（水澤二〇〇二）。

また、鼓岡で出土した弘治2年銘を含む道下経塚の五口の経筒及び大乘院の経筒一口（中野一九八〇）には、和泉をはじめ美濃・伊勢・讃岐・下野・大和（大乘院）各地の人々の願いが込められており、六十六部聖によって埋められたことがわかる。

中条領（表57）

領内で確認されているのは、羽黒の極楽寺、高野の海雲庵、大輪寺（円融庵・法応庵・観音殿）、弥勒堂、御基堂、安養寺、花山寺、七日町道場、御宝殿（般若院・玉輪坊ほか十口）、光明寺、羽黒権現、経塚（羽黒）、下町・坊城遺跡B地点の密教寺院などがある。

極楽寺は中条家代々の菩提所というも（『町史』七〇七頁）、詳細は不詳である。

そして遺存文書の関係で、中条領で最も密接な関係を示すのは、大輪寺である。中条家の祈願寺とされるが、文書の文言には、確かに「祈願成就」「祈禱」などがあるが、必ず父母「菩提」がセットとして現れてくる。極楽寺がどの程度重んじられていたかは、文書の遺存状況から不明であるが、その開基が茂継という点、そして茂継以降はその弟の茂資の家系が惣領家を継承していくことから考えて、大輪寺こそが最も中条家が帰依した寺院とすることができよう。なお、弥勒堂・安養寺・光明寺は、元々大輪寺と独立した寺院であるが、すべて寄進されて寺領となっている。

ここで、大輪寺の所在地を考えてみたい。

現地比定については、中野豈任による鼓岡所在説が出され、それ以後めだった反論は管見に入っていない。

中野説の概要は、沙弥彦鴨が大輪寺に寄進した田地が大輪寺北に所在（史料8）、それが鼓岡田地目録・土貢運上物等日記」にみられることから、その所在地を鼓岡とするものであった。ただし氏みずから註に記しているように、日記の該当部分が鼓岡以外の地を含めた可能性がある。しかしそれを否定する根拠は、全寺領を書き出したものであれば、それ以前の寄進地（史料7）がでてこないのは不自然とするものであった。

しかしながら、『奥山庄史料集』に「本文書今ハナシ」とあるように、後欠文書かどうかを確かめることもできない現状では、早計に過ぎよう。また、日記の文脈は、「門前屋地人部十人」を一月に二日ずつ合計二〇人分使うために、特に「寺之以北年貢一貫文」を「受用」と記されているように思われる。そしてその後記されている年貢額は、一貫五百文であり、その一部を用いて、人部の費用に充てると理解できるのではなかるか。したがって、鼓岡に大輪寺が所在していた可能性は残るにせよ、そのように断定することは難しいと考えられよう。

ではどこに所在していたであろうか。文書に戻ろう。中条政義（資）は、貞治七年（一三六八）に大輪寺に石曾祢内の田地を寄進している（史料6）。そこには「御寺の南西北四至界これ治むるところなり」と記されている。東がでてこないが、これは大輪寺が東の境であり、寺院の西側一帯が寄進されたものと理解できよう。なお、重ねて寄進とあるのは、父茂資の鼓岡一円寄進に重ねてという意味であろう。

またいうまでもなく、先にみた沙弥彦鴨が寄進した田地は、大輪寺の北方に所在しており、これで北方と西方が大輪寺の寺領となったのである。

さらに中条寒資らは、至徳三年に大輪寺法応庵へ田地を寄進している（資料13）。その範囲として「東限寺家、南限大道、西限御基堂前路、北限小河」とある。東境に寺家があることから、これは資料6の田地に接する範囲と考えられよう。なお、南を限る（東西の）大道というのは、坊城館と羽黒を結ぶ幹線道路と考えられ、大輪寺の位置はそれよりも北側に所在していたものと想定される。

また、至徳三年に羽黒景茂が、大輪寺へ寄進した「市場」（史料12）の土地は、確証はないが石曾祢条に所在する七日市に接する田である可能性が

あろう。

したがって、大輪寺は石曾祢条内に所在していたと考えられる。

なお、大輪寺の所領は、外にも赤川、北条の江端村、加地莊東川尻などに所在しており、強大な資力を有していたことがわかる。

そのほか、大輪寺と区別される寺社としては、海雲庵、御基（墓カ）堂、花山寺、七日町道場、御宝殿、羽黒権現などがあるが、海雲庵・羽黒権現及び弥勒堂のだいたいの場所が想像できる以外は、所在不明である。

そして下町・坊城遺跡B地点に所在していた密教寺院は、南方の川を挟んで「常楽寺」という地名がのこっていることから、その可能性がある。ただし、江上館に非常に近接した位置関係からして、応永の大乱時に中条家とともに籠城した「御宝殿」にあたる可能性や、中条家の厚い保護を受けていた大輪寺と御宝殿衆との関係をも考慮して比定する必要がある。

(7)石造物(第194図)

奥山荘内には、主に一四〇一五世紀の石造物が遺存している。特に板碑は、一四世紀代に集中的に造立されており、それからみた南北朝期の奥山荘をまとめたことがある(水澤二〇〇一)。すなわち鎌倉後期は南条中心、北条(黒川)は南北朝前半に集中し、中条は南北朝後半中心という相違が認められたのである。

ここでは、それに一五世紀代中心の石造物である宝篋印塔・石仏を加え、その後の様相をみていきたい。

まず、宝篋印塔であるが、黒川領の西半分及び中条領に集中している。そしてその数量及び分布域は、石仏よりも少なく、より限定された階層に受容された石塔であったことが判明する。

対して石仏は、黒川領では限定的に認められるのみで、中心は南条を含む中条領にある(水澤二〇〇二)。石仏が造られた頃の南条は、中条の影響下にあると考えられるため、石仏は中条領の人々が中心となって造立したと考えられる。また石仏型式が、黒川領と中条領で異なることも興味深い。これらの中世石造物もまた、奥山荘の動静を物語る貴重な証人である。

(8)その他の風景

ここでは、上にあげた宗教施設以外の風物を文献からひろってみたい(表65)。

中世前期には、北条の草水に「鑄物師」があり、「金屋」も同様の職種の人々の所在地と考えられよう。そして胎内川を挟んで北に「高野市」が、南に「七日市」があり、中条にはさらに「駒籠の酒町」という町場があった。また荒川保内ではあるが、北条領との境付近に「非人所」が存在し、これは後の黒川領の「非人興野」に含まれる可能性があるだろう。

また、黒川領内に「湊」が、南条に「足洗津」という津が存在していたことがわかり、流通拠点が各所にあつたことを裏付けている(史料7・8)。さらに一五世紀以降では、黒川領に「南町」、中条領に「五日町」が存在しており、さらに七日市は「七日町」へと発展していた。そして黒川領の「土作」や中条領の「金屋路」の存在は、職人との関連がうかがわれる。

なお、史料12は、貴人の接待に際し、「かわらけ」が必要であつたことを物語る貴重な文献である。

このように、田畑以外にも、町場や津湊が点在し、各種職人衆が存在していたことがわかる。

ところで、中世遺跡を調査すると、量の多少はあっても鉄滓が出土する。これは、鑄物師が村々を移動しながら仕事をしていたことを示すものと考

えられよう。また、下町・坊城遺跡A・C地点では、中世の前半に漆器の作成が行われていたことが判明している（中条町教委一九九七・二〇〇一）。このようにみてくると、いまさらながらではあるが、荘園経済が、多くの人々の協業の上に成り立っていたことが感じられるのである。

(6)戦国期の奥山荘と城館

いよいよ、まず一五世紀後半以降の奥山荘の状況を文書から確認しておきたい。

黒川家では、宝徳三年（一四五二）～享徳元年（一四五二）にかけて、黒川御親類高野北殿（方）が出奔（『町史』340・347・348・349・350・354・355・356）、黒川→越後府中→伊達→参洛と所在地を転々としていた。そして伯父四郎（高野北と同一人物か）は、相伝の文書を持ち出して蓄電しており、黒川氏実は正当性の確保に躍起になっている（『町史』352・353・357～359・361・362・375・376・380～395）。これらから応永の大乱時の基実討死という変事後、家中に動揺が生じていたことがわかる。

また、文明十二年（一四八〇）以降は、根岸という所領をめぐって、中条家と争っている（『町史』429・430・439～450）。

そして、中条家は、関東での働きによって、延徳2年（一四九〇）に黒川知行分内、金屋名、波月、宮瀬、非人かう屋をえることになる（『町史』473）。

それらの恨みから、明応九年（一五〇〇）に本庄へ向かった際、黒川・長橋家によって中条朝資が討死させられるにいたっている（『町史』483）。そしてこの本庄の乱の恩賞として、中条家は黒川領の「高野郷」を得た（『町史』491）が、二年とたたない内に黒川方へ進めている（『町史』503・504）。現地支配を行い難いこともあって、政治的判断で返却したものと思われる。

また、応永の大乱中に関沢掃部助頭元が守護の被官となったこともあり、永正七年（一五二〇）には、奥山荘南条の関沢孫三郎分・金山四郎右衛門尉分・長橋分が中条に加えられている（『町史』510・512）。これによって、名実共に南条が中条領に加わったこととなる。

しかしまた、伊達時宗丸入嗣問題で中条家と黒川家の対立が生じ、鼓岡・夏井が係争地となっている（『町史』557～563・567）。

そして謙信代には、越後統一にあたっての功により、中条家が国人衆の筆頭となるに及んでいる（『町史』参考資料13「中条越前守藤資伝」）。しかし謙信死後の御館の乱時には、黒川方が中条の鳥坂城を一時占拠しており（『町史』603・607・608）、その対立は、南北朝期～会津国替えまで三〇〇年近く続いたことになる。

なお、文献にみる城館を抽出したのが、表35である。古くは、鳥坂城郭が『吾妻鏡』にみえ、南北朝期の内乱時に南条の寺尾城、中条の観音俣城・鳥坂城、北条の黒河城が使用されたことがわかる。

一五世紀に入ると、「要害」・「城」の語が散見し、使われ方からみると「要害」は土塁・堀をもつ居住機能をもつ館を意味するように思われ、その出現とともに現れてきた用語と考えられよう。したがって「城」は、臨時的な山城を意味しているよう。それが、一六世紀に入ると、山城の麓に居館が付属するようになるため、すべて「城」の標記となる。

そして国人領主の館は、例えば江上館が七日市（町）・駒籠の酒町という市町に近接していたように、館は荘園経済の中心であり、流通を押える地点を占めていたのである。そしてその屋敷の内部では、都の最先端のモードを取り入れた都市的な文化が花開いていたことが発掘調査から明らかとなっている（中条町教委一九九三～一九九七）

しかし、戦乱の恒常化は、伝統的な館を放棄させるに至る。それは一五世紀の後半に山城を維持するようになり、遅くとも一六世紀前半の内には、館を放棄し山城とその山麓居館からなる根小屋式城郭へと本拠を移すのである（斎藤一九八九・一九九七、水澤一九九三）。そしてそれを成し得たのは、

国人領主級の人々のみであったことが城の在り方から判明している(水澤一九九七)。

移動の時期は、奥山荘中条家では一五世紀末(水澤二〇〇〇)、中条町教委二〇〇一)、奥山荘黒川家や小泉荘加納の色部家では一六世紀前半の内(神林教委一九九二、黒川町教委二〇〇一)と考えられる。

さらに一六世紀第2四半期〜第3四半期にかけては、出土遺物が極端に減少する(水澤二〇〇一)。これが軍備に財を費やしたためか、陶磁器の流通経路に大きな変化が生じたためかは論定できないが、大きな問題である。

越後の戦国期が一五世紀半ばからという説(矢田二〇〇一)にたてば、守護が京都から越後に帰国して常駐するようになったことにより、国人領主たちの大番役が京都から越後府中へと負担が軽減されたことになる。それは、彼らの経済的負担が著しく軽減されたことを意味し、それを端的に示すのが越後の一五世紀代の遺跡から出土する豊かな遺物群であるということがいえよう(北中研一九九一)。

そして、その豊かさこそが、本拠を動かすというとてもない財を必要とする偉業をなしとげた原動力ではなかったであろうか。上で述べたように中条家が周囲の国人領主たちよりも迅速く本拠を動かし得た理由は、守護が在国するより半世紀ほど早くから大番役を免除されてきた(『町史』360)ためと考えられよう(斎藤二〇〇〇)。もちろん、江上館の隆盛も同一線上に位置付けられる。

なお遺構からみると、国人領主の館は、一五世紀に入ると土塁と堀で囲まれ、他の家臣団と隔絶した様式をとるようになる。それは、実際の機能を備えながらも、視覚的・象徴的に領主権力の一点集中を具現化したものともいえる。それは、南北朝以後に生じてきた惣領制から嫡子単独相続への流れの延長線上にあり、その後に築かれた山城も多分にみせる要素を有している。

平野に現れた土の壁・矢倉門から、より遠くからみえる山上に靡く多数の旗・矢倉へという在り方は、戦国期を読み解いていく際の重要なキーワードではなからうか。

付・河間の城

中条房資は、応永の大乱時に「居館を引き退き河間の城に取り籠る」(『町史』360)と述べている。その状況は、「両大將が築地の広原に陣を取り、加地・新発田・豊田・白河の面々が関沢より金山まで充滿し、北は黒河・荒河が蜂起する」という絶体絶命の危機であり、本拠地である居館を捨てて、河間の城に籠城したものである。そして敵勢は、中条領内に乱入したが、冬が近付いて引き上げていったため、かろうじて命脈を保ったというものであった。

さてしかし、河間という地名は残っておらず、不明瞭な部分が多い。ここでは、その所在地について考えておきたい。

まず、応永三三年(一四二六)当時の房資の居館はどこかというに、その時期から考えて江上館であった可能性が高い。したがって、江上の地から河間へと移動したことになる。

そこで、ヒントとしては、籠城中に「河間の八幡宮を建立」したという記述である。中条領内の現存する八幡宮を『町史』資料編5(九〇八・九〇九頁)から抜き出すと、三社の存在が知られる。すなわち、鷹巣、新館、赤川の八幡宮である。

現在のところ、館が存在するとされているのは新館のみで、それと八幡宮の存在から、新館館跡を河間の城に比定する研究者もいる。しかし、現新館集落は、鷹巣の領域に含まれていたと考えられ、その鷹巣は庶子家の羽黒家の所領であり(『町史』202〜204・207・303・479)、翌年には羽黒家の裏切りを責めて、滅ぼしているほどである。まして、鷹巣の目と鼻の先の築地に敵軍の本陣が置かれている状況で、間に湿地が存在していたにしても、そこへ移るということはあり得るであろうか。

そうすると、中条惣領家の代々の所領で、八幡宮が所在しているのは赤川のみとなる。館の存在は知られていないが、地名と出土遺物から寺院の存

在が想定され、当時の板碑も所在している。また場所も、政所条の北西に位置し、北方に胎内川が流れる要害の地であり、敵軍から離れる位置にあたる。そして、平成一八年度の発掘調査で、赤川の八幡宮の一の鳥居が出土したのである(胎内市教委二〇〇七)。鳥居は、現八幡宮から二町半の距離でみつかっており、その放射性炭素年代測定によると、一四世紀代の年代値が出されている。表皮との時間的關係が問題であるが、本調査によって赤川の八幡宮が河間の八幡宮である可能性がにわかに現実味を帯びてきた。したがって、ここでは、赤川地内に河間の城の存在を考えておきたい。

2 奥山荘政所条遺跡群―坊城館から江上館へ

(1) 政所条遺跡群の概要

ここでは、前節に述べた奥山荘の景觀の中から、発掘調査が最も進んだ政所条遺跡群について、その現状をみていきたい。

政所条遺跡群は、史跡奥山荘城館遺跡の江上館及びその西へ南方にかけて所在する下町・坊城遺跡の総称である(第64図)。立地は、扇状地端にあたり、荘園内流通の要の位置を占めていたと考えられる。

発掘調査は、史跡整備に伴う調査を含めて平成三年～一一年まで実施し、現在は江上館が史跡公園としてオープンしている。それまでの調査成果は、調査報告書以外にもいくらか公にしてきた(水澤二〇〇〇b・二〇〇三・二〇〇四b)が、平成一五年度にD地点の鎌倉時代屋敷がみつかったため、改めて遺跡群の位置付けを考え直さねばならないことになった。

以下、地点ごとに説明する。

① 江上館 伊藤ほか一九七七、水澤一九九三～一九九七・一九九九a)

最も北に位置する江上館は、一五世紀代の武家居館であり、鎌倉御家人で奥山荘に地頭職を得た三浦和田一族の中条本家が居住者と考えられる。立地は、標高約一八メートルの扇端、段丘低位面に築かれており、ほぼ一町四方の主郭と、その南北に附属する郭からなる。

主郭内は、六〇m四方(二、六〇〇m)を測り、基底部幅約一〇mの土塁がめぐらされている。高さは、最も遺存のよい北東隅付近では郭内より二・五m強の比高差を遺していた。そして調査の結果、当時はさらに一mの比高差をもっていたことがわかっている。プランで特徴的なことは、北方の虎口部分を北に張り出させていることで、それに合わせて土塁も北方へ屈曲させている。虎口は、南北二箇所が開かれており、最終段階ではともに折れを伴う。主郭をめぐる水堀は、主郭と北郭間が九・六m、主郭と南郭間が一・一八m、東側が一五m、西側が一六・二〇mとなり、下の南西隅がやや広く穿たれている。ただし深さは、最も幅の狭い北方の虎口脇で二mを越えているものの、概して一m前後と浅い。

注目される遺構は、大量の遺物を出土した主郭内南西隅の水溜状遺構(第三二七号遺構)、郭内を区切る溝及び堀、コの字状の平面形態を有する主殿級の大型建物(第6号建物)、東方土塁際の埋甕遺構等があり、一五世紀後半の最盛期には、場の使い分けがなされていたと考えられる。

遺物は、一三～一五世紀に生産された中国産陶磁器や珠洲焼等が大量に出土しているが、主体は一五世紀代にある。注目されるのは、越後北部の阿賀北の地に京都系の技法でつくられた土器皿がまとまって出土したこと、ロクロ成形を含む土器皿の変遷の概要がつかめたこと、青白磁梅瓶・砧手青磁・青磁八角坏・黄褐釉四耳壺・緑釉・李朝粉青沙器梅瓶・中国天目茶碗・漆塗り天目・瓦器・信楽壺・茶臼等の娯楽・儀礼・室礼関係遺物、地鎮関連の墨書資料(土器・石)、猿面硯・高級漆器の存在、北郭からの鉦鼓の出土等が注目される。

北郭内は、東西七五×南北二〇m(一、五〇〇m)を測り、基底部幅九m程の土塁がめぐり、北方で食い違い虎口を形成していたようである。また、南西隅から西方へと土塁が一五m程延びており、さらに南方に折れて主郭の土塁と平行に三〇m以上続いていたと考えられる。堀は北方にも認められ、

虎口付近で幅一〇mを測るが、土塁のあるところでは六・七・五mに減じる。そして西方では、西に延びる土塁の脇を巡っているが、途切れており、主郭の堀とは連結しない。北郭は元来居住区であったが、遮蔽施設が堀から土塁へと整備される段階で馬出へと性格を変えている。

南郭内は、東西五・二mで、南北は現時点では不明である。堀は、主郭の堀から南北方向へと延びており、幅七・七・九mを測る。土塁は今のところ確認されていないが、明治期の地籍図から存在していた可能性が高い。機能的には、馬出しの役目を果たしていたものと考えられる。また、主郭から橋をわたった地点に石敷の遺構がみつかり、橋に関連する遺構と考えられる。

このように、本館は、郭配置や建物構成・遺物のグレードからみて、国人領主クラス以上の居住者が想定できる。

なお江上館は、史跡奥山荘城館遺跡の一として整備が進められ、平成一四年度より史跡公園として公開されている(第60図)。

②下町・坊城遺跡A地点(水澤一九九七a・一九九九a)

本地点は、江上館の西方に隣接する調査区である。すぐ西側には、四〇×三〇m程度の溝に囲まれた石組井戸を伴う屋敷地二区画などがみつかり、いる。时期的には、一三〜一五世紀代を中心としたものである。遺構は、掘立柱建物八四棟・井戸十七基に上る。また、両屋敷の間及び南屋敷の東方には、道路跡も認められた。これらは館との位置関係から、一五世紀代段階では家臣団の屋敷地ではなかったかと考えている。なお井戸は、ほぼすべてがなんらかの施設を伴うものであり、領主の館と比べても遜色のない側石組等、円礫を多用したものが多し。また本地区は、館の廃絶後の一六世紀末〜一七世紀代にも唯一利用が認められ、越中瀬戸や肥前系陶器の良好な資料が出土している。

そして屋敷地のさらに西方の地点には、一二〜一三世紀代を中心とする遺構・遺物がみつかり、多量の遺物群が伏流水が自噴し始める地点(川跡)より出土した。ここからは、白磁水注・碗皿、青磁碗皿、青白磁合子、珠洲、土器等の陶磁器類とともに多量の木製品が出土した。木製品には、一一世紀以降の漆器碗皿、鋏、下駄、槽、札、櫛、火鑽板等の生活用具の外、大量の付木や鐙、陽物、刀形、鳥形等の形代も含まれている。また、漆器皿の荒型や糸巻といった生業関連の遺物も出土しており、注目される。

③下町・坊城遺跡B地点(水澤二〇〇〇a)

同B地点は、A地点の南西に位置しており、約五〇m四方の溝に囲まれた区画が南北二区画みつかり、いる。遺構は、掘立柱建物五八棟、井戸二基を確認した。

时期的には、北方では古代の遺物密度が高く、中世の遺構は多くない。ただし、不整形の土坑から八点の墨書礫が出土しており、内二点に天文一八年(一五四九)・元龜三年(一五七二)の紀年銘が認められた。前者には「光明真言」「七廻忌」が、後者には「金剛名号」が墨書されている(水澤一九九七b)。

南方は、一五世紀代が中心で、五・七寸の柱根を多く残す三間×七間の身舎に四面廂を有する東西棟建物(九・八m×一八m、総床面積一七六・四㎡)がみつかり、いる。この建物の周囲からは、護摩杓(大杓)・護摩炉・金剛鈴・莊嚴具の一部・五輪塔の火輪などが出土しており、密教寺院の御堂と考えられる。そして、北側に石組を伴う水溜め状遺構が設けられており、南方を中心に比較的大型の建物などが確認された。また仏具以外の遺物には、江上館にも劣らない高級陶磁器や茶臼、櫛子(皆朱漆器)といった領主階級のステイタスが認められ、館と密接な関係にある寺院と考えられる。そして御堂と前後して、方形溝に囲まれた仏堂かと考えられる遺構も確認されており、少なくとも館の存続期間には宗教空間として機能していたものと考えられる。

④下町・坊城C地点(水澤二〇〇一a)

江上館の西南約四〇〇mのC地点では、L字形に流れる川の両岸及び南方を区切る川の北方に立地した居住地がみつかり、いる。时期的には、一三

一四世紀代が主体であるが、一二世紀以前の遺物や川の埋没後に営まれた一五世紀代の遺構・遺物もかなりの量が出土しており、中世を通じて生活が維持されていたものと考えられる。

遺構は、掘立柱建物一〇七棟・井戸二二基等があり、南西隅では一五世紀代に川を礫や枝で埋め立てて作った道路敷もみつまっている。なお本地点では、石組井戸はみつからない。

本地点を特徴づける遺物は、大量の土器皿と漆器である。土器皿は、等該期の遺物の過半を占めており、越後では特異な組成である。これは、瀬戸美濃巴紋瓶子・水注、青磁大型香炉・双鱼紋皿、青白磁、緑釉盤等の高級陶磁器と共に遺跡の性格を物語っている。ただし北隅では、小鍛冶の炉跡もみつっており、職人の存在も認められる。そして二条の川跡からは、大量の焼物とともに呪符・下駄等の木製品が出土している。中でも注目されるのは、一五〇個体を越える漆器である。種類には、椀・皿・盆等があり、白木の椀・皿も三〇個体を数えた。そのほとんどが総黒色の製品であるが、二割程漆絵を有するものもある。これらにより、当時における漆器という木製食器の重要性が明らかとなったといえよう。

本地点は、潟から上がってきた物資の荷揚げ場にあたることから、大量の遺物が出土しているが、土器を使う環境にもあり、次のD地点と密接な関係にあった場であった。

⑤下町・坊城D地点（坊城館、水澤二〇〇五a）

平成一五年度の発掘調査で、鎌倉時代の屋敷跡がみつき、確認調査を追加して区画溝の範囲を追跡したところ、南北六〇m強で東西八〇m弱の屋敷地であったことが判明した。ただし西辺は、数条の南北溝が存在しており、屋敷の西側の区画が時期によって異なる。建物は東寄りに集中していて、同じ場所に何度も建て直されており、四〇五のまとまりがある。これらのほとんどが総柱建物であり、鎌倉後期のものである。したがって、波月条近傍絵図(第195図)に描かれた領主屋敷に相当する建物と考えられる。なお西側には遺構が少なく、広場的な空間であったと考えられる(第196図)。

詳細な遺構変遷については、報告書を閲覧いただきたいが、ここでは二棟の大型建物を紹介しておく(第197図)。

第63号建物は、西よりの二箇所を除いて総柱である(第253図)。総床面積は、九五・七㎡を測る。身舎部分は三部屋で、柱間二・一m間隔、南北の縁は二・〇m間隔の寸法で、北東隅の柱がない。南北に縁が付く。主要な南北の柱通り及び南縁の柱穴に土器を、身舎西よりの二柱穴には鎌及び芋引金を入れている。

第75号建物は、三間×二間の身舎南辺よりL字形の回廊が東へ、そして北へと延ばされている。身舎は総柱で、南が二・五m、北一間が三・六m、東西は二・四m間隔である。北及び西に縁が廻る。回廊は、一間二・五m幅で、南辺が七間一六・八m、東廊が二間六mである。身舎と東廊の間には、東西七・二m×南北六mの空間があり、中庭と想定される。建物部分の総床面積は一一六㎡で、中庭部分を加えると一六〇㎡ほどになる。また、東廊北端から身舎北縁にかけて長さ一四〇cm、巾三〇cm、深さ五〇cmほどの細長い穴が二・四m間隔で四列掘られており、両端の遺構底面にのみ柱穴が認められる。これらを塀の基礎と考えると、その西端と身舎北縁の間二mが出入り口である可能性が高い。遺物は、北縁中央の穴より銭七枚がまとまって出土したほか、北縁東端の穴から山茶碗が出土するなど、北辺のピットより出土した遺物が多い。

井戸は八基以上見つかっているが、その中に石組み側を持つ井戸がある。北陸では基本的に一五世紀代に普及し始める(北陸中世考古学研究会二〇〇一、水澤二〇〇二)が、ここでは一四世紀前半代に現れていることが注目される。金沢でも近年、鎌倉以前に遡る例(金沢市二〇〇三・二〇〇四)がみつっており、古い時期から部分的な技術伝播があったと考えられる。なお越後では、石組側井戸自体が非常に少なく、政所条遺跡群以外では、上越地域のいくつかの遺跡(水澤・鶴巻二〇〇三、新潟県教委二〇〇三など)を挙げられる程度である。

遺物は、館の北側を中心につくね成形の土器が大量に出土している。鎌倉時代に限ると土器の占める比率は、九五%以上と圧倒的である。ただし、

青磁・白磁も多数認められ、珠洲陶の他に笹神陶も出土している。また、長崎産の石鍋や東濃系山茶碗・皿も数点出土しており、これは北東日本海沿岸地域の領主階級の中世前期の遺跡から共通して出土する少数遺物といえる(高橋二〇〇三)。

以上の発掘状況から、本屋敷は鎌倉後期の地頭屋敷であると考えられることから、平成一七年に史跡奥山荘城館遺跡への追加指定が実現した。

(2) 遺跡群の変遷

D地点に鎌倉時代の屋敷が発見されたことによる拙稿(水澤二〇〇三)からの大きな展開は、「大道」の問題である。以前は大道を、江上館の北側から東へ延び、鳥坂城へと至る旧彦五郎街道に比定した。すると、大輪寺の位置が大道の北に位置するという同時代史料により、現在の寺院の位置とは異なった位置を想定せざるをえなかった。ところが、江上館の南方に鎌倉期の屋敷がみつかったことにより、その段階では石原館から南西方へ折れるルートが、大道であった可能性が生じてきた。そして大道をどのように考えると大輪寺の位置が現在の位置から動いていないという想定が可能となる。すると、境内に多数現存している南北朝期以降の石造物群の存在を容易に説明することが可能なり、所在地問題の決着に一步近づいたように思われる(前節)。

以下、C地点の報告書に記した遺構変遷(水澤二〇〇一a)にD地点の内容を加えて政所条遺跡群の変遷を説明する。

① 遺跡変遷二 一一～一二世紀

A地点では、川の周囲に小規模な建物が点在する。C地点では、北方に溝があり、その南方に建物が認められる。本来、溝の北方に中心があったと思われるが、近世の川によって壊されている。D地点でも、北方で小規模な建物群がみられるようになる(次期も同じ)。

② 遺跡変遷三 一三世紀前半

A地点は、前段階に同じ。B地点は、川の南北に小規模な建物群。北方には、道路と思われる並行溝が認められる。C地点では、川の東西に建物が多数建ち並び始める。特に西方で縦長の南北棟が並び、溝で画されているのが注目できる。また、埋没した川の北方の東方に溝が穿たれ、建物を復原できなかったが、遺物の分布状況から溝の西方に居住域が広がっていた可能性が高い。

③ 遺跡変遷四(第197図) 一三世紀後半～一四世紀前半

江上館は、後に館となる地点の東西方向に川が流れ、その南北に建物が展開し始める。A地点は、東方に溝に画された空間が認められ、調査区全域に建物が広がる。青磁劃花紋が鎬蓮弁紋より多いことから、部分的に前代に含まれるものがあるものと思われる。B地点は、ほとんど停滞している。C地点は、旧川の西方に遺跡が展開する。てづくね成形土器が多数川跡に投棄されている。D地点は、溝に囲まれた屋敷地(坊城館)が営まれ、大型の総柱建物が複数配置される。北方を中心に大量のてづくね成形土器が廃棄されている。最終段階では石組側をもつ井戸が伴う。地頭屋敷と考えられる。C地点とともに、最盛期を迎える。

④ 遺跡変遷五 一四世紀後半～一五世紀初頭

江上館は、館の体裁をなしていたかどうかは不明瞭であるが、D地点の坊城館が廃絶した後に本拠を移動した可能性はある。A地点は、川がほとんど埋没し低地となっており、その東西に屋敷地が認められる。B地点も川はほとんど埋没し、その南方にいくつかの建物が建てられている。C地点は、やや北方に建物が集中するが旧川の南方・東方にも居住域が広がる。D地点は、屋敷地が本期間内に廃絶し、遺跡の中心が南西に移る。

⑤ 遺跡変遷六 一五世紀前葉(瀬戸後Ⅲ期)

江上館は、館の原形ができあがった時期である。西より以後館の廃絶時まで維持される水溜と南北方向の区画溝が穿たれる。これはおそらく、応

永の大乱（一四二六年）後の居館整備を意味するのであろう。したがって、本期以後この地点が中条の中心となる。A地点には、溝に画された三〇m×四〇m程の屋敷地が二区画設けられる。真北に土塁が築かれている江上館と方位は一致していないが、その後も一致することはないので、本地点はそのような地割りがあったと考えられる。B地点は、区画溝に囲まれた屋敷地が認められる。南方には、溝に囲まれた小規模な堂がつけられる。C地点は、前代の居住域を踏襲して五箇所ほどのまとまりをなしている。東端に南北道が走る。D地点は、旧屋敷地の南西方に溝に区画された屋敷地が営まれるようになる。

⑥遺跡変遷七(第17図) 一五世紀中葉(瀬戸後IV期古)

江上館に確実に堀・土塁が伴い、それが本期の内に大規模に拡張され、最終的な規模となっている。最盛期には、郭内が堀によって南北に仕切られ、南方が晴の空間、北方が日常空間と使い分けられている。現在、江上館は、この時点の姿で史跡整備を行っている。A地点では、四箇所以上の屋敷地が認められ、位置関係から上級家臣団の屋敷地と思われる。B地点は、南方の五〇m四方の屋敷地に建物が集中する。出土遺物から密教寺院と考えられ、館の整備と軌を一にすることからみて館と密接な関係にある寺院と考えられる。また、北方西側に道路が認められる。C・D地点は、前代の流れの内にある。

⑦遺跡変遷八 一五世紀後葉(瀬戸後IV期新)

江上館は、最終段階である。建物は、わずかに残っている程度となる。そして、本期を最後に、本拠が鳥坂の地へ移る。A地点は、前代の屋敷割りを踏襲している。B地点は、屋敷の区画が変わる。寺院は一部の機能を残して、館とともに移ったと考えられる。C地点は、居住域が南方に移る。細かい屋敷割りが認められる。特に南東隅の重複が激しく、この頃D地点も南方に居住区が広がる。

⑧遺跡変遷九 一五世紀末～一六世紀(瀬戸大窯)

B地点は、小規模な建物が残るのみであるが、北方には墓が認められ、一六世紀後半の紀年銘を含む墨書石が八点出土している。C地点は、前代の屋敷割りを踏襲しており、館の移動後もあまり影響を受けなかったようである。D地点は、最も南方に石組側をもつ井戸が認められる。

⑨遺跡変遷一〇 一七世紀

中条家の移封後の江戸時代になって、A地点の東方にのみ屋敷地が復活する。その後は、一帯が田畑となっていくたものと思われる。

以上のような変遷から、南方の坊城館より北方の江上館へと一五世紀前葉に本拠地を移したことがわかるが、そのねらいは有力庶子家である羽黒家を牽制するとともに、もう一方の有力庶子家である内水面を押さえる砂丘側の領主築地家との連携強化という直接的な眼目が窺われ、きたるべき戦国期居城の鳥坂城への胎動を準備したものと評価できよう。

(3)遺物量からみた政所条遺跡群

ここでは、右でみてきた遺跡の変遷の裏付けとなる遺物量を提示し、他遺跡との比較を行う。

表60は、中世の指標となる青磁の破片数を地点ごとに示したものである。

劃花紋は、三浦和田氏が本格的に入部してくる以前の状態を示すものである。下町A・C・Dなどは、一定程度前代の支配階層である城一族に関連するものである可能性がある。

なお、劃花紋以前の白磁の点数を記すと、多い順にC地点一四三点、D地点六六点、A地点四六点となり、全体で二七〇点を越えている。ただし、D地点は北方の館部分に集中しており、密度ではC地点より濃くなることからすれば、前代の中心的な居住地に新たに地頭としてやってきた三浦和田

一族が住まいを設けた可能性が考えられよう。それは、神仏・儀礼・心性といった前代の諸々のものを受け継ぎ、支配者としての正当性をも手中にするための手段であったと思われる。

次に、三浦和田氏が鎌倉での足場を失い、一族が在地領主として積極的に経営にかかわってくる鎌倉後期の状態を示すのが、鎬連弁紋である。C地点が飛びぬけて多いが、D地点では高級器種の細高台(Ⅲ類)が半分を占めており、館としての特徴を示している。

そして、中条家が庶子家の上に立つ端反碗以降の時期になると、江上館の出土量が群を抜くようになる。

次いで、青磁以外の遺物を含めて、他地域の遺跡との比較を試みたのが表23である。

下町Dは鎌倉後期中心で、下町Cも鎌倉に主体があるが一五世紀代にも継続する。江上館・藤島城は一五世紀代主体、浪岡・根城は一五～一六世紀、朝倉館は一六世紀代ということとなる。

青磁・白磁は、中世後期、特に一五世紀代に出土のピークをみる。表にはないが、青森の十三湊遺跡からも大量の出土をみている。そして一六世紀には、減少傾向にある。

青花は、一六世紀代の遺跡が主体である。

中国鉄釉、その多くは、天目茶碗であるが、これは多くが一五世紀に流通したものである。ことに江上館では、瀬戸・美濃よりも唐物天目の方が多く出土しており、注目される。

朝鮮陶は、中国天目と入れ替わるように一五世紀末頃より出土数が増え始める。

瀬戸・美濃は、日本海沿岸地域では、大窯1段階まで大量に出土するが、一六世紀中葉からまったく振るわなくなる(水澤二〇〇一b)。また、最も必要とされたのは、天目茶碗であり(水澤二〇〇一a)、北へ行くほど、時期が下るほど、皿類の比率が高い。私は、古瀬戸に特別な意味を認めない立場をとる(水澤二〇〇一c)。

重貨である国産陶器は、当然ながら産地から離れるにしたがって、少なくなる。

瓦器は、一五世紀代を中心に出土する。これは、唐物天目と同様の傾向であり、組物として動いている可能性が考えられる。

土器は、方形居館体制(前川一九九五)と一体的な儀礼を受け入れた地域で必要な器であり、まとまった量は出羽以北から出土していない。

なお、漆器については、遺存状態に左右されるためC地点でふれたのみであるが、その塗りによって居住者の階層を推定できる重要な遺物であり、忘れることのできない遺物である(四柳一九九七)。

そして、D地点の鎌倉期の屋敷地である坊城館と、室町期の居館である江上館を比較したとき、土器をひとまず措くとするならば、概ね十倍ほどの物量差が認められる。流通量の増加と富の集中がここからみてとれよう。

ここでは、比較的まとまった量の遺物を出土した領主階級の遺跡を比較したが、その他の性格をもつ遺跡と比較することによって、彼我の経済力の差がより明らかとなるはずであるが、別の機会に譲ることとする。

(4) 清水潟の南北の遺跡群

清水潟北方の政所条遺跡群に対し、潟南方の住吉遺跡(新潟県教委二〇〇六)・二ツ割遺跡(紫雲寺町教委二〇〇四)では、鎌倉期の貿易陶磁が多数出土し、二ツ割では土器も大量に出土した。ただ、政所条遺跡群で出土する土器がてづくね成形中心であるのに対し、二ツ割遺跡ではロクロ成形底部篋切りを日常的に用い、一時はロクロ成形底部系切りを用いていたことが判明している。遺跡の所在する加地庄以南では底部篋切りが主体であると考え

られている(鶴巻二〇〇四)ことに対して、非常に対照的である。なお、一時期に集中している底部系切り土器は、鎌倉の当該期の土器に近いものも認められ、二ツ割遺跡の居住者は他に比して鎌倉の影響を受けている可能性が高い。

このように、同時期の近接した地域であるにも関わらず、土器に違いが認められるのは、興味深いところであり、政所条遺跡群の中条家では、北陸、ひいては京都、さらには日本海物流を強く意識していたということがいえよう。それは、室町期になっても変わらず、一時期関東から入部してきた守護上杉家の影響で全体的にロクロ成形底部系切り土器に変化した後も、京都系の手づくね土器の日本海域への流入に伴って、越後府中と共に逸早く手づくね成形を導入していることから明らかである(水澤二〇〇四a・二〇〇五b)。

私見では、政所条遺跡群が奥山荘の最大消費地であったのに対し、二ツ割遺跡は加地荘古河条の集散地にあたり、土器が多量に消費される都市的な場であったと考えている。それは、「かの古河条は、往古より後閑の条である」という地頭の申し立てが謂れ有ることとして荘園領主側の検注が却下されている(『中条町史』八〇)ことから裏付けされよう。すなわち耕作に適さない土地であり、その遺跡の存在意義は、流通を押さえることにあったといえよう。

さらに興味深いことは、その古河条の地頭道信が中条家の茂連に嫁しているという事実であり、それは中条家が清水潟の南北の流通を押さえるという戦略的提携に基づくものであったと考えるのは、いささか深読みすぎるであろうか。

なお、高橋一樹は、荘園の入口としての金山の位置付けについて言及している(高橋二〇〇五)。金山は、奥山荘南条の山際の境にあたり、本地点を押さえることで陸路を制することができたものと思われる。したがって、南北朝期以降、金山が争点となることも肯首されるところであり、当該地域の具体的様相が今後明らかになることを望みたい。

(5)おわりに

以上、奥山荘に関する多くの前提、諸問題を記してきた。細部について、どれだけ明らかにできたかは心もとないが、おおまかな景観を思い浮かべていただければ幸いである。

当荘園のように多くの文書が残っている場合、地域史に踏み込むためには、考古学を身上とするものであっても古文書の活用は不可欠である。それは逆の場合にもいえることであるが、考古学的には本格的に発掘調査が行われるようになってまだ一〇年を過ぎたばかりである。したがってまだまだ道遠しの感があり、今回のように全体像を構成しようという場合には、よく語る文献ばかりが目立ってしまう。すなわち中世以前においては、文字を残した支配層の歴史のみが多く語られる傾向にある。そこに一般民衆の世界を広げるには、物のあまりでない集落遺跡が重要となつてこよう。領主階層の遺跡と一般の人々の遺跡、見落とされがちな後者についても、考古学は向かっていかなばならないが、どこまで理解を得られるかが問題である。しかし、そこに長期的な時間を注ぎ込みつつ、年々増えてくる考古学的情報を加えて練り込んでいくことができるのも地域史の魅力である。地域から日本史を構成することはできても、中央から地域史を照射することは困難であろう。そして、この足元の大地は、現代に至るまで多くの改変を受けてきているが、まだまだ中世の面影を遺している。その場所に立ち、そこに諸資料を重ね合わすことから研究が始まるのである。

補註 本稿と青山説は、おおむね合致しているが、中条と南条境に関する譲状にでてくる「九郎大夫が新保の北の高き丘」を、筆者が発掘調査の結果から沖積地に屹立する前期古墳である城の山古墳(長径四一・六m、高五・一m)に比定したのに対し、青山は砂丘内側の高まりとしたことが大きな相違点である。

終章 引用・参考文献

- 青山宏夫 二〇〇四 『庄園の境界と紛争』『中条町史 通史編』
- 井上鋭夫 一九六五 『奥山庄史料集』新潟県文化財調査報告10(編著)
- 一九八一 『山の民・川の民―日本中世の生活と信仰―』平凡社選書69
- 小野田政雄 一九六八・一九六九 『越後石仏雜記』卷三、卷二、私家版
- 一九八三 『新潟県』坂詰秀一編『板碑の総合研究―地域編』柏書房、東京
- 一九九二 『中世の石造遺物』『中条町史 資料編第五卷』民俗・文化財
- 金沢市 二〇〇三・二〇〇四 『大桑ダイジョウデン遺跡Ⅰ』『同Ⅱ』文化財紀要二〇一・二一四
- 黒川村教委 二〇〇一 『黒川西館跡』村埋文調査報告書第3集
- 二〇〇四 『黒川西館跡Ⅱ・Ⅲ 黒川館跡 黒川城跡』村埋文調査報告書第10集
- 齋藤秀平 一九三五 『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯
- 齋藤正治ほか 一九八三 『特集韋駄天山』『おくやまのしょう』第8号
- 齋藤慎一 一九八九 『中世後期の本拠と国人領主』『中世城郭研究』第3号
- 一九九一 『本拠の展開―14・15世紀の居館と「城」・「要害」―』『中世の城と考古学』新人物往来社
- 二〇〇〇 『水澤報告へのコメント』『都市の求心力 城・館・寺 中世都市研究7』
- 坂井秀弥 一九九三 『古代越後の環境・生産力・特性』『新潟考古学談話会会報』第12号
- 一九九五 『古代越後平野の環境・交通・官衙』『木簡研究』第17号
- 一九九六 『水辺の古代官衙遺跡―越後平野の内水面・舟運・漁業―』『越と古代の北陸』名著出版
- 紫雲寺町教委 二〇〇四 『ニッ割遺跡・中住吉遺跡発掘調査報告書Ⅱ』町埋文調査報告書第3集
- 胎内市教委 二〇〇七 『寺前東遺跡』市埋文調査報告書第6集
- 高橋一樹 二〇〇五 『文献資料からみた奥山荘中条の政治・経済ネットワーク―中世前期の北越後における「潟湖河川交通」に留意して―』『中世の城館と集散地』高志書院
- 高橋亀司郎ほか 一九八二 『中条町史 資料編第一卷 考古・古代・中世』
- 一九九三 『大輪寺の傳記覚え書』資料編、大輪寺
- 高橋 学 二〇〇三 『滑石製石鍋と山茶碗―雄勝町館堀城跡出土の資料から―』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第十七号
- 鶴巻康志 二〇〇四 『土師器からみた中世の小地域圏―新潟県北部阿賀北地方を中心に』
- 中条町教委 一九七七 『江上館跡発掘調査報告書』
- 一九九三・一九九七 『江上館跡ⅠⅤ』町埋文調査報告第2・6・8・10・13集
- 一九九七・一九九八・二〇〇一・二〇〇五 『下町・坊城遺跡ⅡⅥ』町埋文調査報告第12・18・20・21・33集
- 二〇〇二a 『船戸桜田遺跡4・5次 船戸川崎遺跡6次』町埋文調査報告書第25集
- 二〇〇二b 『史跡奥山荘城館遺跡江上館跡整備工事報告書』

二〇〇四 『大塚遺跡第3次』町埋文調査報告書第29集

中野 登任 一九八〇 「黒川村鼓岡の経塚とその背景・奥山庄中条氏の祈願寺に関連して(一)(二)」『高志路』256・257 後「奥山庄鼓岡の経塚とその背景」『忘れられた霊場』平凡社選書123、一九八八年に再録

新潟県 一九八三 『新潟県史 資料編4 中世1』

一九八七 『新潟県史 通史編2 中世』

新潟県教委 二〇〇三 『仲田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第一二八集

長谷川 伸 一九九五 「南奥羽地域における守護・国人の同盟関係―越後上杉氏と伊達氏の場合―」『地方史研究』254

北陸中世土器研究会 一九九一 『城館出土の土器・陶磁器』第4回資料集

北陸中世考古学研究会 二〇〇一 『中世北陸の井戸』第十四回北陸中世考古学研究会資料

本間 弼 一九六八 『奥山庄における中世の石造物 中間報告』石造物研究第三集、私家版

前川 要 一九九五 「当該期の平地方形館の位置付けと「方形館体制論」の提唱」『江馬氏城館跡・下館跡発掘調査報告書Ⅰ』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室

富山大学人文学部考古学研究室

水澤 幸一 一九九三 「奥山庄江上館の発掘調査について―越後奥山庄研究1―」『新潟考古学談話会会報』第12号

一九九四 「越佐の板碑」『中世北陸の寺院と墓地』第7回北陸中世土器研究会資料集

一九九六 「越後国奥山庄の城館(上)」『新潟考古』第7号

一九九七 a 「越後国奥山庄の城館(下)」『新潟考古』第8号

一九九七 b 「阿賀北の紀年銘板碑」『新潟史学』第三十九号

一九九九 a 「越後国奥山庄の考古学的研究の現状と課題―地域史研究の実践から―」『立正史学』第85号

一九九九 b 「下町・坊城遺跡―奥山庄政所条遺跡群の提唱」『新潟県考古学会第二回大会研究発表要旨』

二〇〇〇 a 「中世貿易陶磁の物量比較にみる地域性(予察)―越後国奥山庄政所条遺跡群の位置付けのための基礎作業―」『新潟考古学談話会会報』第21号

談話会会報』第21号

二〇〇〇 b 「越後城家にみる「兵」の家系とその展開」『おくやまのしょう』第26号

二〇〇〇 c 「越後国奥山庄政所条の都市形成」『都市の求心力 城・館・寺 中世都市研究7』

二〇〇一 a 「越後戦国期の遺物問題」『新潟考古』第12号

二〇〇一 b 「越後国奥山庄における板碑の存在形態」『中世の奥羽と板碑の世界』高志書院

二〇〇一 c 「伝至徳寺跡出土の笏谷石製方形浅鉢」『上越市史研究』第7号

二〇〇一 d 「一五世紀中葉後半における北東日本海沿岸地域へのやきものの搬入時期―越後江上館を中心として―」『中世土器研究論集』中世土器研究会20周年記念論集

集』中世土器研究会20周年記念論集

二〇〇一 a 「阿賀北の中世石仏」『新潟考古』第13号

二〇〇一 b 「北陸における中世後半期の井戸―水溜・石組側・桶―」『地域考古学の研究』村田文夫先生還暦記念論文集

二〇〇一 c 「乙宝寺」『中世の国』549号

- 二〇〇二d 「韋駄天山遺跡の現状と課題」越後国奥山荘北条の中世墓」『歴史考古学』20号
- 二〇〇三 「城館と荘園・奥山荘の景観」『戦国時代の考古学』高志書院
- 二〇〇四a 「至徳寺遺跡の中世後期土器（補遺）」『上越市史研究』第9号
- 二〇〇四b 「発掘された館跡」『中条町史 通史編』
- 二〇〇五 「越後の中世土器」『新潟考古』第十六号
- 水澤幸一・鶴巻康志 二〇〇三 「至徳寺遺跡」『上越市史叢書8 考古中・近世資料』
- 四柳嘉章 一九九七 「北陸の漆器考古学」『北陸の漆器考古学』北陸中世土器研究会第一〇回資料
- 矢田俊文 二〇〇一 「上杉謙信とその時代」『よみがえる上杉文化』新潟県立博物館

おわりに

以上、中世に関して論じてきたものをまとめた。これらの中には、直接奥山荘を対象にしていないものや内容を指定されたものも含まれているが、すべてでは奥山荘を研究するために還元されるべき性質のものであり、それらを通じてさらなる中世研究へ邁進していきたい。

本論文の内容は、序章において歴史時代の考古学の在り方を検討し、それが中世において最も有効に機能することを明らかにした。さらにその中でも、文献によって範囲が特定されている荘園遺跡の可能性を論じた。

各論においては、大きく日本海流通及び仏教考古学に関する遺物論を展開した。日本海の物資流通に関しては、国産品とは異なった動きをみせる貿易陶磁器、京都との関連の強い瓦器・手づくね土器、焼き物と異なる素材の漆器を取り上げ、日本海沿岸地域の特色を明らかにした。仏教考古学に関しては、越後の墓制とそれに関連する仏具、仏教系石造物を取り上げた。これらについても、モノの流れの一部をなしており、焼き物類とは異なった意識下ではあるが、宗教的色彩を帯びた中世的流通を構成する分野である。

以下、本文の元となった論文を（）内にあげ、参考に資したいと思うが、誤字脱字を訂正したほか、一書となすにあたり論旨を変えない程度に体裁を整えたものもある。また、文章の最後に補註を付して欠を補ったものがある。なお、原文に付した謝辞と敬称は、基本的に省略させていただいた。

序 章 中世考古学研究史と本論の視点

第一節 文献併存期の考古学研究法・中世考古学の位置付け(新稿)

第二節 中世荘園考古学の可能性(新稿)

小結(新稿)

付論 越後における中世考古学の範囲(新稿、ただし一部「中世日本海域物流からみた地域性・境界性」『日本海域歴史大系』第三卷中世篇、清文堂、二〇〇五)

第一編 日本海流通の考古学

第一章 貿易陶磁器の流通

第一節 貿易陶磁器序説

1 「貿易陶磁の国際情勢―青磁を中心として」(『貿易陶磁研究』20、二〇〇〇)

2 「中世貿易陶磁の物量比較にみる地域性」(原題「中世貿易陶磁の物量比較にみる地域性(予察)」越後国奥山荘政所条遺跡群の位置付けのための基礎作業―『新潟考古学談話会会報』第21号、二〇〇〇)

第二節 中世前期の貿易陶磁器

1 「一二世紀代の陶磁器流通」(原題「十二世紀代の流通」「中世日本海域物流からみた地域性・境界性」『日本海域歴史大系』第三卷中世篇、清文堂、二〇〇五)

2 「至徳寺遺跡の遺物様相」(原題「伝至徳寺跡の遺物様相―中世前半を中心として」(笹澤正史と共著)『上越市史研究』第6号、二〇〇一)

3 「出土層位からみた鎌倉遺跡群の遺物様相」(『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古記念論集、桂書房、二〇〇六)

第三節 中世後期の貿易陶磁器

- 1 「一五世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」(『貿易陶磁研究』No.24、二〇〇四ただし、事務局の指示で削除した図版を追加した。)
- 2 「中世北陸の茶道具―越後出土の天目茶碗を中心にして―」(『中近世土器の基礎研究』XX、二〇〇六)
- 3 「越後戦国期の遺物問題」(『新潟考古』第12号、二〇〇一)

第二章 中世後期における瓦器の位相

- 1 「瓦器の基本的性格」(原題「瓦器、その城館的なるもの―北東日本の事例から」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第3集、一九九九)
- 2 「至徳寺遺跡の瓦器」(原題「伝至徳寺跡出土の威信財―瓦器と漆器―」『上越市史研究』第7号、二〇〇一の前半部分)

第三章 中世土器

- 1 「越後の中世土器」(『新潟考古』第一六号、二〇〇五)
- 2 「一五世紀中葉―後半における北東日本海沿岸地域へのやきものの搬入時期―越後江上館を中心として―」(『中世土器論文集』日本中世土器研究会、二〇〇一)
- 3 「至徳寺遺跡の中世後期土器」(原題「至徳寺遺跡の中世後期土器(補遺)」『上越市史研究』第9号、二〇〇四)

付論 京都系土器の流入に伴う居館構造の変化

- 1 「中世越後の城館」(「中世越後の城館」『中世の越後と佐渡』高志書院、一九九九に、「居館からみた日本海」『日本海域歴史大系』第三卷中世篇、清文堂、二〇〇五を加えた)
- 2 「北陸中世後半期における井戸構築技術の流入―水溜・石組側・桶―」(原題「北陸における中世後半期の井戸―水溜・石組側・桶―」『地域考古学の研究』村田文夫先生還暦記念論文集、二〇〇二)

第四章 中世漆器

- 1 「越後の中世漆器」(『新潟考古』第十八号、二〇〇七)
- 2 「至徳寺遺跡遺跡の漆器」(原題「伝至徳寺跡出土の威信財―瓦器と漆器―」『上越市史研究』第7号、二〇〇一の後半部分)

第二編 仏教考古学

第一章 墓地・霊場と葬送儀礼

- 1 「越後国阿賀北の霊場」(原題「阿賀北の霊場」『霊地・霊場・聖地』東北中世考古学会第2回大会資料集、二〇〇五)
- 2 「越後の仏堂及び周溝建物」(原題「越後の特異な建物群」『掘立と堅穴』東北中世考古学叢書2、高志書院、二〇〇一の一部)
- 3 「韋駄天山遺跡・奥山荘北条の中世墓地」(原題「韋駄天山遺跡の現状と課題―越後国奥山荘北条の中世墓―」『歴史考古学』50号、二〇〇一)
- 4 「浦廻遺跡にみる地表葬」(「墓と葬送の中世」高志書院、二〇〇七)

第二章 仏具

- 1 「密教法具考―出土仏具―」(原題「密教法具考―出土仏具を中心にして―」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古希記念論文集、二〇〇六)
- 2 「鉦鼓小考」(原題「中世越後の鉦鼓」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念論文集、一九九六)
- 3 「古式錫杖考―日光男体山山頂遺跡出土錫杖の位置付けをめぐって―」(三宅敏之先生追悼論文集二〇〇七年四月提出済み)

第三章 中世石造物

第一節 板碑

1 「北東日本海型板碑」(原題「仏教的石造物」、「中世日本海域物流からみた地域性・境界性」『日本海域歴史大系』第三卷中世篇、清文堂、二〇〇五の一部)

2 「越佐の板碑」(『中世北陸の寺院と墓地』第7回北陸中世土器研究会資料集、一九九四)

3 「阿賀北の紀年銘板碑」(原題「揚北の紀年銘板碑」『新潟史学』第三十九号、一九九七)

4 「越後国小泉莊加納の板碑群・栗島」(原題「越後国栗島の板碑」『考古学論究』第6号、立正大学考古学会、一九九九)

5 「越後国小泉莊加納の板碑群からみた地域信仰圏」(原題「板碑分布からみた越後国小泉莊加納の地域信仰圏」『考古学論究』第7号、二〇〇〇)

6 「越後国奥山莊の板碑」(原題「越後国奥山莊における板碑の存在形態」『中世奥羽と板碑の世界』高志書院)

付「頸城の板碑」(原題「石造物」『上越市史叢書』8 考古中・近世資料』二〇〇三の一部)

第二節 石仏

1 「阿賀北の中世石仏」(原題「阿賀北の中世石佛」『新潟考古』第13号、二〇〇二)

2 「頸城の中世石仏」(原題「石造物」『上越市史叢書』8 考古中・近世資料』二〇〇三の一部)

第三節 五輪塔・宝篋印塔等

1 「頸城の五輪塔分布と年代的位置付け」(原題「上越市の五輪塔分布」『上越市史研究』第六号、二〇〇一の前半部分と「頸城野における五輪塔の年代的位置付け」『上越市史研究』第10号、二〇〇四)

2 「頸城の五輪塔」(原題「石造物」『上越市史叢書』8 考古中・近世資料』二〇〇三の一部)

3 「頸城の一石五輪塔」(原題「石造物」『上越市史叢書』8 考古中・近世資料』二〇〇三の一部)

4 「頸城の宝篋印塔」(原題「石造物」『上越市史叢書』8 考古中・近世資料』二〇〇三の一部)

5 「頸城の多層塔」(原題「石造物」『上越市史叢書』8 考古中・近世資料』二〇〇三の一部)

6 「新発田市岡田法音寺の五輪塔」(『新潟考古学談話会会報』第22号、二〇〇〇)

7 「高田における一七世紀代の石塔」(原題「上越市の五輪塔分布」『上越市史研究』第六号、二〇〇一の一部)

終章 越後国奥山莊

1 「奥山莊の景観」(原題「城館と莊園・奥山莊の景観」『戦国時代の考古学』高志書院、二〇〇三)

2 「奥山莊政所条遺跡群の展開―坊城館から江上館へ」(『中世の城館と集散地』高志書院、二〇〇五)

以上の成果は、序章・本論に述べた多くの先学の基礎的な成果に基づくものであることはいうまでもない。我々の世代は、それらを乗り越えてより具体性をもった歴史を社会に還元していかねばならない。歴史学は、人類社会が続く限り終わることのない学問であるから、本論文を一里塚として、さらなる研究を続けていきたいと思う。

最後になってしまったが、本論文をまとめるにあたって、矢田俊文先生からは、多大なご指導ご配慮を賜った。先生のお力添えなくして、本論文をまとめ上げることはできなかった。記して謝意を呈する。